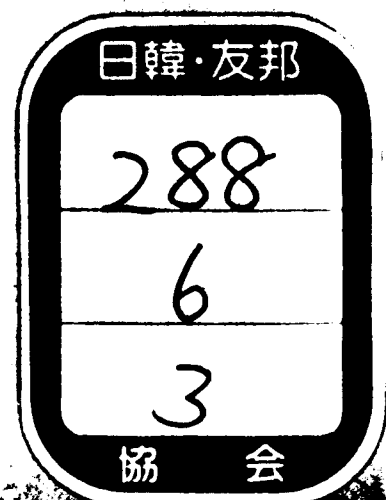


開城郡面誌第三輯

北面、中西面、西面、南面



288-6-3

6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30

北面·中  
西面·西  
面·南面

第三輯 正誤表		頁行	正	誤
一	三六	三八	三六	三六
二	三七	三九	三七	三七
三	三八	四〇	三八	三八
四	三九	四一	三九	三九
五	四〇	四二	四〇	四〇
六	四一	四三	四一	四一
七	四二	四四	四二	四二
八	四三	四五	四三	四三
九	四四	四六	四四	四四
一〇	四五	四七	四五	四五
一一	四六	四八	四六	四六
一二	四七	四九	四七	四七
一三	四八	五〇	四八	四八
一四	四九	五一	四九	四九
一五	五〇	五二	五〇	五〇
一六	五一	五三	五一	五一
一七	五二	五四	五二	五二
一八	五三	五五	五三	五三
一九	五四	五六	五四	五四
二〇	五五	五七	五五	五五
二一	五六	五八	五六	五六
二二	五七	五九	五七	五七
二三	五八	六〇	五八	五八
二四	五九	六一	五九	五九
二五	六〇	六二	六〇	六〇
二六	六一	六三	六一	六一
二七	六二	六四	六二	六二
二八	六三	六五	六三	六三
二九	六四	六六	六四	六四
三〇	六五	六七	六五	六五
三一	六六	六八	六六	六六
三二	六七	六九	六七	六七
三三	六八	七〇	六八	六八
三四	六九	七一	六九	六九
三五	七〇	七二	七〇	七〇
三六	七一	七三	七一	七一
三七	七二	七四	七二	七二
三八	七三	七五	七三	七三
三九	七四	七六	七四	七四
四〇	七五	七七	七五	七五
四一	七六	七八	七六	七六
四二	七七	七九	七七	七七
四三	七八	八〇	七八	七八
四四	七九	八一	七九	七九
四五	八〇	八二	八〇	八〇
四六	八一	八三	八一	八一
四七	八二	八四	八二	八二
四八	八三	八五	八三	八三
四九	八四	八六	八四	八四
五〇	八五	八七	八五	八五
五一	八六	八八	八六	八六
五二	八七	八九	八七	八七
五三	八八	九〇	八八	八八
五四	八九	九一	八九	八九
五五	九〇	九二	九〇	九〇
五六	九一	九三	九一	九一
五七	九二	九四	九二	九二
五八	九三	九五	九三	九三
五九	九四	九六	九四	九四
六〇	九五	九七	九五	九五
六一	九六	九八	九六	九六
六二	九七	九九	九七	九七
六三	九八	一〇〇	九八	九八
六四	九九			
六五	一〇〇			



## 凡 例

一、本書は重に東國輿地勝覽中京誌に據りたるも同書は年代を経過すること多く、史蹟名勝にして既に失はれたもの、地形の變遷して空名となつたもの尠くないので、今其實跡を踏査し、猶形迹がありて名を存する者は、往時の狀況を記述し、全く失はれたものは之を去り、又新たに發見したものは之を追記し、睨めて世の史家、探勝家の參考に供することにした。

一、書中記する處は、現時の地理、往昔の史實より、神話傳説に至るまで、可成廣汎に亘りて網羅し、中には奇怪な傳説でも、凡そ説話の存する者は皆收めた積りである、是等は後世古傳を失はんことを恐れ、敢て取捨をしない。

一、参考した書目は、勝覽中京誌の外、高麗圖經、高麗古都徵、關野博士の朝鮮美術史、幣原博士の朝鮮史話、金石綜覽、朝鮮年表、高麗史、新高麗史、入關前の清朝、朝鮮一般史、開城王氏族譜、聖源錄、編年通錄、朝鮮佛教通

史、五萬分圖、二萬五千分圖、一萬分圖などであるが一々其都度書名を掲記しない。

一、實地踏査は數回に亘り、或は大雨を犯して山城山を攀ち、或は炎熱を忍んで海岸地方を探索し、或は帝釋山の絶頂を極め、或は金郊川の漲水に溺れんとしたなど、相當の苦辛を経て調べたから、間違はない積りである、然し踏査の漏れた處、判斷の違つた處もあらうから、直接編者に注意せらるれば再梓の時に研究の上訂正しようと思ふ。

一、壬辰役とは日本史の文祿の役で、丙子の役とは清國の朝鮮侵掠なり。  
一、表紙の瓦紋は滿月臺の遺瓦なり。

大正十五年七月三十日

編 者 識

# 開城郡面誌 第三輯

## 目 次

### 第四章 北 面

位置境界	一
廣 袤	一
戶 數	一
人 口	一
區 劃	一
沿 革	二
地 勢	二
山 峰	三
峴 嶺	三
河 川	四
池 沼	五

土地	五
產物	六
部落	六
教會堂	七
學校	七
古蹟	七
碾峴鎮址、寶月寺址、尹齋宮、李齋宮、高齋宮、孤雲寺址、霞鶯亭址、其他	一一
交通場	一二
位置境界	一三
廣袤	一三
戶數	一三
人口	一三
區劃	一四
沿革	一四

第五章 中西面

地勢	一四
山峰	一五
河川	一六
土地	一七
產物	一七
部落	一八
社寺	一八
教會堂	一九
學校	一九
古蹟	二〇
土城址、高麗顯陵、七陵洞、明陵、高陵、玄陵、正陵、其他	三四
橋梁	三五
交通	三五
位置境界	三六
廣袤	三六

第六章 西面

戶口數	三六
區劃	三六
沿革	三七
地勢	三七
山峰	三八
河川	三九
土地	三九
產物	四〇
部落	四〇
教會堂	四〇
學校	四一
古蹟	四一
開城廢縣址、大井、甘露寺址、錢浦の傳説、後西江、其他	四八
渡場	四八
交通	五〇

第七章 南面

位置境界	五三
廣袤	五三
戶數	五三
人口	五三
區劃	五三
沿革	五四
地勢	五四
山峰	五五
河湖	五六
土地	五八
產物	五八
部落	五八
教會堂	五九
古蹟	五九
永安城址、其他	五九

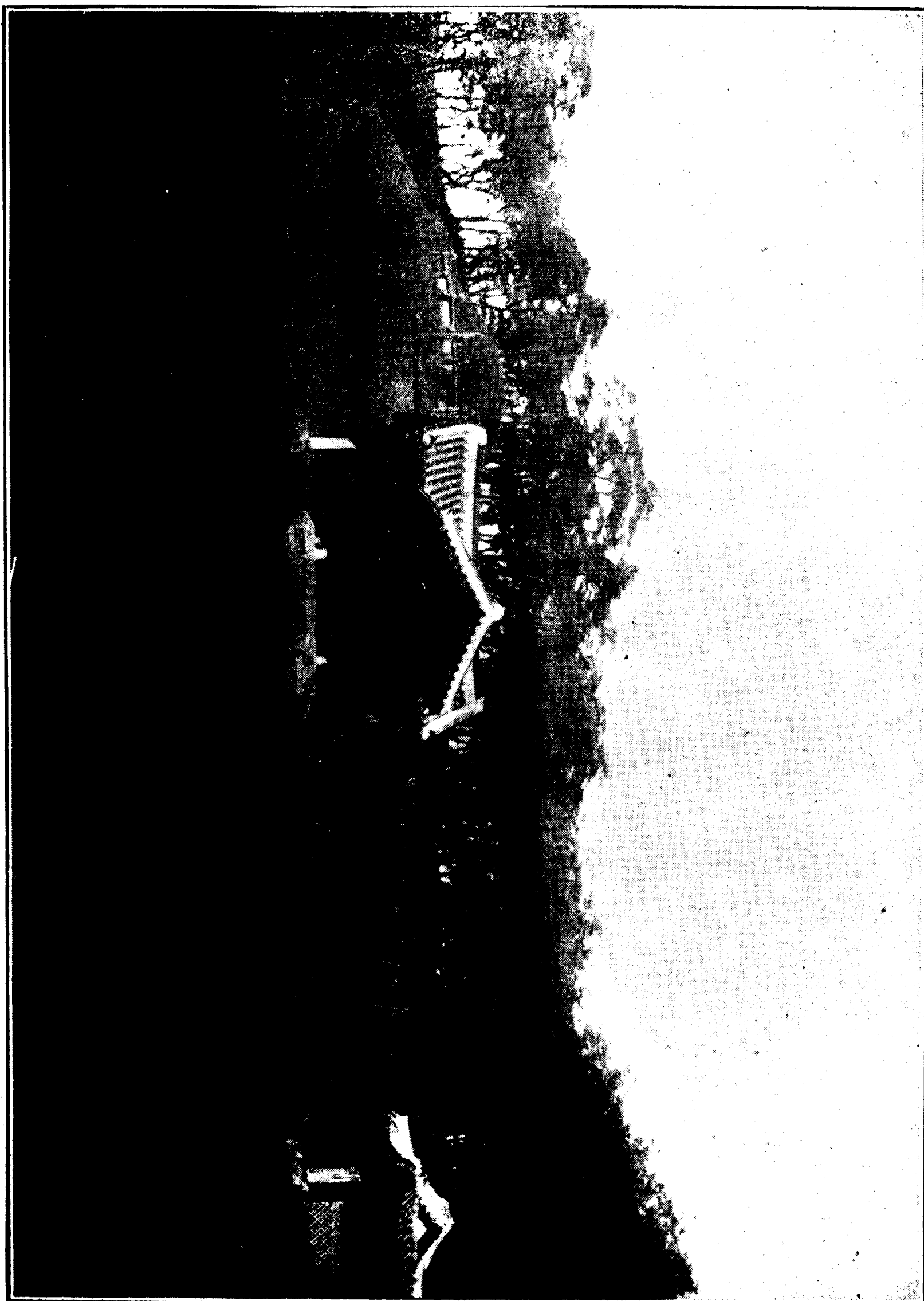
交通  
渡場

目次

六

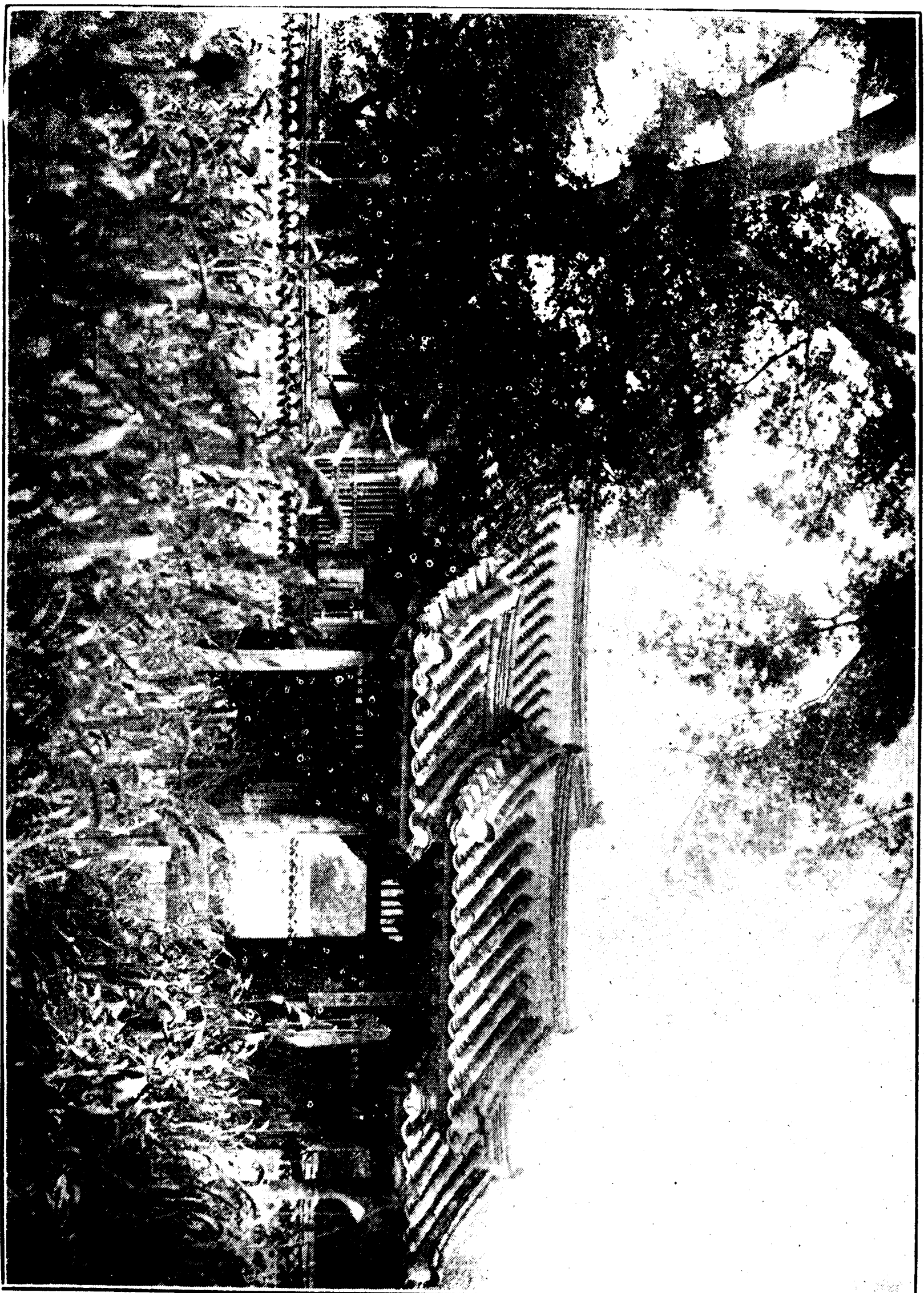
六三  
六四

目次終



高麗顯陵



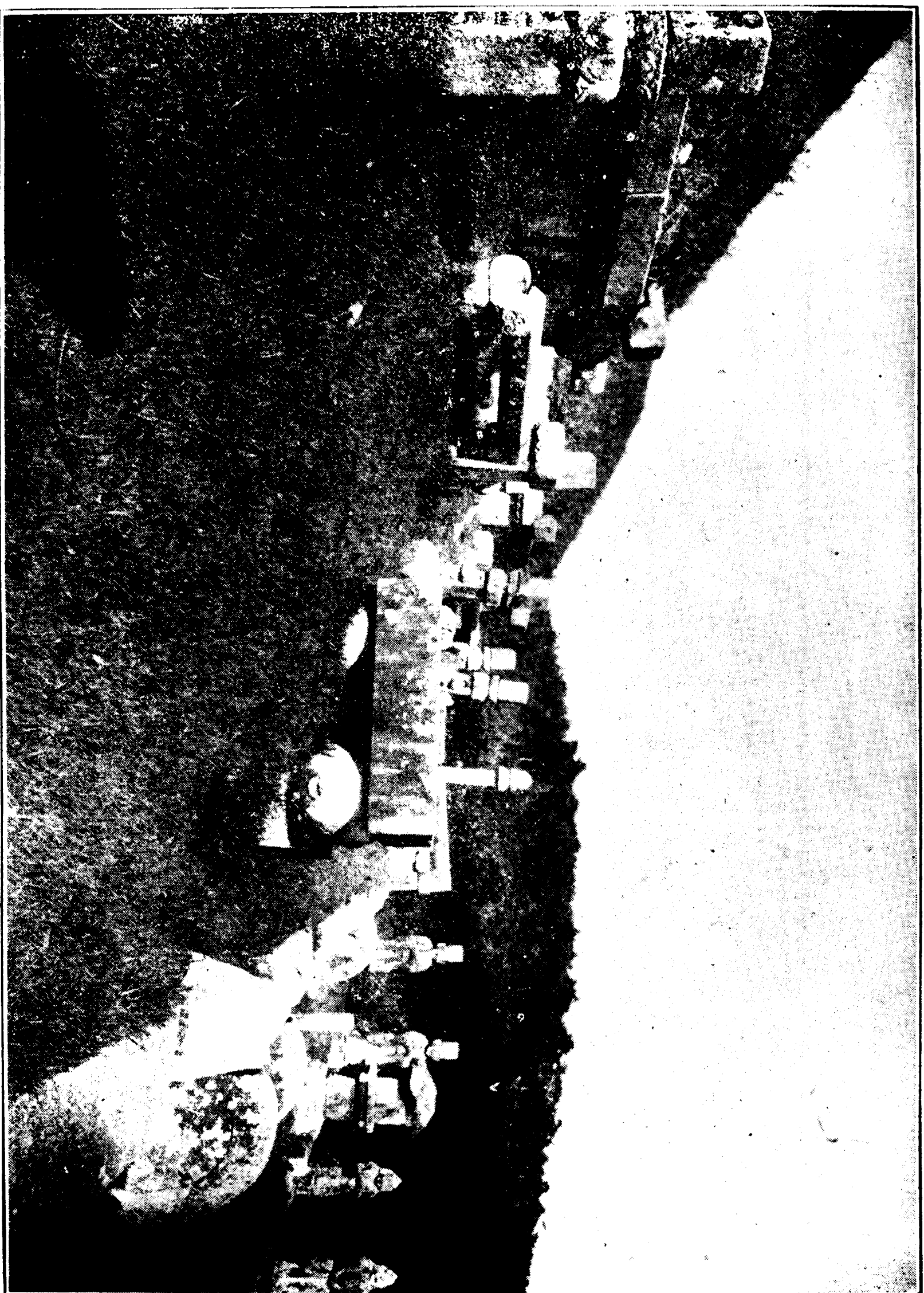


杜門洞碑閣



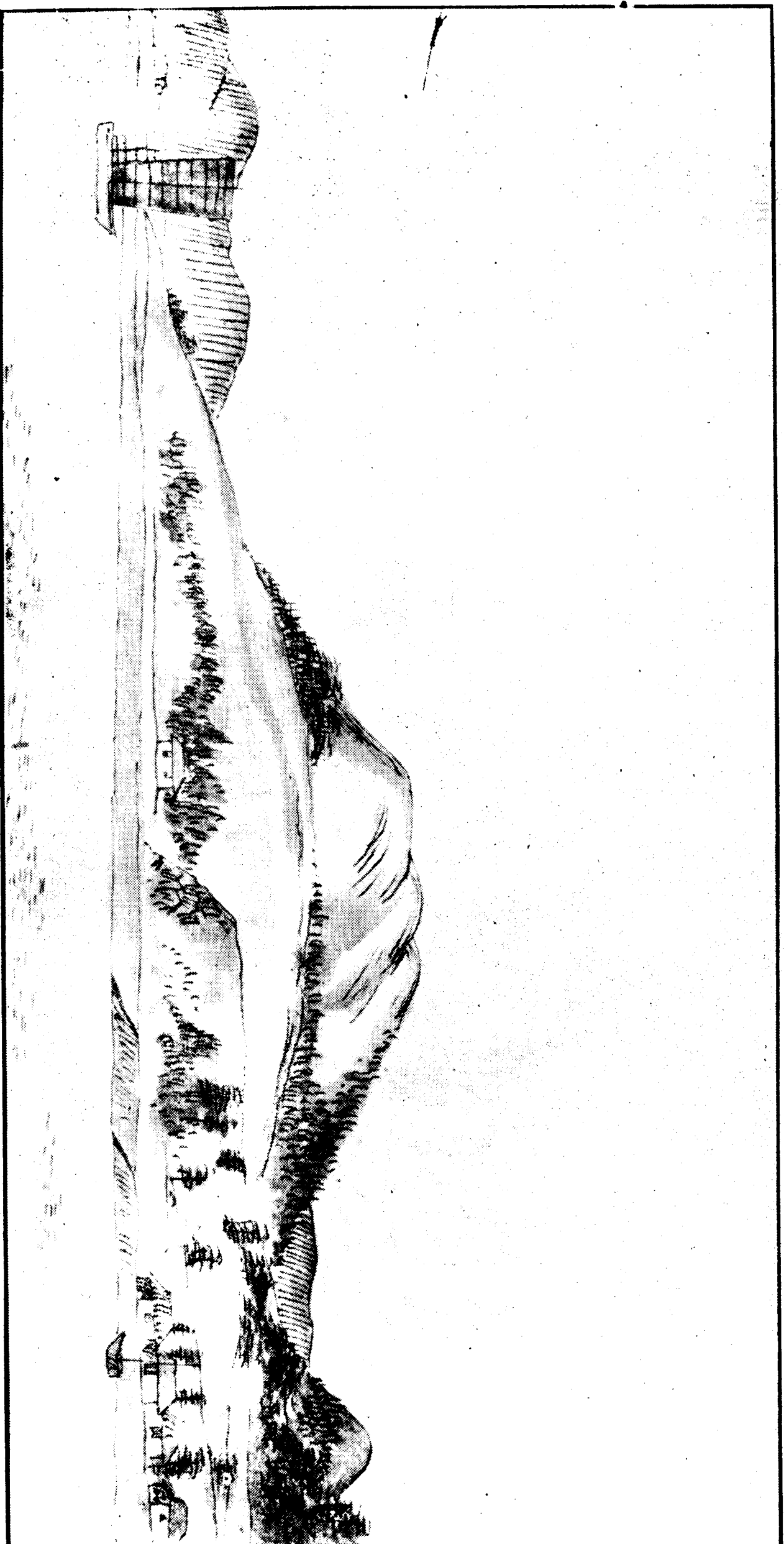
立 正 陵



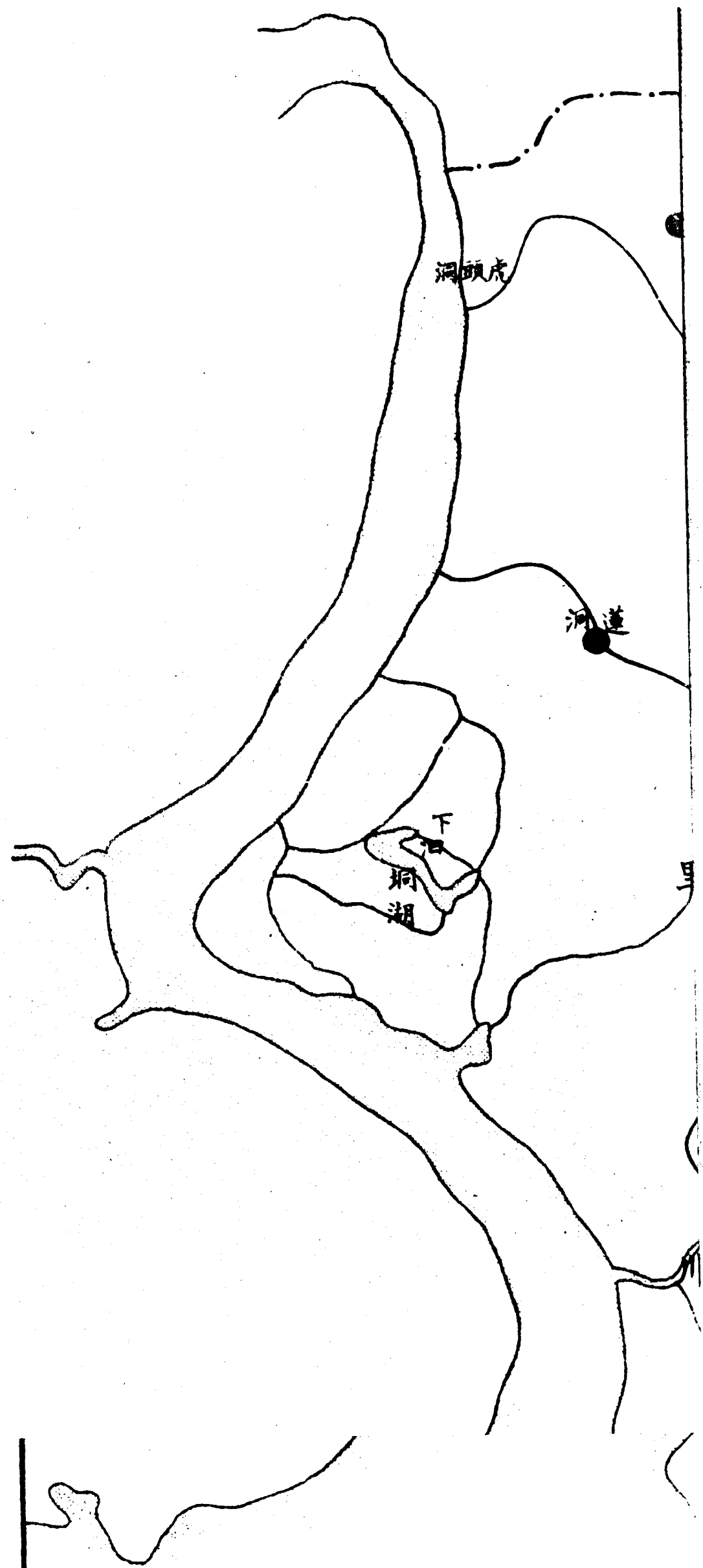


恭 愍 王 陵





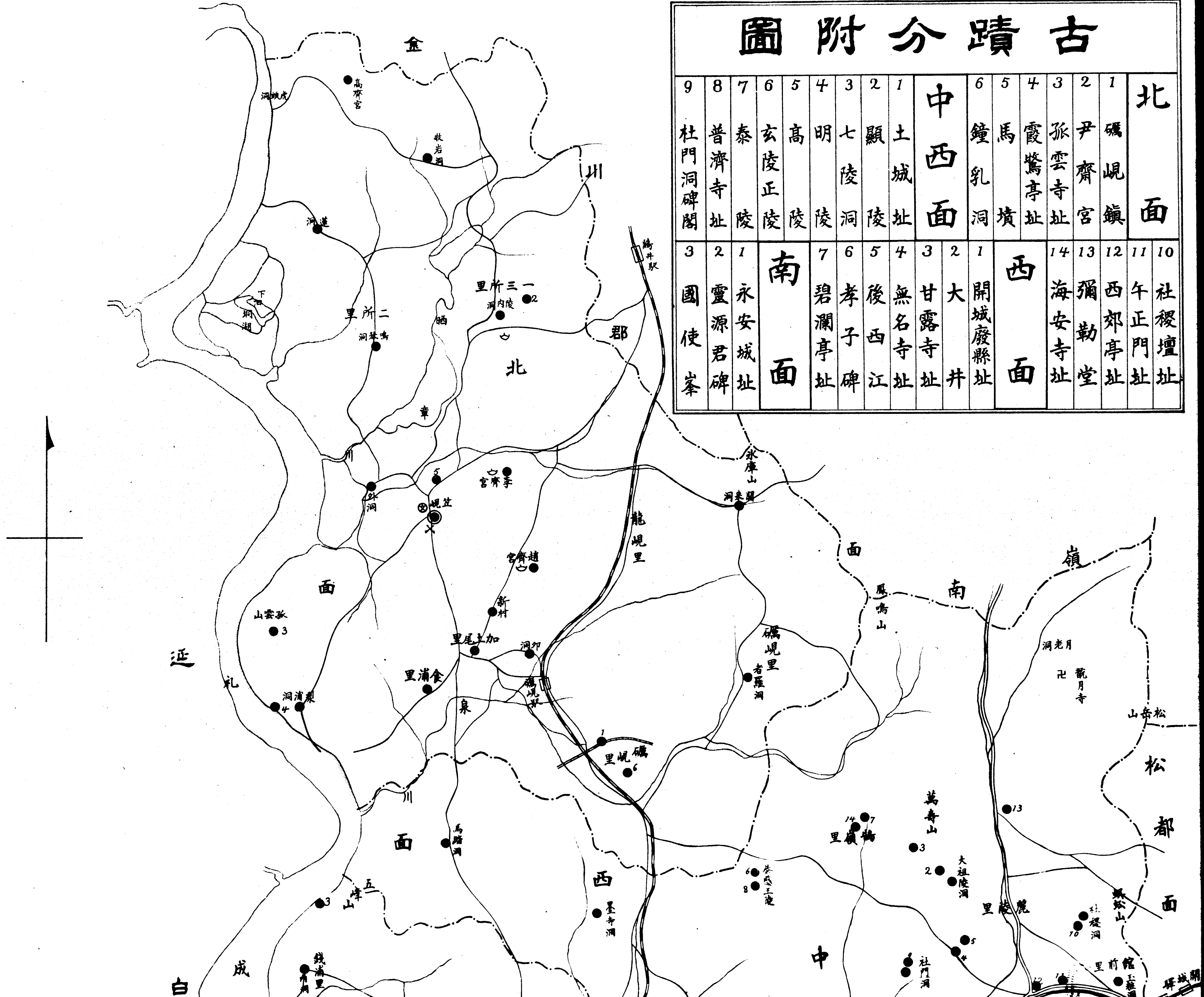
碧瀾對岸ヨリ望ム

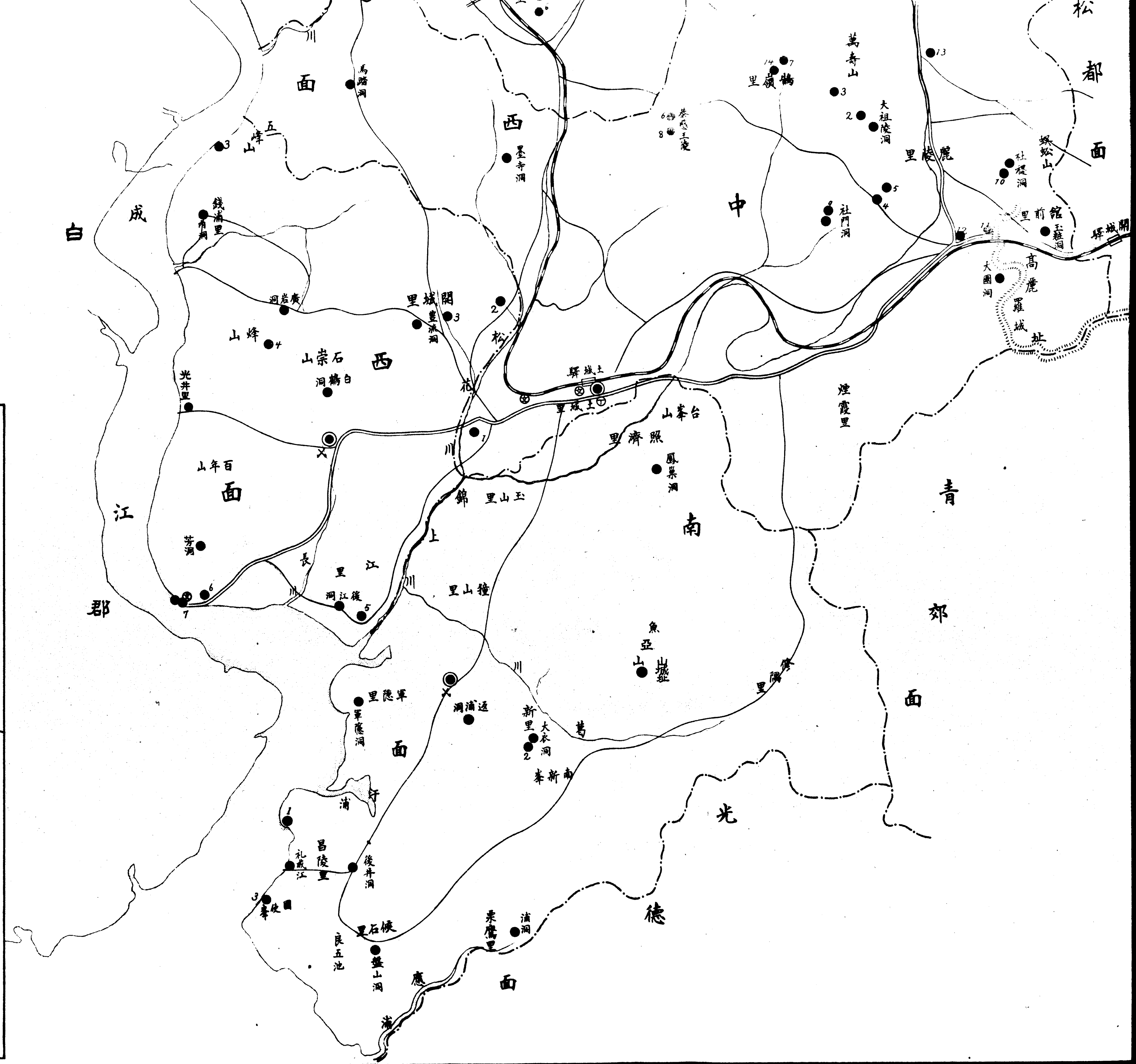


不三輯附圖

月發行

古蹟分附圖																			
北 面										中 西 面									
1	礪峴鎮	2	尹齊宮	3	孤雲寺址	4	霞鷺亭址	5	馬墳	6	鐘乳洞	1	土城址	2	顯陵	3	七陵洞	4	明陵
10	社稷壇址	11	午正門址	12	西郊亭址	13	彌勒堂	14	海安寺址	1	開城廢縣址	2	大井	3	甘露寺址	4	無名寺址	5	後西江
南 面										西 面									
1	永安城址	2	靈源君碑	3	國使峯	1	碧瀾亭址	2	孝子碑	3	碧瀾亭址	4	碧瀾亭址	5	碧瀾亭址	6	碧瀾亭址	7	碧瀾亭址
9	杜門洞碑閣	8	普濟寺址	7	泰陵	6	玄陵正陵	5	高陵	4	明陵	3	七陵洞	2	顯陵	1	土城址	9	杜門洞碑閣





● 古蹟	○ 墓
● 三千戸以上部落	○ 面事務所
○ 學校	○ 警察官駐在所
○ 高地	○ 河川
○ 低地	○ 道路

開城郡面誌 第三輯附圖

五萬分圖

大正十五年十一月發行





乙山洞) 一三所里(高齋宮洞、牧岩洞、陵内洞、冠峴洞、井洞、乙音洞、漁隱洞、虎頭洞、龍尾洞、昭章洞、趙齋宮洞、李齋宮洞、冷井洞、笠峴洞、馬山洞、勒洞) 礪峴里(者羅洞、玄陵洞、正陵洞、礪峴洞)の六里とし面事務所を一三所里笠峴洞に置く。

**沿革** 本面一所里、二所里、三所里は舊黃海道金川郡江南面に屬し其れより以南食峴里、梨浦里、加土尾里、礪峴里、者羅洞里、鳥足里は本郡北西面に屬せしが大正三年四月行政區を變更し一所里と三所里とを合して一三所里とし鳥足里を龍峴里に合せ食峴里と梨浦里とを合して食浦里とし者羅洞里を礪峴里に併せ總稱して北面となし開城郡に屬した。

**地勢** 東部は氷庫山、鳳鳴山の連嶺、嶺南面の間に蟠踞し其脈南に回りにて中西面の境を蜿蜒し支脈は礪峴里玄陵洞者羅洞の西に蟠る。氷庫山より北に向ふ者は金川郡古東面の境を走りて急峻な斜面をなし漁隱洞を包みて西に向ひ更に南して二所里の中央に起伏す。禮成江岸には孤雲山高く峙ち其脈食浦里、加

土尾里より龍峴里の間に蟠る。

本面は比較的河川に富み灌漑の便あるので昭章川の兩岸から禮成江の沿岸に亘り又礪峴里・加土尾里・食浦里の間泉川に沿ふて水田が能く開拓せられてゐる。

### 山峰

〔氷庫山〕 龍峴里開來洞の北にありて本面と嶺南面金川郡古東面の三面に跨り高約千〇五十尺あり。

鳳鳴山、本面と中西面、嶺南面の境にあり高千三百六十三尺あり。

〔孤雲山〕 面の西南禮成江岸にあり最高峯を國樹峯と云ふ西南に向ひて三峯並列す高五百八十四尺。

〔鶴栖山〕 冷井洞、趙齋宮、李齋宮を圍む一帶の山地を稱す。

〔春明山〕 一三所里陵内洞を圍む一帶の山嶺を云ふ。

### 峴嶺

〔龍峴〕 龍峴里にあり。

〔礪 峴〕 礪峴里にあり附近より石灰を産す。

〔多士峴〕 加土尾里梅洞より一三所里笠峴に至る峴。

〔冠 峴〕 冷井洞より陵内洞に越ゆる峴。

〔梨浦峴〕 孤雲山の東方笠峴より梨浦洞に至る間道の峴。

〔耳 峴〕 龍峴洞より鷄井驛に至る間道の峴。

〔沙 峴〕 文阜洞の西にあり。

〔渴馬峴〕 冷井洞より鷄井驛に至る間道上にあり。

### 河 川

〔禮成江〕 金川郡古東面界より來り面の西界を環流すること約三里半にして中西面界に入る。

〔泉 川〕 源を中西面鳳鳴山の南麓より發し本面に入りて者羅洞溪を併せ礪峴里の南を西北に彎流し砧洞の北に至りて東北より來る卯洞溪を加へ西流して食浦里の東南に至り西南に轉じ禮成江に入る。下流は平野の間を緩流するが故

に灌漑の利多し。

〔昭章川〕 金川郡古東面より面の東北一三所里昭章洞に入り兩岸の田野を灌漑しつゝ南流し禮成江に入る此の川は嶺南面正明寺川の末流で嶺南、古東及び本面の三面を貫流し流程約六里十町餘に及ぶ。

〔馬山洞川〕 龍峴里開來洞より發源し西流して馬山洞を過ぎ井洞に至りて昭章川に入る。

〔二所里川〕 二所里の山中より發し南流して開寧岱の南を過ぎ禮成江に入る

### 池 沼

〔下泊垆池〕 沙峴の西南に沼あり沝を設け其水を縱横に引き水田灌漑の用に供せり面積約三反歩あり。

### 土 地

〔國有地〕 田五町七反、畑十町一反、宅地一町、雜地二町四反。

〔有民地〕 田千〇三十六町四反、畑千八百〇二町五反、宅地六百〇二町六反

雜地二千六百九十五町二反。

產物

〔農產物〕 米類七千八百八十六石、麥類二萬二千九百三十一石、豆類三千九百八十石一斗、雜穀粟一千二百八十四石五斗、稗三百五十九石、棉五千二百七十七斤、蔬菜類甘藷四千九百六十貫馬鈴薯一萬六千九百二十五貫蘿蔔四萬二千七百八十貫白菜三萬一千七百五十貫甜瓜二萬四千七百四十貫栗實一千六百〇二貫。特産として石炭及び蠶を産す。

部落

三十戸以上

龍峴里、新村洞	六十戸。	龍峴里、龍峴洞	八十戸。
加土尾里、加土尾洞	七十戸。	龍峴里、開來洞	四十戸。
食浦里、食峴洞	六十戸。	食浦里、梨浦洞	六十戸。
二所里、鳴琴洞	五十戸。	二所里、蓮洞	六十戸。
一三所里、牧岩洞	四十戸。	一三所里、井洞	三十六戸。

一三所里、陵内洞 四十五戸。 加土尾里、卯洞 四十五戸。  
礪峴里、礪峴洞 四十五戸。 毎月陰二八日を以て開市す

教會堂

〔龍峴禮拜堂〕 龍峴里にあり基督教南監理派明治四十年十月創設。  
〔加土尾里禮拜堂〕 加土尾洞にあり同上派大正十一年四月創立。  
〔礪峴禮拜堂〕 礪峴里にあり同上派明治三十五年八月創立。

學校

〔北面公立普通學校〕 一所里笠峴洞にあり大正十三年五月創立職員三名學級三修業年限四個年生徒數九十人一年の經費三千六百〇二圓。

古蹟

〔礪峴鎮址〕 礪峴洞にあり洞は四十五戸の部落で鐵道築堤の爲に其一邊を限られ往時の區域を失つたが鎮址は北に山を負ひ遺壁の石礫瓦片等山脚の圍中に堆積され部落の入口に僉使等の不忘碑四個並び遺る。此處から西北方に石築の



防禦壁あり其石壁に接近して又不忘碑十二三個立ち乾隆五十三年（百三十八年前）道光二十四年（八十二年前）等の干支を刻す。石壁は東方の山頂から平野を横斷して谿川を越え更に西方の山頂に上り長約十二町高さ約十尺銃眼を有し築造頗る堅牢で門址は枳形をなして居る。

李朝仁祖の二年正月平安道安州の兵使李适叛し兵を起して平壤より南下し京城を襲ふの風聞專らなりしかば本郡の李某（參奉）が本府の留主に乞ふて精兵三百を與へなば龍峴洞に防守すべしと曰ひしも留守聞かず専ら青石鎮を固めて之を喰ひ止めんとせしに果然适は兵を率て龍峴洞を過ぎて礪峴に入り一人の斥候なきに乘じ直ちに開城を衝くに至つたので亂平ぐの後英祖の六年に礪峴鎮を設けて僉使を置き留鎮將一員四哨々官四員兵房掌務四員執事二員鎮吏六人羅卒十六人軍官四百餘人四哨牙兵四百八十四人を置いて防備としたが李太王の三十一年甲午に鎮を革罷して礪峴里となした。

〔寶月寺址〕 陵内洞にあり今は廢頽して民家となり僅かに其形骸と石壘を残

し園中に瓦片を散するのみ。

〔趙齋宮〕 李太祖開國の功臣肅魏公趙胖の墓あり往時齋宮を造りて影禎を安んじ祧祀を設けたが其後影禎は紛失せしも子孫の祧祀今猶存續し依て地名となる。

〔尹齋宮〕 李朝世宗の功臣坡平公尹弼商の墓所あり齋宮を建設して祧祭を致すの所なりしが今は地名となりて残る、碑あり領議政坡平府院君尹公神道碑と書し碑文あり干支に檀君紀元四千二百五十八年乙未七月立と記す即ち高麗尹瓘の後裔で陵内洞の名是れに起因す、又寶月寺址の西にも古碑あり有明朝鮮國禮曹參判贈左贊政尹公神道碑銘並序とあるも刻文は莓苔に被はれ不明の所多し。

〔李齋宮〕 李朝仁祖の朝丙子の亂に陣没せる李幽祿の戦功を録し鶴栖山一帯を賜牌の墓所とし齋宮を置たる故地名となる祧祀猶存す。

〔高齋宮〕 高麗朝の時靈谷公高厚が女眞征討の功により世葬の地として賜牌を受たるにより齋宮を建設し祭祀を致せしにより今に傳はる、神道碑あり。

〔孤雲山寺址〕 孤雲山の最高所國樹峯に寺址あり悉く荒廢して瓦片を遺すのみ孤雲寺址なりと云ふ。

昔麗祖の時に一道僧孤雲と稱する者此の山に居りし故孤雲山の名を得た曾て此の村には樹木深く生ひ茂り盛夏の候に當りて蚊群陣をなして人を襲ひ村人が皆堪へ難かつたが孤雲が死に臨んで言ふに吾れ去るの後此の洞里の爲に蚊群を驅出して功德を残さんと其の後其の言の如く一蚊も來ぬようになつた故に人々稱して道士と曰ふたが然るに年久ふして今に至り間々蚊が來るようになつたと云ふ。(傳説)

〔霞笠亭址〕 禮成江畔梨浦洞の江岸にあり、往昔一亭を造り文人相會し賞遊した所であつたが中年に亭は廢毀して形なく唯崖下に豐桓臺と刻せる石及び槐樹二三ありて其俤を残す。

〔馬墳〕 面事務所より西北約二町馬山洞の路傍に一丘あり。俗馬墳だと稱してゐる。

俗傳ふ昔神馬あり渴馬峴の井水を飲み素沙坪の池邊を徘徊し勒洞にて勒を脱し馬山洞にて斃死せり其屍を埋めて馬墳を造ると、地名に因して起りし傳説なるべし。

〔鐘乳洞〕 礪峴舊鎮の背後の山麓に鐘乳洞あり其口は狹小にして屈曲辛ふじて一人を通ずるも洞内は廣く數室ありて相連る窟中暗黒にして鐘乳石の垂下せる者點々として存し人之を缺き去りて藥に用うと云ふ。

### 交通

〔鐵道〕 京義線は中西面土城驛より本面の南部礪峴驛に入り北の方龍峴を過ぎて金川郡鷄井驛に去る。

〔里道〕 中西面より鐵道に沿ふて礪峴洞に入り龍峴洞を過ぎて古東面に至る者あり、礪峴洞より卯洞・加土尾洞・食浦洞を過ぎて禮成江岸に出で江上を上り梨浦洞に出て北梨浦峴を踰え笠峴洞面事務所迂回する者あり、加土尾洞より直ちに梨木洞・梅洞を過ぎ多士峴を踰えて面事務所に至る者あり、面事務所

より冷井洞の北を過ぎ冠峴を踰え陵内洞・昭章洞を経て鶏井驛に出る者あり。  
面事務所より馬山洞に至り高山洞・鳴琴洞・蓮洞を過ぎて高齋宮に至り虎頭洞の  
禮成江渡場に出る者あり、礪峴洞より東に入り灰洞・者羅洞より玄陵洞を過ぎ  
開來洞に至り西して鐵道線路に出る者東して嶺南面に踰え一等道路に會する者  
あり、面事務所より冷井洞の川を上り勒洞の南を過ぎて渴馬峴を越え鶏井驛に  
至る者あり、又面事務所より南し加土尾洞より直ちに中西面馬踏洞に至る者  
あり。

### 渡場

- 〔虎頭洞渡場〕 二所里虎頭洞より金川郡西北面鳳山里に越ゆる禮成江の渡場  
〔鉢山洞渡場〕 二所里より延白郡雲山面石山里鉢山洞に越ゆる同江の渡場。  
〔乙山洞渡場〕 乙山洞の昭章河口より對岸に越ゆる渡場。  
〔梨浦洞渡場〕 梨浦洞より對岸に越ゆる渡場。  
〔東津渡場〕 二所里蓮洞より金川郡龍津里に至る渡場。

## 第五章 中西面

### 位置境界

郡の西北端に位し北は北面嶺南面に境し、東は嶺南面松都面に隣り南は青郊面南面に接し西は西面及び一隅禮成江に臨む。

### 廣袤

東西二里三十町南北二里十六町面積六方里。

### 戸數

内地人二十五朝鮮人千三百〇六支那人一、計一千三百三十二。

### 人口

内地人男五十七女四十二計九十九朝鮮人男三千二百八十八女三千二百六十一計六千五百四十九支那人一、通計六千六百四十九。

### 區劃

面内を分ちて土城里（館洞、沓洞、立岩洞、墨寺洞、馬踏洞）麗陵里（社稷洞、月帶洞、高麗顯陵洞、伊森洞、高陵洞、明陵洞、蛾眉洞、杜門洞、酒岩洞、小海晏洞、菊花洞、薪井洞、正陵洞）鵠嶺里（月老洞、彌勒洞、福寧洞、沓洞、牛目洞、牛山洞、啼馬洞、寺洞、陵峴洞、隱岱洞、帆近洞、七陵洞、海晏洞、灰洞）煙霞里（大國洞、存以洞、乘鶴洞、杏亭洞、石壁洞、德達



洞、金沙洞、樂村洞、武臺洞）館前里（早起洞、牛峯洞、馬蹄洞、玉粧洞）の五里とし面事務所を土城驛に置く。

### 沿革

此の地往昔の沿革は詳かに知るを得ざれ共輿地勝覽等によりて推斷するに新羅の頃は東部の一半は松岳郡に屬し西部の一半は冬比忽即ち開城郡に屬したるを麗祖の二年兩郡を合して開州と號せし時から始めて開城府の管轄に入りし者の如し其後累次の變遷を経て李太王の二十年癸未（明治十六年）郡面分合の際中正面と稱し土城里・錢浦里・麗陵里・鵠嶺里・煙霞里の五里に分ち事務所を煙霞里大國洞に置いたが大正三年四月錢浦里は西面に分割され西部面の路前里・太平館里は合して館前里となりて本面に來屬し大正五年に面事務所を麗陵里薪井洞に移し翌年再び館前里玉粧洞に移し大正八年三月三たび移轉して今の土城里土城驛に置くに至れり。

### 地勢

天磨山の來脈面の東北隅に峙ちて千三百二十尺の鷹峯となり南下して松岳山を崛起し蜈蚣山に連り以て嶺南面と松都面との界をなし西に向ふ者

は鵠嶺里の北境を走りて鳳鳴山となり北西の境を南に下り舞仙峯となり又西に向ひて北面の南境に蟠る、萬壽山は鳳鳴山脈より分れ麗陵里鵠嶺里の間に蟠亘し一支は南向して杜門洞の間に蟠り一支は西南に走りて薪井洞より土城驛の北に起伏す、面の西端禮成江の沿岸には五峯山聳え其脈西面の界に連る、煙霞里の西南にも一連の山嶺相連りて青郊面と南面との境を劃す。

平野は錦上川の上流に沿ふて曲々細長の水田を開き土城里に至りて大に開け南面より西江の平野の連る。

### 山峯

〔鷹 峯〕 面の西北隅にあり嶺南面に跨る岩峯で其形孤鷹の如し高千三百二十尺。

〔松岳山〕 松都面參照

〔蜈蚣山〕 同上

〔鳳鳴山〕 北面參照

〔萬壽山〕 麗陵里にありて鵠嶺里に跨る高七百四十九尺。

〔舞仙峯〕 鵠嶺里にありて北面に跨る高八百三十四尺。

〔五峯山〕 禮成江岸にありて西面に跨る高五百六十七尺。

### 河川

〔錦上川〕 源を鵠嶺里月老洞鷹峯の西南溪谷に發し西南に流れ彌勒堂の北にて蹄馬洞の細流を加へ南流彌勒堂を過ぎ麗陵里の中央を貫き伊森隅より亦西南に轉じ蛾眉洞を過ぎて獐項の鼻を東北に彎流し、更に東北に向ひて突出せる五百七十七尺の高地の山脚を回りに杜門洞川を併せ又西南方に彎流して南面に入る面内の流程約三里四町兩岸に灌漑の利を與ふ。

〔杜門洞川〕 杜門洞に發して西南流し海晏洞溪と合し錦上川に入る。

〔番洞川〕 麗陵里番洞に發して西南に流れ西面の界に至り松下川墨寺洞川を加へ西面界を南流して錦上川に入る、兩岸亦灌漑の利を受く。

〔鳳鳴洞川〕 鵠嶺里鳳鳴山の南谷に發し山間の谿谷を西南に流れ北面に入る

泉川の上流である。

〔馬踏洞川〕 土城里馬踏洞にあり同洞の水田に灌ぎつゝ北流して泉川に入る

### 土地

〔國有地〕 無

〔民有地〕 田五百二十八町二反、畑千五百四十四町七反、宅地五十三町九反、

雜地五反、計二千百五十七町三反。

林野、千〇四十二町九反。

### 産物

〔農産物〕 米類三千百〇四石、麥類四千二百七十八石、豆類三千八百二十三石、粟一千三百九十三石、棉二千七百二十斤、甘藷二千二百十二貫、蘿蔔八萬五千〇九十貫、白菜三萬四千九百七十貫、甜瓜一萬五千五百貫、苹果一萬二千四百貫、梨六百八十貫。

但し百以上  
以下皆同

人蔘は其特産である。

部落

三十戸以上

〔土城驛〕 鐵道驛の所在地で戸數二百四十七、人口一千三百九十九、公立尋常小學校・公立普通學校・面事務所・警察官駐在所等あり、往時下土城の地は禮成江港と開城との要路に當るを以て頗る繁榮の所であつたが近時鐵道驛を上土城の地に設けしより其中心は此處に移り旅舍飲食店等軒を並べ頗る殷賑の地となる當驛より碧瀾渡に至る自動車の便あり。

烟霞里大國洞

三十戸。

麗陵里太祖陵洞

四十戸。

麗陵里社稷洞

五十戸。

同杜門洞

三十戸。

土城里馬踏洞

八十戸。

土城里墨寺洞

四十戸。

館前里玉粧洞

八十戸。

社寺

〔翫月寺〕 鵠嶺里月老洞にあり住僧三人天磨山翫月寺と云ふ元順帝三年高麗恭愍王の時一虛堂信修和尚四十餘間の堂宇を創立す、後廢寺久しかりしかば李

太王の光武八年甲辰(明治三十七年)の春信女表氏孫氏金氏等法堂及僧堂を寄進重修して十五間の堂宇を新設す禪教兩宗で江華郡傳燈寺の末寺、本尊は觀世音菩薩である、寺は松岳山の北麓高臺にあり風景に富み往時全盛時代の遺跡を残す。

教會堂

〔樂村禮拜堂〕

烟霞里樂村にあり明治三十四年三月創立。

〔福寧禮拜堂〕

鵠嶺里福寧洞にあり大正十二年三月設立。

〔牛目洞禮拜堂〕

鵠嶺里牛目洞にあり明治四十年五月設立。

〔陵洞禮拜堂〕

麗陵里陵洞にあり大正十二年三月設立。

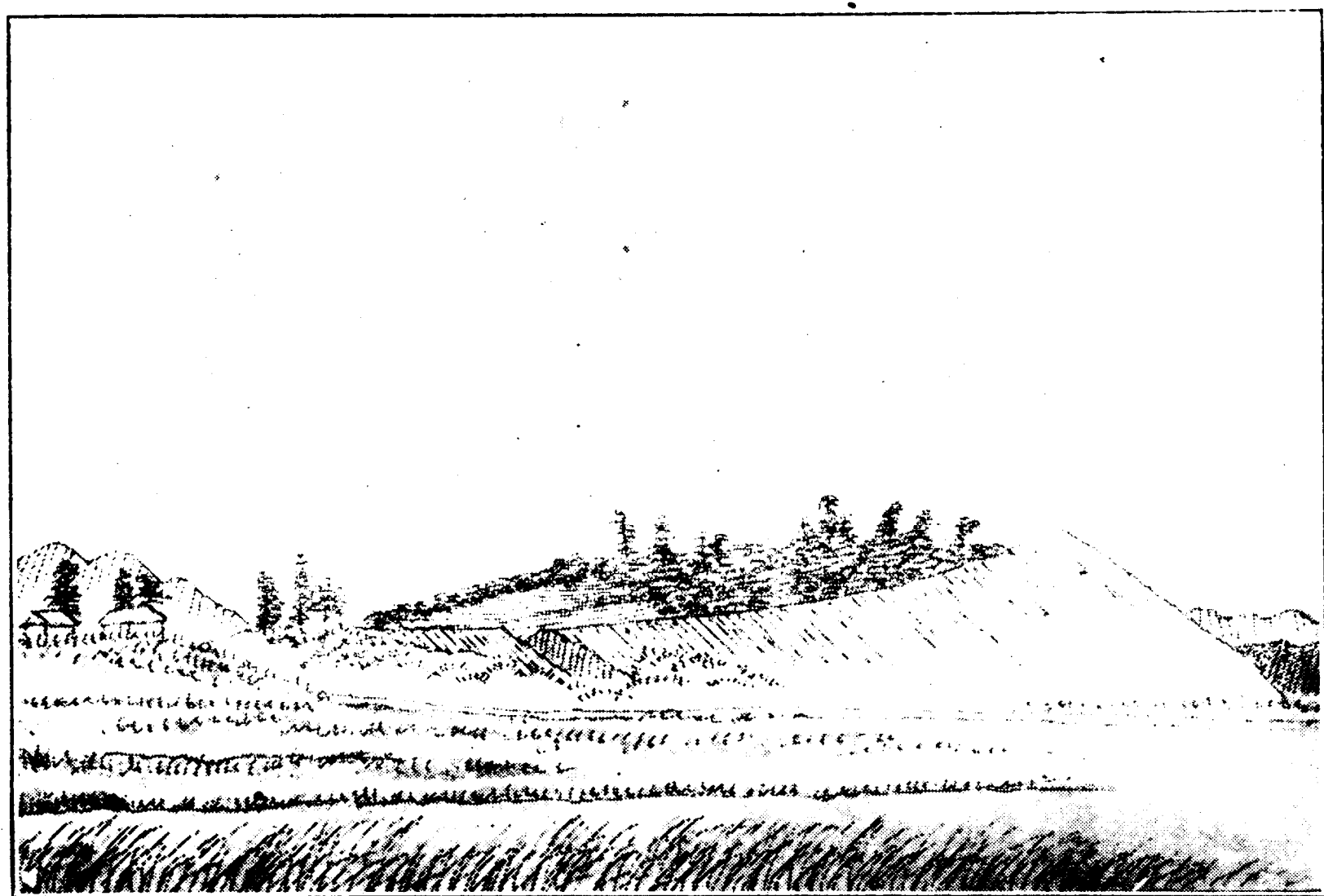
學校

〔土城公立尋常小學校〕 土城里土城驛にあり大正三年九月創立職員數二、學級數一、生徒數二十一、一年の經常費千九百三十圓。

〔土城公立普通學校〕

土城里下土城にあり大正十二年六月創立職員數四、學





土城址 (北方向ヨリ望ム)

級數四、修業年限四個年、生徒數百六十四、一年の經常費四千二百十二圓。

古蹟

〔土城址〕 土城驛を西に距る十二三町碧瀾渡街道と西面の江里に至る舊道との交叉點にある土城なり、中央は高く一帶の松林をなし周圍は開墾せられて圃となれり中央の松林中には五六個の墳墓あり圃の周邊は土壘の形迹を存し處々雨水の爲に崩缺せるも北門附近は猶其跡明かに残る周回約七八町東方の壘跡に接して一井あり其附近の土中より紋様ある瓦片を出す亦西門附近の

土壘の崩壊せる跡よりも種々の瓦片を出す、輿地勝覽に卯山古城、府西二十二里にあり土築周四千四百十尺高三十尺今半頽落すとある者正に是なるべし。

此の地禮成江口より錦上川に沿ふて地勢開け水田相連り一望濶然殊に西面の開城里に連續せるを見れば高句麗の冬比忽の遺城であつて開城の名も亦此の土城から起つたと思はる、猶西面開城廢縣址を參照するを要す。

〔高麗顯陵〕 麗陵里太祖洞にあり、昔は巴只洞と稱す、松岳の一支西來して錦上川の峽を越へ萬壽山を崛起し南下して巴只洞の落穴に至る道訛師地を是處にトし太祖の壽陵となして曰世々子孫宜しく此に葬るべし云々と、故に其後の麗王亦多く此に葬られた。墳は小高き地點にありて龍虎の兩山左右を擁し、以て形勝の地點を占めてゐる、墳の周圍は十二面の護石より成り、各面の腰石に十二支神像を薄肉彫にしてゐる、親柱及束石を以て架木石を支へたる石欄は、墳の周圍を繞り、墳の前面に石床・石燈を置き左右に望石一對石人一對を立て四隅に石獅を配し以て墳を守護するの狀をなさしめてゐる。此の陵外敵の侵入する

毎に梓宮を他に奉じて難を避け事収まりて後復葬せしこと屢なりし故、大體の制度は當初のまゝならんも其象設は多少後世の手詣を混じて居るであらう。山下には今丁字閣が立つて居るが、是れは何れも李朝後期に立てた者である、右方に碑閣あり、正面に高麗太祖王顯陵・神惠王妃柳氏祔と二行に書し、側面に上之四年丁卯(李太王)九月日、背面に資憲大夫行開城府留守兼管理使金壽鉉謹書と刻せる碑を藏す又別に同列に顯陵修改紀實碑閣あり。其他參奉齋宮・守僕室等皆備はり都て陵域神崇で春秋の祭祀怠りない。

史に曰ふ、顯宗の時契丹の亂によりて太祖の梓宮を貢兒峯の香林寺に移した  
が亂平らぎて還葬した、是の如きこと再度、高宗の時亦契丹の亂によりて奉  
恩寺に移し後蒙古の亂に因て江華に葬つたが元宗の時權りに泥板洞に安じ忠  
烈王の時に還葬したと。

李朝に入りて高麗の諸陵荒頽に屬したが、顯宗の朝麗太祖の三韓を統合した  
功を追崇し特に禮官を遣はして太祖及諸王陵を審察し圯毀を修築し王姓の人

を以て定めて守直官とし耕葬を禁斷し永く王氏の身戸の役を蠲いた。

〔七陵洞〕 萬壽山の南太祖洞の西北にあり高麗王陵七所あるを以て名く、但  
し何王の陵なるや詳かでない、故に唯數字を以て標記するのみである多くは荒  
涼たるを免れざるが其形式は殆んど同一である概況左の如し。

〔第一陵〕 護石の十二支神像は石刻磨滅し石欄は支柱のみ存して横杆なく石  
獸八個あり石人は四個あるも一は倒れあり其紋理見るべし、祭閣の礎石には圓  
柱を建てたる陽刻の跡あり、石燈望柱共に失はれたるが總じて規模は大である。

〔第二陵〕 石人四ありて一は倒る、石獸と望柱はあり、護石の十二支神は陰  
刻である、石欄支柱存するも倒れ、祭閣の基石あり、石燈は蓋のみ残る。

〔第三陵〕 墳の前面に石材を以て三層の壇を築き、護石には十二支神像を陰  
刻し、石欄・望石・石床・石燈・石羊の象設式の如く、第二壇第三壇に各文石  
一對武石一對を立て、更に其下に丁字閣の遺基を存す。石人石燈石欄望石は頗  
る優秀の作で、他の簡樸古拙なる者と趣を異にす、殊に石燈の如きは方形にし



て中臺地臺に蓮花を刻み竿石に羽目狀を作り火袋石に火口を開き方形の蓋を載せてゐるが、手法簡單なれども頗る穩健質實の風を示してゐる。

〔第四陵〕 石人四あるも二は倒れたり、磨滅して面貌明かならず、望柱二あり形式他の者と異なる如し、石欄皆埋没し石獸は半ば埋れ祭閣は礎石残り護壁は墳土と共に没して柱頭のみを現はす。

〔第五陵〕 石人四、望柱二、石欄及十二支神の護壁は前部のみ現はれ後部埋没石獸二は少しく現はれ石燈は蓋のみ存せり。

〔第六陵〕 石欄は護石と共に土中に埋没し石獸も埋まり望柱は文理ありて直立し石人四は形のみ存す。

〔第七陵〕 石人四ありて一は倒る石獸は半ば埋没石欄は破れて埋もれ望柱は直立す祭閣は形迹なし。

其他萬壽山の東麓陵峴谷にも顯宗宣陵外無號の王陵二所あり。

〔明陵〕 顯陵の南明陵洞の山腹にあり高麗忠穆王陵である墳の護壁半ば埋れ

石欄は柱のみあり石獸四個、埋没外何物となし。

〔明陵第二陵〕 明陵の古にありて護壁石欄柱共に存す錐狀の望柱二個、石人四個あり。

〔明陵第三陵〕 護壁半埋せるも石欄は存す六個の石獸あり望石は錐狀をなし又四個の石人あり、

〔西蜀王后の墓〕明陵第三陵の南に擬王陵あり其下方に西蜀王后彭氏の墓あり又望柱と魂遊石とを備へ且つ碑石を立て碑文を刻む文に曰ふ。

西蜀王后彭氏之碑

歲在丁未冬、余遊松都、訪古迹、有古西蜀王明王珍之配彭后之陵、而年代悠遠文獻無徵矣、戊寅春其後孫台祥、以我久要、袖其家乘、乞銘於余、曰、我先祖蜀王后彭氏、生年及世閼、以其代遠、雖不能撫實、而蓋在蜀居位者幾年、而從其子歸義侯昇、來留于高麗、恭愍王給米布家舍、以兩縣貢物供奉、至我太祖朝、待以賓禮、太宗甲申四月二日逝、特加恩典禮葬於松都萬壽山南麓

癸座之原野、封號肅陵、建祠宇于庭、安、祭需崇優之禮備矣、有子一人、即歸義侯諱昇、我太祖封華蜀君、娶坡平尹熙宗女、生子四人、儀倪俊信、世代沿革、后之兆宅失傳久矣、後孫尋求、糜不用極、竟乃護誌牒而得瑩域、因相與謀曰、紀其事垂諸陵、莫加墓道之刻、於是伐石而爲碑、願從公而圖永其傳、余辭不護仍爲銘曰

考其維降 瞻彼住所 豐碑紀善 更千百載 巴山蒼々 東海洋々 刻示范々 無敢毀傷

通政大夫工曹參議

金 命 根 撰

通政大夫行承政院左承旨兼經筵參贊官春秋館修撰官知製教

金 聲 根 書

崇禎紀元後五戊寅三月 日

〔高陵〕 明陵の東一嶺を隔てたる高陵洞の山中にあり、封土の護石に十二支神像を陽刻せるも磨滅して明かでない墳の背後は山崩れの土沙の爲に埋没して

前面のみ現はる石欄は柱のみを残し石獸一個、文武石三個立ち一個は倒る陵前に高麗王后齊國公主高陵の碑石を建つ即ち忠烈王妃の陵である。

〔玄陵、正陵〕 麗陵里鳳鳴山の支脈舞仙峯麓にあり、正陵は東に玄陵は西に兩陵相並び碑面に魯國公主正陵、高麗恭愍王玄陵と竝刻す、此の陵は實に高麗時代の陵制に一轉機を劃し以て李朝時代の陵制の標準となりし者にて、其壯麗殆んど空前を以て目すべき者である。始め王の十四年二月最愛の王妃の薨ずるや、王大に之を哀み自ら公主の眞を寫し日夜食に對し悲泣三年に至つたと稱せらるゝ程で、愛妃の爲に空前の土工を起し、其結果從來の陵制に新生面を開いたのである。一體高麗時代にありては、國王と王妃との陵は毎に別處に之を築いたのであるが、恭愍王に至り始めて其陵と王妃の陵とを一處に竝べ築かんとを企て、先づ王妃の陵を造り、次に其傍に壽陵を起し全體の象設を共通とし、以て輪奐壯麗なる新制度を大成したのである。陵は石欄各其周圍を繞り、中間に於て相連接し、石羊石虎更に其外を周りて配置せられ、墳の前面には各

床があり、其下の中壇にも各一燈が立てられて居る、更に此の兩墳に對し、共通に上壇前面左右に望柱一對、中壇に文石二對、下壇に武石二對が次第に立てられ、各壇にはそれぞれ美なる石階段が一處若くは三四處設けられてゐる、從來の石人石獸の類は、新羅時代の者に比すれば手法寧ろ簡樸に過ぎたりしが、此の陵に至り始めて宏壯富麗をあらはして居るのである。兩陵共に護石の地覆石葛石には蓮花を刻み隅束石には三鈎若くは三鈎鈴を刻みあらはし更に羽目石には雲中神仙像を浮彫にしてゐる、其他、石欄・望石・石床・石燈の屬皆彫琢の美を極め石人・石獸の如き亦雄偉精靈の風貌を示して居る、殊に石燈は地臺中臺に豐麗なる蓮花を刻し竿石割合に低く且つ廣く四面に格狹間の中に三夥の寶珠をあらはし火袋石には大なる火口を洞開し上に方蓋を冠し權衡割合に低く随つて安全の觀を呈す、要するに此の兩陵は恭愍王が全力を擧げて經營せし者從來の型を破りて規模壯大象設奢麗、麗末棹尾の傑作を以て目すべき者であると云ふ、陵を圍む石垣又大方石材を以て壘み前面石壇下には祭閣の跡ありて礎

石を残す。此の陵大正十一年七月大雨の爲に後部崩壊し護壁石欄崩れ又封土の一部陷没せるを見る。

史に稱す公主身めるありて月に彌る難産病劇に及んで有司をして佛宇神祠に禱らしめ一罪の者を赦す、王は焚香端坐して暫くも側を離れず、公主尋で薨す王悲慟爲す所を知らず、賛成事崔瑩他宮に移御せんことを請へば王曰ふ吾公主と約することは是の如くならず他所に遠避して自便を圖るべからずと、王福命に命じて喪事を主らしめ朝を輟ること三日百官玄冠素服喪事に供す又諸司をして奠を設けしめ其豐潔なる者を賞す、是に於て争ふて華移を務め稱貸以て辨ずる者あるに至る。王固より釋教を信ず、是に至りて大に佛事を張り七日毎に群僧をして梵唄魂輿に隨はしむ、殯殿より寺門に至るまで幡幢路を蔽ひ鐃鼓大に喧すし、或は錦繡を以て佛宇を蒙ひ金銀彩帛左右に羅列し觀者眼を眩し遠近の諸僧聞く者皆争ひ赴く、將に葬らんとす王命じて儀衛の次第山陵の制度を畫かしめ之を見て覺へず涕泗す、喪事齊國大長公主の例により



奢を窮め移を窮む是を以て府庫虚竭す、雲岩寺の東麓に葬り號して正陵と曰ふ、玉手づから公主の眞を移し日夜食に對して悲泣三年肉膳を進めず朝臣をして除拜及出使には皆陵下に詣り閤門行禮の如くせしむ、十五年大に公立の影殿を王輪寺の東南に起し百官をして木石を輩せしむ數百夫一木を挽くに尙進むる能はず呼耶の聲天地を動かし晝夜絶へず牛の死す者道に相繼ぐ云々。

今西龍博士報告に曰、此陵は古來貴品を藏せりとの説ありて兩三回發掘せられたりといふ、正陵の如きは爲めに石室の一部陷落せるものゝ如し、其貴品を藏すと云ふ説の最も古く見ゆるは成宗王朝に愈好仁が著せし松都錄なり曰く鳳鳴山有立正二陵、並峙一岡、其始營皇堂也、以金鳧銀雁之物爲飾、製作極一時之妙、雖驪山之役無加也

日本上代古墳の金鷄と傳説に似たる點あり 仁祖王朝に李德洞が撰せし松都紀異には明宗王代に起りし事件を記して

世傳魯國公主陵中多藏金寶、城內人家馬逸、主追及之、其馬駸々然、直至

魯陵後岡、而立、主始捉之、因下視陵所、傍設冶爐、二人有穿掘之狀、來告于官、時沈相守慶爲留守、發卒捕之、賊昏迷失措、不知爲官人、不離寸步、而就縛、留主設刑具究問、皆款款吐實、使郎吏審視之、推釘、什物浪籍、穿竇幾至丈餘、殆非二人數月之役、矣、上聞于朝、即遣官修補、二賊置法、噫前代帝王或有遺命薄葬者、盖有慮乎此也、逸馬之到陵、馬主之告盜、豈非神明之高誘、吁亦異哉、

此記事によれば壙内へは侵入に至らざりしが如し其後仁祖時代丁卯丙子兩度の清兵入寇に際し此陵墓が無事なりしとせば一奇と云ふべし、李太王時代清兵發掘して金物を獲たりとの風説あり、其後一二度盜掘の禍に罹れりといふ、其際修理のことありて壙内を見たりと稱する者の説に正陵壙の壁畫は彩色絢爛として新なるが如しといふ、此壙内に棺槨を具置せしことは前記文献にも見ゆれども其狀明ならず云々。

〔戴宗、泰陵〕 鵠嶺里海安洞にあり。

〔顯宗、宣陵〕 萬壽山の東、陵峴洞にあり。

〔西龜陵〕 麗陵里杜門洞にあり。

〔廣通普濟禪寺址〕 即ち雲岩寺で舊名は光巖と云ふ舞仙峯下恭愍王玄陵の下にあり二陵の冥福を祈る齋宮であつた、其寺碑は辛禍の三年に立てた者で其文は李穀の作である普通の碑と全く形式を異にし横に廣くして屏障狀をなし上に蓋を載せて居る灰色の大理石を水磨にし周縁には寶相花を刻み下には牡丹花枝を羽目内に寫し碑側に雲龍を陰刻してゐる。

〔杜門洞碑閣〕 麗陵里杜門洞にあり高麗滅亡し政權李氏に歸するや遺臣曹義生、林先昧等七十二人聚つて洞中に入り肯て李朝の化に従はず因て杜門洞と云ふ英祖二十七年(百七十五年前)御製御筆・勝國忠臣今焉在・特豎其洞表其節の十四字を以て碑を豎て閣を建て其碑に記して曰ふ。

崇禎紀元後百二十四年辛未季秋、追感杜門洞前朝忠臣七十二人節義、特命錄用其孫豎碑洞中、寔予卽祚二十七年也。

同王三十年甲戌林先昧十一代の孫瑞樞を莊陵の參奉に除し且つ留守徐宗偈をして祭を致さしめた、閣は土塀を回らし修理怠らず今猶完全に保護しあり。

〔月老洞〕 鵠嶺里松岳山の北にあり本扶蘇岬の北と稱す傳説の所謂康忠は初め此に居りしと云ふ。

〔社稷壇址〕 館前里社稷洞にあり今壇の遺跡のみあり。

〔午西門址〕 館前里大國洞一等道路上に當る即ち高麗羅城の正西門で又宣義門とも稱す、西は五常に於て義に當るからである、昔は二重の樓觀がありて中央に大門を開き常には之を閉ちて衛兵が番をして居り常人は小門によりてのみ通過した王城中最大の門で碧瀾渡から西郊に至り必ず此の門を通るのであつた、今は其側を大路が通るので削り取られて其形を失ひ唯跡のみ残つて居る。

〔西郊亭址〕 往時宣義門外一町許の處即ち一等道路の北折する邊にあり迎賓館と稱し使人の往來の時此處にて迎勞餞飲した。

〔彌勒堂〕 鵠嶺里彌勒洞一等道路と松都面よりの間道と相會する所にあり彌

勒の石佛を残す往時の福靈寺の跡ならんか今福寧洞と稱する者其訛音に似たり。

〔海安寺跡〕 鵠嶺里海安洞にあり曾て高麗祖宗の眞を此に安せしが明宗の時城東の吳彌院に移せりと云ふ今無し。

〔永思臺〕 鵠嶺里彌勒洞の北にあり。

〔文萊墓〕 高麗文萊の墓墨寺洞の東にあり。

〔權膽墓〕 高麗權膽の墓煙霞洞にあり。

橋 梁

〔玉粧橋〕 館前里舊板房洞即ち玉粧洞にあり蜈蚣山より來る鶯溪の上流に架す社稷壇の東南である。

〔十川橋〕 同洞にあり同川に架す。

交 通

〔義州街道〕 一等道路なり、開城太平町より來り午西門趾を過ぎ西郊亭趾よ

り北に屈折し麗陵里を過ぎ彌勒洞・蹄馬洞を経て嶺南面に至る。

〔碧瀾渡街道〕 二等道路なり、西郊趾より義州街道に分れ西に向ひて煙霞里土城里を経て西面に入る。

〔里道〕 義州街道より分れ蛾眉洞・國清洞・山伊洞・立岩洞を経て鐵道に沿ひ北面に入る者あり。同義州街道より分れ明陵洞・鵲洞・正陵洞を経て北面蟬峴里定陵に入る者あり。松都面都察峴を越へて本面福寧洞に入り彌勒堂にて義州街道に會する者あり。蹄馬洞より鳳鳴洞を過ぎて北面に入る者あり。西面豊流洞より本面土城里馬踏洞を通り北面の食浦里に至る者あり。其他山路多く大率間道に屬し平夷ではない。

中 西 面 終



## 第五章 西 面

### 位置境界

本面の最西端に位し、北より東は中西面に包まれ東西は南面に接し西より南は禮成江を以て限らる。

### 廣 袤

東西一里餘南北一里二十九町面積五方里九二、郡廳を距る三里十八町。

### 戸 數

内地人二朝鮮人七百九十計七百九十二。

### 人 口

内地人男二女三計五朝鮮人男千九百二十三女千八百七十四計三千七百九十七通計三千八百〇二。

### 區 劃

本面を分ちて開城里（大井洞、豐流洞、公子洞、馬中洞、頭三洞、白鶴洞）光井里（光井洞、良佐洞、新岱洞）錢浦里（内洞、李齊宮、廣岩洞）蓮山里（梅着洞、芳洞、新岱洞、妙洞、碧瀾渡）江里（大莊洞、深橋洞、石井洞、後西洞）の五里とし面事務所を光井里新岱洞に置く。

### 沿 革

高勾麗時代には冬比忽と稱せられたが新羅に至り景德王の十五年（千百七十年前）開城郡と改む高麗太祖統一するに及んで松岳郡に併せられて開州の管となつたが忠烈王三十四年王都開城府を以て都城內を掌り別に開城縣を本面開城里に置いて城外を掌らしめ李朝の代に至つた、世宗實錄地理誌によれば當時屬縣開城の戸數は八百四十四人口二千〇二十一馬軍六十八步軍五？舡軍左右領並二十、土姓五、高金王康田、來接姓一、李、墾田五千三百五十一結（水田十分の三に居る）とあり、太宗都を漢陽に移し開城府に留主を置くに及んで開城縣は廢せられたのである李太王の三年西面と名け六里に分けたが大正二年郡面廢合の時碧瀾渡と弘京里を蓮山里に合し中西面の錢浦里來屬して五里となつた。

### 地 勢

北境は五峰山の脈相連り中央西部には烽山ありて聳立し其脈東に亘りて石崇山を崛起し支脈は四方に下りて面の中央高地を形成す、峰山の南に百年山あり面の西南部に蟠亘し蓮山里の高地をなし其脈東より南に走りて江里

の劍埋山に連る。

平地は錢浦里・光井里・蓮山里・弘京洞・梅着洞等に散在し錦上川沿岸は江里石井洞より北方一面深橋・馬仲洞・中西面土城に里連り以て開城里大井洞・豊流洞一圓の水田を開く。

山峰

〔烽山〕 廣岩洞の南にあり標高七百六十八尺頂上に烽燧址あり即ち首鴨山烽燧址なり中京誌曰ふ首鴨山烽燧、府西三十四里にあり東は城隍堂に應じ南神堂に應ず今廢すと其西南麓に金坑あり其下は即ち光井洞である。

〔百年山〕 烽山の南妙洞の北にあり高五百八十五尺又白蓮山と云ふ。

〔石崇山〕 白鶴洞の後ろに峙ち高五百〇四尺。

〔五峰山〕 北方禮成江岸にありて中西面に跨る高さ五百六十七尺。

〔劍埋山〕 江里石井の後ろにあり高二百七十三尺南方の山腹に泉ありて湧き其崖に春谷耘人濯纓源と題刻す。

河川

〔禮成江〕 北の方中西面境より來り西境を環流して錢浦・光井浦・碧瀾渡を過ぎて南面に入る面内の流程二里二十餘町潮水の干満甚しく沿岸泥濘深し。

〔松花川〕 開城里大井洞より來り豊流洞川を合せて南流し錦上川に入る。

〔錦上川〕 南面玉山里より來り南流深橋・石井を過ぎて禮成江に入る。

〔錢浦川〕 廣岩洞の山中より發し北流して李齋宮より來る溪流を加へ西流して錢浦洞の南に至り禮成江に入る。

〔長川〕 光井里良佐洞南山より發し南流禮成江に入る。

土地

〔國有地〕 無。

〔民有地〕 田五百七十九町二反、畑五百五十七町一反、宅地二十一町七反、計千百六十八町。

〔林野〕 二千四百七十町。



産物

〔農産物〕 米類三千四百十四石麥類千七百石豆類千九百四十一石甘藷一千貫馬鈴薯一萬一千四百九十貫蘿蔔五萬五千貫白菜二萬二千四百六十貫甜瓜四千五百貫。

部落 三十戸以上

開城里豐流洞	八十戸	開城里白鶴洞	六十戸
錢浦里内洞	六十戸	錢浦里廣岩洞	四十戸
江里後江洞	六十戸	蓮山里碧瀾渡	三十戸
蓮山里芳洞	四十戸		

光井里新岱洞に面事務所及警察官出張所あり。

教會堂

〔長秋禮拜堂〕 寺盆里長秋洞にあり明治三十六年三月設立。  
〔碧瀾渡禮拜堂〕 蓮山里碧瀾渡にあり明治三十九年九月設立。

〔光井禮拜堂〕 光井里光井にあり明治四十四年三月設立。

〔後江禮拜洞〕 江里後江洞にあり大正十二年九月設立。

〔公子洞禮拜堂〕 開城里公子洞にあり大正四年五月設立。

學校

〔私立光信學校〕 學級數四教員數二兒童數六十三一年の經費九百圓。

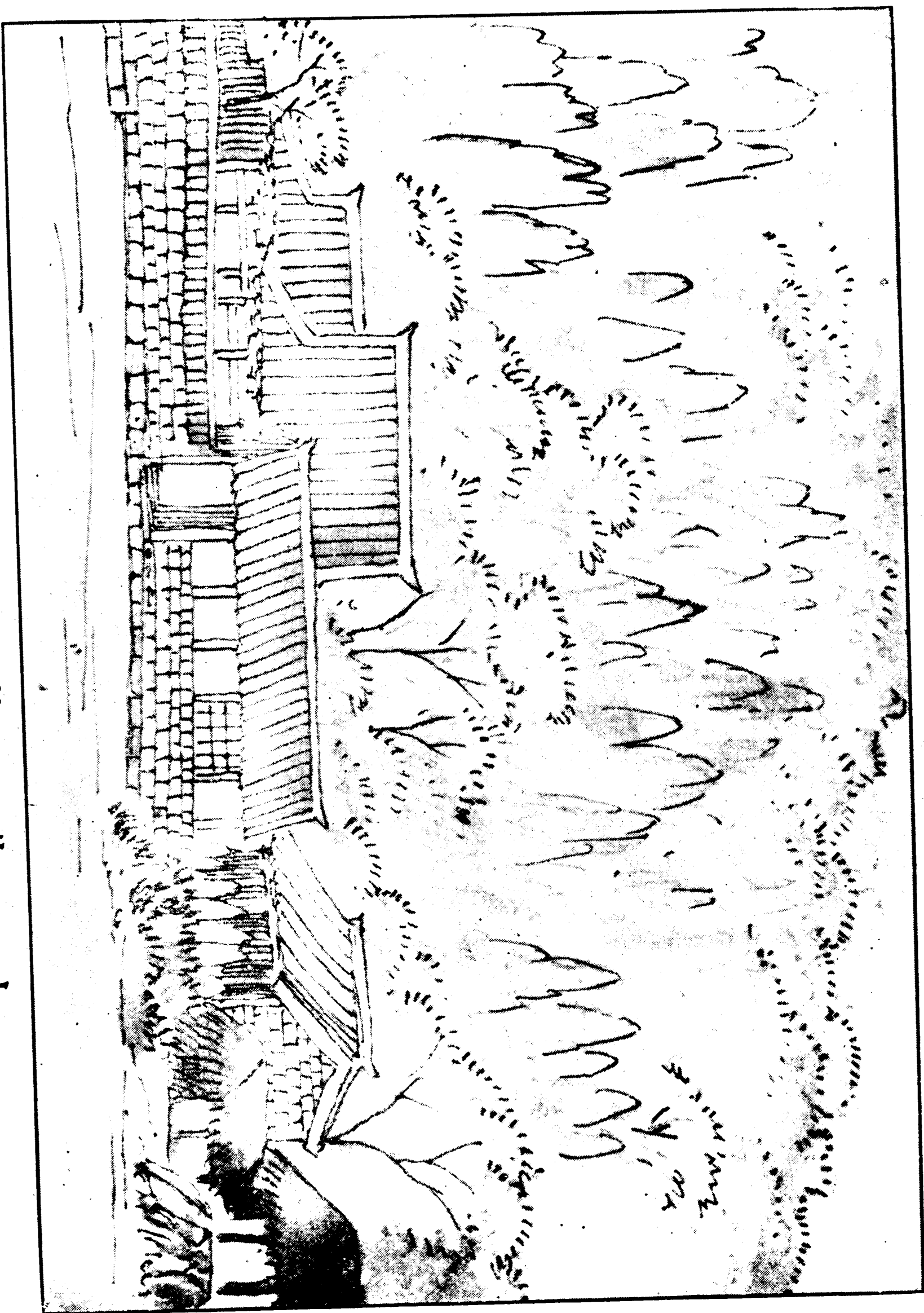
古蹟

〔開城廢縣址〕 開城里豐流洞の東端部落外にあり今豐東書塾と云へる一民家ありて其前方の圃中より無數の瓦片を出土す、此の地東は一山を隔て、大井洞に接し南方一帯は田畑相連りて中西面土城里の土城に及ぶ輿地勝覽の開城廢縣は城西二十五里にありと云ひ又開城郡は高勾麗の冬比忽石崇山の東とある者は是れである。

按ずるに開城郡は高勾麗の冬比忽であると言へば其冬比忽なる者は其の土城を指せる者なるべく忽とは高勾麗語の城の義なること恰も陽城を沙伏忽・安

城を奈兮忽・金城を也次忽・高城を達忽・扞城を加羅忽・取城を冬忽と云へるを以て知るべきである、即ち冬比は開で冬比忽は開城の義に當り此の土城の地勢は四方開濶なること中西面土城の項に説明せる如くであるから高勾麗の時代には此の一帶を冬比忽地方と言ふたのであらう傳説に謂ふ所の高麗の懿祖作帝建の妃元昌王后が永安城から開城の東北山麓に往き銀盃を以て地を掘り水を取りて用ゐたといふ大井が恰も此の廢縣址の東の小山を隔てた所の山麓にあるを見れば懿祖も一時此處に棲だらしいのである、されば高勾麗の時代には冬比忽の部落は此地に發達し之を保護する爲に防禦城を土城に置いた者と思はるゝ。

高麗の太祖が松岳郡と開城郡とを合して都城をば松岳郡に置き名を開州と改めたので開城の名は現今の地に移り冬比忽の地は舊開城として里名にのみ残つて居たのを忠烈王の時に開城府と開城縣とに二分し府治を都城内に置き縣治をば再び冬比忽即ち今の豊流洞の地に置き都城外を管理せしめた、爾來八



大井龍宮

十六年李朝が都を漢陽に移して開城府に留後司を置くに及び開城縣は廢縣となつたので今も土人は此處を廢縣址と云つてゐる。

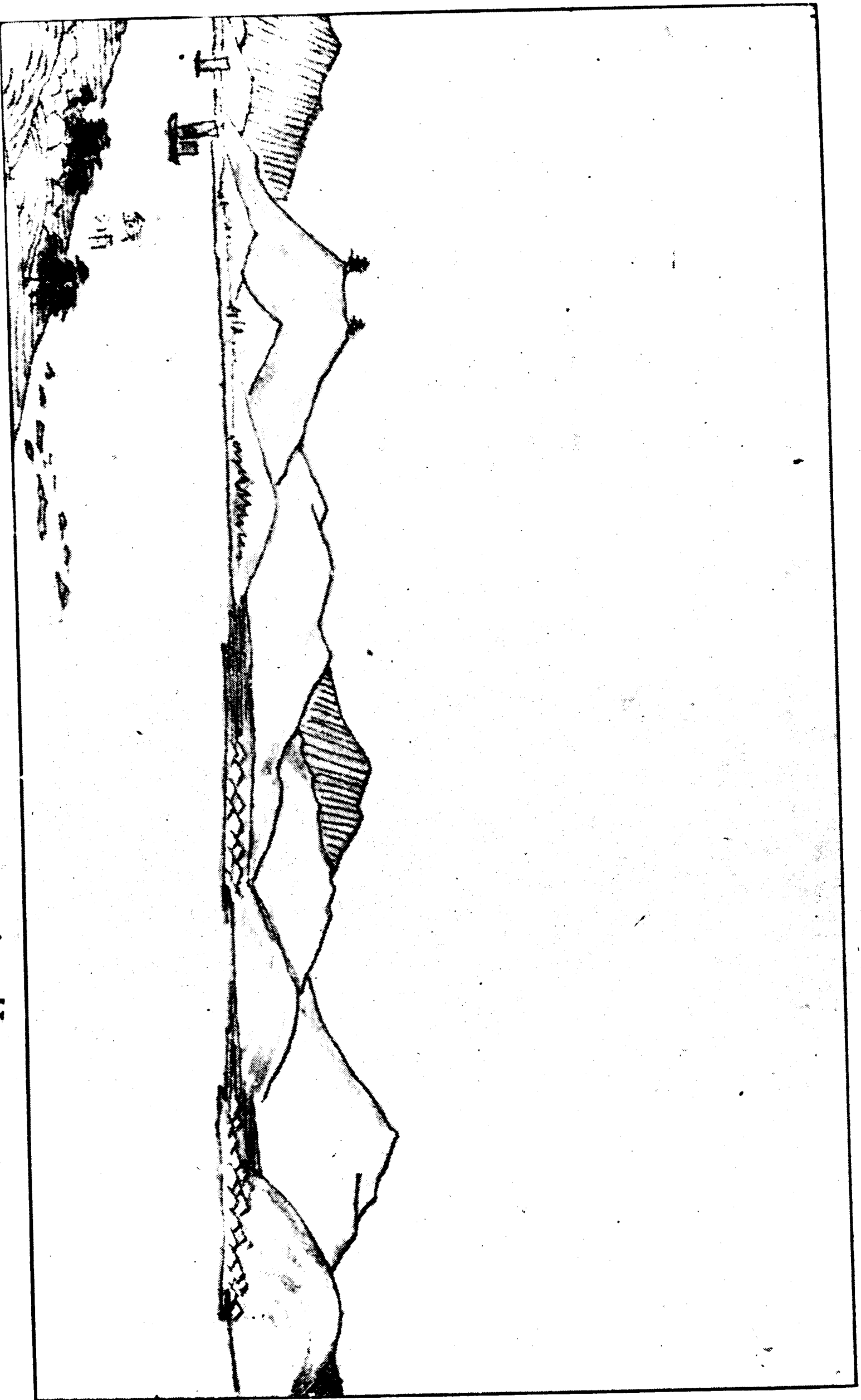
〔大井〕 開城里大井洞にあり小池ありて廣さ三十坪許深さ三四尺あるべし中央より少しく偏して山崖に寄つた處の水底に穴ありて清水其處より滾々として湧く龍女の入りし窟穴と稱す、水色清澄藍色を帶び凄愴の感あり雜魚棲息すれども人之を捕らず之を食すれば祟りありて死すと傳ふ、土塀を圍らし其傍に廟ありて龍女を祠る三四月の交遠近の諸人參詣して冥福を祈ると云ふ。

傳説に曰ふ麗太祖の祖父懿祖の妃龍女井を穿ち井中より西海の龍宮に往來した常に曰ふ吾龍宮に歸る時慎みて見る勿れ否らざれば復た來らずと、一日懿祖密かに之を伺へば龍女は侍女と共に黃龍に化し五色の雲を巻き起して居る懿祖之を異めども敢て言はず龍女之を覺り還つて其夫婦の約を守らざるを怒り遂に又少女と共に龍に化し此の井中に入りて復た還らず唯其鞋を残したので之れを松岳山腹に葬り溫鞋陵と稱したと云ふ。

松都面古蹟廣明寺址參照

〔甘露寺址〕 錢浦里五峯山下の江岸にあり、昔高麗の李子淵元に入朝し潤州の甘露寺に登り甚だ湖山の勝景を愛し從行の三老に曰ふ爾宜しく審かに形勢を見記憶せよと、還るに及んで三老と約して曰天地の間凡そ形ある者相似ざるはない況んや我國は山川秀清であるから其形勢の必ず之れと相近き所があらう汝宜しく扁舟短棹を以て遠く相尋めべく將に十年を以て期となせと既にして三老歸來して曰ふ凡そ六たび寒暑を涉つて始めて之を府西の西湖に得た潤州の甘露寺が美と雖も但營構繪飾の工が勝るのみで天作地成自然の勢に至つては殆んど未だ此れに及ばないと凡そ樓閣地臺の制度一に皆潤州に倣つて此の寺を創建したと云ふ權近の重剏記に曰ふ。

松都の西碧瀾の北濱に寺あり甘露と云ふ、俯して長江に臨み山圍み野濶く風雲變態朝夕萬狀一國に最たるの勝境なり、高麗の盛時昌華李公子淵使を中國に奉じ甘露寺に遊觀し心甚だ焉を樂む、既にして返つて其形勝の相似たる者を求め六たび寒暑を涉つて乃ち此地を得樂みて而して營構し因て其名を冒し



甘露寺址後岡遠望



以て道場を建つ、其女は即ち是れ文宗の妃仁睿太后なり、仁睿・順宣獻三宗を誕するを以て相繼で即位す、仁宗の妃睿太后此寺を重創し以て願刹となし亦懿明神三宗を誕す、是に知る此寺惟形勢の貴ぶべきのみに非ず乾坤精を儲け山水秀を孕み祥を發し慶を毓し以て金枝を衍す厥の赫々彰々たる明かなり況んや今國舅驪興府院君閔公先世の墳塋皆此の寺の後崗にあり、是れ淑徳を生じ以て至尊に配し元良を誕育し棣萼相輝き國本彌固く洪祚益永し即ち其儲精發慶以て金枝玉葉の茂を衍し以て宗社萬歳の業を隆にする實に今日より尤も明甚となす、貧道幸ひに寓居を是に得其棟宇歳久ふして頽撓するを普く尊卑に告げ工を請ふて重ねて新にす上は以て君を壽して而して國を福し下は以て利を廣くして生を導く瘡源の長國祚の永亦當に此の江の水流と與に窮りなかるべし。

今や廢寺となりて久しく空しく江岸に接して石壇・石窟を遺するのみ、

甘露寺

鄭以吾

窓扉歷々倒江流 江上招提境轉幽 砌下潮生風滿座 軒前雲盡水明樓  
聳空高塔臨蛟室 搖月疎鐘落釣舟 幸是官閒偏適意 出城三月飽清遊

錢浦里的傳說

唐の肅宗皇帝潛邸の時(或は曰ふ宣宗皇帝と)遍く山川に遊ばんと欲し玄宗帝の天寶十二載癸巳の春を以て海を涉り沮江の西浦に至れば方に退潮に當り江渚泥淖なり、從官舟中の錢を取りて之を布き乃ち岸に登ることを得た、後其浦を名けて錢浦と云ふ。嶺南面古蹟 靈通寺參照

按ずるに此地江中に暗礁五六ありて退潮の時は現はれ滿潮の時は没す其狀錢を散布するに似たり、其傳說恐くは此の現象より出しにあらずやと思はる。

〔後西江〕 江里後江は往時七浦の要衝に當り西南方面の貨穀は皆是に集注し開城府の資源となつたので麗朝の末葉頃は府城の午正門からは是の江港迄民家相接續し繁昌を極めたと云ふ、今大半埋まりて水田と化す。

後 西 江

韓

漢

千頃澄波一鑑光 曲欄斜倚賦滄浪、蒹葭兩岸西風急、無數飛帆亂夕陽

〔烽山腹の寺址〕 石崇山の西、烽山の中腹、白鶴洞より廣岩洞に至る山路に當りて廢寺の跡あり石壇の遺蹟及井址を残せごも何の寺跡なるや明かならず。

〔呂僊墓〕 高麗呂僊の墓開城里豐流洞にあり。

〔孝子姜千年碑〕 碧瀾渡部落の入口井側にあり。

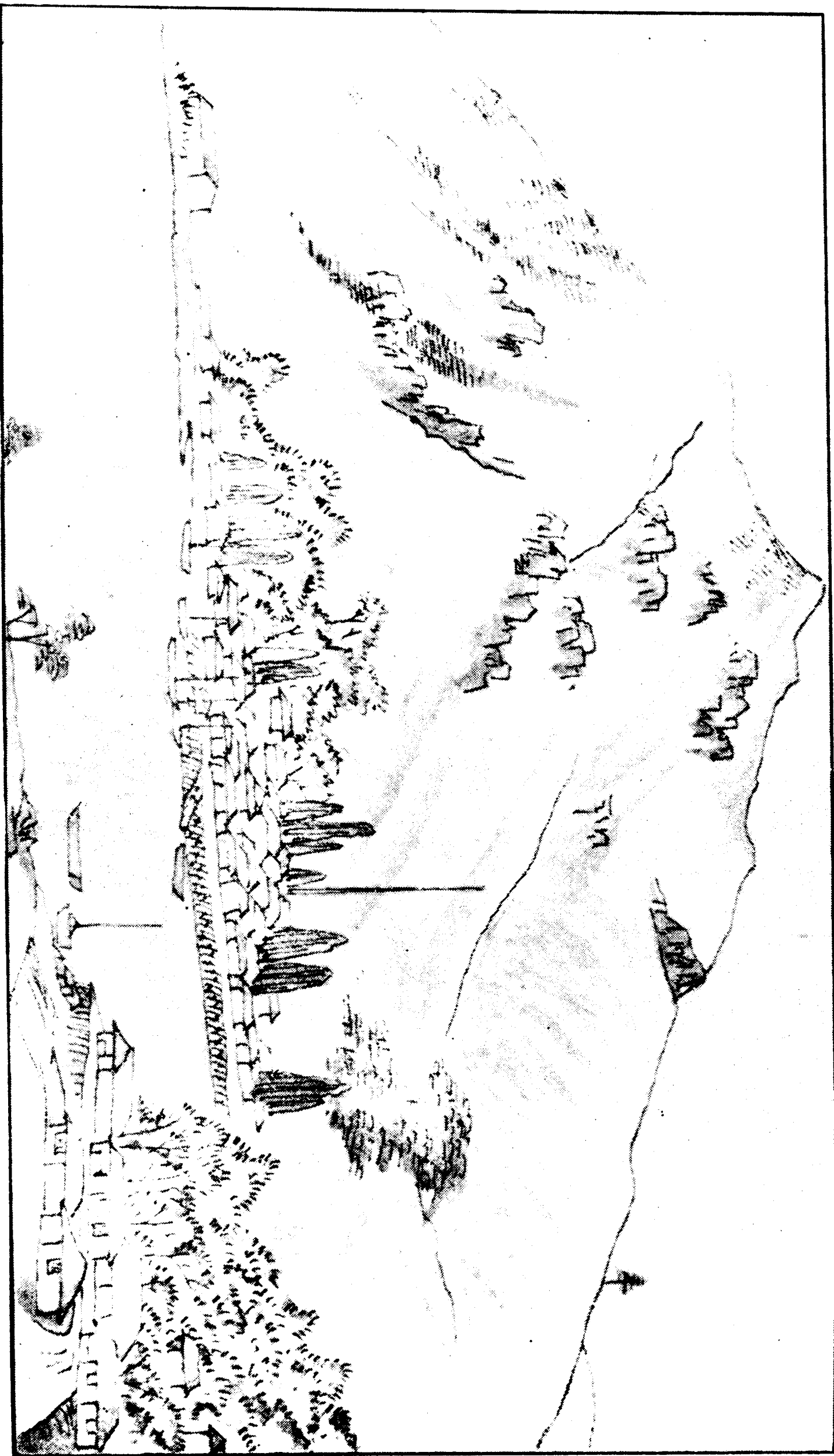
千年の家は碧瀾渡里にあつたが或る時母病んで劇しくなつたので指を斷つて血を進めた爲に其病が愈つた、其後其病が亦起つたので亦前の如くして病が永く愈つた。曾て上京中に母の病を聞いて倒巔して下つたが途中で大虎に遇ふた、そこで其情狀を虎に話して曰ふ母に遇ふて病を見てから我を食へと虎が叩頭して去つた、家に還つて母を見舞ふた後約束の如く門を出て虎に遇つたが虎又叩頭して去つた、母病むとき西瓜を食ひたいと曰ふたが其時は未だ西瓜の熟する時でないから百方探したけれ共無い、上京して之を求めた處が或る處に小兒の拳の位な小さな西瓜があつたので外にまだ大きいのがあらふ

かと思ひ他の店を探したが無い、依て元の店に来て見たれば其小瓜が一日の内に大さ斗ますくらいになつた、其主が之を不思議に思つて價を取らないで之を與へた、母が死んで廬に籠つて居る時鳥がありて來りて墓樹に棲み哭する毎に翼を舒して哀號と呼んだ、奠し訖つて父を省する爲に還つた。或る年家内から火が出て焼けたが惟孝子の位配ばかり階上に超り出た、人々之を奇とし事聞して旌閭された。

**渡 場**

〔碧瀾渡〕 本面より黃海道延白郡に渡る渡場なり今蓮山里に屬す、戸數三十對岸に彌羅山ありて渡場の後岡と相對し幅員二百四十間禮成江兩岸の江幅最も相逼つた石峽で満潮時三十二尺干潮時十二尺落差二十尺に及び水勢急速激湍矢の如く最も險惡で宛も支那の巫峽の如しと稱せられて居る。

宋史に曰、急水門より三日にして岸に抵る館あり碧瀾渡亭と云ふ此より登陸し崎嶇四十里にして乃ち其國都に至ると。



渡

瀾

碧

高麗圖經は曰ふ碧瀾亭は禮成江にあり次は王城を距ること三十里神舟岸に至れば兵衛金鼓迎導す詔書亭に入る亭は二位あり西を右碧瀾亭と云ひ以て詔書を奉す東を左碧瀾亭と曰ひ以て使副を待す兩序室あり二節を處いて人往來す各一宿して去る東西道あり王城の路に通ず、左右の居民十數家蓋し使節既に城に入り衆舟皆港中に泊し舟人分番して以て之を守視するのみと。

昔は岸上に息波亭あり今崗腹に其址ありて瓦礫等を散す亭の記略に曰  
松都の西北衆壑の水會して長江となり流れて海に入る其渡處を碧瀾と云ふ國に近き故涉者衆く山に近き故流駛く海に近き故潮悍なり涉者皆甚た病む國家爲めに官を置いて之を掌る、濱江の崖下に舊草樓あり渡を掌る者の寓する所なり、江は海天に接し山は野隴に横はり紆餘縹漫極目際りなし形勢の勝最と云ふべし、然れども其爭渡の地にして遊觀の處にあらざるを以ての故に往來する者皆茫々焉として唯利涉を是れ急となし未だ登覽して寓目に暇あらざるなり、壬午の秋鐵城李公鉞を杖つき來つて右道に觀察たり節を此に弭め顧瞻



沓曉す乃ち崖上を陟り其宜しき攸を相し榛棘を芟り砂土を剗り乃ち新亭を構へ扁するに息波を以てす蓋し勝を壓して以て涉を病む者に利する也。

碧 瀾 渡

祈

順

急水門邊島嶼青 碧瀾亭下野烟橫 不知宋使經遊慣 來往明州幾日程

〔錢浦里渡場〕 舊錢浦里内洞にあり黃海道白川に至る古道に當りしも延白郡にては新道を開きて南方の對岸白馬山下に延し直ちに船にて穀類を仁川に回送するに至れるにより舊渡場は頓に閑散となり旅客貨物少なく部落の凋衰を來したので不得已新渡場を南方錢浦川の河口に開き對岸との連絡を取るに至り後方一嶺を隔て、廣岩洞と通路を開きつゝあり。

按するに此の地前に記せる如く錢浦の傳説の殘れるを見れば往昔は内洞邊に船着場ありて古道は廣岩洞・豐流洞・大井洞・土城を連絡せしと思はる。

交通

〔二等道路〕 中西面土城里より來り光井里新岱を経て南折し蓮山里梅着洞、

弘京洞を経て碧瀾渡に至り江を越えて黃海道延白郡に入る自動車を通す。

〔里道〕 土城より豐流洞に入り中西面馬踏洞に至る者あり、豐流洞より頭三洞・廣岩洞を経て錢浦の渡場に出る者あり、廣岩洞より分れて錢浦里内洞に至る者あり、新岱洞より良佐洞を経て光井里に至る者あり、土城より來り深橋石井・後西江(高麗時代の古道か)を経て蓮山里弘京洞に至り碧瀾街道に出る者あり。

西 面 終

## 第七章 南 面

**位置境界** 郡の西南端に位し東經百二十六度二十七分北緯三十七度五十六分  
にあり、北は西面中西面に界し東は青郊面に接し南は光徳面に連り西より南は  
禮成江及西海に瀕す。

**廣 袤** 東西一里三十三町南北一里二十五町面積一方里三七〇郡廳を距る  
四里十八町。

**戸 數** 内地人二朝鮮人一千四百十五計一千四百十七。

**人 口** 内地人男五女五計十、朝鮮人男三千六百四十四女三千六百九十八  
計七千三百四十二、通計七千三百五十二。

### 區 劃

面内を九里に區劃し面事務所を新里新村に置く。

栗鷹里(間洞・内洞・浦洞・栗洞・砧橋洞)

候石里(陵下洞・間洞・盤山洞・海浪洞・培美洞・良五池)

昌陵里(禮成港洞・龍田洞・後井洞・弓洞)

新 里(東湖洞・新村・返浦洞・大衣洞・小衣洞・南神峯)

軍隱里(新塘洞・金店洞・軍隱洞)

獐山里(獐山洞)

玉山里(玉山洞)

照濟里(上坪村・中坪村・下坪村・碑木洞・鳳巢洞・臺鳳洞・黔岩洞)

修隅里(上殿座洞・下殿座洞・上陵城洞・下陵城洞・陵城洞・多大洞・高山洞・寒泉洞)

### 沿革

本面の沿革は略前章西面と其經路を同ふし本面區分の際南面十一里を置いたが後分ちて上南面六里下南面五里となし大正三年四月更に廢合して南面と稱し栗洞里と十鷹里とを合して栗鷹里となし禮成江里を昌陵里に併せ候石里・軍隱里・新里・獐山里・玉山里・照濟里・修隅里の九里とした。

### 地勢

東部及南部は山嶺相連りて中西面・青郊面・光德面界に蟠り其支

脈は西南に降りて面の中央各所に起伏し平野其間を縫ひて斷續し錦上川に沿ふて照濟里・玉山里・獐山里・軍隱里・昌陵里に亘る一帯の水田を開き南部は應浦より海岸に連りて栗鷹里・候石里の水田を拓く。

### 山峰

〔魚亞山〕 其脈東の方中西面界より來り突起して五百七十一尺の高峯となり

獐山里の東に蟠る、頂上に城壘の址あり。

〔鷹峯〕 栗鷹里の北趙陵洞にあり、往時國王狩獵放鷹の所と稱す。

〔南新峯〕 新里南新洞にあり。

〔國使峯〕 候石里培美洞の西に斗出し禮成江に臨んだ八十九尺の高丘である麗代國使を宋に派遣した時、昌陵浦から出帆する使船を國王が茲に登りて送りし所と稱す。

〔臺鳳山〕 照濟里臺鳳洞にあり。

### 河湖

〔禮成江〕 西面より本面軍隱里に入り昌陵里永安城の西麓を洗つて鬱流し禮成港口に至る、面内の沿岸一里餘獨流萍々として満潮時の江幅十町餘に及ぶ。

中京誌曰ふ黃海道江陰縣助邑浦の下流府西に至つて梨浦となり又錢浦となり又碧瀾渡となり又禮成江となり南して海に入る、高麗の宋に朝する皆船を此に發す故に禮成と云ふ。

○宋使明州より海に泛ぶ便風を得れば三日にして洋に入り又五日にして墨山に抵り其境に入る、墨山より島嶼を過れば礁石の間を詰曲し舟行甚駛し七日にして禮成江に入る、江は兩山の間にあり束するに石峽を以てし湍激して下の所謂急水門最も險惡となすと、又明一統志に急水門は開城南海の中にあり宛も巫峽の如しと。

○高麗仁宗の時全州の人李寧晝を以て名を知らる樞密使李資德に随つて宋に入る、徽宗寧に勅して本國禮成江の圖を畫かしむ、既にして進む徽宗其妙手を嗟賞す。

禮 成 江

李

穀

河海東流想禹功 南橋北楫遠相通 何人睡足連江雨 有客愁深盡日風  
一葉簸掀冥晦裏 群山出沒有无中 敢希魯國乘桴叟 擬向磻溪問釣翁

〔留川〕 即ち錦上川の別名で中西面より來り西流して西面の境に至り西南に向ひて海に入る河口を東方浦と云ふ面内の流程約二里、水源より茲に至る五里半あり最も灌漑の利を與ふ。

〔葛川〕 修隅里寒泉洞より發し西流して新里衣洞に至り西北に轉流し獐山里に至りて西湖川(留川)に入る。

〔應浦〕 栗鷹里より來り光德面との境を西南に流れて海に入る。

〔汗浦〕 昌陵里の北にある河湖で周回約二十五町其口禮成江に連る鹽浦である。

〔良五池〕 小池五個あり故に名く。

土 地



〔國有地〕 なし。

〔民有地〕 田一千二百七十六町九反、畑九百八十五町四反、宅地五十三町、  
雜地八町七反。

〔林野〕 一千七百二十五町。

產物

農產物を重なる者とし米類六千七百九十九石、麥類二千六百五十三石、豆類一  
千二百三十八石、粟二千〇六十二石、棉四百七十七貫、煙草一千百十五貫、馬  
鈴薯三千七百四十七貫、蘿蔔四萬一千二百三十貫、白菜一萬四千四百四十貫、  
甜瓜四千九百三十貫。

部落

禮成江里 百八十三戸漁港である。

軍隠里軍隠洞

四十戸

玉山里寺洞

百〇五戸

候石里盤山洞

四十五戸

獐山里獐山洞

八十戸

昌陵里後井洞

六十戸

照濟里臺鳳洞

六十戸

照濟里鳳巢洞

三十戸

栗鷹里内洞

三十戸

栗鷹里浦洞

三十六戸

同 栗洞

六十戸

新里大衣洞

四十戸

新里東浦洞

四十戸

同 返浦洞

五十戸

教會堂

〔昌陵里講義所〕 昌陵里にあり大正十二年一月設立。

〔海浪禮拜堂〕 候石里海浪洞にあり明治四十一年九月設立。

〔新里禮拜洞〕 新里大衣洞にあり大正十一年三月設立。

〔栗洞禮拜洞〕 栗鷹里栗洞にあり大正十年六月設立。

古跡

〔永安城址〕 昌陵里禮成江岸にありて江中に斗出した土城である周回約四千  
尺即ち高麗昌陵のある所城は土石混淆である、西北の禮成江に沿ひたる地は高

くして一の内城をなし數壇の高臺狀をなす、壘は高き所三十尺北方の森の中に陵あり高麗世祖昌陵の碑を立つ石欄護石等なし東方の城内は圃となり圃中より古瓦片及高麗陶器の破片を出す城内には二三の人家あり。

勝覽曰ふ開城縣西江上に土城あり名けて永安と曰ふ、世系に康忠永安村の女を聚りて妻となす康忠の孫作帝建將に西の方唐に入らんとして海中に至り龍女を娶り還りて昌陵の窟前の江岸に至る、白州の正朝劉相稀等曰く作帝建西海の龍女を娶る乃ち大慶なりと開・貞・鹽・白の四州江華・江陰・恭桐・三縣の人を率ゐて爲に永安城を築き宮室を營む、後松岳に移り永安城に往來し居る者二十餘年龍女世祖を生む世祖曾て夢に一美婦と約して室家となす後永安城に往き一女の甚た肖たるに遇ひ遂に與に婚をなし夢夫人と稱す即ち太祖の妣威肅王后なりと。

按するに姓なる者は新羅時代に貴族等が支那を眞似て作りし外往古にはなき者なれば王と曰ふは姓にあらざるべく單に麗祖は王建と云ふ名なりしならん



永 安 城

との説あり、編年通録の其祖先と稱する虎景とか康忠とか寶育とか作帝建とか皆王の姓がなく後になりて王の字は好き字なれば王建の王をば姓でありし如く引離した者であらふ、或は若し始めより王氏の姓があつたとすれば支那人の後裔たりしならんかとも思はる、何となれば漢江禮成江は古より其水路を利用し其沿岸に於て支那との通商貿易行はれしなるべく従つて支那人の往來せし者がないと言はれないからである、されば高麗太祖の祖先が曾て支那に往來して通商を業とした者で一朝錢浦邊から上陸し冬比忽の土城に來住して年處を経漸次勢力を得て懿祖作帝建に至り交通に便なる昌陵浦（今の禮成江港）を其商船の出入港となし根據を永安城に移し固め遂に太祖に至りて大に勃興したりと想像することが出来る。

又後漢に王景と曰ふ人がありて朝鮮樂浪の山中に住み後に出て、黃河の治水に成功した偉人があるから或は其人の後裔なることを仄かして王姓を名乗つたのではあるまいかとも想像せらるゝのである。

○高麗史樂誌に禮成江曲あり、初め唐商の賀頭綱と云ふ者碁を善くす嘗て江上に至り一美婦を視て之を得んと欲し其夫と與に賭し伴つて負け輸物を倍して其夫を利せしむ、既にして其夫注するに妻を以てす是に於て頭綱一舉して之を賭し得船に載せて去る其夫悔いて此の歌を作る。世傳ふ婦人去る時粧束甚だ固し頭綱之を亂さんと欲するも得ず舟海中に至り盤旋して行かず之をトすれば曰節婦の感する所其婦を還さずんば舟必ず敗れんと舟人懼れ頭綱に勸めて之を還さしむ婦人亦歌を作る後篇是れなりと。

〔魚亞山上の城壘址〕 周回數千尺南方は石壘にして其他は土壘である形略三角形をなして山頂を繞り今は大半崩壞して形迹のみを残す丙子の役に保民の爲に造りし者と傳ふ。

〔金店洞〕 軍隱里にあり麗代金山のあつた所で其後丘は採金の時の土を堆積した遺跡であると傳ふ。

〔寺洞〕 麗代の寺址なるを以て名く、又獐山里にも寺址あり佛像の頭部のみ

残ると云ふ。

〔具鴻墓〕 高麗具鴻之墓栗鷹里栗洞にあり。

〔靈源君櫨之墓〕 大衣洞にあり有明朝鮮國靈源君贈諡公諱櫨之墓、郡夫人陽州許氏附左、郡夫人同福吳氏附右と刻せる碑あり。

〔十鷹洞〕 往時内洞・間洞・蒲洞を合して十鷹里と稱す、高麗の恭愍王狩獵して十鷹を放ち白雉一尾を得たる所と傳ふ。

都て此の地方・殿座洞・殿座峯・鷹峯など稱せる所多し國王の狩獵場たりしが如し。

# 交通

〔等外道路〕 中西面土城驛の西端より二等道路に分れ照濟里の西端に入り玉山里・獐山里・新里・軍隱里・昌陵里・候石里を過ぎて光德面に入り、支路は候石里より分れて栗鷹里・新里の東部修隅里を過ぎて青郊面に入る。其他里道は各里各洞の間に通ず。



渡場

〔禮成江渡場〕 延白郡海月面龍鳳里桐月洞に越ゆる渡場。

〔良五池渡場〕 延白郡海岸に越ゆ。

(注意) 前輯山峯の部に負兒峯を麗朝顯宗の九年戊午十二月契丹大舉入寇の時太祖の梓宮を負兒峯香林寺に移奉したとあるは今の京城三角山負兒峰の誤りにつき此の項を削除す

又王陵の所在地は大略に停む

南 面 終

大正十五年十二月十五日印刷  
大正十五年十二月二十日發行

定價 金一圓五錢

開城圖書館内

編輯者 川口 卯橘

郷校財産管理者

發行者 山崎 駿二

京城旭町二丁目

印刷人 天野 キヨ

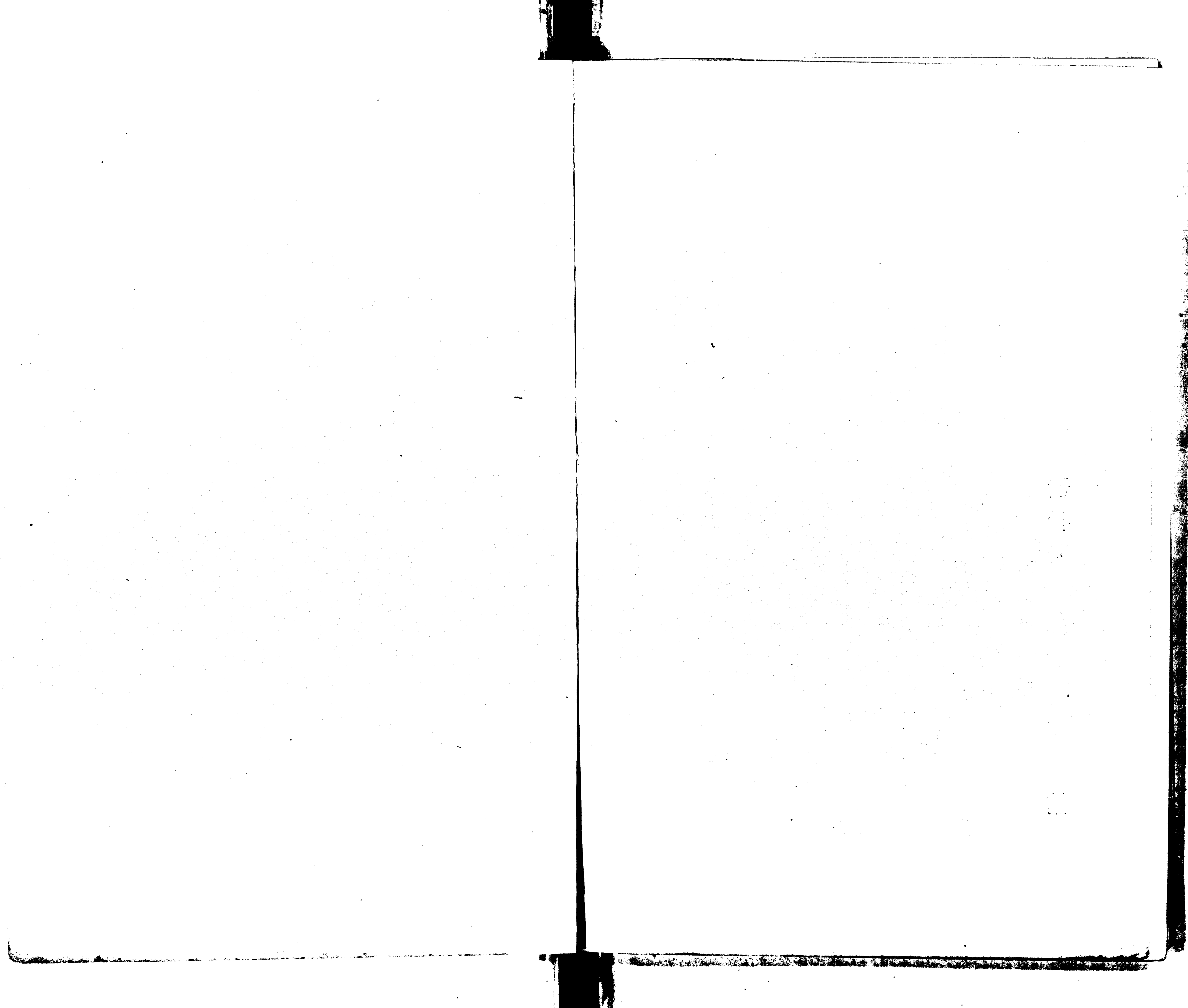
京城旭町二丁目

印刷所 京城印刷所

京畿道開城郡

發行所 開城圖書館







288-6-4

# 開城郡面誌

第四輯

光徳面、大聖面、興教面、臨漢面、中面

日韓・友邦

288

6

4

協 会

4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8



開城郡面誌 第四輯

光德面・大聖面・興教面・臨漢面・中面

292,104  
93

## 凡 例

一、本書は重に東國輿地勝覽・中京誌等に據りたるも同書は年代を經過するこ  
と多く、史蹟名勝にして既に失はれたもの、地形の變遷して空名となつたも  
の尠くないので、今其實跡を踏査し、猶形迹がありて名を存する者は往時の  
狀況を記述し、全く失はれたものは之を去り、又新たに發見した者は之を追  
記し瞋めて世の史家、探勝家の參考に供することにした。

一、書中記する處は現時の地理、往昔の史實より、神話傳説に至るまで可成廣  
汎に亘りて、網羅し中には奇怪な口碑でも、凡そ説話の存する者は皆收めた  
積りである、是等は後世古傳を失はんことを恐れ敢て取捨をしない。

二、参考した書目は勝覽・中京誌の外高麗圖經・高麗古都徴・關野博士の朝鮮  
美術史・幣原博士の朝鮮史話・金石綜覽・朝鮮年表・高麗史・新高麗史・入關前  
の清朝・朝鮮一般史・開城王氏族譜・聖源錄・編年通錄・朝鮮佛教通史・今

西博士報告・松田甲氏の朝鮮雜話・松都記異・總督府五萬分圖・二萬五千分圖・一萬分圖などであるが、一々其都度書名を掲記しない。

一、實地踏査は數回に亘り、或は大雨を犯して山城山を攀ち、或は炎熱を忍んで江岸地方を探索し、或は帝釋山の絶頂を極め、或は金郊川の漲水に溺れんとしたなど、相當の苦辛を経て調べたから、間違はない積りである、然し踏査の漏れた處、判斷の違つた點もあらうから、直接編者に注意を賜はらば再梓の時に研究の上訂正しようと思ふ。

一、壬辰役とは日本史の文祿の役で、丙子の役とは清國の朝鮮侵掠である。

一、表紙の瓦紋は満月臺の遺瓦である。

昭和二年二月 日

編者識

## 開城郡面誌 第四輯

### 目次

#### 第八章 光徳面

位置境界	一
廣袤	一
戸數・人口・區劃	一
沿革・地勢	二
山峰	二
峴嶺・河川	四
土地・産物・部落・教會堂	五
學校・古蹟	六
交通	一一

第九章 大聖面

位置境界・廣袤・戶數	一三
人口・區劃	一三
沿革・地勢	一三
山 峰	一四
峴嶺・河川・土地・產物	一六
部落・教會堂	一七
學校・古蹟	一八
交通・渡場	二三

第十章 興教面

位置境界・廣袤・戶數・人口・區劃	二五
沿革・地勢・山峰	二六
峴嶺・河川・池沼	二六

土地・產物・部落	二七
社 寺	二九
教會堂・學校・古蹟	三〇
交 通	三四

第十一章 臨漢面

位置境界・廣袤	三六
戶數・人口・區劃	三六
沿革・地勢・山峰	三七
峴嶺・河川	三九
土地・產物・部落	三九
教會堂・學校・古蹟	四〇
渡 場	四三
交 通	四五



第十二章 中 面

位置境界・廣袤・戶數・人口・區劃……………四六

沿革……………四七

地勢・山峰……………四八

峴嶺・河川……………四九

土地・產物……………五一

部落・教會・古蹟……………五一

交通……………五五

目次終



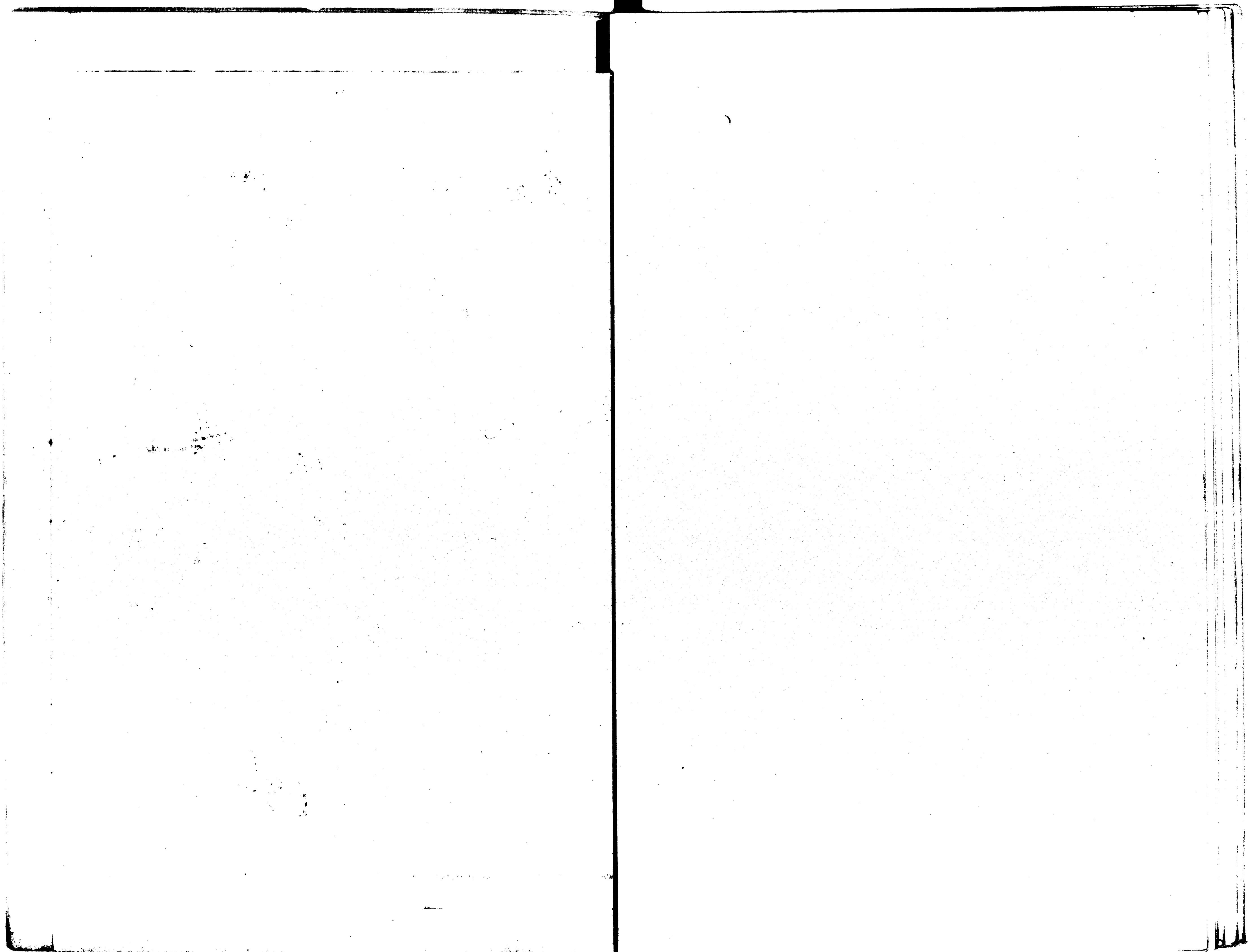
大聖面彌勒佛



同彌勒佛の前供物臺



白馬山遠望

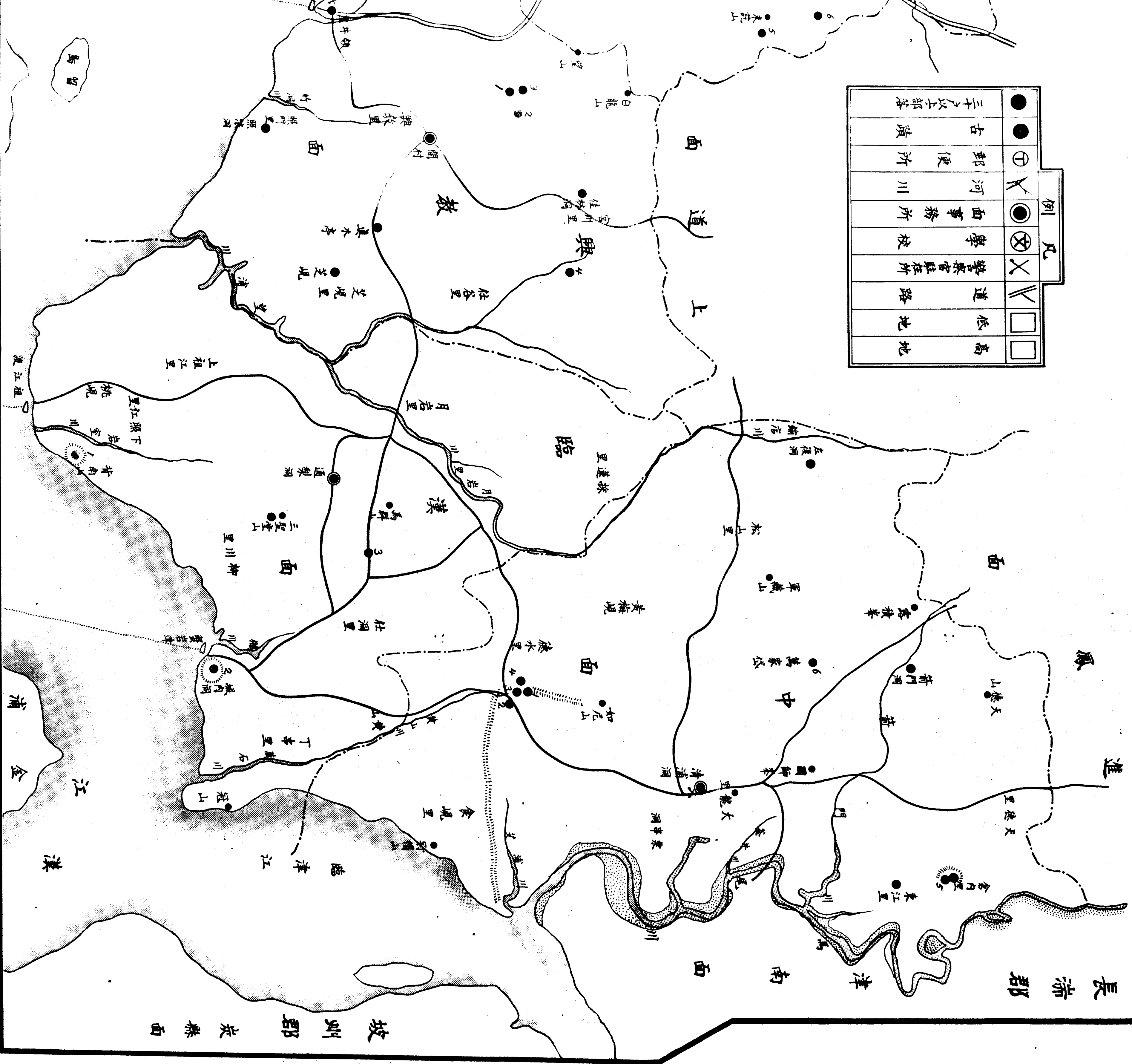




長湍郡 古蹟分佈圖

開城郡面誌第四冊附圖

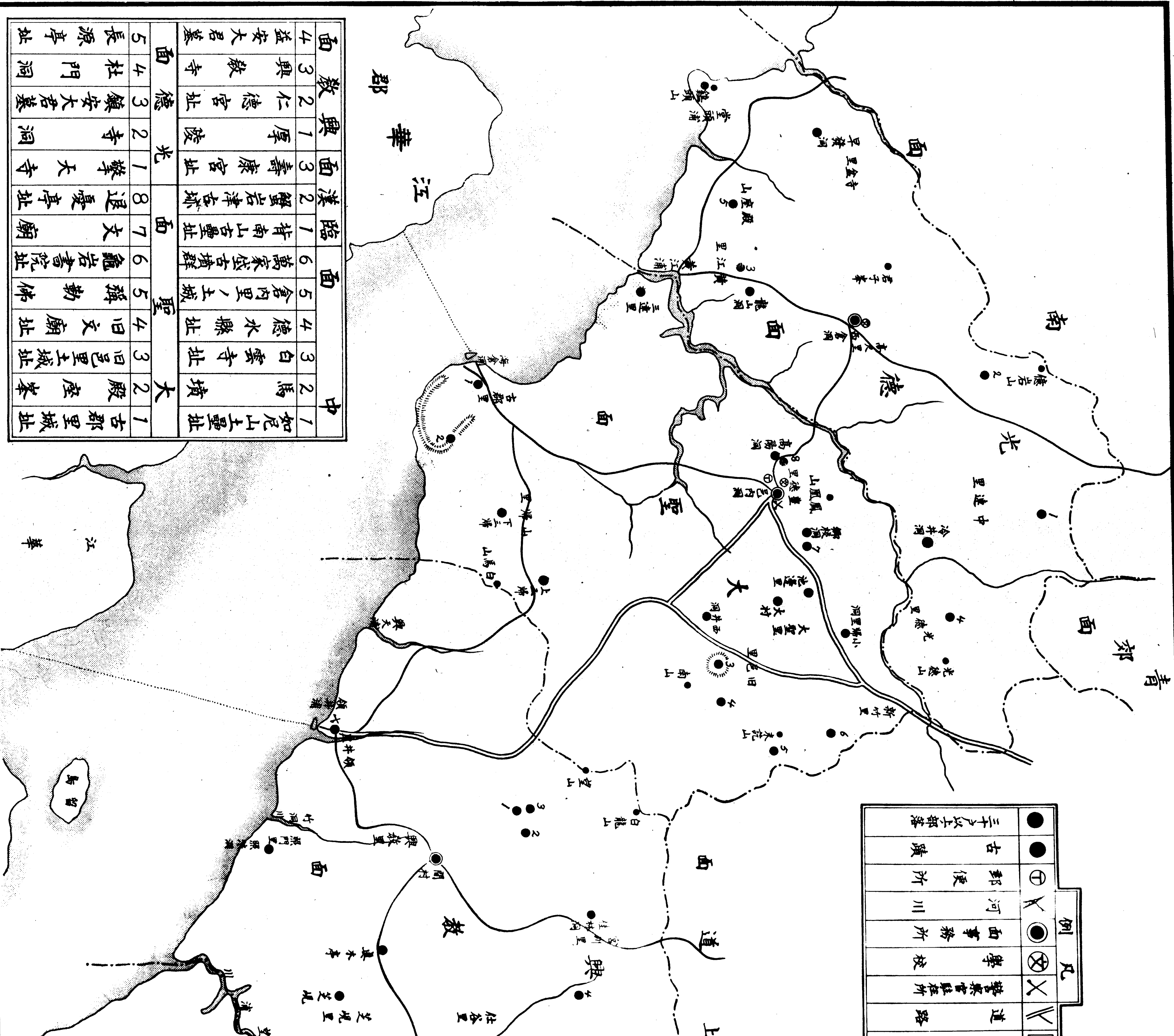
例		凡
●	●	三千以上部落
①	●	古蹟
⌘	●	郵便所
⊗	●	河川
×	●	面事務所
⌘	⊗	學校
⌘	×	警察官駐在所
⌘	⌘	道
□	□	低地
□	□	高地



# 古蹟分佈圖

青 郡 面 誌 第 四 輯 附 圖

例	凡
●	三千以上部落
●	古蹟
①	郵便所
⌘	河川
●	面事務所
⊗	學校
×	警察官駐在所
〰	道路



中		面		臨		漢		興		教		面	
1	古郡里城址	2	馬	3	白雲寺址	4	德水縣址	5	倉内里ノ土城	6	萬家岱古墳群	1	背南山古壘址
2	殿座峯	3	旧邑里土城址	4	旧文廟址	5	彈勒佛	6	龜岩書院址	7	文廟	8	退憂亭址
1	如尼山土壘址	2	墳	3	壽康宮址	1	厚陵	2	仁德宮址	3	興教寺	4	益安大君墓
2	殿座峯	3	旧邑里土城址	4	旧文廟址	5	彈勒佛	6	龜岩書院址	7	文廟	8	退憂亭址
3	旧邑里土城址	4	旧文廟址	5	彈勒佛	6	龜岩書院址	7	文廟	8	退憂亭址	9	長源亭址

# 開城郡面誌 第四輯

## 第八章 光德面

**位置境界** 郡の西南海邊に瀕し、北は南面・青郊面に接し、東隅は上道面に連り、南は黃江川を以て斜めに大聖面に境す。

**廣袤** 東西一里二十町南北一里六町西南より東北に斜めに延長すること三里二十八町に及び面積一方里九八四、那廳への距離四里十八町あり。

**戸數** 朝鮮人六百三十四内地人なし。

**人口** 朝鮮人男千八百〇五女千七百三十四計三千五百三十九。

**區劃** 高尺里（寺洞、黃井洞、間洞、西倉洞）寺盆里（栗木洞、堂頭浦灘洞、間洞、朝發洞、長秋洞）黃江里（梅溪洞、看山洞、德峴洞、龍山洞、遠井洞、柳井洞、黃江浦）中連里（塔谷洞、除役洞、國土洞、鼠目洞、鳥田洞、新垓洞、黃水洞、汙蒸洞、大村洞、中連洞、冷井洞、舟村洞）光德里（東嶺洞

古今洞、松隅洞、間洞、龍門洞、馬迹洞）面事務所は高尺里西倉洞にあり。

### 沿革

本面は舊一部光徳里は豊徳郡に屬し其他の部分は開城縣の管轄であつたが開城縣廢せらるゝに及び全部豊徳郡に入り李太王の三十二年豊徳郡を開城府に合するに及び更に其所管となり大正三年四月面廢合の際元豊徳郡郡中面光徳里の一部と郡北面大陵里の一部を本面に編入し大正四年六月面内の洞里名稱並に區域を改正の結果、本面寺盆里の一部は南面栗鷹里に編入し青郊面墨松里の一部は本面中連里に編入せらる。

### 地勢

一帯の連山南面の境に連亘し一支北より分岐して中連里に蟠り、南の一支は高尺里寺盆里の間を南下して黃江里に連亘し殿座山となる、東方は光徳山の連嶺特立し青郊面・上道面の境に起伏す。

平野は光徳里・高尺里・寺盆里・黃江里より黃江川を挾んで遠く大聖面に連り廣大なる水田郷を開く。

### 山峰

〔御屏山〕（又御兵山）寺盆里にあり高三百八十六尺頂上に道路の形迹あり恭愍王狩獵の時往來の路と傳ふ。

〔殿座山〕黃江里にあり高二百五十尺田畑の間に特立した獨峯で恭愍王狩獵の時常に座所となりたる故かく名くといふ、頂上に一連の土壘ありて塹濠を形成す何の遺蹟なるかを詳にせず恐くは南面に於ける魚亞山の壘と同時代に造れる者であらふ。

〔八縣山〕龍山洞にありて殿座山に連る江華・喬桐・延白・通津・開城・長湍・坡州・豊徳の八縣の山峰を望むことを得るので名けたと云ふ。

〔光徳山〕又廣徳山、光徳里にあり高四百八十一尺。

〔億岩山〕中連里にあり高三百八十九尺。

〔扶蘇山〕中連里にあり億岩山の南に連る其南麓に擎天寺趾あり。

〔鷄頭山〕寺盆里堂頭浦の西に聳ち其形鷄頭に似た石があるを以て名く海中に突出して半嶋をなす高五十九尺餘往時朱雀神堂ありたれば俗堂頭山と稱した



といふ烽燧址あり北は首嶋山に應じ西は黃海道延白郡夫毛里に應じた。

〔君子峯〕 高尺里西倉洞にあり。

峴嶺

〔碁局峴〕 高尺里にあり碁局に似た石があるので名けた。

〔徳 峴〕 黃江里徳峴洞にあり。

〔酸梨峴〕 中連里の南面の界にあり。

〔首陽峴〕 高尺里にあり。

河川

〔錦城川〕 上道面楓川里から來り西流して本面光徳里に至り北より來る冷井洞川を合せ大聖面の界をなして西流し護軍洞に至りてや、西南に轉じ大聖面及本面の諸水を併せ黃江浦に至りて海に入る全流程約三里二十六町、兩面の灌漑多く此の川の利に據る又漢橋川ともいふ。

〔冷井洞川〕 源を青郊面墨松里玉輦洞に發し南流して南面高山洞を過ぎ冷井

洞に至り漢橋川に合して錦城川となる。

〔鷹浦川〕 寺盆里と南面との境を流る。

〔堂頭浦川〕 寺盆里灘洞に發し南流堂頭浦に至り海に入る。

〔堂頭浦〕 又唐頭浦と書す古來の漁港である。

土地

〔國有地〕 田十五町五反、畑三町四反。

〔民有地〕 田一千百八十三町七反、畑四百七十六町四反、宅地三十一町六反

雜地一町三反。

〔林 野〕 二百四十四町。

産物

〔農 産〕 米類七千〇七十二石、麥類一千四百六十四石、豆類四百二十二石、棉二千百三十斤、莞草四百六十八貫、煙草二百五十貫、甘藷五千二百七十貫、馬鈴薯七千九百四十七貫、蘿蔔二萬四千二百三十五貫、白菜一萬一千九百三十

貫甜瓜一萬五千百九十三貫、栗實二百七十貫。  
人蔘は其特産である。

部落 三十戸以上

寺盆里朝發洞

三十五戸。

黃江里龍山洞

四十三戸。

中連里冷井洞

三十二戸。

高尺里西倉洞

三十四戸。

教會堂

〔長秋洞禮拜堂〕

寺盆里にあり基督教南監理派明治三十六年三月設立。

〔黃江禮拜堂〕

黃江里にあり同上派明治三十九年七月設立。

〔舟村禮拜堂〕

中連里舟村にあり同上派大正十二年十月設立。

學校

〔私立光徳普通學校〕

高尺里西倉洞にあり生徒六十人教員三人一年の經費二

百五十圓。

古蹟

〔擎天寺趾〕

中連里塔洞扶蘇山にあり昔時寺に大理石十三層塔あり高麗忠穆

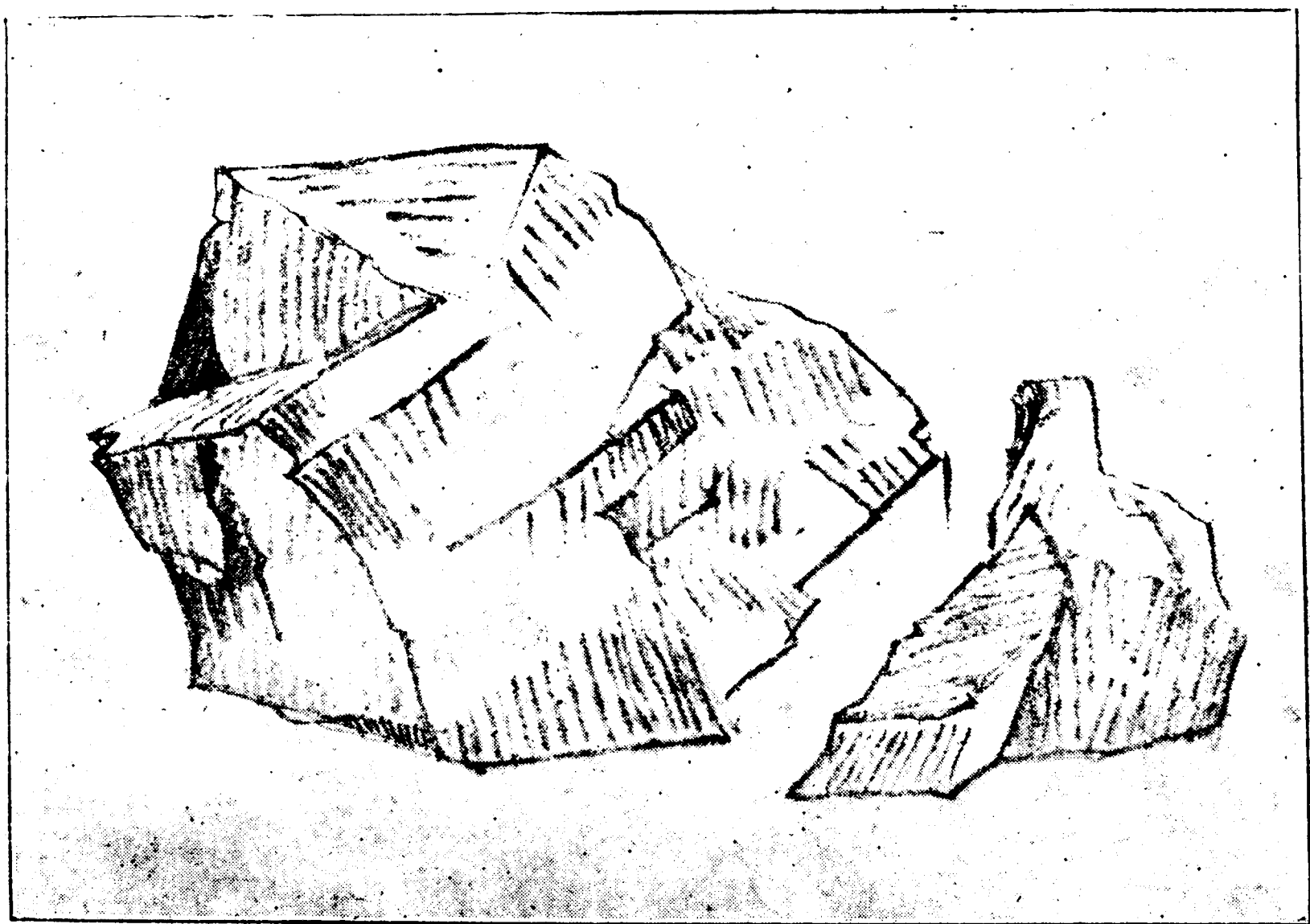
王四年(本朝紀元二〇〇八年)の建立で十二會相を刻し人物聳動形容森爽其製作の妙巧なること天下無双であつた、世に傳ふ元の脱々丞相願刹となし晉寧君姜融が元朝の名工劉榕をして江華島の石材を以て此の塔を造つた者であるが今は總督府博物館の有となる、塔の趾に彫刻を施せる壇基石殘る其他寺の礎石、遺井等ありて瓦片散布す。

朝鮮美術史曰ふ扶蘇山擎天寺なる大理石多層塔は先年内地に移されしが今は總督府博物館の所有に歸した此の塔の由來に就きては古來種々の説あれども刻銘によれば至正八年戊子三月、三重大匡晉寧府院君姜融等が元の皇帝皇后皇太子等の壽福を祝し併せて國家の安泰を祈らんが爲に立たものである、至正八年は忠穆王の四年に相當して居る、其様式を見るに元の特質を示し又喇嘛的手法を用ひたるなご到底當時の高麗人の手に成りし者とは思はれざれば恐くは元の工人により彼の國の石材を用ひて造られた者であるふ輿地勝覽に

諺傳元脫々永相以爲願刹晉寧君姜融募元朝工匠造此塔至今有脫々姜融畫像といへる者蓋し眞を傳へたのであろふ。

此の塔は四面斗出星形の平面を有せる三層の基壇の上に同平面の塔身三層を重ね更に其上に方形七層の塔身を起した者で俗に十三層塔と稱して居る此斗出星形の平面は喇嘛藝術の影響に歸すべき者である、此の塔は灰色の大理石材を以て築造せられ基壇の各面には精巧なる佛、菩薩、人物、草花、蟠龍等を陽刻し其上に立てる十層の塔身には柱・斗拱・高欄・屋蓋を作り出し十二會相を刻み佛菩薩・天部其他の圖像を隙間もなく彫りあらはし最も壯麗富瞻の氣象を發揮してゐる、概言すれば此塔は全部の權衡殆んど完美にして手法自在に奇趣横生し高麗時代の塔婆中最も變化に富み最も精練の技工を弄せし者にして啻に朝鮮に於て比肩すべき者稀なるのみならず、當時此種の建築としては其本國たる支那に於ても類例を發見することが出来ぬ云々

又寺の東崗に怪石を産し俗之を沈香石と云へること輿地勝覽に見ゆ。



光徳面 古蹟

### 沈 香 石

姜希顔が養花録に曰ふ怪石は松都の南に産出する者能く水を引いて頂に至る形模は一に水沈香の如し俗に之を沈香石と謂ふ眞に天下の絶寶也云々

按ずるに今東崗に淡緑に鐵滓色を混じた角石を多く産し能く水を吸上ぐ或は是れか。

〔呂裊吉之墓〕 擎天寺址の後方山腹にあり贈資憲大夫兵曹判書兼知義禁府事行嘉義大夫訓鍊院都正兼五衛都摠府副摠管呂公諱裊吉之墓、配贈貞夫人驪興閔氏祔と標す。

〔寺洞の寺趾〕 塔洞の西、寺洞に寺



址ありて石壇を残し瓦片を散亂す其山腹に土人等の高麗王陵と傳ふる墓あり石人一個を存するのみにて發掘せられ何物もなし、俗此の寺址は此の王陵の造泡寺なりしと稱す。

〔官洞〕 高尺里にあり高麗の時宮殿ありし所と稱するも何の宮址か詳にせず。

〔鎮安大君墓〕 黃江里龍山洞にあり李太祖の長子李芳雨の墓である、初め咸興より豊徳に移したが文獻は兵燹に失ひ子孫は衣食に奔走し數百年後全く其所在を失つたのを偶々洪水の爲に土崩れて短碣現はれ、鎮安大君妻三韓國夫人池氏の墓と題し旁らに大君墓附左の五字を刻しあり又石人一雙ありて槎枒たる偃松叢棘の中に在りて累々たる民塚が周圍を環れるを見、依て始めて大君の墓なるを知り正祖巡視の際十五世の孫李國柱が輦下に之を啓し其十三年己酉（本朝紀元二四四九年）新たに墳塋を起し碑を立て閣を豎つ碑の表面は朝鮮國鎮安大君墓、三韓國夫人池氏附右と記し陰記に御製御筆朝鮮國鎮安大君諡靖懿公墓碑

銘竝序を刻す。

〔杜門洞〕 光徳山の西麓にあり李朝太祖の臣にして太宗に服せざりし者等の隱遯せし所と傳ふ。

〔長源亭址〕 昔時殿座山麓徳峴にあつたが今は無い、勝覽曰ふ道説が松岳明堂記に曰ふ西江の邊に君子御馬明堂の地あり太祖統一丙申の歳より百二十年に至り此に就て創構すれば國業延長すと文宗大史令金宗元に命じて地を相して亭を西江餅岳（徳峴）の南に作り又瑞文石を亭下の淵中に得た高麗睿宗茲に遊び郭輿に和した詩がある。

別館逢人擬謫仙、上樓同望晚江船、吟搜好景勞詩筆、笑得歡情付醉筵、紅葉紅花當此日、綠葉芳草憶前年、只將親意忘時態、忍抱狂吟繼雅篇、薄暮江邊明蟹火、夕陽村外起人煙、溟濛海氣風驅去、月上秋霄照碧天。

〔西倉洞〕 昔昇天府の西倉のありし地であると云ふ。

### 交通



〔等外道路〕 高尺里西倉洞面事務所より南の方黄江里に至り寺盆里を経て南面候石里に至る者あり、又面事務所より北に行き高尺里中連里を経て南面修隅里に至る者あり、又面事務所より直ちに大聖面豊徳邑に至る者あり。

光徳面終

第九章 大聖面

**位置境界** 郡の南端に位し西北は光徳面に隣り東は上道面に接し東南は興教面に界し西南は海に瀕す。

**廣袤** 東西約一里三十五町南北約一里二十六町面積約二方里五七五あり郡廳を距る四里。

**戸數** 内地人三、朝鮮人八百九十四、計八百九十七。

**人口** 内地人男五、女五計十、朝鮮人男二千四百〇八、女二千三百六十三計四千七百七十一、通計四千七百八十一。

**區劃** 豊徳里（邑内洞、高陽洞、倉村洞、梅花亭）大聖里（郷校洞、池邊洞、勝河洞、大村）新竹里（栗洞、小歸里洞、新峴）舊邑里（加佐洞、大村南山村、西井洞）三達里（廣坪洞、内洞）古郡里（南昌洞、古郡洞、坪村、安禮洞、海倉洞）池内里（務安洞、長庚洞）山歸里（上山歸、月浦、下山歸）

**沿革** 此地本高句麗の貞州であつたが高麗顯宗の九年開城縣に屬し文宗

に至り開城府に直隸し睿宗三年改めて昇天府となり中宣王の二年知海豊郡事に降す、李朝に至り太宗十三年開城留後司に屬し十八年復して郡となす、世宗二十四年德水縣を併せて豊德郡と改む仁祖二十七年德水は仁宣王后の貫であるから陞せて豊德府となしたが純祖二十三年(本朝紀元二千四百八十三年)に至り本府の經費が凋殘支へ難きにより開城府に合屬し李太王三十二年郡となして郡主事を置いた(二十一年前)後建陽元年豊德郡を廢し光武十年面となり開城郡に入り大正三年四月里洞廢合の際元豊德郡郡中面と郡南面の一部を併合して大聖面と稱し大正十年十月に事務所を大聖里より今の處に移したのである。

舊德水縣は德北面、德中面、德南面に區劃せられ、舊豊德郡は郡東面、郡西面、郡南面、郡北面、郡中面に區劃せられた。

**地勢** 面の東境から南境は山嶺起伏して南海岸に及び北は東境の支脈西分して鳳凰山を突起するのみ其他は大率平野で一望の平田遠く光德面に連る。

### 山峰

〔鳳凰山〕 豊德邑の北に峙ち高二百六十尺林木茂る。

〔馬駝山〕 往時末訖山と云ふ舊邑里の北にあり彌勒寺址あり。

〔白馬山〕 山歸里の海岸にあり標高六百二十七尺急峻で登ること容易でない全山裸山で一木がない頂上に小祠ありて白馬大將軍を祀る古來女人の祈禱所たり其南方の下位に祭屋を造りあり麗代には此山を以て右扶蘇となし高宗の三十七年大將軍李世材・愼執平等を遣はして始めて宮闕を山南の臨海院の舊基に造らしめたことがある。頂上は北天摩山松岳を望み南は海を隔て、江華・金浦の諸山呼べば答へんとし西は禮成江口より遠く海邊を眺め東は領井浦を啣んで視界一帯峯巒波濤の如く天際に接し風景眞に雄大である。

〔南山〕 又菊峰と云ふ舊邑里の南にあり高四百二十九尺。

〔殿座峯〕 古郡里の海岸にあり高麗の高宗宮闕を茲に營み一時動座の處となせるが故に此の名あり(古蹟參照)

〔望山〕 舊邑里の東佳佐里の面界にあり興教面厚陵の後山である厚陵を望

むの意より名くと云ふ。

〔白龍山〕 池内里の東長庚洞の面界にあり。

峴嶺

〔新峴〕 新竹里より舊邑里に至る三等道路の峠。

河川

〔廣坪里川〕 三達里豊徳里の間を流る、其水黃江浦水に通ず麗代重方堤と稱し春秋毎に班主が府兵を率ゐて修築し南北の水門を開いて田に灌ぐ長八里廣三里と稱せられし者は是れなるべし今皆其跡水田となる。

土地

〔國有地〕 田八町、畑七町、宅地三町四反。

〔民有地〕 田千二百八十町二反、畑四百二十一町八反、宅地三十五町七反雜地一反。

〔林 野〕 千〇〇〇町。

産物

〔農産物〕 米類六千六百六十七石、麥類一千七百七十四石、豆類九百九十石、粟四百七十四石、棉千三百七十五斤、莞草二千三百七十貫、煙草二百七十四貫馬鈴薯三千六百貫、蘿蔔八萬〇四百貫、白菜六萬七千五百貫、甜瓜二萬七千七百五十貫。

米及人蔘を其特産とす。

部 落

三十戸以上

〔豊徳邑〕 面事務所の所在地で戸數三十五人口二百餘あり舊豊徳郡廳の後身である、鳳凰山を北に負ひて地勢西南に開け萬頃の水田を前に控へ郡南の水郷として形勢甚だ優越す、公立普通學校警察官駐在所郵便所等あり。

舊邑里、舊豊徳郡廳の在りし地で戸數四十人口二百四十諸種の頌徳碑鐵碑石碑等残る。

大聖里郷校洞 四十六戸。 大聖里池邊洞 四十戸。

大聖里大村

四十戸。

新竹里小歸道洞 三十五戸。

舊邑里西井洞

三十五戸。

山歸里上山歸 三十五戸。

山歸里下山歸

四十五戸。

三達里内洞 六十戸。

豐德里高陽洞

四十五戸。

教會堂

〔玉山禮拜堂〕

大聖里玉山洞にあり基督教南監理派明治四十三年四月設立。

〔山歸里講義所〕

山歸里上山歸にあり同上派大正十一年十二月設立。

〔三達里禮拜堂〕

三達里にあり同上派大正十三年十一月設立。

學校

〔豐德公立普通學校〕

豐德里邑内にあり明治四十五年四月の創立で職員六名

學級數六、修業年限六個年、生徒二百二十一名、一年の經常費八千四百圓。

古蹟

〔古郡里の城址〕

同里は本面の南端にありて海中に斗出し江華郡堂山里昇天

浦と相對するが此の地に殿座峯を最高として一連の山嶺舊海倉里より起り南昌里の南方を東方に走り更に一谿を挾んで東より南西に繞りて海岸に蟠亘し其項上を縫ひて土石混交の壘を繞らし口を西方海倉里に開く土人は此の溪谷を羊蕃谷と稱す今は田圃となりて人家は無い又此の古城址から更に一谿を南に隔て、南海岸に略三角形の土壘を回らした傾斜地を斗出し俗狗頭けあしと稱へて居る、而して此の谿は長方形の地形をなし今は水田となれるも土人は長安谷と稱し往時都を開きし所と謂へり、此の狗頭内は東邊に高く西邊に低く中央は三四段の臺地をなし西偏の平地は圃となり圃中より無數の瓦片を出す、此の圃の周圍も土壘をなして東邊の高地に連り古城址若くは館址の形をなしてゐる。

輿地勝覽に曰古貞州は昇天府の古址にして今昇天浦古城の北二里にあり世傳ふ古貞州の治と又古址あり西偏今淪して海に入ると。

按ずるに昇天浦の名は今對岸なる江華島堂山里の海岸に残つて居るから往時の渡船場なりしなるべく即ち古郡里は古の昇天府のありし所で後に海豊郡と



なつたから其沿革により古郡里の名を残したのであるふ、又海倉里は府時代海倉を置いた所で狗頭けえもりとの間は水田と化したれども往昔には昇天浦と號する海港ありて船舶の出入をなし（今も江華島に渡る渡船場あり）其浦頭なればけえもりと名けしならんか（浦頭、狗頭發音同じ）而して狗頭に殘る古跡は臨海宮の跡なるべく其高處にある遺跡は城隍堂址ならんか。

勝覽曰臨海宮は昇天浦の西岸にあり。

又曰城隍祠昇天浦城にあり。

〔殿座峯の遺跡〕 前記殿座峯の土城址に就き高麗史曰ふ高宗三十七年大將軍李世材、將軍愼執平等を遣はし始めて宮闕を昇天府臨海院の舊基に營むと蓋し蒙古侵入の時高宗は江華に避難して出でず流石の蒙兵も如何ともする能はず屢々王が海島に都して陸に出ざるを責めて已まないので新闕を昇天府に營み以て陸に出るの意を示したことがあるから其時の宮闕址と城壁なるべく土人は長安谷と稱して往時街衢の跡と稱せるものも夫れたるべし。

〔舊邑里の土城址〕 舊邑里にあり方形で周圍約二千尺四門蹟ありて古瓦片處々に散亂す土人は城内と稱す舊豐德倉の跡ならん又牧猪城と稱すれば後には牧豚に利用したる者の如し。

〔舊文廟址〕 土城址の北方山麓にあり舊豐德邑の文廟址で廢石壇あり又無數の瓦片を散布す。

〔彌勒佛〕 舊邑里の東方佳佐里の溪谷、場巖の北陰の溪頭に寺址あり壇石・礎石・古井等を存し傍らに廢菴あり大清光緒十五年八月上棟の旨を記せどもこは固より新造にかゝる、又摩滅破損した石佛體の如き者あり、此の寺跡の山上に彌勒佛の立像ありて高一丈六尺佛前に八角の龜形をなせる供物臺がありて彫刻手法頗る精巧である、或は是の寺址末訖山報法寺の跡ならん。

李穡記に曰、王城の南白馬山の北に大伽藍あり太祖の妣柳氏捨る所の家なり施す所の田民今に至りて存す中廢する者久し侍中漆原府院君尹公禪源・法蘊和尚と同盟重營す至正癸未に始まる（高麗忠穆王）工役將に訖らんとす、又謀

て曰大藏經なかるべからずと是に於て諸を江漸に取る戊子の歳なり、居る所の西堂を撤し以て經を庇ふ壬辰の歳なり、殿宇既に備はり梵唄の具日用の需一闕なし落成禮會を設く癸巳の歳なり、歳辛丑落成中會を設く、冬沙賊の蹂躪する所となり殿宇器皿經卷像設存する者蓋し鮮し、國家京城を克復するの後稍之を修葺し曹溪禪師を邀ひ行齋主席せしは甲辰の歳なり、云々

是を以て見れば其廢寺となりしは李朝の時に入りての如し

〔龜巖書院址〕 彌勒佛の北の谷にあり俗書院洞と稱す地勢南に向ひ一帶の山嶺東北西の圍む其跡都て圍となりしも礎石整然として残り無數の瓦片を散布す是れ栗谷李珥の龜巖書院を蟹巖(臨漢面)より移し來りて子弟に教授せし跡であると傳ふ。

〔文 廟〕 大聖里にあり大聖面の名は是より起る昔時豐德郡廳を舊邑里から今の豐德里に移した時同時に文廟も是地に移したもので大成殿東西廡明倫堂入德門等皆備はる。

〔退憂亭址〕 豐德里高陽洞にあり即ち麗末國舅許貴龍の亭基なりしを外遠孫李廷菴功成りて退老し重ねて一亭を構え扁するに退憂亭を以てし此に終つたと云ふ、詩あり。

平湖細雨晚霏々、烟外微茫白鳥飛、汀草岸花渾不管、夕陽時見釣舡歸。

〔金弘根之墓〕 舊邑里にあり有明議政府右議政諡文翼公諱弘根之墓及夫人之墓と標し陰記あり崇禎紀元後五辛巳(二百八十三年前)八月の干支である。

〔李衡萬墓〕 歸道里にあり。

〔李弘迪墓〕 山歸里白馬山の北麓にあり。

### 交通

〔三等道路〕 新竹里・歸道里・豐德里・池内里・長庚里を経て興教面領井浦に至る、開城より領井浦まで約六里自動車を通ず。

〔等外道路〕 豐德里面事務所より光德里高尺里の面事務所に至る者あり、同所より古郡里渡場に至る者あり、又古郡里南昌より山歸里下山歸、上山歸を経

て興教面興天里に至り領井浦に達する者あり。

渡場

古郡里海倉洞にあり江華郡鐵山里山伊浦に渡る。

大聖面終

第十章 興教面

位置境界

本郡の南端海瀕に位し、東は臨漢面に連り、北は上道面に接し、西北は大聖面に隣りし、南に漢江を隔て、江華郡及金浦郡に對す。

廣袤

東西一里二十五町、南北一里二十六町、面積二方里七二三、郡廳を距る五里三十二町あり。

戸數

内地人二、朝鮮人一千〇十九、支那人一、計一千〇二十一。

人口

内地人男三、女一、計四、朝鮮人男二千七百七十二、女二千五百九十六、計五千三百六十八、支那人男二、通計五千三百七十四。

區劃

興天里（道靈洞、城後、上寺洞、寺洞、興天浦、班村）領井里（新陵洞、越洞、艾浦洞、領井浦、獨谷）興教里（釜谷、間村、月呂洞、竹洞、烟谷、烏洞、杜陵洞、栗谷）宮川里（佳林洞、民道林、小佳林洞）仕谷里（禾洞、木洞、已谷、鶯山、蟹岩市、泉洞、陵谷、述美洞）芝峴里（眞木亭、遊峴、芝

青、間村、下望浦、官谷）照門里（上村、開谷、東山頭、照浪洞、篤亭洞、龍藏洞、歸逸洞、丹芝尾、面事務所は興教里間村に警察官駐在所は領井浦にあり。

**沿革** 元豐德郡郡東面の地なりしが光武十年開城郡の管に入り大正三年四月興教面と改稱す、其他の沿革は略大聖面と同じ。

**地勢** 白龍山西北境に峙ちて其支脈中部及南部に起伏し、西境には白馬山聳えて興天里の江岸に連亘し、東部は水田相連りて臨漢面に接す。

**山峰**

〔白龍山〕 又白蓮山と云ふ宮川里の西北大聖面界にあり高七百十九尺。

〔白馬山〕 興天里寺洞の北大聖面山歸里に跨り高六百二十七尺。

**峴嶺**

〔艾峴〕 白馬山麓大聖面山歸里に至る峴。

〔陵峴〕 領井浦より大聖面池内里に至る三等道路の峴。

**河川**

〔望浦川〕 源を仕谷里蟹岩市場の後山の溪谷より發し南流して木巢洞山中の諸水を合し臨漢面の界を流れて月岩里川を加へ芝峴里の東境を西南に轉流して漢江に入る流程約二里。

〔竹洞川〕 興教里烟谷の南より發源し南流照門里照浪村に至り漢江に入る。

〔領井浦川〕 新陵洞に發し南流領井浦に至り漢江に入る。

〔興天川〕 興天里上寺洞に發し南流興天浦に至り漢江に入る。

**池沼**

釜窪池 廣二反歩餘興教里釜谷にあり。

**土地**

〔國有地〕 田六町五反、畑七町七反、宅地二町三反、雜種地三百十四町。

〔民有地〕 田八百二十九町四反、畑三百九十八町六反、宅地三十八町、雜種地二千六百三十四町八反。

〔林野〕 一千七百五町。



産物

〔農産物〕 米類六千四百五十四石、麥類一千七百十五石、豆類六百三十三石、粟四百十七石、棉一千三百五十斤、莞草百七十五貫、煙草百四十八貫、馬鈴薯三千七百八十貫、蘿蔔七萬八千七百五十貫、白菜三萬七千五百貫甜瓜五千四百貫。

部落

三十戸以上

〔領井浦〕 漢江沿岸にある漁港で戸數三百十九、人口一千五百六十七警察官駐在所金融組合等あり、春期漁季に至れば漁夫商人等四方より集合し頗る殷賑となる、三等道路を開城に通じ自動車往來す、亦渡船場ありて江華に通ず、古引寧渡と稱し俗に引月串と呼んだ、此地に烈女學生朴昌俊妻韓山李氏の旌門がある。

芝峴里芝峴

四十六戸。

芝峴里照門洞

三十五戸。

照門里照浪洞

三十戸。

宮川里小佳林洞

三十三戸。

社寺

〔興教寺〕 白龍山(白蓮山)の南麓にあり朝鮮肅宗八年壬戌(本朝紀元二二二四年)の創立で厚陵の舊造泡寺であつた今猶定宗御する所の銀製の匙箸を藏す境内に寺碑あり有明朝鮮國白龍山興教寺事蹟碑銘竝序を刻す生員安相萬篆、通訓大夫行司憲持平李東郁撰、尹憲卿書、その文左の如し。

學佛仁智悟、來請於余曰、厚陵之興教寺、匪等閑佛宇、本聖后願堂、而累經兵燹、古碑殘缺、今方治石、欲得子文以傳萬代、子盍記焉、余曰、生順死安惟禮存焉、恭靖大王、至德盛節、傳家邦于聖弟、厭世乘雲歸于帝鄉、又何願之有哉、又孰敢爲非禮之祝哉、悟師曰、園陵以奉之、宗廟以享之、臣子之情、所恭者禮醫髡首緇梵、雖無倫教、尙聖德无窮、以其法祝釐何傷乎、盛德至美、於此尤可徵醫、且君子之所惡於釋者、爲其弗知君親醫、今茲與不足因端而善導乎、子母辟焉、余應曰唯、遂作銘、銘曰。

西教誕虛小覲仁義 疑々茲宮何爲陵底 感德于聖祈福于神 不知其然嗟爾舜

倫 就居穹壤而无君親 敢告有衆眠此刻文

崇禎國後、三十九年壬戌秋九月日

寺は今頗る廢頽し昔日の觀がない。

送僧詩

李 崇 仁

書生淡生活、詩句送僧歸、曉月袈裟冷、秋雲杖錫飛、路回千嶂合、亭小五松圍、役々吾何事、名場足駭機。

教會堂

〔領井里禮拜堂〕 領井浦にあり基督教南監理派大正九年十一月設立。

〔芝峴里禮拜堂〕 芝峴里にあり同上派大正十一年七月設立。

學校

興教公立普通學校 大正十五年八月設立認可を得十一月より開校の見込一年の經常費四千百三十四圓私立雙斌義塾の後身である。

古蹟

〔厚 陵〕 興教里白龍山の南麓にあり朝鮮恭靖大王定宗の陵である、定安王后を祔葬す、域内古樸老松鬱然として茂る、陵は兩墳並び文石武石各一對石馬四、石羊、石虎多數を以て圍繞せられ祭閣碑閣皆備はる、碑面には朝鮮國定宗大王厚陵・定安王后祔左と標し陰記あり曰。

定宗恭靖懿文莊武溫仁順孝大王、元至正十七年丁酉七月朔日、誕生、初封永安君、皇明洪武三十一年戊寅、冊封王世子、九月受禪、建文二年庚辰十一月、傳位于太宗、永樂十七年己亥九月二十六日昇遐、庚子正月三日葬于豐德東興教洞癸座之原、在位二年、在上王位二十年、壽六十三、皇朝賜諡恭靖、妃順德溫明莊懿定安王后金氏、至正十五年乙未正月九日誕生、洪武三十一年戊寅冊封德嬪、尋進封德妃、永樂十年壬辰六月二十五日昇遐、八月八日葬與大王陵同原、壽五十八。

崇禎紀元後一百二十八年乙亥二月 日立

又勝覽に卞李良の誌文あり曰

永樂十七年、歲在己亥秋、九月二十六日戊辰、溫仁恭勇順孝大王宮車晏駕、我聖德神功上王殿下(太宗)及我主上殿下(世宗)哀慕切至、服喪盡禮、上率群臣奉<sub>二</sub>上尊號<sub>一</sub>越明年庚子春正月初三日壬寅、以禮合葬于松京海豐郡、定安王后之厚陵、遺命也。大王我太祖康獻大王之第二子、天資溫仁恭謹、勇略過人、仕高麗累官至將相、常從太祖出征立功、歲庚午將兵捕倭于禮山獻捷、歲壬申秋七月、太祖即位、封永安君、歲戊寅秋八月、太祖不豫、權臣有欲挾幼構亂者、我上王炳幾殲除、請于太祖冊封大王爲世子、九月丁丑受太祖內禪、歲庚辰春二月、以無嗣封我上王爲世子、其年冬不豫、禪位于我上王、上王進大王尊號曰仁文恭睿、上王愛敬盡孝、久而益篤、大王春秋六十三歲、在王位三年、居閑養病十有九年、此終始哀榮之大概也、妃金氏、贈門下左侍中天瑞之女、性不妬忌、禮遇妾侍、我上王進尊號爲順德王大妃、追諡定安王后、無子、宮妾子男十五人、女十人曰元生、封義平君、次茂生、次幼、池氏出也、曰群生、封順平君、次二皆幼、奇氏出也、其餘男女皆幼、義平、娶衿川監務崔致崇之女、

生一男一女、幼、順平、娶判司宰監事薛存之女。

域内又祭器庫あり其南數町に齋宮あり參奉定住す、齋宮の前に藥水ありて湧き夏時遠近より人菌至すと云ふ興教寺は其北隣にあり。

〔定宗仁德宮址〕 興教里白龍山下厚陵の北、官堡谷にあり、定宗退位の後妃と共に此地に隱棲し子弟に教授す興教面の名因て起る所といふ、今宮基草萊の間に没し水聲禽語の外訪ふ者もなし碑閣ありて碑を藏す碑文に光武八年甲辰十一月正二品正憲大夫掌禮院卿臣趙定熙奉教敬撰竝書と刻す。

〔崔滉之墓〕 領井里にあり光國平難功臣崇祿大夫議政府左贊成海城君贈領議政諡月潭墓貞敬夫人陽川許氏附左。

〔益安大君墓〕 仕谷里泉洞にあり開國定社功臣諡安襄公諱芳毅、太祖の第三子で母は神謚王后韓氏である。

〔城 後〕 興天里城後は古海岸防禦の壘を設けた所と傳ふ。

〔芝峴里游峴洞〕 定宗王釣魚遊息の所と傳ふ。

〔尹碩輔墓〕 興教里梧洞谷にあり朝鮮成宗朝の直提學であつた曾て正言たりし時同僚に專斷の事あり其の人の死後追覈定配の命があつたので碩輔が義罪を已に死せる者に歸すべからずとし遂に自ら罪に當り江陰の謫所に卒した、後王が其無辜を悟り特に命じて子孫を録用し吏曹參判を贈つた。

〔趙仁璧墓〕 仕谷里已谷にあり朝鮮純忠翊衛協贊輔理功臣龍原府院君贈諡襄烈公・室三韓國大夫人李氏。

〔尹參墓〕 興教里可潛谷にあり太祖の時司馬に登り仕へて署丞公に至る。

〔魚震翼墓〕 芝峴里官谷洞にあり。

〔鄭昌老墓〕 興教里杜陵洞にあり朝鮮英宗朝の人。

交通

〔三等道路〕 大聲面池内里より來り領井浦に至る、北は開城に通じ南は海を渡りて江華に至る自動車の便あり領井浦より開城に至る約六里。

〔等外道路〕 興教里面事務所より北は宮川里を経て上道面上道里に至り南は

領井浦に通じ東は仕谷里を過ぎて臨漢面月岩里に至る。

〔間 道〕 面事務所より烏洞厚陵を経て三等道路に合する者あり、又仕谷里舊望浦里より木巢洞蟹巖場を経て上道面中面の境を行く者等あり。

興教面終



## 第十一章 臨漢面

### 位置境界

本郡の最南端に位して漢江に突出し、東北は中面に境し西は興教面に接し北の一隅上道面に連る、南は漢江を隔て、金浦郡霞城面・月串面に、東南は臨津江を隔て、坡州郡炭峴面に對す。

### 廣袤

東西一里三十町南北二里十町面積三方里一六六郡廳を距る六里二十八町。

### 戸數

内地人三、朝鮮人九百九十八、計一千〇〇一。

### 人口

内地人男三、女四、計七、朝鮮人男二千八百〇一、女二千六百八十九、計五千四百九十、通計五千四百九十七。

### 區劃

月巖里（寒井洞、鰲山洞、中連洞、中連橋、如意洞、士養洞、新基洞、間村、田畔洞、葛山、佳庄洞、内谷、防築洞）採蓮里（金桂地、崔村、大村、洞村、馬場洞、採蓮洞、金谷）丁串里（蒲川洞、城内洞、新基、梅洞、

元塘、辨村、雲水洞、冶谷、黃山、冠山）柳川里（陽村、黃土洞、東幕洞、石榴浦、樓里、仕基洞、多文里）佳井里（馬井里、榛橋、廣土洞、米井洞、洞山後、高倉垓、防築頭、安基洞、間村）仕洞里（石井洞、釜谷、大村、羊峴洞、佳谷、陵内、眞谷、巷谷、宮基、松羅谷、後松羅谷、石基、仰谷、通梨洞）上祖江里（斗日洞、陵洞、栗池洞、槐洞、炭浦、松前里）下照江里（桃峴、岩室内村、漢基、海井、彌勒洞、栗洞、面事務所を仕洞里通梨洞に置く。

### 沿革

高麗の時德水縣に屬す、朝鮮世宗二十四年德水縣を海豐郡に合し豐德郡と改めし時本面亦豐德郡の管に入りたり、後建陽元年豐德郡廢せられて開城郡に合し、大正三年三月開城郡德南面となり、同年六月面廢合により臨漢面と改稱した、蓋し漢江、臨津江合流の地なるが故なり。

### 地勢

月巖里川は東北より西南に貫流して面の地勢を兩斷す、即ち採蓮里と月巖里は川の北部にありて山嶺相連り一帯の高地をなし、川の南部は丘陵起伏して各洞の間に平地高地相交錯す、而して中央は川に沿ふて兩岸水田遠く

連り一望千頃の沃野を開いて漢江の岸に達す。

### 山峰

〔三聖堂山〕 仕洞里より柳川里に越ゆる山路にあり。

高麗忠肅王六年德水縣に敗し海東青(鷹の名)及内厩馬の斃れしを怒り命じて城隍神祠を焚くと即ち此の地である、今松樹ありて残り之を伐れば血を流すとして人民畏敬す。

〔背南山〕 柳川里の江岸にあり。

〔鶴見山〕 面事務所の背後の丘陵で學校林あり。

〔馬群山〕 往時馬蹄山又馬堤山と云ふ今麻姑山と稱す、佳井里にあり其南麓一丘を隔て、宮基と稱する所あり、高麗康壽宮の跡で今猶瓦片を出土す。

麗史曰忠烈王四年康壽宮を馬蹄山に造る是より常に獵を此處に見ると。

又舊時其麓に普利菴ありしと云ふ今の麻姑山部落なるべし。

〔冠山〕 丁串里の江岸臨津江口にあり高百十三尺其形を以て名く。

〔黃山〕 丁串里冶谷の北の丘陵をいふ。

### 峴嶺

〔桃峴〕 下照江里渡場に至る峴。

### 河川

〔月巖里川〕 又中連川といふ源を中面三仁里より發し南下して面界を出入し德水里より本面佳井里に入り西南に流れて月巖里を過ぎて望浦川となり漢江に入る全流程三里二十町餘に及び兩岸の水田多く其灌漑を受く又揚川と云ふ。

〔鵠川〕 丁串里と柳川里の間にあり。

〔岩室川〕 下照江里にあり。

〔萬石川〕 丁串里の東にあり。

### 土地

〔國有地〕 田四十五町三反、畑十四町三反、雜種地二町二反。

〔民有地〕 田一千〇六十三町九反、畑五百三十八町一反、宅地五十六町六反

雜種地三千百九十八町一反。

〔林 野〕 一千六百五十一町五反九畝。

產 物

〔農產物〕 米類七千八百十七石、麥類一千三百七十四石、豆類一千七百九十石、稗類百二十一石、棉八千五百二十斤、荏一千二百五十石、胡麻二百四十石、莞草一千二百八十貫、煙草千五百貫、甘藷二百三十貫、馬鈴薯五千九百三十四貫、蘿蔔六萬一千二百貫、甜瓜千六百貫、苹果三百四十貫、梨八百二十貫、葡萄七百十五貫、栗千三百十五貫。

部 落

三十戸以上集團せる部落なし。

教會堂

〔照江里禮拜堂〕 下照江里にあり基督教南監理派明治三十六年九月設立。

學 校

〔臨漢公立普通學校〕 仕洞里通梨洞にあり、大正十一年六月の創立職員四、學級四、修業年限四個年、生徒百九十八、一年の經常費四千九百九十六圓。

古 蹟

〔背南山の古壘址〕 柳川里石榴浦の南に土壘址あり、北に向ひて斜面をなし南は漢江に臨みて岩崖高く斷壁をなし周圍約三千四百尺、中央僅かに平地あり北方に向ひて門址一個處を存す、何の遺跡なるや詳ならず。

〔蟹巖津古跡〕 丁串里梨洞の江岸に城内と稱する所あり、此處に古城址の如き者あり、江に沿ひ丘陵を利用して土壘を築き其跡今殆んど失はれたるも僅かに一民家の前圃の細路に沿ふて壘の一部を残す、壘址と思はるゝ處延長周圍約三千尺圃中往々瓦片を出土す、張晩の梨湖亭は之の址を利用して造りたる者の如し。

豊徳邑誌に曰梨湖亭は都元帥張晩の別墅、府南三十里蟹岩江上にあり、成功の後往來逍遙の地なり自ら其亭を咏して曰。

新構高亭俯大江、舟人指點判書公、狂謀不合風塵際、老病宜投寂寞中、宅近鰲山雲出北、門臨漢水日生東、支離二十年間跡、摠入秋霄一夢空。

〔貞明公主墓〕 下照江桃峴にあり。

附綏祿大夫永安尉洪桂元之墓(仁祖朝の人)

〔李文馨墓〕 上祖江里陵洞にあり。

工曹判書、正德庚午八月を以て生る

〔洪鉉輔墓〕 文科壯元太宗伯贈領政諡貞獻公、下照江里岩室にあり。

〔洪錫輔墓〕 贈吏曹判書、下照江里桃峴にあり。

〔閔啓墓〕 月巖里にあり標石字滅し但將軍忠佐衛の五字のみ見ゆ。

〔閔霽墓〕 月巖里金山にあり。

驪興府院君號漁隱官左議政に至る贈諡文廣公

〔李用淳墓〕 仕洞里石基洞にあり。

官資憲大夫同知中樞府忠清道觀察使に至る

〔安鵠墓〕 仕洞里石基洞にあり。

仁祖朝の人、嘉善大夫同知中樞府事

〔張晩墓〕 佳井里新陵にあり。

竭忠奮威出氣效力振武功臣、輔國崇祿大夫議政府右贊成兼兵曹判書八道都體察使諡忠定公(仁祖朝)

### 渡場

〔祖江渡〕 下照江里の江岸にあり漢江を越えて金浦郡祖江里に渡る渡場。

李奎報右補闕より劾せられて桂陽の守に除せられ將に江を渡らんとしたが江水固より迅激であるのに適暴風に値ひ困難して漸く渡つた、爲に賦を作りて之を悲んだ曰。

浩々江流、濁如涇水、漆色而泓、懔難俯視、湍又激而迅兮、豈瞿塘之足譬、控百川之奔會兮、若鼎湯之驚沸、蛟鰐呀々以流涎、又安測毒龍之潜伏以伺、沂灘欲徑進兮、船如行而尙止、不夕而暝、不風而波、雪浪礪石以崩騰兮、若秦晉戰于彭衙、篙工狎翫靈胥兮、猶畏夫洄洑與盤渦、顧區々一瞥之所如、豈以



其澎湃鬱怒兮成此邈遐予既被謫遭險流孤舟兀以出沒兮其將安適兮去悠悠望平臯兮草暗溯極浦兮煙愁鳥鳴軋軋猿哭啾啾落日兮掩々黃雲兮浮々離五馬之足榮兮亮非吾之攸期嗟此遐征古豈無之孟三宿而出晝兮丘去魯兮遲々置誼洛陽之才子兮謫長沙之濕卑聖賢尙爾予復何悲較昔人之未遇兮吾又專城兮斗印累々鵠山隱翳兮漸遠望長安兮徒目疲業已離於上都兮欣桂陽之伊邇干以泊舟干彼碣渚誰其來迎買々殘吏紛綵幕兮葳蕤爛紅旆兮簫旄弭節兮山之椒炬火照林兮鳥驚以飛聊逍遙以散髮風攬々兮吹衣江水駛而疾兮予既濟其何疑行矣尙足樂兮何必眷々兮懷歸出處不自謀兮樂天知命兮先哲是希。

## 祖江渡

高麗

白元恒

小舟當發晚潮催住馬臨江獨冷吟岸上世情何日了前人未渡後人來。

〔蟹巖渡場〕 丁串里梨浦より漢江を渡り金浦郡霞城面新浦里麻近浦に越る渡場。

## 交通

〔等外道路〕 月巖里より上祖江里・下照江里を経て祖江渡場に出づる者あり、

月巖里より東は中面德水里に至り西は興教面仕谷里に通ずるあり。

〔里道〕 月巖里より佳井里・仕洞里面事務所を経て丁串里梨洞渡場に至る者あり。

## 臨漢面終

## 第十二章 中 面

### 位置境界

郡の南端臨津江の下流に位し、北は進鳳面に連り、西は上道面・臨漢面に隣り、東は沙川を隔て、長湍郡津南面に境し、東南の一隅は臨津江を隔て、坡州郡炭縣面に對す。

### 廣 袤

東西一里三十町、南北二里二十町、面積三方里二七九、郡廳を距る四里三十町。

### 戸 數

内地人二、朝鮮人千〇四十四、支那人二、計一千〇四十八。

### 人 口

内地人男二、女二計四、朝鮮人男二千八百十三、女二千八百二十四計五千六百三十七、支那人男四、通計六千六百四十五。

### 區 劃

大龍里（大也峴洞、清浦洞、萬家堡、龍田洞、栗串洞）食峴里（水雲洞、華藏洞、內村、瓦幕洞、寒泉洞）德水里（艾浦洞、黃梅洞）松山里（陶洞、率尾洞、瓦村洞、檜洞、左後洞）天德里（箭門洞、上炭谷洞、下炭谷洞、

梨谷洞）東江里（大村洞、汝句洞、磚村洞）倉內里（大村洞、浦村洞）

面事務所・警官駐在所を大龍里清浦洞に置く。

### 沿 革

此の地本德水縣と謂つた今の德水里は其縣治の跡である、高麗史地理志に德水は高句麗の德勿縣とんひるで一に仁勿縣と言ふたが新羅の景德王の時今の名に改めた。

按ずるに西面古蹟の條に曰へる如く勿は高句麗語の城の義であるとすれば此の地又城址なかるべからず如尼山腹に蟠る土壘址とんひるか或は進鳳面の德物山城址なるに似たり（古蹟參照）

顯宗九年開城の屬縣となる、文宗十年興王寺を縣に創する爲に縣治を楊州（或は南）に移したが十六年（或は十七年）に復た開城縣に來屬す。李朝に入り世宗の二十四年之を廢して豐德郡と改め本面を德中面と稱した、然るに仁祖の二十七年德水が仁宣王后の生貫なるの故を以て豐德郡を府に陞せたが李太王の建陽元年（本紀二五五六年）豐德郡は廢せられて開城府に併せられ爾來屢次の變遷を

經て今日に及んだ。

地 勢

德物山の連脈面の北境に入りて天徳山となり、其分脈倉内里・東江里に下りて消え、進鳳山より南下する者は天德里・松山里の間に崛起して軍藏山となり、德水里に下りて如尼山を起し其支脈食峴里及び臨漢面の間に起伏す。平野は軍藏山麓より箭門川に沿ふて東方沙川の岸に亘りて開け東江里龍田洞・大也峴洞の流積土壤を構成し稍廣き水田を拓く。

山 峰

〔如尼山〕 舊名如來山又如利山といふ蓋し如尼は其訛音せる者ならん、德水里にありて高七百九十二尺、其麓に白雲寺址あり。

〔軍藏山〕 松山里・天德里・大龍里の界に横はり高九百三十四尺あり本軍壯山と書す。

俗傳ふ往時の古戦場で軍藏山に伏兵を藏し石灰を積みて兵糧に擬し以て敵兵を誂きたる所であると然れ共何の時なるを詳にせず恐くは文字に假托せる附

會の説ならん、其東麓に萬家堡と稱する所あり、昔時萬家の部落ありたりと是れ等も萬哥堡の轉訛で高句麗時代の部落の遺名ならんか（高句麗時代往々崔哥洞・萬哥洞・蒙哥洞等の遺名あり崔氏の部落・萬氏の部落・蒙氏の部落の意なる如し）附近に古墳群のある所あり。

〔天徳山〕 天德里にあり高二百十尺。

〔國師峰〕 天徳山の下・大龍里と天德里の界にあり。

〔露積峯〕 軍藏山の北・進鳳面の境にあり。

〔冠帽山〕 食峴里の江岸にあり其形を以て名く。

峴 嶺

〔黃梅峴〕 德水里黃梅洞にあり。

河 川

〔馬尾川〕 又沙川といふ進鳳面より來り長湍郡津西面の界を逶迤として南流し食峴里に至り臨津江に入る、面境の流程三里十町餘、灌漑の利あれ共其名の

如く流砂年々河心を變更し害も亦尠からず。

〔箭門川〕 進鳳面興旺里より發し東南に流れて天德里に入り舊箭門里を過ぎ

東流して博洞・龍田洞を灌漑しつゝ沙川に入る。

〔釜井川〕 大龍里箭門川の南にあり西頭井ともいふ。

〔浦川〕 大龍里清浦洞にあり。

〔栗串川〕 大龍里栗串洞、浦川の南にあり

〔艾浦川〕 源を艾浦里に發し東流臨津江に入る。

〔鑰店川〕 上道面三仁里仙山に發源し南に流れて鑰店を過ぎ臨漢面採蓮里の

堺に沿ふて繞り遂に同里に入り月巖川の稱あり、源より漢江の河口に至るまで

全流程約三里二十町。

〔水雲川〕 食峴里水雲洞にあり。

〔黃山川〕 食峴里と臨漢面の境にあり黃山の下を南流して臨漢面に至り臨津

江に入る。

土地

〔國有地〕 田八町、畑七町一反、雜種地二反。

〔民有地〕 田一千二百〇八町一反、畑八百五十一町四反、宅地四十九町六反。

〔林野〕 二千四百二十七町二反。

產物

〔農產物〕 米類九千八百〇四石、麥類二千八百三十石、豆類一千九百〇八石、粟七百六十七石、稗百五十一石、棉一千四百五十斤、莞草二百八十貫、煙草二千三百六十四貫、甘藷二千九百二十貫、馬鈴薯六萬八千六百六十六貫、蘿蔔七萬〇三百五十貫、白菜六萬五千二百五十貫、甜瓜三萬二千六百七十貫、栗實一千百七十五貫。

部落 三十戸以上

大龍里清浦洞

九十戸

面事務所警察官駐在所あり

倉内里

七十戸

天德里箭門洞

三十五戸



東江里大村洞

四十戸

松山里左後洞

四十戸

教會堂

〔龍田里禮拜堂〕

基督教南監理教會派明治三十八年一月設立。

〔倉内里禮拜堂〕

同上派大正九年十二月設立。

古蹟

〔如尼山の土壘及馬塚〕 如尼山の半腹から南麓に走下し、等外道路を越えて南方の丘陵上に延長した土壘あり、之を步測するに、更に其南丘の南方山腹を西から東に廻り、蜿蜒として艾浦里の嶺東を走り、遂に馬尾川の西岸嶺頭に至りて形迹を没す、其延長約五千二百尺、壘は土石を混交せる蒲鉾型をなし、處々崩壊し、平地を走る所は開墾せられて形迹を失はれた所あるも能く注意すれば猶認ることを得る或は徳水縣の防禦壁ならんか土人は壬辰役に築いた者と稱するも信ぜられない。

馬塚は路傍にあり(말무덤이)といふ底部周圍約百八十尺高四十尺アカシヤの木

叢生す嘗て發掘を試みた者の如く其上に凹陥した所あるも深からず、路傍にある大石を運搬せる神馬の斃れたる屍を埋めた者との傳説がある。

〔傳説〕 昔神人あり名馬を飼養し常に馬池(今無し)に水かひ居りしが曾て大石を負はしめ自ら之に乗りて如尼山を一躍したが馬は脚を折りて斃れた依て其屍を埋めて此の塚を造つた傍の石は當時の負ひし者といふ。

或は曰ふ徳水縣治を置く時艾浦川が前を流れ東流して臨津江に入るので東方は虚となり風水上缺陷あるにより此處に森を築き寺及石柱(同處の西方の圃中にあり高三尺幅二尺位の石を立つ)と與に之を補ひたるを後に至り俗誤り傳へて馬墳となしたるなりと。

又曰ふ其四個の大石は舊土壘の門址であると然れども土壘と石とは數百歩相距れば門址とは思はれない。

〔徳水廢縣址〕 如尼山下南西の圃中にあり其遺石と無數の瓦片とを散布す。

〔白雲寺址〕 徳水廢縣址の東・塔内洞にあり蔘圃中に廢塔の殘蓋五個(方一尺

五寸)蓮を刻せる基石二個(三尺三寸)を遺す又燈基の如き劃刻ある石あり附近亦無數の瓦片を出す。

〔倉内里の土城〕 稍方形の土壘を回らし東西南北の四門址あり周圍約四千尺高十餘尺東側に濠を圍らした如き形迹ありて宛然古城址のようである、中に民家三四十を有す。

世宗實錄地理誌に云ふ東江は保定門の南三里海豊郡界藍島にあり(今無し猫島と稱する丘あり或は是ならん)西江は即ち禮成江宣義門の西南十七里にあり皆古運漕下泊の處と。

按ずるに東江は臨津江であつて禮成江の西江に對して東江と稱し高麗の時より東北の貨穀を此處に集め開城府の資に供した即ち西南の貨穀は永安城若くは土城に於て集散し東北の貨穀は此の倉内城に於て集散した者なるべく今其東隣を東江里と稱するを見れば昔は臨津江の水深く船は此の邊まで溯江し來り東江里の馬尾川中に藍島と稱する島がありて其處に船舶の碇泊處のありし

ならん、然るに馬尾川の流砂は年々川筋を埋め遂に今日の如き地形に變遷し往時の東江倉は現時の倉内里東江里等の名殘として存するに至りし者なるべし土壘の東側に殘れる濠の如き迹は正しく馬尾川の流域で直ちに土城の東門の下に逼まり貨穀を倉内に運搬せる者なるを想像し得るであろふ。

〔金馨秀墓〕 食峴里雲水洞にあり李朝顯宗の時の儒者。

### 交通

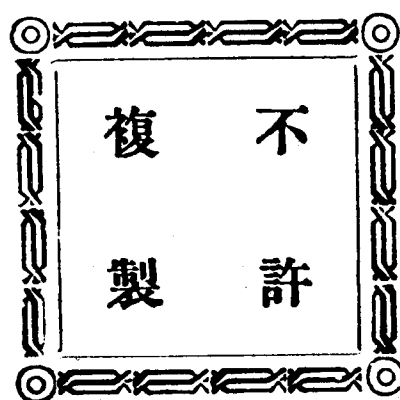
〔等外道路〕 北の方進鳳面興旺里より本面天德里に入り大龍里面事務所を過ぎ徳水里を経て臨漢面採蓮里に去る、面事務所より開城に至る四里二十四町、臨漢面事務所に至る二里四町、上道面事務所に二里六町、進鳳面事務所に三里四町。又天德里より分れて進鳳面芝金里を経て鳳東鐵道驛に至る者あり、大龍里より分れて西し松山里を経て上道面に往く者あり。

〔間道〕 如尼山の南麓より等外道路に分れて南行し臨漢面梨洞(蟹巖津)の渡船場に通ずる者あり、大龍里より天德里下炭谷洞・上炭谷洞を経て馬尾川を

越え鐵道長湍驛に出る者あり。

中面終

昭和二年一月二十日印刷  
昭和二年一月三十一日發行



定價金七拾五錢

編輯者 開城圖書館內  
川口 卯橘

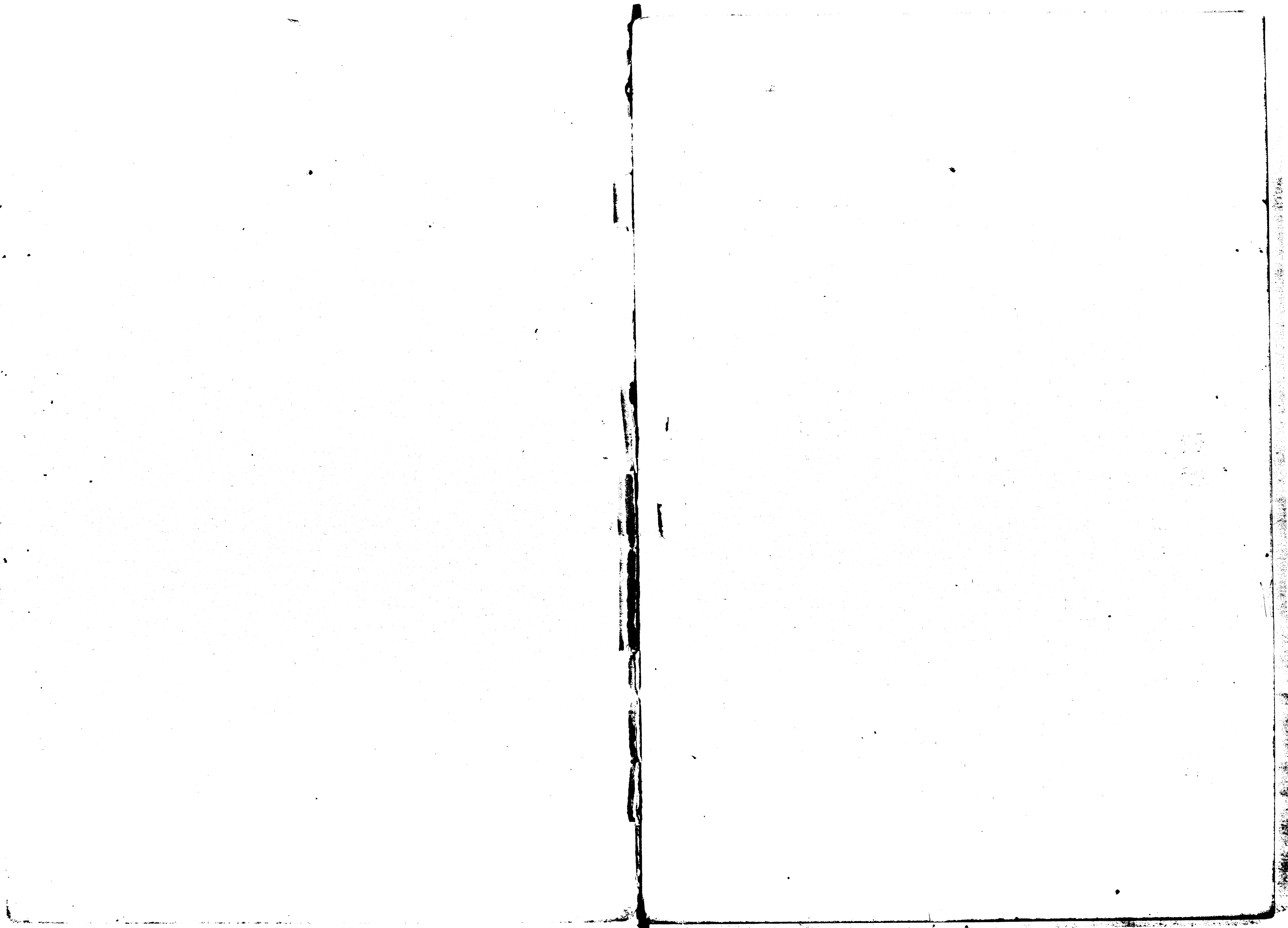
發行者 郷校財産管理者  
山崎 駿二

印刷人 京城旭町二丁目  
天野 幸三

印刷所 京城旭町二丁目  
京城印刷所

京畿道開城郡

發行所 開城圖書館







開城郡面誌 第五輯

上道面、進鳳面、青郊面、東面

日韓・友邦

288

6

5

協 会

288-6-5

開城郡面誌 第五輯

上東面・進鳳面・青郊面・東面

## 凡 例

一、本書は重に東國輿地勝覽・中京誌等に據りたるも同書は年代を經過するこ  
と多く、史蹟名勝にして既に失はれたもの、地形の變遷して空名となつたも  
の尠くないので、今其實跡を踏査し、猶形迹がありて名を存する者は往時の  
狀況を記述し、全く失はれたものは之を去り、又新たに發見した者は之を追  
記し瞋めて世の史家、探勝家の參考に供することにした。

一、書中記する處は現時の地理、往昔の史實より、神話傳説に至るまで可成廣  
汎に亘りて、網羅し中には奇怪な口碑でも、凡そ説話の存する者は皆收めた  
積りである、是等は後世古傳を失はんことを恐れ敢て取捨をしない。

一、參考した書目は勝覽・中京誌の外高麗圖經・高麗古都徴・關野博士の朝鮮  
美術史・幣原博士の朝鮮史話・金石綜覽・朝鮮年表・高麗史・新高麗史・入關前  
の清朝・朝鮮一般史・開城王氏族譜・聖源錄・編年通錄・朝鮮佛教通史・今



西博士報告・松田甲氏の朝鮮雜話・松都記異・總督府五萬分圖・二萬五千分圖・一萬分圖などであるが、一々其都度書名を掲記しない。

一、實地踏査は數回に亘り、或は大雨を犯して山城山を攀ち、或は炎熱を忍んで江岸地方を探索し、或は帝釋山の絶頂を極め、或は金郊川の漲水に溺れんとしたなど、相當の苦辛を経て調べたから、間違はない積りである、然し踏査の漏れた處、判斷の違つた點もあろうから、直接編者に注意を賜はらば再梓の時に研究の上訂正しようと思ふ。

一、壬辰役とは日本史の文祿の役で、丙子の役とは清國の朝鮮侵掠である。

一、表紙の瓦紋は滿月臺の遺瓦である。

昭和二年二月 日

編 者 識



# 開城郡面誌 第五輯

## 目次

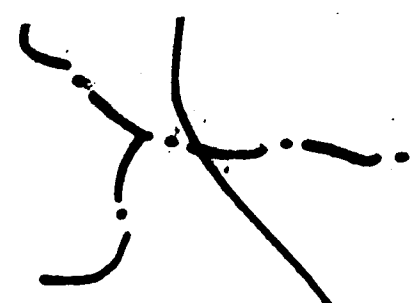
### 第十三章 上道面

位置境界	一
廣袤、戶口、區劃	一
沿革、地勢、山峰	二
峴嶺、河川、池沼、土地	三
產物、部落	四
社寺、教會、學校	五
古蹟 <small>齊陵、高麗成陵、高麗貞陵 鳳谷寺址、佛堂谷、其他</small>	六
交通	一二
第十四章 進鳳面	
位置境界、廣袤、戶數	一四
人口、區劃	一四

沿革、地勢、山峰	一五
河川、土地、產物	一八
部落、社寺	一九
古蹟	二〇
興王寺、德物山城址、高麗古墳群、塔谷の石塔、石佛、其他	二五
交通	二五
第十五章 青 郊 面	
位置境界、廣袤、戸口、區劃	二六
沿革、地勢	二七
峴 嶺	二八
河川、土地	二九
產物、部落、教會堂	三〇
古蹟	三一
步仙亭、扈輦臺、登樂岩、元敬王后址、靈源亭、細谷冷泉、水落岩洞古墳、龍化池址、保定門址、開國寺址、水口門址、移民洞寺址、青郊驛址、高麗安陵、同陽陵、同康陵、同裕陵、同聰陵	四五
交通	四七
第十六章 東 面	
位置境界、廣袤、戸口、區劃	四七

沿革、地勢、山峰、河川	四八
池沼、土地、產物	四九
部落、教會堂、學校	五〇
古蹟	五一
西籍田址、天壽院址	五四
橋梁	五四
交通	五五

水口門址



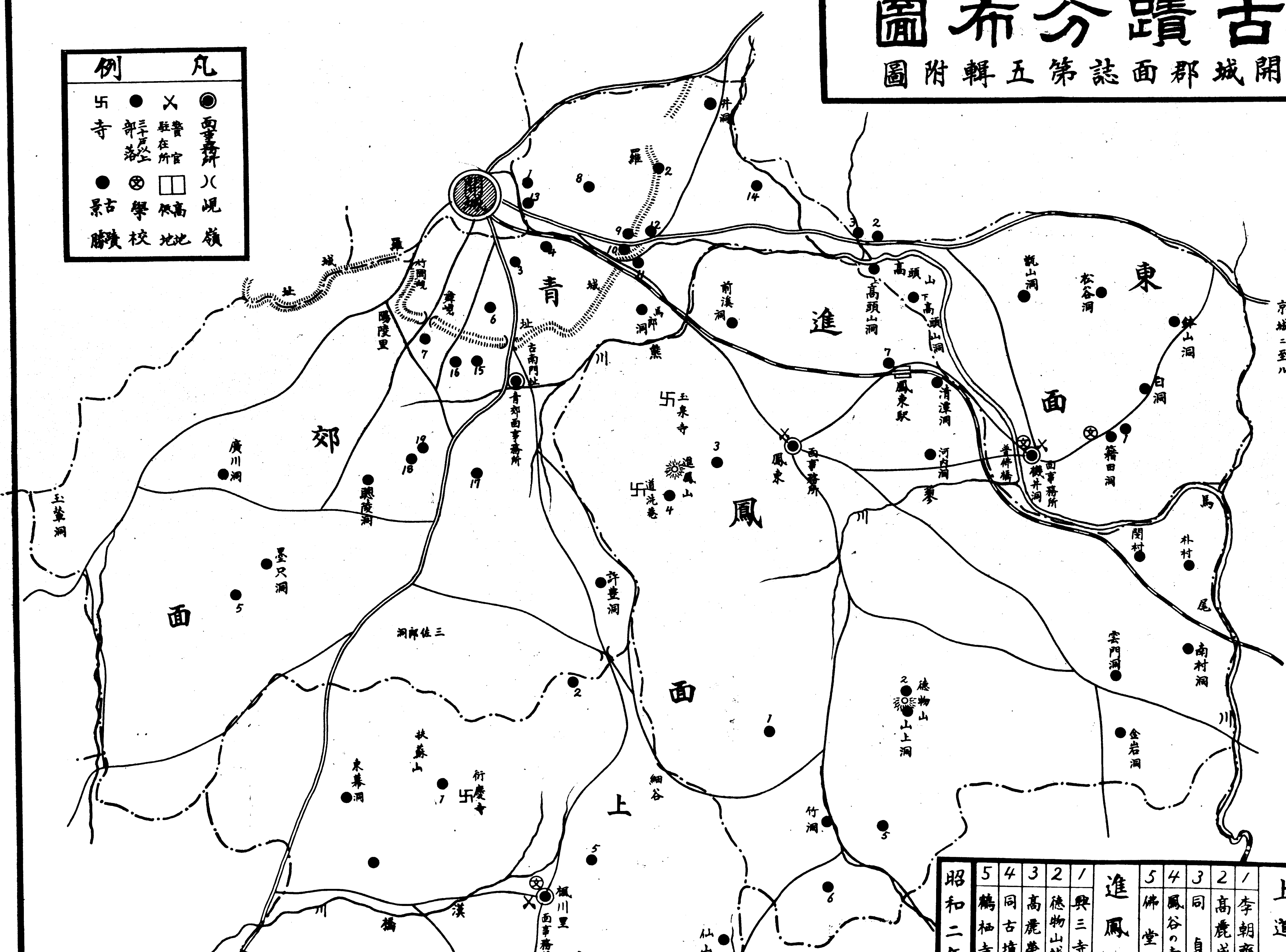


# 古蹟分佈圖

開城郡面誌第五輯附圖

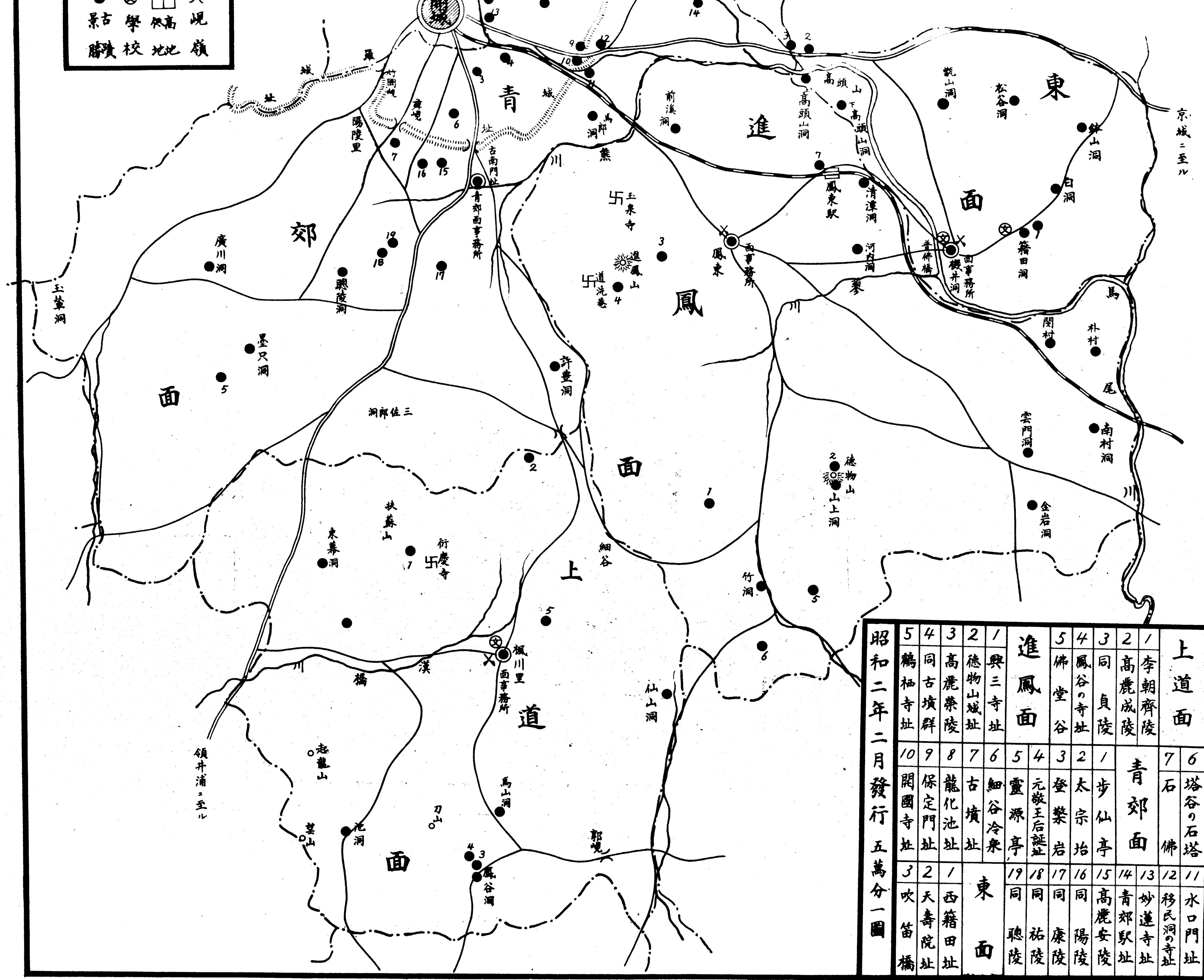
**例**

●	○	×	●
寺	部	駐	面
	落	在所	署
●	⊗	□	○
景	學	依	○
勝	校	地	○
			嶺



上道	1	2	3	4	5	進鳳	1	2	3	4	5	昭和二年
	李朝齊	高麗成	同貞	鳳谷の寺	佛堂		興三寺	德物山城	高麗榮	同古墳	鶴栖寺	

景古學依高 峴  
勝蹟校地地嶺



進鳳面					青郊面					東面				
5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
鶴栖寺址	同古墳群	高麗榮陵	德物山城址	興三寺址	佛堂谷	鳳谷の寺址	同負陵	高麗成陵	李朝齊陵	靈源亭	元敬王后誕址	登榮岩	太宗治	步仙亭
10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	19	18	17	16	15
開國寺址	保定門址	龍化池址	古墳址	細谷冷泉	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
3	2	1			19	18	17	16	15	14	13	12	11	10
吹笛橋	天壽院址	西籍田址			同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

昭和二年二月發行 五萬分一圖

# 開城郡面誌 第五輯

## 第十三章 上道面

**位置境界** 郡の南部東經百二十六度三十二分北緯三十八度〇二分に位し、東は進鳳面・中面に界し、南は臨漢面・興教面に接し、西は光德面・大聖面に連り、北は青郊面に隣りす。

**廣表** 東西一里二十四町南北一里二十五町面積三方里、郡廳を距る四里二十七町。

**戸數** 内地人二、朝鮮人七百十五、計七百十七。

**人口** 内地人男二女二計四、朝鮮人男一千八百七十女一千七百五十八、計三千六百二十八、通計三千六百三十二。

**區劃** 左の六里三十二洞に分ち面事務所を楓川里下村に置く。

楓川里（獐項里、上楓川、下楓川）三仁里（墨洞、仙上洞、杜谷洞、陵内洞、

北洞、栗洞、丁幕洞、鵲谷洞）上道里（馬山洞、鳳谷洞、郭峴、内村）羊司里（下羊司、間谷、堯洞、方介洞、上羊司、月洞）蓮洞里（大釜洞、朱村洞、藍寺洞、新村、高山洞、店洞）大陵里（文寺洞、東幕洞、大陵洞、柏子洞、宮洞）

**沿革** 本面は舊豐德郡・郡北面であつたが大正三年四月郡面廢合により開城郡上道面と改稱せらる。

**地勢** 本面は青郊面・進鳳面・中面・興教面・大聖面・光徳面の間に狹まり、四境皆山嶺起伏連亘し中央の部分のみ漢橋川の水流通より西に貫きて沿岸一帯の平田を拓く。

### 山峰

（望山）羊司里の大聖面界にあり。

（起龍山）望山の北にあり高五百五十六尺、山中に藥水あり大正十五年五月頃發見した者で水量多く夏期人群集すといふ。

（刀山）羊司里と上道里との間にあり高六百七十七尺。

（扶蘇山）楓川里にあり齊陵の主山である。

### 峴嶺

（東峴）上楓川の東北開城に至る峴。

（郭峴）三仁里鵲谷より上道里鳳谷に至る路上にあり。

### 河川

（漢橋川）楓川・錦城川の二源あり相合して南流し上楓川を過ぎ西に轉じて新村・漢橋等の諸部落の水田を灌漑しつゝ光徳面に入る。

### 池沼

（池洞の池）百餘年前金兵使といへる者父の墓を造り其下に池を鑿ちしといふ廣三百坪許。

（大村池）羊司里にあり。

（麗溪池）上楓川にあり。

### 土地



〔國有地〕 田十七町八反、畑二十三町三反。

〔民有地〕 田五百五十二町八反畑六百二十八町七反宅地三十八町一反。

〔林 野〕 約二千二百二十六町七反。

産物

〔農産物〕 米類三千四百六十八石、麥類一千四百七十三石、豆類八百二十石  
粟三百〇四石、稷百九十七石、棉一千六百六十五斤、莞草二百二十貫、馬鈴薯  
二千二百八十七貫、蘿蔔二千七百四十七貫、白菜千八百二十四貫、甜瓜一千〇二  
十貫、特産として石灰礦四個所、土器製造所二個所を有す。

部落

三十戸以上

下楓川 四十戸面事務所・警察官駐在所・私立養新學校等あり。

下楓川 三十五戸 三仁里仙山洞 三十五戸。

上道里馬山洞 三十戸・ 上道里鳳谷洞 五十二戸。

上道里内村洞 三十九戸 羊司里池洞 三十八戸。

蓮洞里朱村

三十五戸

大陵洞東幕洞

四十四戸。

社 寺

〔扶蘇山衍慶寺〕 楓川里下楓川にあり住僧二人禪教二宗で本寺は傳燈寺、本尊は  
釋迦牟尼佛、昔時齊陵の造泡寺であつたが現今は寺勢衰微し舊時の觀なし、殿  
前に破損せる五重塔あり佛像等を彫刻しあれ共完からず。

教會堂

〔蓮洞禮拜堂〕 蓮洞里朱村にあり基督教南監理派明治三十九年七月設立。

〔仙山洞禮拜堂〕 三仁里仙山洞にあり同上派大正元年一月設立。

〔鳳谷禮拜堂〕 上道里鳳谷にあり同上派大正十年五月設立。

學 校

〔私立養新學校〕 生徒百八人・教師四人・五學級・一年の經費九百圓、外に鳳鳴  
義塾といふがある。

古 蹟

〔齊陵〕 楓川里下楓川扶蘇山下にあり、李太祖の妣神懿王后韓氏の陵である、封土・護石・石欄・皆備はり羊虎の石獸九個・望石柱一對・文武石・石馬・各一對・石壇は三壇で魂遊石（石床）石燈には彫刻物あり護石の十二支神は人形であるが冠の十二支明かならず周圍に雲形を刻す、丁字閣・碑閣・祭器庫・陵丁室あり、參奉室は陵道の左方二三町の前衍慶寺の對方にあり典祀廳と榜す。碑閣は内に二基の碑を藏す一には大韓神懿高皇后と書し一には神懿王后齊陵碑銘を刻す其の文に曰。

有明朝鮮國承仁順聖神懿王后齊陵神道碑銘並序

推忠翊戴佐命功臣崇祿大夫議政府贊成事集賢殿大提學知經筵春秋館成

均館事兼判內資寺事世子貳師吉昌君臣權近奉教撰

大匡輔國崇祿大夫領中樞府事臣

徐命均奉教書

大匡輔國崇祿大夫行判中樞府事臣

愈拓基奉教篆

自音帝王、受命而興、必賴妃匹之賢、侔德毓慶、以永厥緒、夏有塗山而啓能繼、

周有太姒而武丕承、禹文配天之祀、繇是有永猗歟、盛哉、惟我神懿王后、天資淑懿、坤德柔貞、早嬪龍淵、弼成王業、篤生聖哲、垂統罔極、神切懿範、比古無愧、獨惜夫大勲垂集仙遊甚遽、太上開國而莫崇其靈儀、二聖承緒而莫致其榮養、山陵掩耀、霜露增悲、嗚呼慟哉、初諡節妃、陵號曰齊、後加諡神懿王后、置仁昭殿、以安眞容、追崇之典、已備舉矣、我主上殿下、慟念慈儀永悶、孝思莫伸、爰命攸司、勒銘豐碑、令臣近爲文垂示萬世、臣近承命悸恐不敢以辭、謹按后姓韓氏、安邊世家、皇考諱卿、贈忠誠恭謹積德毓慶輔理功臣壁上三韓三重大匡領門下府事安川府院君、皇祖諱珪仁、贈積善毓慶同德贊化翊祚功臣特進輔國崇祿大夫門下左政丞判都評議使司事兼判吏曹事安川府院君、皇曾祖諱裕、贈純誠積德佐命輔理功臣崇政大夫門下侍郎贊成事同判都評議使司事兼判戶曹事安原君、皇妣申氏、封三韓國大夫人、贈秉義毓德補祚功臣崇政大夫門下侍郎贊成事同判都評議使司事判刑曹事允麗之女、后生而淑婉、聰慧異常、及笄擇配、來嬪于我太上王、初爲將相數十年間、出入攻戰靡有寧歲、后能竭力營家、勉以成功、又性不妬忌、

禮遇妾侍、克有多男、教誨以義、今我主上殿下、睿哲英武、聖學日進、年未弱冠、擢第春官、當僞辛戊辰之歲、侍中崔瑩、謀欲猾夏、以我太上王威望素著、授以節鉞、俾往攻遼、太上王仗義還師、執退崔瑩、代以名儒李穡、中外晏然、邦國永賴、穡告太上王曰、當茲構釁中國之後、非執政者親朝帝庭、則公之忠誠無以白於天下、剋日將行、太上王謂穡曰、吾與公一時並使、國事誰任、我擇一子從公而行、猶吾往也、乃遣我殿下充書狀官、特蒙皇帝優禮而還、己巳秋帝又降勅、責以異姓爲王氏後、太上王與將相議、立王氏之裔定昌君瑤爲王、先是權奸擅政、寇攘虔矯、太上王時左相、罷私田、舉墜典、弊去利興、百度俱新、功高不償、德大難容、讒邪交構、浸潤亡測、定昌柔暗、依違兩端、后乃憂勞成疾、以辛未秋九月二十三日薨、享年五十五、以禮葬于城南海豐郡治粟之原、我殿下盧墳欲終三年、明年壬申春太上王西行昇疾而還、殿下來侍湯藥、群邪抵隙、謀傾益急、我殿下應機決策、討除渠魁、兇徒瓦解、定昌益憚、秋七月十六日、與三三大臣倡以大義、臣僚父老不謀而同、合辭推戴、太上王迫

於群情、迺即王位、市肆不易、會朝清明、即遣使入奏帝庭、聯承勅報、既許王爵、且更國號以復朝鮮之義稱、越三年甲戌夏、帝乃遣使令朝親男、太上王以我殿下通經達禮最賢、諸子命隨來使以行、既至、帝與語嘉之、優賞遣歸、戊寅秋八月、太上王不豫、姦臣鄭道傳等、思擅國柄、謀去諸適、將立幼孽、朋家聚黨、禍發斯迫、殿下炳幾、先其未發、誅除以燂、申請太上、以嫡以長、迎致上王、冊封世子、彝倫既正、宗社載定、九月丁丑太上以疾未瘳、傳位上王、庚辰正月逆臣朴苞等、謀戕同氣、誘掖懷安父子、稱兵向闕、逆勢甚熾、我殿下率勵將士旋旣平定、誅止苞身、餘悉不問、安置懷安、不廢懿親、上王以未有繼嗣、且其開國定社成我殿下之績、冊爲世子以定國本、秋七月己巳奉冊寶加太上王啓運神武之號、冬十月一月癸酉、上王亦以疾遜位于我殿下、遣使請命、明年辛巳、建文帝遣通政寺承章謹文淵閣待詔端木札、奉誥命印章、來封我殿下爲王、冬遣鴻臚寺行人潘文奎、來錫冕服、秩比親王、今皇帝即位、誕告萬邦、殿下即命左政丞臣河崙、入賀登極、帝嘉忠誠事大、賜以誥印、遣都指揮高得、左



通政趙居任、以今年夏四月來、仍封爲王、秋九月、又遣翰林待詔王延齡、行人崔榮、來錫<sub>下</sub>袞冕九章錦段紗羅書籍、王妃冠袍金段紗羅太上王金段紗羅、布世寵典、先後還至、蓋我殿下功德之盛實天所啓、專付大東、以延鴻休、宜受帝眷之隆、以膺天祿之永也、肇基之迹、雖自祖宗、篤生之慶、實繇神懿、噫嘻盛哉、后生六男、上王居二、我主上殿下居五、長曰芳雨、封鎮安君、先卒、次三芳毅、封益安大君、次四芳幹、封懷水大君、次六芳衍、登科不祿、二女長慶慎宮主、適贊成事李佇、次慶善宮主、適青原君沈淙、上王妃金氏、今封王大妃、贈左侍中天瑞之女、我殿下配靜妃、驪興府院君領藝文春秋館事閔霽之女、男長、元子禔次三男皆幼、女長貞順宮主、適清平君李伯剛、次慶貞宮主、適平壤君趙大臨、餘皆幼、鎮安娶贊成事池淵之女、生男曰福根奉寧君、女適少尹李叔畝、益安娶贈贊成事崔仁科之女、生男曰石根元尹、女適僉摠制金閑、懷安娶贈贊成事閔璿之女、生男孟宗義寧君、女適宗簿令趙愼言、餘皆幼、臣近嘗觀三代聖王后之德、莫盛塗姒、載在詩書、千古炳耀、神懿之德、誠可儷美、弟以臣近學識膚淺筆力鄙拙、雖極形容盛德、如繪天地、曷能髣髴其萬一、哉、敢稽周雅大明思齊之義、謹述銘詞、拜手稽首以獻、其詞曰、上帝赫々、啓佑有德、匪伊私之、爲民之極、其啓維何、迺生柔嘉、來配于德、允宜室家、載震載育、厥靈是赫、篤生聖哲、天人攸屬、扶翊聖父、誕作民主、躬朝帝庭、保我邦土、孽芽之萌、炳幾維明、廓爾汎掃、宗社載寧、功成克讓、以尊嫡長、彝倫既正、基勢益壯、迺遭牆闕、不忍致辟、俾獲保全、友愛彌篤、維德之隆、維功之崇、宜紆帝眷、錫命稠重、明々帝誥、煌々金寶、我龍受之、萬世永保、奧維王迹、祖宗攸積、誕我聖神、繫繇后德、臣拜稽首、獻辭不苟、萬世昭垂、天地永久

〔高麗成陵〕 楓川里と青郊面排也里の境、壤陽峴にあり、高麗王順宗の陵である。

〔高麗貞陵〕 上道里鳳谷にあり最も荒涼し殆んど王陵の制を失ふ正面には高麗神威王后貞陵と標し石人一対あるのみ石欄は埋没して頭部のみ現はせども他は何物もない封土崩れて石物の如き者現はる護壁等失はる。



〔鳳谷の寺址〕 貞陵の右方の溪谷にあり石壇を残せども寺名を明かにせず貞陵の造泡寺なりしならん。

〔佛堂谷〕 楓川里にあり同谷の山腹に石佛二體を存す高各約三尺、一は僧形をなし一は冠帽形の座像である、其傍に石壇址あれば寺ありしならんも其名明かならず唯瓦片を散亂するのみ近傍に湧泉ありて谷に流れ下る。

〔李敏政墓〕 鳳谷洞にあり。

〔李宗城墓〕 三仁里鵲谷にあり。

〔申光弼墓〕 楓川里樟項洞にあり。

### 交通

〔等外道路〕 楓川里を中心とし北の方青郊面排也里を経て開城に至る者あり又西の方漢橋川に沿ふて下り光徳面の堺に至り三等道路に合する者あり、新村より南に別れ羊司里池洞を経て興教面に至る者あり、三仁里を経て中面松山里に至る者あり。

間道は各里各洞の間に通ず。

### 上道面終

## 第十四章 進鳳面

### 位置境界

郡の東南に位し、東北は東面に境し東は馬尾川を隔て、長湍郡郡内面・津南面に對し、北より西は青郊面・上道面に包まれ、正南は中面に接す。

### 廣袤

東西二里五町、南北二里十町、面積約三万里、郡廳を距る一里十八町。

### 戸數

内地人十八朝鮮人九百七十九外國人一計九百九十八。

### 人口

内地人男三十八女三十九計七十七、朝鮮人男二千五百六十女二千三百八十七計四千九百四十七、外國人一、通計五千〇二十五。

### 區劃

鳳東里（往時の大足里）清潭洞、旺公洞、蓼川洞、河内洞、養院洞、官倉洞、新村洞、佛堂洞、正開洞）興旺里（興王寺址あるを以て名く）巨珍洞、報榜洞、馬月洞、山踰洞、竹洞、久村洞、孝禮洞、士時洞、造江洞、山上洞）芝金里（長芝山里・金岩里を合した者）長芝山、物外洞、雲門洞、瓦洞、

金岩洞、南村洞）都平里（都羅山里・平昌里を合した者）閔村洞、朴村洞、新垓洞）炭洞里（法化寺、道味洞、百花潭洞、瓦垓洞、元明洞）。

### 沿革

往時徳水縣に屬す。

按ずるに徳物山城址は高句麗時代の徳勿城で新羅に至り徳水縣となつたが高麗の時興王寺を創する爲に縣治を南に移したとある者はれならんか。

後豊徳郡の管に歸し徳北面と稱せられたが大正三年四月郡面廢合の時開城郡に屬し進鳳山の名によりて進鳳面と名く。

### 地勢

進鳳山は面の西北に聳え其脈南走して興旺里に亘り南方は徳物山突起して中面天徳山に連る、此の兩山脈の間平野處々に挟まり鳳東里より興旺里に細長なる平田を開く、鳳東里より東部は鐵道線路に沿ふて芝金里に及び又一連の平田を展開す。

### 山峰

〔進鳳山〕 高千〇二十三尺鳳東里の西南に聳え面内最高の山で往時は開城府

に屬し松岳の客山と稱せられた、山の内外杜鵑花盛んに開き世に進鳳山の躑躅として賞せらる。

## 進鳳山

柳 得 恭

荒涼二十八王陵、風雨年々暗漆灯、進鳳山中紅躑躅、春來猶自發層々。

〔德物山〕 往時德積山といふ興旺里にあり高九百五十尺頂上に烽燧址あり昔東は交河縣黔丹山に應じ北は開城府松岳山城隍堂に應じた、又德積山廟祠あり高麗の忠臣崔瑩を祀る、舊祠は青瓦を用ゐ結構美を極めたが後年火災に罹り現今の堂宇は三間二面中央に崔將軍夫妻の木像を安置し正面に竹城明默堂と篆額し外椽に小額を掲げ左の記事あり。

嘉慶十年乙丑（朝鮮純祖五年、本朝紀元二、四六五年）五月日、竹城明默堂重修、而本堂諸人協力營記、亦自松營監董出送而竝率合邑工匠改爲營建也

經紀有司嘉善李尙彩外十餘の姓名を列記す。

頂上を山上洞といひ私立金城學校あり。往時松嶽大井と共に巫覡の祈禱所とし

て春秋の候遠近の信者聚合し今猶七戸の巫女あり絶頂四十餘戸の部落民等多くは是等の參詣人を以て生計を營むと謂ふ。

崔瑩は高麗末朝の人で父は雍、惟清が五世の孫である、性剛直忠清で膂力人に過ぐ陣に臨み敵に對する毎に神氣安閑として矢石前に交るも懼るゝ所がない、戰士一步を退けば必ず之を斬るので大小百戰未だ曾て破れたことはない、初め瑩の父は終に望み瑩に戒めて曰ふ汝當に金を見ること石の如くせよと、瑩佩服し終身生産を事とせず、居所甚だ陋なれ共之れに處りて怡然としてゐた、服食も儉素で屢空乏に至る、肥馬に乗り輕衣を着る者を見ること犬豕の如くである、身は將相を都べ允く兵權を典るも而も節を失はない世其清に服した、務めて大體を持し細理を究めず、都堂に赴く毎に正色直言し少しも隱諱しなかつた、然し性小慧で學術なく、事皆斷ずるに己が意を以てし、殺を喜び威を立て遂に李成桂の計に陥りて誅せられた、時に年七十三、瑩刑に臨むの日に曰ふ、我平生若し貪慾の心あらば則ち墓上に草を生ずるであらふ、然

らざれば生じないと、墓は高陽にあるが今に至るも禿楮である、人之を赤墳といふ。

河川

〔馬尾川〕 沙川の別名である、清潭洞の部落を流るゝ故に名く、清潭洞は俗馬尾洞と云ふより起ると謂ふ、東面より本面都平里に入り長湍郡郡内面・津南面との間を南流して中面に入る。

〔蓼川〕 進鳳山より發し東流して馬尾川に入る。

土地

〔國有地〕 なし。

〔民有地〕 田八百三十八町一反、畑八百六十四町七反、宅地四十四町一反。

〔林野〕 二千六百三十三町〇七畝。

産物

〔農産物〕 米類七千三百九十石、麥類二千〇二十七石、豆類九百〇四石・粟

三百五十九石、棉四千九百七十五斤、莞草五百二十五貫、煙草百二十六貫、馬鈴薯六千五百五十五貫、蘿蔔六萬六千三百五十貫、白菜四萬四千七百五十貫、甜瓜二千九百七十貫。

部落 三十戸以上

鳳東里養院洞、戸數三十二面事務所・警察官駐在所あり。

同上河内洞 三十五戸。 同上清潭洞 七十戸。

興旺里竹洞 三十二戸。 興旺里山上洞 四十戸。

芝金里雲門洞 三十戸。 芝金里金岩洞 五十戸。

芝金里南村洞 六十戸。 都平里閔村洞 五十戸。

都平里朴村洞 五十戸。 炭洞里前溪洞 五十戸。

社寺

〔道誂菴〕 進鳳山の西腹炭洞里陵洞にあり禪教兩宗で本尊は釋迦牟尼佛、住僧四人尼二人、江華島傳燈寺の末寺である。

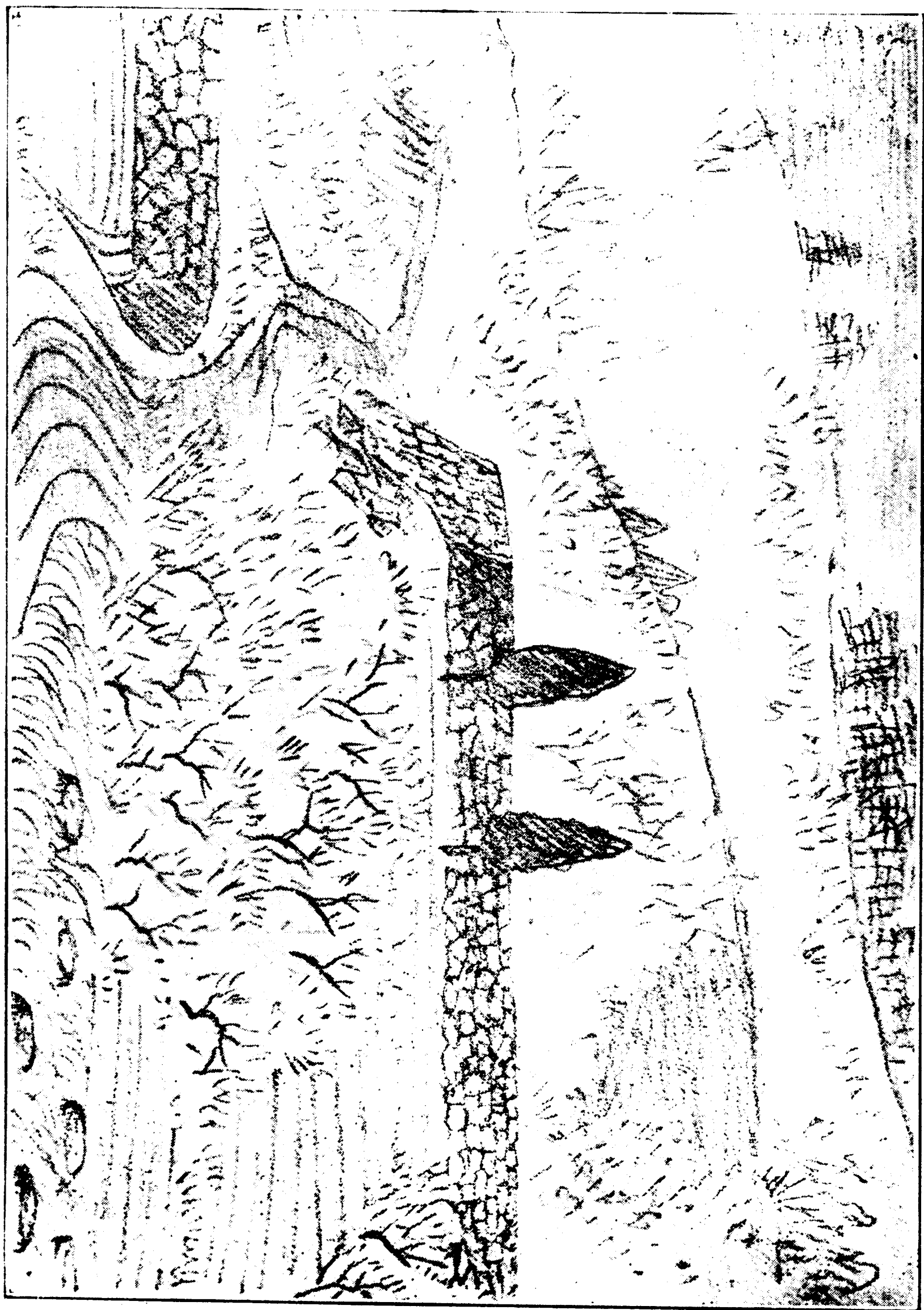


〔玉泉寺〕 進鳳山の北麓炭洞にあり、本張氏の齊宮なりしを寺となす禪教兩宗で阿彌陀佛を祀る、住僧六人傳燈寺の末寺である。

傳へ曰ふ高麗の季に創建す、寺の西麓に冷泉あり曾て李太祖潛邸の時皮膚病にかゝり此の泉に沐浴して全癒すと故に今猶秋に至れば治療者多く集まる。

### 古蹟

〔興旺寺址〕 興旺里德物山の西麓にあり、廣大なる區域に亘りて石壇・礎石等残り、又遺井・石佛の破損せる者等あり其他焼爛した瓦片磚磚等縦横に散在す。麗史曰、高麗文宗十年丙申二月創立し王の願堂とした、當時此の地方は德水縣であつたが爲に德水縣治を揚州に移したと云ふ、此の寺の工事は十二年間を要し二十一年丁未（本朝紀元一七二七年）正月落成凡そ二千八百間あつた、王齋を設け之を落せんとせしに四方から僧侶群來し殆んど算ない、王兵部尙書金陽等に命じ僧の戒行ある者一千人を撰び會に赴かしめ仍て恒住せしめた、二十二年特に燃燈大會を設くること凡そ五晝夜、百司及び安西都護・開城



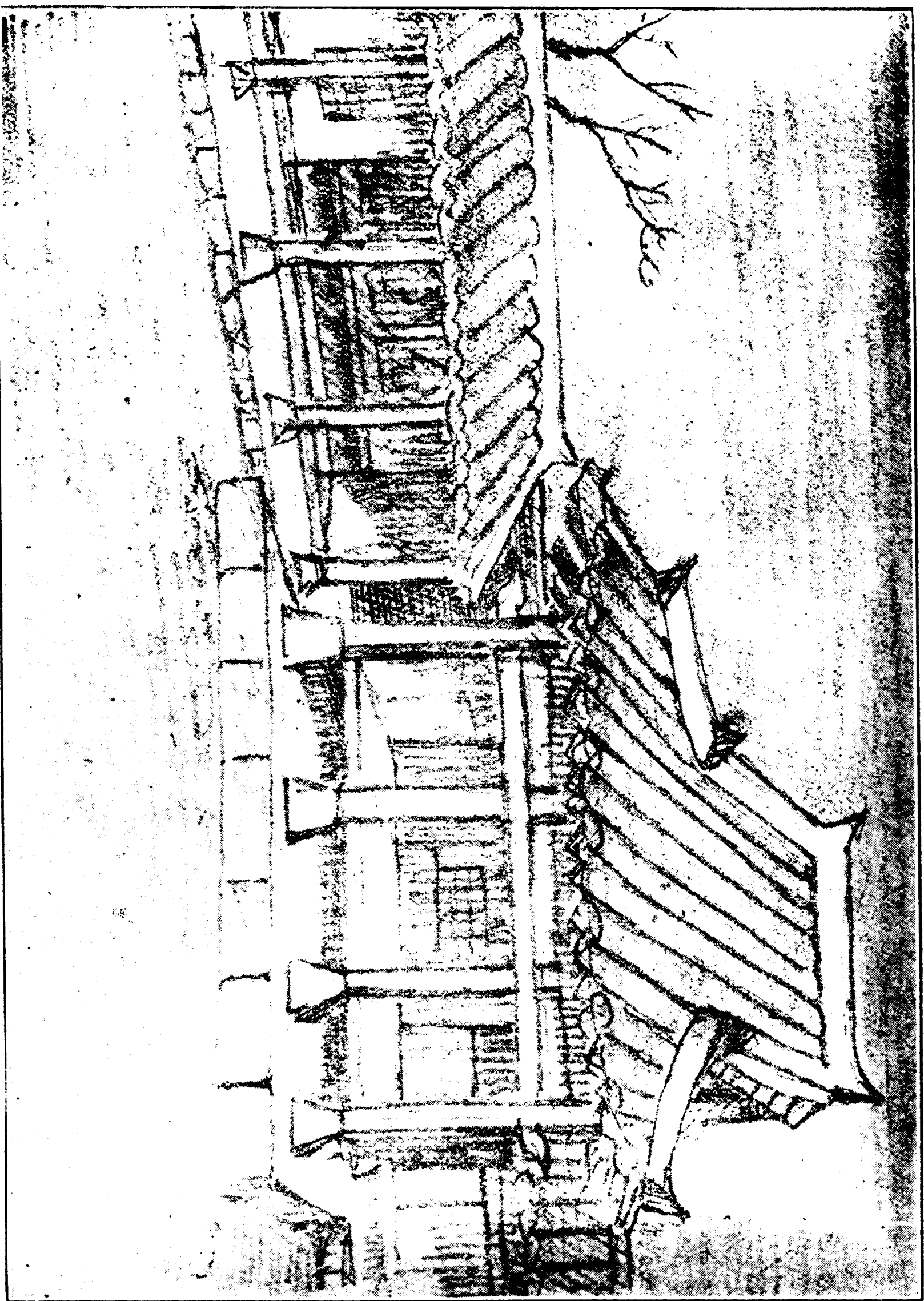
進鳳面 社寺 古蹟

府・廣・水・楊・東・樹の五州江華・長湍の二縣に勅令し闕庭より寺門に至るまで彩棚を結ばしめ櫛比鱗次し連互して輦路の左右に相屬し又燈山火樹を作り光照して晝の如くであつた此の日王は鹵簿を備へ百官を率ゐて行香施納す佛寺の盛んなる曠古未曾有であつた又金塔を造り凡そ金一百四十四斤銀四百二十七斤を用ゐたと謂ふ、是より王屢此の寺に幸した。

其後元兵入冠都を江華に移すの時兵燹に罹り堂塔伽藍一空に歸した、爾來屢次修復したが又屢次毀れて完全なることを得なかつたが忠肅王の十七年華嚴僧等相謀りて再興を劃し九年にして成る李穀記に曰。

今天下廟食之尤盛者、釋氏老氏孔氏也、孔子之廟籩豆之事、則有司存、不<sub>レ</sub>敢于以<sub>レ</sub>私、盖報<sub>レ</sub>本而已、若<sub>レ</sub>釋老氏則其宮廟像設、無<sub>レ</sub>定制無<sub>レ</sub>常所、人無<sub>レ</sub>公私貴賤、皆得<sub>レ</sub>以事<sub>レ</sub>之、亦其求<sub>レ</sub>福者然也、本國地雖<sub>レ</sub>極東、而於<sub>レ</sub>西方之教、行<sub>レ</sub>之最先矣、王城之南二十里有<sub>レ</sub>寺曰興王、寺之内有<sub>レ</sub>院曰興教、實文王之所創而東方之巨刹也、寺火遷都之際、屢修屢毀、不能<sub>レ</sub>完復、至順庚午、華嚴諸師相謂

曰、文王之創此寺也、極宏壯侈麗、而又廣其土田、贍其資儲、務勝於諸刹者、蓋重吾法也、吾徒無事於世、而衣食於人、優游以卒歲、坐視院門之廢、而不之修、是重我過也、因約各損囊鉢之儲、市材庀工以新本院、又俾晶照達幻一師、走輦轂以幹落成之會、後九年而院成、其殿堂廊廡、撤故而新之者、以楹數之、得一百六十其歲夏、幻師以法會所需衣盂、威儀之物、自都下歸、又蒙典瑞使申當住等、奉太皇太后之命、降香幣、用光佛事、秋八月丙戌、始開廣學會、爲日十五、爲衆二百、執事之人、凡二百、王城內外士女之奔走供養者、不可勝計、香華供具、皆致其精、諷誦講論、必臻其極、如躬參九會、而聽瞿曇之說、盛矣哉、會既畢、幻師具巖末示余曰、始吾與照入京師、將以辦茲會也、照不幸早世、而吾能成之、且諸師之志、不可以不傳於後、請記之、余未嘗讀釋氏之書、不知所謂云々者、姑以儒言之、凡人之寒衣而飢食、就利而避害、又知綱常之懿、禮義之正、而不爲禽獸之歸者、孰教之而孰傳之然耶、蓋思其本而報之乎、儒學孔氏者也、視其廟學之



德物山崔鑒廟祠



廢、而慨然有動于心目者蓋寡、而釋氏之徒、有能孜孜化誘、新其宮廣其業、如幻師輩多矣、其不謂不負其師、吾不信也、爲其徒者、當懋其師之說、初不計其道何如、是宜釋教之盛行、而求福之日進也其一會衆竝檀那名氏具列于左云々

口碑によれば恭愍王の時國師辛頓が住持となつたが頓誅せられた後天火に打たれ全部烏有に歸し終れりと傳へらる。

#### 興王寺址

成 任

春風吹動行人裾、行人立馬興王墟、禪龕宮闕兩消歇、壞垣遺礎令人歎、田頭野雉忽飛翹、山上浮雲時卷舒、伊昔文宗臨幸日、挾杖彩棚山不如、自京徂野見雲錦、期衡有目皆吁嗟、逆豎一炬成焦土、朱甍畫棟都無餘、繁華誰致亂誰使、興廢班々青史書、披襟弔古意悽慘、欲去未去空躊躇。

〔德物山城址〕 高麗の時外山城と稱し石城があつたが崔瑩の廟を造る時其石を利用し廟宇民家を建てたと傳ふ。



〔高麗景宗榮陵〕 進鳳山東炭洞里思斤洞にあり陵は崩れたるを積み直したる者の如く護石の方向正しからず十二神像は一個明かなるも形體不明他は皆摩滅す石欄は五個存し他は毀損す石人は二個立ち標石は明かに陵名と干支丁卯九月立とを認むべし後の屏障は石垣崩壊せり石壇は三階あり祭閣の跡は圓形を刻せる柱礎存す祭閣の下左方に建築物の礎石稍正しく竝列す其下方に石壇ありて崖をなす背後の土留は石材を用ゐたる者の如く崩れたるも廣大である、無數の瓦磚散亂し麓に龜趺形の巨石あり碑石は失はれて無し。

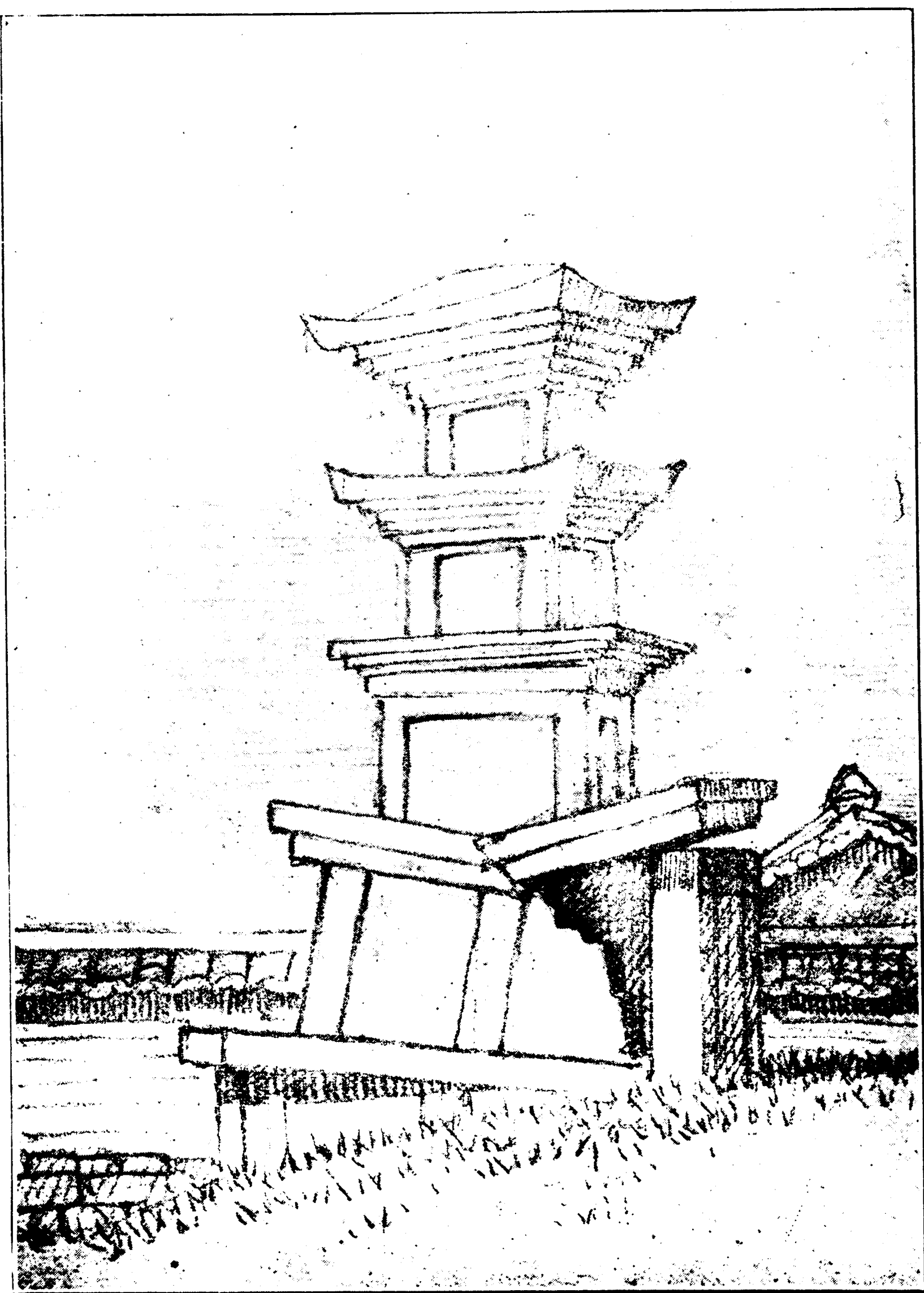
〔高麗古墳群〕 進鳳山の西麓にあれ共皆盜掘し盡さる。

〔大將軍張鵬翼墓〕 炭洞里百花潭洞にあり。

〔洪致中墓〕 興旺里孝禮洞にあり、下に鶴栖寺趾あり生前冥福を祈る爲に造りし者といふ今無し。

〔權禪墓〕 芝金里長芝山にあり。

〔塔谷の石塔〕 興旺里塔谷にあり三層の古石塔ありて臺石の上に立つ高約一



興旺里塔谷の塔

丈二三尺あり臺石の側面は破れたり塔の上邊に墳墓ありて塔の傍らに白書齋と稱する墓守の家あり。

〔石 佛〕 鳳東驛の北鳳東里新村の路傍に藥師佛の座像あり高約三尺幅二尺前に臺座あり元此の上に坐せし者ならん寺跡なるべし。

#### 交通

〔鳳東驛〕 鳳東里新村にある鐵道停車驛である、東南は長湍驛に西は開城驛に至る。

〔等外道路〕 開城より來り面事務所を経て東面機井洞に至る。

〔里 道〕 中面より來り興旺里・鳳東里を経て開城に至る者、面事務所前より東面に通ずる者、興旺里より上道面楓川里に至る者等あり。

#### 進 鳳 面 終

## 第十五章 青 郊 面

### 位置境界

郡の中央より稍南に偏位し北は嶺南面・松都面・中西面に隣り、西は南面に接し、南は光德面・上道面に境し、東は長湍郡津西面及本郡東面・進鳳面に包まる。

### 廣 表

東西一里二十九町、南北一里二十五町、東北より西南に斜めに延長すること三里七町に及び、面積約三方里一七〇郡廳に至る一里あり。

### 戸 數

内地人十五朝鮮人一千七百六十九外國人二、計一千六百八十六。

### 人 口

内地人男四十三女四十、計八十三朝鮮人男四千八百四十女四千九百二十三計九千七百六十三、外國人男二、通計九千八百四十三。

### 區 劃

德岩里一區（松鶴洞、外崇祿洞、内崇祿洞、瑤泉洞、新村洞、龍化池洞、金峴洞、夜橋洞）德岩里二區（井洞、内德岩里、外德岩里、移民洞、青郊洞）古南里 高麗羅城の南門ありし故に名く（馬郎洞、水鐵洞、大沙岩洞、河哥洞、孫井洞、

妣殿門洞）

面事務所在地陽陵里（水落岩洞、大陵洞、熊川洞、多肥洞）排也里（上康陵洞

下康陵洞、玄化洞、許豐洞、冷井洞、興門洞、礪石洞、弘農洞、三佐郎洞）裕

陵里（念佛洞、陵洞、聰陵洞、圓山洞、前村洞、鉢山洞、礪石洞、三佐郎洞、虎

峴洞）廣番里

舊廣川里と泥  
番里を合す

（上泥番洞、下泥番洞、間洞、廣川洞、濟良洞、玉輦洞、

勝戰鬥洞、射亭洞）

舊墨只里と松  
峴里とを合す墨松里（黔岩洞、缶山洞、松峴洞、暮砧洞、磚積

洞、内洞、大池洞、升昉洞、墨只洞）

### 沿 革

高麗の時開京の東郊に驛站ありて青郊と稱す面の名蓋し茲に起因したのである、初めは開京に隸屬し往時の沿革は略松都面と同じであつたが青郊面を置くに當り開京の東部京坊・南部都助・郭莊・九里介・彌造を分割して其管に入れ德岩、排也・裕陵・廣川・墨只・玄化の六里となしたが後に陽陵・泥番・松峴の三里を加へて九里となり大正三年四月郡面廢合の際德岩・古南・陽陵・排也・裕陵・廣番・墨松の七里となり、大正十一年七月更に德岩を二區に別ち八里となる。

### 地 勢

松都面との間に龍岫山横はるのみにて面内は一樣に兵陵起伏し峯

巒と稱すべき者なく其間處々に狹小な平田錯綜し小部落の點在を見るのみ。

峴嶺

〔勝戰鬥峴〕 中西面と本面との間廣番里にあり。

勝戰鬥の名は姜邯瓚大に契丹軍に勝ちし紀念として羅城門に名けしより起ると云ふ。

〔龍岩峴〕 松都面との界・陽陵里水落岩洞の北にあり。

〔古南門峴〕 古南門にあり。

〔千兩峴〕 豐徳に至る道路上にあり。

此の峠を開鑿するに千兩を要せる故に名くとか。

〔於頭峴〕 三佐郎洞にあり。

高麗の時佐郎の兄弟三人あり此の人日々朝に登り退城の時此の峠に至る頃常に日暮となる故に闇峴と呼ぶる、闇は於頭<sup>おさ</sup>なり。

〔虎 峴〕 裕陵里虎峴洞にあり。

〔赤 峴〕 排也里許豐洞にあり。

河川

〔砂 川〕 嶺南面と長湍郡津西面の界より來り、舊青郊驛の東部を彎流して烏川を加へ東面に入る。

〔烏 川〕 松都面橐駝橋下より來り東流して徳岩里・古南里の間を過ぎ砂川に入る。

〔熊 川〕 源を廣番里より發し、東流して排也里より來る一水を加へ、古南里に入り東北に轉じ、妣殿洞・大沙岩洞を過ぎて又北に轉じ、鐵道橋を過ぎて烏川に入る。

熊川楔飲

李 齊 賢

沙頭酒盡欲斜暉、濯足清流看鳥飛、此意自佳誰領取、孔門吾與舞雩歸。

土地

〔國有地〕 田七町一反畑八十八町四反宅地七反。



〔民有地〕 田七百五十七町二反畑一千四百六十三町六反宅地八十一町八反雜種地八反。

產物

〔農產物〕 米類九千七百二十四石、麥類二千八百六十二石、豆類二千四百八十五石、粟千百九十石、稗二千三百二十九石、棉七千七百七十斤、莞草一千三百四十四貫、煙草百八十貫、甘藷六萬二千二百四十貫、馬鈴薯四萬〇百二十五貫、蘿蔔一萬四千八百三十貫、白菜十萬八千五百十貫、甜瓜一萬八千六百十貫、苹果三萬五千三百八十四貫、梨三千四百八十貫、葡萄四百十貫、栗四萬四千五百貫。

部落

三十戸以上

德岩里井洞	八十戸。	古南里馬郎洞	三十戸。
排也里許豐洞	五十戸。	裕陵里聰陵洞	三十戸。
廣番里廣州洞	五十戸。	墨松里墨只洞	七十戸。

教會堂

〔德岩里禮拜堂〕 德岩里にあり基督教南監理派大正十年一月設立。

古蹟

〔步仙亭〕 德岩里步仙岩の前にあり往時武士習射の所。

〔扈輦臺〕 李朝太宗潜邸の時練武の所で俗に太宗臺と稱す高麗古羅城壁に當る、其東側に墓地あり樅松茂り遠く望めば臺上の紀念木の如くである、其西南麓に石材採取場がある。

俗稱す太宗常に滿月臺の變を窺ひ扈輦を茲に隠し置きて直に進發に備へたと〔登槃岩〕 古南里領井浦街道の路傍にあり、巖あり大さ十八九尺平盤にして中央凸字形をなし血色に似た二條の班線がある。高麗の忠臣孫登・河槃殉節の所と傳ふ、大正三年八月開城保勝會にて建てた木標があり高麗忠臣孫登・河槃殉節遺址と標し裏面に左の文を記す。

孫登、審陽人恭愍王六年、以判開城府事如元賀正、河槃、不知何郡人、官

獻納、開城古南門路傍有登槃岩、石紋兩條正亦類血色、岩之西又有孫井河哥洞在、傳二人同居一閣、當革命日、北向拜闕、觸頭岩石死去。

〔元敬王后誕降舊地碑〕 開城より三等道路古南里水鐵洞の入口水田を隔て、二三町の左方鐵道線路の南側に碑あり、元敬王后誕降舊地基崇禎紀元後四千午十月日と刻し閣を豎つ、閣は周圍石垣を以て圍み門あれ共頗る荒廢す、又閣外に驪興府院君文度公閔霽女元敬王后誕降之墓と刻せる古碑あり、其四周亦土堀ありし者の如くなれ共皆破れて形迹を失ひ瓦石を散布するのみ。

碑閣記に曰。

元敬王后閔氏、太宗恭定大王坤極。而誕降於驪興府君本第、即此之也、伏惟皇天眷命、翟儀配尊、盛德陰功、協贊龍飛之會、綿嘏弗祿、篤膺麟趾之慶、實啓我萬億年宗社無疆之休、原始溯本夫豈偶然也哉、寶鼎既定、貴戚世家亦隨而南、本第則墟落空曠今直爲樵牧之藪、亂礎層砌、畧可辨其遺基、而舊有短碑、載沙麓之祥、乃府院君裔孫私識也、臣鞠源、待罪居留、適得民間流傳、馳進奉審、

後取閔家所藏文獻、始伏觀肅廟英廟兩朝、皆有成命、飭本府豎碑、遺墟植木環標而特本府有事、遂爲年久、未遑之舉、臣翰源惶恐不敢目隱、撫實以聞于朝、領議政臣金戴、載筵奉睿旨、趣令改碑守護一如守臣所請、臣翰源退而亟治新石、顯刻八大字、就本第誕降舊基、跼而安之、上建小閣、舟艘如制、仍置守直人戶、蠲其徭使、得專奉修掃、廣植檜松爲永遠之圖、夫山川之毓靈厚矣、日月之胚精久矣、塗華盛蹟、始彰於四百年之後、竊意在天洋々默賜指導、有符於基命宥密之昌辰也歟、嗚呼異哉、石材納用清道白氏家畜永蠲戶役、

李朝太宗の妃彰德昭烈元敬王后閔氏驪に籍す、門下左政亟驪興府院君文度公霽の女、至元二十五年乙巳恭愍王十四年七月十一日松京鐵洞の私第に誕す、洪武壬申靖寧翁主に封ぜられ庚辰貞嬪に冊封せられ貞妃に進封す、戊戌厚德と尊號、庚子（世宗二年）七月十日壽康宮別殿に昇遐す壽五十六。

〔靈源亭〕 墨松里松峴の路傍にあり一亭を造り石壁を三方に圍らし一方は溪

流に沿ふ亭は靈源亭と扁額し又山色水聲樓、第一名泉などの扁額あり溪を隔て薬水を湧出し夏冷にして冬温なり都て此邊の溪石奇紋ある者多し開城の人安氏の所有と云ふ靈源亭記の小額を掲ぐ文に曰く。

## 靈源亭記

泉之源或濁而不清、或清而不冽、幸而利於溉灌、不幸而棄幽邃、或渟渟而不發、或峻急而不安、而源之靈異者固不可容易得也、崧之南二十里有墨溪、洞壑軒濶、山林稠密、中有大峯聳然特立、即余先君勉齋公壽藏之地也、自其東上數十武、有一小邱、邱下盤石硯礪其奇絶、石之上坎甃作井、甘泉湧出焉、昔有一鷺折脛而飛下飲啄之、既月完續而去、此乃故老相傳其靈異者也、自是以後、人之有病者、爭赴飲濯於斯、而滯崇消、冷症甦、其於百症無不有效、余嘗以濕痰滯噎苦之者久矣、每於湫行因而飲濯、前症頓蘇、余之謂靈源者不亦宜乎且夫此源邊不窮峽、介於大坪之上、清而不濁、冽而且甘、既得灌濯之利、而無幽邃之嫌、不渟渟而溢、不峻急而安、涓々而聞者

與耳謀、灑々而瀾者與目謀、潘泳發源者與心謀、能使吾臨之而不能捨也、然吾之愛是、非徒愛其靈又有所感焉、唯不感而已、尤有所敬焉、余之所感且敬者、有永遠之慕寓此泉而俱達者也、因與村下老少、負土累石、平其原、垣其途、亭于其上、左右種樹以爲隄、築石以爲牆、又居村之力居多焉、噫爲吾子孫登斯亭也、不忘愛敬之心、而克追愛敬之誠、當如此泉之不捨也。

## 壁上韻

墨溪之上有靈泉、夏冷冬暖味澹然、飲啜茶湯消積痞、逍遙筇履得眞緣、松杉密邇先塋地、烟靄平開別洞天、亭以靈源流下竭、願言修葺後來傳。

丁卯仲秋上浣

竹史安 翊良識

〔細谷の冷泉〕 古南里にあり冷泉湧出し夏時婦女多く集まり病に效ありと稱す、細瀑あり風致宜し。又排也里にも一冷泉ありて婦女多く集まる。

〔水落岩洞の古墳〕 龍岫山南・水落岩洞にあり、大正五年の頃發見せられ玄室



は長方形にして左右後三面の壁は數層に切石を重ねて作り其上に薄く漆喰を塗り壁の下部は白虎青龍玄武を各彩色を以て畫き其上部には各面三軀づゝの方位神像を作つてゐる、此等の神像は何れも衣冠を着け冠の上に其方位に相當する動物の像を現はしてゐる正面入口には木製方立の痕跡あれば此處に扇を設け扉面に方位神及朱雀圖を描いてあつたものと思はる筆意溫雅にして面白い姿勢亦よく齊ふてゐる、天井は三石を並べて作られてあるが漆喰は剝落して如何なる者を描いてあつたかわからぬ。美術史

余は大正十四年九月の頃同墳を視察せしに正面の中腹に穴あり玄室中に降るを得べし、室内は九尺に十二尺高さ又九尺位四壁の漆喰剝落せるも大石の切石にて疊み天井は三個の大盤石にて覆ひたり壁畫は大半剝落し内部は空洞で何物もなく中央に長方形に列べた石基あり棺臺なりしならんも棺はなく唯腐蝕した木片及鐵釘の腐蝕したもの又人骨の足指片と覺しきもの土器の破片等あり此の墳は一旦總督府の保護を経たものと見え外面に鐵條網を圍らし左の

碑を立てあり。

#### 京畿道開城郡青郊面陽陵洞第一號墳

大正五年六月調査を遂げ六年十月修理を終り七年十二月壁畫を模寫

大正八年十一月

朝鮮總督府

然れ共鐵條網は一部取除かれ戸扉は破壊され屢々人の出入せる者の如し。

〔龍化池跡〕 德岩里龍化池洞は高麗の時龍化池のあつた跡である、穆宗の時此の邊に崇教寺といふ寺を造つて願刹としたが寺僧が或る時夢に大星が寺の庭に隕ち變じて龍となり又化して人となつた其人は顯宗であると見た、時に顯宗が十二歲千秋王后に忌まれ祝髮して崇教寺に居たが衆人之を聞いて不思議に思つた、後果して王位に登つたといふ。

麗史曰高宗の時池魚盡く出で、水に浮び數日にして死す人食する者あれば亦死すと。

李齊賢が雲錦樓記略に曰(前略)京城の南に池あり方百畝ばかり環つて居る者



閭閻煙火の舍、鱗錯して櫛比す、負戴騎歩、其傍に道して而して往來する者絡繹として後先す豈齒奇閑曠の境乃ち其間に在るを知らんや、後至元丁丑の夏、玄福君權侯見て而して之を愛し、池の東に直り地を購ふて樓を起し、尋を倍して以て崇となし、丈を參して以て袤となし、礎せずして而して楹するは朽ちざるを取るなり、瓦せずして而して茨するは漏らざるを取るなり（中略）一池の荷花盡く包んで之を有す、是に於て其大父吉昌君を請ひ兄弟姻婭と其上に觴し怡々愉々竟日歸るを忘る、子に大書を能くする者あり、之をして雲錦の二字を書せしめ掲げて樓名となす云々。

是れによれば往時は雜開の市中にある蓮池であつたようである今は水田と化した。

〔保定門址〕 龍化池洞の東南京城街道の路上にあり門址今破れたるも其の附近に二十五六個の頌德碑並び立ちて其俤を残す、即ち高麗羅城の保定門址で其石碑には萬曆天啓崇禎等の干支を紀せり。

〔開國寺址〕 保定門址附近京城街道の南邊にあり烏川の氾濫の爲に埋没し今何の遺物もなく水田と化せり、曾て幢竿・石塔ありしも石塔は本府博物館に移されたりといふ、李齊賢の重修記畧に曰原漢文

（前略）都城の東南隅其門を保定と曰ふ、其路は楊廣・全羅・慶尙・江陵の四道より都城に來る者、彼の都城より四道に之く者と憧々然として晝夜となく息まざるなり、川あり城中の水、澗溪・溝渰・遠近・細大・咸會して而して東す、毎に夏秋の交雨潦既に集まれば崩奔汪濊三軍の行の如し吁畏るべきなり、山あり鵠峯に根し邐迤として來り、頰して起つが如く鷺の止まるが如く、猶龍虎の變動して氣勢の雄なるが如し、世斯の地を號して三鉗となすは豈是を以てならんや、清泰十八年太祖術家の言を用ゐて寺を其間に作り以て方袍の學律乘と謂ふ者を處き之を名けて開國寺と曰ふ、時に征役始めて定まり萬事草創卒伍を募りて工徒となし戈楯を破りて結構に充つ、兵を偃せ民を息むるの意を示す所以なり、壬辰（蒙古の亂？）に火し重新を爲すなし僧寮佛宇以て風雨を庇

ふなく戒壇墟となり講肆蕪なり、日に月に以て損し無に至る、然れども物は以て恒瘁なるべからず時を得て榮へ、道は以て終否なるべからず人を待つて興る、故に我が南山宗師木軒丘公、辨才義解を以て號を定慧妙圓慈行大師と賜ひ頼綱を振起するを是れ任とす、一日衆を集めて告げて曰く(中略)衆聞て其意を噫り、扼腕慙慙、宗門諸刹に牒し徵を科し徒を役し、(中略)至治癸亥(忠肅王)より泰定乙丑の秋迄(其間三年)功を畢り慶會を作して以て厥成を落す、見聞する者嗟嘆せざるはなし云々。

## 開國寺

金履祥

長竿雙石立沙中、流水無情去向東、天壽遠連晨靄白、龍巖近帶夕陽紅、居人耕地埋殘碣、過客垂鞭立晚風、作記尋僧人不見、文章兩李憶詩翁。

〔妙蓮寺址〕 開城より一等道路を東に往き橐駝橋を渡れば左方に丘陵あり其南麓を三峴といふ古道である、今老槐一株を残す此の附近に麗代の妙蓮寺址ありて古瓦片を散亂す李齊賢の重興碑に曰 原漢文抄出

京城の鎮を崧と曰ふ其東岡南に迤き岐れて西折し微伏して豊起し又分れて南し三峴となる、遠く之を望めば龍蟠の如く近く之を視れば鳳峙の若し、龍の腹に據り鳳の膺に附し佛者の宮あり妙蓮寺と曰ふ、我忠烈王齊國大長公主と佛氏を尊信し謂らく入佛の法法華經最も遂にして暢經の義天台疏悉く備はると勝地を卜し精舎を立て繡經以て其道を求め講疏以て其義を研き將に天子に祝釐し宗祐に邀福せんとする者なり、堂を至元二十年の秋に構へ明年の夏にし落成す、開山は師子庵の老宿洪恕實に惟れ其人、圓慧國師に泊て主盟結社し恕父之れに副たり、三傳して無畏國師に至り學者益臻る、忠烈王より既に嘗て圓慧に重席し無畏に攝齋す、忠宣王最も其禮を重んず凡そ院門禪教列刹を光護する所以敢て望むなし、無畏より前なる者、禧と曰ひ因と曰ふ、無畏より後なる者、芬と曰ひ璉と曰ひ泓と曰ひ焔と曰ひ如と曰ふ、今に及んで堂頭を吉と曰ふ皆釋林の選を以て相繼で維持し鍾魚香火始に替るなし、而して棟宇の撓傾・盖瓦級甃の腐且缺、蓋し六十年の久を経、勢の必ず至る者なり、順

庵旋公は圓慧の嫡嗣、無畏の猶子、天子號を三藏と錫ひ命じて燕都の大延聖寺に駐す、後至元丙子降香東歸す、從容として忠肅に言ふて曰、妙蓮の寺たる忠烈・忠宣の祇園なり、故に殿下に在りて葺して之を新にするは、奉先の孝孰か之より大なる者あらんやと、大王聞て感あり、遂に金銀寶器數百萬を捨て諸を常住に歸す、其徒相勸め或は甚し以て謀り、或は其力を奮はざるなし維の寢維の堂維の厠維の廊、撓める者は繕ひ傾ける者は立て、腐れる者は易へ缺ける者は補ひ、象設の儀を侈にし齋厨の費を贍たし、青松を益樹し繞すに崇墉を以てす、旋公大字を善くす、乃ち佛殿の額を金書して之を簷間に掲ぐ、光日星と爭ふ則ち又相慶せざるなし、以爲らく能事畢れり、宜しく石に刻し後に示すべしと、辭を朝に請ふ、王臣某に命じて文を爲らしむ云々。

三峴の下一等道路に沿ふて石碑群あり豊壤趙氏・南陽洪氏等の遺愛閣及其他三四の碑閣あり石碑鐵碑等の頌德碑群り立つ。

〔水口門址〕 保定門の南にあり舊城内諸川の水集合して烏川となり水口門を

過ぎて東流したるが今水害の爲其跡没せり。

〔移民洞の寺址〕 移民洞の一等道路に沿ひたる北側に寺址あり一帯の松林之を繞り其中央に墳墓を起しあるも其南邊に頌德碑と共に方四尺餘の石塔あり倒れて地中に埋まり臺石蓋石塔竿等を地上に現はす臺石には蓮花の模様を刻す又墳墓の後方松林中に圓形の柱礎を彫刻せる砌石一個あり何寺跡なるか未詳。

〔青郊驛址〕 德岩里青郊洞は古麗代青郊驛站のありし地なり。

青 郊 送 客 李 齊 賢

小溪深處柳飛綿、細雨晴時草似烟、客去客留俱不礙、一樽相對好山川。

〔高麗定宗安陵〕 陽陵里安陵洞にあり甚しく荒廢し陵前平地に一列石あるに過ぎず。

〔同神宗陽陵〕 陽陵里陽陵洞龍岫山の南麓にあり。

麗史曰ふ熙宗王二年丙寅九月甲午、陽陵に謁す、陵傍の彰信寺を重營し額を改めて孝信といふ以て冥福に資す、内侍崔正份其の役を監し王に媚んと欲し



侈麗を究極し麁糞甚だ廣し云々。

今荒廢甚しく寺址も亦不明である、此の地昔陽陵井あり明の太祖が朝天宮道士徐師昊を遣はし高麗の山川を祭らしむ、師昊又碑石を載せて來り都城の南楓川は何處なりやを問ふ、乃ち此の井を以て答へたので師昊祭を致し遂に碑を豎てて去つたといふこと勝覽に見ゆるも井址も碑も今は無し。

〔同成宗康陵〕 排也里康陵洞にあり、殆んど平地にありて最も荒廢す。

〔同睿宗裕陵〕 裕陵里聰陵洞にあり聰陵と相接近し荒廢亦甚し。

〔同忠定王聰陵〕 裕陵里聰陵洞にあり裕陵の東約五六町に位置す。

麗史曰忠定王三年辛卯冬十月壬午、元・江陵大君祺を以て國王となし斷事官完者不花を遣はし諸倉庫宮室を封じ國璽を收めて歸る、王江華に遜る、恭愍王元年三月辛亥鳩に遇ふて薨す、在位三年壽十四、聰陵に葬る。

恭愍王元年七月癸酉前王を聰陵に葬る葬具多闕。

陵域狹小僅かに列石を以て土留め兼壇區を成すにすぎず、陵は南面し高八尺徑

二十一尺あり、屏石は天然石を切りたるまゝの粗石で一石を列するのみ此れ近年の修理なりとす、現今石欄十・石柱を屏石面の各角隅に立てたり、此石柱亦切り目荒き短き方石なり（陵前に李太王四年建立の碑あること各陵の如し）今西博士報告書

### 交通

〔鐵道〕 開城驛より來り進鳳面鳳東驛に去る。

〔二等道路〕 京城街道 開城より來り德岩里橐駝橋より保定門趾を過ぎて沙川を越え吹笛橋を渡りて東面と長湍郡津西面の間に去る。

〔三等道路〕 領井浦街道 開城より來り古南里・裕陵里を経て上道面大陵洞に至る。

〔等外道路〕 古南里妣殿洞より三等道路に分れ南して排也里康陵洞より上道面に至る者あり、開城より龍岫山舞峴を越えて來り陽陵里・廣番里を経て南面修隅里に至る者あり。

〔里道〕 陽陵里より南に分れて三等道路に合する者あり、裕陵里三等道路



より西に分れ廣番里廣川洞に至り等外道路に合する者あり、又裕陽里三等道路より東に分れ冷井洞を経て上道面の等外道路に出る者あり、其他小徑各里各洞の間に通ず。

青 郊 面 終

第十六章 東 面

**位置境界** 開城郡の最東端に位し、東は長湍郡郡内面に隣り、北は同郡津西面に接し、南より西は本郡進鳳面に包まれ、西北の一隅のみ青郊面に連る。

**廣 表** 東西一里九町、南北一里三町、面積一方里六九餘、郡廳を距る二里二十四町。

**戸 數** 内地人二十四、朝鮮人六百九十九、計七百二十三。

**人 口** 内地人男五十三女四十九計百〇二、朝鮮人男一千六百八十女一千七百六十三計三千四百四十三通計三千五百四十五。

**區 劃** 鉢松里（板門洞、鉢山洞、五十夜味洞、松谷洞）白田里（白洞、籍田洞、移民洞）大鳥足里（少年洞、甌山洞、機井洞）高頭山里（上高頭山洞、下高頭山洞、河内洞）

面事務所は機井洞にあり。

沿革

鉢松里の内板門洞・鉢山洞は昔時長湍郡に屬したことがあり大鳥足里機井洞・高頭山里河内洞は徳水郡に屬したが大正三年四月郡面廢合の際開城郡の管に入り東面と稱せらる。

地勢

本面は馬尾川と長湍川とに挾まれた圓形の水郷で中央に高からざる丘陵起伏し四面は皆水田圍繞し恰も水盤に鉢石を置きたるが如き地形をなす

山峰

〔甑山〕 大鳥足里甑山洞にあり其形を以て名けらる。

〔高頭山〕 高頭山里上高頭山にあり、馬尾川の右岸にして其脈進鳳面鳳東里

に連り本面中の最高山である。

河川

〔馬尾川〕 青郊面より本面の西北隅に入り高頭山麓を北より東に環流し栗洞機井洞の西を南下し東に轉じて進鳳面都平里と長湍郡郡内面との境に至り長湍川を合し、南折して進鳳面・郡内面の間に入る。

〔長湍川〕 長湍郡津西面より本面の東北隅に入りて南流し馬尾川に入る、共に灌漑の利大なり。

池沼

〔甑池〕 白田里籍田洞にあり廣五十坪許、形甑狀をなす。

麗史曰、恭讓王の時籍田甑池水赤く震動し、兩虹竝び現はれ、水聲鼓の如く色血の如く氣烟の如しと。

土地

〔國有地〕 田一町八反、畑三町二反、宅地一町四反。

〔民有地〕 田六百二十一町八反、畑三百六十二町七反、宅地三十一町一反、雜種地一反。

〔林野〕 百十三町六反八畝。

產物

〔農產物〕 米類六千九百〇七石、麥類一千三百八十石、豆類四百九十八石、粟

五百石、稗百二十石、棉一千五百七十二斤、莞草二百八十貫、煙草三百五十貫  
馬鈴薯五百貫、蘿蔔四百貫、白菜二百貫、甜瓜二百貫、梨二百貫。  
米を其特産とす。

部落 三十戸以上

大鳥足里機井洞、戸數八十四、面事務所・種牡牛生育所・公立普通學校等あり。

大鳥足里甌山洞 九十三戸。 白田里籍田洞 九十五戸。

白田里白洞 六十三戸。 鉢松里鉢山洞 百十三戸。

鉢松里松谷洞 百〇七戸。 高頭山里上高頭洞山 五十三戸。

高頭山里<sub>下高頭山洞</sub> 五十五戸。

教會堂

〔鉢山里洞禮拜堂〕 鉢山洞にあり基督教南監理派大正十一年二月設立。

〔籍田耶蘇教會堂〕 籍田洞にあり同上派大正三年三月設立。

學校

〔公立白田尋常小學校〕 白田里移民洞にあり大正六年四月設立、職員一、生徒十三、一年の經常費千八百二十三圓。

〔東面公立普通學校〕 機井洞にあり大正十一年六月設立、職員四、生徒百四十四、一年の經常費四千百七十六圓。

古蹟

〔西籍田址〕 白田里西籍洞は往時の西籍田である、李朝の時に奉常寺の官員一人分遣し來り居りし故、分寺倉庫があり前崗には觀稼亭の基があつた、又舊棗盛庫・馨香閣・薏苡庫などがあつたが歳久ふして頽廢したので今から百八十八年前英祖の十九年癸亥副奉事李重彬が薏苡庫を重建したが後廢した、李進が馨香閣記に曰。

國有東西籍田、掌供凡國祀之棗盛、俱隸奉常寺、而西籍去國都稍遠、其分田又多、故官別印章署爲特置、是以倉庫・廳堂・廊廡、略擬本寺、人皆以西籍田制置、與郡縣相埒、甲申余以主簿始上任、有胥吏五人、迎入壞牆間、蒿萊

沒人、上有堂三間、蓋前官所新構、而適內遷、其房堂塔所卒末繕完、乃樹門築牆、左倍設三等階、庭心闢小坎、甃石爲方塘、正門內兩傍劃短垣、以界正路、儼然一官府也。

今は何物もなく斷礎廢砌民家の間に散して居る。

〔天壽院址〕吹笛橋の東にあり一等道路を隔て、長湍郡津西面に屬す即ち高麗時代天壽寺の古址である、李朝成宗二年丙申（本紀二二三六年）留主李茂亭を院傍の吹笛峯下に構へ因て之が記を作りて曰。

余嘗聞、高麗舍人崔斯立、有詩云、天壽門前柳絮飛、一壺來待故人婦、眼穿落日長程畔、多少行人近却非。竊以爲、天壽門是高麗五百年迎賓送客之地也、成化甲午、余留守于茲、見所謂天壽門者、只有遺址、爲榛莽瓦礫之聚、府之人、猶踵故事、就西峰除地爲堂、有大賓客、則必於是而送迎焉、余一日、送客于此、登高遠望、試問其處、則曰吹笛峯也、乃知高麗全盛時、士大夫相與送迎于此、而遊衍焉、因怪一代人物之所會、冠蓋車馬之所趁、何無亭樹臺閣之勝、斯

立所謂天壽門者、亦不知其何處也、蓋自聖朝定鼎于漢陽、幾九十歲、人物之南遷、年代之久遠、雖有池臺亭榭、其頽廢蕪沒、宜無恠乎余之所怪者矣、於是弭節訪古徘徊移日、院主康龜壽進言曰、儂父子相繼爲院主、具悉興廢之由、天壽寺是前朝之大刹也、世傳千宇萬間、今遺址如掃、皆爲田壠、所存只行旅投宿之小院耳、舊有高樓數楹在南、亦頽盡無餘、謹藏舊材、以待重構、但力微事巨、志無由遂、余於院主之言、益有感焉、僚佐共曰、國家於此院、置主給田、蓋無忘賓旅之意也、以舊都大府賓客之繁、迎送之際、必于此地、則藉草野、開帳幕、其轉輸之勞不貲、或值雨雪、賓主違々、無以爲禮、況府西則有迎賓普通之院、而東獨無有、豈非一欠、遂相與畫謀、因龜壽所藏之材、而助其不給、倩遊手輩作小亭於峯下松樹之間、既訖工、偕僚佐以登賞、四顧開豁、一望遼濶、遠山集於前、長川繞於下、道途之逶迤、人馬之去來、落照晚景、果如斯立之詩矣、夫以天壽寺、因斯立之詩、而顯於後世、茲亭亦當與天壽寺并傳於無窮、則斯立之詩、又不可泯也、和其詩者不爲不多、今之傳



誦者、獨有洪侍中彥博之二詩、書諸板尾、使後之登臨者、知斯亭之所以作、而樂和之、典守者、知斯亭之不可廢、而隨壞隨補以無棄前功、則亭也詩也、將永傳於不朽、而爲西都之勝跡矣。

李仁老破閑集に云ふ、都門より百歩にして連峯後ろに起り平川前に瀉き、野桂數百株路を挾んで陰をなし道を行く者其下に憩息し、輪蹄闌咽漁歌樵笛の聲絶へず而して丹樓碧閣半ば松杉煙靄の間に、公子王孫珠翠を携へ笙歌を引き、迎餞必ず此に於てす、睿王の朝、畫手李寧其圖を爲り宋商に付す、後王名畫を宋に求め美畫を得て來る、李寧曰此れ臣が畫く所の天壽寺南門の圖なりと。

### 橋梁

〔吹笛橋〕 本面と長湍郡津西面との界、一等道路を横ぎる一川の上に架した石橋で橋畔に吹笛橋と刻せる石標がある、傳へ言ふ昔羅伏橋と謂つた、新羅王が降を乞ふて開京に入りし時麗太祖此處に迎へた爲である、始め高麗時代に開

城に住める寡婦某獨力にて架したりと、後天壽院址ある故天壽橋と改め、今は吹笛橋と稱し津西面に屬す、種々の傳説を残す。

高麗の金進士といふもの吹笛に妙なりしが一夜月明に乗じ蛇の脱皮を冠むり橋上に笛を弄せるに遂に化して蛇形となり水中に入りしと云ふ。

或は往時大官の開京に入る者鹵簿此の橋上より樂を奏し始む故に名くと。前項天壽院送迎の事より起りし訛傳なるに似たり。

〔普佛橋〕 大鳥足里機井洞より進鳳面鳳東里清潭洞に渡る馬尾川に架した假橋である、往時其橋畔に石佛があつたので普佛橋と名けたといふ、今は洪水の爲に流失し橋も亦屢架け換へた。

### 交通

〔一等道路〕 青郊面より吹笛橋を渡りて本面の西北隅に入り、長湍郡津西面との境界を出入して東に向ひ、板門店を過ぎて長湍川に架せる板門橋を越え、津西面と郡内面との間に去る。

〔等外道路〕 大鳥足里少年洞より一等道路に分れ、栗洞を経て機井洞の面事務所に至る者あり、面事務所より西して沙川の普佛橋を渡り、直ちに進鳳面鳳東里に至る者あり、又機井洞より普佛橋を渡り、鐵道停車驛鳳東に至るものあり。

〔里道〕 板門店より一等道路に分れ南して鉢山洞、白洞、籍田洞を経て機井洞に至る者あり、其他里道は各洞の間に通ず。

東面終

昭和二年二月二十日印刷  
昭和二年二月二十八日發行

定價金七拾五錢

編輯者 開城圖書館内  
川口 卯橘

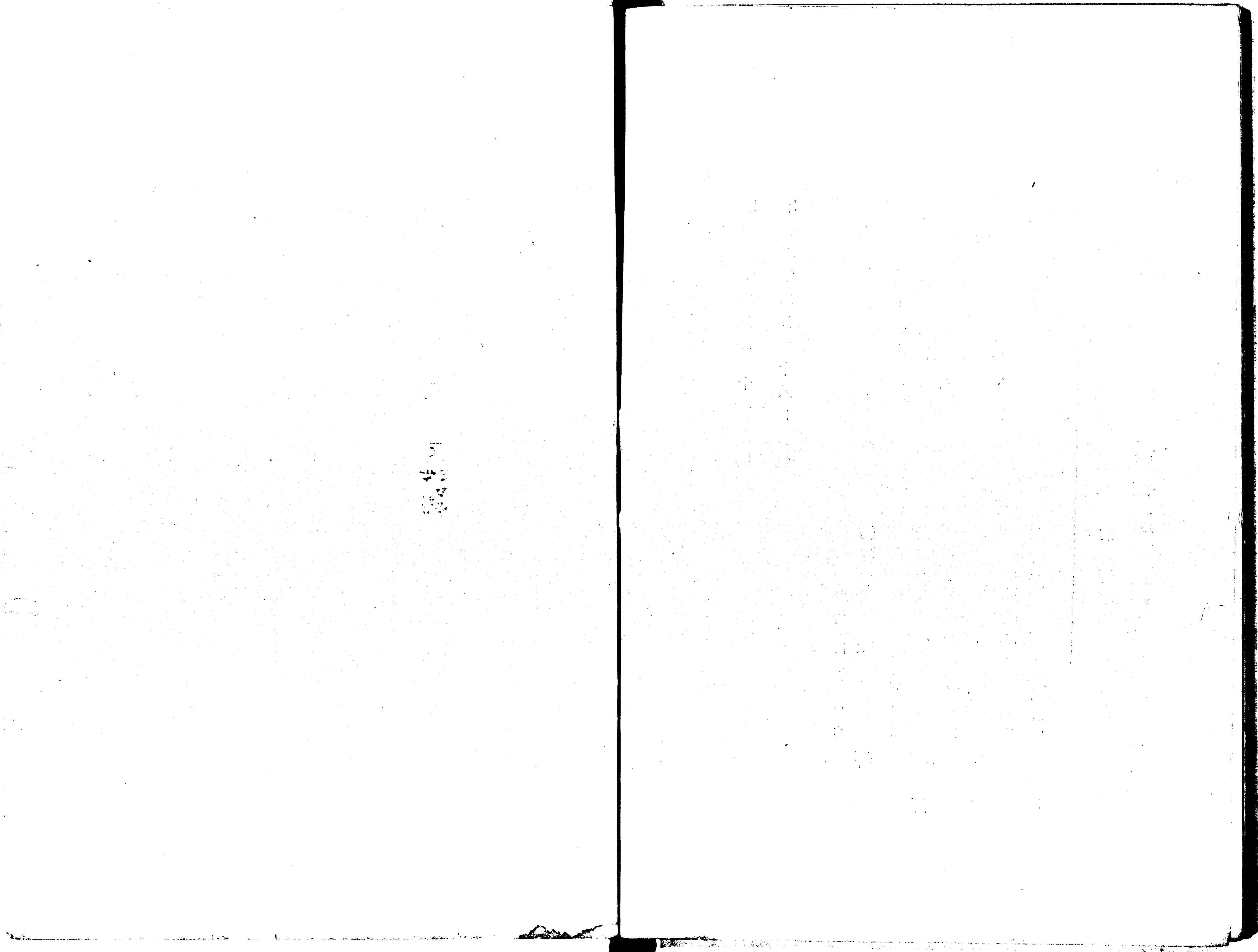
發行者 郷校財産管理者  
山崎 駿二

印刷人 京城旭町二丁目  
天野 キヨ

印刷所 京城旭町二丁目  
京城印刷所



京畿道開城郡  
發行所 開城圖書館







288-7

朝鮮總督 南 次郎閣下題字

朝鮮總督府 宮 本 元閣下序文

# 氏創設の眞精神とその手續

綠旗日本文化研究所編

317.22
361.6
73

朝鮮一體  
名目

朝鮮總督 次郎閣下 揮毫

上綴り  
名  
分  
全  
部  
を  
別  
甲  
上  
け  
ま  
す。  
発  
起  
人  
御  
署  
名



## 序

緑旗聯盟は、多年朝鮮に於ける社會教化運動を實踐し内鮮一體の具現のために寄與しつゝあることは深く、悦びとするところである。今回朝鮮民事令の改正に因り、皇紀二千六百年紀元の佳節を卜し朝鮮に於て氏制度實施せらるゝや、緑旗聯盟は率先して該制度の周知徹底を圖り、又氏の名附け相談部を開設し、多數の希望者に對して懇切周到の指導をなしつゝあることは、其の勞を多とするところである。

本書は半島に於ける氏姓問題に關する諸權威の論說、並に總督府當局の氏制度創設の本旨について、明快周匝に叙述すると



共に、氏相談の實際的經驗を基として、名のつけ方及びその手續方法等について、何人も諒解し得るやう平易懇切に解説せられしもの、寔に時宜に適したる好箇の羅針盤として推奨するを吝まざる所であつて、關係方面を裨益するところ尠からざるものありと信ず。以て序となす。

昭和十五年三月

朝鮮總督府法務局長 宮 本 元

## は し が き

一、輝かしい二千六百年の紀元節を期して、朝鮮に氏制度が創設された。本書はその氏制度の思想的解説書、又、實際上の手引として編纂したものである。

一、第一篇は、氏問題に關する論説と研究である。綠旗日本文化研究所は、氏問題に對して、社會的、思想的にその意義を明かにした。松本重彦氏は、京城帝國大學國史學擔任教授、日本古代史の權威で氏問題に於いては京城帝國大學の特殊講義でその研究を連年講義中、又、富山房の國史辭典に「氏」の條を執筆されて居り、又、綠旗聯盟の「氏の名附相談部」の顧問である。今村軻氏は、朝鮮社會風俗史の研究家で既に數著あり、中樞院より發行せる「朝鮮の姓名氏族に關する研究」の編者である。

第二篇は、氏創設に關して朝鮮總督府當局の見解を明かにする爲に、總督談、法務局長談、民事課長の論説を載せた。岩島肇氏は今般の氏の創設に關する民事令改正には直接その衝に當り、民事課創立と同時に、初代の課長になられた方である。

第三篇の内地人式氏の名乗り方、名の改め方は、綠旗聯盟の「氏の名附相談部」で行つて居るその

根本原則と具體例である。その手續は、朝鮮總督府法務局發行の「氏制度の解説」、綠旗日本文化研究所編「誰にもわかる氏の解説」、思想報國聯盟新義州支部發行の「ありなれ」特輯「氏設定に關する手續方法」を参照にし、又、京城府戶籍課、京城地方法院戶籍係の實際に當りて研究したもので、法務局民事課の檢閲を経たものである。

第四篇は、氏創設、名變更に關する法令、其の他、氏の名乗り方、名の改め方に是非參考にすべき事項を記載し、附録として名乗り字引及び手續用紙一通りをつけた。

一、本書の發行に當り、南總督閣下には題字を、宮本法務局長閣下には序文を賜はり、泰頭を飾り得たことは無上の光榮とする所である。又この書の内容につき、京城帝國大學松本重彦教授、朝鮮總督府法務局民事課長岩島肇氏、同民事課の友村一夫氏に色々御指導頂いたことは眞に感激にたへない。

一、本書が一人でもより多く正しく利用せられ、氏の眞精神が普及徹底し、内鮮一體、新日本の建設に資する所あれば、編者無上の喜びである。

昭和十五年三月

綠旗日本文化研究所

## 氏創設の眞精神とその手續

朝鮮總督 南次郎閣下題字

朝鮮總督府  
法務局長 宮本元閣下序

### 第一編

氏創設の社會性とその理想精神……………綠旗日本文化研究所(一)

うち・姓・氏・名のうのりかはり……………京城帝國大學教授 松本重彦(二)

朝鮮の姓・名・氏・本貫……………中樞院囑託 今村 鞆(五)

### 第二編

司法上に於ける内鮮一體の具現……………南總督談(八五)

氏制度の制定に就て……………法務局長 宮本元談(八八)

氏制度の創設について……………法務局民事課長 岩島肇(九三)

第三編

内地人式氏の名乗り方・名の改め方……………(一五)  
氏を創める手續・名を改める手續……………(一六)

第四編

氏設定に關する制令、届出及び氏名變更に關する總督府令……………(一五)  
御歴代帝號、御諱、御名その他……………(一六)  
朝鮮に於ける姓……………(一六)

附 錄

名乗り字引……………(一六)  
氏、名の届、名變更申請用紙……………(一六)

第一編

氏創設の社會性とその理想精神

綠旗日本文化研究所

一、誤解されて居る氏の創設

今度二千六百年の紀元節を期して、朝鮮に於いて氏制度の創設が行はれ、又、新たに内地人式氏を名乗る道が開かれた。このことは、朝鮮の社會にとつて、劃期的なることであり、特に朝鮮在籍者、在住者にとつては、眞に深くその眞義を理解し、その正しき前進の爲に、努力すべきことでなければならぬ。然るにこの氏制度に對して、正しき理解を持つ者の少く、賛成するものは、誤解して賛成し

不服を唱へる者は、誤解して反對して居り、眞に遺憾極ることである。

試みに、最近の朝鮮文雜誌をみると、何人にとつても重大な問題であるだけに色々氏創設の事について論議して居るが、これに對して正しい答をなして居るものは、専門家を除いて眞に少い。

「三千里」の二月號に、『何と内地人式の「創氏、改名」をなされるや』といふ間に約五十名程の朝鮮の著名の士が答へて居るが、——未定も多いが——その中に、相當な地位にある人、又、日本精神を相當理解したと喧傳されて居る人さへ、隨分と誤解した解答をして居る。「朝光」——朝鮮人側で一番讀者の多いと言はれて居る雜誌の一月號に「夫の姓に従ふ女流諸氏」として、知名の朝鮮女性、八名が答へて居るが、一人として、氏設定の意味を理解して居る者は居ない。その雜誌の當事者でさへ「夫の姓に従ふ」と誤つた標題を掲げて居る。内地人側の新聞でも、「姓の變更を認む」の見出しで一番最初に太々的に報道し、その誤は今訂正されては居るが、然し、記事の取扱に於いて、未だ重大なる誤謬を犯して居る。

例へば「會社舉つて〇〇部隊」といふ記事を大々的に取扱ひ、又、「新らしい氏の下に従來の姓名を一つにしたのを名とする」記事を大きく出し、或は、日本國民としては遠慮すべき歴史上の名門の

氏を名乗る人を讃へたり、又、「同本同姓同族の者、全鮮數萬の者に檄を飛ばして、舉つて氏を名乗る」といふやうなことを禮讃して居るなど、全く、氏問題に對して、誤解し、唯、内地人式氏を名乗りさへすればいいのだと簡單に考へて居る。

今度の氏創設に就いては、二つの問題が同時にある。

一つは 氏の設定であり

一つは、内地人式氏を名乗る道の開かれたことである

「司法上に於ける内鮮一體の具現」と題して語られた、南總督談（八五頁）は主としてその第二の問題の意義を明かにしたものであり、「氏制度の制定に就て」の法務局長談（八八頁）は、主としてその第一の問題を説明したものである。總督府より再三「強制にあらず」と聲明が出るのは、後者が強制でないといふのであり、前者は如何なる人と雖も、今年の八月十日以後には實施されるのである。多くの人にはこの二つの問題が混線し、而も氏と在來の姓と交錯して、明確に把握されて居ない。今度の氏制度創設の眞義を理解する爲には、この二つの問題を一應きりはなして考へること、及び、氏と姓の差異を明確にする所より出發する。



緑旗日本文化研究所は先にこの氏姓混同の觀念を打破し、新らしい氏を名乗る、その心構と注意について、「誰にもわかる氏の解説」といふパンフレットを著はしたが、茲には、氏創設の現實的根據とその理想精神について歴史的社會的思想的に更に深く詳述しようと思ふ。

## 二、從來の朝鮮社會と「姓」の觀念の確立

今回の氏制度の創設は、朝鮮の社會にとつては、全く劃期的なことである。然しこの劃期的なる制度を何故、朝鮮社會が迎ふるに至つたか、從來の姓のみにては、何故に不合理になつたか、遡つて、その歴史的原因を究明せねばならぬ。

現今の朝鮮の姓が創められたのは、大體に於いて、朝鮮が支那文化の恩恵を蒙り始めた三國時代の中頃であり、殊に、新羅一統以後高麗時代に入つてからである。支那文化の壓倒的朝鮮支配と共に、支那を模倣した姓は、朝鮮の人の上層階級より積極的に行はれ、漸次下層に及び、遂に李氏朝鮮時代に及んで、如何なる者も、皆、姓を有するに至つた。朝鮮の人がこの姓を持ち、これを保持するに最も役立つたもの、否、姓の保存を絶對的なものとして要求したものは、姓そのものゝ表はす「男系血

統とその血族團體」が社會構成の基本であつたことである。朝鮮の社會が、何故に、男系血統の血族團體を基礎としたか、それに最も力のあつたものは、何としても、儒教の力であつた。

儒教は、支那社會より生れたものであり、その道德的基準は、國家よりも自己血族に重點をおき、その先祖の祭祀をすることは、あらゆるものゝ第一義であつた。先祖の祭を絶やさぬ爲には、自己の後にその祭りをする男子を得ることが必要であり、その一族は、この男子を中心として長幼尊卑の序列を確定せねばならぬ。こゝに男系血統は確立し、女姓は子孫を絶やさぬ爲に必要なものとされ社會的に低い地位におかれたのである。

儒教の内、朱子學は、この點を最も緻密に定めたものであつた。李氏朝鮮は朱子學を指導原理として、特に後半期に至つて、朱子學を守る兩班階級は、冠婚喪祭その他儀禮の遵奉を以つて自己の特權とした。朱子學遵奉者にとつて、支那は「我等の祖國」であり、支那に於いて行はれた血統の稱號たる姓は、容易に朝鮮社會にとり入れられ、特に、その模倣は、進んで、支那の郷を眞似て「本貫」を考へ朝鮮人何人も、その本貫を持つに至つた。全州李氏、金海金氏、南陽洪氏など、それぐが、その本貫と姓を以つて、その血族を示し、すべての朝鮮人は生れながら、その男系の血統に従つて數多の宗

族の中の孰れかの一に屬するものとせられ、その宗族が一方に於いては、個人生活の基本單位とせられ、一方に於いては、國家社會構成の基本となつたのである。

朝鮮家族制度の三鐵則と云はれたものは「姓不可變」「同姓不娶」「異姓不養」である。これは、上述の血族團體の秩序保持を徹底する爲に必須のものとなつたものである。個人の宗族に對する歸屬關係を明確にする必要から「姓不可變」の原理が要求され、更にこの血族團體内部で男女相互間に婚姻が許される時には、その血族内の長幼尊卑の序列が亂される恐れあり、その立場から「同姓不婚」の原則が生れた。（儒教は「同姓婚は禽獸の行爲」として同姓不婚を支持した。）又他の血族より男子の養子として入ることは、その血族内の秩序確保し難しとて、茲に、異姓不養の原則が生れた。（これ亦、儒教により、異姓を養ふは祭を絶つ所以なりと言はれて支持されて居る。）（註一）

この姓の觀念の確立した宗族を保持せしめたものは、從來の朝鮮社會が、民族的に移動混入が少なかつたこと、社會的に大きな革命がなかつたこと、經濟的に農業を主體として居たこと、この三つの理由によると考へられる。

朝鮮民族は、その成立過程をみても、頗る單純である。その大部分は、大陸より早く南下し來つた

民族であり、その外に小部分の日本からの渡來者、支那大陸からの渡來者、及び、特に李氏朝鮮時代の初に女眞族の多數が同化されたこと位である。朝鮮民族自體が移動する事なく、特に、李氏朝鮮時代の末迄、海外發展といふことは、殆んどなく、他民族に較べて、實に安易な土着した生活に終始して居たといふべきであらう。而も、その永い歴史を通じて、社會の根本的革新といふことは行はれなかつた。日本の大化改新の如き氏族制の矛盾克服もなく、武士の興起の如き中堅部層の強靱もなく、戰國時代の如く社會が階級的に又地方的に攪亂されたこともなく、江戸時代の如き完成された封建制もなかつた。従つて明治御一新の如き、思ひきつた飛躍もなかつた。

而も朝鮮の主産業は最も土地に執着する農業であつた。

農業以外の産業は、小部分の漁業を除けば殆んどなかつた。工業と言へば、農作物加工品の外、機織業、竈業、製紙業、醸造業、金屬工業などで至つて小規模の家内手工業が行はれたに過ぎず、商業は都會に於ける僅かの常設店舗を除いて、概ね限られた地域に於ける市場取引にすぎなかつた。従つて充分な商業資本の蓄積もなく、工業は常に農耕と直接に結びつき、家の内の男女間の分業以上に出なかつた。

農業は、家族全體で出来る職業である。民族の大きな移動なく、社會の大きな變革なく、而も、土を相手の農業を主産業とした朝鮮に於いて、大家族制ともいふべき宗族は、容易にその形を崩さず傳統を守り、續けることが出来たのである。(註二)

### 三、新らしき朝鮮社會と「家」の觀念確立

然しながら、朝鮮がいつ迄も、この形態を守りつゞけることは出来なかつた。朝鮮の革命は外から來た。滔々たる白人勢力の東洋進出、白人文化の世界的進出の前に、日本は早くも明治御一新の新たな出發を持つたが、朝鮮には、その積極的體制がとれなかつた。守舊的な支那勢力に對して日本が一撃を加へた日清戰爭以後、朝鮮社會は漸くに日本の理念により新たに世界文化を吸収し始め、特に、日露戰爭後、朝鮮の社會的前進は、色々な角度から計られた。朝鮮社會に、民族主義の動きがあり、マルキシズムの動きがあつても、朝鮮社會の前進は、阻まれることはなかつた。特に支那事變以後世界史轉換の日本の使命確立と共に、古き朝鮮は、いつしか日本の持つ大陸政策に對して、「大陸兵站基地」の崇高な使命を背負ひ、日本に一體となつて進む體制に迄、止揚されて來たのである。

この朝鮮社會の前進の爲に、幾多の重大な事業が遂行されねばならぬが、今般の氏制度うぢぢどの創設は、眞にその一つの現はれである。而もこの氏制度うぢぢどの創設は、朝鮮社會の前進の爲めの強制的手段ではなく、朝鮮社會が前進した爲に要求されたことである。從來の「姓」の觀念による朝鮮社會が矛盾餘りに多く、どうしても、こゝに新たに「氏」うぢの創設を必要としたに外ならないのである。言ひかへれば社會の他の分野が前進して居る爲に、朝鮮民事令そのものも前進せねばならなかつたのである。

朝鮮社會に姓觀念を與へてくれたものは、支那であつた。姓觀念を確立せしめたものは、支那の儒教であつた。昔、朝鮮の知り得た最も文化國は支那であり、最も優れた思想が儒教であつたが故に、朝鮮が支那を眞似、儒教精神を遵奉して、姓の確立保持に努めたのは當然なことであつた。然しその後、朝鮮は、支那儒教以外の文化思想を知つた。特に外來思想として、眞先に朝鮮に入つたキリスト教は、祖先崇拜よりも更に高き神の信仰を説き、又、西洋思潮の根幹をなす人文主義、個人主義思想は、從來の大家族的意識に正反對であつた。女性の地位向上も叫ばれた。又、あの自由戀愛を禮讃した文藝作品の影響は、從來の嚴重な仲媒婚よりは一般に自由結婚を考へる傾向を持たせた。

又、日本の教育の徹底すると共に、朝鮮の人達も、世界で最も崇高なる理念として、日本國體を



仰ぎ、從來の自己の血族中心の觀念より國家中心の觀念に進み、又、支那理念より勝れた日本理念の體得に努め始めた。然し、姓觀念に影響を與へたものは、思想のみではなかつた。すでに朝鮮の人達は、朝鮮半島の地を離れて、移動し始めて居た。それは經濟的な原因が大きかつたが、李氏朝鮮時代の末より、咸南北の不毛の地の農耕に悩む人々は、豆滿江を越えて間島に入り、間島問題を起した程であつたが、その後、渡滿者は多く、現今、滿洲に於ける朝鮮人は百萬を前後して居り、又一方内地には、制限を加へて居るに拘らず七十萬人移住して居る。他面、内地より半島に住む日本内地人も七十萬人となり、それとの接觸により内鮮結婚も行はれ、最近ではその數が年平均五百組に達して居る。これ等の人は古き朝鮮の宗族を回想するよりも、これからの新らしき自分達の土地と生活を考へて居るのである。

又、教育の普及、文化の浸潤と共に、朝鮮に於ける兩班階級尊重の觀念は打倒せられて、廣く人才を求め、門閥によらずして、如何なるものも、社會的に榮達する道は開かれた。又、經濟的に、農業のみであつた産業に於いて、資本主義的經濟の進展と共に、商工業が發達して人口が都市に集中し、農村には、大地主の劇増と共に貧農が増え、それ等の離村現象を來し、祖先傳來の生業を離れて新し

い職業に進む様になつたのである。嘗つての大家族主義農業のみの朝鮮社會は急速に、個人主義的な經濟組織へと進みつゝある。

而も法律的に、家族各人の私有財産が認められて家産が重要視されなくなり、又、戸主權に對して親權の地位も認められて來た。又、宗族の家長權に對して、國家的なるものゝ權限が強く働かしかけ宗族の紐帶は、以前とは比較にならぬ程に弱められたのである。

嘗つて、その地位を卑しめられた婦女子は、今は社會的に進んで職業を持ち、文化的にも相當進出し、農村の女性も積極的に働かし、又、時局と共に上層階級の婦人達も、愛國運動その他に、潑刺と動き始めた。女性の人格も、大いに認めざるを得なくなつて來たのである。(註三)

古き社會に於ける朝鮮の血族團體は、もう個人生活、社會生活に於いて、その基本的なるものたり得なくなつたのである。宗族に代つた單位は、個人であり、個人を中心にした家である。夫と妻と子それに關連した最小範圍の家族である。姓の示す宗族よりも家の觀念が確立し始めた。この家に附せられる名が生れねばならぬ。「氏」は、實にこの新しき社會推移への必然として設定されたのである

世界文明國の殆んどが、家の名を持つ時、朝鮮もこゝに家の名を持つことになつたことは、家族制



度の上に於いて、朝鮮も世界文明圈に止揚されんとしつゝあると言ふべきであらう。

(從來持てる姓の觀念のみによる生活上の具體的矛盾について、異姓養子の問題、夫と妻が別な姓母と子と別な姓の爲に新らしく教育された人の持つ感情の矛盾、内地人式氏の希望者の立場などに關して、岩島民事課長が「氏制度の創設について」に記されて居るから、茲に省略する。)

#### 四、内地人式氏を名乗る道の開かれたる意義

内地人式氏を名乗りたき希望は、現實に朝鮮の人達にあつたのであり、この希望に對して道が開かれたのであつて、これは決して強制でなく、強制さるべきものでもない。筆者は、今度の民事令改正に關係したある朝鮮の人から伺つたが、その人は「自分達はこの法令が出れば、内地に居る朝鮮人は殆んど、内地人式氏を名乗るであらう。然し、朝鮮に居る朝鮮人は、さう澤山はないであらうと思つて居た。然るに、この法令が發表になると、内地よりも却つて朝鮮に居る人達の方が熱心なので、全く驚ろいて居ます」と語られて居た。綠旗聯盟に於いても、氏の名附け相談所を開いたが、餘り宣傳せぬにも拘らず、その相談が、日夜殺到する爲に、當事者は全く驚ろいて居る。各方面に今度の民事

令改正の趣旨が徹底し、又各地に適當な相談施設が設けられたならば、その希望者は、必ずや夥しい數に上るに相違ない。

この内地人式氏への道が開かれたことは、内鮮一體の趣旨に立脚すること、及び内鮮一體の眞の實現の前提たることについては、南總督談にもあり、岩島民事課長の論說にもあり、こゝに詳述する迄もないが、特に我々の考へねばならぬ所は、内地人の現今の氏及びその名が、世界一と稱せられる程多數あることである。(姓氏家系辭書に擧げられた氏だけで一萬以上ある。)これは、人間の氏名が自己を表示し、他人と區別することが第一義である點からみる時、内地人式氏名は、その表現法に於いて、世界一と云ふべきであらう。

然るに朝鮮の姓は、今村軔氏の論說にある如く、増補文獻備考にあるもので、四百九十八姓、現今の姓は三百二十六姓であり、その内、昭和五年の國勢調査を基にした姓の研究によれば(註四)

金 姓 八十五萬八千二百三十九世帯

李 姓 五十七萬七千二百七十一世帯

朴 姓 三十萬四千二百四十八世帯

崔 姓 十九萬二千三十七世帯

鄭 姓 十四萬七千四百五十七世帯

を數へて居り、これは世帯の數なので、個人人數にすれば、少くも、この五倍に上るのである。

而も名のつけ方が、五行説その他の特殊なものによる爲に、名の字が限られる場合多く、同姓同名が夥しい數に上つて居る。このことは、昔は未だよかつたが、人口が益々増加する一方現今の限られた姓では、年と共に益々同姓同名が多くなるのであり、今後、經濟生活が益々激甚になる時、小切手手形などは、間違ひ易く、その他、諸般の生活上、眞に多大の矛盾を生ずるであらう。朝鮮の文化生活の前進の爲に、出来るだけ異つた氏名を持つことが、望まじきことであり、その意味から、世界で最も多き内地人式氏を名乗る道の開かれたことは、朝鮮社會にとつては、眞に幸福なことである。

内地人式氏名の出来る爲に、社會的に行列の持つ傳統の崩れることを寂しがる人もあるが、行列の持つ傳統は昔の「姓」時代のもので、宗族内に於ける地位を示すもの、新らしき時代に即應して、朝鮮の命名法を出来るだけ廣く解放することが、文化的である。

我々がこの際、微笑しく回想されるのは、朝鮮が未だ支那文化に壓倒されぬ前の朝鮮人の命名が、

内地人の命名に近いものであつたことである。(今村軻氏論説參照)

内地人式氏名を名乗る道の中に、朝鮮そのものが本來の姿に立還る心と、新らしき世界的出發の二つのものが考へられるのである。

## 五、氏の理想精神

氏に二つの概念がある、それは古き氏と新らしき氏である。古き氏とは、日本の上代に於いて日本人の持つて居た「うぢ」の概念であり、新しき氏は、民法に於いて定められた「家の名」としての氏である。今回新しく朝鮮に設けられた「氏」は、民法第七百四十六條に定めて居る所の「戸主及び家族ハ其家ノ氏ヲ稱ス」の概念に従つたものであるけれども、然しその新らしき氏の觀念は古き氏とは別個なものではなく、日本古來の氏の精神の現代的再現でなければならぬ。

このことについては、松本重彦先生の「氏の話」の中に詳述されて居る。氏は上代に於いて、國家に仕へまつる品位を示すものであり、而も氏は 天皇の賜ふものであり、改め賜ふも、奪ひ給ふも 天皇の大御心によるものであつた。「氏」は國家の重要事であり、續日本紀以後三代實錄までの國史

には「氏を賜ふ」「氏を改める」の事は位のひくいものでも記されその記事は夥しい數に上つて居る。和氣清麻呂は最初藤野別真人清麻呂が輔治能真人清麻呂に變り、西國に流される時、別部磯麻呂とされ召し遷されると和氣清麻呂となり、その「うち」や名が變へられたこと、藤原氏が「氏を放つ」宣告をされると、朝廷にお事へすることも出來ずに謹慎して居たことなど、この精神を最もよく示す例である。而も氏は上代に於いて一部の上層部に限られ、中世は武士に、最近世に至つて一般平民全部に氏が許されたことは、文化の普及、社會構成の意識によるのであるが、又、「うち」のもつ國體理念の發展と見るべく、今回、内鮮一體、皇國臣民運動に拍車のかけられて居る朝鮮に、氏制度實施をみたことは、眞に意義深きことと言はねばならない。氏の創設には、先づ、この氏の持つ崇高な理念の確持が最も緊要である。

## 六、氏制度創設を期して朝鮮社會の新らしき出發

氏制度創設は、唯單に法律上の問題でなく、朝鮮社會の種々の分野に新らしき出發を持つたことである。

### 第一は、皇國臣民的家庭の確立である

氏制度は民族的生活態型の推移により法律上謂ふ所の、家の觀念の確立した爲に、設けられたのである。今迄は夫と妻は異なる姓を稱へて居たが、氏は血の繋りに無關係であるから、同じ氏を稱へることになる。このことによつて、朝鮮の各家庭は、夫と妻の一體觀、親と子の一體觀は、更に強化されるべきであらう。

朝鮮はもう古き殻を脱して、大きな世界史の動きに一體となる所迄來たのである。族譜を持出し、傳統を誇り、大家族の居を構へて、親族のものを徒食せしめて居る時代は、とうの昔に過ぎ去つたのである。内地人が日本内地を離れて大陸や南方諸島に活躍しなければならなくなつたと同じく、朝鮮の人達も、大きく動かなければならぬ。昔は、やむを得ずして、半島の地を離れたが、これからは意識的に東アジアの各地に雄飛しなければならぬ。資本主義矛盾の高次化と共に、都市集中が行はれて居ることは、悲しむべきことであるが、從來の如く、安閑として一門血族が土地に執着する氣持を去つて、各自自體が、強固な家庭を建設しつゝ、その思ふ存分の土地で、その志を伸ばすべきである。朝鮮の人達は嘗つては、大血族集團を自己の據り處としたが、その老朽な構築を去つて、これからは



自己の家庭を本據とし安息地とし、トーチカとして前進せねばならぬ。

而もこの家は、「天皇にお仕へする家」の理念を持つ「氏」である。従来は一身が宗族に結びつけられたが、今後は「各家庭が直接 天皇に結びつけられて居る」この理念が第一義となるのである。天皇を中心として、一切 天皇に結びつけられ、この強い信念と強い家庭が朝鮮の人達の社會生活の基地となるのである。

## 第二は、女性の地位向上である

家庭は、男性と女性により成立する。家の名がつけられ、家の觀念の確立することは、女性の地位が、今迄の唯子供を設くる爲の女性の地位より、夫と共にあり、子の母として、社會生活の一單位としての家庭を持つ地位に進んだのである。朝鮮女性はこの時、氏の創設を期として、より一層婦人の自覺向上に努力すべきなのに、充分にその眞義が把握されて居ないのは遺憾である。

## 第三は、朝鮮文化上の支那模倣精神の脱却である

朝鮮文化は、殆んどあらゆる分野で支那文化に影響をうけた。日本もさうであるが、日本は、自己の中心を忘れずに支那を模倣したのに、朝鮮は、自己を忘れて支那を眞似た。今迄の朝鮮人姓名の殆

んど大部分が支那人的なものであり、今回、茲に内地人式氏名を名乗ることが許されたことは、舊來の支那的なものに對する一反省である。朝鮮社會の各部層の支那的なものゝ脱却は、朝鮮本來のものに立還る第一の道であり、又、この朝鮮本來のものへの復歸を前提としてこそ、内鮮一體の清純なる完成はある。姓名の上に於いて支那的な永い歴史を脱却する時、私達は、もつと自然的な命名法を持つた朝鮮の人を知る。

人名の上で支那の模倣を脱却せんとする朝鮮は、これを機として、更に痛烈な自己反省を重ねて、幾多の民族發展の障害となる支那的な傳統を更に更に脱却せねばならぬ。

## 第四は、内鮮一體の完成である

内鮮一體運動の爲に、幾多の解決すべき問題があるが、内地人と朝鮮人の氏名が區別出來ぬやうになることは、その前進の爲の、最も有力なるものゝ一つであることは、今更こゝに贅説する迄もない。内地社會と同じ氏を持ち、古來より傳統の氏の理念に生き、天皇中心の家庭建設に邁進する朝鮮、そこに内鮮一體は無言の裡に成就する。このことにより、内地人が朝鮮の人を蔑視する觀念を改め、朝鮮人が偏狹な民族觀をすて、共に一體となり、日本の遂行しつゝある聖業完成への進軍を開始するので



ある。

嘗つての自由主義やマルキシズムの時代は過ぎた。皇國臣民教育は徹底し、義務教育實施も近い。幾多の若き青年は、志願兵として勇躍その貴き血潮を君國の爲に捧げつゝある。潑刺たる青年運動もこれから起されんとして居る。

八紘一字の雄渾なる日本の世界的理念は今、朝鮮の地に逞ましきその現實を得つゝある。

二千六百年、劃期的なる國史の新段階、我等はこゝに「氏創設」を半島に於ける輝かしい存在たらしめる爲、更に――前進せねばならぬ。

註

註一 「朝鮮」昭和十五年一月號、安田幹太「朝鮮に於ける家族制度の變遷」

註二、三 「調査月報」昭和十五年一月、二月號、金斗憲「朝鮮に於ける大家族制度崩壞の傾向」

註四 朝鮮總督府發行「朝鮮の姓」

## 氏の 話

うち・姓・氏・名のうつりかはり

松・本・重・彦

### 一、今の氏のこと

今、氏といふのは、民法第七百四十六條に「戸主及び家族ハ其家ノ氏ヲ稱ス」とあるのでありまして、この法律の條文を字のまゝに解けば、氏といふものは一つの家を別の家と分つものであるといふことになるのであります。さてこの條文の「氏」は必ず「ウヂ」と讀むべきであつて字の音で「シ」、或はシナの音で「シー」と讀むのではない。何故さう申すかと言へば、この字は「ウヂ」といふ我が國の言葉を寫さんがために借り用ひたものでありまして、かういふ恰好のシナ文字の元の意味には全

く關係がないと考へるからであります。

## 二、氏は血筋を示さるものなりしと

この「氏」といふ支那文字には昔も今も血筋をあらはすといふ意味があるのでありますが、我が國の言葉で、「ウチ」といふ言葉は、必ずしも血統を表さない、家を表す。同じやうな言葉で申せば、「氏」は家筋を表すものであるといふことになるのであります。今の氏は中古に始まったもので、家の名前であります。公家と武家とは少し違ひがありますが、公家の方は延喜天曆の頃からそろ／＼いろいろものに氏の名が出て來るのであります。初にはその人の住む土地の名を家の名とする。親と子と、住む家が違へば、親の家の名と子の家の名とは違ふ。兄と弟と、住む家が違へば、兄と弟とは家の名を異にする。すべて住んだ土地の名で家の名をつけていった。これは公家の方であります。武家もまたほと同じ頃から家の名を稱へ始めたのであります。さうして公家の方はそれから、かなり久しい間、親から子、子から孫、孫から曾孫、それ／＼家の名を異にし、或は兄弟が家の名を異にしたのでありますが、武家の方は久しからずして一つの家の名を、親、子、孫、曾孫といふ風に相

繼いで行くやうになつて居ります。それはどういふわけであるかと申しますと、武士は公家と違つて、その住む土地が己れの所領であつて、そこから専ら收入が來る、そこを退いては立つて行けない。故に家督を受ける限りにはその土地を離れない。それで武士は早くから一つの家筋に一つの名がくつてしまつた。公家はかなり遅くまでもとのまゝであつたのでありますが、これも父の住んだ家に子が住み、子の住んだ家にその子が住むといふ風になりますと、一つの家に一つの家の名がつき、大體同じ名を名乗るといふことになつて來た。では公家の方で一つの家筋に同じ名が名乗られるといふ風になつたのはいつごろであるかと申しますと、大治以後、今よりさつと八百年ほど前からである、それより古い所には見えないやうであります。

氏は一つの家と他の家とを分つものでありまして、血筋を分けるものではありません。或る一つの氏、例へば九條といふ家はどういふ血筋であるかといふことは、それだけ見たのでは分らない。全く血筋を異にするものでも、九條に住んでゐれば九條といふ家の名をつけてゐる。ですから藤原氏にも、源氏にも、九條といふ名の家があり得るわけであります。氏の名だけでは血筋は分らない。そればかりでなく、氏そのものに血筋を示すといふ意味もないのであります。といふのは藤原氏の一つの家筋

に九條氏といふものがある。その九條氏の家を繼ぐべき子があれば、それは人情として血筋のものが  
すつと承けて行くのでありますが子供がなければその血筋の者から子を養つて家を繼がせる、さう  
いふことはかなり古くからあった。これは家を貴んで血筋を貴ばない所から來て居ります。

何故さういふ風になるかといふと、これは我が國の極めて古い慣しで、一つの氏といふものは、國  
家がその家の國家に於ける地位を示すものとして與へたものであるといふ慣しがあつたので、それか  
ら來て居ります。家筋といふことが極めて重いので、その家筋を保つて行くといふことの方が血筋を  
保つて行くことより重い。そこでその家に血筋の者がなければ、血筋ならざるものでも宜しいから、  
それを選んでその氏を繼がせるといふ風になつて來ました。

前にも言つたやうに、初めには家の名から起つたものが、久しくその家が同じ所にあつたために、  
同じ家の名前をすつと續けて稱へて行く、それが何時しかその家の名となる、これが後には氏として  
考へられる、さういふ譯であるから、氏は全く家督といふことにかゝはるものであつて他の意味はな  
いのであります。古い系圖を見ますと、父の稱へた氏を稱へるのはその家督を受けた子ばかりであり  
まして、他の子供達が他の所に行つて住み、或は他の所を領すると、その他の所の名を家につける、

さうしてすつと相傳へて行くといふことになつて居ります。

### 三、平民には氏なかりしこと

平民に氏のなかつたことは上古からの習はしでありましてこれは極めて大事なことでありますが、  
このことを知るにはまづ氏といふ言葉の源を明にしなければならぬし、次に上古の氏のきまりがど  
んなであつたかといふことを一通り知らねばならないのであります。

### 四、氏のエチモロギ―

氏とはどういふ意味であるか、これには色々の説き方があるのですが、私のこれ迄知り得た  
ところでは「ウチ」といふ言葉と同じであるといふ説き方が最も宜しいやうに思ふのであります。

今でも我々は「家ではかうする」「家へ歸らう」と言ふのでありまして、昔もやはり自分の家のこ  
とを「ウチ」と言つたと考へて誤りなからうと思ひます。「ウチ」は「ウチ」といふ言葉の音のかは  
たものであつて音の上からも繋りがあるのであります。



色々の説がありまして、宮崎道三郎先生などは「シ」といふシナの言葉から「ウヂ」といふ言葉が

できたのであらう、「シ」だけではいひにくいところから、上に「ウ」をつけて「ウジ」にしたのであらうといはれてゐますが、若しさうならばシに濁りをつけて「ウジ」と書かなければならぬ筈であるから、その説はいけないと思ひます。中田薫先生の説は「ウジヤム」といふ親族もしくは血族を表す蒙古の言葉と關係があるといふのでありますけれども、蒙古語と我が國の言葉とが同じ系統であるといふことが證明されれば、この説き方も領けるのであります。蒙古語と我が國の言葉とは言語の系統を同じくするものであるとは、少くとも今までの所は、きり決められないのですから、これまた探ることが出来ません。

## 五、古き氏のこと、ウチ、カバネの意味、古き氏の意

### 味、氏の古き意味は長く失はれざりしこと

上古の氏は「ウヂ・カバネ」の「ウヂ」でありまして、これは専ら國家に仕へまつる行事を表すものである、もう少し分り易くいへば、國家に事へまつる品位をあらはすものといへるのであります。

上古の氏は仕事を以て名づけた外に、土地の名をつけたものも多くあるのであります。その土地の名をつけたものは、その土地を治めて行く。行事を以て名づけたものはその行事を以て國家に仕へるもの。中臣といふ氏は神様のことを取扱ふ氏である。物部といふ氏は兵器を扱ふ氏である。大坂といふ氏は大和の大坂といふ土地を治めてゐたものである、蘇我といふ氏は同じく大和の蘇我といふ土地を治めてゐたものであります。

この氏の起りは、極めて古いのであります。氏は天皇の賜ふものであります。これを改め賜ふことも、またこれを奪ひたまふことも大御心によるのであります。いかなる人に賜ふかといへば、國家に仕へまつるもの、今の言葉でいへば公の人に限って賜はたものであります。氏を改め賜はたことの著るしき例は日本書紀にも見えます。このことは我が國體を本當に辨へなければ悟りがたいであらうと思ふのでありますが、氏が専ら國家に奉仕するものに賜はたものであり、さうしてこれを賜ふのは専ら大御心によるものであるといふことは、我が國體が君本の國であるといふところから來てゐるのであります。我が國では、民は君を以て本とする、シナなどでは君が民を以て本とするといふのであります。まるで逆であります。君の御心のまに／＼民が動くといふのが我が國體であり



ますから、氏をさういふ公の人にのみ賜ったといふことも、このことさへわかれば、さまで悟りがたきことではなからうと思ふのであります。

さて氏は必ず可婆禰を伴ふものでありまして、初め氏を賜はれば、必ずこれとともに可婆禰をも賜はる。又氏を改め賜ふ時には、もとの可婆禰を賜ふこともあるし、新らしい可婆禰を賜ふこともありましたが。この可婆禰といふものも氏と同じやうに、血筋にはかゝりありません。同じ血筋でも可婆禰の違ふものは幾らもあり、違ふ血筋でも同じ可婆禰のものは澤山あります。可婆禰は全く血筋に關係はない、たゞ血筋ばかりでなく同じ可婆禰を皇別にも、神別にも、諸蕃にも賜つてゐます。可婆禰の種類は日本書紀、古事記、新撰姓氏錄などの古い本に見えたものを拾つて行くと、三十以上もあります。

その多くのものは伴造に賜つたものであります。伴造といふのは一つの仕事を以て國家に仕へる都にあつて朝廷の政をとり、地方にあつて民を治めるもの、或は弓を作るもの、鏡を作るもの、珠を作るもの、何れもそれらの仕事を以て國家に仕へまつたものであります。可婆禰は連とか、首とか、造とかいふのが多いのでありますが、史、譯語、手人、水取、大炊、神主といふやうなきは

めて異なる名前もあり、それからまた人種の名を直ちに可婆禰にして、隼人、國栖、漢人などといふのがあります。この可婆禰は、少し譬へやうが悪いかも知れませんが、今の言葉でいへば、長官、書記官、司税官、技師といふやうなものに當るのではないかと思はれます。ですから可婆禰は國家に奉仕する資格とか或は地位とかを示すものであります。氏は國家に於ける行政機構の部局を示します。例へば中臣連は、或は今の神社局長とでもいふことになるのでありませうか。

ところが氏も、可婆禰も長い間に移り變りがあります。しかしそれを申す前に、氏たるにはどういふ要件があるかといふことを申し上げたいと思ひます。

氏は一つの家が國家に奉仕することに依つて與へられるものであります。その奉仕する仕事をしに行くためには部曲、或は民部といふものを率ゐなければならぬのであります。これは今の言葉で申せば屬僚とでも申すものでありませう。で部曲がなければ氏でないのであります。各々の氏には國家より部曲を附屬せしめられる。つまり朝廷から部曲といふ屬僚を賜はるのであります。これはその氏のための私の仕事はせずに、國家に奉仕するための仕事をするのであります。中臣氏の部曲は中臣部であります。これは中臣氏の國家に仕へる仕事、即ち神様のことにかゝることをだけをするので

ありまして、中臣氏の私の用事はしないのであります。

部曲<sup>カキノタテ</sup>を率<sup>ウチ</sup>ゐざるものは氏でない。これは極めて大事なことであります。我が國は昔から 天皇は氏を稱へたまはずそれが貴き所以であると常に申し來つてゐますが、これはその通りでありまして、天皇は氏にましますが故に、氏を稱へさせられないのであります。皇族も氏ではありません。これが氏の要件なのであります。

さて前にちよつといひかけましたやうに、氏可婆禰<sup>ウチカバネ</sup>には常に變遷<sup>ウツリカハリ</sup>がある。どういふ變遷があるかといへば、大化の改新に依つて今まで氏が部曲を率ゐて世々相繼いで國家のために同じ職務をなしたのを或る程度までお止めになつて、全く新らしき政を始めさせられ、人材を登庸せられて、これまでやうに氏にかゝはらぬといふことになつて來たので、こゝに到つて「ウヂ」はもとの意味を失ひ家筋を示すのみのものとなり、これよりして、氏はだんだんと行事の名を捨てて、住むところの土地の名を以てこれに代へるといふやうになつて行つたのであります。

また可婆禰も、天武天皇の十三年にお改めになり、家柄の高い低いを示すものとせられ、眞人、朝臣、宿禰、忌寸、道師、臣、連、稻置といふ八色とお定めになつたのであります。これも暫くのこと

ありまして、延喜頃になりますと、可婆禰に依つて家柄の高い低いを示すといふ氣持は薄らいで來たものと見えまして、一番上にある眞人の可婆禰をもつてゐるものもだん／＼と願ひ出て、朝臣の可婆禰を賜はり、宿禰の可婆禰のものが朝臣の可婆禰になるといふやうになつて、大方は朝臣の可婆禰となつてしまつたのであります。今までは高い低いがあつたがそれが一つになる傾きをもつて來たので、もはやこれに依つて家柄の高い低いは示されないことになつてしまひました。これに依つて可婆禰の實は漸く失はれ、後にはたゞ儀式的のものとなつたのであります。

かやうにして氏は大化の改新の方、國家の公人たることを示すといふ昔の意味はなくなりました。が、その昔の意味は全くなつたわけではないのであります。氏といへばさういふ心持が何となくするといふことだけは、かなり久しく續いたのであります。

それについて一つの面白い例があります。これは藤原氏に限つて實例が残つてゐることです。が、それは藤原氏の人で興福寺に手向をする、さうすると興福寺がこれを憤つて藤原氏の長者に訴へ出る、藤原氏の長者はそれを聞いて長者宣を以てその人に「氏を放つ」といふ宣告をする。さうするとその人は藤原氏でないことになる、藤原氏から除かれるとともに、その人は朝廷から出仕を止めら

れる、謹慎しなければならない、さうして暫く慎んでゐると興福寺では、悔い改めた真心がわかったといふことで、また藤原氏の長者に願ひ出て許してや、て頂きたいといふと長者はまた長者宣を以て氏を續ぐことを命じる。さうすると朝廷ではその人に出仕をお許しになるといふことであります。このことはかなり後まであったのでありますが、これは、どう考へても、氏に非ざるものは朝廷に仕へまつることができないといふ思想が極めて僅かではあるが残つてゐたのであるとせざるを得ないのであります。

## 六、氏が公の稱となりしこと、平民以下にも

### 許されしこと、朝鮮人にも許されしこと

次に、今の氏の稱の起つたのはいつころであるかといふことでありますが、これはかなり廣く探して見ましたけれどもどうもはっきりしません。極めて大ざっぱのことを申すより外はなく、少くとも千年ほど前からのことであらうといふのが大體の見込であります。それからずっと今の氏即ち家名を用ゐ來たのであります。これは明治の御代に至るまで全く私の稱であつて、公の稱ではなかつたの

であります。朝廷ではすべてにもとの氏をお用ゐになつてゐました。

明治の御一新の後、しばらくの間は、位記にも、官記にも、また官員録にも、藤原朝臣某と書かれたのであります。やがて位記官記などにも今日民法にいふところの氏を用ゐることに定められました。こゝに至つて今の氏が公の稱になつたのであります。

今の氏はつまり家の名でありまして、久しき間私の稱でありました。しかも漫りにこれを稱へしめなかつたのであります。

無下の平民にはこれを許さず、士卒以上のものに限り、その外は、由緒のある大地主、その頃の言葉で言へば郷士の類が「苗字帶刀を許す」といふ特別の宣言を以て許されたに過ぎませんでした。

明治御一新以後、平民にすべて氏を稱へることを許されました。その當時の言葉では「苗字を稱へることを許す」といふのであります。

このことは法律の上から言ふとどういふことになりましたが、それについては、私は申上げる資格はありませんが、歴史の上から見てどういふ意味になるかと申しますと、平民にも氏を許されたといふことは、平民にも公人たることを許すといふことになるのではないかと思ふのであります。



今までは限られたる階級だけしか宮仕へをすることができなかったが、これからは平民にも宮仕へをすることを許すといふ意味であります。

さう考へますと、この度朝鮮人にも氏を許されるといふことは、歴史的の上から見ると、やはり同じやうに考へなくてはならぬものでありませう。朝鮮人にも宮仕へをすることができるといふことをその名の上にもはっきりとあらはしたものであると見ても、そんなに間違つた見方ではなからうと思ふのであります。

## 七、名の沿革

上古から中古の中頃までは、一人には一つの名しかありませんでした。その名の形はいろ／＼でありまして、たった一つの綴から成立つものもあり、二つの綴のもの、三つの綴のもの、四つの綴のもの、五つの綴のもの、六つの綴のものそれより長いものもあります。目といふのは一綴のもので、最も短いものゝ例、また伊香色雄といふのは六綴のもので、かなり長いものゝ例であります。かういふ風に名前の長さにもきまりはなかつたのであります。

それが中古になりますと、大に趣がかはって來ました。時代で申すと弘仁頃からそろ／＼よい漢字を二つ選んで組み合わせ、それを訓で讀んで名にするといふことが始まりました。それから百年か、百五十年ほどたつて、これは武士の方から始まつたのでありますが、二通りの名前を一人が稱へるやうになりました。一つは名乗、も一つは通稱であります。名乗は自ら名乗るもの、通稱は自らいひ、他人もこれをいふものであります。名乗といふのは、字二つから成りそれを訓で讀むものであります。(但し嵯峨源氏の如きは常に漢字一つときまつてゐます)今は漢字一字で名乗とすることが可なりはやるやうです。ことに幸か不幸か、廻り合せて漢字三字以上から成る氏をもつ人は、釣合の意味でありませうか、多くは申し合はせたやうに一字の名を選びます。

通稱には排行名、成功名、東百官名と三つの種類があります。この通稱はすでに延喜の頃からあるやうであります。もっとも盛んになつたのは大治以後のことです。排行名といふのは、太郎、次郎、三郎、四郎、太郎の太郎は小太郎であり、太郎の嫡長孫は孫太郎、太郎の嫡長曾孫は彦太郎である、また孫太郎のことは又太郎ともいふし、彦太郎のことは彌太郎ともいふ、太郎の次郎は太郎次郎、太郎の三郎は太郎三郎、次郎の太郎は次郎太郎、次郎の次郎は小次郎、次郎の三郎は次郎



三郎、かやうに十キで數へてまだ後があれば、與一、與二、與三。與は余とも書くし、一は市とも書く。これが排行名であります。

かういふ番號だけでなく、その番號の上に名頭ナオウといふものを加へることもあります。名頭とはどういふものであるかといふと、その本はもとの氏であります。どこの家にも太郎があるから、随分澤山の太郎があることになる、土地の名を氏にして、何々太郎といつても、それでも太郎は随分澤山あるから、紛れ易い。それでもう少しはきりさせようといふところから、もとの氏が源ミナモトであれば、源太郎或は源太、もとの氏が平ヘイならば、平太或は平太郎、もとの氏が中原ナカハラならば、中太、中太郎。ところがその源とか、中とか、平とかいふのも、初はもとの氏を取つたのでありますけれども、どうももとの氏の文字が道徳をあらはす文字でないといふので、——菅原は菅だけれども、草木の名で、どうも道徳的でないといふところから、いつの間にか菅の字の代りに勘の字を書くやうになり、中原の字もいつしか忠の字に代ることとなつた。また次は治になり、ゾウは三が正しいのでありますけれども、藏クラとしたり、造ゾウとしたりする。四は司とし、五は下に口を書いて吾とした。さういふやうに道徳的の意味のある字に代つて參りました。ゲンといふのは源であります、これも道徳的なのが宜

しいといふので、元、或は玄を選ぶ。忠臣藏に出て來る原惣右衛門は、元來は惟宗の宗の字でなければならぬ筈であります、惣の字になつてゐます。役者の吉右衛門も元來は橘の字を書くべきものを音を取つて吉の字を書くのであります。さういふ風に元來はもとの氏を取つたものであります、道徳をあらはす文字に代へるやうになります、もとの氏を取つたものであるといふことが忘れられて己が源氏でも平氣で平太郎といひ、己が藤原氏ではないのに、藤造などといつてゐます。梶原源太景季、梶原平次景高と、兄弟でありながら兄は源、弟は平、これではめっちゃである。これが排行名でありまして、かういふ種類の名は今も随分多くあります。

次に成功名ジヨウゴウミヤウであります、これは朝廷に資財を獻じ、その代りに或る官職の名を一生の間名乗ることを許されるのをいふのであります。

官職を賣買するといへば、以ての外のことではありますが姑くそれを擱いて考へると、誰でも一定の資財を獻すればすべて同じやうに許されるのでありますから、そのところは極めて公平であります。貞永式目ヂョウエイシキモクに、成功は公平であるといふのは、これをいつたのであります。それでどういふ官職の名を許されるかといひますと、これは今でいへばまづ府縣の警察部長ぐらゐのところが普通でありまして、

右衛門尉、左衛門尉、右兵衛尉、左兵衛尉、左近將監、右近將監などであります。左近將監、右近將監は皇宮警手であります。これは六位の官で、年功を積んで五位に昇るのでありまして、今でいふと、高等官三四等ぐらゐなところであります。後になると、左右衛門尉は下の尉を省き、その上に名頭をつけて勘右衛門、忠左衛門といひ、左右兵衛尉は、下の尉ばかりでなく、上の左右をも省き、上に名頭をつけて惣兵衛といふ。かういふ警察官ばかりでなく、八省の判官ならば丞、諸寮の判官ならば允諸司の判官ならば佑、大膳修理左京、右京などの職の判官ならば進、神祇官の判官ならば祐といふやうにいろ／＼の役所の判官も許されます。字はいろ／＼であるが、すべてこれをジョウといふ。どうかすると次官にも許され、それはスケといふ。助は諸寮の次官、介は國司の次官、また輔は八省の次官、亮は職の次官、弼は彈正臺、佐は衛府の次官であります。けれども弼とか佐はあまり多くはありません。それから一定の官の名ばかりが許されるのかといふと、爵も許されます。爵といふのは従五位、下のことです。従五位下を太夫といふ、「タユー」と訓みます。例へば左衛門尉で、敘爵されれば、これを左衛門大夫といふのです。正しくは左衛門大夫尉といふべきですが、下の尉はかういふ場合には必ず省きます。義大夫かたりに播磨大夫などといふのも、播磨大夫掾のことで、

意味は少しもかはりません。助とか、丞とかいふのは、官吏の階級の名で、これは成功の名であります。それが、それに似せて吉とか、作とかいふ名をつける。これは眞似であります。無意味につけたものであります。それからまた後になりますと今度は役所の名だけをつけて、助とか、丞とかいふものを省き、國の名だけで介とか、掾とかいふものを省くことになりました。佐久間玄蕃、栗山大膳、原田甲斐などといふのです。今もし役所の名をつけて、山田厚生とか、鈴木管船とかつけたらおかしいものですが、さういふことが行はれたのであります。けれどもいやなもののはつけませんでした。今の行刑局を昔は囚獄司といひましたが、後には囚獄正といふものだけに人はありませんでした。名前のよくないのを忌んだのであります。大膳、修理、左京、右京、主計、主税、主水、大學、采女など人のよく知る名前はみな役所の名前であります。

この外に東百官といふのがあります。それは相馬百官ともいつて將門に結びつけますが、將門とは何のかゝりもありません。頼母、伊織、平作、男也、一學、薰、泰輔、直人、それから忠一と書いてマメイチと言ふ、多門、數馬、東馬、藤馬、久馬、求馬、靜馬、要人、藏主などこれであります。いつ起ったかといふと、大永享祿の頃より前には一つも實例がありません。

## 八、今の名に二種あること、その稱へやうのこと

我が國民の今の名は千差萬別であります。如何なるむつかしい名前でも、名乗であるか、排行名であるか、成功名であるか、東百官名であるか、この中にはいらないものは一つもありません。私のところに持つて来れば、如何なる名前でも立ちどころにその何れに屬するかを判斷して差し上げます。それから我が國にはシナのやうに實名を諱むといふ習はしとはなかつたのであります。シナでは親の名前は口にしない、君の名前は口にしない。子供の名前でもその子の前では呼ばないといふ習慣があります。我が國には、さういふことは全くないのであります。それで今でも、我が國には天皇の御名をみだりに口にしない外は、全く名を諱むといふことはありません。古い本を見ると、諱は某と書いてあることがあります。それはシナの眞似で、全く我が國には「さる習しはあらざる」となり」といつて差支へありません。名を諱むといふ習しがありませんから、一つの家筋に通り名があります。例へば西園寺家は公と、實と、季との三つの中いづれかを必ず名乗につけることになつてゐます。しかしそれよりも一段上の家筋のよい近衛とか、九條とかいふ家々にはさういふ通り字とい

ふものがありません。通り字が必ずあるべきものといふのでもなくあるものもあり、ないものもあり、整然としてゐないところが我が國の尊いところでありませう。大體これで名の工合は分つたことと思ひます。

さて名のよみやうであります。名乗風のものには必ず訓でよみ、通稱風のものには或は音でよみ、或は音訓を混せてよみます。安田さんの御名前の「幹太」などはどうなるか「ミキタ」とよむのか、「カシタ」とよむのか、もし「カシタ」と讀むならば紛ふ方なき排行名で、幹は菅原の菅の轉化と見得る。また「ミキタ」と讀めば、恐らくは成功名で幹は造酒と書いたものの轉化でありませう。

また和吉といふ名は「ワキチ」ならば通稱であるし「カズヨシ」ならば名乗である。かういふのは御本人に聞かなければわかりません。しかし本人のいふことが當てにならぬこともあります。山本權兵衛といふ人がその名を「ゴンノヒヤウエ」と讀んだのは、極めて名高い話ですが、本人がさう讀んだからといって、それが正しいとはいはれないのであります。「ゴンノヒヤウエ」などといふ訓み方があるものではない。兵衛は役所の名ですから、その上に「權の」といふ言葉がつく筈がありません。權帥、權中將といふやうに、この意味の權は官名の上につくのであります。されば上にある「權」は



名頭であつて、正しくは「ゴンヒヤウエ」であります。「ゴンベエ」などといふのは俗の読みやうで、昔は下品ないひ方として排斥せられたことでもあります。

### 九、朝鮮人のこれまでの姓はシナの習慣をとりたる

ものなること、名もシナ風なること、シナの姓、氏、名、字のこと、姓の沿革のこと

次に朝鮮人の今の姓でありますが、これは中古この方シナの習慣によつて作り出されたものであります。新羅の眞興王の巡境の碑には多くの人の名が記されてゐますが、支那風の姓を冠せられたものは一つもありません。日本書紀孝德天皇大化三年の條に、「新羅が金春秋等を遣して云々」とあります。大化三年には新羅の王の一族で金といふ姓を名乗ったことがはつきり致しますが、これが一番古いのであります。千數百年前といふことになるが、それは王の一族とか、または極めて身分の高い人がシナの風を眞似て名乗つたに過ぎないので、身分の低い人々には實例が出て参りません。それも新羅だけのことでありまして、百濟などには全く出てゐないのであります。また齊明天皇六年の條には、「百濟の王子余豐璋」とあります。舒明天皇六年の條には、百濟の王義慈が王子の豐璋を質として

よこしたとあつて、こゝには余の字がついてゐません。この余は扶餘の餘の字を略して使つたもので、國の名であります。三國史記を見ると、儒理尼師今九年の下に、六部にそれぞれ李、崔、孫、鄭、裴、薛といふ姓を與へたといふことが書いてありますけれども、これは後の思想で書いたものでありまして、その時代にさういふことがあるわけのものではありません。今の朝鮮人のシナの姓名の起りはシナの唐の代より古いことはない、それも初は王とか貴人に限られたやうであります。それが長い間に、今では猫も杓子もシナ風の姓名をつけて、昔からあつたかの如くにいつてゐるのであります。

我が日本でもシナ風の姓名をこゝろよしとして、氏を無理に一字に修めた時代もありました。弘仁時代には詩文などに署するときに氏の字の中について一字を取つてシナの姓めかすことがはやりました。小野朝臣岑守は野岑守、巨勢朝臣志貴人は巨識人、滋野朝臣宿禰貞主は滋貞主といふやうに、氏を一字に修めてシナめかす。さういふことが文華秀麗集に見える。これは一つの遊びであります。また後になると、或る場合に氏の一字を取つて言ふことも起つて來ました。中原を中、在原を在、大江を江といふやうになりました。それは省いていふこともあるといふだけのことでありまして、全き形を廢したわけではありません。正徳以後になりますと、シナ學の盛になつたために、甚しくシナを尊ぶ



やうになり、無理に氏を一字に修めることが學者の間に大に行はれました。服部を服、宇野を宇、安藤を藤、山縣を縣などとする。服部南郭は氏を修めて服元喬子遷と名乗り、宇野明霞も氏を修めて宇鼎士新と名乗り、萩生徂來はもとの氏の物部を修めて、物雙松茂卿と名乗り、新井白石はもとの氏を用ゐて源君美在中と名乗った。氏を一字にするばかりでなく、我が國にかつてあらざる字といふものを戯れに稱へた。全くシナ人の眞似であります。けれどもその時代でも心ある人には笑はれました。頼山陽は頼襄子成と云ひました。この頼も修めたのでありますが、これは山陽が修めたのでなく、先代の人が修めたのを山陽が繼受いたのであります。山陽ほどの人は氏を修めるといふやうなことはしなかつたであります。かういふことはシナ學に酔つたものゝ爲した戯れでありますが、私は戯れにしても罪深き戯れであると思ふのであります。幸なことにはこれらのものにも皇國精神が少しばかりは残つてゐまして、シナにある姓の字と合はないのが宜しい。原、林、谷といふやうにたま／＼合ふものは強いて避けるにも及ばぬが、わざ／＼字を改めてまでシナの姓に似せる必要はないと、宇野明霞は書いてゐます。明霞は熱心に修姓といふことを主張した人ですが、それでもかういつてゐるのであります。なほかくまでシナ人の眞似をしようとした人たちでもその名を字の音で讀まうとし

なかつたことは、大に注意すべきことであります。シナでは一字の姓を好んで一字の姓は榮える、二字の姓は榮えない、三字以上の姓は夷狄の風であるといふので、シナの廻りにゐる國民はいづれも何とかして一字にしたいと考へたことであります。我が日本にすら橘逸勢が一字の氏であつたればこそ、シナでは名聲を博することができたのであると羨んだ學者もあつたくらゐです。

我が日本ではたゞシナ學に酔つた人が、遊び氣分でことさらにやつたといふに過ぎないのですが、朝鮮では國中残らずシナの姓を取つて姓とし、シナ風の名をつけて、全くシナ人と區別のないやうにしてしまつたのですから、まことに驚いた話であります。どうしてそこまで一致團結ができたものか不思議なことです。その源たるシナのことを申しますと、シナには姓、氏、名、字の四つの稱があります。シナの太古はどんなものでも人であれば、姓があり、氏があり、名があり、字があつた。シナ人の聖人として尊ぶところの孔子は、氏が孔、名は丘、字は仲尼、さて姓はどうであるかといふと、孔子の先祖は微子啓といつて、殷の王の一族であります。周が起つた時、宋に封ぜられて、公爵になつた人であります。微といふのは殷の世に封ぜられた所でそれを氏とし、子といふのは子爵たることを示す言葉、啓は名であります。啓が死んで弟の衍が後を繼ぎこれが微仲、それから時がたつ

て宋公稽といふ人から宋を氏とすることゝなつた。啓といふ人は殷の成湯の子孫である。成湯の先祖は堯舜の時の契といふ人である。「契」の字はこの人に限つて「シー」といふ。我が日本の漢音でもこれを「セツ」と読み、「ケイ」とは讀まない。「契約」といふときは漢音「ケイ」シナ音チー。その契の姓は何であるかといふと、子、これは鶏の子、ひよこです。姓はいつまでも變らないものとせられるから、契の時から成湯を経、微子啓を経て孔子に至つても常に子である。氏は時代に依つて變る。故に例へば成湯の時代にはその封ぜられた國の名に依つて商氏となり、盤庚の時に至つて國を殷に移して殷氏となつた。その支流のものが微に封ぜられ、微氏となつた。微子啓が宋に封ぜられ、宋公稽の時から宋氏となつた。宋の襄公が弗父何を生み、弗父が宋父周を生み宋父が世子勝を生み、勝が正考甫を生み、考甫が孔父嘉を生んだが、孔父の子孫がずっと孔といふ氏を名乗つた。杜預の左傳の集解に、孔が氏で、父が名で嘉が字だと説いてあるは誤だといふことであります。姓といふものは表にあらはすものでなく、それを守つて男は必ず氏を稱へる。しかるに氏は貴人だけにあるので、身分の低いものにはなかつたといふ學者もありますが、その反對の證據は幾らもあります。

さて女は氏も、名も表にあらはすものではない、いふ必要がある場合、即ち結婚の場合には姓をいひ、この場合に限つて姓の文字の下に氏をつけていふ、姜といふ姓ならば、姜氏といふ。ところが姓の分らない者がある。孔子の母親は顔氏の女で、名は徴在、その姓は傳はらないのであります。シナの歴代の帝王の姓とか氏とかは、今一つ一つ述べがたいが、手短かにいへば、黃帝は姓は姫、氏は有熊、堯は姓は祁、氏は陶唐、舜は姓は姚、氏は有虞、禹も成湯も、文王、武王も秦始皇帝もはっきりしてゐますが、漢の高祖となつてはっきりしない。史記には姓劉氏とある。漢の高祖は劉累の子孫であるといふことであるといひますが、それが正しければ姓は祁であります。劉累の先祖は堯で虞以上では陶唐氏、夏の世に劉累が御龍氏となり、商の世に豕韋氏となり、周の世に唐杜氏となり、士蒍が晋に入つて士師の官となり、その後士氏となり、士會が隨を食み、後范をうけて范氏となり、士會は秦に奔つたが、その子孫が、秦で劉氏となつたといふのであります。漢より後になると、姓と氏とが全く紛れ亂れて、もとの姓を名乗るものは十に二つになり、多くはもとの氏をなのりそれを姓といひならはすやうになりました。しかも昔からの姓の氣持は失はれなかつたのであります。では姓とは何であるかといひますと、字引に「姓生也古者因生以賜姓所以表明其所生、爲婚姻

「<sup>アイビー・アイ</sup>之別也」<sup>アイビー・アイ</sup>とあります。

姓<sup>セイ</sup>といふのは生れを示す。昔は生れに依って姓がつくられたのである、それは血筋をあらはし、結婚を許さざる範圍を示すためであるといふことになります。シナにはもとアメリカインディアンやオーストラリアの土人のやうにエキソガミー<sup>ナラハミ</sup>の習慣<sup>ナラハミ</sup>があつて、同じ姓<sup>セイ</sup>の人は結婚してはならないとしました。それはどういふところから出たかといひますと、インセストを極度に、或は病的に忌むといふところから來てゐるのであります、プリミチヴな思想であります。トーテムグループといふのはトライブではない。もとは母系で子孫相承けたものであります。アメリカインディアンの方の習はしでは、同じトーテムの中にジェネレーション<sup>ワカテ</sup>の別<sup>ワカテ</sup>があつて、同じジェネレーション<sup>ワカテ</sup>の<sup>ワカテ</sup>でなければ結婚は許さない。Aといふトーテムがあつて、その中にaといふジェネレーション<sup>ワカテ</sup>があり、Bといふトーテムの中にaといふジェネレーション<sup>ワカテ</sup>があるとすると、さうするとAのaジェネレーション<sup>ワカテ</sup>のものはBのaジェネレーション<sup>ワカテ</sup>のものとは結婚が出来るが、外のジェネレーション<sup>ワカテ</sup>のものは結婚を許されない。そしてAに屬するすべての男はBの總ての女を妻とすることが出来る。これをグループ・マリエヂと申します。太古はハンチングばかりであつたから財産といふ考はない。従つて己の妻といふ

考もない。己の結婚し得るトーテムのジェネレーション<sup>ワカテ</sup>の女はすべて妻である。だからシナの古い本にも「人その母を知つて父を知らず」とあります。人<sup>ヒトノサナリ</sup>智<sup>チ</sup>が少しく進んで牧畜を事とするやうになると、財産、家族の考が出て來て、一人の父の下に子孫が榮えるやうになります。さうするとグループ・マリエヂといふことはなくなる。さうしてその風習を持ち續けたがいつしかなくなる。シナでは今日迄エキソガミーの風習を違ふ形で續けてゐます。プリミチヴの時代にも必ずしもエキソガミーが行はれたとは限りません、古代エジプトのごとき、みなエンドガミーであります。エキソガミーのところでは初は母系が中心であつたといふが、これも何處でもさうであつたかといふとさうでもありません。プリミチヴな時代でも父系法が行はれたところがあります。腹は借りものといふ考へ方があります。最もひどいのはブラジルの土人で、これは人を喰ふ人でありましたが、戦争<sup>イナサ</sup>して捕虜<sup>トリウ</sup>を連れて來ると、それにうまいものを食はせ己の娘を與へ、娘がその子を生むと、その子を食つてしまふ。それは捕虜の子だからといふので食つてしまふのです。己の娘の子だといふ氣持は全くないのです。捕虜そのものを食つてもいいのですが、年を取つてゐて肉が硬いからそれを食ふ代りにそれに娘を與へて肉の柔い子供を生ませてそれを食ふのであります。これは純粹の父系法で、全く母を認めないので



あります。けれども文明に進み得る種族は、大抵もとは母系法のものであった。母系法を根柢にもつ父系法がやがて成り立ちました。母系法から父系法に移り變る時にはクヴァードといふ風習がある。フランスの山の中には、今でも行はれてゐるさうである。子供が生れると、母はそれを父の所に持て行き、父はその子を抱いて寝るのである。これは父がその子供を己の子であるといふことを形の上を示すものであるといはれてゐます。スキスの法學者バッフーフンは母系法こそ文明の母胎であると説いてゐます。シナは母系法のエキソガミーに始まった國である。炎帝神農氏といふ人の姓は姜であります。何故姜といふ姓を名乗るかといふと、その母が姜水、即ちチアンといふ川のほとりにゐたからといふのでありますが「姜」といふ字をよく見ると羊の女と解かれる、即ち羊に屬するといふことで、姜姓といふのは羊に屬する女の系統なることをあらはします。また子は鶏の子で、子姓といへば鶏の子に屬するものの系統なることをあらはします。さればシナにはトーテムの思想があったと考へられるのであります。

なほ考ふべきことは、姓といふ文字であります。これも母系と關係があるのではありますまいか。もし初から父系法であつたならば、女生を合して姓といふ字を作るといふやうなことはなかつたであらうと思はれます。シナでは後になつて父系法が行はれ、文獻の徴し得る限り、即ちわれ／＼が知り得る限りに於ては母系法といふものはない。唯文字の構造上から母系法の痕跡が認められるといふまでであります。シナでは秦漢のあたりから姓と氏とが紊れましたからよく考へれば、エキソガミーの社會は事實上なくなつてしまつたわけですがその後も昔の姓の思想がずっと残り氏を姓と見做して、ものと如く、それを結婚の標準にしましたから、その後は氏即ち姓であります。即ち同じ氏のものゝ結婚しないのであります。どうかすると、同じ氏であつても先祖が違ふといふことがはつきりしてゐれば、結婚することもありました。かの漢の天下を潰した王莽といふものは元城の王氏であるが、宜春の王氏と結婚しました。その言ひ草は先祖が違ふ、同祖でないから差支はないといふのであります。世の人はこれを正しいとしなかつたのであります。ついでに申しますが、どこそこの王氏といふ風に土地の名をつけていふのはその氏のあらはれた土地の名を取つたものでありまして、これをシナでは望といひます。一つの氏で望の多いのが澤山あります。王氏は二十一望、劉氏は二十五望あるといふことです。また姓氏に尊い卑いがあるとせられてゐました。唐の時代には博陵の崔氏、范陽の盧氏、隴西の李氏、滎陽の鄭氏を四姓といつて尊びました。當時の帝室は隴西の李氏でありましたが、帝室

うと思はれます。シナでは後になつて父系法が行はれ、文獻の徴し得る限り、即ちわれ／＼が知り得る限りに於ては母系法といふものはない。唯文字の構造上から母系法の痕跡が認められるといふまでであります。シナでは秦漢のあたりから姓と氏とが紊れましたからよく考へれば、エキソガミーの社會は事實上なくなつてしまつたわけですがその後も昔の姓の思想がずっと残り氏を姓と見做して、ものと如く、それを結婚の標準にしましたから、その後は氏即ち姓であります。即ち同じ氏のものゝ結婚しないのであります。どうかすると、同じ氏であつても先祖が違ふといふことがはつきりしてゐれば、結婚することもありました。かの漢の天下を潰した王莽といふものは元城の王氏であるが、宜春の王氏と結婚しました。その言ひ草は先祖が違ふ、同祖でないから差支はないといふのであります。世の人はこれを正しいとしなかつたのであります。ついでに申しますが、どこそこの王氏といふ風に土地の名をつけていふのはその氏のあらはれた土地の名を取つたものでありまして、これをシナでは望といひます。一つの氏で望の多いのが澤山あります。王氏は二十一望、劉氏は二十五望あるといふことです。また姓氏に尊い卑いがあるとせられてゐました。唐の時代には博陵の崔氏、范陽の盧氏、隴西の李氏、滎陽の鄭氏を四姓といつて尊びました。當時の帝室は隴西の李氏でありましたが、帝室



よりも家柄のよい、即ち姓の尊いものが、シナにはありました。唐の天子に李昂といふ人がありまして、博陵の崔氏と結婚しようと思ったところ、博陵の崔氏では隴西の李氏は卑しいから結婚はできないと撥ねつけたといふことがあります。たとひ天子であっても、姓の卑しいものは排斥せられるのであります。これがシナの社會であります。しからば姓の尊い卑いはシナでは千古不易かと申すと、なか／＼さうでなく、時代とともにはかり、今では趙、錢、孫、李が最も尊いといふことになってゐます。愛親覺羅が滿洲からシナに入つた時一字の姓をつけなければならぬといつて百家姓を持って來て、この中からお選び下さいといつたところ、くる／＼と紙をめくり、一番初にある趙を指して、これにして置けといつたといふ話があります。

十、朝鮮人が新に氏を作るにはいかにすべき、その名を名とするにはいかにすべき、朝鮮人がもとの姓をそのまま氏とするにはいかがすべき、名を名とするにはいかがすべき

氏は皇國にのみあるもので、外の國には似たものもなく朝鮮人のこれまでは全く知らなかつたものであるといふことを忘れてはなりません。朝鮮人がシナの習慣を眞似て稱へた姓または氏とは聊かも似たところがありませんし、また朝鮮の上古にも皇國の氏に似たものはかつてなかつたのであります。皇國人の今の氏は多くは住む土地の名を取つたものでありますが、稀にはその家の履歴の著るしきものに依つて稱へるものもあります。故に新たに氏を作るに當つてはこれまでの姓とは全く離れるのが正しいのです。さうして家々にかゝはりのある土地の名を取るのが最も宜いと思ひます。竹添町に住むものが竹添氏、和泉町に住むものが和泉氏、三角地に住むものが三角氏、松月町に住むものが松月氏を稱へるのが自然の行き方であります。故なく皇國人の氏を眞似て佐藤、五味、井上、堀内などとするのは最も笑ふべきことであります。たゞし木村といふ人を崇拜しその人の許しを受けて木村と名乗り、または木村といふ人の部下であつて、その人の許しを受けて木村と名乗るのは意味のないことではありません。されども今に至るまでに久しく恣に佐藤、五味、井上、堀内などを、稱へたものはまことに陋劣なことではあるが、もはや今となつてはそれに歴史があるのですから、法規に觸れぬかぎり、その稱へ來つたまゝを氏とすることも悪いとはいへますまい。新たに作るに當つて、どう

すればいいかといへば只今申した通りにすべきものと思ふのであります。

次に名は如何にすべき。それはもとの名の字のまゝにしてそれを國語の訓でよむのが最も正しいのであります。もとの名の字を變へて新らしい名を作るのは最も正しいとはいはれません。上に皇國風の氏があり、下にシナの名があるので何だか釣り合はないやうに感ぜられるかも知れませんが、その字を國語の訓で讀めば、少しも釣合はないことはありません。どんな文字でも、國語の訓のつけられないものはあることなし。私のところに持つて來ればどんな文字でも立ちどころに讀みます。名乗字引といふものがあるから、それを引けば直ぐ讀めるのです。決して私がえらいのではありません。

しかしながら農工商虞にむつかしい名はふさはしくない。大工、左官、魚屋などが假りに水下氏を名乗るとして、水下永變などといつては聊か變である、皇國風ではないやうだといふやうに考へるならば通稱風の名をつけるのもよからうと思ひます。三角町に住んで八百屋を渡世とする人ならば、三角八百吉で宜しからう。はたまた長吉、文助、正藏の類を勝手に選ぶとしても、誰も文句をいふものはありません。今まで久しく姓安なるが故に安井清、姓高なるが故に高橋善一、姓元なるが故に元田秀雄などと、恣に稱へてゐたものは、面白くないことではありますが、すでに歴史があるのでありますから、

それを氏とし名としても妨げることはできません。

姓は氏と全く性質のちがふものでありますから、これを氏の一部として保存すべきものではありません。どうしても保存しようといふならば、名の一部として、それをその氏の通り字として現はすのが一つの方法かと思ひます。岡崎町に住む金文彬といふものが岡崎を氏として岡崎文彬となり、これより後に生れる子孫に金をその氏の通り字として、金英、金光、金忠、金平などと代々傳へることにすることも悪くはありますまい。この金文彬が自ら岡崎金文などとするのは頗る考へものであります。もとの姓をそのまゝ氏とすることもいけないといつて差止るわけにはいかんと思ひます。たゞ私の

冀ふところは、氏は皇國のものでありますから、必ず國語の訓で讀むことにしたいといふことです。どうしても讀めないといふ文字のあらう筈はありません。林をハヤシ、柳をヤナギ、吳をクレと讀むのは古くからの習はしであります。

これまでの朝鮮人のつけた名は、皇國の人の名の種類の中の何に當るかといひますと、すべて名乗り風の名であります。さればこれは皇國のこれまでの習はしに従つて、すべて訓で讀まねばなりません。僧は例外であります。前にも申しましたやうに國語の訓で讀めない文字といふものは一つもあり

ません。尤も誰にでもわけなく読めるわけではありませんが、名乗字引を使へば大抵は読めます。終に臨んで、申して置きたいことは、これから後はあまりむづかしい文字で名をつけないやうにしたいといふことであります。文部省で定めた常用漢字の中に限ることができれば最もよいと思ひます。

## 朝鮮の姓名・氏・本貫

今村 鞆

### 一、姓名の歴史的變遷

朝鮮の社會を見る時に、常に二つの部層に分けて考へられる。その一つは、貴族士班の上層階級であり、その一つは一般庶民である。日本内地に於いて、中世以後、武士が社會の中堅となつたが、かくの如き歴史を持たなかつた朝鮮は、古代より現代に至る迄、中堅部層なき社會であつた。一切の朝鮮文化はこの角度から觀察され得るが、姓名に於いても、亦、この二つの立場から考察すべきである。

#### 1 主として貴族士班

##### 第一期 朝鮮の固有名稱を以てせし時代

歴史の文獻の上に、最も古く朝鮮の人名が紹介された頃は、その姓名はそれが當時の發表様式とも



いふべき漢字によつて居たが、多く朝鮮の固有名稱によつて居たといふべきである。

古く支那の古書に現はれた所を拾つてみると、次の如きものがある。

南閭（漢書）蘇馬謚（後漢書）廉斯鏹（三國志）餘句、驗暉（晋書）餘映、餘毗（梁書）荷知（南齊書）餘慶（宋書）贊首流、沙法名、解禮畏、木干那（南齊書）

又、日本書紀をみると、次の様な朝鮮人名が見られる。

蘇那曷叱知、天日槍、汗禮斯伐、毛麻利叱智、富羅茂智、微叱許智伐早、眞毛津、阿直岐、莫古解、古爾解、洲利即爾、姐彌文貴、木菟不麻甲背、彌騰利、伊叱夫禮智、己洲己婁、鼻利莫古、彌麻沙、沙宅己婁、木尹貴、怒喇斯致契、久禮叱及伐干、枳叱政奈末、（以上の内、智、知、又は干、早、の如きは尊稱と考へられる）

朝鮮自體の文獻として、最古のものは金石文であるが、その中に於いて最も人名を多く連ねた眞興王碑には

忽利、竹夫、春夫、福登、宿欣、牟聰

などの名が見られ、又、三國史記には昔の新羅人として、

孟召、羽烏、吉門、允良、陲鄒、許婁、朴阿道、眞忠、于老、異斯夫、比助夫、首乙夫、弩里夫  
三國遺事には

謁平、蘇伐都利、俱禮馬、智伯虎、祇沱、虎珍、鼻判、竹旨郎、弓巴、處容、居陲知

などの名が見える。以上が古くより、紀元千三百年頃迄の人名の一部を示したものであり、大體に朝鮮本來の名を漢字で表現して居る。興味多いのは、新羅の訥訛王の時に高句麗に赴いた使者は、三國史記には朴堤上とあり、三國遺事には金堤上とある。姓の觀念の確立して居なかつたからであらう。

第二期 漢字を用ひて在來の族名を表示すると共に、名も漢様化せんと試みた時代

朝鮮本來の朝鮮名を最も早く、漢様に改めようとしたのは百濟であつた。それは、新羅より遙かに早く支那文化に接して居たからであつた。支那側の文獻「北史」「東夷傳百濟の條に「國中大姓有（八）族、沙氏、燕氏、姦氏、解氏、眞氏、國氏、木氏、苗氏」とあり、又、王姓餘氏とある。これが具體的には、沙宅己婁（日本書紀）沙伴・沙豆（三國史記）、燕信、燕實（三國史記）、解婁・解須（三國史記）木菟不麻甲背（日本書紀）木菟滿致（三國史記）眞會、眞忠（三國史記）眞毛津（日本書紀）などの例が、文獻に見える。餘の姓は、扶餘ともあり、余といふ略字ともなつて居る。尙、以上の外に



三國史記に、乙音、屹于、莫古解、豆知、優永、黑齒常之、日本書紀に姐彌文貴などの姓名がある。然し此等は、支那の姓の模倣ではなかつた。木彛、祖彌、扶餘などは支那に全くなく、余、餘、解、眞、燕、沙などはあるにはあるが、非常に少い姓である点から考へて百濟には既に族制が確立して居て其土俗的族名を漢字に翻案したと推定せらるゝ。

新羅の古姓について、三國史記、遺事に載せられた金、朴、昔の始祖の傳説は後世の作爲である。

支那側の史籍には「北齊書」は「新羅王金眞興」「隋書」新羅傳に「金眞平」とあり、「新唐書」に「王姓金、貴人の姓朴氏、民に氏なく名あり」とあり、その頃は、確實にこの金といふ姓の確立して居たことが分る。日本書紀には孝德天皇大化三年に、新羅の使者として、「金春秋、金多遂」の名が出て居り、又、天智天皇七年の條に「金東嚴」の名のあるのが、支那式姓名として、新羅人名の現はれた最初である。

朝鮮の金石文としては、慶州の甘山寺彌勒菩薩造像記(七九)に金志誠の名あり、又、同寺阿彌陀如來造像記(八〇)に金志全、慶州聖德王神鐘銘(一五)に金驪源、金弼奚、金昌、金良相、朴韓味などが金石文にある支那式姓名として、最も古いものである。

### 第三期 唐の姓名に倣ひその變更を試みし時代並その仕事の完成せし時代

新羅が唐の力を借りつゝ半島統一に進む頃支那文化は壓倒的に新羅に入つた。新羅は全力をあげて、この模倣吸収に務めた。眞興王の時に男子の衣服が唐様化し、文武王の時に女服も唐風を採用、景德王から興德王の間に制度が唐式になり、殊に景德王の時に地名が大いに改められて、支那化した。この傾向に従つて人名も、その例外となることは出来なかつた。

三國史記儒理尼師今五年に、新羅六部に姓、李、崔、孫、鄭、裴、薛を賜ふとあるが、この説は、恐らく新羅の末頃、支那式姓の模倣の著しい頃、作られた傳説であり、特にその六姓は、その頃の唐代の名門、大族であつた隴西の李氏、清河、博陵の崔氏、樂安の孫氏、滎陽の鄭氏、河東の裴氏、薛氏に因んで居ることは、稻葉博士の考證せられた通りである。

新羅人の姓名の支那様式化工作は、その末期に、一應完成して居ることは、高麗史にのせられた高麗太祖創業功臣の姓名をみるに

金行濤、黔剛、林明弼、崔汶、堅衍、朴仁遠、金言規、康允珩、歸評、林曦、陳原、閻蓑、林湘、姚仁暉、香南、能惠、申一、能駿、孫迥、秦勁、曦弼、權寔、國鉉、倪言、曲矜、崔

汶堅、金堙、英俊、劉吉權

などであり、多少朝鮮固有色をもつも、大體支那的になつて居る。△符のつけたのは、在來の名を二分して上一字を姓としたのか、或は、卑賤出身のもので名のみを擧げたのか詳しくは分らぬ。能惠、能駿は、僧出身らしく思はる。

特に高麗中期以後は、支那文化の浸潤により、姓名も層一層整頓せられ、特に五行の木火土金水又は天官地支或は音韻による同韻字等々を横列又は縦系に使用する命名法が行はれてから、好文字を選び、現今の様な整備した漢姓名をつける様になつたのである。

## 2 一般庶民

以上は主として王族貴族士班であるが、庶民一般は、その趣を異にして居た。先に述べた「新唐書」に新羅の「民に氏なく名あり」と記された如く、殆んど姓はなかつたと考ふべきであらう。

李重煥の擇里志には

「我國は……箕子の後を鮮于氏と爲す。高句麗を高氏となす。新羅の諸王、朴、昔、金三姓及び駕洛の國君金氏は俱に王者を以てし、自から其の姓を命ず。然して只仕宦の士族略ぼ之れあり、民

庶は皆ある無きなり。高麗に至つては、三韓を混一して始めて中國の氏族に倣ひ、姓を八路に頒つ而して人皆姓あり」

とある。眞に要領を得た記載であるが、然し、高麗時代に、姓を八路に頒つといふ證據は何處にもなく、庶民に姓のない者は多かつた。

高麗時代の庶民の姓名について、文獻に現はれたものは、大體次の四様式であつた。

一、姓名ともに兩班と同じく支那様式のもの

即ち、康允紹、白善淵、金英甫、朴春得など。

二、姓のみ支那様式で、名は在來式のもの

即ち、金介老味、崔小岩、尹介米致などの例。又この例には、夏釗、苻訖などの朝鮮の俗字を用したものも多い。

三、姓なくして名のみ、その名は兩班式のもの

即ち、貞順、義謙、豆休、莫玉、廉長、孝德、萬年、甲得、英甫等の例

四、姓なく、名は在來の固有のものを用ひしもの

即ち、今音山、苐叱同、吾乙未など、名は多く音によらず訓による。

この四項の分類は、支那模倣途上の未成品、鮮支折衷の成り行き作品と見做されるものである。

李氏朝鮮時代に至つて儒教を以つて立國の要義とした爲に、高麗時代より一層支那文化が浸潤し、殊に一般人が姓名を記し腰に帶ぶる號牌の制度があり、三年毎に一回戸籍をしらべることが行はれたことは、支那式姓名を持つ者を更に多くしたのである。又、壬辰の役に庶民で功をたてた者多く兩班式姓名に改めた者、又、壬辰の役後、人口の移動と戸籍帳の亡失の爲に身分不明となり、又奴婢の逃亡した者等は、一旦兩班になれば、徭役を免れることの出来る爲に、手段を盡して兩班を冒稱する者あり、社會の進歩と共に、庶民にも兩班式姓名は益々普及されるに至つた。

尙、以上の外に、特殊な例として高麗時代に蒙古の附庸となつた爲に、蒙古風の名、益智禮普化、伯顔不花、塔兒帖木兒、仕伯顔禿古思、普塔失里など、王族でその名を用ひて居た。又、高麗時代から李氏朝鮮時代にかけて、女真人が多數、朝鮮化した爲に、女真式姓名もあり、李太祖の功臣たる佟豆蘭の如きはそれである。

又、最近世になつてキリスト教が流行して、洗禮の後に教籍に登録せらるゝに當つて、在來の名を

捨ててその教名を用ふる者を生じ、李彼得、鄭美理士、金瑪利亞などの如く、そのまゝ、戸籍にのせられて居る。

又、保護政治以後、内地人式姓名を名乗る者も、漸次出て來て、多く庶民階級で内地人との關係に専らその名を用ひて居た。特に平安道は多く、又、伊藤、長谷川などの姓を稱する者が多かつたので大正の初に内牒を發して、これを禁じて、皆元の名に復せしめた。内地人を妻とした者は、その妻の本名は戸籍に、例へば金東完妻大井深雪、安昌浩妻山口イソといふ様に記されて居たが、實際上では本人は他人に對して金深雪、安イソなどと自稱し、名刺なども、さうして居た。これは内地人的觀念から、舊姓をそのまゝ使ふのは、正式の妻でない感あるからである。今度の民事令改正によつて、内地人式氏を名乗る事が積極的に許され、而も氏設定によつて、夫と妻は同じ氏となり、内鮮一體は、この立場から益々徹底したものになるであらう。

## 二、姓の享有・創立

朝鮮の姓は、支那思想の所産として血統を示すものであるから、父より子・女に傳はるもので、出



生と共に享有するものであるが、唯、父の知れざる時に母の姓を名乗ること、又、婢の子は、父に従ふよりも母に従ふこと多く、良賤相婚して生れた子は、父に従ふ場合もあり、又、母に従ふ場合もあった。

父或は母が姓なき時は、その子女は姓を享有することが出来ず、隆熙三年に民籍法發布せられて、姓なき者も姓を作り、又、ついで戸籍法の施行により今では生れて姓なき者は絶対になきこととなり、人は出生と共にその父の姓を享有することとなつた。

姓は、血族的に一身に附屬するものである爲に、生涯變更することなく、縱令異姓の家に入るも決して變更せず、女が他家に入るも依然として生家の姓を稱し、又、收養子により他姓の家に入るも、その家の姓を繼ぐことは出来ない。

姓は男系の血族關係を示すもので、同系血族の者が異姓を創立することは絶対に不可能であるが、唯、棄子を收養した場合は、その收養者の姓に従ふ習慣法があつた。然しこれも後年、父が判明した時は、その父の姓に従ふべき條件を保有して居たものであつた。姓の血族關係を表示する理念は、迄徹底して居た。然し高麗時代には、棄子を收養した時はこれを子とみなす習慣があつた。

又、從來庶民の中に姓のなかつた者が極めて稀に有つたが此等は文化の流れに浴すると共に漸次姓を創立し、遂には、朝鮮人盡くが、姓を持つに至つた。このことは姓の創立と見るべきであらう。

### 三、姓名の得喪變更

#### 1 賜姓・賜名

支那皇帝よりその姓を賜る場合の例として、高麗史列傳に、李子淵が唐より李を賜ふといふ記事あり、東國輿地勝覽に「文幹本姓全、中朝に入る、文章を以て名を著はす、姓を文と賜ふ」とあり、又「増補文献備考」には、金高禕が中朝に入り文氏を賜ふの記事がある。

朝鮮王者よりの賜姓については、檀君が濊君に、又新羅の六村賜姓説があるが、これは、後世作爲した傳説にすぎず、確實なのは、高麗の太祖が朴儒に王氏を賜ひ、新羅の末裔金幸に權氏を賜へるが如きを最初として、爾來歴代、王氏を賜へる例は、非常に多い。李氏朝鮮時代に入つて、女真人佟豆蘭に李と賜ひしこと「東國文献備考」にあり、又、來投の女真人或は、日本人の歸化及投降海賊を懷柔する爲に、姓を賜はつた例は多い。



又、名のみを賜はつた例も高麗以來多く、「林下筆記」には、公安省は、生れつき一目小なる爲自ら小目と名乗つて居た所、朝に立つに及んで、命じて省と改めしめたとある。又、金乙寶が雨を禱つて應驗あつた時、太宗から承禔と賜名されたのも、この例である。

## 2 帝王の特命によるもの

新羅の聖德王の十一年に、王の諱隆基が唐の玄宗の諱を冒したので玄宗より勅して興光と改めた例が最初である。高麗時代に顯宗二十年に王の嫌名を避けて姓荀の人を孫とせしめた。宣宗即位して、州、府、郡、縣、寺院、公私門號、館號及び臣僚以下の名で御諱を犯す者及び音の同じ者は、これを改めしめた。神宗元年に、姓、卓なるものは皆外家の姓に従はしめ、若し内外の姓同じであれば、内外祖母の姓に従はしめて居る。

李氏朝鮮になつて、「經濟六典」に、王諱の規定を設け、又宣祖時代に歷代の王及び追尊王の名の代用字を定め、且、歷代の王いづれも、普通に使用せざる字を選んで諱として、又王諱の適用範圍を狭くした爲に、一般に王諱によつて名を改めるといふことは多くは行はれなかつた。

王命により賜姓を剝奪したことは、高麗史に、王鑄忠が忠宣王の意を聽かなかつた爲にその王姓を

縛り去られし例あり、李太祖三年に、王姓は高麗王族の者なる故に皆改めしめて居る。

## 3 自己の意志による改名

高麗時代には自由であつたらしく、その例は高麗史に出て居る。李氏朝鮮時代には「經國大典」に名を改むる手續が定められたが事實容易に勝手に改名することが行はれ、その爲に、その制限策が講ぜられた程であつた。然し、一般に庶民が兩班を冒稱した爲に姓名を變更した者は非常に多かつた。

## 四、名の種類

### 兒名

人生るゝや先づ兒名を持つ、これを支那流に小字又は小名とも云ふ。その命名の期日については、別に社會的な規範がある譯ではないが、士人の家では三日以内或は七日以内に命名するのを普通とするが、或は出産の即時に命名するものもあり、稀には出産前に男女二様の名を作つて準備しておく者もあり、或は幾週幾月の後に命ずるものもあり、甚だ緩漫なのは數年の後に命ずる者もあるが、近來は民籍法次いで戸籍法が制定せられ、出生の届出を要する爲に、大抵はその届出前に命名するに至つた

兒名を用ふる間は、兩班は男子は冠禮を行ひ冠名をつける迄の間これを用ひ、一旦冠して本名をもつと兒名は用ひない。女子は婚禮の日より幼名を用ひず、その日から生家の姓に氏を附して、例へば、金氏、李氏と云ひ、戸籍、文記、官よりの指令、公文など、すべての公私の書面に用ゆるも、氏は敬稱を意味するので自稱しない。

昔は男子冠禮を行ひ冠名を持てば、族譜に記入せられ、又戸籍にも登録せられる。女子は族譜には、唯單に女(ムスメの意味)と記され、出嫁の後は、その女字の下に夫の姓名(官階あるものはその名なき者は幼學或は閑良)を記され、出嫁先の族譜には夫の次に配某氏と記さる。

庶民は冠禮を行はず、その爲兒名冠名の別なく本名即ち兒名で生涯これを使用する。但し男子は中途に於いて隨意にこれを變更して野卑ならざる名に改める者もある。女は出嫁の後、名をよばれる事はないが、戸籍には金姓女、李姓女など生家の姓、又千蘭伊、貞順、召史<sup>●</sup>と記されて居る。

兒名には、漢字、朝鮮造字、諺文など、用ひられ、又、アテ字が非常に多い。その命名の仕方には、生れた時を以てせるもの正月、正得、正夏、二月、夏至、端午、春分、除夕、秋介、生れた歳の干支を用ひしもの、甲辰、甲姫、乙童、丙午、丙喜、戊戌、福王

生れたる地名並その地の山川名をとりしもの 錦山、開城、井川、玉山、芳川、文山介、熊山

生れし場所を以てせるもの 舍郎介<sup>사랑</sup>(客間) 溫房、後房、厠介、路中伊、道里

序次を以て兄弟姉妹に名けたるもの 長男、長女、大女、小年、又一男、三次、五介

將來を祝福し美名を撰びたるもの 億萬、三萬、壽姫、千壽、命長、福童、忠愛

身體の特徴及び形によるもの 點女<sup>점녀</sup>(ホクロのある者) 雙可梅<sup>쌍가마</sup>(頭旋毛の二つあるもの) 六指、四八<sup>사팔</sup>(やぶにらみ) 毛白、東九里<sup>동구리</sup>(顔の丸き者) 甘長<sup>감장</sup>(黒色) 古紛<sup>고분</sup>(せむし) 老郎<sup>노랑</sup>(黃色) 翁宗<sup>옹종</sup>(顔の小きき者)

性質、習癖によるもの、母眞金<sup>모증금</sup>(腹がすくも泣かずボンヤリ) 天動<sup>천동</sup>(雷のこと、やかま

しい) 作碣<sup>작갈</sup>(オシヤベリ) 甲乙<sup>갑을</sup>(輕率)

動物、植物に因むもの 犬<sup>개</sup>、門狗<sup>문개</sup>、羅九<sup>로구</sup>(驢馬)、野牛<sup>물소</sup>、奴九尼<sup>너구리</sup>(狸) 蟋蟀<sup>蟋蟀</sup>、海參<sup>해參</sup>、紅梅、

大松、大蘭

以上の外、庶物の名稱、祈願先の名を以てせるもの、出産の希望を示せるもの、又唯單に總角、處女、사나이(男)の名を附せるもの、更に極端なのは、故らに醜惡の名を用ひ、馬同<sup>마동</sup>(馬の糞) 付出伊<sup>부출이</sup>

(便所の板) 弄子<sup>농자</sup> 介<sup>개</sup>(便所の犬) 介童<sup>개동</sup>(犬の糞、李太王殿下の御幼名も是を用ひたる) など稱する例もあつた。

## 冠 名

男子が成年期に達して初めて冠禮を行ひ、その時に冠名を持つことは支那に於いて古くから行はれそのことは「禮記」に記されて居る。

朝鮮では、高麗景宗元年に王子が元服したと、又、同睿宗十六年正月に王、太子に元服を壽春宮に於て加へたことが「高麗史」に出て居り、これが記事として最初のものである。然し、實際は恐らくそれ以前より支那に倣つて行はれて居り、同時に冠名も持つたと解せられる。又、唯單に王室のみならず大臣貴族達も、これに倣つて冠禮を行ふ者もあつたと考へられる。

李氏朝鮮時代に入つてから、儒教を経國の要義として、儒教儀禮は前代に比し、一段と實行に考慮され、同時代の初に、權近の「禮記淺見錄」あり、世宗成宗の時代に幾種の刊行物あり、仁祖の時代の「家禮諺解」及び憲宗時代の「四禮便覽」は、特に近代迄一般に士家が儀禮上の據典とする所であつた。王室については、「璿源世譜」に仁宗以下十二王の冠禮の年號月日を記載されて居る。

年齢については一定せず、男子官祿をうくる資格のある十六歳を最低年齢としたと考へられる。李氏朝鮮の後期は、加冠の年禮は一定せず、大抵結婚と同時にあり、實例としては、十歳以下に冠した

者も三十歳以下で冠した者もあり、其の幼年の結婚者は舉式の日に結髮加冠して居た。實際は大正の初頃迄、十歳前後の兒童で結髮加冠して居る者を地方で實見した。

最近には、皆幼少より斷髮し、又一方戶籍法上、出生届出の關係から兒名を命ずる者なく、初めより冠名に等しい名を命ずるに至り、冠禮を行ふことが殆んどなくなつた。

字

字がいつ頃から行はれたか、文獻の上からこれをみれば、三國史記に

金仁問 字仁壽、薛聰 字聰智、金陽 字魏昕、崔致遠 字弧雲或云海雲

とあり、又、金石文としては、慶州の高仙寺誓幢和上塔碑に、大師の字仲業とあり、景文王時代の谷城大安寺寂禪塔碑に、禪師字は體空とあり、新羅時代末から上流階級で字は行はれて居た。高麗時代から李氏朝鮮時代の初にかけて、知名の人でも字のなき者も相當にあつた。李氏朝鮮時代の世宗以後に至つて、士人は大抵字を有し、又用字も高尚になつて居る。特に、苟も多少文筆のある者に、冠名と共に字を命ずる風が一般に普及し、又、實名を諱んで呼ばぬ禮俗が普及してから字は反つて本名以上に重要となり、友人相互間は言ふに及ばず、社交上互に字を呼び名を呼ばず、字は世に知らるゝも、



名は知られぬといふ本末顛倒を來し、京城で士人の家を訪ねるに、字を以つてするに非ざれば、分らぬと言ふ時代もあつたと言ふ。

李太王の末年以後、社會性が向上すると共に、本名を用ふる機會が多くなり、特に最近は、僅かに極めて稀に舊習に囚はれ禮節に拘泥する家で間々冠名と同時に字を命する者あるにすぎない。

### 別 號

別號は支那に於いて後漢末から行はれ、唐宋時代になつて詩文の學盛となると共に、それ以後盛んに行はれた。朝鮮では、新羅時代に、崔致遠が號孤雲と言つたにすぎず、高麗時代になり、特にその末期は、非常に盛んに行はれた。有名なのを擧ぐれば、

稼亭 李穀、雙明齋 李仁老、益齋 李齊賢、白雲居士 李奎報、冶隱 吉再、牧隱 李穡

あり、次いで李氏朝鮮時代に入つて、文運更に隆昌に赴き、文臣、儒林、書家、及び武臣の中でも文藻ある者は大抵皆別號を持つに至つた。特に歷代の王者もこれを持つて居り、就中正宗王が萬川明月主人翁と號したのは、最も有名である。

別號は名及び字と共に、生前に使用し、死後はその人の文集の題籤に必ずこれをつけ、碑文の如き

にも、これを記入するを例として居た。その使用範圍は、文藝上で使用する外、社會的には自稱竝に書簡口稱に通用するが、親友間及び下級者に對する時に限られ、上長に用ひなかつた。但字は名と異なり、下級者が上級者に、年小者が年長者の字を呼ぶも不敬とせられることはなかつた。

### 謚 號

謚とは人の死後に於ける名で、人死してその葬前に際し、死後の名を作り、之を本名に易へ且表彰するものを云ひ、支那では古くから行はれて居たが、朝鮮では新羅時代に智證王以後に王謚を記し、又、金石文としては太宗の碑に太宗武烈王碑と刻せるのから見ると、新羅の後代には、謚を用ひて居たことは明かである。高麗時代の王には、皆謚號あり、忠肅王は蒙古の皇帝より謚あり、忠宣王の代に元帝より神宗以降の王に追謚賜號あり、李氏朝鮮時代には宣祖迄明帝より各代追謚賜號あり、仁祖以後は清朝より賜號があつたが、この清よりのものは系譜には記載されず、日清戦争後大韓帝國となるや、明の賜謚を悉く璿源系譜より除いた。

王より臣下に對する賜謚追謚は、新羅時代の後期には重臣に對して行はれたらしく、高麗時代には非常に多かつた。李氏朝鮮時代には、國初から法制定まり、普通正二品以上は皆死して賜謚あつた。



諡號の例は次の如くである。

文明 王式廉、敬順 金傳、順恭 崔承老、文忠 鄭夢周、文成 安裕（高麗時代）

文忠 南九萬、文忠 柳成龍、忠武 李舜臣、文簡 李宜顯、忠翼 金宗瑞（李氏朝鮮時代）

賜諡は最名譽の表彰として尊ばれ、その諡號の下に公の字を附して呼ばれ、墓碣に記入し、墓誌に刻し、族譜に記入し、死後の戸籍にも父祖の名として官爵と共に記入せられた。その諡號一字一字に各定義あり、例へば志を立て衆に及ぼす公と曰ひ、敬事供上を恭と云ふ等の如くである。諡名の如何はその子孫竝に一門の榮譽的價值に影響し、又他との權衡にも亦問題となるので、その子孫としては大きな關心あり、後には改諡を請ふことも行はれた。

## 五、氏 族

朝鮮が支那の模倣をして「氏」を稱したことの最も古くは、百濟で解氏、沙氏、木菟氏、燕氏などの如く扶餘族固有の氏族名を翻案して居る。新羅時代後期の金石文に、金氏、朴氏、顧氏、華氏、白氏など氏を附したのがあるが、士族出身の僧侶の俗姓竝其の生母の姓を表示して居るものゝみである。

から、其の末期には、士族のみに氏稱を當てたことを知る。高麗史にはこれを「氏族」と呼んで居る。新羅時代に較べて閥族を貴ぶ思想も濃厚となり、その數も増加し、社會の經濟的發展と共に、庶民と氏族の二大階級對立の形勢になつた。これ等特權階級の中に、家系の古く正しき閥族竝に權力に預りたる家門を貴しとした。宋史に、「柳、崔、金、李四姓を貴種とす」高麗古都徴に「士人望族を以て相高き柳、崔、金、李四姓を貴種となす」とあり、「海東韻玉」に「東韓の名閥一に非ず、高麗の時より突世絶えざる者、李、金、朴、沈、尹、韓、鄭、崔、柳、任、許、申、趙、曹、成、安、盧、南、宋を最とす」とあり。これ等の特權階級は氏族とも姓氏ともいふべき熟字を以て表はすべき觀念、一名兩班の名稱を以つて、社會的に一段高く認識せられて居た。李氏朝鮮時代に入つて、この數は漸次多くなり、政治上の盛衰によりその勢力に消長あるが、今に至るも、家門を云爲し、族譜を尊ぶ風は根強く残つて居る。

即ち、金、李、柳と言ふ時は姓であり、貴賤士庶の別はないが、たゞ兩班は姓であり、且、氏である。安東金氏、延安李氏、文化柳氏と言ふ時は氏族、或は姓氏である。但し兩班だけのことである。東國輿地勝覽の各州郡に「姓氏」の項目があるのは、姓と氏と別な理念ではなく、姓氏といふ熟字で

あり、兩班階級として認められた者の姓氏のみ記されて居るのである。今残されて居る萬曆年代から李太王初の戸籍には、兩班の妻のみ悉く金氏、李氏と登録し、庶民以下の妻には、閔姓、安姓といふ如く記し、或は實名を登録し、何氏とせるもの一つもない。李朝實錄も亦然りで、實に氏族、姓氏は兩班の稱呼といふべきものであつた。

## 六、本 貫

本貫は、本籍、貫籍、郷貫、氏貫、籍貫、姓貫、族本などとも稱し、亦略して本、籍、郷とも云ふ。

郷は漢代行政區劃の名稱、貫は、錢が緡により數十百を貫けるを一族の關聯に喩へたもの、籍は典籍の意味である。支那に於いては古代より地方に占據した大族あり、歷代これに地位を與へて地方行政に參與せしめた。朝鮮に於いては、政治、經濟、社會上種々の原因から、支那の大族の如きものは發生しなかつたが、細粒の郷族が各地方に團居して居た。此等の氏族は支那に倣つて各々その郷貫を稱して居たのである。

その郷貫を稱した最初の時代は、新羅の末と考へられる。憲康王二年に建立した河東雙谿寺眞鑒禪寺塔碑文（その文崔致遠の筆になる）中に「仍つて大皇龍寺に貫籍す」とあり、又眞聖王時代に建立せし、忠州月光寺圓郎大禪師塔碑文に「母□氏族本取城郡の人也」とある。

「謏聞瑣錄」には「佔畢齋云ふ。新羅の宗支苗裔の四方に蔓延散處する者勝て記すべからず。厥の後競ふて豪武を用ひ州郡を羈す。據つてその土地人民を保ち以て貢賦を國に輸す。因つて以つて所在の戸長となる。其の子孫を育し遂に本貫となる」とあり、「高麗史」太祖元年王、韓榮に謂つて曰く「郷の貫郷青州の土地沃饒云々」同十六年後唐の明宗が使を遣はし、薨じたる王妃を追封せる文に「高麗國王妻河東柳氏」とあり、又それ以後諸所に本貫に關する記事あり、士族は一般にその本貫を稱する風ありし如く、高麗史元宗十四年十月に試に赴く諸生に、卷首に姓名、本貫、及四祖を寫し、糊封し試前數日に試院に呈するの記事がある。

李氏朝鮮時代に至つては國初の「經國大典」中に、戸籍の様式を定め、京城は戸、某部某坊、第幾里、地方は某面、某里、住、某、職姓名、年甲、本貫、四祖、妻某氏、年甲、本貫と四祖（以下略）等を記載すべく規定してから士族は勿論庶民も本貫を記することゝなつた。

本貫は、一名郷貫の名の示す如く、始祖がその居を長期に定めた土地を稱するもので、門閥が社會上に役立ちし時代にこれを誇稱したるもの、即ち「姓氏」と不可分で、何々何氏と稱する「何々」はその本貫の地名と一致する所以こゝにあり、これが本貫の第一義である。李氏朝鮮時代に入つて戸籍整頓の上から、本貫の記載を庶民に迄強ひた爲に、その意義は擴張せられて、庶民は無論白丁、海尺の如き賤民に至る迄、とも角戸籍内には本貫を有することゝなつた。然し、第一義のものが、本來の本貫である爲に、今日に於いても庶民は士族の如く、金海金氏、全州李氏などの如く自稱他稱せず、唯本は金海なり、本は全州なりと稱するにすぎず、特に數代の中に屢々轉々した勞働者の如き者は、その祖先の住地のいづれかを隨意に本とするなど、何等意義ない者が多い。すべて本貫の稱については、何代前の始祖に遡りて稱するかは、別に定まつた社會上の規範なき爲、各姓氏區々であり、中には傳説を本にして歷史上確乎たる根據のない者もある。實際には、又、自己の居住しない地を本貫とする例として、王から榮譽の典例として郷貫を下賜する賜貫、或は賜籍なる形式が支那の例に倣つて行はるゝに至つた。又、賜貫はその變更を便宜とした時にも行はれた。例へば

申は谷城に出づ、麗祖籍を平山に賜ふ（申崇謙忠烈碑文）

忠肅王、王彬に貫を南陽に賜ふ（高麗史）。濟州の高に麗季に於て貫を長興に賜ふ（亂中雜錄）

元より亂を避けて東來せし僦遜に、李太祖命じて慶州に本貫を賜ふ（東國輿地勝覽）

正宗王子孔氏に貫、曲阜を賜ふ（孔子家譜）

諸孔氏に命じ、本貫書するに、曲阜を以てせしむ（「正宗實錄」十八年の條）

德水張氏は采食の地を貫とし（谿谷集）蔡允浩は官地仁川を貫とし、（本人墓誌、錦谷集）孫碩佐は封ぜられた密陽を貫とし（同墓碣銘、海谷集）金瑩は謫處延安を貫とし（本人墓碣銘、定齋集）以上は皆高麗時代であるがその類例は非常に多い。その外に兩班を僭稱した者が、併せてその氏の本貫を冒稱した者の多いことも考へられる。女真人の後裔であること明かな咸北の在家僧の中、慶州李氏の系として、族譜を有する者の如きはこの一例である。

次に本貫と、姓氏竝に族との關係をみるに、姓氏同じもの必ずしも同族でなく、同族必ずしも本貫を同じくせず、その點について左の六種が考へられる。

一、同族同本同姓 同族同本は百代の親といふ諺あり、即ち血脈繋るもので、例へば金姓二家あり、その何れもが慶州金氏の場合である。



二、異族同本の同姓 南陽洪氏は、その外に俗に土洪といふ別の南陽洪氏あり、又、唐洪といふものあり。金海金氏にも、土金といふものあり。この例は非常に多い。

三、同族異本の同姓 江陵金氏と光州金氏は始祖を異にするも、いづれも新羅の金闕智より出たものとして同族とする。楊州趙氏、豐壤趙氏、漢陽趙氏亦始祖を一にして同族、これ等は本異なるも婚姻を通じない。

四、異族異本の同姓 延安李氏、韓山李氏、光州李氏、何れも族を異にし、又本を異にする。この類は甚だ多い。

五、同族の同本異姓 金海金氏、金海許氏は姓異なるも何れも駕洛首露王の裔であり、安東權氏は元金氏なりしも高麗太祖の賜姓により權氏となつたもので、安東金氏とは同族でありとする。この類も皆婚姻を通ぜず、その大始祖を祀る時には、皆相會同する。

六、異族の同本異姓 慶州孫氏と慶州李氏、晋州姜氏と晋州柳氏の如く、本のみ同一の場合、この例も甚だ多い。

## 七、姓の數とその社會性

朝鮮の姓の數について、李氏朝鮮時代肅宗の時の人李宜顯の著はした「陶谷叢說」には二百九十八挙げられ、正宗時代の人李德懋の著はした「益葉記」には四百八十六あげられ、増補文獻備考には、四百九十六となつて居る。昭和五年の國勢調査の結果を編輯した「朝鮮の姓」には總數二百五十である。最近、中樞院に於いて各方面に照會して、その戸籍簿にのせられたものにより回答をうけたものを基礎にして、私の研究した所では、三百二十六である。

そもく姓は、これを他と識別することにより有効價值を存して居る。故に姓名は専ら自己の爲、一族の爲、又は家庭の爲のみの存在ではなく、社會上の存在をその生命としなくてはならぬ。今日の如く階級を論ぜず、人各々社會の一員として、その社會面に於ける活動範圍著しく擴張し、人の姓名の社會的必要價值増大した時代には、舊様式の姓名は必ずしも今日の時勢に適合せず、その中最も不便なのは同姓同名の甚だ多いことである。

朝鮮全人口二千四百萬に三百二十六姓では一姓平均七萬人以上であり、而もその内、金、李、崔な



どは一姓三四十萬人に超え、又一方名に於いても、一種の型をとる爲に、數學上よりみて同姓同名の

出て来るのは必然である。故に如何なる地方でも一箇面内に必ず同姓同名の者何十幾組かを存せざるなく、人口多き都會地は、一層甚だしい。昭和七年に京城府財務課中村氏が京城現在戸主について調べた所、同姓同名の戸主二十戸以上に達するものが四十八あり、その内、甚だしいのは

金 召 史	八八	金 姓 女	八六	金 貞 淑	六九	金 春 植	五二
金 元 植	五一	金 恩 植	五〇	金 永 植	四一	李 春 植	三七
李 貞 淑	二七						

あり、同姓名の者甚だしく、郵便の配達、納税告知、裁判、警察その他官公署の呼出など種々の不便を來し、殊に最近、手形の間違が多くあり、今後の激甚な經濟生活に活動する不便は甚だしい。

この意味から言つて、今後、新しく内地人式氏の名乗りが許され、又、名の變更の積極的に認められる時、出来るだけ新しい氏名を名乗ることは、眞に望ましいことである。

## 第二編

# 司法上に於ける内鮮一體の具現

—内地人式氏の設定に就て—

南 總 督 談

歴史的考證に依れば、朝鮮は太古の所謂「根の國」と覺しく、大和民族と朝鮮民族とは同祖同根であつて、一串不離の血縁的聯繫を有して居る。而して兩民族は地理的環境を異にせる爲自ら風俗文物を異にしたけれども、併合以來一視同仁の御仁政に因り内鮮融和統合して本來の一體の姿に還元せんとして居るのである。殊に今次事變を契機として半島民衆が帝國の堅持する確乎不動の大陸政策の中に、共同の理想、共同の使命、共同の運命を感得し、皇國臣民としての國民意識に燃えて眞に内鮮一體たんとする思想動向と生活態度とを鞏化進展して來た次第である。斯くて皇國臣民たる信念と矜持とを抱懷せる半島人の一部に、法律上内地人式の氏を稱へ度き希望を抱ける者の生ずるに至つたこ

とは豫て余の承知せる所であるが、同祖同根の内鮮兩民族が渾然一體たんとする秋に際り、個人の稱呼を同一形式に據らんとする要望の擡頭せることは質と相表裏して形の上に於ても、内鮮一體の具現が高調に達したものと謂はねばならぬ。

此の度朝鮮民事令が改正せられ其の内容は親族法の諸種の點に互つてゐるが、其の内半島人の眞摯且熱烈な要望に對へて半島人が法律上内地人式の「氏」を稱へ得る途を拓いた點は改正の重要な眼目であつて、内鮮一體の線に沿うた親族法上に於ける劃期的改正であると謂うことが出来る。

一體内部精神の充實緊張が十分であるならば、形外觀の如何は敢て之を問ふべきでないとも考へられるが、解脫、涅槃の幽玄、縹渺の境地も、其の第一歩は五慾七情を禁壓した肉體の苦行から始まるので、古來心を整ふる第一の捷徑は、先づ形を整ふるに在るとも謂はれ、心構の上に及ぼす形の影響は洵に重大なものであると信ずる。

本令の改正は申す迄もなく半島民衆に内地人式の「氏」の設定を強制する性質のものではなくして内地人式の「氏」を定め得る途を拓いたのであるが、半島人が内地人式の「氏」を稱ふことは何も事新しい問題ではない。即ち往時内地に渡航した多數の半島人が内地人式の「氏」を稱へて以來既に

二千年を閲して居ることは、「桓武天皇紀」、嵯峨天皇の御代勅命を奉じて撰ばれた「新撰姓氏錄」の記載に徴し昭昭として明瞭なる所であつて、今日判然其の多數の氏を指摘し得る次第である。而も内地人式の氏を稱へた之等無數の半島人は大和民族に薰化融合し、今日寸毫も半島人たる裔を留めて居ない程度に皇國臣民化して居る状態である。故に内鮮一體の理想から謂へば、全半島民衆が近き將來に於て往時の渡航半島人の如く、形容共に皇國臣民化する日の到來することが望ましい次第である。惟ふに司法の領域に於ける内鮮一體の具現に付ては(一)氏名の共通(二)内鮮通婚(三)内鮮縁組の三項目を擧げ得るが、「名」に付ては昭和十二年以來半島人も内地人と同様の「名」を附し得ることになつて居り、内鮮通婚が逐年激増し半島人が内地人の養子となる數も年々遞増することは顯著なる事實であつて此の度の朝鮮民事令の改正に因り、前述した如く半島人も内地人式の「氏」を名乗ることが出来又異姓の者も養子たり得ることになつたので、内地人も半島人の養子となることが出来ることになつたから、前述した三項目が全部實現を見茲に司法上に於ける内鮮一體具現の途は正に完全に拓かれた譯である。我半島民衆の福祉の爲洵に欣快に存する次第である。

## 婿養子、異姓養子及

# 氏制度の制定に就て

法務局長 宮 本 元 談

現在半島人の親族相續に關しては、原則として民法に依らないで在來の慣習に従つて居るが、慣習中には時勢の進運に伴はないものや隨時推移して時に人をして適從する所を迷はしめるものがあるから、法的生活の合理性及安全性を確保する爲、慣習の整序及成文化を必須とすることは言を俟たぬ所である。之が爲司法法規改正調査委員會に於ては銳意親族相續に關する全般的成文化を企圖して居り着着其の業は進捗を見て居るけれども、民法の親族編及相續編の改正が、二十餘年の歳日を閲して居るに拘らず、尙未だ確定案を得るに至らないのに徴しても判る通り、早急に其の實現を期することは

出來ない。

然るに久しい以前から擡頭した婿養子制度の實現に對する要請は、近頃愈熾烈となり、又皇道精神の心肝に透徹した半島人の一部に於て、熱烈に内地人式「氏」の設定を要望する向があつて、之等の制度の實現は荏苒全般的立法完成の機に遷延し得ない事情に迫られて來た。仍て此の度朝鮮民事令を改正し、親族相續に關する全般的立法の一部として、婿養子、氏及之と連環關係を有する異姓養子及裁判上の離縁制度に付て規定を設けた次第であつて其の骨子は次の如くである。

(一)婿養子(二)異姓養子(此の項 編者略)

(三)氏

(イ)氏の本質

民法に謂ふ「氏」は、家を表彰する爲の法律上の名稱であるが、朝鮮に於ては法律上家の存在が認められて居るにも拘らず家の稱號はなかつたのである。「姓」は男系の血族を表示する稱號で家に附いたものでなく、人に附いたものである。だから人の屬する家が變つても、譬へば婚姻して甲家から乙家に入つても姓は變らない。元來社會構成の單位である家に之を表徴する稱號がな



いのは國に國名がないのと同じく、甚だ妙であるばかりでなく、異姓養子が認められると、相續が開始した場合相續人の姓と被相續人の姓は異なることになり相續の觀念に當て嵌まらぬから、本改正に於て各家に其の稱號である「氏」を定め戸主及家族は其の「氏」を稱することと規定した次第である（第十一條第一項）

(ロ) 氏の設定

「氏」を稱するが爲には先づ「氏」を定めることが前提となる。「氏」の設定權の法律上の性質は戸主權に屬するから、「氏」は戸主又は戸主權を行ふ者（親權者及後見人）に於て之を定めねばならない。「第十一條第三項氏は戸主法定代理人アルトキハ法定代理人之ヲ定ム」而して「氏」を設定しただけでは何等の效力を生じないので、本改正令の施行後即ち昭和十五年二月十一日から六月以内に之を府尹又は邑面長に届出て始めて其の效力を生ずる。「附則第二項朝鮮人戸主（法定代理人アルトキハ法定代理人）ハ本令施行後六月以内ニ新ニ氏ヲ定メ之ヲ府尹又ハ邑面長ニ届出ヅルコトヲ要ス」戸主又は戸主權を行ふ者が若六月以内に右の届出をしない場合は、本改正令が施行された時に於ける戸主の姓が氏と爲るのである。但し其の戸主が女戸主であれば前男戸主

の姓が氏と爲る。（附則第三項前項ノ規定ニ依ル届出ヲ爲サザルトキハ本令施行ノ際ニ於ケル戸主ノ姓ヲ以テ氏トス但シ一家ヲ創立シタルニ非ザル女戸主ナルトキ又ハ戸主相續人分明ナラザルトキハ前男戸主ノ姓ヲ以テ氏トス）、

(ハ) 氏の設定に關する制限

前述の如く本令改正の機會に於て、半島人が内地人式「氏」を稱へ得る途を拓いたのであるが、御歴代 御諱及 御名は熟字の儘之を「氏」に用ふことは絶対に許されない。（朝鮮人ノ氏名變更ニ關スル件制令第二〇號第一條）又宮號、王公族の稱呼、神社名、歴史上及現代に於ける著名な顯臣顯官の氏を其の儘用ふことも差控へねばならない。他人の「姓」を採て「氏」を定めることは意味がないばかりでなく、混淆を生じ易いからこれも禁止されて居る。（同令第一條第二項）

(ニ) 氏名の變更

氏及名は變更し得ないのが原則であるが、正當の事由ある場合は裁判所の許可を受けて變更し得る。（同令第二條）



尙其の手續に付ての法令は近く發布されることになつて居る。折角内地人式の「氏」を定めても、名が在來の儘では竹に木を繼いだ感がするから當然名を變更しなければなるまいが、斯る場合は名の變更に付正當の事由あるものと謂ひ得るだらう。

尙内地人が半島に本籍を定めることが出來ず、半島人が内地に本籍を定め得ないのは從來と少しも渝りがない。

以上は此の度の朝鮮民事令の改正の主要點に付て常識的に述べた次第であるが、近い機會に適當な所を選んで法理論的な解説を試み度いと思つて居る。

## 氏制度の創設について

岩 島 肇

### 氏とは何か

氏制度について述べるに當つては、先づ氏とは何か、其の本質から申上げねば御諒解を得ることが困難だと思ひます。氏については現代——即ち民法で謂ふ氏——に於ける氏と、昔の氏とに分けて考察しなければなりません。

民法第七四六條は「戸主及ヒ家族ハ其家ノ氏ヲ稱ス」と謂ふて居りますから、民法に謂ふ氏——即ち現在内地人が用ひて居る氏——は家を表彰する稱號であることは、一點の疑を挿む餘地がありません。所がそれでは家とは如何と云ふ次の問題が起つて來ます。法律上家と申しますのは六ヶ敷い觀念

でありまして、私共の眼に映る煉瓦積みや石疊の家を指すものではありません。

法律上謂ふ所の家とは抽象的な觀念でありまして、丁度株式會社の様なものであります。株式會社朝鮮銀行と云ひますと、法律上人格を備へ確かに實在して居るのであります。自然人のやうに形を持つて居りませんから、その實體の掴み様がありません。家はそれと全く同様な姿のない觀念です。家について定義をすれば各家庭には戸主といふものと家族が居り、夫等の者は權利義務の關係によつて結ばれて居りますが、斯様な親族團體を家と謂ふのです。家は絶家にならない限り永久に存続するものであります。家の構成員には變動があります。即ち子供が生れて新に親族團體に加はることもあれば、又死亡する者もあつて、入つて行くものもあれば出て行くものもある。然し團體員の變更は團體自體の存続には少しも影響がないのです。丁度株式會社の社長や重役が變はつても株式會社自體は何時迄も存続するのと同じです。

右に述べたのが大體家の觀念です。氏と云ふのは今述べた團體を表彰する稱號なのであります。株式會社や其の他の團體には夫々名稱があるのに、こんな團體より、もつと緊密な關係を持つて居る親族團體に名前のないのはおかしいから、名前をつけることになつて居るのであります。氏と云ふのは

家に附いた名稱でありますから、血筋には少しも關係のないことになります。

昔謂ふた氏は、民法に謂ふ氏とは違ふのではないかと考へて居ります。上古に在つては内地人は名のみを有して氏を持たなかつたのであります。これは世界各國何れも左様であります。所が氏族の増加するにつれて、或氏族と他の氏族とを區別する爲に稱號を用ふるやうになりました。夫れが昔の氏です。尤も多くの氏は朝廷より賜はつたものでありまして、源、平、藤、橘は其の代表的のもので

氏族を區別すると云ふのは同一血族を明にすることになります。なぜかと申しますと昔は或血族團體には他の血筋の者は入ることが出来なかつたのであります。血筋の違ふ者を異姓と云ふのですが、源頼朝の代までは、異姓は養子になることが出来なかつたのであります。妻は血筋の違ふ家から嫁して來ましたが、妻は決して夫の氏を稱することを得なかつたのであります。例へば豊臣秀吉の妻は、豊

臣秀吉の北政所杉原氏と呼び、決して豊臣の氏を名乗ることは出来なかつたのであります。外道に外れますが、臺灣では婚家先の姓が金なら金を一番上にもつて來て、その下に自分の朴なら朴の姓をつけて金朴何某と呼んで居ります。

先程の妻が夫の氏を稱へることの出来ぬ風習は長く續いたのでありまして、明治九年に「婦女人ニ

嫁スルモ仍ホ所生ノ氏ヲ用ユベキ事但夫ノ家ヲ相續シタル上ハ夫家ノ氏ヲ稱スベキコト」と云ふ太政官布告が出て居ります。舊民法が施行される迄は右の太政官布告の效力があつた譯です。

斯様に或血族團體には、他の血族團體の者は入ることが出来ぬ、妻のやうに入ることが許される者は入つて行つた先の氏を稱へることが出来ぬ、と云ふ事になつてみれば氏とは血族團體の稱號だと謂ひ得るのではないかと考へる次第です。昔の氏の性質は以上に止めまして、極く簡単に氏の歴史を述べてみます。

氏族に屬する者の子孫が繁榮するに伴ひ、各自の識別を容易にする爲に地名等を探つて一つの「稱」を作るやうになりました。之が名字でありまして、苗氏、苗字とも謂はれて居つたのであります。足利氏、北條氏の如きが即ち夫れであります。昔は斯様にして各人は氏を有して居つたのであります。徳川治世下に入りまして士分（士族）以上の者のみに氏を稱することを許したのであります。蓋しこれは士分と百姓町人との尊卑の階級をつける主義に依つたものと謂ひ得るのであります。

明治三年に入りますと「自今平民苗字被差許候事」と云ふ太政官布告が發せられ、續いて明治八年に「平民苗字差許候旨、明治三年九月布告候處、自今必苗字相唱可申、尤祖先以來苗字不分明ノ向ハ

新ニ苗字ヲ設ケ候様可致此旨布告候事」と云ふ太政官布告が發せられ茲に又各人は苗字を稱へるやうになつたのであります。

### 朝鮮に布かれた氏制度とは

此の度朝鮮民事令が改正されて、朝鮮に氏制度が布かれるやうになつた譯ですが、此の氏制度と謂ふのは民法に規定せられて居る氏の制度——最初に述べました——が行はれるやうになつた次第であります。さてそれでは如何なる必要があつて朝鮮に氏の制度が布かれるやうになつたか其の理由について述べることに致します。

### 氏制度創設の理由 家の觀念の確立

其の一は家の觀念の確立であります。昔は朝鮮には先程申述べました法律上の家といふものがなかつたのであります。同じ血統の者は一つの血族團體をなして、生活をして居つたのであります。所謂大家族制度の共同生活をして居つたのでありまして、この大家族制度に於きましては一人の家長が血

族團體を統率して居つたのであります。朝鮮では特殊の事情から世界各人類が大家族制度から小家族制度に推移したに拘らず、獨り大家族制度の生活を續けて居つたのですが、徐々に父母を中心とする中家族制度、小家族制度の生活に分派して來ました。生活の中心が家長より父母に移つて來ました。この小團體の生活では父が統率者の地位に立つことになり、戸主權が発生するやうになつたのであります。つまり先刻御話しました家の觀念が確立するに至つたのであります。

大正十一年から内地の戸籍法に酷似した朝鮮戸籍令が施行されて居りますが、家のない場合には斯様な法律は設け難いのであります。家と云ふものが成立した以上、即ち前に述べたやうな親族團體が存する以上これに名稱を附することは自然の事だと云へるのであります。

さういふ意味の理論的な立場から家の稱號である氏うぢをつけるといふことはズット以前から考へられて居つた所でありましたが、いろんな事情から實現を見ないまゝで今日に及んだわけであります。氏制度創設の理由の二は

### 異姓養子を認めたが爲である

今迄朝鮮では養子は同じ血統のものからでなければ迎へられなかつたのであります。所謂同姓同本でなければ養子は出來なかつたのであります。所が此の度の朝鮮民事令の改正により今後は同じ血統の者でなくても養子にすることが出来る様に途が開けたのであります。所謂異姓養子が認められるやうになつたのであります。異姓養子を認めたのは、主として十數年來其の出現を要望されて居りました婿養子制度を制度化する爲に他ならないのであります。婿養子と申しますのは養子縁組をすると同時に養父の家女と婚姻をする場合を謂ふのであります。養子縁組をするについては同姓同本でなければいけないと云ふ慣習があり又婚姻については同姓不娶と申して同姓の者はいけないと云ふ慣習がありました、この二つの慣習を維持して居つたのでは婿養子制度は實現の可能性がないのであります。そこで異姓の者でも養子になれると新に定められた譯であります。尤も異姓養子が認められるやうになつたのは右の理由だけではありませんが、今は他の理由には觸れぬことにします。

さて異姓養子ですが、戸主である養父が死亡した場合異姓養子が戸主相續をする譯ですが、相續をした瞬間に前戸主と新戸主との姓は相違することになるのであります。朝鮮の姓は血統を表示する稱號でありまして、如何なる場合に於ても變更される性質のものでありませんから、異姓養子は前戸主



の姓は名乗れないのであります。左様でありますから相續と申しますものゝ形の上から觀れば乗取られたと同様でありまして、どうも相續人の觀念に當て嵌まらないのであります。

そこで左様な弊を避くるが爲には、血統に關係のない家の稱號である氏うぢといふものを作り、換言すれば家族團體を表はす稱號を設けて、戸主及家族が氏うぢを稱へることにするより外に途がないのであります。血統には關係のない稱號だと云ふことになれば、或家族團體に入つた者は血統の如何を問はず、其の稱號が稱へられる譯です。更に又氏うぢ制度創設の直接的な理由を述べませう。

### 夫と妻が別な姓、母と子が別な姓では

#### 家族の氣持が出ない

之は實際の問題ですが、私が法務局に入つて二年餘ですが、毎月次の様な投書が二、三通來るのです。内鮮結婚の場合ではないのですが、折角息子に嫁をもらつたが依然實家の姓を稱へて居るから、どうも自分の家族になつた様な氣分が出なくて、兎もすると他人の様な感じがしてならないが、何とかならぬものか——とこんな投書があるのです。それも考へて見れば血統の稱號だけがあつて、家族

團體といふものに着目した稱號を作つてゐない缺陷であります。親子であり乍ら母親の姓と子供の姓と違つたのではビツタリした感じが出て來ない。こんな現實にある問題から氏うぢといふものを作ることにもなつたのであります。然し氏うぢ制度を創設するに至つた最も強い理由は半島人の要望にあるのです

### 内地、支那在住の朝鮮人の力強い要求、何故

#### 内地人式氏名を名乗ることが出來ぬか

これも實際の問題でありますが、本府の高官が一昨年上海、南京、北京あたりを視察した際、朝鮮の人に會つたのでありますが、所が支那の各地に永住してゐる半島人から熱烈な陳情があつたのです。其の陳情と云ふのは、自分共は内地式の氏名を名乗つてゐるが、其れは通稱であつて法律上根據のあるものでないから、支那の警察署とか工部局の警察署等に何かの用件で出頭した場合など本來の姓名を名乗ると、先方では、何だお前達はけしからん、偽名をしてゐるのではないかと叱りつけるばかりでなく、態度といふものが手の裏をひるがへした様に冷酷になつてくる。自分達は形といひ心と言ひすべて帝國臣民化してゐるのに、法律的に内地人式の名前を名乗れないばかりにこんな迫害をうけ

る。帝國臣民に違ひないんだから内地人と同様に氏名を名乗り得るやうにしてもらひたいと云ふ様な陳情なのです。

實はさういふ陳情は、要望の程度の差こそあれ從來とてもあつたのであります。私自身のことを申上げて恐縮ですが、私自身も左様な經驗を持つて居るのであります。

東京に出張して居りますと未知の人がよく宿に尋ねて来る。會つて見ますとどう見ても内地人とか見えない。先方で半島人だと言はれるまでは一向に氣づかないのです。用件を尋ねてみると、

「私共はすつかり帝國臣民になり切つてゐる。事變が勃發してからでも務を怠つたことはない。慰問袋を送つたり、公債を買つたり、その他何につけても一生懸命銃後の奉公をしてゐる。自分としては忠良な帝國臣民たる自信と自覺があるのだが、たゞどうしても自分達が帝國臣民たり得ない點が残つて居る。それは内地人式の氏名が名乗れない點である。勿論自分を始め子供も内地人式の氏名はつけて居るが、それは通稱であつて、正式のものではない。勝手に名乗つて居るのは何だか良心の上から見て、一抹の寂しさがある。偽はつて居るやうな氣持もする。戸口調査の時なんか特にそれを痛切に感ずる。どうか誰の前に出てもおぢることなく内地人式の氏名を名乗り得るやうな制度にして貰へ

ぬだらうか」と云ふやうな譯です。

支那に在住してゐる半島人、内地に行つてゐる半島人、朝鮮に在住してゐる半島人にもさういふことを考へてゐる者が多數居るのです。

内地人式の氏名を名乗りたいと云ふ心持の生ずるのは、立派に帝國臣民化して居る人が外形まで整へようとする場合又は内地人と一體にならうといふ心構のある場合であることは否めません。かういふ心構のある人に、内地人式の氏名を名乗ることが出来ないやうに門戸を閉鎖して置くことは出来ないであります。内鮮一體と云ふ最高統治方針に照らしても速かに門戸は開かれねばなりません。半島人が内地人式の氏名を稱へ得るやうにするが爲には、其の前提として、どうしても氏<sup>うぢ</sup>制度が布かれねばならないのです。

内地では外國人にも北海道の土人にも内

地人式氏を稱へることが許されてゐる

内地ではイギリス人、アメリカ人その他この國の人でも歸化さへすれば内地人式氏名を名乗り得

ることになつて居ります。届書一本で名乗り得るのです。明治四十四年に北海道に住んでゐるブレチン・アウエリヤンといふ土人が内地人と同じ様な氏名を名乗らして貰ひ度いと願出たことがありました。司法省では差支ないと云ふ許可をしましたので美島信藏と氏名を設けました。又チエールタイブ・ロコーベと云ふ土人も壽山武平と云ふ氏名を稱へることを許されました。

北海道の土人とか、外國歸化人ですらも其の意思に従ひ、内地人式の氏名を名乗り得る途が拓けて居るのであります。然るに我が大陸政策の兵站基地前進基地たる朝鮮に於て、然も澎湃たる愛國運動を拓開せる半島人に對してのみ、獨りその途が閉鎖されて居ることは内鮮一體の最高統治方針に副はざる所でありすが故に、氏制度を設定すると共に、内地人式氏を稱へ得る途が拓かれたことと解し得るのであります。

### 今迄は何故内地人式氏を稱へ得なかつたか

#### 身分法を尊重して

何故朝鮮の人に限つて從來内地人式の氏名を名乗ることが出来なかつたか、其の理由を明にして置

きます。それは朝鮮の人に對し差別待遇をする意圖の下に門戸が閉鎖されて居つた譯ではありません。半島は大陸の接壤地帯として特別の地理的環境を有して居つたが爲に特異の文化を育成し内地と比べて異なる風習を生じたのであります。風俗習慣は元々各民族が主觀的に妥當なりと信じて多年踏襲し來つて居る生活様式でありますが故に、一應夫れを尊重するのが良い譯なのです。そこで半島人の親族及相續に關しては原則として民法の親族篇及相續篇の規定に依らないで、本來の慣習に従ふことを定めて居るのであります。半島在來の慣習に従へば氏の制度がない。従つて内地人式の氏を稱へ得る餘地が全然なかつたと云ふ譯です。

### 内地人式の氏名を名乗り得る道が拓かれ

#### たので、強制されてはゐない

氏の制度が布かれたのでありますから、朝鮮の人は必ず氏を設け且氏を稱へねばなりません。尤も後に説明するやうに從來の姓を氏にも用ひる人は其の儘放つて置いて良い譯です。氏を定めることは義務づけられた譯ですが、内地人式の氏を定めることが義務づけられた譯ではありません。強制されて

居る譯でもありません。此の度の朝鮮民事令の改正を目して内鮮一體強行だと履き違へるやうな人はあるまいと思ひますが、誤解して居る向も全然ないとは申されませんから申述べて置きます。

改正朝鮮民事令が公布されました際發表されました南總督閣下の談話の一齣に、「本令の改正は申す迄もなく半島民衆に内地人式の氏の設定を強制する性質のものではなくして、内地人式の氏を定め得る途を拓いたのである」と申されて居ります。これをよく含蓄すれば些の誤解を生ずる餘地はないことと存じます。

内地人式の氏を欲しない人は從來の姓の金なら金をそのまゝ氏として換言すれば家族團體の稱號として、設ければ良いので何も自己の氣持を曲げてまでも内地人式の氏を作らねばならぬことはないのです。

### 内鮮一體の理想に立つ

左様に申しますと氏制度の施行は、微溫的消極的なものゝやうに思はれますが、氏制度自體が一つの大きな政治的理想——即ち内鮮一體の具現——を目標として居ることはハッキリと云ひ得ることと存じます。法の目的から申しますならば要望がありさへすれば直ちにそれは制度化すると云ふ事はあ

りません。法は一つの目的、換言すれば社會生活國家生活完成への目的がなければ制定される性質のものではありません。

精神の上でも、形の上でも内鮮人間に少しの區別がないと云ふ境地に達するのが内鮮一體だと思ひますが、氏制度の制定は個人の稱呼の點に於て、さういふ理想の境地に到達し得る道を拓かれたことになるのであると思ふのであります。總督閣下が機會ある毎に言つて居られます通り、内地人と朝鮮人とは元々同祖同根の血縁的紐帶で結ばれて居るのであります。兩者が渾然一體となるのは必然的歴史的の歸結であります。その實現の一部門を擔當して居るのが此の度の此制度の有する使命であると考へてよろしいのではないかと思ふのであります。

### 朝鮮人が内地人式氏を名乗ることは

### 何も新しい問題ではない

半島人が内地人式の氏を稱へることは事新しい問題ではないのであります。嵯峨天皇の御代——約千二百年前のことと思ひますが——勅命を奉じて撰まれました「新撰姓氏錄」の上表の一齣に誌され



て居る所に依りますと、往古内地に渡航致しました百濟人新羅人任那人高麗人は、上より許されて内地人式の氏を稱へたのであります。新撰姓氏錄と申します本は、正確無比な民族的調査表だと云ひ得ると思ふのでありますが、新撰姓氏錄に載つて居る全氏族——これは京都及畿内地方だけであります——一八一二氏の中朝鮮から歸化した者の氏が三七〇餘もあるのであります。これは一例に止まるのであります。古事類苑と云ふ書の姓名部を見ますと、半島人で内地人式の氏を稱へた者は無數なのであります。之等の内地式の氏を稱へた無數の半島人は、大和民族に薰化融合しまして今日少しも此の後裔であることが判然しないのであります。

内鮮一體の理想から申しますならば、全半島民衆が近い將來に於て、昔の渡航半島人の如く形容共に皇國臣民化することにあるのではないかと考へる次第であります。

### 半島人の姓とは何か

半島人は金とか、朴とか、鄭とか稱へて居りますが夫れは姓でありまして氏とは全然性質が違ふものであります。姓と申すのは男系の血族を表示する稱號であります。氏は家に附いた稱號であります。

が——つまり血筋には関係がないのですが——姓は人に附いた稱號であるを云ひ得るのであります。内地人には姓といふものは絶対にありません。尤も内地でも「姓」そのものは存して居りましたが、夫れは「かばね」と訓するのでありまして、朝廷から由緒のある家とか、朝廷に對して功業のあつた家に特に賜はつた符牒なのであります。朝鮮の姓とは似ても似つかぬ性質のものであります。

### 朝鮮の姓は何時頃始まつたか

今日でこそ半島人は盡く姓を稱へて居りますが、昔は名のみ稱へて居つたので姓はなかつたのであります。其の證據としましては、先程申しました新撰姓氏錄や又日本書紀、古事類苑の姓名部を見まするに、漢人には盡く姓が誌されて居りますが任那人百濟人新羅人高麗人については名が誌されて居るばかりで、姓は一として記載されて居りませぬ事實、新羅第二十四代眞興王の巡境碑が、今日半島の諸所に残存して居りますが、この巡境碑中には多くの人名が掲記してあるのに一つとして姓が記載されてゐないことに因つて明であると思ひます。半島人が姓を稱するに至つたのは新羅の末葉でありまして、支那の姓を模倣したものだと謂はれて居ります。此のことは李重煥と云ふ人の「擇里誌」の中

に誌されて居ります。學者の説も左様に一致して居ると思ひますが、それ等の事は學者の研究に委ねることに致します。

### 氏は出來ても姓は戸籍に残す

氏と姓とは先程述べた通り其の性質が違ふのでありますから、氏制度の制定の爲め姓がなくなるとか姓が改まるのだとか云ふことは絶対にありません。姓の發生起源はどうあらうと一定の期間繼續し歴史を有して居るのでありますから、それを尊重しなければならぬことは申す迄もありません。今後と雖も戸籍には姓及本貫を記載することになつて居るのであります。

### 内地人式にするなら府邑面長に届出ること

#### 氏は今までの姓のまゝでもよい

さて、氏の設け方ではありますが、内地人式の氏を設定するかそれとも内地人式でない氏を作るかといふ二途に歸することになります。内地人式の氏を設けたくない人は設けなくてもよいのであります。

て、從來の姓の金を其の儘氏に用ひて一向差支がないのであります。其のときは姓は金で氏も金だと云ふことになるのであります。左様に從來の姓を氏に用ひる人は何の届出をするに及びません。それは氏の届出をしない者は氏制度施行の際（二月十一日）の姓を以て氏と認めるとの規定が設けてあるが爲であります。

内地人式の氏を設けようとする人は二月十一日から八月十日迄の間に府尹又は邑面長に其の届出を爲さねばなりません、届出て始めて効力を生ずるのであります。氏は誰が定めるかと申しますと、氏といふものの法律上の性質が戸主権の内容に属しますが故に戸主が定めるのであります。戸主が未成年者のときは法定代理人が代つて定めます。

父親が戸主でありますときは、父親が氏を設定しなければ家族は如何ともする事が出來ないのであります。然し、その戸主が氏を定めますと、全家族がその氏を稱するといふことになるのであります。兄が戸主である場合に、弟だけが内地人式の氏を設け度いと希望しましてもそれは許されません。但し其の弟が分家致しまして一家の戸主となりますと、二月十一日から八月十日迄の期間ならば内地人式の氏を設けることが出來ます。八月十日以後は裁判所の許可を得て内地人式に氏を變更するより外

には途がありません。

### 氏の設定に付ての制限

氏の設定に付ては制限があります。御歴代 御諱又は 御名は之を氏又は名に用ひることは出来ません。又他人の姓を以て自己の氏と定めることも出来ません。國民道德として國民の義務として追號、宮號、王公族の稱呼、皇室に由緒の深い家の氏、歴史上及現代の功臣の氏を用ふることも絶対に差控へねばなりません。

### 名を變へるのは裁判所に申請すること

内地人式の氏を設定するときは、其の釣合上名を變更しなければならぬ場合が多いことと思はれます。左様な場合には届出だけではないのでありまして、名の變更に付て裁判所の許可を得なければなりません。其の手續は裁判所に名の變更許可申請書を出す譯です。

### 八月十日以後は氏の變更は出来ないか

八月十一日になれば、氏の届出によるか、それとも二月十一日の姓を以て氏と認められるか、どちらかで氏は確定することになります。——届出の場合は届出たときに確定します——氏が確定した後になつて變更することは出来ないかといふ問題になるのでありますが、それは必ずしも出来ないことはありません。裁判所に氏變更の許可申請をして許可を得れば變更が出来るのであります。然し氏の届出期間の六ヶ月が経過した後、氏の變更を認めてもらふことは容易ではないのです。

一旦内地人式になつたが、例へば金本を金井にしたいといつてもそれは恐らく許可されぬことと思ひます。

どこの世界でも、どこの社會でも新舊の思想は對立してゐます。親は内地人式の氏を設けたくないと言つてゐたが、子は内地人式の氏を定めたいと思つてゐた、然るに親が死んで子供が相續する。相續した子供の方では宿志を達して内地人式の氏を名乗りたい。と云ふ様な場合には氏の變更に付て正當の理由があるものとして許可されることになると思ひます。

之等の點に付ては法務局や綠旗聯盟で出したパンフレットに依つて御承知を願ひ度いと思ひます。  
氏制度が内鮮一體の脚光を浴びて現出したことは疑ひありません。此の制度が輝しい存在とならん  
ことを祈る次第であります。

### 第三編

## 内地人式氏の名乗り方・名の改め方

### 氏の名乗り方

許されざるもの

制令第二十號に

第一條 御歴代御諱又ハ御名ハ之ヲ氏又ハ名ニ用フルコトヲ得ズ

自己ノ姓以外ノ姓ハ氏トシテ之ヲ用フルコトヲ得ズ但シ一家創立ノ場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラズ  
とあり、許されざるものの第一には、御歴代の 天皇の 御諱又は 御名である。この中に、文武、  
宇多、村上、花山、一條、三條、白河、二條、六條、高倉、龜山、四條、伏見、花園、明正、東山、  
桃園、高野、田村、葛城、大友、阿倍、山部、田原、柏原、神野、大伴、小松、小野、萩原などは、



一般に考へ易い氏として、注意しなければならない。

法務局より出たパンフレット「氏制度の解説」に於いては氏の選定の制限として御歴代 天皇の御諱 御名の外、御歴代の追號、皇族の宮號、王公族の稱呼、著名な神宮名、神社名、皇室に由緒深い家の氏、歴史上及現代の功臣の氏が擧げられて居る。皇族の宮號としては、

秩父、高松、三笠、閑院、東伏見、伏見、山階、賀陽、久邇、梨本、朝香、東久邇、北白川、竹田、皇室に由緒深い家としては、宮家から臣籍に御降下遊ばされた御方の氏、即ち

小松、華頂、筑波、葛城、音羽、上野、二荒、

又、特に朝廷に對して功勞あつた方の氏、

一條、二條、九條、鷹司、近衛、西園寺、三條など

著名な神宮、神社名としては伊勢、橿原、靖國なども遠慮すべきであらう。

王公族の稱呼としては昌德宮、李鍵公、李鍋公であるが、慶福、德壽も遠慮すべきであらう。

又、他人の姓を採つて自己の氏とすることも許されない。従つて、後にあげた「朝鮮に於ける姓」にある姓は自分の氏として採れないのである。それに二字の姓として、大室、南宮、西門、東方などもあり、注意せねばならない。

### 感心しない例

今度の新らしき氏の創設に當つて、最も多き例として、金だから金村、金子、金田、金川を考へ、安だから安井、安川にするとか、李から李家を考へるとか、李をくずして木子、又はその木を保存する氏を考へ、又朴から木戸を考へ、崔から山佳、高山を考へる、又、姓と名の上の字をとつて新らしい氏を考へる人が多いが、これは、姓と氏を混同した理念であり、決して感心した例でない。子孫から氏のつけ方について、その不聰明を笑はれることであらう。又金の姓の人が、上に金の字のついたものだけ考へるとすれば、數に於いて極限された氏しか出来ない。結局、同姓が又甚だ多くなることであり、朝鮮社會にとつて祝福すべきことではない。

又、一門中數百家、例へば文化本貫の柳姓の者が柳、平山本貫の×姓の者が全部「平山」になり、梁山本貫の○姓の者が全部「梁井」になるとかいふ話を聞くが、氏は家を表はすもので、他の家と出来るだけ區別したのを考へることが聰明であり、同血族の同稱號は、氏の理念をはき違へたものである。又、或る會社の社員全部が、同一の氏を設定するといふことなども、以上の意味で決して感心した例ではない。結局同じ氏の者が夥しい數となる。この點について、このことを大々的に禮讃して書

く新聞記事の罪は最も大きいと云ふべきである。

### (一) 地名からとる

以上の制限外はどんな氏を考へてもいい譯である。然し無軌道に氏を考へるよりは、今迄の氏のつけ方に従つて、その原則に立つ事が正しい。日本在來の氏のつけ方は、その九割五分迄が土地の名から來て居る。これは、日本本來の人たち許りでなく、日本に來た支那人も自分の在來住んで居た土地の名に因んで、名乗つた例はある。

豊臣秀吉の半島出兵の際に、捕虜となつた支那兵、武林の孟二寛は、日本に來つて、その土地「武林」をとり、武林を名乗つた。この人の孫が有名な四十七士の「武林唯七」である。江戸時代の文獻にも(閑散餘錄 上、古事類苑姓名部三、) 支那から來た彭城の劉氏が「彭城」と稱し、鉅鹿の魏氏が「鉅鹿」と名乗つたといふ例もある。

本貫、原籍、又生れた所、先祖の墓地の所在、その他特殊の因縁の地などから、適當なのを選び、又それにちなんだ氏を考へ、それを國語の訓でよむのがよい。

左の如きは、本貫そのものから、立派な内地人式氏が考へ得る。

#### 道

富平	水原	水城	竹山	徳水	沙川	南川	高安	安山	金浦	松林	貞松	延昌	利川	朝宗
乳石	守安	高峰	盆村	石淺	梨浦	深谷	柱石	瑞原	原平	平澤				

#### 慶尙道

昌原	河東	漆原	梁山	熊川	東平	鉢山	嘉壽	草溪	三嘉	京山	檜山	道善	南海	義昌
海濱	河清	平山	永善	松邊	末谷	合浦	川邑	夏山	永川	安東	大丘	善山	青松	清道
榮川	興海	金山	龍宮	清河	廣平	豐山	海平	若木	吉安	茂松	平丘	徳峰	青里	長川
永定	白原	茂林	河濱	虎溪	絹川	高谷	豐基	烏川	孝川					

#### 全羅道

昌平	南平	水多	長興	長山	栗村	貞石	深井	長平	玉泉	原栗	竹山	榮山	長澤	光山
森溪	本井	豐安	福川	綾城	大口	群山	北平	大谷	玉山	松林	南田	豆平	梨坪	栗谷
本井	安山	錦山	長水	益山	南原	金溝	大谷	大栗	赤城	黒石	横井	長溪	福興	茂松

高山 横川 徳林 桃田 雲峰 巨野 徳岩 茂長 倉山 徳興 茂豊 井邑 高山  
忠清道

徳山 林川 瑞山 大興 木川 徳泉 定山 安興 高丘 寺谷 甲村 熊川 新谷 延豊 清風  
永春 道安 青山 常山 清安 西原 堤川 安邑 清川 栗谷 酒城

江原道  
平昌 春川 鐵原 高城 金城 羽溪 嵐谷 酒泉 横城 熊林 平原

黄海道  
延安 平山 豊川 西河 谷山 信川 牛峰 長淵 新溪 楊山 金川

平安道  
咸鏡道  
成川 龍岡 北山 土山 龍川 龜城 嘉山 博川 雲山 泰川 延山 鐵山

永興 高原 鶴浦 定平 文川 文山 瑞谷 茂山 明川 明原

又、地名の字義を生かせば、州のつくものに

廣州 楊州 星州 尙州 綾州 光州 玉州 忠州 清州 原州 海州 安州 定州 吉州  
あり、この州の代りに、町とか、村を入れて、廣町、廣村、清町、清村、原町、原村など考へられ、  
或は井をいれたのを考へ、その地に川のある所であれば、忠川、安川、吉川など考へられ、海の近く  
であれば、州の代りに浦をつけ、又、澤沼が多い地ならば「澤」「沼」をつけるもいゝ氏が出来る。

又、左の如きも考へられる。

大丘―大岡、 青丘―青岡、 泗川―泗水、清水、 江西―河西、川西、 江陵―河岡、川岡、 喬  
桐―高桐 麻田―淺田、朝田、 三嘉―三好、 嘉山―吉山、芳山、 熊川―隅川、 明川―秋川  
本貫の古名別號から次の如きが考へられる。

京畿道

京城 廣陵より廣岡  
開城 松岳より松岡、松都より松に因むものを考へる。

驪州 永義より永吉  
果川 栗津、富林  
振威 松村活達より松村  
陽城 赤城  
坡州 波平、瑞原、峰城  
高陽 高峯  
交河 原井  
喬桐 高林又は高木根より高木  
慶尙道  
長鬐 峰山  
安東 石陵より石岡  
寧海 德原  
醴泉 清河より清川

豐基 基川  
禮安 善谷、宣城  
龍宮 園山  
知禮 知品川より品川  
咸昌 古陵より古岡  
尙州 商山より秋山  
星州 星山  
金山 金陵より金岡  
慶山 玉山  
仁同 玉山  
靈山 鷲山  
昌寧 夏山（意をとり茂山）昌山（意をとり盛山、森山）

晋州 菁川より菁川  
草溪 清溪より清谷  
南海 花田  
安陰 花林、南内  
密陽 密山  
丹城 赤村、又は丹溪より赤谷  
昌原 檜山、合浦  
漆原 武陵より武岡  
全羅道  
全州 完山より圓山  
珍山 玉溪より玉谷  
礪山 朗山より晴山  
萬頃 杜山より森山

井邑 井村  
沃溝 玉山  
龍安 道乃山より道山  
茂長 茂松、松山、沙島  
康津 金陵より金岡  
淳昌 龍潭、玉川  
茂朱 茂山、赤川、朱溪より赤谷  
玉果 雪山  
長水 長川、高澤  
興陽 高興  
同福 福川  
忠清道  
忠州 大原、中原



丹陽 赤山、赤城  
 堤川 義原  
 清州 西原京より西原  
 文義 燕山  
 木川 大木岳より大木、木岡  
 清安 清淵  
 鎮川 常山  
 公州 熊津  
 全義 金池  
 恩津 德近  
 石城 石山  
 洪州 安平、海興

舒川 西林  
 鴻山 大山  
 藍浦 寺浦  
 保寧 新村  
 海美 餘村  
 江原道  
 江陵 東原、河西良より河西  
 原州 平原、北原京より北原  
 金化 富平  
 横城 横川、花田  
 平康 平江  
 黄海道

平山 大谷、永豊  
 安岳 楊岳、楊山より柳岡、柳山  
 載寧 安陵より安岡  
 谷山 古谷  
 信川 升山  
 海州 長池、安西、内米忽より内米  
 殷栗 栗口、栗川  
 江陰 江西より河西、川西  
 瑞興 五谷、玉谷  
 鳳山 池河  
 平安道

甑山 西河  
 安州 安陵より安岡  
 肅川 平原  
 永柔 永清、清溪より清谷  
 義州 松山  
 寧邊 延山、藥山  
 渭原 密山  
 咸鏡道  
 德源 泉井  
 明川 明原

(以上は、東國輿地勝覽の「郡名」よりとりしもの、こゝに記したもののみが別號あるに非ず、又この

外にも適當なものが多い

尙左の如き別號は、先にあげた州に代ふるに、町、村、井、川、澤、浦などで色々考へられる。

幸州(高陽) 貞州(豐德) 見州(楊州) 竹州(竹山) 樹州(富平) 吉州、福州(安東) 永州(永川)  
梁州、良州(梁山) 龍州(龍宮) 密州(密陽) 道州(清道) 河州(河陽) 下州(昌寧) 上州(尙州)  
善州(善山) 基州(豐基) 青州(開寧) 康州(晋州) 許州(咸陽) 金州(金海) 益州(益山) 錦  
州(錦山) 浪州(扶安) 武州、光州(光山) 靜州(靈光) 青州(清州) 木州(木川) 鎭州(鎭川)  
林州(林川) 西州(舒川) 今州(大興) 春州(春川) 安州(載寧) 信州、升州(信川) 三州(牛峰)  
豐州、安州(豐川) 白州(白川) 龍州(龍川) 延州(寧邊) 石州(江界) 和州(永興) 高州(高原)  
德州(德源) 青州(北青) 福州、端州(端川) 甲州(甲山) 龜州(龜城)

尙、本貫そのものの名以外から、もつと廣く考へるのもいい。次に本貫南陽及び慶州の場合を考へてみる。

#### 本貫 南陽

南陽を以つて氏にするのは、少しく内地人的でない。それで南陽に關したものを調べてみると、南陽の別名に、

唐城、唐恩、益州、江寧、寧堤、戈浦

などある。唐城は「カラシロ」とよめばよく、又「トウジョウ」と讀んでも、内地人式になる。益州にちなんで、益村が考へられ、その音を活かして、増村も一案である。寧堤から堤が考へられる。戈浦も面白い氏である。

又南陽にある「山川、島、古蹟」にちなむのもいい。特に南陽に縁深い人であるならば、そのどれかの山が特に自分の家に關係深かつたものがあることもあらう。それから考へるのが聰明である。

南陽にある山に飛鳳山、晴明山がある。この内、飛鳳山は、鎭山であるが、これに因んで「飛山」晴明山から「晴山」「春山」。「明山」は少し妙であるから、その音をとつて「秋山」などもいい氏である。又、附近の島に

大部島、靈興島、德積島、昇黃島、新也申島、伊則島、小牛島、立波島  
などあり、これから「大島」「興島」「德島」「昇島」「新島」「伊島」「小島」「牛島」「波島」などが考

へられる。又、古蹟として石山城あり、これにちなんで「石山」などもいゝ氏となる。

#### 本貫 慶州

慶州は、そのまゝではいゝ氏として考へられぬ。又、古名として、

辰韓、徐耶伐、斯盧、新羅、樂浪、雞林、月城、東京、金鰲、蚊川

などあるが、どうも、これ等からも、いゝ氏が出て來ない。唯、新羅にちなんで「白木」なども考へられる。又、新羅の古傳説に、六姓の發祥地として、慶州に六村あり、

閼川楊山村(李) 突山高墟村(鄭) 茂山大樹村(孫) 甯山珍支村(崔) 金山加利村(裴) 明活山高耶村(薛) この六村にちなんで、閼川の別名「北川」「楊山」「楊村」「柳村」「高村」「茂山」「木村」「金山」「利村」「明山」などがある。特に、その姓の人にとつて、その發祥村名に關した氏を考へるのは由緒深い。

古跡地山川からとれば、星浮山から「星山」「浮山」大橋から「大橋」葺長寺から「竹永」、斷石山から「石山」富山城から「富山」高位山から「高山」竹洞院から「竹村」多文村院から「文村」琴松

亭から「琴松」青淵上谷から「青谷」「淵上」西川から「西川」堀淵川から「堀川」「淵川」仙桃山の別名西嶽から「西山」金剛山の別名北嶽から「北山」などが考へられる。

以上本貫のみの例を記したが、本貫に適當なものなく或は他人と重複が餘りに甚だしい場合、又自己が、本貫よりも原籍地に因縁深き場合は、原籍による方がよい。その場合、その原籍の郡名によるもよく、又面の名、里の名、別の名によるもよい。

忠清北道清州郡北二面花下里

清州郡から考へると、清町、清村、清野、清川などが考へられ、里から「花下」が考へられる。

慶尙北道安東郡豊山面安郊里

安東から考へると、「安東」そのまゝか、或は、前にあげた安東の別名、吉州、福州、石陵から色々考へられる。面の名をとれば、豊山もよく、里に因めば、安村が考へられる。

全羅南道高興郡豆原面龍盤里

郡名から「高興」<sup>タカキ</sup>面名から「豆原」<sup>マメハラ</sup>がとれる。

咸鏡北道吉州郡徳山面上下洞

郡名から「吉村」<sup>ヨシムラ</sup>、「吉澤」<sup>ヨシザワ</sup>など、面の名から「徳山」<sup>トクヤマ</sup>がとれる。

江原道通川郡碧養面桂谷里

里名から「桂谷」<sup>カシラタニ</sup>がとれる。

黄海道金川郡金川面金陵里

郡、面から「金川」<sup>カナダハ</sup>、里名から「金岡」<sup>カナラカ</sup>が考へられる。

慶尙北道義城郡義城面中里洞

この場合中里洞の「中里」<sup>ナカザト</sup>が考へられる。

平安北道定州郡大田面雲鶴洞（古名小橋浦）

定州郡から「定村」<sup>サダムラ</sup>「定井」<sup>サダキ</sup>など、大田面から「大田」<sup>オホタ</sup>、古名から「小橋」<sup>コハシ</sup>「橋浦」<sup>ハシウラ</sup>が考へられる。

又この外その土地の別名、川の名又は山の名、その他の何か因縁深い地名に因むもよい。

本貫でも原籍でもなく、特に現住所が因縁深き地として氏の名に取らんとするならば、それもよか

らう。

又、特に朝鮮の人達は先祖の墓地をその家の最も大事な處と考へる點から、墓地の所在地に因むもよい。墓地の所在地が、花坪里なら「花村」<sup>ハナムラ</sup>、徳岡なら「徳岡」<sup>トクツカ</sup>を考へる。

## (二) 從來永く内地人式氏名を稱へて居た場合は、それをそのままとる

今迄戸籍の上でなくとも、通稱「金子」「木村」「野口」などの様に、永く内地人式氏名を持つた者は、今更新しく考へなくとも、その氏名が歴史的社會性のあるものであるから、それをそのまま法律的にも認められたものとすればよい。

## (三) 尊敬する内地人からその人の氏を頂いてつける

今迄この例は少しあつた。筆者の知る範囲内で、満洲の金子少將は、愛する朝鮮青年に「金子」と



いふ姓を與へ、又、ある表具屋の主人が、その使つて居る朝鮮の人達が一人前になる時にその主人のもつ氏を與へた例がある。最近では市野澤氏にあやかつて「野澤」とつけた朝鮮の人が居るが、與へる方も頂く方も、そこに美しい師情人情があり、實にいいものである。然し、これは與へる方と頂く方と共に新らしい氏の名乗りに嚴肅な氣構が必要で、當人の知らぬ間に、他の人がその人にあやかつて氏を貰つたといふのは一寸困る。よくその人に話をして、氏を頂くことである。

## 名の改め方

### 許されざるもの

先に氏の條であげた制令第二十號によつて、御歴代の御諱又は御名は許されない。

又、皇太子、皇太后、皇后、皇子、皇女の御名は、避けるべきで特に邦治、尊治、明治、元正、明治興子、智子、美子、節子、良子、成子、和子、厚子、貴子、又、男女ともに、統、睦、嘉、裕、明の文字は考へ易い名として注意すべきである。

又、仁の字の下につくのは、皇族で直宮、閑院宮家の外にはなく避くべきである。

又、宮様の御名、貞愛、博恭、博義、博明（伏見宮）武彦（山階宮）恒憲、邦壽、治憲、章憲、文憲、宗憲（賀陽宮）邦彦、朝融、邦昭、家彦、徳彦（久邇宮）守正（梨本宮）鳩彦、孚彦（朝香宮）稔彦、盛厚、彰常、俊彦（東久邇宮）能久、成久、永久、道久（北白川宮）恒久、恒徳（竹田宮）は遠慮申上ぐべきである。

又、従來の姓名を一緒にしたものを名とすることは、許されない。名と認め難いからである。

今回の名の變更は、その申請理由として、例へば、

『「甲野」ナル内地人式氏ヲ定メタキ所「甲野圭徹」ニテハ氏名調和セザルヲ以テ……』

と記すのであり、その理由は、あく迄、内地人式氏を定めた爲に、氏名調和しないことにある。

（名を變更することは同一府邑面に同一氏名のものあつて混同して困る場合、又は従來の習慣上

認められて居た理由による場合もあるが、それは特殊の場合で、こゝに論じない）

従つて、その新しく改めた名が、氏と共に考へて内地人式氏名として調和すると考へられない場合は裁判所で許可にならない。例へば、名を「日乃出」「太陽」「キング」或は「匡切」「相口」「松浦」「徳

永」などの名を考へたとしてもそれは許されないであらう。又、從來の名の方が内地人式氏名としてふさはしいと考へられた場合は、わざ／＼改めた名は、その必要なしとして許されぬ場合もあらう。

例へば、俊成、泰一、治貞、貴男、善弘といふ名の人が、俊吉、泰市、春貞、金男、善廣と變更したいとて願を出しても、それは意味のないことで、もとの名で立派な内地人式名として通るのである。又、淑子といふ人が芳子と變へ、徳子を俊子と變へたいといふ希望も、亦、意味のないことである。この際、姓名判斷の上から變へたいと希望してもそれは裁判所で理由にならない。

但し、三男の者が「壹雄」「永一」といふのを「三雄」「永三」と改め、又、女で「貴男」「慶男」とあるを「たか子」「慶子」とするのは許されるであらう。

### (一) 名は出来るだけそのまゝにして、 よみ方だけ改める

名は親から頂いたものであり、出来るだけそのまゝにして國語の訓でよむのが理想的であらう。

例へば、淳益、萬壽、昌壽、滋宗、鳳三、斗福、榮俊、炯三、善文、淑子、榮子、慶子

などは立派な内地人名である。この書の巻末につけた名乗字引でひけば、大抵の名は國語風でよめ

る。

然し、在來の名が國語でよめても余りに内地人らしくない場合には、その方法として、次の如きが考へられる。

### (二) 行列を省いて一字名とする

勉植—勉、眞根—眞、在勳—勳、彰鎮—彰、榮詰—榮、鐘植—鐘、哲植—哲、東椿—椿(女)

### (三) 行列を省いた一字に他の字を加へる

行列を省いた一字に夫、男、雄、一、二、三、太、次、造、藏、吉、作、郎、助、之助その他を加へ、或は、女ならば子や江や代をつける。

但し長男の時に次や三はつけぬこと。次男三男の時に一などつけぬことである。

鐸源—源一  
鐸浩—浩二

春雨—春男  
貞雨—貞男

秉德—德夫  
秉秀—秀夫  
秉澤—澤夫  
潤鶴—鶴太郎  
龍濟—龍雄

銀峰—銀市  
銀靈—靈次  
銀澤—澤造  
銀貞—貞子  
銀秀—秀子

(四) 從來の名の音、訓或はそれに関係のあるものを考へる

以上の條件で適當なのが考へられぬ時、左の如く考へてみる

晩 燾—壽夫 春 瑾—たま子 鳳 祚—保三(音に因む)  
東 洙—清 赫 鈴—晃 石 崇—隆  
三 奉—みつ子 河 中—満

(五) 全然別に新しい名を考へる

以上の原則からいゝ名の考へられぬ時、又、これから生れた子供にどういふ名をつけようかと考へ

る時には全然今迄のと離れて新しい名を考へる。

朝鮮の人の名に五行の立場から、木、火、土、金、水のついた文字が多いが、内地人には餘りない。内地人の名には、一體に、國民道德的なものが非常に多く、「忠孝」「正義」「武勇」、女ならば「貞淑」「優美」それに關したものが多し。又朝鮮の人にはよくあるが、内地人名に、次男や三男に「一」はつけない。それから、長男を「靜夫」とし、次男を「秀男」とするやうにはしない。「夫」なら「夫」に統一する。又、長男を「春雄」とし、次男を「次郎」とするといふやうなことも余りない。それから兄弟に「義夫」「義行」「義造」「義郎」「義明」など「義」を頭字に全部つけることなども、朝鮮の人は今迄の行列の觀念からつけたがるが、お互の區別の上からいつても、余りよくないことである。

氏も名も、よみ難いもの、書き難いもの、誤り易いものは、社會に迷惑をかけることが多いから、特にその立場からも慎重に考へ、出来るだけ、文部省の常用漢字から選ぶのが賢明である。從來の名のむつかしい字はやむを得ないが、殊にこれから生れる子供の名は、その點の注意が望ましい。

名は、老年の方は少々調和しなくとも強いて變へる必要はないが、年若いものは、將來の爲に、出来るだけ内地人式な名に改めた方が聰明である。

## 氏を創める手續 名を改める手續

### 氏の届出

氏は、内地人式氏を定めたい者が、氏の届出をなすべきである。從來の姓の儘を氏としたい者は、別に届出をしなくてよろしい。従つて林をハヤシとよみ、呉をクレとよみ、南をミナミとよんで内地人式したい者は、別に、届けをしなくてよい。

### 設定する者

氏は家の稱號であるから、一家を統率する戸主がこれを定める。家族の者にはこれを定める事が出来ない。父が反對なのに、自分勝手に氏を考へ、又、兄が戸主なのに、弟がその戸主とは別な氏を創め

ることは出来ない。必ず戸主が届出をして、家族全體が改めるといふことになる。

分家戸主は本家と必ずしも同じ氏を定めるには及ばない。又、家族のものは、長男及び女でなければ、分家して戸主となれば、自分の好む氏を定めることが出来る。

然し、新しい氏を創める精神を充分に理解しない父兄を持つ青年の場合も多いことと想像されるが、かういふ場合は出来るだけの誠意を以つて父兄の理解を得、一家擧つて、新しい氏を名乗るべきである。

氏は家の名であり、家と家を區別するものである。従つて、同本同姓の者が集つて相談することはいいことであるが、その全部が共通の氏を持つことは、感心したことではない。銘々の戸主が、自分達にいと考へる氏を定むべきである。

戸主が死亡し、その妻が戸主となつて居る場合は、女戸主たる妻が氏を定める。

又、戸主が未成年者又は禁治産者である場合は、親權を行ふ母、又は後見人が戸主に代つて氏を定める。

未成年者である戸主に、親權を行ふ母又は後見人がない時は、氏を定めることは出来ない。此の場合



合は早急に裁判所の決定を得て、親族會を招集して後見人を選定し、その後見人が戸主に代つて氏を定むべきである。

戸主が死亡して、未だ戸主相續届をなさざる者は、戸主相續届をしたる後、新しい戸主が氏設定の届をなすべきである。

### 届 出 先

朝鮮ならば、本籍地又は所在地の府尹、邑面長、内地居住者は本籍地の府尹、邑面長、海外ならば所轄領事に届出する。(但し、なるべく本籍地へ届出であるがよい。本籍地外ならば、必ず二通にする。)(いづれ近く内地の市町村長でも受付する様になるであらう)

### 届 出 の 期 間

昭和十五年二月十一日より六ヶ月間、即ち八月十日迄である。従つて、所在地の府尹、邑面長、又は、海外の所轄領事などの受附が八月十日前の日附であれば、その届書が八月十日を経過して朝鮮の

原籍地府尹、邑面長に到着しても効力はある。

### そ の 他 注 意

料金は別に要らない。又他の書類も添へなくてよろしい。届出は直接出頭してもよく、又、郵送でもよろしい。

### 受 理 さ れ た 後 は

届出た氏が許さるべきものでない場合は、受理されず、その時は返送される。受理された時には、別に通知はない、どうしても氏の届が受理されたことを確かめたい者は、原籍の府邑面事務所に行つて戸籍簿を閲覧するか又は、戸籍謄本(又は抄本)を請求してとつてみることである。

戸籍謄本は次の様に訂正されて居る。

### 戸 籍 謄 本 の 様 式



今迄の本貫の項が「姓及本貫」となり、又、新しい氏が記入されて、李圭徹の姓「李」が「甲野」といふ氏に改められ、妻と子婦の姓が消されて、その姓は「姓及本貫」の項に記入されて居る。即ち、一家の者全體が新しい氏をもつ様になつたのである。

氏の届を出さなかつた場合は

昭和十五年八月十日迄に氏の届出をしなかつた場合は、二月十一日に於ける戸主の姓がその儘氏となる。従つて從來の金や李はそのまゝ氏となる。然しこれは男戸主の場合であつて、一家を創立しない女戸主、即ち男戸主が男子なくして死亡し母又は妻が戸主となりたる時、又は戸主相續人が不明の時、その前の男戸主の姓が氏となるので、女系の姓は氏とはならない。次にあげたのは、その具體的な一例である。

本籍										前戸主	
京城府笠井町七番地										李 光 雨	
氏ノ届出ヲ爲サザルニ因リ昭和拾五年八月拾壹日李ヲ氏トシタルニ付更正ス										前戸主 トノ續柄 亡李光雨妻	
										父 金民濟	
										母 朴姓女	
										姓及本貫 金海金	
										父 亡李光雨	
										母 金貞子	
										姓及本貫 慶州李	
										長女	
										姓及本貫 李	
										出生 光武貳年參月八日	
										主 李 金 貞 子	
										長 李 相 淑	
										出生 大正拾五年拾壹月七日	
										女	
										昭 和 拾 五 年 八 月 拾 壹 日 氏 設 定 ニ 因 リ 更 正 ス	

## 氏の届けが先か、名を改めるのが先か

氏を届出る期間は、昭和十五年八月十日迄であり、名を改める點に於いては、別に期間がないのである。然し、氏も名も全く内地人式にしたい人は、名を改めることを先にした方が便利である。氏を先にして、名の變更を後にすれば、氏の届を府邑面事務所に出し、裁判所で改名の手續が済んで亦、府邑面事務所に届けを出すといふ具合に、府邑面事務所への手續が二重手間になる。又、氏が先に定まれば、名の改められる迄の間、例へば、「大岡在勳」といふ様な（氏が内地人式で名が朝鮮人式の）氏名の期間をもつことになる。それで、名の變更許可申請を先にしてその許可がおりてからその變更届と共に、氏設定届を出せば、手續も簡単に済み、而も亦、一度で新しい氏名をもつことになる。この場合名を改めるのは、必ず氏の確定した場合でなければならぬ。然し氏の届けは期間もあることであり、新しい名が考へられないからとて、氏の届出をしない場合は、全く氏創設の本旨に背くことになるのであつて、さういふ場合は氏の届を先にすべきである。

## 名の變更

内地人式氏を設定しても、從來の儘の名は、内地人式氏名とし不釣合の場合に、名の變更許可申請をする。從來の名の儘でよい場合は、何もしなくてよく、又、よみ方のみ變へる時、淳益をアツマスとよみ、淑子をヨシコとよむ場合には、その變更許可申請は不要である。

### 變更許可申請をする理由

別に掲げた「名變更許可申請書式」にある如く、「内地人式氏名トシテ調和セザルヲ以テ」を理由とする。従つて、必ず、内地人式氏を名乗ることが前提であり、理由である。然し林をハヤシとよみ吳をクレとよむ爲に、その名を改める事は、立派な理由になる。

### 變更許可申請をする者

何人でも出来る。但し、未成年者にして意思能力を有せざるもの（満十四歳にならぬもの）又は禁



治産者の場合は、當人を事件本人として、その申請人は法定代理人たる父母又は親權者になる。同一戸籍にある者でも、一人毎に申請をする。但し同封で申請してもよい。

### 變更許可申請先

本籍地又は所在地の地方法院又は支廳。内地又は滿洲その他海外に居住する者も、必ず朝鮮の原籍地の地方法院又は支廳に提出する。

### 添附書類、料金

戸籍謄本（抄本なれば、銘々の名の入つたもの）一通。同一戸籍の者が同時に申請する時は一通のみに戸籍謄本を添附し、他の申請書には、「××××ノ名變更許可申請ニ添附シアルニツキ之ヲ援用ス」と記せばよい。申請書には一人毎に五十錢の収入印紙を貼るが、これには絶対に消印してはいけない。又送達料として、十四錢の郵便切手（裁判所所在地は十錢の執達吏送達票でもよい）を附ける。同一戸籍の者が同時にする場合、一人毎に申請書にそれ／＼収入印紙を貼り、送達書留料金と

して、まとめて十四錢の郵便切手（人數の多い場合は、書類が重くなる爲に、郵便料が高くなり、四錢又は八錢追加、その郵便料が多すぎる場合は返送されるから多いのは差支ない）。但し出頭して許可を得る場合は、送達料はいらない。

裁判所の便宜の爲に、正副二通提出の様になつて居る。副本の方には、戸籍謄本、収入印紙は不要又印は姓名の下にもおさず、訂正、削除あるも決しておさない。（この書類に「許可ス」と記されて返送される。）

名のみ方などについて、尋ねられる場合もあり、又裁判所からの注意も詳しく聞けるから、出来るだけ、出頭した方が便利である。又、暫く待つてその場で許可される場合もある。然し郵便で出してもよい。その際にはよみ難い文字を使つた名の場合は、振假名をつけておくと、裁判所で調べる時便利である。

### 許可された時

こちらから提出した副本、又は別紙に、「許可ス」と記されて返送される。これが「裁判ノ謄本」

となる。許可されて十日以内に、名の變更届にこの謄本を添へて本籍又は所在地の府邑面に提出する。

### 名のなき者の場合

大正十二年七月一日以前の出生者で、金氏、鄭氏、その他寡婦、少女、幼童の代名詞又は名として甚だしく適さぬもの、即ち名と認め難きものは、名の變更申請をせず、新しい名を以つて命名届を出せばよい譯である。

### 名の變更届

裁判所から名の變更が許可されてから十日間内に、本籍地又は所在地の府尹、邑面長、海外ならば所轄領事に届出る。同一戸籍の者も一人毎に一通（但し本籍地外ならば、必ず二通にする）。

料金、添附書類不要、届出は郵送でもよい。受理された後、戸籍簿に於ける名は變更される。

### 参 考

戸籍謄本（抄本）の必要な場合は、その原籍姓名を記して原籍地府邑面宛に申請すること。料金は一枚（四人又は五人登録）につき十銭、料金は必ず小爲替にし、外に郵送料として普通なら四銭切手、書留希望なら十四銭切手を同封すること。出来だけ戸籍抄本にした方が、府邑面の戸籍係の手が省けて喜ばれる。

府邑面に行つて戸籍謄本を見る場合には、閲覧料十銭をとられる。

## 第四編

### 一、氏<sup>うち</sup>設定に關する制令、届出及び氏名變更に關する總督府令

#### 制令第十九號

朝鮮民事令中左ノ通改正ス

第十一條第一項中「但シ」ノ下ニ「氏、」ヲ……………加ヘ同條ニ左ノ一項ヲ加フ  
氏ハ戶主（法定代理人アルトキハ法定代理人）之ヲ定ム

#### 附 則

（以下略）

本令施行ノ期日ハ朝鮮總督之ヲ定ム

朝鮮人戶主（法定代理人アルトキハ法定代理人）ハ本令施行後六月以内ニ新ニ氏ヲ定メ之ヲ府尹又ハ邑面長ニ届出ヅルコトヲ要ス

前項ノ規定ニ依ル届出ヲ爲サザルトキハ本令施行ノ際ニ於ケル戶主ノ姓ヲ以テ氏トス 但シ一家ヲ創立シタルニ非ザル女戶主ナルトキ又ハ戶主相續人分明ナラザルトキハ前男戶主ノ姓

ヲ以テ氏トス

#### （參 考）

朝鮮民事令第十一條

朝鮮人ノ親族及相續ニ關シテハ別段ノ規定アルモノヲ除クノ外第一條ノ法律ニ依ラズ慣習ニ依ル但シ婚姻年齡、裁判上ノ離婚、認知、親權、後見、保佐人、親族會、相續ノ承認及財産ノ分離ニ關スル規定ハ此ノ限ニ在ラズ（後略）

#### 制令第二十號

第一條 御歴代御諱又ハ御名ハ之ヲ氏又ハ名ニ用フルコトヲ得ズ

自己ノ姓以外ノ姓ハ氏トシテ之ヲ用フルコトヲ得ズ 但シ一家創立ノ場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラズ

第二條 氏名ハ之ヲ變更スルコトヲ得ズ 但シ正當ノ事由アル場合ニ於テ朝鮮總督ノ定ムル所ニ依リ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラズ

#### 附 則

考本令施ノ期日ハ朝鮮總督之ヲ定ム

朝鮮總督府令第二百二十一號 氏の設定に伴ふ届出

第一條 (略)

第二條 氏ノ届出ハ書面ヲ以テ之ヲ爲スベシ

届書ニハ左ノ事項ヲ記載スベシ

一 戸主ノ姓名、出生ノ年月日、本籍及職業、

二 氏

第三條 昭和十四年制令第十九號附則第三項ノ規定ニ依リ戸主又ハ前男戸主ノ姓ヲ以テ氏トシ

タルトキハ戸籍ノ記載ハ訂正セラレタルモノト看做ス 但シ更正スルコトヲ妨ゲズ

戸籍ノ記載事項中家ヲ異ニスル者ノ氏定マリタルトキ亦前項ニ同ジ

附 則

本令ハ昭和十四年制令第十九號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

朝鮮總督府令第二百二十二號 朝鮮人の氏名變更に関する件

第一條 氏名ノ變更ヲ爲サントスル者ハ其ノ本籍地又ハ住所地ヲ管轄スル裁判所ニ申請シテ許

可ヲ受クベシ

不許可ノ裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第二條 許可ノ申請ハ書面ヲ以テ之ヲ爲スベシ

申請書ニハ左ノ事項ヲ記載シ戸籍謄本ヲ添附スベシ

一 本籍、住所、氏名、出生ノ年月日及職業

二 變更セントスル氏名

三 變更ノ理由

第三條 許可ノ申請ヲ爲スニハ手数料トシテ五十錢ヲ納付スルコトヲ要ス

前項ノ手数料ハ收入印紙ヲ以テ之ヲ納ムベシ

附 則

本令ハ昭和十四年制令第二十號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス (以下略)



## 二、御歷代帝號、御諱、御名その他

代	數	御諱	帝	號
第一	代	神武天皇	神日本磐余彥天皇	
第二	代	綏靖天皇	神渟名川耳天皇	
第三	代	安寧天皇	磯城津彥玉手看天皇	
第四	代	懿德天皇	大日本彥耜友天皇	
第五	代	孝昭天皇	觀松彥香殖稻天皇	
第六	代	孝安天皇	日本足彥國押人天皇	
第七	代	孝靈天皇	大日本根子彥太瓊天皇	
第八	代	孝元天皇	大日本根子彥國牽天皇	
第九	代	開化天皇	稚日本根子彥大日日天皇	
第十	代	崇神天皇	御間城入彥五十瓊殖天皇	

彥火火出見尊 狹野尊 稚三毛野尊  
建沼河耳命 (古事記)

第十一	代	垂仁天皇	活目入彥五十狹茅天皇
第十二	代	景行天皇	大足彥忍代別天皇
第十三	代	成務天皇	稚足彥天皇
第十四	代	仲哀天皇	足仲彥天皇
第十五	代	應神天皇	譽田天皇
第十六	代	仁德天皇	大鷦鷯天皇
第十七	代	履中天皇	去來穗別天皇
第十八	代	反正天皇	瑞齒別天皇
第十九	代	允恭天皇	雄朝津間稚子宿禰天皇
第二十	代	安康天皇	穴穗天皇
第二十一	代	雄略天皇	大泊瀨幼武天皇
第二十二	代	清寧天皇	白髮武廣國押稚日本根子天皇
第二十三	代	顯宗天皇	弘計天皇
第二十四	代	仁賢天皇	億計天皇

活目尊  
大足彥尊

譽田別尊

大兄去來穗別尊 大江之伊邪本和氣命 (古事記)  
多遲比瑞齒別尊 蜺之水齒別命 (古事記)

白髮天皇 白髮大倭根子命 (古事記)  
來目稚子 (更名) 袁祁之石巢別命 (古事記)  
大脚尊、大爲尊 (更名) 島郎 (字) 意富祁命 (古事記)

第二十五代 武烈天皇 小泊瀬稚鷦鷯天皇

第二十六代 繼體天皇 男大迹天皇

第二十七代 安閑天皇 廣國押武金日天皇

第二十八代 宣化天皇 武小廣國押盾天皇

第二十九代 欽明天皇 天國排開廣庭天皇

第三十代 敏達天皇 淳中倉太珠敷天皇

第三十一代 用明天皇 橘豐日天皇

第三十二代 崇峻天皇 泊瀬部天皇

第三十三代 推古天皇 豐御食炊屋姫天皇

第三十四代 舒明天皇 息長足日廣額天皇

第三十五代 皇極天皇 天豐財重日足姫天皇

第三十六代 孝德天皇 天萬豐日天皇

第三十七代 齊明天皇 天豐財重日足姫尊

第三十八代 天智天皇 天命開別天皇

彥太尊(更名)

勾大兄廣國押武金日尊 勾大兄尊

檜隈高田尊

譯語田淳中倉太珠敷尊、譯語田尊

大兄尊

泊瀬部稚鷦鷯天皇 長谷部若雀命(古事記)

額田部

田村

寶

中大兄、葛城 開(大安寺緣起并流記資財帳)

第三十九代 弘文夫皇

第四十代 天武天皇 天淳中原瀛真人天皇

第四十一代 持統天皇 高天原廣野姫天皇

第四十二代 文武天皇 天之眞宗豐祖父天皇

第四十三代 元明天皇 日本根子天津御代豐國成姫天皇

第四十四代 元正天皇 日本根子高瑞淨足姫天皇

第四十五代 聖武天皇 天璽國押開豐櫻彥天皇

勝寶感神聖武皇帝(尊號)

第四十六代 孝謙天皇

寶字稱德孝謙皇帝(尊號)

第四十七代 淳仁天皇

第四十八代 稱德天皇 高野天皇

第四十九代 光仁天皇 天宗高紹天皇

第五十代 桓武天皇 日本根子皇統彌照天皇

大友、伊賀

大海人

鷦野讚良 鷦野 菟野

珂瑠

阿閉

氷高、飯高、新家

首

阿倍

大炊

白壁

山部

世ニ(ト稱ヘマツル

(田原帝)

(柏原帝)

第五十一代 平城天皇 日本根子天推國高彥天皇  
第五十二代 嵯峨天皇  
第五十三代 淳和天皇 日本根子天高讓彌遠天皇  
第五十四代 仁明天皇 日本根子天豐聰聰慧天皇  
第五十五代 文德天皇  
第五十六代 清和天皇  
第五十七代 陽成天皇  
第五十八代 光孝天皇  
第五十九代 宇多天皇  
第六十代 醍醐天皇  
第六十一代 朱雀天皇  
第六十二代 村上天皇  
第六十三代 冷泉天皇  
第六十四代 圓融天皇

安殿 小殿(初ノ御名) (奈良帝)  
神野  
大伴 (西院帝)  
正良 (深草帝)  
道康 (田邑帝)  
惟仁 (水尾帝)  
貞明 (小松帝)  
時康 (亭子院)  
定省 (小野帝)(後山科帝)  
敦仁、維城(初ノ御名)  
寬明  
成明  
憲平  
守平

第六十五代 花山天皇  
第六十六代 一條天皇  
第六十七代 三條天皇  
第六十八代 後一條天皇  
第六十九代 後朱雀天皇  
第七十代 後冷泉天皇  
第七十一代 後三條天皇  
第七十二代 白河天皇  
第七十三代 堀河天皇  
第七十四代 鳥羽天皇  
第七十五代 崇德天皇  
第七十六代 近衛天皇  
第七十七代 後白河天皇  
第七十八代 二條天皇

師貞  
懷仁  
居貞  
教成  
教良  
親仁  
尊仁  
貞仁  
善仁  
宗仁  
顯仁  
體仁  
雅仁  
守仁

(六條帝)

第七十九代 六條天皇  
第八十代 高倉天皇  
第八十一代 安德天皇  
第八十二代 後鳥羽天皇  
第八十三代 土御門天皇  
第八十四代 順德天皇  
第八十五代 仲恭天皇  
第八十六代 後堀河天皇  
第八十七代 四條天皇  
第八十八代 後嵯峨天皇  
第八十九代 後深草天皇  
第九十代 龜山天皇  
第九十一代 後宇多天皇  
第九十二代 伏見天皇

順仁  
憲仁  
言仁  
尊成  
爲仁  
守成  
懷成  
茂仁  
秀仁  
邦仁  
久仁  
恒仁  
世仁  
熙仁

(顯德院)

(九條帝)

第九十三代 後伏見天皇  
第九十四代 後二條天皇  
第九十五代 花園天皇  
第九十六代 後醍醐天皇  
第九十七代 後村上天皇  
第九十八代 長慶天皇  
第九十九代 後龜山天皇  
第一百代 後小松天皇  
第一百一代 稱光天皇  
第一百二代 後花園天皇  
第一百三代 後土御門天皇  
第一百四代 後柏原天皇  
第一百五代 後奈良天皇  
第一百六代 正親町天皇

胤仁  
邦治  
富仁  
尊治  
義良、憲良  
寬成  
熙成  
幹仁  
實仁  
彥仁  
成仁  
勝仁  
知仁  
方仁

(萩原院)

(後文德院)



第七代 後陽成天皇  
 第八代 後水尾天皇  
 第九代 明正天皇  
 第十代 後光明天皇  
 第十一代 後西天皇  
 第十二代 靈元天皇  
 第十三代 東山天皇  
 第十四代 中御門天皇  
 第十五代 櫻町天皇  
 第十六代 桃園天皇  
 第十七代 後櫻町天皇  
 第十八代 後桃園天皇  
 第十九代 光格天皇  
 第二十代 仁孝天皇

周仁、和仁  
 政仁  
 興子  
 紹仁  
 良仁  
 識仁  
 朝仁  
 慶仁  
 昭仁  
 遐仁  
 智子  
 英仁  
 兼仁、師仁  
 惠仁

第三十一代 孝明天皇  
 第三十二代 明治天皇  
 第三十三代 大正天皇  
 第三十四代 今上天皇  
 皇太子殿下

統仁  
 睦仁  
 嘉仁  
 裕仁  
 明仁  
 御名

今上天皇  
 第二皇男子 正仁  
 第一皇女子 成子  
 第二皇女子 和子  
 第三皇女子 厚子  
 第四皇女子 貴子  
 光格皇后 欣子  
 仁孝皇后 祺子  
 英照皇太后 夙子  
 昭憲皇太后 美子  
 皇太后宮 節子  
 皇后宮 良子

三、朝鮮に於ける姓

(増補文獻備考による)

李	張	魚	池	太	葉	禹	石	賈	范	賓	夫
金	閔	睦	奇	馬	皮	羅	龍	夏	宮	彬	杜
朴	任	蔡	陳	表	邕	董	千	含	童	荀	好
鄭	南	辛	庚	殷	甘	貢	桂	價	蒙	公	何
尹	徐	丁	琴	余	鞠	康	印	化	宗	馮	那
崔	具	裴	吉	卜	孫	嚴	晉	章	慈	豚	米
柳	成	孟	延	芮	高	史	溫	良	起	端	柴
洪	宋	郭	朱	牟	田	諸	桓	浪	水	干	艾
申	俞	邊	周	陸	玄	房	陶	彭	智	鍾	芳
權	元	卞	廉	魏	方	孔	葛	平	異	龐	强
趙	黃	慎	潘	車	片	王	秋	井	季	邦	雲
韓	曹	慶	秦	邢	邵	扈	天	耿	於	伊	門
吳	林	白	卓	章	程	魯	燕	永	路	遷	段
姜	盧	全	咸	唐	景	玉	姚	敬	固	連	憚
沈	文	尙	楊	仇	陰	宣	和	勝	素	楚	錢
安	劉	河	薛	明	呂	都	麻	昇	嵇	胡	堅
許	蔣	蘇	奉	莊	梁	承	花	僧	甄	董	祐

守	鮮	將	濯	敦	甫	京	則	位	戴	翟	有	絡	校
毛	要	仰	乙	袁	啓	炭	翌	歸	實	力	黔	父	孝
拓	標	廣	弓	吞	槐	判	直	祈	訓	鄒	蚕	眞	刀
陽	尿	靈	空	萬	泰	漢	墨	尉	原	阿	兢	新	香
倉	召	刑	鳳	頓	梅	簡	合	書	騫	沙	巨	仁	長
昌	肖	寧	僕	竿	來	板	彌	裘	官	巴	御	珍	光
國	賀	會	午	種	雷	壽	甲	牛	寬	牙	吾	信	常
庚	佐	弘	傳	江	苔	包	鄺	溪	慢	功	羽	閏	揚
荆	華	登	遇	時	涼	律	聰	禮	山	恭	斧	順	英
畢	瓜	森	附	箕	舜	物	忠	弟	間	濃	部	隱	廷
弼	庄	尋	丘	知	俊	曰	貞	台	晏	松	顧	闕	令
昔	管	占	乃	追	震	骨	弛	才	泉	龔	圭	善	能
席	場	凡	海	千	員	碣	曦	哀	乾	雙	倪	縣	乘
釋	桑	郁	采	鑿	芸	決	隨	在	宅	彌	苜	彥	興
扁	象	獨	對	輸	昕	別	思	解	澤	茲	赫	見	閻
專	蕞	曲	莘	珠	榮	霍	遲	大	冊	離	克	票	汎
先	相	綠	翁	伍	卿	栢	芋	介	益	侯	德	堯	叔

木	六	岳	一	疋	突	察	列	索	北	蓋	雜	弄	劦	積	乜	軍
喬	遇	狄	一	班	谷	燭	南宮	皇甫	司空	鮮于	大室	貢鼎	明臨			
再會	赫連	石抹	扶餘	獨孤	西門	東方	公孫	墻籬	令孤	司馬	夏侯	仲室				
少室	古爾	乙支	似先	木易	祖彌	黑齒	耶津	齊楚	羽眞	(以上四百九十六姓)						

## 附 錄 名 乘 り 字 引

一、この字引は、名乗りの字引である。趣旨とする所は、朝鮮の人の名を國語風に訓む爲、又は、新しく内地人式の名を考へる爲の手引として作られたものである。

一、以上の目的の爲に朝鮮の人の名に多い字は出来る限り、收録してゐる。但し、朝鮮式造字はその國語の訓の確立して居ない爲に、記載を避けて居る。

一、この字引の見出しは、一般に行はれる漢音を主としたが、吳音が通音の場合は吳音にも出して居る。例へば「内」は漢音が「ダイ」吳音が「ナイ」であり「役」は漢音が「エキ」吳音が「ヤク」であるこれ等は双方共に出して居る。

一、この字引の順序は標音式に従ひ、濁音は皆清音に入つて居る。従つてアウはオウに、イウはユウに、キウはキュウに、シウはシュウに、チュウはチュウに、エはエに、ヰはイに統一して居る。但し、名乗りの訓は、歴史的假名遣ひによつて居る。

一、見出しの漢音が名乗りの場合が多いが、一字一字の下に重複して記すことは避けて居る。

「」を附した字は内地人式名に多い字であり、新たに内地人式名を考へる爲の便にした。  
 ×のついた假名はその文字の普通最も多い訓である。一通りの訓のみあげた場合には別に  
 記號を附けない。名のよみ方は原則としてこれによるべきである。

傍線——を附した假名は、その文字が一字の時のよみ方である。但し普通余り使はれないの  
 には別に附して居ない。

○は、天皇の御名にあつて、一般に遠慮申上ぐべき字に附した。

ア—イ

渥	阿	哇	歲	愛
ア	アイ	ア	ア	ア
あつ	くま	うた	たかし	やす
握	幹	晏	安	伊
アツ	アン	やすし	やすし	やすし
もち	あつ	やす	あ	さだ
已	以	夷	逸	依
つく	しげ	ゆき	とし	つら
これ	のり	つね	たか	より
すゑ	もち	ひら	ゆく	つく
怡	委	倚	移	尉
もろ	とも	×かぬ	×より	まさ
くつ	つよ	かね	よき	のぶ
よし	つく	より	やす	より

イ—ウツ

慰	緯	【維】	緯	彙	意	圍	異	葦	【爲】	惟
		×これ			×おき				×ため	×これ
	つな	ふさ			よし				より	たゞ
		ゆき	×てる		もと				さだ	つら
	ゆき	すみ	あきら		むね	より			すけ	あり
やす	よし	まさ	しげ	しげ						のぶ
	【一】	熨	彙	【育】	域	懿	遺	彝	謂	熨
	×かず	イツ		×やす						
ひと	く		てる	すけ	イク	イキ		×つね		
たゞ	ひぢ	×かつ	あきら	なる	むら			のり	のぶ	すゝむ
はじめ	かた	もと		か	くに			おく		
				あや				よし		
因	印	勻	引	【允】	尹	溢	壹	【逸】	侑	聿
×より	しるし	おき	×のぶ	×まさ	×たゞ	イン	かず	とし	×のぶ	ひとし
よし	かね	ひとし	なが	ふさ	まさ		さね	やす	これ	まこと
なみ	おし	かほる	ひさ	みつ	かね	みつ	もろ	はや	よ	
				あつ						
蔚	禹	雨	【迂】	于	宇	隕	陰	殷	員	【寅】
まさ	ウツ		×たか	ゆく	ウ			×たか		【胤】
もち	×くに	あめ	×とほ	ゆき	やす			たゞ	ます	×たね
しげ	のぶ	ふる	ゆき	なり	やすし	かけ		もろ	かず	つぐ
			いへ	なす	ひとし				とら	つぎ



[illegible][illegible]

奂	咸	玩	侃	官	【岩】	卷	岸	罕	旱	玕	含	【完】	阮
×みな	さね	あきら	これ	×のり	い	まき	まれ	あみ	てる	もち	また	たかし	
あきら	しげ	よし	やす	きみ	かた	まる	はた	あつ	たま	ふくむ	さだ		
【幹】	煥	【雁】	閑	間	敢	款	寒	【貫】	坎	【勘】	桓	看	宦
×みき	×てる	×やす	ま	ちか	いさむ	ゆく	ふゆ	つら	みつ	たけ	たけし	みる	のぶ
×つね	ひかる	のり	より	はさま	すゝむ	よし	さむ	みつ	さだ	すげ			
もと	あきら	かり	より	はさま	すゝむ	よし	さむ	みつ	さだ	すげ			
管	漢		【寛】	慣	緩	箴	監	換	戡	煥			
×くだ	あや	もと	×ひろ	ひろ	ふさ	あきら	た	あき	たふ	あや	まさ	えだ	
ふえ	くに	よし	たき	のぶ	やす	た	あき	たふ	かつ	あや	まさ	えだ	
うち	なら	ひろし	むね	のり	みな	のぶ	まさ	やす	かつ	あや	まさ	えだ	
鑑		【巖】	歡	【勸】	【關】	願	簡	韓	環	館	撰	圖	翰
キ	みね	×たか	きし	ゆき	すゝむ	せき	ひろ	から	たまき	×たち	たて	みつ	なか
×あき	いはほ	きし	よし	たすく	とほろ	ねがひ	あきら	こま	やど	つら			
あきら		みち											

開	階	【偕】	海	垓	皆	【戒】	快	改	艾	夬	【介】	鍋	曄	駕
×はし					み		よし	やす	さだ	ゆき	×なべ	あきら	のり	
ひら	とも	とも	あま	かぬ	とも	さとし	やす	あら	よし	むら	かま			
はる	より	とも	あま	かぬ	とも	さとし	やす	あら	よし	むら	かま			
【懷】	諧	駭	概	魁	數	愷	誨	會	該	楷	【凱】			
×かね	こと					すえ	のり	あふ	かぬ	かた	とき	のり	よし	
ちか	なり	とし	はじめ	かしら	なさむ	ひて	こと	かす	はる	かた	とき	のり	よし	
たか	つね	はや	むね	かしら	なさむ	ひて	こと	かす	はる	かた	とき	のり	よし	
やす	ゆき	はや	むね	かしら	なさむ	ひて	こと	かす	はる	かた	とき	のり	よし	
樂	懋	廓	赫	閣	較	殼	【格】	核	客	革	岳	【角】	各	カク
まさ	まさ	ひろ	てる	なほ	あつ	もと	いたる	のり	まさ	かは	たけ	かど	まさ	
らく	なほし	あきら	あきら	はる	あつ	もと	いたる	のり	まさ	かは	たけ	かど	まさ	
扞	甘	【丸】	干	闊	葛	憂	豁	【鶴】	壑	嶽	【學】	確		
				カン			ひろ	カツ			×のり	かた	あきら	
もり	まる	もと	ほす		かつ	のり	ゆき		た	たか	まなぶ	かた	あきら	
もち	よし	まる		ひろし	くず	つね	あきら		あきら	たけ	たか	かた	あきら	

歸	議	歸	騎	九	人	弓	及	牛	丘	休	究	炭	求	扱
×ゆく					ひさ	ゆみ				×やす			×ひで	
むね	かた	たか	よす	ちか	なが	のり	ちか	うし	×わか	よし	さだ	たかし	もと	なさむ
より	のり	たかし	より	たぐす	ひさし	たけ	たか	とし	たか	のぶ				
糺	穹	韭	趣	躬	球	救	抹	速	給	翁	鳩	舊		
						×やす							もと	ふさ
たぐし	たか	にち	たけ	ちか	なり	すけ	なか	あつむ	たり	のぶ	はと	ふる	ひさ	
たぐし	たか	ひさ	たけ	もと	たま	すけ	なか	あつむ	はる	なさむ	あつむ	ひさ		
菊	鞠	伧		伧	吉	屹	佶	劼		去	巨			
					×きち					キヨ				
きく	×きく	みつ	キツ	たけし	×よし	さち	たぐし	つとむ	たぐし	さる	なほ	のり		
あき	あき	つぐ		よ		たかし	つよし	かたし	なる	なる	なほ			
居	許	御	魚	踞	馭	渠	鉅	舉	印	叶	仰	共	匡	
おき									キヨウ					
やす	もと	のり	うな	さかな	たま	のり	ひろ	たか	たか	かれ	やす	まさ	たぐし	
すゑ	ゆく	みつ	さかな	たま	のり	ひろ	たか	たか	かみ	かなふ	もち	とも		

己	企	危	祇	忌	【希】	岐	【技】	其	【季】	【宜】	奇	癸	【紀】
おのれ	もと	たかし	まさ	いむ	まれ	みち	あや	とき	×とし ×すゑ	×よし たか	×あや	より	とし
軌	豈	記	鬼	氣	【起】	【規】	倚	寄	【基】	【幾】	【喜】	稀	
こと	より	さ	×のり	かみ	×おき	ゆき	のり	わたる	もと	ふさ	よし	まれ	
すみ	たさむ	さ	ふさ	おに	か	か	み	より	もと	ちか	のり	は	
もと	のり	ふす	ふさ	きり	か	か	み	より	はじめ	のり	のり	は	
達	【貴】	祺	【義】	輝	【熙】	暉	【誼】	倍	箕	【儀】	【毅】	【輝】	
×たか	あて	よし	よし	ひろ	ひろ	てる	こと	よし	よし	た	たけ	た	
よし	あつ	むち	のり	てる	てる	あき	よし	よし	み	のり	たか	あ	
みち	あつ	やす	よろし	あきら	のり	あきら	よろし	やす	みる	よし	つよし	あ	
禧	翼	襪	熹	【龜】	機	【器】	【礪】	微	期	騎	魏		
よし	ひろ	ゆき	よし	かめ	はた	かなめ	た	とき	とき	さね	たかし		
とみ	てる	さち	と	ひさ	みち	た	か	のり	のり	のり	のり		
と	くに	と	あ	あ	と	と	と	と	と	と	と		

【亨】 ×みち とほる	【協】 ×ゆき あきら	俠 いさむ たもつ	峽 かひ はざま	【恭】 ×やす すけ たかし たいし	挟 みつ もち	強 ×こは つよし つとむ	【教】 ×のり なり ゆき たか みち	【堯】 ×たか たかし	【喬】 ×たか すけ
【業】 ×なり のり かづ ふさ のぶ	【郷】 ×さと あきら	競 つよ うや	【儔】 たか よし	【曉】 ×とし とき あき とほる	敵 たかし つら	【疆】 あきら さとり とほる	橋 ×たけ つとむ	矯 はし たか	疆 つな
【鏡】 ×あき とし あきら	【翹】 あき	【驍】 たけし つよし	【玉】 たま	旭 あきら	曲 ×くま すみ	【均】 ×た ひら よし まさ	斤 なり のり	【均】 ×た ひら よし まさ	【均】 ×た ひら よし まさ
【吟】 ひとし こえ	【欣】 よし おと	【近】 あきら ちか	【金】 こん たか	【琴】 たか	【勤】 のり つとむ たすく	【銀】 たし かたし	【銀】 たし かたし	【銀】 たし かたし	【銀】 たし かたし
【謹】 ちか のり なり	【謹】 ちか のり なり	【謹】 ちか のり なり	【謹】 ちか のり なり	【謹】 ちか のり なり	【謹】 ちか のり なり	【謹】 ちか のり なり	【謹】 ちか のり なり	【謹】 ちか のり なり	【謹】 ちか のり なり

【具】 ×のり つね かど とも	【矩】 ×のり つね かど とも	【俱】 ×とも ひろ もろ	虞 ×もち すけ やす こま	【駒】 クウ こま	空 たか	【宮】 みや いへ	偶 まさ ふさ	寓 より よる	隅 ×すみ かど	遇 ×あふ はる あひ	偶 クツ つよし たけし	侃 クン つよし たけし
【君】 ×きみ きん すえ	【軍】 ぐん むれ むら	【訓】 ×のり くに ふみ	郡 ×くに とも さと	群 ×とも むれ もと	【勳】 ×しげ いさな	【薰】 ×しげ のぶ ふさ	纁 まさ たか あか	【兄】 これ えだ さき	同 よし たか あきら	【圭】 たま かど	【圭】 たま かど	【圭】 たま かど
【刑】 のり	【閭】 あきら	【系】 ×つら いと	【形】 ×かた すえ	【形】 ×かた すえ	【京】 あきら	【計】 かたし	【計】 かたし	契 ひさ	係 たへ	勁 つよし	炯 あきら	迴 とほ
【桂】 かつら	【桂】 かつら	【桂】 かつら	【桂】 かつら	【桂】 かつら	【桂】 かつら	【桂】 かつら	【桂】 かつら	【桂】 かつら	【桂】 かつら	【桂】 かつら	【桂】 かつら	【桂】 かつら
【桂】 かつら	【桂】 かつら	【桂】 かつら	【桂】 かつら	【桂】 かつら	【桂】 かつら	【桂】 かつら	【桂】 かつら	【桂】 かつら	【桂】 かつら	【桂】 かつら	【桂】 かつら	【桂】 かつら



【敬】 ×のり たか はや	【燦】 とき よし	【稽】 ちか よし	【慶】 よし のり	【慧】 さとし あきら	【影】 かげ ひかる	【馨】 やすし かほる	【藝】 すけ まさ	【紫】 つぐ つな
【警】 ひで つね	【穴】 あな これ	【杰】 (傑ノ俗字)	【結】 さだむ かた	【傑】 すぐる ひいづ	【潔】 きよ ゆき	【元】 あさ もと	【玄】 ×くろ はる	【元】 あさ もと
【言】 ×とき とほ	【見】 ×み あや	【彦】 ×ひこ ひろ	【建】 ×たけ たつ	【炫】 あきら よし	【軒】 のき な	【原】 はら もと	【兼】 ×かね かた	【健】 ×たけ たる
乾 たけし そら	【堅】 ×かた み	牽 ひき とき	現 ひた み	絢 あや	堅 (堅ノ俗字)	絹 きぬ まさ	暄 ×やす よし	願 よし みつ

【賢】 よし たゞ	【僣】 まさ やす	【諺】 こと とし	【縣】 むら さと	【嶮】 けはし たかし	【憲】 ×のり かす	【險】 かた たかし	【謙】 よし かね	【懸】 かま かね	【鎌】 とほ かね	【權】 よし つよ	【瀦】 たゞし のり
【巖】 よし かね	【虎】 よぶ おと	【呼】 ×くれ く	【吾】 われ わが	【后】 きみ のち	【古】 ×ふる たか	【戸】 もり かど	【午】 ゆき うま	【五】 こ のり	【顯】 あき あきら	【驗】 とし しるし	【巘】 みね たかし
固 かた み	後 ちか もち	胡 ひと ひさ	故 ×ふる ひと	【悟】 さとる もと	【庫】 きり くら	【梧】 あきら こと	【語】 かた かす	【箇】 きよし あきら	【噪】 もり さね	【護】 み たゞ	【顧】 コウ つかさ
孔 うし よし	亢 たか あつ	【公】 ×きみ ×とも	【交】 あきら ひと	【號】 ×こと なる	【甲】 ひろ みつ	【弘】 ひろ みつ	【巧】 よし たぐみ	【互】 のぶ わたる	乾 たけし そら	【堅】 ×かた み	牽 ひき とき

[illegible]

講	鋼	【興】	縞	【衡】	【廣】	【豪】	敵	構	誥	煌	鉤	【澗】	號	傲	硬
×のり		おき					×たゞ								
みち		さき		×ひら	×ひろ		あつ			てる		きよし	な		かたし
つぐ	かた	ふさ	しま	ひで	みつ	×ひで	むち	なり	つぐ	あきら	つる	ひろし	なづく	のり	
穀	【黒】	【國】	酷	刻	剋	谷	告	【克】	瀨	顚	【曠】	懷	【鴻】		
									コク		あきら		×ひろ		
よし	く	あつ	ひろ	つぐ	かつ	ひろ	たに	かつ	よし	てる	ひろし	ひろし	つよし	ひとし	
より	とき	み	とき	かつ	ひろ	たに	つぐ	かつ	ひろし	ひろし	とほ	たけし			
乍	懇	墾	魂	焜	渾	混	根	坤	昆	艮	訖	【兀】			
								×くに		かた	コン		コツ		
サ										うし					
はや		たま	ひろ	むら	ひろし	ひろ	ね	した	ひで	たゞ	いたる	たか			
はじめ	まこと	はる	てる	ひろし	ひろし	ひろ	もと	つな	やす						
彩	宰	財	柴	【戠】	采	材		【在】	【才】	座	差	【佐】	【左】		
				×や			あきら	×あり		サイ					
あや	かみ			か	あや	×き	すみ	あき	もち		くら	すけ	すけ	すけ	すけ
つや	たゞ	たから	しげ	ちか	とり	えだ	とほ	みつる	かた		おき	しな			

崔	最	催	載	際	儕	齋	濟	作	策	サツ
			×とし	あひ			よし	×なり	なほ	もり
	よし		のり	おり		よし	すみ	とも	ふか	かず
たか	いろ	とき	はじめ	かた	とも	きよ	まさ	あり		
札	【察】	擦	雑	【三】	【山】	【參】	【産】	算	散	贊
あき	み			たゞ	かす	×みつ	ほし			×よし
ぬさ	あきら		とも	み	やま	×ちか	たゞ	×かす	あけ	あけ
さね	みる	あきら	かず	みつ	たか	なか	うむ	×のぶ	×のぶ	あきら
績	戸	【已】	【士】	子	【之】	支	示	【矢】	只	【史】
シ	たか	さね	さね	ちか	×ゆき	ひで	もろ			ふみ
	かた	たね	たね	ね	これ	のぶ	ひさ	とき	たゞ	ちか
つぐ	しか	はじめ	こと	みる	つな	くに	はせ	しめ	なほ	ひと
【司】	【止】	【市】	【次】	此	自	私	芝	至	旨	抵
×たゞ			×つぐ	こ	これ	×しげ	しば	×のり	【而】	×つね
なる	いち		つぎ	これ	さだ	ふさ	よし	みち	しか	むね
とも	なが	な	ひで	こゝ	より	とみ	しく	むね	なほ	やすし

伺	孜	志	祀	侍	始	社	指	枝	治	姿	茲	咫	咨
あれ		ゆき	はる					×えだ			×しげ		
あえ		あつ	もと		もと			しげ	はる	たか	つな		
かた	み	つとむ	しるし	とし	ひと	はじめ	よし	むね	しな	しな	むね	たけ	こと
【是】	施	【時】	【師】	【茲】	祠	祇	柿	貲	視	趾			
これ	×のぶ	×とき	×のり		ます								
ゆき	はる	よし	ちか	みつ	やす				あし	あし			
つな	もち	これ	はる	かち	これ	はる	たゞ	かき	のり	もと			
斯	翅	絲	詞	【慈】	【嗣】	著	肆	滋	資	寘	寘	試	
のり	いと	×こと	×やす	×つぎ	×ちか	ひで	×ます	×よし	もと				
つな	ため	なり	なり	×つぐ	たゞ		あさ	すけ	しげる	なき			
これ	より	のり	たか	さね	あき		なな	しげる	やす	つとむ	もち		
詩	飼	爾	禊	齒	賜	禊	熾	曬	【式】	識	【笠】		
うた	かひ	ちかし	ゆき	さち	これ				×のり	シキ	シツ		
					たゞ				つね	つね			
					かす	×たま	さね	あき	のり	のり	あつし		

【秋】	あき	あきら	とし	とき
【周】	ちか	かね	かぬ	なり
岫	しげ	あつ	かす	みね
【重】	しげ	あつ	かす	みね
柔	やす	よし	なり	くに
洲	のぶ	おもし	しげる	なほ
【修】	のぶ	さね	なが	なほ
終	さね	もち	つき	なほ
【脩】	さね	もち	つき	なほ
衆	もろ	とも	もり	ちか
【從】	より	つぐ	ちか	より
習	しげ	まなぶ	のぶ	より
揉	なり	よし	ひさ	あひ
【就】	なり	よし	ひさ	あひ
集	ちか	ため	あひ	ふく
葺	ふく	なさむ	あつむ	かね
蒐	あつむ	かね	あつむ	まさ
銃	あつむ	かね	あつむ	まさ
聚	あつむ	かね	あつむ	まさ
緝	あつむ	かね	あつむ	まさ
輯	あつむ	かね	あつむ	まさ
縱	あつむ	かね	あつむ	まさ
繡	あつむ	かね	あつむ	まさ
襲	あつむ	かね	あつむ	まさ
驚	あつむ	かね	あつむ	まさ
叔	よし	とき	のり	よし
祝	よし	とき	のり	よし
俶	よし	ひて	はじめ	すみ
【淑】	よし	ひて	はじめ	すみ
宿	すみ	なる	やど	すみ
【肅】	すみ	なる	やど	すみ
塾	すみ	なる	やど	すみ
塾	すみ	なる	やど	すみ
縮	すみ	なる	やど	すみ
術	すみ	なる	やど	すみ
旬	すみ	なる	やど	すみ
巡	すみ	なる	やど	すみ
恂	すみ	なる	やど	すみ
【俊】	すみ	なる	やど	すみ
徇	すみ	なる	やど	すみ
春	すみ	なる	やど	すみ
純	すみ	なる	やど	すみ
隼	すみ	なる	やど	すみ
浚	すみ	なる	やど	すみ
峻	すみ	なる	やど	すみ
駿	すみ	なる	やど	すみ
逡	すみ	なる	やど	すみ
淳	すみ	なる	やど	すみ
惇	すみ	なる	やど	すみ

[illegible]



[illegible]

鐘	踵	篠	椀	賞	衝	管	稱	獎	饒	璋	照	障
	つぐ			×たか	ゆく	×もり	×のり				×てる	
	より	しの		ほむ	つぎ	よし	すぐ				あり	かき
	いたる	すい	もみ	よし	みち	ふる	かみ	すゝむ	とも	あき	すき	まもる
あつ											のぶ	
【殖】	【植】	促	食	束		【讓】	繩	證	鏘	識	繞	變
もち		みけ	き	シヨク	ゆづる	うや	なは	つく		さと		【裏】
		あき	さと			のり	のり	み		つね		×なり
なか	ゆき	あきら	つか			ただ	まさ	あきら	なる	のり	×あき	なる
たね	たつ	ちか				よし	つな	なる	なる	むね	てる	のぼる
【申】	【心】	【壬】	【仁】	【人】	織	【職】	蜀	寔				
×のぶ	むね	あきら	×よし	たみ	シン	×もと		×たゞ				
×さる	うね	よし	×さね	ひと		より	よし	これ				
	うち	さね	さと	きみ		しるし	つとめ	さね				
もち	もと	み	とよ	と		お	お	くに				
【信】	【甚】	偃	伸	岑	【身】	辛	迅	【辰】	【任】	【臣】	仞	
×のぶ	たね				これ	からし	×とき	×たふ	たか	×おみ		
とき	ふか	たふ	×たか		よし	いたし	×たつ	たゞ	たか	とみ	たか	
さね	しげ	よし	みね		たゞ	つらし	よし	たね	たね	しげ	みつ	

【進】	祓	深	宸	宸	振	【晉】	訊	陣	秦	【眞】		
ちか			あき		ゆき					×さね	こと	とし
のぶ	×ふか	とき	そら	×のぶ	くに					あきら	さだ	たゞ
すゝむ	ふかし	とよ	とら	とし	すゝむ	いさむ	つら	はた		まさ	ちか	あき
薪	臻	審	震	賑	認	【慎】		【尋】	斟	觥	鞫	軫
						ちか	のぶ	ひろ	あらた			
	いたる	あき	なる	とみ	もろ	のり	つね	ちか	くむ	にひ	つよし	うし
しほ	あつむ	あきら	おと	とも	みとむ	みつ	みつ	より	すゝむ	よし		
粹	遂	【瑞】	綏	猷	陲	萃	佳	水	父	儘	【親】	
やす	なり	かつ	よし					×み	スイ	みる	より	
きよ	つく	もろ	まさ					ゆ		ちか		
たゞ	みち	より	やす	ふさ	みち	あつむ	とり	な	ゆき	みち		
寸	趨	樞	【數】	嵩	崧	崇	陬	【穗】	隧	隨	【翠】	
スン		ひら	はや					スウ		ゆき	あきら	
	ゆく		かず	たけ	たかし	たか	むら		ほ	より	みどり	
ちか	はや	たる	のり	たか	たかし	たか		さき	みち	あや		

籍	藉	利	屑	設	接	雪	說	綴	截	節	攝
ふみ	セツ				つぐ		かぬ	とく	とも	Xとも よし	Xかね かぬ
より		くに	きよ	おき	もち	Xきよ	こと	のぶ	あき	もと	やすし
より					つら	ゆき	とき		あや	たつ	
千	仙	冉	先	全		肝	茜	荐	泉	洗	前
Xち	Xひさ	うし	Xさき	Xたけ	あきら						Xのぶ
ゆき	のり	ゆき	もと	まさ		みち	あかね	かず	みづ	さき	つき
			ひろ	また					いづみ	ちか	むら
浅	専	然	善	直	僉	詮	儔	羨	戩	銓	漸
あさ	もろ	しか	Xよし	あつ	みな	あき	さね	のと	ゆき	のり	すゝむ
			やす			あきら		さと	とし	ふかし	しのぶ
潺	撰	暹	薦	選	鮮	瞻	繕	鰯	祖	祚	
みつ	のぶ	Xのり	すゝむ	より	まれ	あらた			Xもと	ひろ	
		たけ		よし	よし				のり	むら	
		あきら		かづ	あきら			のみ	さき	とし	

【世】	セイ	よ	つき	【生】	×いく	ふ	な	西	ふゆ	たか	なり	あき	【成】	×なり	×しげ	なる	制	みち	のり	ひら	【政】	×まさ	のぶ	のり	たど	青	ゆき	かず	なり	たど	【征】	×はる	あな	もと	菁	×ゆき	しげる	すみ	【清】	×きよ	よし	すみ		
晟	あきら	きよし	あきら	【靖】	×やす	のぶ	きよし	惺	さと	さと	さと	さと	【晴】	×はる	はれ	なり	聖	きよ	まさ	さと	【誠】	×しげ	もと	なり	とも	【精】	×きよ	よし	たど	【齊】	×とき	×たど	ひとし	はや	まさ	むね								
【整】	なり	よし	きよ	【静】	×ちか	×しづ	きよ	聲	×かた	もり	おと		贅	さだ	つぐ		躋	のり	のり		霽	×はる	のり	なり	【石】	×いは	かた	あつ	赤	あか	はに	つね	【績】	×もり	いさ	つみ	昔	×ふる	とき	ひさ				
寂	しづ	ちか	やす	迹	あと	ゆく	ゆき	席	のぶ	すけ	より		戚	いた	ちか		勤	いさな	つとむ		皙	きよし	しろし		碩	みつ	ひろ		夷	まさ	しげ		積	さね	つみ	もり	【績】	×もり	いさ	つみ	【績】	×もり	いさ	なり

【孫】	さね	たゞ	ひこ
尊	まご	ひろ	
遜	×たか	きみ	たる
【太】	×もと	つと	たか
他	おほ	ふとし	ひと
【多】	×かず	な	おほ
宛	まさ		
兌	タイ		みち
【大】	×もと	とも	おほ
【内】	ふとし	はじめ	のぶ
【草】	×くさ	かや	しげ
【相】	×あふ	×すけ	はる
【宗】	×むね	とし	とき
宋	のり	ひろ	かず
走	く	おき	ゆき
【壯】	さき	はや	たけ
【早】	もり		
蘇			
楚			
疏	(疎)	とほ	たか
組	くみ	くむ	
素	もと	しろ	
租	つみ	もと	
【代】	ちか	まさ	みつ
隶	しろ	のり	より
耐		もと	とほ
胎		はら	ちか
殆		もと	たふ
【泰】	よし	やす	ひろ
待	まつ	まち	なが
臺	みち	つき	くに
確		おび	よ
第		きし	な
態	×かた	うてな	なり
題	×みつ		
體	タク	み	もと
宅	もち	たか	いへ
【卓】	とほ	つな	あきら
倬	ゆき	つな	あきら
託		より	
【澤】	×ます	さば	すゞ
鐸	タツ	かつ	とほ
【達】	みち	かど	
丹	タン	に・あか	まこと
旦	あきら	あけ	あき
【男】	【坦】	やす	ひろ
尊	あきら		
湍	きよ	やす	やすし
湛	きよ	やす	やすし
單	×たふ	よし	たへ
堪	ひで	かつ	たゞ
暖	あつ	はる	やす
端	まさ	たゞ	なほ
團	もと	たゞし	はじめ
儻	あつ	まこと	はやし
誕	あつ	のぶ	

【草】	×くさ	みる	かや	しげ
【相】	×あふ	×すけ	はる	
【宗】	×むね	とし	とき	
宋	のり	ひろ	かず	
走	く	おき	ゆき	
【壯】	さき	はや	たけ	
【早】	もり			
蘇				
楚				
疏	(疎)	とほ	たか	
組	くみ	くむ		
素	もと	しろ		
租	つみ	もと		
奏	しげ	むら	すゝむ	
莊	とも	のぶ		
曹	たけ	あきら	さやか	
爽	はじむ	つくる	いたる	
【造】	×なり	たつ	のぶ	
嶸	みね	けはし	たかし	
峭		たかし	はじむ	
創	なり	あつむ	あつむ	
湊	あつ	よし	まさ	
【會】				
憾				
【增】				
【叢】				
【操】	×あや	もち	とる	
【總】	×ふさ	のぶ	みち	
【聰】	×とし	×あき	とみ	
【藏】	×まさ	×くら	ただ	
叢	×むら	あつむ	や	
鎗	ソク	あや	きぬ	
線	ソク	あや	きぬ	
【足】	×たる	×たり	ゆき	
即	×より	ひと	あつ	
俗	×みち	よ		
【則】	×のり	つね	とき	
異	×のぶ	かぜ	よし	
【村】	×むら	すゑ	つね	
【存】	×あり	ある	なか	
付	ソ	はかる		
率	ソ	か	のり	
卒	ソ	たか		
屬	つら	ます	まさ	
測	つら	ます	まさ	
【速】	えだ	つぎ	は	
族	やすし	おき	やす	
息	か	おき	やす	



【智】 Xとも とし さと	値 あき あふ あきら	き はむ あふ あきら	【致】 Xむね なき いたる	【持】 なき Xもち よし	【知】 Xとも ちか かす	地 Xつち くに	断 Xさだ たふ	【彈】 たゞし やす	譚 ふかし	談 Xかね かた かね
宙 【忠】 Xたゞ なる たゞし おき	沖 【仲】 Xおき な な	【丑】 ひとし たゞし うし	【中】 Xなか よし のり	畜 チユウ のぶ	【種】 のり とみ もと	置 き やす おき	馳 ふさ はやし	雉 ふさ のぶ	【稚】 のり とみ もと	【稚】 のり とみ もと
【直】 たゞ なほ のぶ	儲 チヨク あき つく そへ	箸 あき つく あきら	貯 あき つぎ もる	著 Xあき つぎ たゞ	竹 チヨ たゞ	述 チユン たむ	籌 かず	【縛】 たか たゞ すゝむ	【縛】 たか たゞ すゝむ	【縛】 たか たゞ すゝむ
晁 あき とみ とき	昶 Xてる みつ とほ	昶 Xてる みつ とほ	【長】 Xなが たけ たか	帖 よし おほ しるし	【兆】 よし おほ しるし	刁 チヨウ とら	飭 のぼる たゞし	【陟】 たか たゞ すゝむ	勅 つね あたひ とき	勅 つね あたひ とき

漲 つき みつ	調 のり しげ なり	【暢】 のぶ なが まさ	薦 よし はじめ たゞし	【聲】 よし はじめ たゞし	【稠】 しげ しげ	裔 たか はる	帳 はる はる	【張】 つよ はる	鳥 とり	超 Xたつ おき こゆ	【晃】 てる あきら
椿 つら ひさ つばき	【陳】 Xのぶ むね のり	珍 Xよし くに たか	沈 はる うし	躡 チン のり とし たか	聽 あき とし あきら	疊 あき あきら	寵 よし あきら	雕 わし	徵 あきら おと みる よし	激 きよ すみ	【澄】 すむ きよ すみ
低 ふと くに ひら	弟 ふと くに つぎ	氏 ゆき もと	丁 Xあつ つよし	【通】 Xみち ゆき とほ	鏈 ツウ ゆき とほ	追 ツウ ゆき とほ	椎 ツウ ゆき とほ	堆 たか のぶ	【鎮】 なか しげ やす	賃 なか しげ やす	賃 なか しげ やす
雷 しな たけ	程 Xのり ほど	挺 Xたゞ なほ	頂 Xたゞ なほ	【庭】 よし なほ	悌 よし なほ	亭 ひとし いたる たかし	訂 Xさだ つら たゞし	底 Xゆき さだ ふか	抵 Xゆき さだ ふか	邸 たか いへ	廷 たか いへ

楅	碇	鼎	植	禎	諦	的	迪	偶	剔	商	敵	適
あつ	かなへ	かえだ	たゞ	あき	ま	ふみ	あきら	たかし	なさむ	もと	とし	より
とみ	いかり	かい	さだ	あきら	あきら	たゞ	あきら	たかし	なさむ	もと	とし	より
【哲】	惹	詰	徹	激	轍	鐵	天	田	典	恬	テツ	あり
あつ	(哲ノ古文)	(哲ニ通ズ)	とほる	あきら	のり	てつ	あめ	あめ	Xのり	より	あつ	あり
のり			あきら	きよし	まがね	まがね	たか	た	Xすけ	つね	あつ	あり
さとし					かたし	かたし	みち	たゞ	よし	すき	あつ	あり
展	添	奠	傳	電	殿	填	瑱	璧	輶	點	轉	闐
Xのぶ	ひろ	ます	さだ	たゞ	あきら	やす	まさ	たま	とし	しるし	ひろ	みつ
ひろ	ます	さだ	たゞ	あきら	すゑ	ます	まさ	たま	とし	しるし	ひろ	みつ
嶺	土	斗	杜	度	徒	途	堵	渡	都	塗	圖	トウ
さき				Xのり	Xたゞ	Xみち	Xたゞ	Xいち	Xくに	Xのり	みつ	みつ
みね	たゞ	ほし	もり	なが	かち	とほ	かき	わたる	さと	みつ	みつ	みつ

屯	トシ	敦	頓	那	南	楠	二	尼	貳
×むら	より	×あつ	のぶ	あつし	はや	とも	たゞ	のぶ	すけ
みつる	みつる	あつし	はや	とも	たゞ	のぶ	すけ	みつる	すけ
任	ニシ	忍	寧	熱	年	念	納	能	
×たふ	ひで	×よし	さだ	たゞ	あつ	とし	おもふ	おさむ	むね
たね	たね	しのぶ	たゞ	あつ	とし	おもふ	おさむ	おさむ	やす
農	×とよ	濃	叵	巴	坡	馬	場	貝	培
×とよ	あつ	なる	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ
なる	なる	あつ	あつ	かた	とも	つみ	つみ	つみ	つみ
陪	裴	稗	勸	輩	白	伯	拍	迫	陌
×あや	あきら	ます	すけ	すけ	すけ	すけ	すけ	すけ	すけ
な	な	な	な	な	な	な	な	な	な
よし	よし	よし	よし	よし	よし	よし	よし	よし	よし

覇	伐	鉢	凡	汎	判	伴	阪	范	般
ハツ	×なり	×ちか	のぶ	あきら	おき	のり	はち	か	は
は	は	は	は	は	は	は	は	は	は
班	販	飯	編	槃	盤	播	緋	攀	比
×つら	すゑ	ひさ	つぐ	かつ	か	か	か	か	か
なか	くれ	うる	つら	たか	いひ	あや	たすく	やす	これ
丕	未	尾	肥	飛	弭	毗	秘	備	
なみ	ひで	な	こえ	とび	まさ	のぶ	よし	まさ	な
つね	はじめ	おほ	すゑ	とみ	たか	やす	とも	やす	すけ
諛	美	紫	費	賞	微	辟	彌	譬	瀾
より	はる	みつ	みつ	みつ	みつ	みつ	みつ	みつ	みつ
さとし	さとし	さとし	さとし	さとし	さとし	さとし	さとし	さとし	さとし

必	秘	【弼】 Xすけ たすく	【筆】	謚	匹	【百】 ヒヤク ヒョウ	凭	苗	【表】 と あきら	【彪】 あや とら たけき
ヒツ	みつ	のり たね	ふて	やす しづか	とも あつ	も	てる よし	Xなへ たね なり	みつ よし	あや とら たけき
馮	森	標	標	旻	玟	【品】 Xしな	敗	彬	賓	頻
より	ひろし	とし	えだ	ヒン	たま	かす	つとむ	よし もり あきら	しげ はや かず	しげ はや かず
【夫】 フ	分	【父】 ち	无	【布】 のぶ	【孚】 さね	【扶】 もと	府	阜	負	赴
な	ちか	のり	より	しく	たか	たすく	あつ	な	たか	たけし
部	【富】 Xとみ	ひさ	普	Xひろ	たか	ゆき	ひろ	【武】 な	たか	たけし
ほ	あつ	ふく	ゆき	ひろ	しげる	まひ	つく	【武】 な	たか	たけし
まつ	よし	あつ	ゆき	ひろ	しげる	まひ	つく	【武】 な	たか	たけし
【富】 Xとみ	ひさ	普	Xひろ	たか	ゆき	ひろ	しげる	【武】 な	たか	たけし
部	【富】 Xとみ	ひさ	普	Xひろ	たか	ゆき	ひろ	【武】 な	たか	たけし
部	【富】 Xとみ	ひさ	普	Xひろ	たか	ゆき	ひろ	【武】 な	たか	たけし

封	諷	服	副	復	【福】 Xとみ	物	【文】 Xふみ	フン	フツ	フク
つむ	Xこと よむ	よ ゆき こと	はとり ます そへ	もち なほ あきら	と よし	たね	と あや ひさ	と あや ひさ	と あや ひさ	と あや ひさ
紛	【紋】	奮	【平】 Xひら	丙	【米】 Xと	秉	井	【柄】 Xかひ	竝	陸
な	あや	いさむ	よし とし さね	なり	Xよね こめ	とり	かつ	えだ	なみ	はし
炳	覓	碧	別	片	返	便	勉	偏	勸	偏
より	へキ	へツ	ヘン	ヘン	ヘン	ヘン	ヘン	ヘン	ヘン	ヘン
あきら	も	みどり	わけ	かた	のぶ	やす	かつ	つとむ	つとむ	つとむ
篇	編	辨	邊	戊	【甫】 Xまさ	莫	【保】 Xやす	蒲	補	鋪
あむ	かく	よし	なか	しげ	なみ	かみ	もり	な	しげ	さだ
まさ	つら	さだ	きし	しげ	もと	しげ	しげ	かま	すけ	しげ
【富】 Xとみ	ひさ	普	Xひろ	たか	ゆき	ひろ	しげる	まひ	つく	ひろ
部	【富】 Xとみ	ひさ	普	Xひろ	たか	ゆき	ひろ	しげる	まひ	つく
部	【富】 Xとみ	ひさ	普	Xひろ	たか	ゆき	ひろ	しげる	まひ	つく



慕		謨		【方】 ×かた		【卯】 ×う		【包】 ×かね		芒		牟		【芳】 ×よし		衍	
ホウ		×のり		×まさ		しげ		なさむ		すゝき		×もと		はな		×ゆき	
ふみ		なみ		つね		く		かつ		みち		やす		みち		やす	
【邦】		苞		【茂】 ×しげ		奉		放		抱		房		【保】 ×やす		勃	
×しげ		かぬ		もち		うけ		×ゆき		×ふさ		×もち		×ひら		×ひら	
すけ		もと		つとむ		な		はじめ		いへ		のり		のり		のり	
かね		あり		しげる		うく		あきら		のぶ		むね		より		ひろ	
くに		あり		し		うく		ゆく		とも		とも		より		ひろ	
割		【峯】		倣		旁		訪		【望】		捧		逢		傍	
×みね		こと		×みる		×あふ		×もち		×かた		×もり		×わたり		×わたり	
さだむ		より		たゞし		あひ		かた		より		みす		すけ		はあ	
たか		ひろし		しげ		つとむ		つとむ		つとむ		つとむ		つとむ		つとむ	
貌		飽		鋒		謀		襲		縫		懋		【豊】 ×とよ		北	
かた		あき		×ほこ		×のぶ		よし		あつ		あつ		あつ		あつ	
とほ		あきら		さき		こと		あつむ		ねひ		つとむ		つとむ		つとむ	
貌		貌		貌		貌		貌		貌		貌		貌		貌	
たけ		たけ		たけ		たけ		たけ		たけ		たけ		たけ		たけ	
け		け		け		け		け		け		け		け		け	

睦		墨		穆		【本】		【麻】		磨		邁		末		【万】	
ちか		むつ		むつ		な		あき		きよ		か		ひで		マ	
むつ		すみ		おつ		はじめ		な		なす		つね		とも		か	
【萬】		【満】		漫		味		密		【民】		【務】		夢		【名】	
みつ		みつ		みつ		ミ		ミツ		ミン		ム		つとむ		メイ	
か		みち		ひろ		ちか		しげし		ひと		かみ		ゆめ		かた	
たか		まる		みつ		あきら		【明】		妙		綿		面		【名】	
あきら		のり		のぶ		あき		よし		×たへ		×わたり		×つら		×つら	
よし		もり		あきら		てる		のり		たゞ		×つら		×つら		×つら	
より		なか		はる		あきら		とし		たふ		おも		おも		おも	
毛		孟		目		默		門		夜		役		約		躍	
×あつ		め		モク		モク		モク		ヤ		ヤク		なほ		なほ	
たけ		たけ		たけ		たけ		たけ		たけ		たけ		たけ		たけ	
け		け		け		け		け		け		け		け		け	

【右】 Xすけ	尤	【友】 Xまた	唯	【諭】 つぐ	愈	逾	俞	【八】 Xかす	趨
みぎ	もと	とも	ユウ	いさむ	ます			ヤツ	
う	もつ	すけ	た	さとり	まさ	わたる	みつ	やつ	とし
猶	道	【祐】 Xすけ	勇	宥	侑	【西】	【邑】 Xむら	【佑】	由
なほ	ます	さち	Xたけ	Xひろ	Xとり	くに	さと	すみ	あき
より	よし	むら	いさな	すけ	なが		すみ	とほ	これ
さね	ひろし	あぜ	いさむ	ゆき			たすく	もち	あきら
預	與	【優】 まさ	【融】 なが	【熊】 Xくま	逍	遊	猷	○裕	【雄】 Xた
Xやす	もと	ゆたか	あきら	みち	ゆき	のり	やす	やす	みち
とし	もろ	ひろし	とほ	かげ	なが	みち	ひる	かた	Xかつ
まさ	よし				かす				
【陽】 Xはる	【庸】 Xつね	【容】 Xかた	【洋】	【要】 とし	杳	幼	【用】 ヨウ	【譽】 Xたか	豫
ひ	のぶ	まさ	なさ	しのか	Xはる	みろ	Xちか	しげ	さき
きよ	もち	ひろ	やす	かなめ	ひさ	わか	もち	もと	Xやす

謠	燁	様	【養】 やす	暉	恹	通	遙	煒	崕	雍	揚	備	楊
	さま	のり	すけ	はる			Xのぶ	とほ		やす	あき		あき
うた	あきら	あや	きよ	あきら	たさむ	すむ	すみ	みち	あきら	あかし	あきら	ひとし	あきら
選	蘿	羅	【翼】 よし	翌	沃	抑	鷹	耀	罌	曜	邀	繇	繇
			ラ				ヨク						
のり	つた	つら	すけ	あきら	ぬる	あきら	あきら	かめ	あきら	あきら	とほ	より	より
變	爛	櫛	覽	蘭	【蘭】	落	絡	【賴】	賚	勅	來		
り			Xみ	Xみ	あや	ラン	Xつら	ラク			き	ライ	
す	おと	あや	やま	たい	か	たけ	おつ	なり	より	より	とき	きたる	
【律】 のり	【立】 リツ	【陸】 Xみち	離	鯉	【理】 Xまさ	惻	【里】	【利】 Xかす	吏				
なと	たつ	むつ	つら	こひ	たさむ	た	Xさ	Xとし	Xおさ				
たし	はる	くが	あきら		あや	さとし	のり	かす	さと				

【栗】		リヤク	くり
略		もと	のり
なむ		なむ	
リユウ		リユウ	
流		×はる	とも
【隆】		×たか	おき
溜		とき	なが
【龍】		×たつ	たかし
劉		きみ	たり
旅		×たび	とほる
閩		もろ	のぶ
盧		さ	のぶ
リヨウ		さ	のぶ
菱		あきら	
梁		×むね	ひし
凌		し	のぶ
【亮】		×すけ	あき
侶		とも	かす
凌		かね	かぬ
兩		まこと	な
【良】		×よし	み
【了】		さだむ	たか
さ		さね	すけ
つぎ		か	たか
な		か	たか
ふみ		な	み
【量】		すけ	たか
涼		すけ	たか
陵		な	たか
【綾】		×あき	あさ
勳		×むね	あや
寮		×とも	おさ
遼		あきら	のぶ
緑		×つな	ま
【林】		みどり	あき
リン		×き	とほ
【倫】		×とも	さとし
鄰		×ちか	さとし
輪		さとし	さとし
稟		うく	さとし
【令】		×よし	さとし
類		×とも	さとし
壘		×たか	さとし
累		×たか	さとし
釐		×よし	さとし
廩		×よし	さとし
【令】		×よし	さとし
怜		×よし	さとし

冷		きよ	
【玲】		あきら	
黎		たみ	
鈴		す	
厲		たけし	
嶺		みね	
隸		×とも	
【禮】		のり	
嶠		ゆき	
勵		ひろ	
【麗】		つとむ	
齡		つとむ	
靈		な	
レキ		よし	
歴		×つね	
列		つら	
烈		×つら	
【連】		×つら	
璉		×かど	
輦		ゆき	
聯		つら	
歛		×よし	
呂		ふえ	
【路】		みち	
盧		×あし	
【蘆】		よし	
露		つゆ	
鷺		さぎ	
老		×おひ	
牢		×たか	
【郎】		×あき	
勞		×もり	
樓		×たか	
【瀧】		×たき	
壟		×よし	
【鹿】		×よし	
【祿】		×よし	
【錄】		×よし	
論		×とき	
【和】		×かす	
隈		より	
蒼		より	
或		より	
獲		より	
【令】		×よし	
類		×とも	
壘		×たか	
累		×たか	
釐		×よし	
廩		×よし	
【令】		×よし	
怜		×よし	

昭和十五年三月二十五日初版印刷  
昭和十五年三月三十一日初版發行

定價壹圓

(送料六錢)

不許複製

編者 綠旗日本文化研究所

發行人 森田芳夫

印刷人 近澤茂

發行發賣所 綠旗聯盟

京府初音町二〇〇番地

振替京城一六〇〇二番

全鮮發賣元 三省堂出張所

京府府長谷川町

振替京城二八二八六番

一、内鮮一體論の基本理念

綠旗聯盟主幹 津田剛

二、大陸兵站基地論解説

京城帝國大學教授 鈴木武雄

三、學制改革と義務教育の問題  
志願兵制度の現状と將來への展望

朝鮮總督府學務課長 八木信雄  
志願兵訓練所教官 海田要

四、朝鮮思想界概観

綠旗日本文化研究所

五、現代朝鮮の生活とその改善

孫貞圭・趙圻烘  
任淑宰・津田節子

六、國史と朝鮮

綠旗日本文化研究所員 森田芳夫

申込殺到！ 賣切れぬ中に即刻御注文あれ！！

興亞聖戰下に於ける朝鮮の役割を明示せる一億日本國民必讀の書、アジアを照す光明臺である

210 + 10 + 表裏7枚 = 220表7



若草の萌ゆるが如く興亞の新生活は緑の旗に表徴される  
今や緑の生活運動は十億アジアの新生活原理として彗星の如く  
あらはる。

主幹津田剛氏以下半島思想界の巨星悉く集る

本誌の使命

- ★興亞日本に魂を與へんとする生活の深求
- ★東西文化を綜合止揚せんとする興亞精神の究明
- ★眞の内鮮一體に基づく新文化の建設
- ★明るく正しく強い國民生活の確立

昭和十五年度半島文壇最高の問題作 愈々發表

朝鮮文壇の最高峰 李光洙氏の心血を注げる一大力作

長篇  
小説

心相觸れてこそ

本誌三月號より連載

本小説によつて半島文壇は新展開を示さん！

月 興亞生活指導誌 —— 刊

# 緑旗

菊判 一冊三十錢  
（送料二錢）  
前金三圓六〇銭  
申込に限り

全鮮發賣元

三省堂京城出張所

發行・發賣

緑旗聯盟

京城初音町二〇〇六・京城振替一〇六二・京城振替二八二六

著 剛 田 津

著 剛 田 津 幹 主 盟 旗 緑

# 新 生 活 宣 言

新 刊

(錢六料送) 錢 十 九 價 定

## 内 容 目 次

- 第一章 新生活宣言
- 第二章 祈りと行と智慧の生活
- 第三章 新しき人格の完成
- 第四章 聖國家としての日本國體の意義
- 第五章 世界文化の轉換期と日本の役割
- 第六章 日本的秩序による世界再編成
- 第七章 緑の生活運動の役割とその全貌

アジアは如何に生くべきか？  
十億アジア待望の書遂に出づ！ 忽三版！

著者は躍進日本の苦悶の中より生れ出た新時代の思想家であり、將きた教化指導家として半島に輝く存在である。今やアジアの歴史的轉換期にあたり、多年の研鑽と經倫とを經とし、新たな思索を緯として興亞生活の指導原理とその實踐方式を宣言した。  
雄渾なる興亞の大思想、まさに前人未踏の野を行く。

攻撃か防禦か？ 前進か後退か？ 岐路に立つアジア大衆は本書によつて初めて前途の大光明と大安心を發見するであらう！

發行所 東京府初音町 緑旗聯盟 振替 東京 二〇〇六番 城番

概観 佛教史

緑旗日本文化研究所 定價一圓  
文學士 森田秋夫著 四六版二〇頁  
繁瑣な教學、固定せる教團に佛  
教の眞義を見失つた現代人は、  
本書によつて佛教精神の眞生命  
に觸れられよ！  
平易・明快・劃切なる指導書

京城府初音町二〇〇  
發賣行 綠旗聯盟  
振替京城一六〇〇二番  
京城長谷川町  
三省堂京城出張所  
振替京城二八二八六番

大乘精神講話

京城帝大助教授 佐藤泰舜述  
四六版一一四頁  
定價 五十錢

綠旗日本文化研究所編

改訂 誰にもわかる 氏の解説

四六版 五六頁  
定價 三十錢  
(送料三錢)

附録 氏の届出用紙つき

綠旗聯盟婦人部編 定價八十錢(送料六錢)

家庭食事讀本

主婦は必ず一本を！  
好評噴々  
賣切れ近し！

内容

どんな米がよいか―混食の仕方―献立の作り方―調理の仕方―食事の頂き方―子供の食事及びその躰―お辨當のつくり方―お八つの與へ方―時代にふさはしい家庭一品料理

元廣島文理科大学長 吉田賢龍述

八紘一宇の基礎と日本精神

四六版三十六頁 定價 十錢  
(送料三錢)

元廣島文理科大学長 吉田賢龍述

日本精神斗八紘一宇

四六版四十六頁 定價 十錢  
(送料三錢)

綠旗聯盟編

手帳型(送料三錢)  
定價 三十錢

日本國民訓

朝夕の拜誦に適し日本國民の生活指針、清新な修行の書として好適！

綠旗聯盟編  
昭和十五年度

生活豫定表

定價 三十錢(送料三錢)

見よ！ 全半島を震撼せる 新朝鮮の宣言書！  
潮の如き反響！ 増刷又増刷 十二版發賣

玄 永 燮 著

朝鮮人の進むべき道

頁六一二 版六四  
圓 一 價定  
(錢六料送)

次目客内

- 第一章 過去の朝鮮  
第二章 現代朝鮮人生活の批判  
第三章 民族主義、社會主義  
第四章 朝鮮人の進むべき道  
一、道義國家としての日本  
二、日本國民と天皇信仰  
三、日本の國家の世界的使命  
四、朝鮮人は如何にして完全なる皇國臣民となるか  
五、日本愛を如何に促進するか  
附録 眞の日本を知るまで(私の小さな體驗)

新換期に於ける半島思想界の新貌、民族主義、共產主義・アナキズム等朝鮮の思想的苦悶を乗越えて起される著者が心をこめて書いた血涙の文字、二千三百萬半島同胞を照らす炬火！  
全篇悉く著者の運き體驗とあくなき研究の結果



全國民よ！ 朝鮮認識の驚くべき低調を先づ克服せよ！  
朝鮮の現状を知らずして何の興亞ぞ！

朝鮮總督 南次郎閣下序

# 今日の朝鮮問題講座

全六冊箱入

綠旗聯盟發行

全國にまき起る絶讃の嵐！ 忽ち六版！

本書は朝鮮の有する各權威者を動員して、戦時下半島を指導しつつある政治、軍事、教育、生活、歴史の各部門に亘り朝鮮の實相とその進むべき道を明快縦横に解明せるもの

定價二圓十八錢(送料十二錢)  
四版全五〇頁

東京都豊島区目白一丁目五番一号

学 習 院 大 学

電話(03)九八六—〇二二二  
郵便番号 一七一

年 月 日

附告・訂正

戸主が内地人式氏を設定する爲に戸主及び家族が名の變更許可申請をする場合の手數料が今迄は一人につき五十錢でありましたが四月五日以後その人員がいくらあつても一戸につき五十錢と改められました（總督府令第九十號に依る）

既に戸主又は家族のものが名の變更申請をなした場合、更に同一家族中の他のものが名の變更申請をする場合は手数料は無料であります。この際名の變更許可 請用紙の適當の場所に次の如く記入して置くことです。

〔手数料ハ戸主……………(或ハ家族……………)ノ名變更許可申請ノ際ニ納付済〕

以上の爲に本書一四八頁九行目

「一人毎に五十錢の收入印紙」を「一戸毎に五十錢の收入印紙」と訂正  
同頁十一行目

「一人毎に申請書にそれぞれ収入印紙を貼り」を「一枚の収入印紙及び一人毎に申請書を記し」と訂正

氏及び名の届出・名の變更許可申請書式

氏の届出

する人 戸主(戸主が未成年者又は禁治産者の時は法定代理人)  
宛 名 本籍又は所在地の府尹、邑面長、所轄領事(海外) 郵送でもよし。  
枚 数 一通(本籍地外の所在地に届出る時は同じもの二通)  
料 金 不要。  
受理の時 別に通知なし。確めたくば、戸籍謄本をとつてみることに。  
期 間 昭和十五年八月十日迄  
注 意 御歴代天皇の御諱、御名、追號、皇族の宮號、王公族の稱呼、著名な神宮神社名、皇室に由緒深い家の氏、歴史上及び現代の功臣の氏は避けること。又他人の姓を自己の氏としないこと。  
今迄の姓のまゝなら、届けなくてよし。訓み方のみ變へるのも届けなくてよし。  
職業は出来るだけ具體的に書くこと。例へば自作農、理髮業、税務署員など。

その一 戸主が届出をする場合

氏 設定 届	
本 籍	慶尚南道東萊郡沙下面多里千四百番地
所 在	下關市西南部町三十六番地
戸 主	雜貨商 李 圭 徹
氏ヲ「甲野」ト定ム	光緒六年二月六日生
右氏ノ設定届出候也	
昭和十五年三月三日	
届出人	戸主 李 圭 徹
東萊郡沙下面長 韓 吳 東 殿	

その二 法定代理人が届出をする場合 (戸主が未成年者又は禁治産者)

氏 設定 届	
本 籍	京城府旭町一丁目三番地
所 在	京畿道高陽郡崇仁面牛耳里百五番地
戸 主	小作農 金 鳳 和
氏ヲ「竹山」ト定ム	大正十年六月一日生
右氏ノ設定届出候也	
昭和十五年四月五日	
本 籍	京城府旭町一丁目三番地
所 在	京畿道高陽郡崇仁面牛耳里百五番地
届出人	法定代理人母 李 貞 淑
京城府尹 高 橋 敏 殿	光武二年一月二十日生

名の變更許可申請

する人 何人でもよし。内地人式氏を定める爲、名の訓和せぬ場合  
(未成年者で意思能力を有せざるもの(満十四歳に  
ならぬもの)又は禁治産者の場合は法定代理人)  
宛 名 本籍又は所在地の地方法院又は支廳、朝鮮以外に居住の者は必ず本籍地の地方法院又は支廳。郵送でもよし。  
枚 数 一人につき正副二通(副本には申請人姓名の下及び訂正抹消などあるも印をおさず、収入印紙、戸籍謄本不要)  
添へるもの 戸籍謄本(或は抄本)五十銭収入印紙(消印せぬこと)を貼し、十四銭の郵便切手(裁判所所在地では十銭の郵便切手、又は執達吏送達票)を送達料として添へる。出頭して許可を得る場合は、送達料は不要。  
の料金 戸籍謄本(或は抄本)五十銭収入印紙(消印せぬこと)を貼し、十四銭の郵便切手(裁判所所在地では十銭の郵便切手、又は執達吏送達票)を送達料として添へる。出頭して許可を得る場合は、送達料は不要。  
同一戸籍の者が同時に申請する時 「戸籍謄本(又は抄本)一通」の下に「  
シアルニッキ之ヲ採用ス」と書くこと。  
その場合、送達書留料は、まとめて十四銭の切手一枚(人数の多い時には四銭又は八銭追加)にする。

許可の時 副本に「許可」と附されて返送される。その謄本を添へ、許可を得てから十日以内に名變更届を本籍又は所在地の府尹、邑面長、所轄領事(海外)に出すこと。

注 意 天皇の御名は避けること。  
内地人式名でないと思はれる時は許可されない。  
訓み方のみ變へるのは申請を要しない。  
氏をすでに定めたる方は、申請の理由に、「内地人式氏ヲ定メタル所」と記し、名の變更を先にする方は、「内地人式氏ヲ定メタル所」と記す。

名の變更許可申請書式

その一 戸主又はその家族(満十四歳以上)が名の變更許可を申請する場合

五 拾 銭 収入印紙 消印せぬこと	名變更許可申請
本 籍	慶尚南道東萊郡沙下面多里四番地
住所	京城府玉仁町二十八番地
申請人	布木商 金 在 勳
申請ノ趣旨	
申請人ハ其ノ名「在勳」ヲ「勳」ト變更致度ニ付之ガ許可ヲ求ム	
申請ノ理由	
戸主ハ大岡ナル内地人式氏ヲ定メタル所(定メタキ所)申請人ノ氏名大岡在勳ニテハ氏名訓和セザルヲ以テ其ノ名「在勳」ヲ内地人式ニ「勳」ト變更致度本申請ニ及ビタリ	
添 附 書 類	
一、戸籍謄本(抄本)一通	
昭和十五年七月十日	
右申請人 金 在 勳	
京城地方法院 御 中	

昭和十五年五月三日 印刷 定価五銭  
昭和十五年三月四日 發行  
發行所 京城府旭町二番地 京城府尹 高橋 敏 殿  
發行所 京城府本廳二丁目三番地 京城府尹 高橋 敏 殿  
發行所 京城府大塚 京城府尹 高橋 敏 殿  
發行所 京城府本廳一丁目二番地 京城府尹 高橋 敏 殿  
發行所 京城府本廳一丁目二番地 京城府尹 高橋 敏 殿

請書式

名の變更許可申請

する人 何人でもよし。内地人式氏を定める爲、名の調和せぬ場合

(未成年者で意思能力を有せざるもの(満十四歳に  
ならぬもの)又は禁治産者の場合は法定代理人)

宛 名 本籍又は所在地の地方法院又は支廳、朝鮮以外に居住の者は必ず本籍  
地の地方法院又は支廳。郵送でもよし。

枚 数 一人につき正副二通(副本には申請人姓名の下及び訂正抹消などあるも  
印をおさず、収入印紙、戸籍謄本不要)

添へるもの料金 戸籍謄本(或は抄本)五十銭収入印紙(消印せぬこと)を貼り、十四銭の  
郵便切手(裁判所所在地では十銭の郵便切手、又は執達吏送達票)を送  
達料として添へる。出頭して許可を得る場合は、送達料は不要。

同一戸籍の者が同時に申請する時 一人毎に申請をするも、同封でよし。その内一通だけ戸籍謄本(抄本な  
らば銘々の名の入つたもの)をつける。その場合他の者の申請書には、  
「戸籍謄本(又は抄本)一通の下に」ノ名變更許可申請ニ添附  
シアルニツキ之ヲ採用ス」と書くこと。

許可の時 副本に「許可ス」と附されて返送される。その謄本を添へ、許可を得て  
から十日以内に名變更届を本籍又は所在地の府尹、邑面長、所轄領事  
(海外)に出すこと。

注意 天皇の御名は避けること。  
内地人式名でないと思はれる時は許可されない。  
訓み方のみ變へるのは申請を要しない。  
氏をすでに定めたる方は、申請の理由に、「内地人式氏ヲ定メタル所」と  
記し、名の變更を先にする方は、「内地人式氏ヲ定メタキ所」と記す。

名の變更許可申請書式

その一 戸主又はその家族(満十四歳以上)のものが名の變更許可を申請する場合

五十銭 収入印紙 消印せぬこと	名變更許可申請 本籍 慶尚南道東萊郡沙下面多里四番地 住所 京城府玉仁町二十八番地 申請人 布木商 金 在 勳 明治三十年二月三日生
申請ノ趣旨 申請人ハ其ノ名「在勳」ト變更致度ニ付之ガ許可ヲ求ム	
申請ノ理由 戸主ハ大岡ナル内地人式氏ヲ定メタル所(定メタキ所)申請人ノ氏名大岡在 勳ニテハ氏名調和セザルヲ以テ其ノ名「在勳」ト内地人式ニ「勳」ト變更致度 本申請ニ及ビタリ	
添附書類 一、戸籍謄本(抄本)一通	
昭和十五年七月十日	
京城地方法院 御中	右申請人 金 在 勳

昭和十五年三月三日 印刷  
昭和十五年三月四日 發行 定價五銭

不許  
留置

發行所 京城府警署町二番地  
發行所 京城府本廳二丁目三番地  
電話 本局一八四番  
振替 東京一六〇二番

その二 法定代理人が名の變更許可を申請する場合

(未成年者にして意思能力を有せざるもの(満十四歳に  
ならぬもの)又は禁治産者の場合)  
事件本人は名を變更する當人であり、申請人はその法定代理人となる。

五十銭 収入印紙 消印せぬこと	名變更許可申請 本籍 慶尚南道東萊郡沙下面多里四番地 住所 京城府玉仁町二十八番地 申請人 布木商 金 在 勳 明治三十年二月三日生
本籍 右ニ同ジ 住所 右ニ同ジ	
事件本人 小學校生徒 金 鍾 龍 昭和十五年五月一日生	
申請ノ趣旨 申請人ハ事件本人ノ名「鍾龍」ヲ「龍夫」ト變更致度ニ付之ガ許可ヲ求ム	
申請ノ理由 戸主ハ大岡ナル内地人式氏ヲ定メタル所(定メタキ所)事件本人ノ氏名 大岡鍾龍ニテハ氏名調和セザルヲ以テ其ノ名「鍾龍」ト内地人式ニ「龍夫」ト 變更致度本申請ニ及ビタリ	
添附書類 一、戸籍謄本(抄本)一通(金在勳ノ名變更許可申請ニ添附シアルニ付之ヲ採 用ス)	
昭和十五年七月十日	
京城地方法院 御中	右申請人 法定代理人 父 金 在 勳

名の變更届

する人 裁判所て名の變更許可を得た者。名の變更許可申請を法定代理人がし  
た場合、届出人は法定代理人となる。

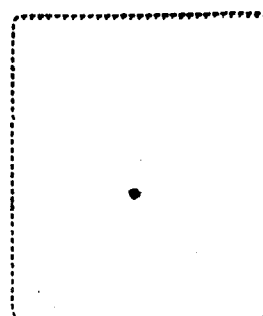
宛 名 氏の出と同一。  
枚 数 一人につき一通(本籍地外に届出る時は同じもの二通)  
添へるもの 名變更許可の裁判の謄本。  
料 金 不要。  
同一戸籍の者が同時に届出る時 一人毎に届を出す。同封でもよし。  
受理の時 別に通知なし、確めたくば戸籍謄本をとつてみることに。  
期 間 名の變更許可されてから十日以内にすること。  
注 意 届出人の下には、必ず新しい名で書くこと。その印は、以前の印の  
まゝでよろしい。

名の變更届

名變更届 本籍 慶尚南道東萊郡沙下面多里四番地 戸主 所在 京城府玉仁町二十八番地 金 在 勳 昭和十五年七月十日京城地方法院ノ許可決定ニ依リ其ノ名「在勳」ト 變更 右名ノ變更別紙裁判ノ謄本相添へ届出候也 昭和十五年七月十三日	届出人 金 勳 明治三十年二月三日生
東萊郡沙下面長 韓 吳 東 殿	

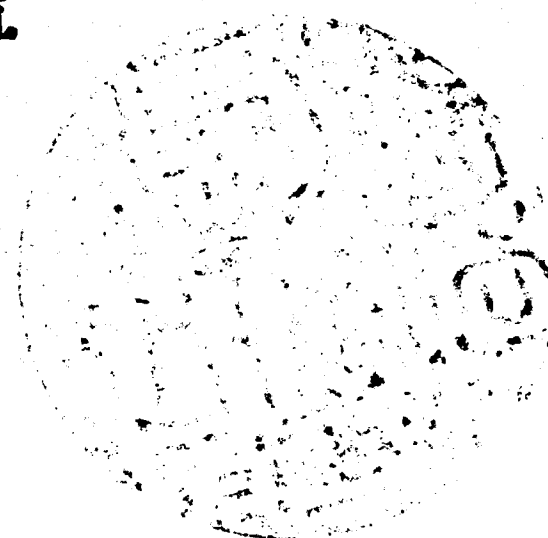


き が は 便 郵



緑  
旗  
聯  
盟  
行

京 城 府 初 音 町 二 〇 〇



本書に對する讀後感

名 氏	所 住

先 郵  
拂 税

き が は 便 郵

京 城 府 初 音 町 二 〇 〇

緑 旗 聯 盟

行



入會申込書

緑旗聯盟の趣旨に賛成し會員として参加いたします

昭和 年 月 日

現住所		
氏名		
<small>(振假名を附すること)</small>	年 月 日生	
勤先又は職業	◇會員の種別は次の如くなつて居ります (不要の分を消すこと) 特別會員 月額一圓以上、緑旗その他聯盟よりの發行物の配布をうけます 正會員 月額五十錢 緑旗の配布をうけます 通常會員 月額三十錢 右に同じ 讀者 緑旗(年額三圓六十錢)一年以上の繼續者	
所屬	成人・婦人・學生	
<small>(不要の分を消すこと)</small>	會費負擔額	也
會費拂込方法	年一回に拂込 年四回に分納 年十二回に分納 <small>(不要の分を消すこと)</small>	直接拂込 振替貯金 集金郵便 <small>(但一回の送金は三圓未満は集金せず)</small>



(切)

取

紙

戸主が提出する場合は

氏 設 定 届

本 籍

所 在

職 業

戸 主

年 月 日 生

氏ナ「」ト定ム

右氏ノ設定届出候也

昭和十五年 月 日

届出人 戸主

殿

名 變 更 届

本 籍

所 在

姓 名

昭和十五年 月 日

ノ許可決定ニヨリソノ名

「ヲ」

「ト變更

右名ノ變更別紙裁判ノ謄本相添へ届出候也

昭和十五年 月 日

届 出 人

年 月 日生

殿

(切)

取

線

未成年者が氏の出をすることを (戸主が未成年者は親族等)

氏 設 定 届

本籍

所在

職業

年 月 日生

氏ヲ「」ト定ム

右氏ノ設定届出候也

昭和十五年 月

本籍

所在

届出人 法定代理人

年 月 日生

殿

名變更許可申請

五十圓  
收入印紙  
消印せぬこと

申請人

噴  
漿

年 月 日 生

本  
籍

住所

事件本人

陳

年 月 日生

申請、趣旨

申請人ハ事件本人ノ名「  
」ヲ「

「下變更致度二付之ガ許可ヲ求ム

申請理由

戸主ハ「ナル内地人式氏ヲ  
氏名調和セザルヲ以テ 其ノ名」  
及ビタリ

所 事件本人ノ氏名

ニテハ

「チ内地人式ニ」

「卜變更致度本申請二

添附書類

一、戶籍 一通

昭和十五年 月 日

右申請人 法定代理人

御  
中



名變更許可申請

五十歳 本籍  
収入印紙  
消印せぬこと  
住所

申請人

年 月 日生

申請ノ趣旨

申請人ハ其ノ名「チ」 「ト變更致度ニ付之ガ許可ヲ求ム

申請ノ理由

戸主ハ「チ」 「チ」内 所 申請人ノ氏名「チ」

ニテハ氏名調和セザルヲ以テ 其ノ名「チ」 「チ」内 所 申請人ノ氏名「チ」  
更致度本申請ニ及ビタリ

添 附 書 類

一、戸籍 一通

昭和十五年 月 日

右申請人

御 中

6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7

TRAUMA JAPAN

¥ 1.0 0

版 盟 聯 旗 綠

288-8

資料  
昭和38年5月

朝鮮の姓字をめぐる諸問題について

山田利明 著

朝鮮の姓字をめぐる諸問題について

目 次

は し が き	(1)
一、朝鮮の姓の数	(4)
1. 在日朝鮮人の姓の数	(16)
2. 漢字	(22)
3. 日本の国字(俗字)	(25)
二、朝鮮の国字(新制漢字)	(27)
三、朝鮮語辞典(文世栄著)中の姓の数	(30)
1. 姓字についての言い伝え	(36)
2. 世帯数の最も少ない姓	(38)
3. 姓字読み書きにあたって注意すべき点	(40)
四、略字及び俗字	(42)
1. 書き誤まり易い文字	(43)
五、朝鮮の命名法	(44)
1. 名前のつけ方	(46)
2. 特殊な名のつけ方	(51)
3. 親等による名の区別	(54)



4. 名に使われ易い文字	(59)
六、日本式姓名(日本名)について	(64)
1. 創氏改名	(65)
2. 制令第20号及び関係法規	(70)
3. 創氏記念名刺交換会名簿	(75)
4. 創氏改名上での大分類	(77)
5. 在米の姓名に執着をもつてされた傾向のもの	(77)
6. 日本での著名な人士の氏名を引用した傾向のもの	(92)
7. 日本人妻の里方の姓を用いるもの	(93)
七、本質について	(94)
1. 本質は「その姓の始祖発祥地名を表示」するもの	(95)
2. 朝鮮の名門	(101)
3. 姓の由来	(110)
4. 同本同姓の一家	(114)
5. 親族・結婚・養子	(119)
6. 本質別姓氏一覧表	(125)

む す び	(225)
附 表	(227)
1. 新戚系譜表	(227)
2. 朝鮮姓字 <small>日 本 語 音 一 覧 表</small> <small>コ ー ン 字 音</small> <small>朝 鮮 語 音</small>	(228)
3. 日・朝年次対照表	(234)

族譜〔寧越辛氏〕

辛氏即中國隴山姒姓之後夏啓之支子也封于莘其後  
子孫去草為辛史記云姒姓之後分封用國為姓故有辛  
氏焉

### 族譜序

夫木生乎根而枝柯有疎密之分水出乎源而支派有遠  
近之殊倘非類族以辨之則何以知某根為某木之本某  
願。水之始也今夫人之有族亦猶木之有枝柯水之  
有支。以合之則疎者愈疎而無以知同根之  
情遠者愈遠而。辨其源之義矣此所以譜錄之不可  
不作也惟我辛氏系出寧越府院君諱蘊之後蔚然為東  
國右族名宦清暇代不乏人而七代祖錦濱公不幸早世  
進士先祖年未弱冠仍從氏了湖公佩魚濱州之時陪

地				
寧越辛氏	世譜卷之			
始祖	二世	三世	四世	五世
辛鏡	子雲敏	子永繼	子夢森	子覺答 見下板
一本諱河鏡	字官履	字官修	字封靈	
字號嚴	文閣大提學	文殿大提學	元齊院君墓	
谷高麗仁宗	修文殿學士	墓配失傳	慶州杞溪里	
戊午登第官	左贊成墓溫		配失傳	
金紫光祿大	川一云溫州	子千繼		
夫太傅門下	配失傳	子懸繼		
侍中平章事		子周繼		
諡貞或云		正衛上將軍		
延議非是墓				
開城府西花				
潭里				
配失傳				
鏡	雲敏			
永繼	夢森	六世	七世	八世
				九世

行列定式

三十一世、三十二世、三十三世、三十四世、

○善 承○ ○根 ○燮

三十五世、三十六世、三十七世、三十八世、

兢○ ○鉉 ○求 秀○

三十九世、四十世、四十一世、四十二世

○烈 志○ ○鎮 育○

四十三世、四十四世、四十五世

○來 尚○ ○載

朝鮮の姓字をめぐる諸問題について

は し が き

およそ父系社会では、いずこの民族たるを問わず、その「姓氏」に関してはこの外、大切に扱い、非常な執着心をもつて処しているようである。

忠臣蔵の義士外伝で馴染み深い中山安兵衛武庸が、高田馬場での仇討が縁で、安兵衛は浅野家留守居役、堀部弥兵衛金丸方へ婿入りした。ところが安兵衛は、幼時に自分が養子にはいつた中山の「氏」を興したい一念のあまり、堀部家から一日も早く愛想をつかされ、離縁されようとの下心から、婿入りしたその日から明けても暮れ<sup>はれ</sup>ても、酒を飲んで飲んで飲み尽していたという苦心<sup>はれ</sup>がある。

もとより安兵衛という浪人は、酒が大好物であつたといふことにされているが、その斗酒流連の底には、「氏」を大切に持続したいという精神が強く影響していたものではなかつたかと思う。

また封建李氏朝鮮時代の小説として最も有名な「春香伝」は、その最初の場面で、南原奇使の子、李夢竜が、



広寒樓で春香のブランコ（鞦韆）のりの姿を見て、恍惚とするところがある。その時、李夢竜が最初に春香に言った言葉は、

「先賢も同じ姓のもの、相聚るべからずと申した。あなたの姓は何にして、としはいかほど？」

といい、春香がこれに対して、

「姓は成といい、齡はノゝでございます。」

と答えると、李夢竜は満面笑をたたえて、

「それは嬉しき言葉……」

と言って、それから情緒綿々たるラブシーンが画がかれている場面がある。

この時の李夢竜と成春香との言葉のやりとりの裏には、古来朝鮮では「同姓同本不婚」の原則が慣習化されていたために、（現在は反対論者もかなりあるようだ）李夢竜は自己の恋愛の相手方たらんとした、春香の「姓」をまず、たずねたしかめていたものであった。

朝鮮の「姓氏」はその血統を表わすものであつて、日本の門地あるいは家を表わすところの「氏」とは、根本的にその性質を異にしているものであるが、春香との結

婚を前提にした李夢竜の心の中には、前で述べた安兵衛と同じく、やはり「姓氏」を大切に扱うという意図が強く働いていたものではないかと思われる。そしてこういう伝統と観念は、今日の日本人には想像もつかないほど、強固な一面を維持しているということは、間違いない事実であろうと思う。

私はときたま周囲の人々から、

(1) 朝鮮人の姓は日本人のもの比べて、たいへん少ないようだが、どれくらいあるのか。

(2) 朝鮮には漢字と違った字があるようだが、あれはどんな性格のものか。

(3) 朝鮮人の中には、日本人風の名で通っている者がたくさんいるが、これには一定の基準でもあつてつけられたのか。

(4) 朝鮮人には「本貫」というものがあるそうだが、その本貫とは何か。

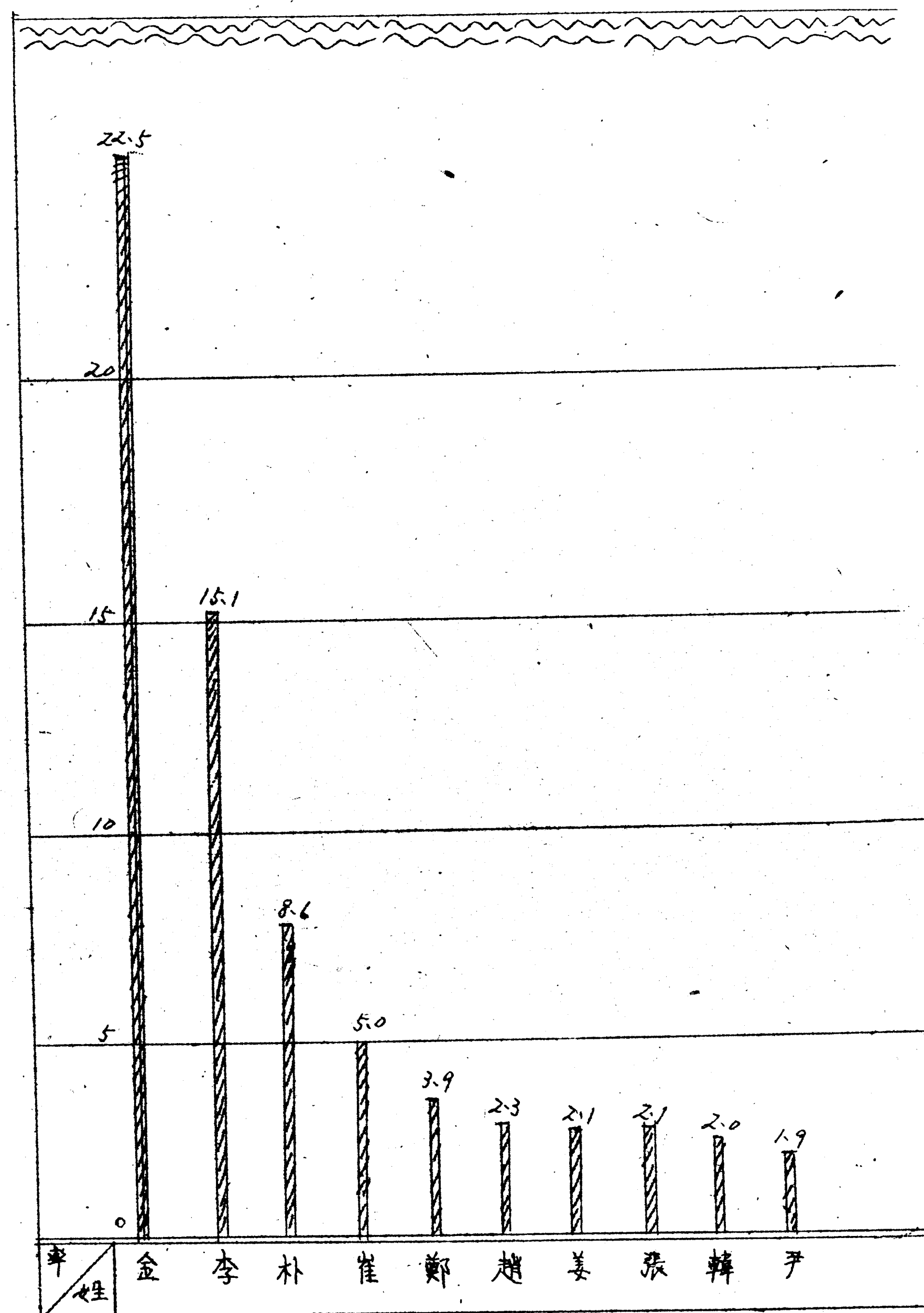
などということを聞かれることがある。

このような質問を中心にして、私は、私の日常の仕事を通じて、目に触れ聞いた事をもとに、私なりの考え方を、

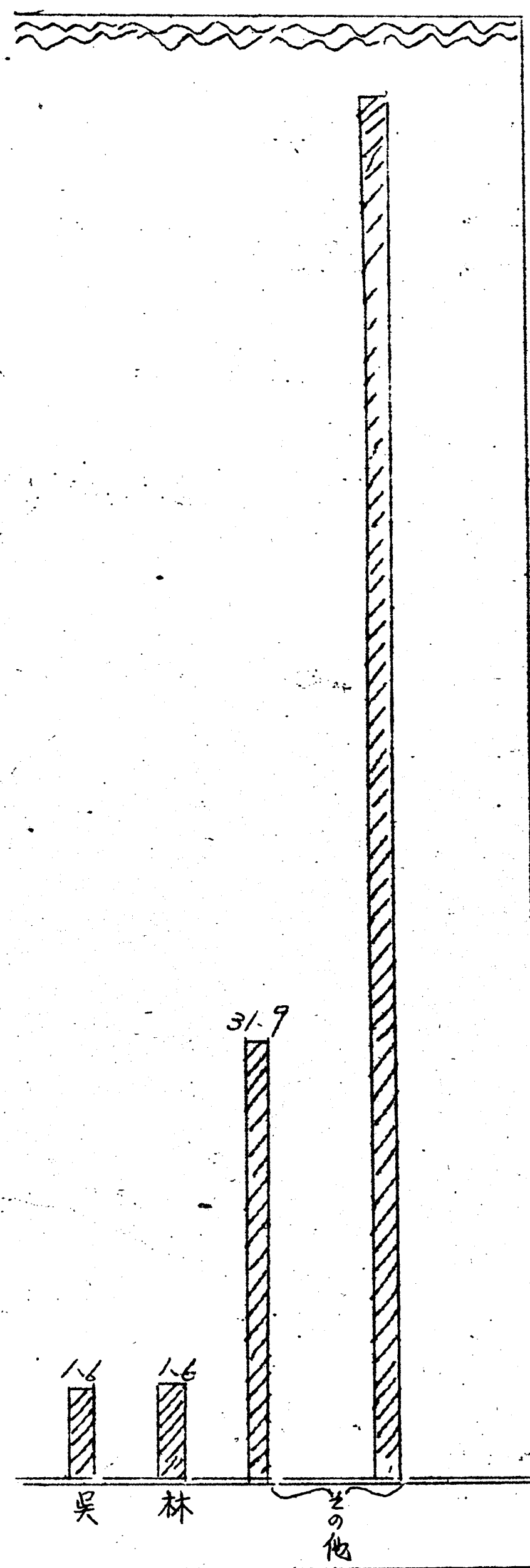


姓	世	帶	姓	世	帶	姓	世	帶
吳	60.995	梁	33.388	訂	14.077	蔡	10.856	
林	60.140	孫	31.540	郭	14.054	玄	10.614	
申	56.080	劉	27.354	衡	13.937	陳	10.442	
その他	163.252							

(6)



(7)



(8)

ところで、警察庁外事課におられる篠崎平治氏が、警備第二課在勤当時（昭和29年）に、在日朝鮮人の姓の数を外国人登録上から調査統計されたところによると、その総数は874姓にも、のぼっていたといわれる。

250と874。その差は実に600有余になる訳である。いかに日本という特殊条件下にあつたにしても、これは、ちよつとヒド過ぎるのではなからうか、の

ではなぜいつたい、こんなにも大きな差が生じたのであろうかという、その原因を考えてみたいと思う。

思うにこれは、昭和22年5月の第1回外国人登録令施行当時に、終戦による日本国朝野の、志気虚脱状態にあつたことからして、望み得べきことではなかったかも知れないが、もしその当時、外国人登録受付窓口氏に、朝鮮の姓について、若干の知識をもつ人がいたら、今日篠崎氏が指摘されたような、膨大な数には達していなかつたのではなからうかと。

尤も多数の中から特定の者を探し出そうとし、そのために区分する場合には、姓の数がたくさんあり、細かく分かれているほど、探す側からの立場ですれば、これは

(9)



容易になる誤であるが、その目的のための細分化と姓字の混乱化とは、まったく性質を異にするものであるから、別に論じるべきであろうと思う。

前に記した森田氏が、篠崎氏調査になる874姓字と、国勢調査時の之の種及び「増補文献備考」(1908年李火王命撰之の巻)にある496姓との姓字について対照比較されたことがあった。その時の結果によると、両者の符合するものは327姓字だけで、その残りは、まったくいいかげんな文字の姓であり、その例として、

案。培。麦。番。美。尾。某。僕。亦。不。外。枝。

合。紅。谷。眠。目。夢。樓。川。平。早。辻。渡。

斗。前。牛。

などのものを挙示されていた。

この之の字の例を一見しただけでも、至極容易に、その過誤のもとになったのではないかと、推察されるものが、いくつか目につくものである。

その第一に、同音異字から生じた相違性。すなわち、無傾着性、文字不証、字義理解の不足などと相まって、

案(안)は安から

培(배)は裴。裴から

番(반)は潘。甚しきは。方。邦。房などから

美(미)。尾(미)は米。米から

某(모)は毛から

目(목) 僕(복)は睦から

枝(지)は池。智から

合(합)は咸(함)などから

紅(홍)は洪から

谷(곡)は郭(곽)などから

牛(우)は水から

早(조)は曹。趙から

渡(도)は陶。都から

斗(두)は杜から

などのように同音から、あるいは疑似音から生じた、異姓字でないかと思われるものが、引き合いに出されてくるものである。

も前であげた例の中にも、亦。桜。夢。不。辻。な  
どのように、まったくオンの合致していないものもある  
が、これらとて恐らく、不。は丕姓の誤字であろうと思  
われ、扈姓を扈と書くような式で、大同小異の無頓着性  
から発していたものではなかろうかと思う。

ことに後で述べるように、前掲の辻という字は、日本  
の国字（俗字）であるから、朝鮮人が姓字に用いるとい  
うことは、まったく奇異なことと、言わざるを得ないも  
のである。

第之に、文字の誤記上から生じたものと、みられるも  
のがある。前であげた不という字もそうだが、卑近な例  
をとりあげてみても、現在行先不明者として手配になっ  
ている者の姓のうち、変ったものを取り出すと、

曹一曹。裴一裴。春。飯。皮。品。棒。美。陽。秀。  
臼。由。甲。

などのようなものがある。

曹 — 曹。は朝鮮では両方使われ、曹は後に述べるよ  
うに朝鮮の国字であって、姓字の場合だけに用いられる  
ことになっている。裴 — 裴。は共に同じ「ながきこるも」

という字義をもち、姓字に用いられるということは、周  
知のところであるが、しかし現実問題として、この「曹」  
の字からは「曹」、<sup>35</sup>「裴」の字からは「裴」「裴」など  
という式のものまでが、飛び出している始末である。な  
お、「増補文献備考」では「曹」の字を用いている。

この「曹」、「曹」ならびに「裴」、「裴」の姓字に  
ついては一説によると次のようなことが言われている。

すなわち「曹」という字のものは、「本貫」を昌寧、  
綾城、南平、玉州、長興、安東、清道、丹城、嘉興、昌  
平、開城などに有しているとし、「曹」の字のものの「  
本貫」は、堅陽、蔚山、東萊、平山等にあるという。

また「裴」の字のものは、その「本貫」を慶州、金海、  
星州、大丘、興海、俠溪、昆陽、京山、和順、開城、  
慶州、礪興等に有していて、「裴」としたのは「裴」の  
字では頭が軽る過ぎる（口が軽いこと）おそれがあるか  
ら、ナベ蓋「上」（けいさん冠り）をのせたのだとい  
う。（増補文献備考では「裴」の字を用いている）

これらはちようどわが国でも、「<sup>35</sup>吉」という字を「吉」  
と上の字を「士」に書いたものと、「土」に書いたもの

があり「吉田」と書くものは「士分」（士族）の出で、「吉田」と書くのは「平民」（百姓）の出であるのだなどというのと似ていて、一理はあろうが根拠薄弱なコジツケ的のものであろうとみられる。なぜかと言えば、それは「吉」という字を例にとってみても、「吉」は本字で「吉」は俗字であり、共に同じ字義を有しているというところからしても、知られるものである。

春。飯。皮。品。棒。美。陽。秀。などは、第一点で述べた同音異字から派生したであろうと考えられ、甲。由は、前に記したような事情からして、田という字の中心のボウが上または下にノビ過ぎてしまったところから、田は立から書き誤まれたことであろうと、思われる。

人間が音声によって、相手方に自分の意志を伝える場合には、文字綴字上での点のあるなしや、ボウの長短にかかわらず、容易にこれを伝達できても、しかしこれを文字（漢字）に書けば、漢字がもつ特有性（表意性）からして、点のあるなし、ボウの伸び縮みによって、その意味が全然違ってしまうこともあるから、厄介至極で油断も隙もないものである。

よくこんな場合の説明にとりあげられる語に、ゆうりようどうろという語がある。言葉として、ゆうりようどうろと言えは、何人もこれを二様の意義に聞きとることであろう。しかし、ひとたびこれを「優良道路」・「有料道路」という風に文字に書けば、その意図したところの意義はおのずから判然とするに至るであろう。そしてまた、こんなところから漢字は感<sup>じ</sup>の<sup>り</sup>なんて、へんてこなシャレまで飛び出してくるのではなかろうか。

少しく前のことだが、こんな事例があったそうだが、それは、ある警察署でのことであるが、入念な捜査の後、「蔡」という姓をも<sup>つ</sup>者に対し、逮捕状を請求したことから始まったのであった。ところがたまたま、その姓の文字が「蔡」と、右肩上に点一つがよけいに書かれてあったのだった。

すると、さすが裁判官とも言われる人は、余程漢字にもツヨイものとみえて、令状請求に赴いた刑事さんに、

この字「蔡」はなんと読むんですか？

と、問われたところから刑事さんは即座に、

それ「蔡」はサイと読みます。

と、答えると、判事さんは続けて、

「サイ」という字は「蔡」と書き、点一つがおお過ぎるの  
ではないですか。

と、さらにたたみ込んで尋ねられ、これに対して刑事さ  
んは、

それは「サイ」という字は、点一つが正しいのです。しか  
し、その時の筆の勢いで、点一つが多くなり「蔡」と  
書かれることが多々あります。

からということを強調した揚句、ついに令状を出して貰  
ったという話である。

かようなことは、その最も極端な事例であろうけれど  
も、文字表記においては、それ相当の注意がいるという  
ことを示唆したものでないかと考える。

#### 1. 在日朝鮮人の姓の数

次に前に記した森田氏が、昭和34年4月現在での  
「外国人登録調査票」(外国人登録写票をもとに統計  
調査を行なった際のもの)に基いて調べられた、在日  
朝鮮人の姓の数についての統計表を借用して掲げてみ  
ることとする。

姓	人	員	姓	人	員	姓	人	員	姓	人	員
総数	607,533		姜	607,533		林	18,658		梁	7,618	
金	128,178		趙	128,178		韓	11,486		文	7,481	
李	77,575		尹	77,575		黃	10,951		権	7,243	
朴	46,626		張	46,626		宋	10,839		申	7,068	
鄭	25,861		吳	25,861		安	9,647		孫	6,647	
崔	21,872		徐	21,872		高	9,277		表	5,940	
全	5,320		洪	5,320		成	4,669		丁	2,310	
柳	5,003		河	5,003		具	4,318		劉	2,151	
康	4,949		南	4,949		郭	3,103		田	2,054	
白	4,936		玄	4,936		沈	3,092		車	2,048	
曹	4,743		許	4,743		盧	2,719		昧式姓	2,278	
その他	60,274										



日本式姓

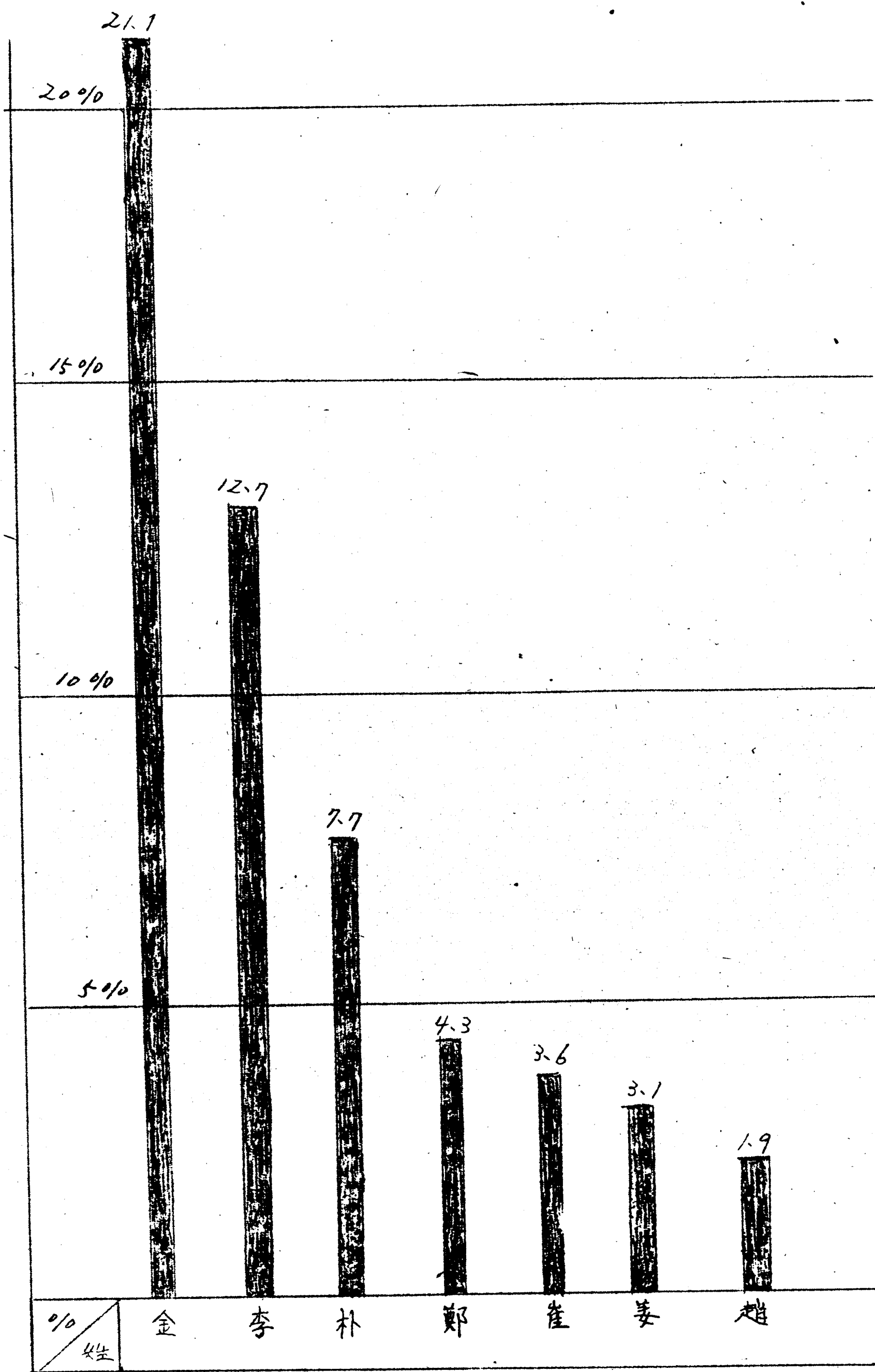
姓	人	員	姓	人	員	姓	人	員	姓	人	員
松数	22,789		金本	809		金山	673		金山	559	
新井	426		安田	269		松本	215		山田	172	
山本	419		岩本	258		金海	192		金井	168	
金城	319		金沢	241		金光	185		大山	167	
木村	310		金子	236		金村	183		平山	165	
中村	162		田本	150		田中	134		その他	12,377	

(18)

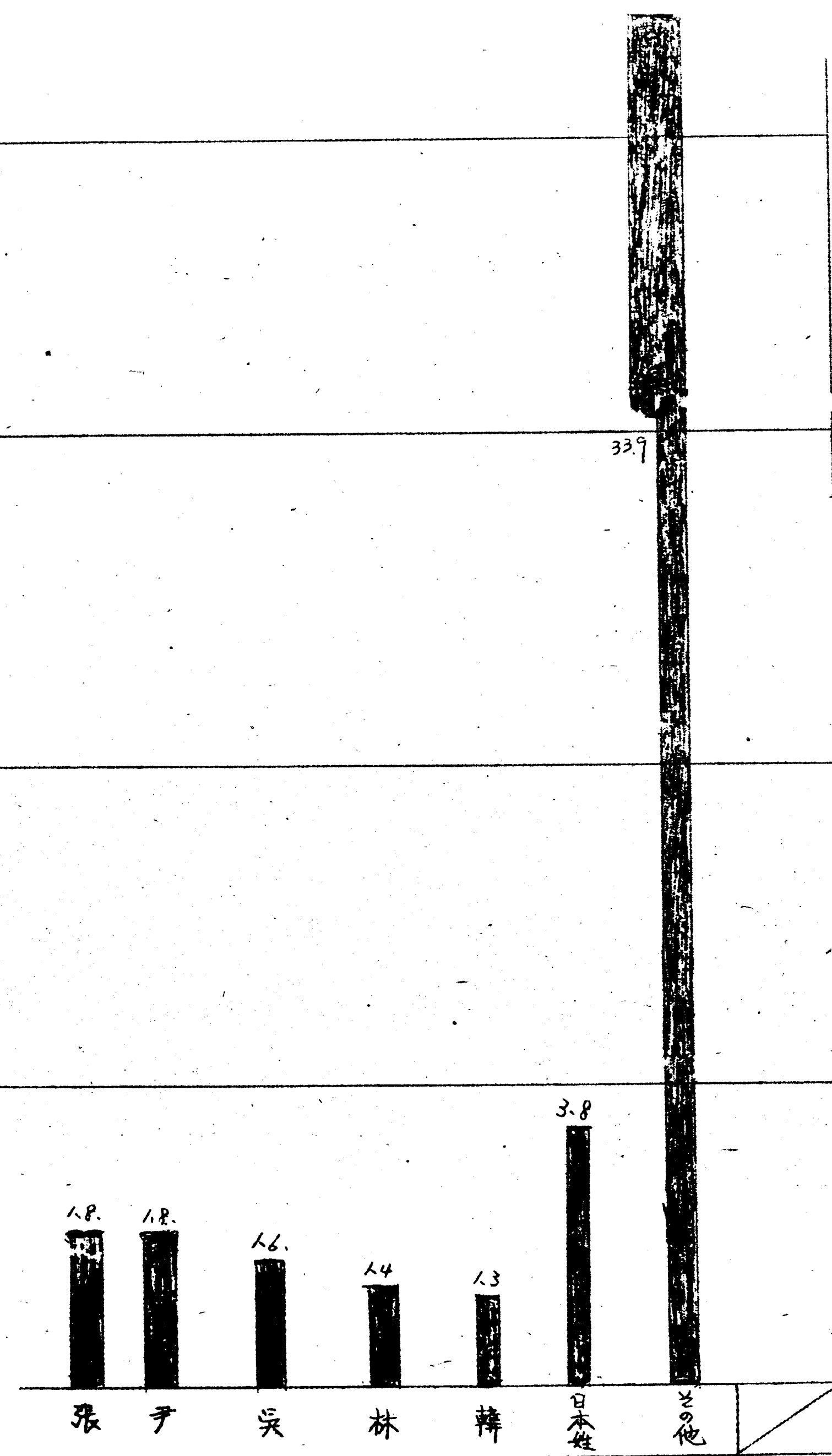
朝鮮人中登録証明書の氏名欄に「通称名」を併記しているもの

通称名	人	員	通称名	人	員	通称名	人	員
松	607,533		ないもの	406,484		日本名	196,675	
日本名	280		朝鮮名	51		日本名	193	
二つ以上			二つ以上			朝鮮名		

(19)



(20)



(21)

右の表等でみられるように、いわゆる朝鮮の5大姓(金・李・朴・崔・鄭)では、鄭と崔が入れ替っているだけで、在日朝鮮人の姓の数の比率も全朝鮮のそれと、だいたい正比例しているということが知られる。

## 2. 漢字

「医者と石屋は漢字で書け」などという言葉があるように漢字にはその作り方、読み方においてコジツケと言われるかも知れないが、外国語にみられない変わった味があるようである。

漢字については今日、その本家本元である中国においてさえも、常用漢字制定・略字体の採用など、すこぶる意欲的に推進されている時代に、漢字書法上で、点のあるなしや、ボウの長短などを問題視するということは、時代錯誤もはなはだしいとする向きもあるであろう。しかし、おお方の読者たちも既に指摘しているとおり、今日漢字は完全に日本人の生活の中にとけ込んでいて、これを無理に一朝一夕の間に取り払おうとすれば、そこには必然的に言語生活での社会混乱が生じることが予想されるため、到底不可能なことと

言われている。

北朝鮮でのように国の施策として漢字の使用を追放し、(教科書から<sup>ハ</sup>ン<sup>グ</sup>ル<sup>ル</sup>言での横書きをはじめて)755年には一切の新聞雑誌まで行なわれている)文字はすべて<sup>ハ</sup>ン<sup>グ</sup>ル<sup>ル</sup>言(表音文字)を用いている所でさえ、朝鮮語の約80%までもが漢字のオシであるということからして、無視できない問題である。

また朝鮮人たちが水滴の集まりが水で、花を美しく感じ、寿。福。富。貴。昌。達。などの文字のオシを目出度く運勢いいものと感じ、貴。仁。貞。順。淑。礼。明。玉。などの字のオシを佳く、しとやかな意義のものとして感じとっているとしたら、それらは当然漢字の形としては使用されずとも、その奥には漢字がもつところの意義が含まれていると言っても差支えないのではなかろうか?

北朝鮮では<sup>ナ</sup>ハ行、<sup>ラ</sup>ハ行の表記法については、その原形を求めて行なうよう規定しているが、これは他の意図からのものもあるだろうが、この間の事情を物語ってくれているのではなかろうか?、したがっ

て人為的な努力によって漢字そのものは追放できたとしても、漢字のオシを通じた意義と感覚は容易に消滅しないことであろう。

とすれば、当然今後とも当分の間は、前に掲げた縁起のいいオシ字等が人名その他で用いられるのは、当然の成り行きであろうと思われる。

漢字とはある人々の説によると蒙古字に対しての称あるいは、漢(中国)の国の文字だから漢字というのだとのことである。漢字はいますから4千年ほどの昔、中国の黄帝のころ、<sup>さう</sup>蒼 <sup>けつ</sup>頡 という人がつくったものと伝えられていて、西紀258年、わが応神天皇の乙巳年に、百濟の王仁博士によってわが国へはいつてきたものと言われているが、漢字に関しての一応の規範と目される康熙字典によるの外、他の文献によるもの等を合わせれば、その数はおそらく五万余字にものぼるそうである。

むろん、こんな膨大な漢字は人間が一生かかっても覚えきれないであろうし、また一生中、一度も出会わないであろうところの文字も多いのである。

いま参考までに、前にあげた「康熙字典」について、諸橋轍次著、大漢和辭典3984ページの康熙字典の項をのぞいてみると、

康熙字典、書名。42巻清康熙49年、大学士張玉書・陳廷敬等奉勅選。ノス集ノノ9部より成る。説文・玉篇の二書を本とし、普く諸氏の書を蒐羅し字毎に其の聲音訓詁を詳かにし、皆今韻を先にし古韻を後にし、正義を先にし、以って其の謬を訂している。

義例精密、考証賅洽、字数は汪汲の字典紀字によればノス集ノノ4部及び備考、補遺に載せる所4万7435字、本文下に載せる所の古文1,995字、計49,030字である。

と、載せてある。(同大漢和辭典中には、48,902字)

### 3. 日本の国字(俗字)

まえに記したこのような膨大な漢字をもとにして、

わが国では日本製のいわゆる国字(俗字)が生成し、

朝鮮にもまた、これと軌を同じうする国字(新制漢字)



がある。ところで日・朝両国製のそれぞれの国字を比較してみると、朝鮮の場合は日本のそれより、その数は遙かに少ないようである。

しかし、前で述べた外国人登録申請の場合でのように、文字についていっこうに無頓着な人々によって、各自欲するがままに、字でない「字」を粗製濫作し、また一方、登録受付窓口子の方でも、

ああ、朝鮮だからたぶんそんな字もあるんだろう……と、いうくらいな式で行なわれていくとすれば、字は「字」の意義どおり、イエ(ウ)の中にコドモ(子)の増えていくことは至極当然なことながら、これでは世間一般で使いものにならない不良児「字」が<sup>いへ</sup>の中にいっぱいになり、ついには社会に害毒を及ぼすようになるのではないかと、よけいな老練心にさえかられてくる始末である。

ともあれ、朝鮮の国字は後でみられるとおり、その数は極く僅かなものであり、その構造には一定の原則性のようなものがあるようである。

蛇足ながら次に日本の国字をあげ、しかる後に朝鮮の国字に及ぶことにする。

之。<sup>はる</sup>。<sup>かす</sup>。<sup>つじ</sup>。<sup>ぎ</sup>。<sup>そま</sup>。<sup>おしか</sup>。<sup>さかき</sup>。<sup>しきみ</sup>。<sup>おろし</sup>。  
祿。<sup>かみん</sup>。<sup>こうじ</sup>。<sup>じいお</sup>。<sup>いっけ</sup>。<sup>はれ</sup>。<sup>まう</sup>。<sup>やがて</sup>。  
禿。<sup>かみん</sup>。<sup>こうじ</sup>。<sup>じいお</sup>。<sup>いっけ</sup>。<sup>はれ</sup>。<sup>まう</sup>。<sup>やがて</sup>。

まだこの外にも、<sup>とげ</sup>。<sup>しめ</sup>。などと、たくさんあることである。

## 二、朝鮮の国字(新制漢字)

朝鮮の国字はこれをその構造上からみて、次の二つに大別できる。すなわち、

- (1)、最もよく漢字の字形を備えるもの。
- (2)、文字が二つ合わさって、できたもの(二合字)の二種である。

このうち、(1)の部類にはいるものには、

<sup>水</sup>。<sup>田</sup>。<sup>みちず</sup>。<sup>みちず</sup>。<sup>とうげ</sup>。  
沓(답)。達(득)。達(거)。站(검)。  
<sup>やしきの土地</sup>。<sup>漢文の助詞</sup>。<sup>源の古字</sup>。<sup>かけい</sup>。<sup>各室所</sup>。  
垚(지)。弥(지)。喬(지)。桧(명)。株(목)。  
<sup>在の義</sup>。<sup>姓の字</sup>。  
全(전)。曹(조)。

などがあり、(2)の部類にはいるものには、昔時、星州に本貫を有したといわれる、石と牛の二字が合わさつ

てできた「𡗗(企)」という字などがこの例である。  
また、(1)のところであげた、𡗗。堡。などもそうである。

そしてまた、この(2)に属するものは、次の三種に  
小分別することができる。すなわち、

イ、両者とも、その字のオンをもつてするもの

𡗗 (企)。 注と乙の合字

𡗗 (企)。 沙と乙の合字

𡗗 (企)。 老と乙の合字

𡗗 (企)。 卯と乙の合字

𡗗 (企)。 沙と𡗗の合字

𡗗 (企)。 知と耶の合字

などがあり、このうち、前の4つは地名などに用いられ、後の二つは仏書のオン訳などに使われていた。

ロ、一つは訓、一つはオンをもつてするもの

𡗗 (𡗗)。 石と乙の合字

これは、石のクン(𡗗)の《𡗗》と、乙のオン(𡗗)の《己》で、成っているもので𡗗は、人名・地名などに時々用いられている。

ハ、その他の場合、

𡗗 (𡗗)。 爲と了との合字

これは吏読に用いられる字で爲はクン(𡗗)、了は過去の事実をあらわす助詞であるところから、この二字の合字を過去の(𡗗)としたものである。そしてこれまた、吏読に用いられる接尾辞「のみ」の意をもつ。

𡗗 (𡗗)。 分と叱との合字

などがある。

このように朝鮮の國字の数はさして多くはないものであるから、前でも述べたように、関係事務処理の際、

朝鮮だからこんなものもあるんだろうか、朝鮮の字だというんだから仕方がないだろう……。

などと、いちがいにあきらめてしまうということは、前に述べたような事情からして、まことに危険なことと、思う次第である。

なお前で記したこととは全然別な意味と目的から、王君などの称呼の中には、漢字にない文字が用いられていることがあるが、これらは名君と言われた国王などの偉徳と偉名を後世の者が、また同様の文字を使って、その

王君などの御名を汚がすようなことがあつてはならない  
という配慮の下に、されたものであると言われている。

### 三、朝鮮語辞典(文世榮著)中の姓の数

私が現有朝鮮語辞典の中で最も普遍性あり、われわれにもなじみの深い、青嵐、文世榮著、朝鮮語辞典の中には、姓字に關したものが、どれくらい載っているだろうと、これをひき出してみたところ、二重姓のもの8種を含めて、その総数は、269姓であつた。

これは前に記した、増補文献備考による496姓字に257姓足らず、朝鮮總督府調査のものより19姓多いものである。

この269姓字を増補文献備考のものとの比較は、後の表に譲るとして、朝鮮總督府調査の250姓字とを対比してみようと思えば、その多い分の19姓字だけを挙示すれば一応計数的には合致する訳であるが、仔細に両者を対比検討してみると、總督府調査の中にあるものが朝鮮語辞典の中にないもの等が発見されたので、参考までにその269姓字をせき字母の配列順

に従つて次に掲記することにする。

なお、姓字の上部に○印を付したものは、總督府調査に載っていないことを、△印を付したものは、朝鮮語辞典に載っていないことを示すもので、姓字の下の( )内は正音に基くオンを示した。

#### 《フ》の部(37)

賈(가)。簡(간)。葛(갈)。甘(감)。  
江(강)。姜(강)。強(강)。康(강)。  
剛(강)。疆(강)。介(계)。堅(견)。  
甄(견)。景(경)。慶(경)。桂(계)。  
高(고)。孔(공)。公(공)。郭(곽)。  
丘(구)。具(구)。圉(구)。鞠(구)。  
君(군)。弓(궁)。○宮(궁)。喬(교)。  
權(권)。○郤(계)。介(계)。琴(금)。  
奇(기)。○起(기)。箕(기)。吉(길)。  
金(김)。

#### 《リ》の部(4)

南(남)。乃(나)。奈(나)。南宮(남궁)。

《匚》の部(ノ3)

單(단). 端(단). 唐(당). 大(대).  
陶(토). 都(도). 道(도). 頓(돈).  
董(동). 東方(동방). 段(단).  
杜(두). 獨孤(독고).

《匚》の部(ノ8)

羅(라). 浪(랑). 路(로). 魯(로).  
盧(로). 雷(뢰). ○良(량). 梁(량).  
呂(려). 連(련). 兼(렴). 濂(렴).  
龍(룡). 柳(류). 劉(류). 陸(륙).  
李(리). 林(림).

《口》の部(ノ3)

馬(마). 麻(마). △萬(만). 梅(매).  
孟(맹). 明(명). 毛(모). 牟(모).  
睦(목). 文(문). 未(미). 米(미).  
閔(민). 墨(흑).

《日》の部(ㄹ5)

朴(박). 班(반). 潘(반). 方(방).  
邦(방). 房(방). 旁(방). 裴(배).  
白(백). 凡(범). 范(범). 卞(변).  
邊(변). ○寶(보). 卜(복). ○福(복).  
奉(봉). 鳳(봉). 夫(부). 丕(비).  
彬(빈). 賓(빈). ○濱(빈). ○冰(빙).  
龍(방). △氷(빙).

《人》の部(ㄱ7)

史(사). 舍(사). 謝(사). 司(사).  
尚(상). 西(서). 徐(서). 西門(서문).  
石(석). 昔(석). 先(선). 宜(선).  
鮮于(선우). 僕(설). 薛(설). 葉(섭).  
成(성). 星(성). 邵(소). 蘇(소).  
孫(손). 宋(송). 水(수). 淳(순).  
舜(순). 荀(순). 順(순). 承(승).  
昇(승). ○僧(승). ○始(시). 施(시).  
柴(시). 申(신). 辛(신). 慎(신).  
沈(심).



《△》 ㄱ部 (44)

阿 (아). 安 (안). 艾 (애). 夜 (야).  
 楊 (양). 襄 (양). 魚 (어). 嚴 (엄).  
 汝 (여). 余 (여). 延 (연). ○鳶 (연).  
 燕 (연). 閻 (염). 永 (영). 芮 (예).  
 吳 (오). 王 (오). 溫 (온). 篁 (응).  
 雍 (응). 王 (왕). 要 (요). 姚 (요).  
 于 (우). 禹 (우). 芸 (운). 蓼 (운).  
 元 (원). 袁 (원). 韋 (위). 魏 (위).  
 兪 (유). 庾 (유). 尹 (윤). 思 (은).  
 殷 (은). 陰 (음). 應 (응). 伊 (이).  
 異 (이). 印 (인). 佐 (임). 雲 (운).  
 雍 (응).

《ㄷ》 ㄱ部 (31)

慈 (자). 莊 (장). 張 (장). 章 (장).  
 蔣 (장). 田 (전). 全 (전). 錢 (전).  
 占 (점). 丁 (점). 程 (정). 鄭 (정).  
 諸 (제). 諸葛 (제갈). 曹 (조).

趙 (조). 宗 (종). 鐘 (종). 左 (좌).  
 朱 (주). ○宙 (주). 周 (주). ○竹 (죽).  
 俊 (준). 中 (중). 池 (지). 智 (지).  
 素 (진). 陳 (진). 眞 (진). 晉 (진).

《六》 ㄱ部 (15)

車 (차). 昌 (창). 倉 (창). 創 (창).  
 采 (채). △菜 (채). 蔡 (채). 𠂔 (천).  
 天 (천). 踐 (천). 肖 (초). 楚 (초).  
 崔 (최). 秋 (추). 鄒 (추). 茅 (천).

《ㄷ》 ㄱ部 (4)

卓 (탁). ○訖 (탁). 彈 (탄). 太 (터).

《ㄷ》 ㄱ部 (11)

判 (판). 片 (편). 扁 (편). 平 (평).  
 包 (포). 鮑 (포). 表 (표). 馮 (풍).  
 皮 (피). 弼 (필). 彭 (평).

《六》の部(ノク)

河(하). 夏(하). 漢(한). 韓(한).  
咸(함). 海(해). 許(허). 玄(현).  
邢(형). ○戸(호). 胡(호). 扈(호).  
洪(홍). 化(화). 黃(황). 后(후).  
皇甫(황보).

以上でみられるとおりこの中には、朝鮮語辞典になかったものの三姓を含めて、総数スクエ姓字をあげてある。

1. 姓字についての言い伝え、

朝鮮の姓名法は、朝鮮が中国大陆と地続きであつたという関係上、また、中国文化を直接摂取した影響から、中国のそれと非常に類似し、模倣されたものが多い。

前で見たとように朝鮮の姓は、金、李、朴、崔、鄭などのような単字姓のものでその殆どが占められていて、少数ながら、南宮、皇甫、西門などのような複字姓がある。この単字姓を大姓と言い、複字姓を稀姓と呼んでいる。

命名法については、後に別な項で述べることにし、ここでは姓の起源にまつわる言い伝えを、少しく述べることにする。

(1) 神話伝説から生まれたもの

金. 新羅の時代、祖先が金櫃から生まれたといわれる。

昔. 新羅の時代、諺に縁があつたと伝えられる。

朴. 瓠のような卵から生まれたといわれる。

(2) 移住によつて地名を姓にとつたもの

韓. 箕子の後孫箕準が衛満に追われて韓の地に移り住んだので、その子孫は韓と名のつた。

鮮于. 箕子の子仲は、朝鮮の于というところにいたので、その子孫は鮮于を姓とした。

(3) 技能とか戦功などによつて、王から新たに賜わつたという、いわゆる賜姓。

これにあたるものには、延、許、金がある。

(4) 勢力のある氏族の姓を盗んだいわゆる盗姓。

金 (もとは王であつたものが多い)

(5). 歸化人が在住者の大姓を冒した冒姓。

(6). 有名な中国人の後胤であるという後胤姓。劉

(7). もと卑賤な階級にあつたといわれる者の姓。

これには、皮、牛、方、池などがある。

(8). 済州島に多い姓、高、深、夫のいわゆる三穴姓と

呼ばれているもの等がある。

2. 世帯数の最も少ない姓

前でみたように朝鮮では五大姓の外、数十個に限られた姓でその大部分が占められていて、その他の姓が占める率は非常に少ないのである。では、その世帯数の最も少ない姓にはどんなものがあるかと、さきに触れたところの朝鮮総督府の調査結果をのぞいてみると、次のとおりであつた。

それによると、調査当時、全朝鮮中にたつた一世帯しかなかった姓が24もあったので、参考までにその当時の所在地及び本貫の点をも併記してかかげることにした。

姓	字	本 貫	当時の所在地	備 考
采。		不 明	全羅南道	
菜。		〃	〃	
闊。		〃	全羅北道	
應。		〃	京畿道	
單。		延 安	〃	
尙。		〃	忠清北道	
剛。		樞 山	〃	強の字が誤まつて書かれたものとみられると。
介。		清 州	忠清南道	
俊。		〃	〃	
星。		不 明	全羅南道	
凡。		〃	〃	
道。		〃	〃	
丘。		〃	慶尚北道	
襄。		〃	慶尚南道	申告の際誤記されたものとみられると。
鮑。		〃	〃	
君。		〃	〃	

端。	不	明	慶尚南道
疆。	麗	山	〃
旁。	不	明	〃
恩。	〃	〃	〃
要。	〃	〃	平安北道
眞。	開	城	咸鏡北道
永。	不	明	京畿道
鄒。	〃	〃	慶尚北道

この外に、二世帯しかなかったものは、漢、先、鳳、舍、淳、西、濂の七姓。三世帯しかなかったものに、宗、箕、順、后、水、汝、謝、介の八姓等があった。3、姓字読み書きにあたって注意すべき点。

次に前にあげたスグス姓字のうちで、姓字として使う場合だけにかぎって守らなければならない。慣習的なオンあるいは注意すべき点について少しく述べる。

(1)、オンの決まっているもの(上は俗音で《 》内は姓をとる場合のオンを示す)。

金 (金)。

《 김 》

車 (거)。	《 차 》
墨 (号)。	《 호 》
昔 (적)。	《 석 》
麗 (릉)。	《 방 》
葉 (엽)。	《 섬 》
沈 (침)。	《 심 》
馮 (평)。	《 풍 》
柴 (채)。	《 사 》

(2) 字体が定まっているもの

これにあてはまるものには、前でも触れたように、曹の字は《曹》と書く外、鍾は《鍾》と書くようになっている(李命七編輯漢鮮華日新字典608ページ参照)。しかし、文世榮著朝鮮語辞典には「鍾」の字が使われている。そして皮肉なことには、在日朝鮮人の外国人登録の中には「鍾」の字を用いて登録されたものはノ人もおらず、「鍾」の字で登録したものが7名いる。

この「鍾」の字は「鐘」の別字であり、言うまでもなく、共にカネの意をもつものである。これらは



前でみた裴—裴のように、見る者の眼には違つて  
うつることであろうし、先程の判事さんのような人  
はもちろん、一般観念的にも容易になつとくし難い  
ことであろう。

ことに同一のことがその辞典によつて、左右して  
いるということは、外国人たるわれわれにとつては  
よけいに複雑な思いを生じさせるところである。

### (3) 日本の略字と混同し易いもの

すなわち芸(𡇗)という姓字は、日本の藝の略字  
「芸」とはまったく違ふのである。朝鮮個有の略字  
というものは非常にかぎられたものしかないもので  
ある。

## 四、略字及び俗字

すぐ前のところで朝鮮には略字が少ないと書いたが、  
それは朝鮮個有の略字としては、非常に少ないという  
ことであつて、中国または日本の略字(俗字を含む)  
と共通しているものは、かなりの数に達しているよう  
である。

現在韓国で実用化されている略字、俗字の概数は、  
1960年6月28日発行、金敏洙編『国語<sup>한글</sup>三<sup>도</sup>字<sup>자</sup>』によると、クク4字があげてあり、この中には、  
わが国の当用漢字体表(昭和24年4月28日制定)  
中にあるもの、いくつかを含めて掲載されてある。

同書籍によると、本字を頭に中国、日本の二種の略  
字を示している。これから推してみるに、韓国では本  
字を基本に二種の略字を許容しているものと解される。

次にその一例だけ示すことにする(上から本字、中  
国の略字、日本の略字の順)。

歡—欢—歡。縣—县—縣。總—总—總。從—从—從。  
雜—杂—雜。葉—叶—葉。箇—个—個。圖—图—圖。

### 1. 書き誤まり易い文字

朝鮮には日本であまり使われない、漢字を用いるこ  
とがあるが、それらのうちで特に書き誤まり易いもの  
をとり出してみると次のようなものがある。

李—季。 徐—除。 且—旦。 梁—粱。 崔—催。  
延—延。 泰—泰。 曹—曹。 胃—胃。 家—度。

千一子。 天一夫。 末一未。 吉一杏。 王一玉。  
 世一也。 石一右。 任一倍。 佳一住。 坤一伸。  
 俠一狹。 紅一江。 浩一活。 漢一漠。 洙一珠。  
 玲一伶。 瑞一端。 玫一玖。 民一氏。 珣一珣。  
 戊一戌。 禹一厲。 癸一癸。 允一允。 光一先。  
 考一孝。 秀一季。 亨一亨。 乘一乘。 采一采。  
 宣一宣。 寅一宙。 容一容。 哲一哲。 枝一枝。  
 柱一柱。 晉一普。 熙一熙。 燮一燮。 鐘一鐘。  
 燭一燭。 滄一乞。 閔一閔。

##### 五、朝鮮の命名法

世の人は、子供の将来に夢を託して、その幸多かれ  
 と希うのは、古今東西を通じて変わらぬ人情であろう。  
 したがって、見をもつ親はその児に命名する通常の場合、  
 悪名、凶名を避けて、善名、吉名を選んで名づけて  
 いる。富貴栄達はその万人の渴仰するところから、朝鮮  
 人は衣類装身具や家具などに、寿、福、禧、詰、貴、  
 徳等の吉祥文字を文字紋様としてよく用いているが、  
 これもその文字のもつ意味により、縁起をかつぐ朝鮮

人が命名によく使用するところである。

名には生まれた時につける児名(幼名)と、いわゆる  
 成年式にあたる冠礼の時に名づける冠名とがあるが、  
 戸籍法が施かれるようになってからは、児名、冠名の  
 区別は従来のように厳格ではなくなってきた、出生時  
 に届け出た名がその人の本名になっている場合が多い  
 ようである。名の字数は、二字のものが普通で、少数  
 ながらノ字名のものも見受けられる。姓のうち、許姓  
 にかぎっては二字名のものは少なくノ字名が普通であ  
 る。また、二字姓、すなわち南宮、西門、鮮于という  
 ような姓も、ノ字名が普通である。

命名については通常男は男らしく、女は女らしい優  
 雅な名をつけるものであるが、同じ漢字を使用しなが  
 ら、中国との関係において、われわれから見た場合奇  
 異に感じられる名も少なくない。

例えば中国の女名によく使用される淑、鳳、玉、珍、  
 貞、秀、珠等の文字が男名に使用され、これと反対に、  
 女名でありながら、

順男、徳男、敏男、世男、

敬児、仲児、貞児、香児、

仁吉、成吉、丁吉、寅吉、

などのように、男名と感違いし易い名がある。

右の男、児、吉の字は名の二字目に位し、名としての主体は上部に置かれているのである。すなわち、男、児、吉の字は後に子供（男の子）を欲するところの意味から文字に表現されたものである。

また、朝鮮の風習で、家庭に女児ばかりで男児が生まれない場合、例えば敏南と書くところを敏男と書いて、男児が生まれるようにと縁起をかつぐこともある。

#### 1. 名前のつけ方

命名の際、男女の別によって使われる文字も多少異なるが、一般には吉祥好運の文字を選び、これを組合せて名をつくるのが普通である。

例えば男児の場合、相、鐘、泰、永、斗、變、命、聖、植、祚、根、洙、石、守、寿、福、富、徳、昌、達、吉などの男名で特によく使用される文字の中からその一例を示せば、

寿男、福寿、富達、徳基、昌福、達寿、吉成、

などのように、また女児の場合には、愛、心、粉、女、蓮、花、月、小、淑、善、分、伊、今、先、生、点、任、又、連、福、玉、順、礼、仙、姫、などの女名によく使用される文字の中から、

福善、玉粉、貞淑、明順、貴礼、日仙、淑姫、  
というような具合につけている。

このほか、意味のある名前、すなわち物の名によって好運を寓したものと、その名によって事物を記念するもの、あるいは災厄を逃れるために、わざと汚名をつけるもの等もある。

#### (1) 物名によって好運を寓したもの

千石 秋に千石を収穫できる身分を願う意  
三達 富、貴、寿の三つを達することを願う意  
以粉 容貌風姿の美麗を意味する意  
鳳姫 容貌風姿の美麗を意味する意

#### (2) その名によって事物、場所を記念するもの

京得 ソウル（京城）にいた時得た児  
夢龍 龍の夢を見て生まれた児

点福 身体に福点のある児  
 得虎 虎の夢を見て生まれた児  
 明月 明月の夢を見て生まれた児  
 乗雲 雲に乗った夢を見て生まれた児  
 竈王 炊事中に生まれたの台所の神(竈王・조왕)  
 を児名にしたもの  
 마담 庭で仕事中に生まれたので(庭・뜰)を児  
 叶담 名としたもの  
 돌돌 石の楕(石の背中・돌등의意)  
 石疊  
 돌골 石のように固い(석골)  
 石骨  
 몽골 丸くて固い石(몽골)  
 夢骨

後の方の三つはいずれも石を意味し、その名により  
 意志堅固を祈願してのものである。

(3) 災厄を逃がれるため汚名をつけるもの

개똥 介同(犬の糞)

도야지 豚

닭의똥 鶏の糞(鶏童)

さてここで少しく注目されることは、この도야지(돼지)、거똥はいずれも純朝鮮語で、漢字の音字でな

いためこの音訳にあたっては、わが国文法で<sup>かじやく</sup>う仮借の方法によつて、도야지는都野治、매치智などとも書かれ、개똥は介東、丐童などとも訳書されていることがある。

また개똥には朝鮮語がもつ特性(人名詞の終音節が終声である場合にはその下に意味のない調音助詞<이>がつく習性)から、この이にまでも漢字をあてて、介東伊、丐童以などとしてあることもある。

도야지는豚、개똥は犬の糞と書いてこそ、原語の意がはつきり写し出されたことになるが、これを介同、都野治などとしたのではこれを果して、豚、犬の糞のことだと思ふ人がいるであらうか。

こういう問題はまた、日本語から朝鮮語に訳記する場合にも生じ易いものと思う。次に東京豊島区であつた例をおけてみることにする。

ある時、外国人登録写票にある<sup>名</sup>氏欄をのぞくと、そこには朴計計という氏名が記入されてあつたのである。計計! ハテ、な? これはどういう意味かと思わず小首をかしげた。世帯主との続柄をみると、計計は



二女ということになっていた。

女兒の二女で<sup>ハナ</sup>計<sup>ハナ</sup>ハは朝鮮語では、数の称呼の「一つ」であるから、長女であれば<sup>ハナ</sup>計<sup>ハナ</sup>ハ（一つ）、二女は<sup>ツル</sup>計<sup>ツル</sup>（二つ）、三女は<sup>セツ</sup>計<sup>セツ</sup>（三つ）というように、乱暴な名の付け方をしたのではないかと考えてみたが、この場合二女であるからその方式は、あたらないことになる。

そこでなおよく調らべると、計<sup>ハナ</sup>ハの母親は日本人であることが分かった。ここに至って漸やく、これは日本文字、片假名のハナを<sup>ハナ</sup>計<sup>ハナ</sup>ハの音で、そのまま朝鮮語音にあてたものだろうと思いついた次第である。

その折私は別に計<sup>ハナ</sup>ハの両親に会って、名づけた理由を聞き正してみた訳ではなかったが、案ずるところ、おそらくその両親も計<sup>ハナ</sup>ハと名づけるにあたって、計<sup>ハナ</sup>ハとは（一つであり、ものの始まりで、正に通じるし、女の子だから採来お神さん「<sup>神様</sup>計<sup>ハナ</sup>ハ」）になるんだ、というような考えの下につけていたものではないだろうと推量した。

ここで思うに、もし、朴計<sup>ハナ</sup>ハの「ハナ」の原意は鼻

汁などのハナでなく、花もしくは華の意であつたろうと考えるものであり、とすれば、このハナの音字は花、華の字から推して<sup>ハナ</sup>計<sup>ハナ</sup>ハとでもする方が適切ではなかつたろうかと……。 (1940年6月25日朝鮮語学会で、採択発表した「外來語表記法統一案」の中の「日語音表記法」によれば「ハナ」は<sup>ハナ</sup>計<sup>ハナ</sup>ハというように記することになっている。)

#### 乙、特殊な名のつけ方

子供が生まれた時、無学な親達は児の名前もつけずに、<sup>アジ</sup>アジ（アジは朝鮮語で子供という意）と呼んでいたものが、そのままあて字で戸籍名、阿只、牙只、牙之などとなっているものがある。そして次にまた子供が生まれると、新たに命名するのを面倒がって、阿只に又をつけて又阿只と名づけることがある。すなわち、

金阿只、金又阿只、李阿只、李又阿只

となるような式である。そしてこの阿只、牙只、牙之は前で触れた介同、介東伊、都野治などと同様に、発音だけが同じで文字そのものには意味がないものである。

またこれとやや似たものに、姓女、召史というものがある。これは朝鮮人は結婚しても姓を変更しないという習慣から生じたものである。

すなわち朴家の娘が崔家に嫁しても、その嫁は崔氏とならず、実家の朴姓をそのまま使用して普通には、朴氏とされているが、また、朴姓女とか朴召史とも書かれていることがある。

この姓女、召史は既婚婦人を呼ぶ言葉であり、固有名詞ではなく代名詞的なものであつて、朴姓の「女」というくらいな意味をもつものである。

次に、生まれた子供が先に生まれた子供と性が同じである場合、長男、長女のそれぞれの名に又をつけ加えて名とすることがある。名の上に又あるいは且のついているものは、次男あるいは次女である。例えば、

金又高祚、朴又淑順、李且珍奎、金且点伊、  
というような式である。

名は二字のものが普通で、ここであげたような三字名は例外に属するもので、この外、三字名のものとして極く僅かではあるが、

双可梅、福老味、万明公、建老美、干蘭伊、要安羅などというものもあるがその多くは、前で述べた州岳イでの場合のように、朝鮮語の終声と調音助詞イが合わさって一字を作ったため、三字名となったものが多いように思われる。

また出生の前後によって、大、小、前、後の文字をつける場合がある。例えば、

金大児、金小児、李前芳、李後芳、

というような風になる。

日本の太郎、花子というようなありきたりの名として女の場合、

順伊、蘭伊、福順、貞淑。男児の場合には福童、春吉などという名がよく使用され、その他姢名として、雪、月、花、玉、珠等の文字を配した。

玉香、芙蓉、翡翠、雪月、玉仙、梅花、玉梅、紅珠などがよく用いられる。

### 3. 親等による名の区別

以前朝鮮の中流以上の家庭では、男児が13、4歳頃になると、朝鮮の風習として、これまで蓄えていた頭髪を結んで、その上に冠をつける儀式、すなわち冠礼を行なっていた。これは、ちようどわが国の元服に相当するものである。

この冠礼とは儒教でいわれるいわゆる五礼(冠礼、婚礼、喪礼、葬礼、祭礼)のうちのひとつで、冠礼は礼の始めとして最も重しとされていた。

朝鮮での冠礼の起源は西紀942年(日本の村上天皇の時代)高麗朝四代光宗王の時、「子由に元服を加え立てて正胤となす。」とあり、この頃に始まったようである。当初その時期は、「一星終るころをもつて佳とす。」とあるところから、12支の一巡する12、3歳時分に宮中はじめ上流家庭で行なわれていたものが、遂次一般に普及されたものであつた。

この冠礼を済ますと、爾後、児名(幼名)を捨てて、冠名を呼ぶことになる。冠名は、親族の尊卑、親等及び同族の序次を明示する文字を使って命名されるのが

普通である。

例えば五行相生の理(木は火を生み、火は土を生み、土は金を生み、金は水を生み、水は木を生む)に基づくものや、十干(甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸)十二支(子、丑、寅、卯、辰、巳、未、申、酉、戌、亥)の順によって、それを含む字をとって命名する。

五行によれば、父が相仁(木)、子が永煥(火)<sup>孫</sup>が基純(土)、曾孫は慕鎮(金)、その次は清蕙(水)などというようにつける。

十干をとるものでは、用(甲)、九(乙)、炳(丙)、衡(丁)、茂(戊)、宰(辛)、任(壬)、揆(癸)などのように、また十二支をとるものには、父に学(子)、子に象(丑)、孫に演(寅)、曾孫に卿(卯)、玄孫に振(辰)、その次に熙(巳)、というような具合にしてつけてその尊卑を表わすのである。

#### (1). 同列である場合

同列である場合には、星宿名または中国の古い国名の文字を使って、その順序を表わす場合が多い。

たとえば二十八宿（昔、天文学で二十八に分けた星の名）によって行なう場合

東	角 (각)	亢 (항)	氐 (지)	房 (방)	心 (심)	尾 (미)	箕 (기)
北	斗 (두)	牛 (우)	女 (녀)	虚 (허)	危 (위)	室 (실)	壁 (벽)
西	奎 (기)	婁 (루)	胃 (위)	昂 (양)	畢 (필)	觜 (지)	參 (삼)
南	井 (정)	鬼 (기)	柳 (유)	星 (성)	張 (장)	翼 (익)	轸 (진)

上記の二十八宿の中から、星男（長男）、井男（次男）主男（三男）などというように、中国の古い国名を用いてやる場合は、

興夏（長男）— 殷直（二男）— 聖岡（三男）— 行晉（四男）（以下、齊、秦、楚、魯、曹、宋、衛、鄭、陳、蔡、燕）

というような風にして順序を表わすのである。

そして親等が同一階にある時は、必ず同一の文字、または同一字を、その偏傍に含む文字を使用して、たとえば、

仲冠（長男）— 仲嬌（長女）— 仲春（二男）— 仲夏（三男）— 仲秋（四男）  
章端（長男）— 元端（二男）— 達端（三男）  
泳相（長男）— 泳姪（長女）— 泳駁（二男）

というようにして、親等が同列にあることを表示するのが普通である。

こうして、祖先を同じうする一族は、年を定めて一門の大集会を開き、門地の高い者を推して、各家の系譜を訂正し行列を定めるのである。行列字とは、同列すなわち、兄弟、従兄弟、再兄弟等は皆一字ずつ同一の字を用いるものである。

次にこれまで述べてきたところに従って、假想譜系図をつくって掲示してみることにする。



長女 朴清子

(本貫固城)

朴

子

朴清蕙

孫

朴仁植

曾孫

朴炯天

婦 許 郁

婦 金 子

二男 清 菴

二男 仁 老

婦 尹 紅 蓮

一三男 清 風

初長男 清 賢

一長女 洋 子

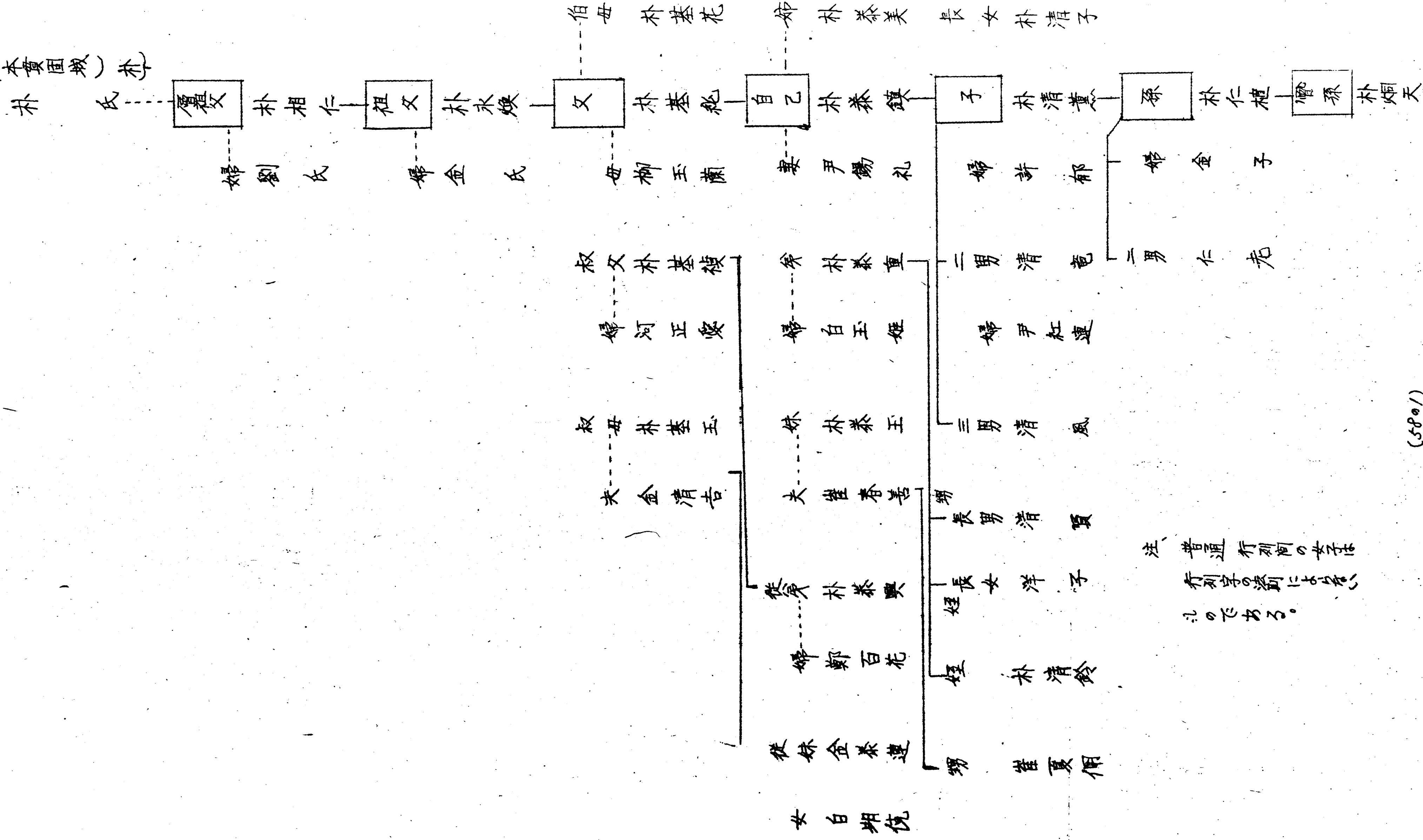
姪 朴清鈴

甥 崔夏侑

注、普通行列の女子は  
行列字の添削による。  
ものである。

(580/)

(本貫固城) 朴



注、普通行列の女子は  
行列字の漢字による、  
ものである。

#### 4. 名に使われ易い文字

周知のように日本では、昭和26年5月に当用漢字の外に、人名用漢字72字が選定されて、爾後、これらを使ってよいことに戸籍法も改められている。この72字の中には、十二支（子、午、未、申は当用漢字）のうち、戌を除き他のものは全部含まれている。

時代の移り変わりつつある今日、丑松、寅吉、卯平、辰五郎、己之助、酉蔵、亥太郎などという名前は、あまりスマートとは感じられず、これらの漢字が果して、どれほど用いられているか疑問ではあるが、とにかく、人名に使用され易いものとの見方の下に、選定されていたものであろう。

現在朝鮮には、わが国でのような制限や規程はないがその慣習上、名に使用され易い文字につき、前に少しく触れたが、次にこれをもう少し詳しく述べてみることにする。

##### (1). 男名の場合

イ、五行からとったもの（木、火、土、金、水を偏とするもの）

木 相、植、根、柱、桂、樵、  
火 炳、煥、燦、焜、照、烈、  
土 培、均、坤、吉、基、圭、  
金 錫、鎗、鎬、鐸、鉉、欽、  
水 洙、浩、洪、泳、濶、澤

ロ、十千

ハ、十二支

二、瑞祥の動物に關したもの

龍、虎、麟、鳳、鴻、龜、鵠、（猫は忌まれ  
ている）。

ホ、人倫五常に關したもの

仁、義、礼、智、信、忠、孝

ヘ、聖徳に關したもの

聖、徳、道、思、仁、澤

ト、吉祥に關したもの

福、寿、吉、祥、慶、禧

ク、賢明に關したもの

賢、俊、碩、駿、秀、英

リ、隆昌に關したもの

隆、昌、昇、榮、尚、宗、興

ヌ、文武に關したもの

文、武、英、勇、明、赫、輝

ル、数詞に關したもの

百、千、万、億、一、三、五、七、九

ヲ、天体に關したもの

日、星、雲、雨、海、陽、水

(2)、女名の場合

イ、干支に關したもの

甲、乙、丙、丁、卯、辰、未

ロ、福寿吉祥に關したもの

福、寿、吉、祥、富、貴、慶、喜、祿

ハ、人倫道德に關したもの

仁、義、礼、徳、敬、孝、尚、善、良、好

二、賢明情愛に關したもの

英、明、敏、俊、賢、慕、情、心

ホ、貞淑優美に關したもの

貞、淑、慈、愛、淳、妙、美、仙、姪



へ、草化に関したもの

松、竹、蘭、花、蓮、葉、梅、桃、桂、柳

ト、財宝に関したもの

宝、金、銀、玉、珠、珍、潤

ナ、四季天文に関したもの

春、夏、秋、日、月、星、雲、雪

以上にあげた文字等が男女ともに、名の一字目、または二字目に使用され易い文字である。なお、数詞については一般に中国人は偶数を好み、日本人は奇数を好むように言われているが、朝鮮人の場合は、奇数字を多く使用しているように思える。数詞は名として用いる場合、一般的に、一、三は上の字に、五、九は下の字としている場合が多いように見受けられる。

また、次の項で述べる朝鮮人の日本式姓名(劉氏改名)と関連するものに、女子の名の二字目に「子」の字を付するものが相当ある。

これは朝鮮の女名によく使われる順、淑、花、明などのほか、英、春、正、初、富、静、信、和、貞、善などの文字の下に、それぞれ「子」をつけるものである。

たとえば、

順子、淑子、花子、明子、英子、春子、正子、初子、

富子、静子、信子、和子、貞子、善子、松子、

等は特によく使用されている。

この名の二字目に「子」の字をつけるのは時代の流行で、日本のそれと類似しているかの点があるように思う。日本では「名は年齢を表わす」と言われ、その名によって、だいたいの年齢が推しはかれるという。

国立国語研究所の柴田武さんが、指摘されたところによれば、いま日本に残っている一番古い戸籍、702年(大宝2年)、7021年(養老5年)によると、男の名はおしまいに「マロ(磨)」のつくものが多く、女の名のほとんどが「メ」のついたものだったそうである。

ところが現在の若い人たちの間では、男の名は「達・弘」というような、漢字一字の名が一番多く、女の名は「子」のつくものが圧倒的に多いということである。現在でも40歳以上の人になると、三郎、二郎などという「郎」のつく名が10%以上になり、漢字一字の

名が減ることである。

女の名で若い層では、「子」のつく名が70%以上になるが、50歳以上になると50%以下に減っている。それで、これ以上の人々は「きよ、はる、チヨ」などのようにカナ書きの名が、50%近くにもなっているそうである。

名づけには流行があつて、その時代その時代の気持が反映するそうである。「君の名は」がラジオの人気番組だつたころには、ヒロインの「真知子・春樹」の届出が多かつたといひ、また先年は、美智子という赤ちゃんがふえたともいうそうである。

昭和生れの朝鮮人、ことに日本で出生した姉妹の中に、「昭子・和子」などという名の者が相当いるのではなからうか。

#### 六、日本式姓名(日本名)について

次は現在、在日朝鮮人たちの中で広く実用化され、あるいは法規化されている呼び名(日本名)について述べることにする。

この日本式姓名とは、いまわれわれの周囲でも時々

みうけられる、金井光夫、新井錫源などというような二字姓、二字名の者、または林清、今一というような一字姓、一字名の者、あるいは二字姓、一字名の者等、日本人風に名づけられたもののことをさすのである。

ではなぜ朝鮮人が、かような日本人式の姓と名をつけるようになったのかというと、それは一言で端的に言えば、昭和14年に朝鮮人に対して、いわゆる「創氏改名」制度が施かれた時の影響が、今日に及んでいるのだと言えらるであらう。

#### 1. 創氏改名

明治43年8月29日、いわゆる日・韓併合がなされて、韓国が日本の統治下にはいった当初、為政者たちは朝鮮の伝統的家族制度の根幹である、父系中心の制度を存続させてきたものであつた。その後、世は大正、昭和と移りかわるに従つて、新しい世界文化の流れに添ひ、個人財産権の確立、婦人の地位向上と共に、父系中心の大家族制度を守るということよりも、個人や家庭を中心とする觀念が強くなつてきた。

そして母や妻が、子や夫と共に同じ家の名をもちたいという要望や、異姓の者でも養子に迎えられようようにしたいという、考えをもつようになつたのである。

これら時代のすう勢と民衆の願望に合致するように、昭和14年11月10日に、朝鮮總督府の御令第19号によって、朝鮮民事令を改正して、氏に関する規定を民法によることにし、「氏は戸主之を定む」と定め、その附則で「朝鮮人戸主は本令施行後、6カ月以内に新たに氏を定め、これを府尹または、邑面長に届出ずることを要す。前項の規定による届出をなさざるときは、本令施行の際における戸主の姓をもつて氏とす」と規定した。

これがいわゆる創氏制度である。すなわち従来、前述のように祖母が「金」、母が「柳」、妻が「尹」、夫が「朴」といつていたのを、別に新たに届出をしないときには、本令施行の際の戸主の姓「朴」をもつて「氏」とし、祖母の「金」、母の「柳」、妻の

「尹」の姓は、戸籍謄本の姓が朱色で消され、みな「朴……」と記されて、一家族が同じ氏をもつことになった。くだが謄本の上には、「姓及本貫」の項は残されていたので、それがまったく分らなくなるという訳ではなかった。)

そしてこの時に、御令の「新たに氏を定め」て届出することが強調され、この「新たに」は「日本式氏」を設定することを大々的に奨励する結果を生じていた。しかも、このときに、従来道知事の所管に属していた改姓名の手続を、氏名変更の手続として「その本籍地または住所地を管轄する裁判所に申請して許可をうくる」途も開いた。

この日本式創氏改名は、戦時下の強制力と、總督府行政を通ずる力により、その希望者だけという限度や、納得された人々にだけ、という訳にはいかなかったようであつた。そしてその墮性は、「姓」から「氏」への転換という法的觀念は忘れられて、ただ日本式氏名をつけるということだけが圧倒的になつた。

そしてこの結果、昭和15年8月10日の届出期日までの届出数が、全人口の約七割九分にあたる320万戸、1,760万人に達していたといはれるから、相当な進捗率を占めていたことは、事実のようである。

なお、この「創氏」制度のときに、婿養子に関する規定も設けられていた。

終戦後、朝鮮人は、自分勝手に日本式創氏名を捨て、古い慣習の姓にかえってしまった。それは「氏」という觀念の理解されないこともあったが、それ以上に、日本的なものに対する反撥の結果であろうとみられる。

これについて、米軍政法令がでたのは、終戦の翌年10月23日であり、軍政法令第122号「姓名復旧令」が公布された。それによると、

「日本統治時代の法令にもとづく創氏制度により、朝鮮姓名を日本式に変更した戸籍記載は、その創初日から無効であることを宣言する、

ただし創氏改名下に成立したすべての法律行為は、

なんらの影響を受けない。」

ということを明らかにするとともに、

「60日以内に特別に手続をとるもののほかは、本令施行60日後、すべての日本式氏名を戸籍吏がもとの姓に改訂する。また出生の届出の際に、日本式名をつけたものは、6カ月以内に戸籍吏あてに変更の届出をするように」

と定めた。

この年11月1日に、朝鮮姓名復旧令施行規則が公布されて、「氏に関する規定」、「婿養子に関する規定」が廃止されたのである。司法部では、その結果について、その年末に、

「2,81万09,37戸、1,647万131名が旧名に復した。」

と発表した。この数字はさきにあげた、昭和15年8月10日の届出期日までの届出数とほぼ匹敵している。

なお、大韓民国憲法(1948年7月17日公布)において、「現行法令は、この憲法に抵触しない限



り効力をもつ」と規定されているので、この軍政下の朝鮮姓名復旧令は、韓国成立後も法としての効力をもつたのである。

次に、前でも触れたこの「創氏改名」について重大な基となっていた、昭和ノ四年ノ一月「朝鮮總督府制令第ノ号」全文及び関係法規等をのぞいてみることにする。

之、制令第ノ号及び関係法規

朝鮮人ノ氏名ニ関スル件（明治44年法律第30号）

第ノ条及第ノ条ニ依リ勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ公布ス。

昭和ノ四年ノ一月ノ日

朝鮮總督 南 次郎

制令第ノ号（官報掲載ノ一月ノ4日）

第ノ条 御<sup>お</sup>征代御<sup>ご</sup>諱又ハ御名ハ之ヲ氏又ハ名ニ用  
フルコトヲ得ズ

但シ一家創立ノ場合ニ於テハ此ノ限ニ  
在ラズ、

第2条 氏名ハ之ヲ変更スルコトヲ得ズ、但シ正  
当ノ事由アル場合ニ於テ朝鮮總督ノ定ム  
ル所ニ依リ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限  
ニ在ラズ

附 則

本令施行期日ハ朝鮮總督之ヲ定ム

とある。そしてこの前文「明治44年法律第30号云々」は、天皇の委任によつて、朝鮮總督が法律事項たる「制令」を朝鮮全域に公布するための、法制上の手続をさしたものである。

この法文は見られるとおり、全文24条のごく短かいものであるが、さらにこの制令に基いて、朝鮮總督府法務局で、「制令」の趣旨を類推解釈したものともみられる。同局名によつた「氏制度の制定」というみだしによる、指導要綱的な注釈書の中の「氏の設定に関する制限」の項には次のように記してある。

氏の設定に関する制限

前述の如く本令改正の機会に於て、半島人が内

地人式「氏」を称え得る途を拓いたものであるが、御<sup>お</sup>正代御<sup>り</sup>諱及御名は熟字の儘之ヲ「氏」に用ふることは絶対に許されない。(朝鮮人の氏名変更に関する件、制令第20号第1条) - 又宮号、王公族の称呼、神社名、歴史上及現代に於ける著名な顯臣顯官の氏名を、その儘用ふることと差控へねばならない。

他人の「姓」を採つて「氏」を定めることは意味がないばかりでなく、混淆を生じ易いからこれも禁止されて居る。(同令第1条第2項) また、同書の「氏名の變更」の項には、次のように記載されている。

#### 氏名の變更

氏及名は變更し得ないのが原則であるが、正当の事由ある場合は裁判所の許可を受けて變更し得る。(同令第2条)

尚其の手續に付ての法令は近く発布されることになつて居る。折角内地人式の「氏」を定めても、名が在来の儘では竹に木を継いだ筈とする

から当然名を變更しなければなるまいか、斯る場合は名の變更に付正当の事由あるものと謂ひ得るだろう。

尚内地人が半島に本籍を定めることが出来ず、半島人が内地に本籍を定め得ないのは従来と少しも渝りがない。

以上の制令等を見ても感じられるとおり、「創氏改名」の実施にあつては、かなりの制時性あつたことが知られる。

ところで思うに、この創氏改名は、約4,000年<sup>に及ぶ</sup>朝鮮歴史はじまつて以来の出来事であつただけに、当時民衆はさぞかし勝手がわからず、固章狼狽し、さまざま悲喜劇を演じていたであらうことは、想像に難くないところである。

昭和の今日、既に昔<sup>はれ</sup>諱化しているが、これはちやうどわが國で明治2年9月に、それまで禁止されていた、平民が苗<sup>みよじ</sup>字をとをえることを許された時、あわてて村のなかの物知りの人のところへ行つて苗字をつけて貰つたり、一部落が全部同じ苗

字をつけたり、役場の書記が勝手に一村全部の人に魚の名や野菜の名をつけた。などという、はなしが思い出される。

次に蛇足ながら当時の状況について、読売新聞社発行、日本の歴史第10巻196ページ「壬申戸籍」の項のところで、明治7年1月、愛知県の出した布達の一節として次のように記してあったので掲記する。

#### 壬申戸籍

さる<sup>しんが</sup>辛未の年に戸籍編成が仰せ出されたが、当県のごときはほんの片田舎で、民心も愚劣だし、おまけにいろいろな根も葉もない流言があつて、はじめ県官が百方手をつくして編成したにもかかわらずいまこれをよくみると、たいへんあやまりが多い。

1人で二つの籍をもっているものがあるかと思えば、まったくおちているものもある。兄や姉よりも弟や妹のほうが年が上になっていたり、17、8歳の男が60歳以上の妻をもつたりしている。は

なはだしいのは戸籍から父母妻子がおちており、長男を長女とし妹を弟としているたぐいは少ない。云々と。

明治初年ごろと昭和14年では、時代の開きが相当あり、そのうえ日鮮双方の国柄の相違、民衆深淺の差などあることからして、一樣に同一視はできないであろうが、前にあげた「壬申戸籍」の例等から推してみても、なにしろ朝鮮人としては、姓はおるか名前までも日本人式に勘太郎とか五右衛門などというように、各自勝手につけるように、という趣旨のものであつたゆえ、相当なショックであつたことは、間違いないことであると思う。

#### 3. 創氏記念名刺交換会名簿

次にでは、このいわゆる創氏改名は、具体的にはどう行なわれたか、ということになるが、いまこのできあがつたものを眺めると、「日本式の氏名におす」というたてまえからして、至極当然な、なりゆきながら、そこに「一定の型」のようなものが、

みられるも、それこそ千差萬別で、ひと口にこうだ  
？、ときめきれないようである。だがしかし、前で  
述べた「一定の型」のようなものを、強いて分別す  
れば、だいたい以下に述べるように、分類できるの  
ではなかろうかと思う、

ここに引用説明しようとする、冒頭であげた「創  
氏記念名刺交換名簿」とは、同民会（会長平林麟四  
朗）主催で、昭和15年2月11日（昔の紀元節）  
に、時の朝鮮総督南次郎陸軍大将参席の下、朝鮮人  
約908名、内地人355名参加によつた、創氏記  
念祝賀名刺交換会が開催された際の、参列者名簿の  
ことをさすものである。そしてここでは、この名簿  
に登載されている908名の創氏改名されたものを  
中心に、分析分類していくことにする。なお、こ  
の908名の在来の朝鮮姓は、69姓であつた。

#### 4、創氏改名上での大分類

創氏記念名刺交換会名簿に載っているものを中心  
に、これを強いて分類すけてみれば、

- (1)、在来の姓名に執着をもつてされた傾向のもの、
  - (2)、日本での著名な人士の氏名を引用した傾向のも  
の、
  - (3)、日本人妻の里方の姓を用いるもの、
  - (4)、その他全く無関係に行なわれたとみられるもの
- 以上四系類に大別できるであろうと思う。そして、  
この四つの系類のうちで、どの分に従属するものが一  
番多いかと言えは、それは第一にあげた「在来の姓  
名に執着をもつてされた傾向のもの」が、最も多い  
ようである。

以下、前にあげた項目順に従つて、述べていくこ  
とにする。

#### 5、在来の姓名に執着をもつてされた傾向のもの

この系類に従属するものを、さらに小分別すれば、

- (1) 在来の姓字に一字を加え複字姓にしたもの、



- (2) 在来の姓名字はそのままだし、読み方だけを日本式にしたもの、
- (3) 在来の姓字の偏、旁り等を分解し、あるいは、それを除去したもの
- (4) 在来の姓字に旁り等をつけ、さらに一字を加えて複字姓にしたもの、
- (5) 在来の姓字のオンに類似した日本式姓をつくったもの、
- (6) 在来の複字姓字のうち一字を除去し、さらに一字を加えて日本姓らしくしているもの、
- (7) 在来の一字姓の下に特定の一字を加えて複字姓としているもの、
- (8) 特定の姓によく使われる日本式姓、
- (9) 出身地の名称を日本姓としているもの
- の9種目に小分類することができる。
- なお、ここにあげた、9種目の小分別中のあるものは、各項目と交錯しているものもみられる。

- (11) 在来の姓字に一字を加えて複字姓にしたもの

この部類のものは、後に述べる「(8)」の項のものと交錯したものもあるが、分類の仕方からして二様にとれるので、重複の嫌あるも、ここでもいったん掲げることにした。

この方法には、在来姓の上に一字を加えたものと、在来姓の下に一字を加えたものの二通りがある。そしてその数は、前者の形式によるものよりも、後者の形式によつたものの方が圧倒的に多いようである。

- イ、在来姓の上に一字を加えて複字姓にしたもの  
石一大石、田一上田、朝田、陽田、林一木林、大林など、

- ロ、在来姓の下に一字を加えて複字姓にしたもの  
前でも触れたとおり、この形式によるものは相当多いようである。例えば、

京城ゴム工業組合理事だった、大 錫 昌は、  
お 大 田 錫 昌 と、していたような式で

金 — 金沢、金子、金山、権 — 権藤、権田、権家  
 高 — 高田、高山、高島、江 — 江本、瑯 — 瑯城  
 南 — 南村、南山、大 — 大原、大村、大木、林 — 林田  
 深 — 深川、深田、深原、柳 — 柳田、柳沢、柳川、  
 孟 — 孟本、孟村、文 — 文山、文村、文田、麻 — 麻生  
 方 — 方山、方田、朴 — 朴山、朴井、朴田、朴村、  
 白 — 白宮、白川、白井、白田、徐 — 徐村、石 — 石山  
 成 — 成川、成山、成田、星 — 星山、星田、星川、  
 都 — 都谷、安 — 安田、安川、安永、元 — 元山、元田  
 王 — 王本、吳 — 吳村、吳山、吳松、嚴 — 嚴田  
 延 — 延山、延川、禹 — 禹川、魏 — 魏村、康 — 康本  
 李 — 李家、李村、李田、千 — 千田、千川、千原  
 池 — 池田、池野、池中、田 — 田中、田村、田上  
 尚 — 尚本、諸 — 諸岡、諸田、太 — 太田、太木、<sup>おなが</sup>永  
 片 — 片山、片田、平 — 平田、平山、河 — 河村、河本  
 夏 — 夏山、夏田、黄 — 黄田、黄野、玄 — 玄山、玄川、  
 洪 — 洪田、洪谷、洪原、崔 — 崔山、崔東、崔本、  
 などのように、その種類はたくさんあり、姓の数  
 において筆頭である金姓に関するものだけをあげ

てみても、前に記したものの以外にも、

金義、金光、金本、金田、金城、金岡、金原、  
 金村、金森、金川、金屋、金谷、金浦、金井、  
 金丸、金島、金林、金木、金石、金海、金平、  
 金輝、金久、金永、金松、金慶、金善、金清、  
 金安、金尚、

という風にその数はたくさんある。

(2) 在来の姓名字はそのままとし、読み方だけを日本式にしたもの。

この種に属するものには、漢字を訓読みとして、  
 内地人らしく聞きとれるものにおおいようである。  
 例えば、

<sup>りん</sup>林、<sup>ろう</sup>柳、<sup>たか</sup>高、<sup>ぎん</sup>登、<sup>ご</sup>吳、<sup>かん</sup>井、<sup>かん</sup>南。

などの姓は、このオンを耳にすれば、いかにも朝鮮人か中国人のものらしく聞えるが、一方に<sup>を</sup>を訓読みすれば「はやし、やなぎ、たか、かね、くれ、かたいくほおのき）。みなみ」となり、内地人の姓らしく、聞きとれるところからして、

京城育の絹布商	林	東協	は
京城育の絹布商	柳	新	は
同民会理事	高	永均	は
忠南参与官兼産業課長	金	雨英	は
絹布商	吳	誠煥	は
京城三興尋常小學校代理	朴	容勲	は
鉉業及び製薬業	朴	鍾梧	は
元山肝油株式会社員	南	百祐	は

はやし  
林  
やが  
柳  
たか  
高  
かね  
金  
い  
吳  
かた  
朴  
はら  
朴  
みな  
南

とう  
東  
し  
新  
なが  
永

きよう  
協  
せい  
成  
なほ  
均  
い  
英  
い  
煥  
い  
勲  
い  
梧  
い  
祐

と、創氏改名していたし、この外、太、江、桂、都、大、雷、明、文、萬、班、永、星、永、章、朱、中、池、車、倉、平、西などというような姓も、かような式で創氏していたであろうと推測されるものである。そしてここにあげた例でも見られるとおり、柳新は、名の（新）の下に（成）の一字を加えて「新成」と改名していて、高永均は名の一字（永）を姓に加えて「高永」と複字姓にしている等、さまざまな方法が行なわれ、当時の朝鮮人の苦心の程が察せられるところである。

また、南という姓にからんだはなしには、南という姓の朝鮮人が、時の南次郎朝鮮総督の上をいく気か「南太郎」と創氏改名したい-----と、申しでて当局から、たしなめられたという笑話も伝わっている。

(3) 在米の姓字の崩 旁り等に分解し、あるいは、それを除去したもの

この部類に属するものは非常に多岐にわたり、その数もまた、すこぶる多いようである。

まず、朴姓では、木部を残して

きど 木戸、松山、朴山、木村、鈴木、新井、松浦、

富木、新村、三木、竹村、朴井、高木、中朴、

朴原、楠本、新本、木山、木本、新木、新山など。

張姓では旁りの（長）を残して

長岡、長山、張西、長谷川など。

李姓では、冠りの（木）を残して

木村、森山、松山、松岡、松井、星木、徳所、

松本、木川、梅原、杏村、村田、三木、一木、

伊森、梅田、鈴木、木下、木山、碧木、正木、

峰村、桐本、松本、梧村、小林、木山、など。

韓姓では(車)を残して

あさやま あさもと あさみ  
朝山、朝本、朝海など。

宋姓では冠りの下の(木)を残して

まつといら  
山木、松平、松山、村山、松原、宇森、宮本など。

(下の二姓は冠り「木」を残している)

黄姓では冠り(土)を残して

ともだ ともやま  
共田、共山など

洪姓では旁り(共)を残して

共田、共山など

崔姓では旁り(佳)を残して

かやま  
佳山、鶴岡、鶴山、鶴田、山住などと、さら

に、上の(山)を残して

高山、山田、富山、鳩山、星山、松山、大山、

ずは ねは  
津山、朝山、香山、仁山、徳山、山本など

慎姓では旁り(眞)を残して

眞野、眞山、眞田、眞島など

車姓では象形の(車)の字から会意に延長させた。

こがさ  
轟、または分解した三中など

閔姓ではカマエ(門)を残して

門文、長門など

郭姓では旁り(享)の「舌」を残して

京山、京田などと

吳姓では上の「口」を残して

山口、吉田など

林姓では「木」を残して

木村、本田、木下、森、小林、大森など

というにして、創氏していた。

(4) 在采の姓字に旁り等をつけ、さらに一字を加えて

複字姓にしたもの

これは 在采の姓字に、前または旁り等をつける  
一字を構成し、さらに別に一字を加えて複字姓をつ

くつたものである。この分類にはいるものには

丁 — 所田、所村、田町、

尹 — 伊東、伊藤、伊原、伊山、



金 —— 鈴本、鈴木、鈴村、

呂 —— 呂本、呂田、

などのようなものがある。

- (5) 在来の姓字のオンに類似した日本式姓をつくつたもの

この部類に属すものは、あまり多くみられないが、次のような風にしていたものである。

忠北道穂山酒造会社員 劉 曾秀は、<sup>やなぎ おつみで</sup>柳 曾秀と創氏改名していたが、これは朝鮮語オンでは、漢字「劉」も「柳」も、同オンの「YU」であるところからして、劉から柳に転じ、さらにこの「柳」の字を、日本語訓読「やなぎ」としていたものである。

かような式で、李姓では同じ「桃」の類である

<sup>こ</sup>「杏」<sup>こむつ</sup>として、杏村（小村）としたものや

崔姓の「崔」を日本語読み、SAIとし、このオンから「佐位」などとし、また、さらに SAI に一字を加えて、「佐々木」、「斎藤」などという姓をつくつたもの、あるいは、俞姓から —— 湯本、

湯田。郭姓から —— 加藤。左姓から ——

佐藤などという創氏がなされている。

- (6) 在来の複字姓字のうち一字を除去し、さらに一字を加えて日本姓らしくしているもの

これは在来姓の、南宮、諸葛、獨孤、皇甫などという姓では、いかにも外国人らしくみられるところから、なされたものであろう。

南宮 —— 南田、南村、東方 —— 東山、東田、

西門 —— 西田、西山、西口、諸葛 —— 諸岡、

諸田、葛原、皇甫 —— 浦田、浦上、

- (7) 在来の一字姓の下に特定の一字を加えて複字姓としているもの

本項であげるものは、(1) (79 ページ参照) の項で説明したものと同じく「在来の単字姓の下に、別に一字を加えて二字姓にしている」点は、全く同様である。ただその性質において異なるものがある。それは前者の場合は、別に加える字が千差萬別とも言いたい程に、多様であるのに対して、後者の場合は非常に特定された文字が用いられるということである。

である。

すなわち、「元、山、田、川、原、村、城、井、野、谷、島、岡、松、木、沢、本」などの字が、在来単字姓の下に、あるいは、これらの文字を二字目に配して、創氏していた例がたくさんみられる。次にその一例をあげてみれば、

元	張元	秋元	玄元 <sup>くろもと</sup>	米元	石元	水元	河元
山	文山	白山	巴山	月山	完山	金山	光山
田	元田	権田	洪田	花田	孫田	杉田	光田
川	梁川	陽川	達川	永川	昌川	通川	白川
原	永原	光原	延原	昌原	成原	清原	千原
村	清村	金村	徳村	李村	田村	星村	広村
城	金城	岩城	国城	達城	真城	高城	月城
井	新井	玉井	岩井	荒井	白井	石井	永井
野	秋野	大野	松野	中野	星野	安野	河野
谷	金谷	大谷	高谷	吉谷	白谷	西谷	竹谷
島	平島	光島	高島	大島	吳島	金島	延島
岡	西岡	吉岡	鶴岡	松岡	徳岡	花岡	金岡
松	永松	金松	白松	青松	高松	平松	赤松

木—新木、荒木、松木、金木、大木、高木、水木、  
沢—金沢、朴沢、西沢、成沢、水沢、沼沢、平沢、  
本—国本、光本、高本、岩本、孟本、成本、永本、  
等々であり、これらの中には、白川、金山などという  
ような、その本貫所在地名を姓としたと、みられる  
ものもある。

また、姓字の二字目に、本または元の字を附加して、張本、金元というような式の創氏がよく行なわれていたが、これはちょうど、全州系統の李氏は、ほとんど「国本」と創氏している傾向等からして、本、元などの文字は、日本語として語路がいいことと、本、元の字はまた、基<sup>もと</sup>、源<sup>みなもと</sup>などの意にも通じるところからして、すなわち、〇家のもと（宗家）というような意味合から、創氏していたものではなかろうかと、考えられるものである。

(8) 特定の姓によく使われる日本式姓。

創氏されたものをみると、そこには、ある特定の姓にはまた、特定の創氏がなされていた傾向がみられる。

以下にこれまで述べてきたものをも含めて、一般的に多くみられるものを掲記してみれば、次のようなもの等がある。

朴—新井、 辺—邊、 康—信川、 許—岩村、  
洪—徳山、 曹—夏山、 崔—高山、 張—張本、  
郭—玄風、 姜—神農、 彬—豊川、 卞—徳山、  
文—文山、 高—高山、 高田、 李（全州の李）  
—国本、 鄭—鄭東、 松山、 徐—利川、 達川、  
尹—平沼、 坡平、 申—平山。

そしてこれらの中には、利川、高山（高）、信川、平山、坡平などというように、その姓の本貫所在地名を姓氏としているものもある。

なお、この本貫所在地名を姓氏としたと、みられるものは、この外にもたくさんあるが、これを一々掲記するには、あまりに広範多岐にわたるため、省略することとし、巻末「本貫」の項、末尾に附加した「本貫別姓氏一覧表」（127ページ参照）によつて、それを考察して頂きたい。

#### (9) 出身地の名称を日本姓としているもの

これは郡、邑、面、里（特に面、里名）や、または、それらの古名を日本式姓として、創氏したもののことである。その性質上、これもその数は膨大なものがある。

これらのうち、大きな一例だけをあげてみても、

甲山、豊山、文川、徳川、白川、中江、成川、  
宣川、松林、安東、金海、慶山、善山、河東、  
大田、大川、春川、益山、東山、梁山、永川、  
金浦、谷山。

などのようなものが、目に触れるであろう。

最後に、極くまれなことであろうも、たくさんの中には「諸承中異色の出世者の雅号等を姓氏に創氏した」ものもみられるので、その事例をあげて附け加えることにする。

それは、元朝鮮総督府警察官講習所の朝鮮語担任講師であつた、丁奎烈さんは創氏改名時に、茶山<sup>チャヤマ</sup> <sup>エイゾウ</sup>栄三とされていたことで知られる。

ところで、この「茶山」という名が、どこから出

たかという、それは丁奎烈さんの幾代か前に、  
丁若鏞（西紀1762年—1838年代。李朝22  
代正祖王のころ、朝鮮へ初めて種痘術を導入したこ  
とと、牧民心書その他の著者として有名な学者）と  
いう人がいて、この若鏞が用いていた代表的な雅号  
が「치산（茶山）」であつたところから、丁奎烈  
さんはこの雅号をとつて「ちややま茶山」と創氏していた  
ものであつた。

以上をもつて、「在来の姓名に執着をもつてされ  
た傾向のもの」の項を終える。

6 日本での著名な人士の氏名を引用した傾向のもの  
数多い中には、この部類に属するものも、ときたまみう  
けられる。次に事例をあけて説明する。

それは当時、京城府竹添町1の1におられ、四海公  
論社社長だつた金海鎮さんが、創氏改名時に、  
「伊藤<sup>いとうみつに</sup>光圀」とされていたことと知られる。

言うまでもなく、この「伊藤」は、明治の元勳のみ  
とりとし朝鮮にもゆかりの深かつた、伊藤博文の「伊  
藤」からとつたもので、名の「光圀」は、徳川幕府の

副将軍であり、大日本史の著者として有名な、中納言  
水戸光圀公の「光圀」をとつてしたものである。

また、在代朝鮮総督府警務局長のうち、美事な禿頭  
ぶりと異色の指導ぶりをもつて、朝鮮人からの信頼も  
厚く、いまだに話題にのぼつてくる、故丸山鶴吉氏に  
心酔した人が、「丸山」と創氏していることなどは、  
今日一般に知られているところである。

## 7 日本人妻の里方の姓を用いるもの

この類のものは改めて説明するまでもなく、自己の  
配偶者（内地人妻の里方）の姓をとつて、創氏したもの  
をいうのであり、その事例の掲記は省略する。

## 8 その他全く無関係に行なわれたとみられるもの

この部類に属するものとしては、前に述べた、同民  
会会長の平林麟四郎氏も、実はもと、京都府苑西町  
135におられた申錫麟氏であつたということと知  
られる。

これは既に説明した、(1)（在来の姓名に執着を……）  
と関連性ある「麟」の字が残っていて、あるいはまた、  
平林の「平」の字が、平山、平海、平昌、平康などの



本貫所在地名からとられたものであるかも知れないが、一応この部類のものでなかろうかと思われる。

また、京城府新堂町ノアの39におられた、会社員金錫鎮さんは、仏国寺ぶつこくじと創氏改名していたが、「仏国寺」という名が新羅の法興王時代に建てられたと、伝わる寺の名と同一であるにもせよ、日本の姓らしく見えるのではなかろうか。

これをもつて「日本式姓名（日本名）」に関するものを終え、次に項を改めて朝鮮人の「本貫」について述べることにする。

#### 七、本貫について

これまで述べてきた中でも、ところどころ「本貫」という名を使用してきたが、この「本貫」は朝鮮人がもつ大きな特色の一つで、朝鮮人であれば、普通誰もがもっていることを建前としているものである。

しかしながら、今日、日本に在留している朝鮮人の中には、前節でも触れたように、その特殊事情の影響によつて、この「本貫」存在の有無さえも、どの程度に認識されているかは、疑問とするフシもないでもない。

たとえば朝鮮では、女が結婚しても、もとの自分の姓を夫の姓に変えることをしないが、日本式姓のものは、山田〇〇の妻は、その出身が「李」であつても、同じく「山田」としている者が非常に多いというように、「姓」の觀念から「氏」の觀念へ移行しつつある傾向等からみても、容易に推測できるところである。

だがその反面、またある範囲の人々の中では、ながい間の慣行に基く伝承として、これが陋固ろうことして、維持されているということは、その言をまつまでもないことである。

／＼本貫は「その姓の始祖発祥地名を表示」するもの、「本貫」を一言にしていうならば、本貫とは「その姓の始祖発祥地名を表示するもの」であると言える。

本貫はまた、別に「本」「貫籍」「籍貫」とも呼ばれている。

この「本貫」をさらにわかり易く、日本のいわゆる4姓（源・平・藤・橘）のうちの、源氏・平氏の例をひいてみれば、

恒武平氏（高望王）からは、常陸（義幹）、畠山

(重能)、河越(重頼)、上総(広常)、千葉(常胤)、  
相馬(師常)、武石(胤盛)、大須賀(胤信)、国分  
(胤道)、東(胤頼)、三浦(義次)、和田(義盛)、  
鎌倉(景正)、大庭(景能)、梶原(景時)。

清和源氏(貞純親王)からは、新田(義定)、足利  
(義康)、佐竹(昌義)、武田(信義)、安田(義定)、  
平賀(義盛)、大内(惟義)、水曾(義仲)。

などというように、各自が治めていた地名をとって、  
たくさんの「氏」が發生しているが、これらはいず  
れも、その「みなもと」は同一であつても「氏」が変  
わつてゐるに反し、朝鮮の場合は、あくまで源氏は  
「源氏」であり、平氏は「平氏」であつて、もし假り  
に、平氏の始祖発祥の地が「六波羅」であつたとし、  
源氏の始祖発祥の地が「明石」であつたとすれば、平  
氏の本貫は「六波羅」で、源氏の本貫は「明石」とい  
うことになる。

したがつて、前にかかげたような事例からして、朝  
鮮の一家一門の数は、われわれの想像をはかるかに越  
える、膨大なものもでてくる筈である。

朝鮮では子は父の姓と本貫を継ぐのが原則とされ  
てゐるし、父の分らない子は、母の姓と本貫を継ぎ、  
父母とも分らないものは、法院の許可を得て姓と本貫  
を創設し、後に父または母が分るようになった時には、  
父または母の姓と本貫を継ぐことになつてゐる。

では、各「本貫」の宗家で保管している「族譜」  
による本貫識別の外に、公的なものとして、どのよう  
なものがあるかという、それは戸籍宗族の中に記入  
されたものがある。

朝鮮人の戸籍謄本は、その記載事項がほとんど日本  
人のものと同じであるが、ただこの「本貫」の項のあ  
ることだけが変わつてゐるのである。次にその記載例を  
掲げることにする。

(事例 1)

本籍	廣尚北道栄州郡栄州邑古舘里 31番地	前主	金 田 泳 敏
昭和17年3月5日夫金田泳敏死亡ニ因リ 婚姻解消シ昭和17年3月5日前主 金田泳敏 死亡ニ因リ戸主相続届出同月30日受付 昭和18年10月2日大邱地方法院安東支庁許可 裁判ニ因リ其ノ名明玉ヲ明子ト変更届出 同年拾月20日受付 ㊟		金 田 明 子 前主 亡 金 田 泳 敏 妻 父 黄 大 錫 長女 性 及 本 貴 母 泰 氏 年 海 貴	
全 順主ト婚姻届出 昭和17年9月6日受付 昭和18年6月20日大邱地方法院安東支庁 許可ノ裁判ニ因リ其ノ名次春ヲ松二郎ト変更届 出同年10月21日 受付 ㊟		望 明治23年1月3日 父 亡 金 仲 浩 式男 性 及 本 貴 母 亡 李 順 伊 咸 昌 金 松 二 郎 出生 明治40年5月6日	

(事例 2)

本籍	ソウル 特別市 鐘路区 礼智洞101番地	前主	李 丙 煥
檀紀4258年7月9日 前主死亡により 戸主 相続届出 同月15日 受付 ㊟		前主 亡 李 丙 煥 長男 父 李 丙 煥 長 本 貴 母 劉 彩 鳳 男 咸 煥 李 圭 徹 出生 檀紀4235年2月6日 父 朴 永 根 長女 本 貴 母 崔 月 峰 女 密 陽 朴 春 柳 出生 檀紀4239年5月4日	
忠清南道公州郡鷄竜面敬天里3番地 戸主朴永根 長女檀紀4258年12月5日 李圭徹と婚 姻届出同日入籍 ㊟			

前の例で知られるように、「事例ノ」は、昭和ノ年ごろ、すなわち朝鮮がまだ、朝鮮総督府統治下にあった当時のものであり、「事例ニ」は現在のものである。

なお、この「本貫」は、通常「金海金」「延安李」「密陽朴」「海州鄭」「南原尹」「平山申」なごとうように、その姓に「本貫」をつけて併称している。

この本貫について、どの姓がどここの地を本貫としているかということについて、今日まですべての朝鮮人について最密に調査されたものはない。

「増補文献備考」(朝鮮の百科辞典にあたるもの、本書10ページ参照)には、姓496について本貫姓氏別一覧表を記載しているが、その本貫の地名の多いものをみると、金500、李470、崔326、朴314、張246、林216、趙210、鄭210、全178、宋172、吳164、黄163、白157、申155、徐153、等があげられている。

そしてだいたいにおいて、本貫数の10以下のものが大部分を占め、また本貫不明のものも140姓の多

きに達している。

## 2. 朝鮮の名門

ときおり新聞・雑誌類の書評・人物紹介などで、「金〇〇氏は韓国、両班(ヤンバン)の出身にして……」というように、書き初めているのを見ることがある。

この「両班」とは封建李朝時代の身分制度中、支配階級では「中人」(職官・訳官・寫字官・律官・医官等)、「吏属」(京衙前・郷衙前・録事・尹長・吏房等)の最上位に位していたものである。「両班」という言葉は本来東班と西班、すなわち文武官僚らをあわせ呼ぶ名称であつたが、これが終りには文武官僚になれる身分を示す語となつていたものである。であるから「両班(ヤンバン)の出身云々」は、よく考えるとおかしい紹介の仕方であるとも言える。

そしてこの「両班」という言葉は現在では、かような身分を示すことばかり飛躍して、社会的に名の知られた人、組織等での上級にある者等に対しても「〇両班」「両班サラム」(ヤンバンサラム)と言つたりし



ている。またこの「兩班」は一種のニックネーム的なものとしても使われる。恰幅のいい人、金持などに対しても、前と同様に呼んだりしている。

なおついでに李朝時代の被支配層について述べれば、これには「良人」(常民とも) (農民・商人・漁民・手工業者等)「賤民」(公賤・公奴婢・官奴婢・馭卒・妓生・内人・私奴婢・白丁・下級僧侶等)の二種があつた。すなわち封建李朝時代には大別して

#### (1) 支配階級

- 1. 兩班
- 2. 中人
- 3. 更属

#### (2) 被支配階級

- 1. 良人 (常民)
- 2. 賤民

の5段階の身分層に分つていたものであつた。

朝鮮は隣接の大国だつた中国から絶えず政治的影響をうけると共に、中国文化を直接吸収し、その制度等を模倣してきたところから、中国で招頭した「群議放

伐」思想にも染み、地理的關係も伴つて、日本とは国の生成発展方式が著しく異なつていたことからして、わが国での「五摂家」(近衛・九条・二条・一条・鷹司)のような家柄のようなものはない。

今日朝鮮で名門(名家)と言われているものの多くは「東国名賢録」(この東国名賢録と性質の類似した書籍には、李朝時代につくられた人物考・名臣録・人朝鮮弘文社から出版された朝鮮古今名賢伝等数種ある。)の中に、過去、閣僚・武官・名儒等をたくさん出している各家を名門(名家)と呼んでいる。

そしてこの「東国名賢録」の中には、李朝の4代宣祖王25年(後陽成天皇文祿元年・西紀1592年)4月、豊太閤朝鮮出兵のみぎり、加里浦僉候から全羅右道水軍節度使(現在の艦隊司令長官に比す)に抜てきされた、李舜臣が潜水艦の元祖だといわれる「龜甲船」というものを使つて、日本の脇坂中務大輔安治の軍(水軍)を大いに撃破したことで有名な、忠武公李舜臣をはじめ、高麗朝末の忠臣、圖隱鄭夢周、李朝端宗王朝代の生・死二臣、はたまた東国聖儒とまで称される。宋時烈・李退溪など著名な文武人士の氏名が

列挙されている。

まえで述べたような観点から名門とされていたものは次のようなものである。(本貫下の数字は東国名賢録にのせられている人員の数を示す)

李氏〔全州 48・驪州 12・玄州 16・牛峯 5・慶州 11・韓山 13・全義 9・竜仁 4・碧琮 12・光州 3・星山 12・仁川 2・鉄城 4・載寧 5・陝川 6・平昌 2・巴山 4・洪州 2・清州 2・富平 2・丹陽 2・清安 2・陽城 2・興陽 2・順天 3・礼安 3・原州 2・永川 3・咸平 2・遂安 2・泗川 2・〕

金氏〔光山 21・瑞興 2・安東 21・清風 13・善山の・蔚山 4・義城 9・延安 5・高靈 2・慶州 7・彦陽 3・江陵 3・金海 5・原州 3・豊山 3・海平 2・商山 2・永同 2・扶安 2・〕

朴氏〔密陽 19・潘南 20・高靈 10・竹山 3・順天 5・慶州 5・忠州 3・咸陽 2・尚州 2・洪州 2・鎮原 2・三陟 2〕

宋氏〔恩津 27・礪山 8・新平 2・瑞山 2・水原 1・洛城 3・鎮川 1〕

鄭氏〔河東 3・清州 5・東萊 13・延日 7・八溪 5・晋陽 4・海州 4・慶州 2・奉化 3・瑞山 3・温陽 6〕

趙氏〔楊州 14・漢陽 5・白川 5・豊穰 8・林川 7・咸安 22・平壤 3・淳昌 2〕

閔氏〔驪興 18〕

洪氏〔南陽 17・豊山 6・唐城 2・定溪 2・懷仁 2〕

成氏〔昌寧 19〕

曹氏〔昌寧 8〕

柳氏〔豊山 5・文化 12・善山 3・晋州 6・興陽 3・全州 4〕

徐氏〔達城 11・利川 2〕

沈氏〔青松 14・豊山 2・三陟 2〕

申氏〔平山 13・高靈 8〕

尹氏〔坡平 22・海平 9・海南 7・七泉 2・茂松 4・南原 2・咸安 2〕

吳氏〔海州 9・同福 3・咸陽 3・高敞 2・昌平 2・長興 1〕

韓氏〔清州 19〕

権氏〔安東 22〕

南氏〔宜寧 13・英陽 2・固城 1・寧越 1〕

安氏〔順興 12・松州 3・康津 3・竹山 2〕

河氏〔晉陽 11〕

姜氏〔晉陽 19・衿川 2〕

張氏〔仁同 5・德水 4・丹陽 2〕

黃氏〔長水 7・平海 3・昌原 7・尚州 2〕

許氏〔陽川 16・河陽 3・金海 3〕

崔氏〔全州 10・朔寧 7・和順 3・江陵 4・慶州 8

・陽州 2・海州 2・光陽 2・鐵谷 3・永川 2・興海 2〕

盧氏〔豐川 4・光州 3・交河 2〕

郭氏〔玄風 7・清州 5〕

林氏〔善山 4・恩津 4・平沃 3・會津 2・羅州 3〕

慎氏〔居昌 7〕

田氏〔潭陽 9〕

俞氏〔杞溪 12〕

魚氏〔咸從 8〕

白氏〔水原 7〕

蔡氏〔平康 7・仁川 2〕

孟氏〔新昌 2〕

任氏〔豐川 8〕

嚴氏〔寧越 4〕

奇氏〔幸州 6〕

元氏〔原州 6〕

高氏〔長興 8〕

具氏〔綾城 9〕

文氏〔南平 7〕

禹氏〔丹陽 10〕

卞氏〔密陽 9〕

東氏〔信川 7〕

呂氏〔星州 4・咸陽 6〕

羅氏〔羅州 6〕

辺氏〔長城 5〕

裴氏〔星州 5・金海 1〕

梁氏〔濟州 7〕

丁氏〔南原 5〕

殷氏〔幸州 4〕

孫氏〔密陽 3・安東 2〕

辛氏〔寧越 3・靈山 3〕

睦氏〔泗川 5〕

蘓氏〔晉陽 4〕

車氏〔延安 3〕

琴氏〔奉化 4〕

王氏〔開城 3〕

楊氏〔恭原 5〕

吉氏〔善山 3〕

周氏〔尚州 3〕

朱氏〔益山 1〕

全氏〔全州 1・竹山 1・沃川 2〕

陳氏〔驪陽 3〕

尚氏〔木川 2〕

孔氏〔曲阜 2〕

表氏〔新昌 2〕

玄氏〔漣川 2〕

薛氏〔綾城 2〕

劉氏〔居昌 2〕

奉氏〔長水 2〕

馬氏〔益山 2〕

宣氏〔固城 2〕

潘氏〔坡州 2〕

慶氏〔清州 2〕

房氏〔南原 2〕

方氏〔南原 2〕

石氏〔安州 2〕

卜氏〔咸興 2〕

池氏〔忠州 1〕

楔氏〔慶州 1〕

諸氏〔固城 1〕

麻氏〔開城 1〕

都氏〔星州 1〕

延氏〔洪州 1〕

十氏〔龜宮 1〕

甘氏〔昌原 1〕

廉氏〔昌城 1〕

鮮于氏〔平壤 1〕

南宮氏〔原州 1〕

皇甫氏〔永川 2〕



## 成氏（順天ノ）

注、以上の本貫地名は、ノダ五ノ年ノ月、韓陽新聞社発行になる「東国名賢録」から転写したものである。（総数ノ二九・二名が登載されている）これは後に附するところの「増補文献備考」の「本貫姓氏別一覧表」中にある本貫所在地名と一部相違している点があるようで、またなかには「皇甫氏」での場合のように、その本貫は「氷川」と書かれていたが、これは「永川」の誤りではないかと思われたので、本書では「永川」としておいたが、かような個所が外にも二個所ほどある。

そしてこれら同一の祖先から出た同姓同本の中にも、その子孫が分れて幾つもの派をなしているものがある。その有名なものに、全州李氏などは五代王の別子その他によつて百余派に分れ、金海金氏及び密陽朴氏は各ノ三派に、慶州金氏は九派になつてゐるもの等がある。

## 3. 姓の由来

「姓にまつわるる由来については、本書の6ページ

以下に詳しく触れたところであるが、この機会にかねて森田芳夫氏がこの問題について、考証発表されていた全文を以下に掲記して補足することにする。

「姓」が父系の血統を示すものであるという考え方は、中国のものであり、朝鮮は中国からそれを輸入したのであつた。

古代の朝鮮人の名前をみると、今日の「姓」という觀念は、はつきりしていない。その証拠に大古の時代に、日本に渡来してきた朝鮮人の名前をみると、たとえば、日本書記や古事記に朝鮮から渡来した人として、崇神天皇や垂仁天皇の時代に、任那の「つぬがあらし」（都怒我阿羅斯）や、「そなかしち」（蘇那曷叱知）の名を伝えている。また、応神天皇の時代に、百濟から馬二頭をもつてきて、学ある故に皇太子の師になつた「阿直岐」（阿直岐）や、論語や十字文をもつてきた「わに」（王仁）の名など、また平安時代のはじめにつくられた「新撰姓氏録」に「諸蕃」（帰化人）として記されたものの名前をみても、「ぬりのおみ」（奴利使主）「さりこむ」（佐利己牟）などのように、

今の朝鮮人のもつ姓と同じでないものが多くみられる。今から、400年近い前に、新羅の第24代の眞興王が、その領土を巡視したときの記念の石碑が、慶南の昌寧や、ソウルの北漢山や咸南の山間に残っている。そこには、中国式の姓はみあたらず、「忽利」「竹夫」「福登」などの名が彫られている。

これらは、朝鮮人の本来の名前に漢字をあてはめたものである。李朝の学者李重煥は、その著「八域志」の中で

「新羅の末より中国と通じてはじめて姓氏を制す。しかれども、ただ仕官士族はこれありて民庶はみなあるなし。高麗に至りて三韓を混一し、はじめて中国氏族にならいて姓を八路にわかす。人みな姓あり」

と述べている。今から千余年前、新羅が唐の力をかりて、百濟・高句麗をほろぼして統一の業をなしてから、唐文化はとうとう朝鮮にはいつた。先進国の文化様式をまねて中国流の名前を朝鮮の人たちがつけるようになった。それは、はじめは支配階級だけであつたが、文化の普及とともに、だんだん中流から下層に

及んだ。国家に功勞あつたものに、王が姓を賜われることもあつた。また、金をだして由緒あるものの族譜に自分の先祖を入れてもらうものもいた。

この中国の姓の模倣とともに、中国の「姓」の觀念に含まれている家族制度が朝鮮社会にはいつた。とくに、李朝時代に、儒教が政治・教育・文化の指導原理になつてから、祖先崇拜の冠婚葬祭の規定の嚴守が強調され、父系中心の家族制度は、朝鮮社会の基幹になつた。

しかし、李朝の終りごろまでは、下層階級には、まだまだ姓をもたないものが多かったという。文祿慶長の後、日本の武將が朝鮮の陶工をつれ帰っているが、その中に、福岡の城主黒田長政のつれ帰つた「八山」（のちに高取八歳重貞と改名して「高取焼」をはじめ）。平戸の城主松浦鎮信のつれ帰つた「巨閑」「頭六」（のちに「平戸焼」をはじめ）。などは姓をもつていなかった。当時朝鮮社会で陶工は下層社会のものとされていたからである。奴隸や特殊部落の人々は、一般的に姓がなかった。

従来、朝鮮における戸籍は、あるにはあつたが整備されておらず、全人口も分らなかつたので、日本の統監政治開始後の明治42年3月に、「民籍法」を施行して、その全戸籍を整えることになつた。そのとき、警察官が一家家庭を訪問して戸口調査をし、憲兵も、その事務に参加して、一世帯ごとにその申告をもとにして全朝鮮人の戸籍をつくつた。その結果（当時戸口274万2、263戸、人口1,293万4、282人が把握された。）そのとき各戸の申告に対して、一々審査吟味する暇もなく戸籍簿に姓と本貫が記された。

したがつて、すべての朝鮮人が姓と本貫を明らかにした戸籍をもつにいたつたのは、今から約50年前であるといえよう。それとともに、姓のもつ父系血族主義の儒教的理念が、全朝鮮人を包摂するにいたつたのである。

#### 4 同本同姓の一家

さきに本書57ページで触れた「同本同姓の一家」という点に関しては、次のように明瞭に解説されていた。

朝鮮には日本式の「氏」はないけれど、本貫と姓をあわせたものを「姓氏」といい、本貫と姓を同じくするものを「同本同姓」という。そして、江陵金氏と光山金氏のように、本貫が違つていても、ともに新羅の金閔智からでたものとしてゐるものでもあり、また、安東权氏は、もと慶州金氏であつたが、高麗太祖のときに、权姓を賜つて「安東」を本貫に定めたという由来があるものもあり、これらは「同本同姓」と同じものとされている。この同本同姓のものの集団を「一家」(일가)という。これは日本の一家よりは、はるかに広い大親族である。

この一家の世系を記載して、その血統関係を明らかにした系譜を「族譜」または「宗譜」という。その祖先は、必ず有名であつた人をあげている。中国で有名であつたもの、中国から移住してきたもの、また新羅や任那の王様とか、また××大君(王の嫡出子の尊称)など記されている。この族譜は、祖先以来の系図なので、膨大な量にのぼり、数年ごとに一家の主なものが集まつて、その出生者などを付記訂正する。この

族譜のない家は、真正の名門でないとされたので、大切に保管している。族譜を印刷する場合も多く、日本統治時代に、この族譜の刊行数が各種出版物の首位をしめていた。また筆写によるものも多く行なわれている。

しかしその反面、古来門閥を重んじた結果、本質を偽り、名族を濫称した例はたくさんあり、族譜の信憑しがたいことは、既に李朝の学者丁若鏞等がこれを痛論していたところでもある。したがって、新しい理念をもつ若い人たちは、この族譜をあまり尊重しない気持でいる。

朝鮮の親族関係において、日本の「親等」にあたる言葉を「寸」(촌)であらわしている。寸(朝鮮語チヨン)は、関節の意味である。そしてこの「寸」は「親等」と同じく、「一寸」「二寸」と自分を起算点としてさかのぼって計算するけれど、父や祖父には、つかわない。叔父を「三寸」、いとこを「四寸」、いとこの子を「五寸」とよぶ。母や妻方の親類には「外」(외)をつけ、母の弟は、「外叔父」「外三寸」

というように呼んでいる。

この一家の長男の家は、一族の中心としてその宗系を特続し、先祖の祭祀をするので尊敬される。それから、この一家の会を「宗中」といい、祖先の祭祀、墳墓の保存、相互の援助、親睦と福利の増進を目的としており、その団体の運営について、規則がつくられている。

その宗族として、埋葬・祭祀をする土地 また祭祀費用を出すための林野をもっている。韓国で実施した農地改革法でも、墳墓を守護するための農地には、一定の制限を設けて、特別にその所有権を認めていた。

韓国の新民法では、「墳墓にぞくする林野・農地・族譜・祭具の所有権を戸主相続人が継承する」ことの規定がある。

韓国の新聞によく「×××氏花樹会」などと広告されているのは、その一家の親睦会の予告である。

親類つきあいには、通常フ、8寸程度であるが、昔は親族のノ人が、顯官にでもなれば、貧乏な親類のものが二十寸ぐらいまでも押しかけて厄介をかけることも平



気でしていたし、受ける方でも、かようなことは慣習化されていたものである。そしてかような点から一種の団結心も生じ、その相互扶助精神のもと、あたかも焼土の中から芽ばえる雑草のような強い性根と、粘着性あるその民族性が自然につちかわれたという、一面もあると思う。

この「本貫と姓」で結合した同姓同本の血縁組織が朝鮮民族社会に、根をはつていて、大きな勢力をもっている。

金海金氏、全州李氏、密陽朴氏などは、現在その同姓同本の派を合わせた人員は、数十万人にのぼるといわれている。また少なくとも一家の人員数方を数えるものは多い。したがって、これらが一つになつて動くとなると、その社会的力はさきわめて大きい。

最近の選挙で「かれは氏族票だけで何票あるから当選する。」とか、また、「かれは氏族票がないから駄目だ。」などと、よく噂されていた等から推しても、朝鮮の政治的・経済的社会的人間のつながりは、この一家の関係から観察することが大事である。

## 5. 親族・結婚・養子

以下「親族の範囲・結婚・養子」の三つについて、かいつまんで述べることにする。

### (1) 親族の範囲

朝鮮の親族の範囲は、李朝時代には相当にひろく、祭祀と喪礼の際に、親系の遠い近いによつて、その着る服装の色及び様式とその服装をつける期間を定めていた。日本統治時代になつても「親族」の範囲は、この服制のある一定の範囲内のものに規定していた。

縦に高祖母・曾祖母・祖母・自己・子・孫・曾孫・玄孫、横にその兄弟・従兄弟・角従兄弟・三従兄弟がある。遠くは、祖父のことこの孫にあたる八親等まで、また、夫の方は父のいとこの孫く七親等)まで含んでいるが、母方の親族は、いとこ(四親等)までであり、妻の方は、父母だけである。すなわち、父系血族に比べると、母系の親族と妻の生家に関し親族範囲がせまいのが特色である。

こういう観念は、韓国の新民法の規定にも残され

ている。日本の民法による「親族の範囲」は、「六親等内の血族、配偶者、三親等内の姻族」(第725条)となつてゐるが、韓国の新民法では「配偶者・及び姻戚を親族とする。」(民法第767条)と定義し、別に「親族の範囲」としては、そのうち法律上の効力の及ぶ範囲について限界を劃し、第777条に「親族関係による法律上の効力は、本法または他の法律に特別な規定のないかぎり、次の各号に該当するものに及ぶ」

として、

- イ 八親等以内の父系血族
- ロ 四親等以内の母系血族
- ハ 夫の四親等以内の母系血族
- ニ 妻の父母
- ホ 配偶者

をあげている。すなわち、韓国で法律的效果の及ぶ範囲は、父系血族が日本の六親等に対し八親等で、二親等ひろく、夫の母系血族も、日本の三親等に対し四親等で一親等ひろい。これに反し、母系血族が

日本の六親等に対し四親等で二親等せまゝ、姻族は日本の三親等に対して韓国では妻の父母だけになつてゐる。

韓国の憲法では、すべての国民は法律の前に平等であり、性別によつて差別をうけないと規定してゐるのに加かわらず、こういう差別のみられるのは、韓国の父系血族を中心とする社会の現実を無視できなかったことにある。

このように、韓国の新民法で、父系血族と母系血族及び姻族の中で、夫の方と妻の方の間にあきらかな差別を認めている立法例は、他に類例のないものであると指摘されている。(鄭光鉉著「新親族法要論」)

## (2) 結 婚

### — 同姓同本結婚の禁止 —

結婚に関して最も問題視されるのは、韓国新民法第809条に規定されている「同姓同本である血族の間では、婚姻をすることができない」という一条である。このいわゆる「同姓同本結婚の禁止」のた

めに、これまでかすかすの若い男女の恋愛にもとずく、社会悲劇を惹起し新聞報道等によつて社会的に注目され、論議の的とされていたものである。

新民法（1960年1月1日実施）起草にあたつた韓国国会の法制司法委員たちは、「男系血統としては百寸、二百寸となつても婚姻を禁止しているのに反し、母系では6寸、7寸に過ぎない間でも婚姻がゆるされるということは矛盾である」等を指摘して、この「同姓同本結婚の禁止」条項の削除をとなえ、最初削除していたところ、一方伝統を守る固陋な人たちから、同姓同本結婚は「野獣の行爲」であるとか、「淳風美俗の破壊」などという反対がはげしくなり、国会での民法審議の大半は、この賛否両論で費やされた観があつた。最後に、李承晩元大統領が談話を發表して、「わが国は、古来礼儀の国である。人間は他の禽獣と異なり、道徳を知るにある。同姓同本結婚は、生物学的にも、わが民族の退化を招来するから、われらは反対である。」と述べたために、とうとう前に記したような一条が入つてし

まつたものである。

しかし、韓国の民法学者は、「同姓同本といつても、親戚関係の分からないように遠い間柄の結婚は、慣習法上認められる」という見解をとつているものもある。（韓国の雑誌「女苑」1960年4月号朴鉉兌「同姓同本は結婚することができるか」）

なお、結婚の適令は、韓国の新民法では、男子満18才、女子満16才として、日本と同じであるが、「男子27才、女子23才未満のものが結婚をするときは、父母の同意を得なければならない」（第808条）とあるのは、成年（韓国の成年は日本と同じく満20才）に達しても、親たちが安心しない気持が入っている。

### (3) 養子

#### — 異姓不養 —

朝鮮での養子「異姓不養」制度も、父系中心制度から発し、慣習化された変つたものの一つである。姓は血統を意味し、一生変ることなく、しかも相続者は、先祖の祭祀を行なう義務を負っているという

ことは、まえに述べたところである。したがって養子をするには、一定の条件が必要になるのである。

たとえば、金さんの家に、後を継ぐ男の子がいなくて、その店にまじめに働いている番頭さんの朴さんが主人たる金さんの気に入ったとする。

日本なら、簡単にその朴さんを養子にできるのであるが、朝鮮ではその「朴」が「金」に変わることができないので養子にできないのである。そこで、家を継ぐ養子は、絶対に、同姓同本の一家の中から、その養子になる者を選ばなければならない。このことを古来「異姓不養」と言っている。またその養子には、父子の序を乱さないために、一家の系譜上の金さんと同じ系列にある兄弟とか、従兄弟とか、そういう同列のものの男の子を入れることにしていた。

この場合に、もし金さんの家に娘が一人いたとする。日本ならば、その娘に適当な婿を迎えればいいのだけれど、朝鮮では、そうはいかないのである。養子には、同じ本貫の金氏の一族の者を選ばなければいけないからである。それと、その娘が結婚す

るとなると、「同姓同本結婚の禁止」法則にひつかかるわけになる。そこで、最愛の娘は外に嫁にやり、同姓同本の一家の中からきた養子に、また別のところから嫁をつれてくることになる。これが李朝以来の伝統的な慣習であつた。

なお、この養子制度については、本書 68 ページその他で詳しく触れたとおり、創氏制度実施のときに、婿養子もできるよう改めたが、それが終戦後の米軍政法令で、またもとに戻されていた。

韓国の新民法は旧来の養子制度について、「養子であつて、養父と同姓同本でないものは、養家の戸主相続をすることができない。」(第877条)と規定して、この伝統的な考え方を立法化しているが、一方、「女婿にするために養子とすることができる。この場合には、女婿である養子は、養親の家に入籍する。」(第876条)として、戸主相続と別に、婿養子ができるように改正して、時勢に合うようにしている。

#### 6. 本貫別姓氏一覧表



終りに朝鮮における姓の沿革及び各姓の始祖については、「朝鮮文化史大全」(青柳南冥著)その他各種の文献があるので、これが記述は省略することとし、姓の調査には本貫別の姓氏をみる必要があると思われるので、「増補文献備考」の記述を基礎としてつくられたところの、「朝鮮の姓」のなかにある「本貫別姓氏一覧表」を次に付記する。

◎ 本貫別姓氏一覧表

李氏 全州、慶州、延安、全義、廣州、韓山、德永<sup>德永屬</sup>  
 竟仁、曉興<sup>驪州別号</sup>、星州、京山<sup>星州別号</sup>、碧珍<sup>星州別号</sup>、  
 広平<sup>星州別号</sup>、加利<sup>星州屬</sup>、固城、陽城、牛峰<sup>金川</sup>、  
 眞寶、咸平、禮安、富平、丹陽、永川、興陽、  
 長水、平昌、陝川、江陽<sup>麟川</sup>、清州、光州、  
 光陽、咸安、仁川、原州、古阜、羽溪<sup>江陵屬</sup>、  
 戴寧、青海<sup>蔚寧</sup>、河決、洪州、泗川、新平、  
 安城、梁山、梁州<sup>梁山</sup>、公州、平壤、園山、安、  
 岳、開城、益山、遂安、朝宗<sup>加平屬</sup>、蔚山、竜川、  
 貞州<sup>蔚寧別号</sup>、延豊、水泉、楊州、徳山、林川、咸、  
 陽、牙山、順天、潭陽、泰安、釜洋、忠州、高、  
 靈、竟安、寧海、舒川、道安<sup>清安別号</sup>、祥原、益興<sup>蔚寧別号</sup>、  
 砥平、臨陂、三陟、保城<sup>邑陽一作竟</sup>、商山<sup>尚州別号</sup>、  
 河陰<sup>江華屬</sup>、扶餘、鎮安、安辺、順川、江華、鎮、  
 江<sup>江華屬</sup>、漢陽<sup>楊州屬</sup>、豊壤<sup>楊州屬</sup>、沙川<sup>楊州屬</sup>、坡平、  
 坡<sup>州別号</sup>、雙阜<sup>水泉屬</sup>、青丘<sup>水泉地方</sup>、内詠<sup>水泉地方</sup>、半忽<sup>水泉地方</sup>、  
 今音<sup>水泉地方</sup>、宗徳<sup>水泉地方</sup>、南陽、南川<sup>利川別号</sup>、守安<sup>通津屬</sup>、  
 臨津<sup>長湍屬</sup>、竹山、交河、深岳<sup>交河屬</sup>、僧嶺<sup>朔寧別号</sup>、  
 臨江<sup>長湍屬</sup>

辛州<sup>高陽別</sup> 加平 振威 永新<sup>振威屬</sup> 處仁<sup>處仁屬</sup>  
陰竹 秋溪<sup>陽別</sup> 栗川 杓川 連川 拜音<sup>清州地方</sup>  
門身<sup>清州地方</sup> 調豐<sup>清州地方</sup> 儒城<sup>公州屬</sup> 新豐<sup>公州屬</sup> 高  
丘<sup>洪州屬</sup> 興陽<sup>洪州屬</sup> 驪陽<sup>洪州屬</sup> 政聲<sup>洪州地方</sup> 雲川  
洪州<sup>洪州地方</sup> 清風 天安 豐歲<sup>天安屬</sup> 頤義<sup>天安屬</sup> 毛山  
天安<sup>天安地方</sup> 沔川 瑞山 地谷<sup>瑞山屬</sup> 仁政<sup>瑞山地方</sup> 沃川  
陽山<sup>沃川屬</sup> 溫陽 大興 居迎<sup>大興屬</sup> 文義 懷仁  
清安 青山 定山 德恩<sup>德恩屬</sup> 鎮岑 石城 平  
沃 青陽 新昌 保寧 藍浦 稷山 陰城 連  
山 尼城 鎮川 結城 唐津 禮山 木川 永  
春 德泉<sup>牙山屬</sup> 利城<sup>全州屬</sup> 豆毛<sup>全州屬</sup> 羅州 水  
多<sup>羅州屬</sup> 綾州 南京 居寧<sup>南原屬</sup> 長興 會寧<sup>長興屬</sup>  
富有<sup>礪山屬</sup> 原栗<sup>礪山屬</sup> 礪山 皮堤<sup>礪山屬</sup> 公村<sup>礪山屬</sup>  
長城 朱溪<sup>茂州屬</sup> 寶城 力寶<sup>寶城屬</sup> 黑石<sup>益山屬</sup> 靈  
巖 麗光 臨淄<sup>靈巖屬</sup> 造紙<sup>靈巖屬</sup> 望雲<sup>靈巖屬</sup> 珍  
島 義新<sup>珍島屬</sup> 平阜<sup>金堤屬</sup> 才南<sup>金堤屬</sup> 水金<sup>古阜屬</sup>  
兩日<sup>古阜屬</sup> 錦山 大谷<sup>錦山屬</sup> 安城<sup>錦山屬</sup> 樂安  
淳昌 赤城<sup>淳昌屬</sup> 柳亭<sup>淳昌屬</sup> 置亭<sup>淳昌屬</sup> 珍山  
橫井<sup>珍山屬</sup> 昌平 龜潭 金溝 株陽<sup>金溝屬</sup> 大栗

金溝<sup>地方</sup> 富洞<sup>萬頃屬</sup> 泥波<sup>萬頃屬</sup> 扶安 井邑 沃溝  
海決<sup>和順屬</sup> 海際<sup>咸平屬</sup> 永豐<sup>咸平屬</sup> 耽津<sup>康津屬</sup> 馬  
靈<sup>安屬</sup> 長溪<sup>長水屬</sup> 陽岳<sup>長水屬</sup> 福興<sup>長水屬</sup> 南陽  
安屬 泰仁 南平 茂松<sup>茂長屬</sup> 高敞 同福 任  
貴 務安 谷城 杞溪<sup>慶州屬</sup> 比安<sup>慶州屬</sup> 安東  
豐山<sup>安東屬</sup> 臨河<sup>安東屬</sup> 甘泉<sup>安東屬</sup> 晉州 昌原  
大丘 金海 密陽 善山 海平<sup>善山屬</sup> 青松 安  
德<sup>青松屬</sup> 巨濟 河東 仁同 若木<sup>仁同屬</sup> 順興  
東平<sup>萊屬</sup> 草溪 清道 醴泉 米川 興海 金  
山 黃金<sup>金山屬</sup> 迎命<sup>金山屬</sup> 昆陽 有賓<sup>昆陽屬</sup> 盈  
德 義城 南海 鉢山<sup>固城屬</sup> 坤義<sup>固城屬</sup> 鹿鳴<sup>固城屬</sup>  
積珍<sup>固城屬</sup> 開寧 居昌 嘉善<sup>三嘉屬</sup> 宜寧 寧海  
河陽 安心<sup>河陽屬</sup> 龜宮 華北 清河 新寧 梨  
旨<sup>新寧屬</sup> 丹溪<sup>丹寧屬</sup> 彦陽 漆原 鎮海 聞慶  
咸昌 知禮 玄風 迎日 長鬐 靈山 昌寧  
熊川 檣張 江陵 連谷<sup>江陵屬</sup> 華陽 襄陽 洞  
山<sup>襄陽屬</sup> 春川 史吞<sup>益川屬</sup> 鉄原 寧越 伊川  
平海 通川 旌善 高城 安昌<sup>高城屬</sup> 金城 通  
溝<sup>金城屬</sup> 欽谷 麟蹄 瑞和<sup>麟蹄屬</sup> 橫城 洪川

浪川、平康、史丁<sup>平康地方</sup>、金化、黃州、海州、平  
山、瑞興、豐川、谷山、萬珍<sup>萬津地方</sup>、信川、白川  
江陰<sup>今入金川</sup>、文城<sup>文化別號</sup>、青松<sup>松禾別號</sup>、長連、兎山、  
咸興、永興、靜邊<sup>永興別號</sup>、登州<sup>安邊別號</sup>、鶴浦<sup>安邊屬</sup>、  
福靈<sup>安邊屬</sup>、翼谷<sup>安邊屬</sup>、湫川<sup>安邊屬</sup>、德源、明川、  
鍾城、端川、高原、洪原、義州、定戎<sup>義州地方</sup>、延  
州<sup>寧邊別號</sup>、安州、定州、昌城、咸川、中和、龜城、  
咸從、嘉山、德川、熙川、博川、永柔、江東、  
泰川、陽德、雪城、海豐、宜城、河平、永州、  
白城、瑤山、歙州、桂林、金叢、王山、梨川、  
甘州、參州、實安、廣陵、仁溪、豐安、完村、  
平章、荆山、梨城、啓川、朔城、德順、湖州、  
穎川、水津、叱村、並州、溥城、成任、咸原、  
永海、玄山、花山、弘州、寧山、明月、永宗、  
沃陽、統山、金陵、日平、延城、守陵、元山、  
牛溪、新安、渭溪、石井、江州、江興、洪山、  
寧春、泰原、菴城、熙陽、水鎮、箕城、寧城、  
昌州、岑州、荊州、永原、尚山、道村、牙城、  
合州、青原、瑞陽、蓋州、懷陽、碧城、海叢、

翁州、鳳城、河漢、濟州、吉州、甲山、富寧、  
槐山、

金氏

慶州、光州、安東、江陵、延安、義城、善山、  
清風、金海、順天、清道、扶安、尚州、永同、  
彥陽、豐山<sup>安東屬</sup>、原州、禮安、海平<sup>善山屬</sup>、安山、  
瑞興、蔚山、咸昌、海豐、高靈、水原、漢南<sup>水原別號</sup>、  
靈光、三陵、康津<sup>或秋道康津屬</sup>、安老<sup>羅州屬</sup>、義興、  
盈德、咸川、義州、臨津<sup>長湍屬</sup>、牛峰、遂安、英  
陽<sup>或林石陵石陵別號</sup>、樂安、忠州、熙川<sup>一昨咸城即熙川別號</sup>、  
羅州、錦山、梁山、開城、愛峰、沃川、兎山、  
珍島、中和、南海、春陽、驪州、黃利<sup>驪州別號</sup>、青  
山、京山<sup>星州別號</sup>、清州、密陽、安城、德水<sup>豐德屬</sup>、  
龜宮、靈巖、貞州<sup>豐德屬</sup>、公州、青松、樹州<sup>富平屬</sup>、  
全州、金山、開寧、花開、報恩、牙山、楊根、  
江西<sup>本江陵人移籍于此</sup>、珍山、光陽、安康<sup>慶州屬</sup>、松林<sup>長湍屬</sup>、  
金郊、固城、燕州、晉州、江華、河陰<sup>江華屬</sup>、鎮  
江<sup>江華屬</sup>、廣州、見州<sup>楊州別號</sup>、漢陽<sup>楊州屬</sup>、川寧<sup>驪州屬</sup>、  
坡平<sup>坡州別號</sup>、貞松<sup>水原屬</sup>、五采<sup>水原地方</sup>、桂石<sup>水原地方</sup>、楊  
干<sup>水原地方</sup>、沙梁<sup>水原地方</sup>、公村<sup>水原地方</sup>、爭忽<sup>水原地方</sup>、桂陽

富平 黃魚 富平 南陽 仁川 南川 利川 長湍  
別号 地方 地方 地方 地方 地方 地方 地方  
臨湍 長湍 臨江 長湍 通津 喬桐 延昌 竹山  
屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬  
朔寧 金浦 幸州 高陽 交河 加平 龜仁 炎  
屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬  
仁 龜仁 振威 永新 振威 永平 陽川 砥平  
屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬  
抱川 積城 漣川 陰竹 陽城 高安 陽智 甘  
勿 志州 楸子 清州 洪州 興陽 洪州 驪陽 洪州  
地方 地方 地方 地方 地方 地方 地方 地方  
合德 洪州 雲川 洪州 林川 丹陽 泰安 韓山  
屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬  
舒川 沔川 天安 毛山 天安 瑞山 聖測 瑞山  
地方 地方 地方 地方 地方 地方 地方 地方  
槐山 溫陽 大興 文義 鴻山 堤川 德山  
平沃 稷山 懷仁 定山 青陽 延豐 陰城  
清安 懷德 鎮岑 連山 藍浦 扶餘 常山 鎮川  
屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬  
結城 保寧 海美 唐津 禮山 木川 全義  
永春 德恩 恩津 黃洞 景明 全州 通義 羅州  
屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬  
潘南 羅州 伏竜 羅州 長山 羅州 徐龍 羅州 會  
津 羅州 洛州 良瓦 光州 慶昌 光州 碧津 光州  
屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬  
綾州 南原 長興 富有 順天 栗村 順天 正方  
順天 順天 潭陽 貞石 潭陽 礪山 長城 茂朱 寶  
地方 地方 地方 地方 地方 地方 地方 地方  
城 兆陽 古阜 益山 黑石 益山 古阜 富安 古阜  
地方 地方 地方 地方 地方 地方 地方 地方  
水金 古阜 荒調 古阜 德林 古阜 雨日 古阜 臨

湍 靈光 深井 靈光 懷義 靈光 松旨 靈光 弘農  
屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬  
靈光 望雲 靈光 嘉興 珍島 義新 珍島 加用 樂安  
地方 地方 地方 地方 地方 地方 地方 地方  
淳昌 置寧 淳昌 橫川 錦山 高堤 珍山 金義 珍山  
屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬  
橫程 珍山 金堤 昌平 長平 昌平 龜潭 臨陂  
屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬  
大栗 金溝 萬頃 泥波 萬頃 阿磨 光陽 保安 扶安  
屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬  
咸豐 咸豐 耽津 康津 永可 康津 玉果 豐堤 龜安  
屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬  
高山 泰仁 沃溝 滄尾 沃溝 南平 鉄冶 南平  
屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬  
興德 高敞 務安 茂松 茂松 永禮 長溪 長溪  
屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬  
谷城 桃田 咸悅 鎮安 馬靈 鎮安 和順 興陽  
屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬  
南陽 襄陽 阿要 雲峰 海南 玉泉 海南 珍山 海南  
屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬  
八馬 海南 杞溪 慶州 吉安 安東 甘泉 安東 臨  
屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬  
河 安東 檜山 昌原 中牟 尚州 永順 尚州 海上  
屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬  
伊 尚州 星州 加利 慶州 花園 慶州 班城 晉州  
屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬  
大丘 河決 大丘 寧海 安德 青松 東萊 巨濟  
屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬  
昌原 若木 仁同 咸陽 陝川 江陽 陝川 永陽  
屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬  
永川 草溪 醴泉 榮川 興海 殷豐 豐基 迎  
地方 地方 地方 地方 地方 地方 地方 地方  
命 金山 黃金 金山 昆陽 慶山 曲山 固城 保  
屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬 屬  
安 固城 丘墟 固城 神義 固城 順興 仁同 鹿鳴  
地方 地方 地方 地方 地方 地方 地方 地方  
固城 道善 固城 珍餘 固城 岳溪 義興 三嘉  
地方 地方 地方 地方 地方 地方 地方 地方



清河、宜寧、安心<sup>河陽地方</sup>、奉化、漆原、鎮海、安  
陰<sup>安義</sup>、利安<sup>安義</sup>、開慶、虎溪<sup>南慶</sup>、玄風、軍  
威、德峯<sup>咸昌</sup>、利安<sup>咸昌</sup>、茂松<sup>龜宮</sup>、陽井<sup>龜宮</sup>  
豐壤<sup>龜宮</sup>、河南<sup>龜宮</sup>、平丘<sup>龜宮</sup>、曲溪<sup>龜宮</sup>、延  
日、長鬐、盈德、靈山、昌寧、泗川、熊川、莞  
浦<sup>熊川</sup>、真寶、機張、英陽、春川、連城<sup>率楊</sup>  
和川<sup>率陽</sup>、襄陽、洞山<sup>襄陽</sup>、陸昌<sup>新寧</sup>、寧越  
伊川、通州<sup>通川</sup>、平海、旌善、高城、杆城、平  
昌、金城、蔚珍、歙谷、楊口、平康、金化、黃  
州、海州、平州<sup>平山</sup>、豐川、谷山、長湍、安津  
鳳山、戴寧、白川、安岳、信川、新溪、殷栗、  
金川、橘州<sup>文化</sup>、康翎、咸興、永興、靜邊<sup>永興</sup>  
登州<sup>安邊</sup>、霜陰<sup>安邊</sup>、瑞谷<sup>安邊</sup>、泓川<sup>安邊</sup>、鍾  
城、鏡城、青海<sup>北青</sup>、德源、富寧、定平、三水  
茂山、文川、高原、利城、平壤、寧邊、定州、  
安州、石州<sup>江界</sup>、昌城、唐岳<sup>中界</sup>、龜城、朔州  
北山<sup>祥系</sup>、德川、嘉山、順川、雲山、寧遠、龜  
岡、三登、孟山、江京、咸原、黃山、永宗、金  
陵、延興、延平、青丹、殷寧、津陵、清善、豐

海、甘川、慶城、原州、丘城、宜昌、晉州、昌  
陽、德津、花川、京州、潼城、永城、王城、永  
登、靈城、雪城、鶴林、龜淵、龜阜、青都、石  
泉、盈州、溪林、昌州、光原、岑州、白洲、香  
山、咸寧、安陵、保恩、安樂、桂林、清城、碧  
山、梅城、鵝城、安興、黑龜、淵城、鎮峯、河  
州、清渠、永山、花原、珍海、同州、德仁、光  
陵、岷山、道原、河平、亢州、交江、金峯、清  
寧、保城、海陽、永江、日城、廣城、江原、古  
城、武高、涼州、宜城、延城、洛城、花山、望  
山、龜城、宜城、廣陽、連平、大元、公州、甲  
山、富寧

朴氏

密陽、潘南<sup>羅州</sup>、竹山、咸陽、順天、高靈、務  
安、尚州、昌原、義昌<sup>昌原</sup>、忠州、陰城、寧海  
靈巖、丘珍<sup>即珍系慶</sup>、燕山<sup>文義</sup>、固城、蔚山  
雲峰、春川、比安、彦陽、江陵、舊城<sup>河川</sup>、慶  
州、牛峯<sup>金介</sup>、平山、泰山<sup>泰仁</sup>、泗川、軍威、  
義興、三陟、德源、押海<sup>羅州</sup>、文州<sup>文川</sup>、文義  
京山<sup>星州</sup>、蘭浦<sup>南海</sup>、麗水、遂寧<sup>長興</sup>、貞州<sup>豐德</sup>

旌善、開城、江華、河陰<sup>江華屬</sup>、廣州、驪州、驪  
興<sup>驪州屬</sup>、楊州、漢陽<sup>楊州屬</sup>、豐壤<sup>楊州屬</sup>、水京、雙  
阜<sup>水京屬</sup>、青丘<sup>水京屬</sup>、爭忽<sup>水京屬</sup>、楊干<sup>水京屬</sup>、南陽  
利川、仁川、臨湍<sup>長湍屬</sup>、豐德、楊根、安山、安  
城、朔寧、高陽、交河、深岳<sup>交河屬</sup>、加平、朝宗  
加平<sup>屬</sup>、龜仁、抱川、連川、陽良<sup>陽智屬</sup>、高安<sup>陽智屬</sup>  
伊次<sup>忠州屬</sup>、清州、拜音<sup>清州屬</sup>、驪陽<sup>洪州屬</sup>、公州  
新豐<sup>公州屬</sup>、清園、林川、丹陽、天安、毛山<sup>天安屬</sup>  
瑞山、地谷<sup>瑞山屬</sup>、泰安、溫陽、祈利<sup>沃川屬</sup>、陽山  
沃川<sup>屬</sup>、德山、平沃、稷山、定山、清安、連山、  
扶餘、石城、鎮川、保寧、唐津、藍浦、餘美<sup>麟蹄屬</sup>  
塩幸<sup>海美屬</sup>、炤堂<sup>海美屬</sup>、塩貞<sup>海美屬</sup>、禮山、永同、  
報恩、青山、牙山、完山<sup>全州屬</sup>、紆州<sup>全州屬</sup>、羅州  
伏龍<sup>羅州屬</sup>、從義<sup>羅州屬</sup>、任城<sup>羅州屬</sup>、濟州、光州、  
南原、長興、安壤<sup>長興屬</sup>、進禮<sup>順天屬</sup>、別良<sup>順天屬</sup>  
赤良<sup>順天屬</sup>、栗林<sup>順天屬</sup>、召羅<sup>順天屬</sup>、豆仍<sup>順天屬</sup>、正  
方<sup>順天屬</sup>、三日浦<sup>順天屬</sup>、上伊沙<sup>順天屬</sup>、嘉音<sup>順天屬</sup>、  
潭陽、原東<sup>潭陽屬</sup>、茂豐<sup>茂豐屬</sup>、朱溪<sup>茂豐屬</sup>、礪山、  
益山、荒調<sup>古阜屬</sup>、雨日<sup>古阜屬</sup>、靈光、臨瀾<sup>靈光屬</sup>

陳根<sup>靈光屬</sup>、臨淮<sup>珍島屬</sup>、樂安、珍山、橫井<sup>珍山屬</sup>、  
錦山、大谷<sup>錦山屬</sup>、昌平、竜潭、萬頃、臨陂、綾  
鄉<sup>高陽屬</sup>、咸平、永豐<sup>咸平屬</sup>、高敞、大良坪<sup>高敞屬</sup>、  
沃溝、光陽、同福、扶安、咸悅、谷城、高山、  
南平、長水、海南、竹山<sup>海南屬</sup>、王泉<sup>海南屬</sup>、道康  
唐津、平德<sup>唐津屬</sup>、安東、豐山<sup>安東屬</sup>、吉安<sup>安東屬</sup>、  
星州、晉州、岳陽<sup>晉州屬</sup>、薩川<sup>晉州屬</sup>、青里<sup>尚州屬</sup>、  
中牟<sup>尚州屬</sup>、長川<sup>尚州屬</sup>、海上伊<sup>尚州屬</sup>、朱進<sup>密陽屬</sup>、  
義安<sup>昌安屬</sup>、金海、河東、青松、大丘、順興、善  
山、海平<sup>善山屬</sup>、仁同、清道、永川、梁山、興海  
昆陽、禦悔<sup>金剛屬</sup>、殷豐<sup>金剛屬</sup>、治爐<sup>固城屬</sup>、義城、  
南海、海決<sup>固城屬</sup>、丘墟<sup>固城屬</sup>、保安<sup>固城屬</sup>、魚禮<sup>固城屬</sup>、  
積珍<sup>固城屬</sup>、禮安、竜宮、開慶、新寧、開慶、利  
安<sup>新寧屬</sup>、加乙山<sup>安義屬</sup>、知禮、三岐<sup>三嘉屬</sup>、嘉壽<sup>一作嘉</sup>、  
芳、宜寧、楮旨<sup>宜寧屬</sup>、延日、熊川、河陽、安心  
河陽<sup>屬</sup>、奉化、丹城、靈山、昌寧、泗川、慈仁、  
原州、襄陽、洞山<sup>襄陽屬</sup>、寧越、嵐谷<sup>淮陽屬</sup>、伊川  
基麟<sup>基麟屬</sup>、史吞<sup>基麟屬</sup>、鉄原、高城、恭嶺<sup>高城屬</sup>、  
平昌、平海、通溝<sup>金剛屬</sup>、狼川、平康、史丁<sup>平康屬</sup>

金化 麟蹄 海州 谷山 延安 瑞興 鳳山  
安岳 遂安 信川 白川 文化 鬼山 咸興  
文山 安岳 鍾城 三水 利城 安州 定州 江  
界 昌城 龜城 中和 順川 雲山 殷山 穎  
川 永海 永宗 昌安 保安 保城 順原 普  
城 碧城 義贊 清海 靈海 務平 溪川 宜  
安 琴山 雲城 南安 尚山 春城 古城 青  
州 呂山 曲阜 延城 雪城 文峯 達南 槐  
山

鄭氏 東萊 延日 海州 晉州 河東 草溪 溫陽  
慶州 清州 光州 羅州 奉化 瑞山 金浦  
醴泉 海南 貞州 肅寧 昌原 義安 肅寧 長磐  
盈德 永川 廣州 尖山 青島 瓮津 永定 豐寧  
昆陽 平海 西京 平壤 開城 江華 河陰 江華  
驪州 楊州 漢陽 楊州 坡州 水原 青丘 水原  
南陽 德水 豐寧 利川 富平 仁川 通津 臨  
江 長湍 喬桐 安山 高陽 麻田 交河 龜仁  
陽川 砥平 陽城 光州 公州 洪州 清風  
丹陽 舒川 沃川 大興 石城 鴻山 德山

延豐 懷德 扶餘 藍浦 鎮川 結城 新昌  
禮山 陰城 全義 燕岐 保寧 永春 牙山  
定山 全州 紆州 金州 利城 金州 濟州 綾  
州 長興 南原 潭陽 突山 赤良 順天 長  
城 大谷 錦山 靈巖 金巖 珍島 珍島 靈光  
淳昌 寶城 咸豐 咸豐 牟平 咸豐 永豐 咸豐  
康津 耽津 康津 南平 務安 同福 興陽 雲  
峰 光陽 仇史 慶州 安東 春陽 安東 星州  
加利 星州 尚州 金海 寧海 廣陽 善山 海  
平 善山 青松 松生 青松 蔚山 仁同 順興  
巨濟 大丘 清道 梁山 象海 金州 冶爐 陝川  
咸安 咸陽 南海 南浦 南浦 義城 黃山 義城  
慶山 清河 咸昌 玄風 比安 昌寧 機張  
禮安 龜宮 慈仁 莞浦 熊川 河陽 江陵 原  
州 淮陽 鉄原 寧越 伊川 襄陽 平昌 通  
川 旌善 蔚珍 金城 平康 黃州 瑞興 延  
安 戴寧 平山 鳳山 遂安 白川 江陰 金川  
文化 永康 蔚珍 殷栗 鬼山 永興 登川 安東  
鍾城 德源 穩城 定州 安州 昌城 鉄山

宣川 德川 祥原 順安 泰川 金陵以下邑屬  
鉄城 海豊 山東 錦陵 峯山 昌陵 蓬源  
海東 瑯琊 長蕃 漢川 安定 永原 京城  
長豊 寧德 奉城 湍陽 一成 濟州  
尹氏 坡平坡州屬 海平海州屬 南原 漆原 茂松茂原屬  
咸安 海南 海州 醴泉 野城野州屬 杞溪杞州屬  
楊州 玄風 竹山 高敞 平山 永川 驪州  
新寧 德山 德豊德山屬 慶州 漢陽楊州屬 豐裏  
楊州楊州屬 沙川楊州屬 水原 龜城水原屬 貞松水原屬  
豊徳 南陽 載陽南陽屬 守安南陽屬 高陽 加平  
陽川 積城 乳石永平屬 衿川 忠州 伊次吞忠州屬  
西原清州屬 洪州 新平洪州屬 衿川 温陽 天安  
鎮川 永春 青陽 尼城 陰城 巴川陰城屬 長  
延延州屬 貞海海州屬 牙山 全州 崇山羅州屬 極  
浦羅州屬 群山羅州屬 長沃長興屬 茂朱 突山 馬  
川合堤屬 靈光 陳枝靈光屬 德林古阜屬 而日古阜屬  
龜潭 井邑 多慶咸平屬 康津 扶安 泰仁 南  
平 務安 竹山海州屬 紗羅海南屬 王泉海南屬 和  
順 慶州 神光慶州屬 安東 臨河安東屬 春陽安東屬

加良安東屬 長川尚州屬 白泉尚州屬 河洞尚州屬 壤  
寧尚州屬 保良尚州屬 連山尚州屬 星州 加利星州屬  
松生青松屬 宏陽 順興 金海 巨濟 善山 河  
東 僑川礼泉屬 連川礼泉屬 龍川礼泉屬 治燼陝川屬  
盈徳 南海 奉化 買吐奉化屬 勿也奉化屬 竜宮  
梨旨新寧屬 加恩新寧屬 山陰山陰屬 加乙山安東屬  
咸寧咸寧屬 辰州 酒泉咸寧屬 刀谷咸寧屬 江陵  
淮陽 平昌 平海 小水伊金寧屬 橫城 安峽  
黃州 延安 瑞興 鳳山 遂安 百川 楊山安東屬  
載寧 文化 新溪 扶溪新溪屬 兎山 咸興 靜  
迎咸興屬 安迎 福豊咸興屬 崇岳咸興屬 祥原  
泰原以下邑屬 河平 元州 安興 長平 甲山  
崔氏 慶州 鶴林慶州屬 全州 東州咸寧屬 海州 大寧  
海州海州屬 孤竹海州屬 朔寧 江陵 和順 水原 隋  
城 江華 牛峯金海屬 忠州 永川 靈巖 通川  
陽川 耽津咸寧屬 開城 稷山 川寧驪州屬 竜州  
竜川竜川屬 珍山 新豊公州屬 興海 楊州 泰仁 祥  
原 安東 貞州嘉善屬 漢南嘉善屬 永興 登州安東屬  
河陰江華屬 順天 光陽 漢山營州屬 驪州 漢陽



楊州 坡平 坡州 貞松 水原 南陽 富平 竹州  
竹山 利川 仁川 長湍 通津 安山 安城  
麻田 幸州 金南 交河 加平 竟仁 振  
威 永新 砥半 碩城 衿川 陽城 陽智  
果川 漣川 度反石 所仍林 清州  
公山 洪州 興陽 用和 政聲  
清風 林川 丹陽 韓山 槐山 天安 沃川  
溫陽 大興 燕山 道安 德山 平沃  
定山 青陽 延豐 陰城 恩津 懷德 報恩  
鎮川 結城 安興 扶餘 鎮岑 連山 保  
寧 海美 唐津 新昌 禮山 木川 全義 青  
山 牙山 紆州 利城 豆毛 羅  
州 濟州 光山 綾州 南京 長興 礪良  
礪山 皮堤 宋溪 潭陽 潭州  
長城 靈光 森溪 珍島 臨淮 甘勿  
土 錦山 金堤 昌平 金溝 標陽  
巨野 龜潭 咸平 南平 興德 陶成  
德巖 茂長 谷城 雲峯 長水 陽岳  
海南 仇良 鎮安 扶安 本井 阿磨

代 咸悅 豐山 星山 尚州 晉  
州 義昌 大丘 壽城 寧海 密陽  
善山 青松 蔚山 東萊 河東 仁同 順興  
臨海 江陽 草溪 清道 柴川 梁山  
咸安 金山 多仁 咸陽 慶山 固城 義  
城 盈德 河陽 安心 安陰 咸  
山 陰 開寧 三嘉 宜寧 竟宮 聞慶 咸  
昌 丹城 昌寧 彥陽 漆原 軍威 延日 禮  
安 原州 襄陽 洞山 春川 三陟 寧越  
伊川 淮陽 碧山 恭嶺 旌善 杆城  
烈山 平昌 平海 蔚珍 歙谷 金城 方  
山 洪川 金化 平康 史丁 瑞和  
黃州 平山 豐川 谷山 延安 江陰 安  
岳 白川 遂安 信川 鳳山 永寧 咸興  
吉州 福寧 鍾城 匡城 德原 明川  
青海 平壤 義州 安州 定州 延州  
唐岳 成川 慈山 宣川 龜川 昌城 嘉  
山 順川 熙川 价川 歡山 順安 江西 龜  
崗 陽德 江東 殷山 金陵 海豐 宜

城、潼城、修城、董城、瑞化、洞城、莧山、潭  
津、康陵、築城、寧城、翰城、青城、寧川、童  
豐、安陽、光陵、永城、江津、軍豐、驪山、海  
西、咸城、保城、竜津、花山、信平、珍城、咸  
津、竜山、青安、越城、銅注、巴陵、寶寧、昌  
興、兔城、東川、銅州、遂城、東城、汾津、玄  
州、海巖、水城、川壤、長陵、徐州、臨兆、洛  
陽、青州、礪州、美山、竜江、甲山、富寧

柳氏

文化、晉州、全州、瑞山、高興、興陽、豐山、東屬  
善山、靈光、陸昌、靈光屬、貞州、豐德屬、白川、若木  
仁同、屬、富平、延安、仁同、開城、江華、廣州  
驪州、楊州、坡平、坡州屬、水京、宗德、永泰屬、南陽  
甘弥吞、富平屬、仁川、德水、豐德屬、竹山、楊根、幸  
州、高陽屬、朔寧、麻田、安城、振威、松莊、振威屬  
陽川、衿川、陽城、忠州、西原、清州屬、公州、沔  
川、洪州、丹陽、韓山、舒川、安眠、瑞山屬、永迎  
瑞山、屬、天安、沃川、溫陽、稷山、尼城、青陽  
鎮川、結城、青山、紆州、金州屬、羅州、居平、羅州屬  
濟州、光山、光州屬、綾州、南原、長興、大谷、錦山屬

昆涓、蓮屬、光陽、長溪、長水屬、竜安、咸悅、興德  
大靜、慶州、杞溪、慶州屬、安東、尚州、星州、大  
丘、東萊、金海、海平、善山屬、密陽、順興、咸陽  
永川、榮川、興海、盈德、義城、安陰、安義屬、河  
陽、居昌、宜寧、咸昌、丹城、昌寧、延日、英  
陽、江陵、泉州、春川、三陟、寧越、伊川、平  
海、通川、旌善、高城、杆城、金城、蔚珍、楊  
口、海州、西河、豐川屬、平山、鳳山、安岳、金川  
兔山、咸興、登州、安岳屬、義州、江界、陽德、文  
海、以下屬、屬、山東、監州、馬山、城津、熙陽

洪氏

南陽、豐山、安東屬、海溪屬、開寧、懷仁、慶州  
洪州、義城、豐川、開城、漢陽、屬、豐壤、屬  
廣州、坡州、坡平、坡州屬、水京、利川、高陽、安  
山、陽川、陽城、忠州、西原、清州屬、公州、清風  
林川、丹陽、韓山、天安、溫陽、大興、居迎、大興屬  
林壤、報恩屬、酒城、屬、青陽、清安、藍浦、全州  
紆州、全州屬、羅州、潘南、羅州屬、濟州、南原、益山  
淳昌、南平、長水、鎮安、安東、尚州、晉州  
達城、屬、昌原、金海、密陽、善山、青松、仁

同、順興、咸陽、豐基、永陽<sup>新川</sup>、興海、居昌、  
達島<sup>開寧</sup>、茂欣<sup>開寧</sup>、下活<sup>開寧</sup>、今勿刀<sup>開寧</sup>、  
上島知<sup>開寧</sup>、宜寧、咸昌、玄風、義興、原州、  
寧越、平海、洪川、黃州、海州、延安、塩州<sup>延安</sup>、  
鳳山、牛峯<sup>金介</sup>、白川、文化、殷栗、登州<sup>安東</sup>、  
永川<sup>安東</sup>、德源、義州、洪京、定州、朝陽<sup>价川</sup>、  
孟山、洪山<sup>以下區</sup>、鶴林、順陽、晉坪、豐陵、金  
鶴、南城。

申氏 平山、高靈、殷豐<sup>義基</sup>、天安、利川、鶴州<sup>巨濟</sup>、  
信川、寧海、谷城、朝宗<sup>加平</sup>、朔寧、昌洲<sup>昌城</sup>、  
江華、見州<sup>蔚州</sup>、豐壤<sup>楊州</sup>、漢陽<sup>楊州</sup>、水京、  
廣德<sup>水京</sup>、坡州、坡平<sup>坡州</sup>、南陽、仁川、長湍、  
德水<sup>豐壤</sup>、竹山、高陽、幸州<sup>高陽</sup>、永平、砥平、  
積城、陰竹、忠州、清州、德平<sup>清州</sup>、新豐<sup>公州</sup>、  
新平<sup>洪州</sup>、高丘<sup>洪州</sup>、溫陽、沃川、丹陽、槐山、  
長延<sup>延基</sup>、稷山、德山、青陽、懷德、結城、保  
寧、牙山、禮山、清安、永同、道安<sup>清安</sup>、念谷、  
清安、木川、報恩、完山<sup>金州</sup>、羅州、會津<sup>羅州</sup>、  
光州、光山<sup>光州</sup>、南京、潭陽、茂朱、丹川<sup>茂朱</sup>。

馬良<sup>長興</sup>、丁火<sup>長興</sup>、進禮<sup>順天</sup>、昌平、咸平、  
高山、滄尾<sup>義基</sup>、南平、茂長、永可<sup>永津</sup>、九阜、  
任興<sup>任興</sup>、醉仁<sup>任興</sup>、泥波<sup>任興</sup>、興陽、道陽<sup>興陽</sup>、  
荳原<sup>興陽</sup>、加乙坪<sup>興陽</sup>、務安、慶州、神光<sup>慶州</sup>、  
安東、臨河<sup>義基</sup>、星州、尚州、化寧<sup>尚州</sup>、山陽、  
尚州、生物<sup>尚州</sup>、丹谷<sup>尚州</sup>、主善<sup>尚州</sup>、晉州、  
昌原、大邱、解頤<sup>昌原</sup>、河決<sup>昌原</sup>、金海、密陽、  
青松、鍊汀<sup>巨濟</sup>、蔚山、河東、仁同、順興、梁  
山、昆陽、咸陽、清道、永川、河陽、安心<sup>河陽</sup>、  
咸昌、新寧、禮安、延日、長鬐、靈山、桂城<sup>靈山</sup>、  
昌寧、山陰<sup>昌寧</sup>、鎮海、江陵、連谷<sup>昌寧</sup>、原州、  
東州<sup>新寧</sup>、寧越、平海、高城、平昌、金城、平  
康、慶城、豐安、高岑、清源、槐山、(以下224  
頁へ続く)  
樞氏 安東、禮泉、朔城、廣州、驪興<sup>驪興</sup>、川寧<sup>驪興</sup>、  
漢陽<sup>驪興</sup>、坡平<sup>驪興</sup>、水京、南陽、利川、安山、  
高陽、陽川、黔川<sup>黔川</sup>、忠州、清州、公州、德  
山、懷德、連山、扶餘、完山<sup>金州</sup>、羅州、潘南、  
羅州、靈光、慶州、晉州、星州、星原、金海、  
密陽、善山、東萊、河東、仁同、順興、迎命<sup>密陽</sup>。

興海、知禮、高靈、丹城、禮安、延日、旌善、  
平昌、延安、豐川、鳳山、白川、文化、登州<sup>安別</sup>、  
平壤、定州、花山<sup>以下邑屬天啟</sup>、東城、

趙氏

豐壤<sup>楊州屬</sup>、漢陽<sup>楊州屬</sup>、楊州、平壤、林川、白川、  
咸安、淳昌、橫城、金堤、稷山、酒泉<sup>屬州</sup>、江  
西、富潤<sup>屬</sup>、南海、康津、河東、密陽、開城、  
江華、河陰<sup>江華屬</sup>、廣州、驪興<sup>驪州屬</sup>、坡平<sup>坡州屬</sup>、水原、  
富平、南陽、利川、仁川、豐德、竹山、楊根、  
安山、安城、高陽、交河、陽川、積城、果川、  
衿川、漣川、陽城、忠州、清州、公山<sup>公州屬</sup>、興陽、  
洪州<sup>屬</sup>、驪陽<sup>屬</sup>、清風、洪州、洪陽<sup>洪州屬</sup>、古多、  
只瑟<sup>川屬</sup>、丹陽、泰安、韓山、天安、瑞山、槐山、  
沃川、溫陽、大興、鴻山、平沃、定山、青陽、  
德恩<sup>恩津屬</sup>、結城、鎮川、海美、唐津、新昌、永  
春、猪井<sup>屬城</sup>、牙山、全州、伊城<sup>屬州</sup>、羅州、  
餘鯉<sup>屬州</sup>、光州、南原、長興、順天、平陽<sup>順天屬</sup>、  
潭陽、朗山<sup>屬</sup>、長城、古阜、靈光、珍島、福  
興<sup>屬</sup>、樂安、錦山、珍山、昌平、龜安、豐堤、  
龍安、倉山<sup>屬</sup>、咸悅、桃田<sup>屬</sup>、扶安、咸平

玉果、沃溝、仁義<sup>仁義屬</sup>、南平、興德、沙羅<sup>海屬</sup>、  
長水、德興<sup>屬</sup>、興陽、慶州、安東、甘川<sup>安東屬</sup>、  
豐山<sup>屬</sup>、尚州、晉州、星州、加利<sup>星州屬</sup>、昌原、  
大丘、金海、青松、東萊、仁同、順興、陝川、  
草溪、咸陽、清道、永川、金山、盈德、居昌、  
開寧、禮安、安陰<sup>屬</sup>、聞慶、龜宮、奉化、  
龜山、彦陽、鎮海、真寶、咸昌、高靈、玄風、  
昌寧、丹陽、迎日、新寧、江陵、原州、春川、  
鉄原、伊川、洪川、金化、楊口、金城、三陟、  
寧越、平昌、平海、杆城、通川、黃州、海州、  
永興、延安、平山、瑞興、豐川、襄津、鳳山、  
安岳、信川、銀川<sup>屬</sup>、新溪、文化、咸興、登  
州<sup>屬</sup>、端川、德源、定戎<sup>屬</sup>、安州、昌城、  
成川、中和、祥原、德川、順川、博川、泰川、  
咸原<sup>以下邑屬天啟</sup>、箕城、玉川、玉浦、部川、台川、積  
山、慶城、芝山、臨州、順昌、雪平、琴山、白  
洲、豐城、珍寶、寧原、濟州、

韓氏

清州、平山、漢陽<sup>屬</sup>、楊州、湍州<sup>屬</sup>、鴻山、  
安邊、嘉州<sup>屬</sup>、沔川、谷山、大興、唐津、扶



安 保安<sup>舊縣</sup> 開城 廣州 驪州 坡州 坡平  
驪州<sup>舊縣</sup> 水原 南陽 利川 德水<sup>舊縣</sup> 仁川 楊  
根 安山 朔寧 安城 交河 陽川 積城 忠  
州 公州 楸子<sup>舊縣</sup> 洪州 新平<sup>舊縣</sup> 清風  
林川 丹陽 韓山 瑞山 沃川 德山 平沃  
清安 寺谷<sup>舊縣</sup> 鎮川 常山<sup>舊縣</sup> 結城 海美  
鎮岑 新昌 黃洲 庇仁 全州 綾州 濟州  
居寧<sup>舊縣</sup> 長興 順天 朱溪<sup>舊縣</sup> 靈光 益山  
錦山 珍島 古阜 臨陂 咸平 康津 鎮安  
馬靈<sup>舊縣</sup> 泰仁 長水 泰江<sup>舊縣</sup> 慶州 一直  
安<sup>舊縣</sup> 尚州 晉州 昌原 星州 永善<sup>舊縣</sup> 金  
海 密陽 善山 仁同 若木<sup>舊縣</sup> 順興 青松  
河東 溟珍<sup>舊縣</sup> 宜寧 昌寧 玄風 山陰<sup>舊縣</sup>  
新寧 慈仁 原州 淮陽 史吞<sup>舊縣</sup> 鉄原 寧  
越 平海 金化 黃州 海州 延安 安岳 信  
川 兎山 咸興 永興 靜邊<sup>舊縣</sup> 登州<sup>舊縣</sup>  
翼谷<sup>舊縣</sup> 征山<sup>舊縣</sup> 瑞川 德源 鍾城 利城  
西京<sup>舊縣</sup> 平壤 義州 安州 昌城 順川 驪  
山<sup>舊縣</sup> 西山 竹城 清海 清城 仙源

吳氏 海州 同福 寶城 咸興 高敞 荳原<sup>舊縣</sup> 羅  
州 咸陽 延日 咸平 三嘉 長鬐 和順 朔  
山<sup>舊縣</sup> 樂安 長興 義城 珍原<sup>舊縣</sup> 殷蓋<sup>舊縣</sup>  
寧遠 江華 廣州 楊州 漢陽<sup>舊縣</sup> 坡平<sup>舊縣</sup>  
水原 南陽 利川 長湍 通津 竹山 安城  
僧岑<sup>舊縣</sup> 高陽 陽川 永新<sup>舊縣</sup> 陽城 忠州  
清州 公州 洪州 清風 丹陽 韓山 沃川  
溫陽 平沃 稷山 石城 藍浦 鎮川 保寧  
木川 德山 全義 永春 庇仁 牙山 全州 孫  
利<sup>舊縣</sup> 濟州 光州 綾州 南原 順天 原栗  
潭陽<sup>舊縣</sup> 礪良<sup>舊縣</sup> 平阜<sup>舊縣</sup> 靈巖 鎮南<sup>舊縣</sup>  
沙於<sup>舊縣</sup> 錦山 巨野<sup>舊縣</sup> 奄安 豐堤<sup>舊縣</sup>  
倉山<sup>舊縣</sup> 興陽 豐安<sup>舊縣</sup> 道化<sup>舊縣</sup> 福川<sup>舊縣</sup>  
長水 谷城 海南 紗羅 水雲<sup>舊縣</sup> 南平 牟  
平<sup>舊縣</sup> 扶安 沃溝 慶州 杞溪<sup>舊縣</sup> 晉州  
岳陽<sup>舊縣</sup> 星州 昌原 金海 大丘 順興 海  
平<sup>舊縣</sup> 寧海 仁同 醴泉 陝川 金山 樂海  
金<sup>舊縣</sup> 清道 昆陽 固城 南海 吞甘<sup>舊縣</sup> 巴  
叱<sup>舊縣</sup> 山陰<sup>舊縣</sup> 背岳<sup>舊縣</sup> 軍威 安貞<sup>舊縣</sup>

武昌、新蔡<sup>直隸</sup>、泗川、靈山、昌寧、江陵、原  
州、鉄原、三陟、寧越、伊川、平海、金城、金  
化、黃州、延安、平山、豐川、安岳、遂安、信  
川、牛峯<sup>今入</sup>、長連、殷栗、白翎<sup>屬</sup>、永興、  
慶源、朔陰<sup>屬</sup>、德源、定州、昌城、成川、中  
和、祥泉、樹州<sup>以下屬</sup>、延川、保城、杞川、希陽  
慶安、安西、斗泉、浴川、樂川、青安、順化  
碩城、清城、元州

姜氏 晉州、衿川、安東、白川、海美、同福、光州  
開城、江華、廣州、驪州、楊州、漢陽<sup>屬</sup>、水  
原、南陽、利川、竹山、貞州<sup>屬</sup>、安山、交河  
毫仁、砥平、杞川、忠州、西原<sup>屬</sup>、洪州、韓  
山、天安、槐山、溫陽、文義、堤川、清安、恩  
津、鎮川、唐津、永春、完山<sup>屬</sup>、羅州、綾州  
礪山、末溪<sup>屬</sup>、古阜、龜潭、咸平、高山、長  
水、谷城、海南、慶州、尚州、中牟<sup>屬</sup>、星州  
達城<sup>屬</sup>、金海、寧海、密陽、善山、河東、仁  
同、順興、迎命<sup>屬</sup>、梁山、豐基、義城、宜寧  
禮安、威陰<sup>屬</sup>、義興、延日、江陵、寧越、平

海、高城、平昌、蔚珍、海州、瑞興、豐川、谷  
山、鳳山、載寧、信川、金川、文化、康銅、完  
山、永興、登州<sup>屬</sup>、義州、安州、定州、肅川  
龜城、祥泉、光陵<sup>以下屬</sup>、曲山、惠山、順泉、汾  
津、晉海、濟州、雲南<sup>屬</sup>、甲山

沈氏 青松、豐山<sup>屬</sup>、三陟、富有<sup>屬</sup>、全州、宜寧  
開城、廣州、漢陽<sup>屬</sup>、驪州、水原、雙阜<sup>屬</sup>、  
通津、僧嶺<sup>屬</sup>、忠州、清州、丹陽、沃川、陽  
山<sup>屬</sup>、溫陽、天安、鎮川、青山、鎮冷、扶餘  
禮山、黃澗、木川、羅州、礪山、茂豐<sup>屬</sup>、昌  
平、南平、茂長、尚州、平安<sup>屬</sup>、青里<sup>屬</sup>、  
晉州、大邱、昌泉、金海、仁同、密陽、善山、  
梨梅<sup>屬</sup>、咸陽、金川<sup>屬</sup>、義城、南海、山陰  
山<sup>屬</sup>、龜宮、戎川<sup>屬</sup>、玄風、江陵、羽溪<sup>屬</sup>、  
鉄原、狼川、平山、豐川、白川、永興、靜迎<sup>屬</sup>、  
宜陽<sup>屬</sup>

安氏 竹山、廣州、順興、酒泉<sup>屬</sup>、公山<sup>屬</sup>、忠州、  
洞州、耽津<sup>屬</sup>、安山、堤川、安康<sup>屬</sup>、開城、  
松都<sup>屬</sup>、鎮江<sup>屬</sup>、驪興<sup>屬</sup>、坡平<sup>屬</sup>、水泉

利川、<sup>通津屬</sup>守安、<sup>龜仁</sup>、果川、<sup>陽智屬</sup>陽良、秋溪、<sup>陽智屬</sup>、<sup>石岫屬</sup>廣反、<sup>清州</sup>、槐山、<sup>地谷屬</sup>地谷、林川、<sup>丹陽</sup>、泰安、<sup>厄城</sup>、<sup>界銀川屬</sup>、<sup>居尔屬</sup>、長、<sup>豐延屬</sup>豐延、<sup>德泉屬</sup>德泉、<sup>全州</sup>、<sup>光州</sup>、<sup>南原</sup>、<sup>濟州</sup>、<sup>長興</sup>、<sup>順天</sup>、<sup>珍原屬</sup>珍原、<sup>陵昌屬</sup>陵昌、<sup>大谷屬</sup>大谷、<sup>金城</sup>、<sup>昌平</sup>、<sup>平德屬</sup>平德、<sup>保安屬</sup>保安、<sup>咸平</sup>、<sup>興陽</sup>、<sup>海南</sup>、<sup>王泉屬</sup>王泉、<sup>長溪屬</sup>長溪、<sup>慶州</sup>、<sup>安東</sup>、<sup>尚州</sup>、<sup>晉州</sup>、<sup>星州</sup>、<sup>金海</sup>、<sup>善山</sup>、<sup>東平屬</sup>東平、<sup>仁同</sup>、<sup>永川</sup>、<sup>豐基</sup>、<sup>盈德</sup>、<sup>南海</sup>、<sup>禮安</sup>、<sup>梨旨屬</sup>梨旨、<sup>加乙</sup>、<sup>山安屬</sup>山安、<sup>豐山</sup>、<sup>延日</sup>、<sup>長鬐</sup>、<sup>原州</sup>、<sup>鉄原</sup>、<sup>寧越</sup>、<sup>平海</sup>、<sup>金化</sup>、<sup>黃州</sup>、<sup>海州</sup>、<sup>平山</sup>、<sup>延安</sup>、<sup>豐川</sup>、<sup>瑞興</sup>、<sup>戴寧</sup>、<sup>遂安</sup>、<sup>白川</sup>、<sup>兎山</sup>、<sup>永興</sup>、<sup>登州屬</sup>登州、<sup>翼谷屬</sup>翼谷、<sup>德源</sup>、<sup>安州</sup>、<sup>定州</sup>、<sup>順川</sup>、<sup>寧遠</sup>、<sup>順安</sup>、<sup>泰原屬</sup>泰原、<sup>雪城</sup>、<sup>聚城</sup>、<sup>麒麟</sup>、<sup>順陵</sup>、<sup>興峯</sup>、<sup>安興</sup>、<sup>廣陵</sup>、<sup>海山</sup>、<sup>遼東中國</sup>、<sup>壓南中國</sup>、<sup>槐山</sup>。

許氏 陽川、<sup>河陽</sup>、<sup>金海</sup>、<sup>泰仁</sup>、<sup>咸昌</sup>、<sup>水原</sup>、<sup>梁州屬</sup>梁州、<sup>廣州</sup>、<sup>漢山屬</sup>漢山、<sup>楊州</sup>、<sup>漢陽屬</sup>漢陽、<sup>沙川屬</sup>沙川、<sup>坡平屬</sup>坡平、<sup>南陽</sup>、<sup>長湍</sup>、<sup>仁川</sup>、<sup>竹山</sup>、<sup>楊根</sup>、<sup>安山</sup>。

朔寧、<sup>安城</sup>、<sup>高陽</sup>、<sup>陽城</sup>、<sup>忠州</sup>、<sup>清州</sup>、<sup>清風</sup>、<sup>丹陽</sup>、<sup>泰安</sup>、<sup>鎮川</sup>、<sup>全州</sup>、<sup>光州</sup>、<sup>綾州</sup>、<sup>濟州</sup>、<sup>南原</sup>、<sup>昆湄屬</sup>昆湄、<sup>道康屬</sup>道康、<sup>荳原屬</sup>荳原、<sup>慶州</sup>、<sup>安東</sup>、<sup>豐山屬</sup>豐山、<sup>晉州</sup>、<sup>密陽</sup>、<sup>仁同</sup>、<sup>溟珍屬</sup>溟珍、<sup>順興</sup>、<sup>江陵</sup>、<sup>鉄原</sup>、<sup>金城</sup>、<sup>楊口</sup>、<sup>麟蹄</sup>、<sup>安岷</sup>、<sup>海州</sup>、<sup>平山</sup>、<sup>甘川</sup>、<sup>兎山</sup>、<sup>文山屬</sup>文山、<sup>陽德</sup>、<sup>松山屬</sup>松山、<sup>汾陽</sup>。

張氏 仁同、<sup>德水屬</sup>德水、<sup>永同</sup>、<sup>昌寧</sup>、<sup>興德</sup>、<sup>尚質屬</sup>尚質、<sup>蔚珍</sup>、<sup>安東</sup>、<sup>木川</sup>、<sup>鎮川</sup>、<sup>結城</sup>、<sup>求禮</sup>、<sup>康津</sup>、<sup>川寧屬</sup>川寧、<sup>沃溝</sup>、<sup>興海</sup>、<sup>晉州</sup>、<sup>扶安</sup>、<sup>海豐屬</sup>海豐、<sup>順天</sup>、<sup>太原屬</sup>太原、<sup>永嘉屬</sup>永嘉、<sup>開城</sup>、<sup>江華</sup>、<sup>河陰</sup>、<sup>廣州</sup>、<sup>曜興屬</sup>曜興、<sup>楊州</sup>、<sup>豐壤屬</sup>豐壤、<sup>漢陽屬</sup>漢陽、<sup>喬桐</sup>、<sup>水城屬</sup>水城、<sup>龜城屬</sup>龜城、<sup>南陽</sup>、<sup>延昌屬</sup>延昌、<sup>仁川</sup>、<sup>富平</sup>、<sup>長湍</sup>、<sup>利川</sup>、<sup>通津</sup>、<sup>安城</sup>、<sup>楊根</sup>、<sup>安山</sup>、<sup>朔寧</sup>、<sup>高陽</sup>、<sup>交河</sup>、<sup>加平</sup>、<sup>陽川</sup>、<sup>振威</sup>、<sup>陽城</sup>、<sup>砥平</sup>、<sup>抱川</sup>、<sup>積城</sup>、<sup>清州</sup>、<sup>洪州</sup>、<sup>熊州屬</sup>熊州、<sup>清風</sup>、<sup>天安</sup>、<sup>沃川</sup>、<sup>安邑屬</sup>安邑、<sup>陽山屬</sup>陽山、<sup>溫陽</sup>、<sup>大興</sup>、<sup>泰安</sup>、<sup>舒川</sup>、<sup>韓山</sup>、<sup>毛坤屬</sup>毛坤、<sup>瑞山</sup>、<sup>牙山</sup>、<sup>德山</sup>、<sup>稷山</sup>、<sup>定山</sup>、<sup>青陽</sup>、<sup>清安</sup>、<sup>懷德</sup>。

扶餘 石方 陰城 保寧 懷仁 高遼 禮山  
燕岐 紆今屬 沃野金州屬 尹城金州屬 綾城遼屬  
羅州 長山羅州屬 光州 長城 南京 榆谷遼屬  
長興 潭陽 礪山 淳昌 賣城 古阜 荒遼屬  
鹽光 珍島 錦山 富利錦山屬 童潭 富洞遼屬  
金溝 樸陽金溝屬 保安扶寧屬 光陽 龜安 咸悅  
桃田咸悅屬 咸平 泰仁 南平 井邑 滄尾遼屬  
鎮安 馬靈鎮安屬 茂長 務安 長水 同福 興  
陽 海南 慶州 杞溪慶州屬 豐山慶州屬 尚州  
化寧尚州屬 功城尚州屬 青里尚州屬 達城大邱屬 昌  
原 星州 壽城大邱屬 金海 密陽 善山 青松  
蔚山 河東 順興 咸陽 陝川 草溪 清道  
多仁慶州屬 榮川 梁山 咸安 豐基 固城 義  
城 龜高 彦陽 間慶 咸昌 知禮 安陰安義屬  
高靈 玄風 丹城 比安 軍威 義興 延日  
長磐 機張 熊川 江陵 原州 光海春川屬 鉄  
原 三陟 寧越 平海 旌善 杆城 高陽 平  
昌 金海 楊口 狼川 平原 安峽 海州 延  
安 谷山 平山 白川 金川 文化 長洲 長

延壽 連壽 松禾 永興 吉城吉州屬 安邊 登州安邊屬  
瑞谷遼屬 長津 鍾城 茂山 平壤 義州 安  
州 定州 昌城 成川 宣川 龜川 祥原 順  
川 雲山 嘉山 順安 孟山 江東 永海  
以下邑  
寧城 永城 高州 大完 洪城 元州  
玉川 文城 安興 瑞安 宣山 化山 清陽  
啓陽 沃山 仁平 寧海 買城 丹原 廣永  
長沃 大明中國 清州 甲山  
閔氏 驪興驪州屬 黃驪驪州屬 宋州 漢陽楊州屬 竹山  
清風 懷德 青陽 羅州 泰仁 海南 龜宮  
延日 玄風 原州 發州 密陽 善山 順興  
海州 瑞興 扶溪新溪屬 永興 昌城 昌善昌善屬  
在氏 豐川 長興 栗川 牙善牙善屬 谷城 懷德 咸  
豐咸豐屬 驪州 楊州 漢陽楊州屬 沙川楊州屬 豐  
德 竹山 乳石永平屬 陽川 陽城 連川 清州  
公州 儒城公州屬 高丘洪州屬 丹陽 沂利沃川屬  
沔川 永同 唐津 保寧 鴻山 平沃 連山  
廣昭廣昭屬 定山 市津恩津屬 彩雲恩津屬



全州 沃野<sup>全州</sup> 景明<sup>全州</sup> 羅州 長山<sup>羅州</sup>  
光州 南原 榆谷<sup>南原</sup> 沙寧<sup>(不明)</sup> 語山<sup>長山</sup>  
長城 上伊沙<sup>順天</sup> 富利<sup>錦山</sup> 貢牙<sup>靈光</sup> 珍島  
嘉興<sup>珍島</sup> 義新<sup>珍島</sup> 昌平 龜源 扶安 保安  
扶安<sup>屬</sup> 道康<sup>屬</sup> 南平 任實 泰仁 沃溝 張  
陽 泰江<sup>屬</sup> 豐安<sup>屬</sup> 永禮 沙寧<sup>求禮</sup>  
慶州 安東 一直<sup>安東</sup> 吉安<sup>安東</sup> 豐山<sup>安東</sup>  
鳴河<sup>安東</sup> 化寧<sup>尚州</sup> 淮濟<sup>尚州</sup> 鎭城<sup>尚州</sup> 星  
山<sup>星州</sup> 晉州 永善<sup>晉州</sup> 丘陽<sup>晉州</sup> 大丘 河  
汝<sup>屬</sup> 善山 海平<sup>屬</sup> 金海 宏陽 蔚山  
仁 順興 溟珍<sup>巨濟</sup> 八岳<sup>漆谷</sup> 草溪 榮川  
助馬<sup>金山</sup> 新繁<sup>宜寧</sup> 咸昌 安貞<sup>比安</sup> 長湍  
漆泉 江陵 寧越 伊川 平海 旌善 海州  
延安 平山 谷山 文化 長湍 永康<sup>屬</sup> 永  
寧<sup>屬</sup> 靜迎<sup>永興</sup> 登州<sup>安山</sup> 衛山<sup>安山</sup> 納陽  
也屬末長興境內一作長湍  
設恐在任氏以下屬末改 冠山 豆坪

南 氏 英陽 宜寧 固城 南原 驪興<sup>驪州</sup> 水原<sup>屬</sup>

南陽 安山 陽川 清州 洪州 清風 全州  
羅州 押海<sup>羅州</sup> 長山<sup>羅州</sup> 潘南<sup>羅州</sup> 長興  
古阜 南平 慶州 尚州 晉州 星州 密陽  
仁目 咸安 金山 義城 南海 臨村<sup>屬</sup> 居  
昌 禮安 金谷<sup>屬</sup> 弓北<sup>屬</sup> 榮州 淮陽  
寧越 平海 橫城 海州 延安 平山 長湍  
兔山 登州<sup>屬</sup> 鎭城 咸從 殷山 河平<sup>以下邑  
屬末改</sup>  
寧城 延陽 坡溪 乙陽 香城 日谷

徐 氏 利川 達城<sup>大邱</sup> 長城 連山 南平 扶餘 平  
當<sup>坡州</sup> 福興<sup>淳昌</sup> 宜寧 南陽 黃山<sup>連山</sup> 梅  
州<sup>延安</sup> 善城<sup>南陽</sup> 開城 漢山<sup>屬</sup> 驪州 楊  
州 漢陽<sup>屬</sup> 坡平<sup>坡州</sup> 峯城<sup>坡州</sup> 水原 雙  
阜<sup>水原</sup> 宗德<sup>水原</sup> 富平 仁川 豐德 安山  
安城 高陽 加平 黃仁 處仁<sup>屬</sup> 乳石<sup>水原</sup>  
振威 果川 衿川 陽城 漣川 忠州 清州  
公州 德津<sup>屬</sup> 清風 丹陽 豐巖<sup>屬</sup> 河川  
泰安 瑞山 溫陽 大興 清安 恩津 石城  
庇仁 藍浦 鎭川 結城 禮山 木川 燕岐  
報恩 全州 羅州 安老<sup>屬</sup> 金津<sup>屬</sup> 光州

綾城<sup>綾州</sup> 南原 順天 礪山 拔朱 寶城 古  
阜 造紙<sup>靈泉</sup> 昌平 光陽 扶安 大口<sup>靈津</sup>  
泰仁 同福 欽治<sup>南平</sup> 務安 求禮 任實 長  
水 海南 慶州 神老<sup>靈泉</sup> 安東 尚州 晉州  
金海 宏陽 守山<sup>靈泉</sup> 善山 仁同 順興 清  
道 醴泉 咸陽 固城 南海 玄風 軍威 安  
陰<sup>安美</sup> 感陰<sup>安美</sup> 延日 龜宮 昌寧 丹溪<sup>丹美</sup>  
山陰<sup>山清</sup> 新繁<sup>宜寧</sup> 柱城<sup>靈泉</sup> 熊川 江陵  
原州 史石<sup>靈川</sup> 淮陽 鐵原 寧越 伊川 平  
海 金城 平康 棧城 海州 延安 平山 瑞  
興 谷山 鳳山 白川 長淵 兎山 咸興 吉  
州 登州<sup>安寧</sup> 利城 義州 延川<sup>寧寧</sup> 定州  
昌城 郭山 花山<sup>以下邑屬未改</sup> 連城 梨川 興川 寶  
安 寶原 鳳城 普原 佳城 慶山

具氏 綾城<sup>綾州</sup> 玄州 驪興<sup>驪州</sup> 延昌<sup>延州</sup> 安山  
朔寧 漣川 忠州 渭州 瑞山 新昌 青山  
南原 長城 光陽 耽津<sup>靈津</sup> 興陽 慶州 安  
東 尚州 晉州 星州 金海 宏陽 順興 江

陵 原州 旌善 橫城 文化 德興<sup>以下邑屬未改</sup> 昌  
考  
成氏 昌寧 江華 玄州 坡平<sup>坡州</sup> 水原 楊根 衿  
川 洪州 沔川 溫陽 連山 藍浦 石城 鎮  
川 新昌 牙山 全州 光州 長興 會亭<sup>長興</sup>  
森溪<sup>靈泉</sup> 昌平 同福 慶州 安東 商山<sup>尚州</sup>  
功城<sup>尚州</sup> 晉州 班城<sup>晉州</sup> 星州 金海 遼陽  
青松 昌原 仁同 陝川 咸陽 義城 宜寧  
咸昌 鎮海 延日 江陵 原州 寧越 伊川  
平昌 金化 延安 慶興 昌城 三和 箕州  
<sup>以下邑屬未改</sup> 童注

宋氏 礪山 恩津 鎮川 金海 新平<sup>靈泉</sup> 延安 瑞  
山 治爐<sup>陝川</sup> 南陽 泰仁 沃溝 清州 雙阜  
水原<sup>靈泉</sup> 德山 安山 竹山 江陰<sup>金川</sup> 福興<sup>遼昌</sup>  
見州<sup>楊州</sup> 江華 河陰<sup>江華</sup> 玄州 驪興<sup>驪州</sup>  
沙川<sup>靈泉</sup> 豐壤<sup>楊州</sup> 坡山<sup>坡州</sup> 水原 龜城<sup>水原</sup>  
沙梁<sup>水原</sup> 柱石<sup>水原</sup> 工二<sup>水原</sup> 利川 豐德  
德水<sup>靈泉</sup> 臨津<sup>靈泉</sup> 仁川 長湍 松林<sup>長湍</sup>  
朔寧 高峯<sup>高陽</sup> 麻田 永平 陽川 龜仁

振威、涇川、忠州、公州、良化<sup>公州</sup>、驪陽<sup>洪州</sup>  
清風、丹陽、安邑<sup>涇州</sup>、永迎<sup>嶺南</sup>、韓山、天安  
溫陽、大興、文義、尼城、陰城、定山、彩雲<sup>忠州</sup>  
連山、青陽、稷山、延豐、懷德、懷仁、禮山  
全義、全州、羅州、潘南<sup>羅州</sup>、押海<sup>羅州</sup>、綾州  
南原、順天、潭陽、益山、永迎<sup>古阜</sup>、兩日<sup>古阜</sup>  
錦山、安城<sup>錦山</sup>、靈光、赤城<sup>淳昌</sup>、大安<sup>淳昌</sup>  
陳根<sup>淳昌</sup>、柳亭<sup>淳昌</sup>、臨城、漣尾<sup>漢陽</sup>、雲梯<sup>高山</sup>  
仁義<sup>高靈</sup>、高靈、興德、南平、英陽、南陽<sup>襄陽</sup>  
馬靈<sup>高靈</sup>、玉果、海南、竹山<sup>高靈</sup>、紗羅<sup>高靈</sup>  
保安<sup>蔚寧</sup>、廣州、比安<sup>公州</sup>、安東、尚州、晉  
州、星州、昌原、大丘、河決<sup>公州</sup>、東萊、密陽  
善山、青松、順興、河清<sup>巨濟</sup>、陝川、永川、咸  
陽、江陵、原州、鉄原、史吞<sup>高靈</sup>、淮陽、寧越  
伊川、狼川、金化、平康、史丁<sup>平康</sup>、海州、平  
山、豐川、遂安、白川、新溪、青松<sup>松本</sup>、咸興  
永興、登州<sup>蔚寧</sup>、福靈<sup>高靈</sup>、平壤、定州、德川  
碧潼、江西、陽德、礪山<sup>以下區</sup>、領原、青川、胎  
丹城、濟州、(以下 224 頁入)

俞氏 杞溪<sup>慶州</sup>、昌原、仁同、長沙<sup>長</sup>、高靈、務安  
川寧<sup>慶州</sup>、康津、開城、江華、河陰<sup>江華</sup>、驪州  
登神<sup>驪州</sup>、漢陽<sup>楊州</sup>、坡州、隨城<sup>水原</sup>、喬桐  
竹山、安城、砥平、抱川、積城、果川、陰竹  
忠州、清州、間身<sup>清州</sup>、儒城<sup>公州</sup>、貴智、蔚山  
公州、清風、沔川、瑞山、大興、稷山、德恩<sup>蔚山</sup>  
全義、尼城、保寧、唐津、清安、牙山、德泉<sup>蔚山</sup>  
全州、羅州、蔚山<sup>羅州</sup>、任城<sup>羅州</sup>、水多<sup>羅州</sup>  
長城、南原、茂朱、潭陽、朔山<sup>礪山</sup>、嘉興<sup>珍島</sup>  
弘農<sup>靈光</sup>、昌平、雲梯<sup>高山</sup>、龜安、豐堤<sup>高靈</sup>  
倉山<sup>龜安</sup>、咸平、多慶<sup>咸平</sup>、永豐<sup>咸平</sup>、南平  
扶安、長水、和順、慶州、晉州、金浦<sup>京畿</sup>、金  
海、密陽、草溪、昆陽、榮川、昌寧、岳溪<sup>義興</sup>  
河陽、江陵、原州、鉄原、三陟、寧越、高城  
通川、方山<sup>楊口</sup>、安岳、長湍、德源、鍾城、定  
州、龜岡、冥城<sup>以下區</sup>、寧川、文海、柎城、桎城  
大元<sup>中國</sup>  
元氏 原州、廣川、漢陽<sup>楊州</sup>、坡平<sup>坡州</sup>、水原、利川  
通津、喬桐、竟仁、陽川、忠州、清州、大興

德山 懷德 全州 羅州 光山<sup>光州別號</sup> 南京 順  
天 益山 長平<sup>長平屬</sup> 慶州 晉州 金海 河東  
咸陽 興海 玄風 江陵 寧越 平康 狼川  
橫城 安岳 靜迎<sup>永興屬</sup> 登州<sup>安迎屬</sup> 瑞台<sup>安迎屬</sup>  
花山<sup>以下區屬未改</sup> 元州 元豐 廣海

黃氏 昌京 長水 平海 尚州 紆州<sup>全州屬</sup> 懷德 黃  
州 江華 管城<sup>永川屬</sup> 豐德 沔川 扶安 德山  
三岐<sup>三屬</sup> 郭州<sup>臣屬</sup> 而城 廣州 楊州 漢陽  
楊州<sup>屬</sup> 坡平<sup>州屬</sup> 水原 高平 南陽 利川 二  
川 長湍 德水<sup>屬</sup> 安山 安城 高陽 德陽  
高陽<sup>屬</sup> 陽川 永新<sup>屬</sup> 陽城 衿川 忠州 清  
州 公州 撲山<sup>公州屬</sup> 金生<sup>公州屬</sup> 洪州 泰安  
麟山 天安 瑞山 大興 丹陽 連山 廣昭<sup>屬</sup>  
德豐<sup>屬</sup> 青陽 平沃 懷仁 清安 黃洞 扶  
餘 鎮川 木川 全義 報恩 全州 羅州 朱  
山<sup>羅州屬</sup> 光州 礪山 礪良<sup>礪山屬</sup> 南京 居寧<sup>屬</sup>  
長興 茂豐<sup>屬</sup> 別良<sup>屬</sup> 益山 富利<sup>屬</sup>  
赤城<sup>屬</sup> 靈巖 臨湍<sup>屬</sup> 右阜 樂安 昌平  
泥波<sup>屬</sup> 南平 九皇<sup>屬</sup> 保安<sup>屬</sup> 玉果

金山<sup>屬</sup> 道康<sup>屬</sup> 光陽 泰仁 和順 長溪  
慶州 安康<sup>屬</sup> 安東 青里<sup>屬</sup> 晉州  
星州 大丘 金海 寧海 密陽 善山 海平<sup>屬</sup>  
河東 仁同 順興 陝川 咸陽 清道 昆陽  
醴泉 多仁<sup>屬</sup> 義城 泗川 虎溪<sup>屬</sup> 感陰  
安義<sup>屬</sup> 用寧 河陽 龜宮 比安 長鬐 昌寧  
原州 吞川 鉄原 三陟 寧越 蔚珍 狼川  
洪州 橫城 海州 延安 平山 萬珍<sup>屬</sup> 鳳  
山 遂安 牛峯<sup>屬</sup> 登州<sup>屬</sup> 端川 平壤  
義州 昌城 咸川 咸從 德川 花山<sup>以下區屬未改</sup> 宜  
城 濟安 青州 寧州 昌安 紐城 長州 玉  
川 清海 尚山 遼東 長安 甕川 山東 日  
新 杭州 大谷<sup>屬</sup>

曹氏 昌寧 綾城<sup>屬</sup> 南平 玉川<sup>屬</sup> 長興 安東  
清道 壽城<sup>屬</sup> 嘉興<sup>屬</sup> 昌平 開城 江華  
南漢<sup>屬</sup> 驪州 楊州 漢陽<sup>屬</sup> 坡平<sup>屬</sup>  
竹州<sup>屬</sup> 富平 南陽 楊根 漣川 忠州 清  
州 清風 丹陽 泰安 瑞山 文義 平沃 木  
川 青山 扶餘 全州 羅州 潘南<sup>屬</sup> 會津



羅州 伏竜 羅州 餘隄 羅州 南泉 召羅 順天  
嘉音 順天 遂寧 長興 靈光 陸昌 靈巖  
北平 靈巖 淳昌 錦山 富安 金溝 務安  
泰仁 興德 坐鄉 興德 北調 興德 泰江 興德  
耽津 興德 大谷 興德 雲水 興德 黃原 興德 王  
山海 興德 慶州 仇史 慶州 晉州 花園 興德 張  
陽 蔚山 東萊 仁同 順興 河決 興德 巨濟  
溟珍 巨濟 蔚州 蔚州 吉丁 巨濟 鍊汀 巨濟 河  
東 咸陽 馬淺 興德 梁山 陝川 盈德 南海  
平山 南海 靈山 鎮海 咸昌 宜寧 丹城 利  
安 安善 居昌 和祚 興德 山陰 興德 皆品 興德  
三岐 三岐 江陵 鉄原 寧越 伊川 平海 平  
康 麟蹄 平山 豐川 谷山 咸興 登州 興德  
慶興 朔川 高原 寧邊 安州 昌城 咸川  
德川 价川 竜岡 孟山 永宗 興德 仁山 金  
山 昌燕 豐安 守州 昌慶 江安 竹吐 興德  
林氏 平沢 利安 興德 保安 興德 扶安 羅州 善山  
益山 恩津 鎮川 臨河 興德 兆陽 興德 禮泉  
淳昌 開慶 沃溝 長興 南海 南州 興德 開

城 河陰 江華 蔚州 驪興 蔚州 坡平 坡州 楊  
州 漢陽 蔚州 水泉 富平 南陽 利川 仁川  
豐德 楊根 安山 朔寧 高陽 振威 陽川  
炮川 衿川 連川 忠州 清州 洪州 新平 興德  
驪陽 蔚州 清風 林川 丹陽 泰安 韓山 天  
安 瑞山 槐山 沃川 溫陽 文義 堤川 稷  
山 定山 延豐 陰城 連山 扶餘 庇仁 藍  
浦 結城 海美 新昌 禮山 木川 報恩 牙  
山 常山 鎮川 全州 沃野 蔚州 潘南 蔚州 居  
平 蔚州 濟州 光州 綾州 南原 南田 興德  
順天 松林 順天 下伊沙 順天 礪山 茂朱 長  
沃 興德 福興 興德 豐寧 興德 寶城 福城 興德  
古阜 德林 古阜 兩日 古阜 喬迎 古阜 靈巖  
珍島 靈光 錦山 昌平 竜潭 臨陂 咸悅  
康津 茂長 務安 谷城 鎮安 豐堤 興德 九  
阜 興德 玉泉 福興 興德 南田 興德 興陽 廣  
州 安東 吉安 興德 尚州 晉州 永善 興德  
星州 金海 寧海 青松 密陽 蔚山 義安  
昌興 海平 興德 陝川 東萊 河東 仁同 順興

清道 永川 興海 梁山 金山 昆陽 屯官  
慶山 義城 河陽 盈德 咸昌 山陰<sup>山陰</sup> 宣  
寧 高靈 玄風 義興 禮安 昌寧 延日 居  
昌 原州 春川 寧越 伊川 平海 旌善 平  
昌 碧山<sup>通川</sup> 雲巖<sup>通川</sup> 蔚珍 金城 通溝<sup>金海</sup>  
狼川 洪川 楊口 黃州 海州 延安 瑞興  
豐川 信川 遂安 白川 新溪 長湍 殷栗  
鬼山 咸興 登州<sup>安山</sup> 永興 慶源 平壤 延  
山<sup>安山</sup> 安州 定州 咸川 朔州 中和 祥原  
价川 順川 熙川 雲山 泰川 雪城<sup>下邑</sup>  
宜城 玉山 石津 保泉 釜山 保城 任浦  
玉丘 臨泉 湖津 臨川 湖陽 達內 會錄  
平津 果川

呂氏 咸陽 星州 驪興<sup>驪州</sup> 五采<sup>水原</sup> 今昔村<sup>水原</sup>  
南陽 豐德 忠州 公州 光山<sup>光州</sup> 全州 礪  
山 上伊沙<sup>順天</sup> 豆平<sup>順天</sup> 嘉興<sup>珍島</sup> 平阜<sup>金堤</sup>  
昌平 谷城 武城<sup>義寧</sup> 慶州 尚州 金海 密  
陽 江陽<sup>陝川</sup> 咸昌 昌寧 靈山 宜寧 海州  
豐川 鬼山 咸興 登州<sup>安山</sup> 咸川 順川

竟城<sup>以下邑</sup> 咸寧

梁氏 濟州 南京 忠州 楊州 羅州 林川 開城  
廣州 驪州 水原 南陽 德水<sup>德山</sup> 仁川 竹  
山 通津 楊根 麻田 蕙仁 陽川 陽城 清  
州 公州 驪陽<sup>洪州</sup> 清風 蘇泰<sup>義寧</sup> 鎮川  
鴻山 市津<sup>蔚寧</sup> 平沢 青陽 懷德 禮山 全  
州 沃野<sup>金州</sup> 會津<sup>羅州</sup> 光山<sup>光州</sup> 錦山 安  
城<sup>錦山</sup> 靈光 南平 興陽 海南 鶴林<sup>蔚寧</sup>  
安東 尚州 晉州 星州 昌原 金海 密陽  
善山 河東 仁同 清道 永川 利安<sup>義寧</sup> 宜  
寧 彦陽 玄風 新寧 江陵 原州 鉄原 寧  
越 平海 杆城 平康 金化 白川 登州<sup>義寧</sup>  
端川 富寧 安州 順川 金陵<sup>下邑</sup> 南安 薊  
城 雲南<sup>中國</sup>

禹氏 丹陽 禮安 榮川 剛州<sup>義寧</sup> 木川 江華 楊  
州 漢陽<sup>楊州</sup> 水原 南陽 竹山 德山 平沢  
青陽 懷德 鎮川 全州 濟州 光州 昌寧  
慶州 杞溪<sup>慶州</sup> 安東 晉州 昌原 遼城<sup>大丘</sup>  
金海 密陽 東萊 丹城 延日 原州 旌善

平泉、咸興、永興、登州<sup>安邊</sup>、丹川<sup>邑屬</sup>、  
羅氏 羅城、錦城、安定<sup>密雲</sup>、比安、壽城<sup>大邱</sup>、軍威、  
定山、廣州、坡州、楊州、水原、安城、忠州、  
清州、公州、驪陽<sup>洪州</sup>、契陽<sup>洪州</sup>、韓山、溫陽、  
舒川、井所<sup>瑞山</sup>、堤川、保寧、沃田<sup>花仁</sup>、全州、  
陽良<sup>全州</sup>、濟州、光州、靈光、義新<sup>珍島</sup>、扶安、  
慶州、尚州、丹密<sup>尚州</sup>、晉州、金海、昌寧、虎、  
溪園<sup>慶州</sup>、瓮津、萬頃<sup>龜津</sup>、文化、青松翁李、備、  
山<sup>安邊</sup>、延州<sup>寧邊</sup>、德平<sup>以下邑屬</sup>、居平、  
孫氏 慶州、密陽、平海、永禮、扶寧翁李、羅州、一、  
直<sup>密雲</sup>、安峽、廣州、楊州、水原、仁川、南陽、  
載陽<sup>南陽</sup>、富平、黃魚<sup>富平</sup>、豐德、楊根、安城、  
加平、龜仁、永平、陽智、果川、漣川、忠州、  
清州、清川<sup>清州</sup>、驪陽<sup>洪州</sup>、報恩、青山、連山、  
青陽、平沃、禮山、黃岡、稷山、定山、堤川、  
永同、牙山、全州、利城<sup>全州</sup>、南原、楡谷<sup>南原</sup>、  
朱溪<sup>朱溪</sup>、森溪<sup>靈光</sup>、猿山<sup>珍島</sup>、錦山、橫川<sup>錦山</sup>、  
光陽、豐堤<sup>安東</sup>、安東、丹密<sup>尚州</sup>、功城<sup>尚州</sup>、  
茂林<sup>尚州</sup>、晉州、岳陽<sup>晉州</sup>、金海、大丘、密陽

寧海、海平<sup>山屬</sup>、安德<sup>吉松</sup>、順峽、巨濟、松迎、  
巨濟、咸陽、清道、永川、昆陽、義城、南海、  
宜寧、高靈、玄風、丹城、禮安、昌寧、江陵、  
京州、春川、歙原、三陟、襄陽、伊川、寧越、  
碧山<sup>再川</sup>、金城、麟蹄、黃州、海州、平山、瑞、  
興、望川、谷山、安岳、載寧、金川、白川、文、  
化、永興、安邊、瑞谷<sup>安邊</sup>、鍾城、平壤、定州、  
陽德、咸原<sup>以下邑屬</sup>、永宗、安陽、玉山、山東、咸、  
永、田山、大元<sup>中國</sup>、  
盧氏 光州、交河、長洲、豐川、安康<sup>慶州</sup>、慶州、安、  
東、谷山、龜城<sup>龜亭</sup>、萬頃、海州、靈光、靈城、  
通津<sup>通津</sup>、開城、江華、鎮江<sup>江華</sup>、廣州、耀興<sup>耀興</sup>、  
漢陽<sup>漢陽</sup>、水原、南陽、長湍、臨江<sup>長湍</sup>、通津、  
高州、安山、高陽、陽川、衿川、抱川、積城、  
陽城、漣川、忠州、甘勿<sup>忠州</sup>、清川、公州、洪、  
州、高丘<sup>高丘</sup>、清風、丹陽、沔川、天安、沃川、  
溫陽、石城、懷德、連山、銅川、結城、海美、  
新昌、禮山、全州、羅州、清州、綾州、順天、  
安山、礪山、長城、賈城、福城<sup>賈城</sup>、昌平、

臨陂、金溝、海南、務安、南平、鐵冶南平屬、辰  
平、海際辰平屬、尚州、晉州、星州、金海、達城  
大丘、密陽、豐角密陽屬、善山、松生青松屬、河東  
順興、清道、咸陽、永川、醴泉、昆陽、固城、  
宜寧、漆原、開慶、咸昌、昌寧、江陵、羽溪江陵屬  
栗州、酒泉栗州屬、淮陽、蔚谷淮陽屬、襄陽、慈川  
鐵原、寧越、伊川、通川、杆城、金城、平康  
金化、洪川、黃川、平山、瑞興、安岳、載寧、  
文化、長延長延屬、鬼山、咸興、永興、靜邊永興屬  
安邊、文山安邊屬、定平、安州、定州、昌城、元  
州以下屬、文海、陳江、銅州、朝陽、義山、玄城  
大元、中國、槐山

魚氏 咸從、忠州、交河、陽川、衿川、翼陽翼州屬、清  
州、丹陽、全州、長興、咸悅、咸平、晉州、金  
海、咸陽、海州、咸興、慶興、安州

睦氏 泗川、水原、桂陽桂陽屬、沃川、慶州、全州、南  
平、泰仁、多仁泰仁屬

蔡氏 小原、仁川、陰城、光州、江華、南陽、利川、  
長湍、通津、安山、忠州、伊次伊次屬、西原西原屬

公州、丹陽、鎮川、永春、巴川巴川屬、藍浦、全  
州、潘溪潘溪屬、長山長山屬、綾州、南平、慶州、  
尚州、山陽山陽屬、晉州、大丘、密陽、仁同、金  
山、草溪、咸安、固城、昌寧、原州、刀谷刀谷屬、  
鐵原、平海、旌善、海州、延安、平山、豐川、  
新溪、衡山、端川、平壤

辛氏 靈山、寧越、高靈、廣州、水原、載陽載陽屬、高  
陽、朔寧、衿川、林川、然山然山屬、念谷念谷屬、  
懷仁、清安、蔚谷蔚谷屬、全州、羅州、南原、呂  
羅羅屬、梨坪梨坪屬、嘉音嘉音屬、豆仍豆仍屬、赫良  
順順屬、靈巖、靈光、金溝、昌平、長平長平屬、扶  
寧扶寧屬、雲峯、光陽、海際海際屬、興陽、高山、  
海南、慶州、尚州、晉州、豐基、加祚加祚屬、宜  
寧、春川、鐵原、文登文登屬、洪川、平山、載寧、  
朔州、殷山、永州永州屬、靈城

丁氏 押海押海屬、武靈、昌原、開城、廣州、驪州、漢  
陽漢陽屬、南陽、喬桐、清州、瑞山、沃川、溫陽、  
全義、禮山、全州、羅州、光州、靈山、長興、  
突山、陵昌陵昌屬、弘農弘農屬、錦山、嘉興嘉興屬



昌平 南平 長沙<sup>屬縣</sup> 務安 興陽 泰江<sup>屬縣</sup>  
慶州 安東 晉州 星州 花園<sup>屬縣</sup> 金海 順  
順<sup>屬縣</sup> 東萊 岳陽 善山 仁同 順興 咸陽  
草溪 永川 義城 宜寧 龜旨 彦陽 昌寧  
新寧 居昌 漆原 平海 旌善 平昌 寂川  
海州 延安 平山 安州 定州 昌安<sup>以下不  
屬縣</sup> 南  
安 白城 閔谷 半山

裴氏 慶州 金海 星州 大丘 興海 侯溪<sup>屬縣</sup> 昆  
陽 京山<sup>屬縣</sup> 和順 開城 廣州 驪興<sup>屬縣</sup>  
川寧<sup>屬縣</sup> 漢陽<sup>屬縣</sup> 坡平<sup>屬縣</sup> 水原 南陽  
貞州<sup>屬縣</sup> 利川 仁川 長湍 竹山 安山 朔  
寧 加平 陽川 果川 忠州 清州 公州 龜  
泉<sup>屬縣</sup> 朔耕<sup>屬縣</sup> 清風 丹陽 舒川 大契  
德山 恩津 市津<sup>屬縣</sup> 彩雲<sup>屬縣</sup> 燕岐 報恩  
石城 庇仁 藍浦 鎮川 結城 新昌 全州  
軒州<sup>屬縣</sup> 伊城<sup>屬縣</sup> 景明<sup>屬縣</sup> 南原 順天  
礪山 長城 京原<sup>屬縣</sup> 古阜 靈巖 昆湄<sup>屬縣</sup>  
淳昌 富山<sup>屬縣</sup> 臨淮<sup>屬縣</sup> 沃溝 高山 要務  
高<sup>屬縣</sup> 長溪<sup>屬縣</sup> 梨方 康津 求禮 興陽 海南

安東 豐山<sup>屬縣</sup> 尚州 晉州 昌原 寧海 密  
陽 善山 順興 草溪 永川 咸安 固城 南  
海 開寧 高靈 靈山 昌寧 安陰<sup>屬縣</sup> 丹城  
江陵 鐵原 寧越 平海 楊口 海州 延安  
平山 瑞興 谷山 白川 信川 松木 兔山  
咸興 德源 平壤 定州 宜川 鉄山 熙川  
江東 西山<sup>屬縣</sup> 石溪 大同 南安 丹溪 龜  
山 大東 河嶺

孟氏 新昌 坡州 楊州 漢陽<sup>屬縣</sup> 清州 安邑<sup>屬縣</sup>  
溫陽 天安 全州 淳昌 慶州 豐山<sup>屬縣</sup> 密  
陽 金海 善山 永川 昆陽 盈德 長楊<sup>屬縣</sup>  
淮陽 平康 登州<sup>屬縣</sup> 鶴浦<sup>屬縣</sup> 鍾城 延州  
寧<sup>屬縣</sup> 昌城 孟山

郭氏 玄風 清州 善山 海美 餘美<sup>屬縣</sup> 鳳山 南  
陽 豐德 忠州 驪陽<sup>屬縣</sup> 清風 天安 延豐  
黃澗 全州 羅州 光州 南原 平阜<sup>屬縣</sup> 巨  
野<sup>屬縣</sup> 從政<sup>屬縣</sup> 昌平 萬頃 南平 求禮  
慶州 安東 晉州 星州 昌原 蔚山 東萊  
密陽 順興 河東 草溪 豐基 昌寧 長磐

江陵 原州 平昌 海州 平山 豐川 文化  
連豐<sup>長連</sup> 安邊 定州 咸從 郭山 寧城<sup>延在</sup>  
辺氏 黃州 原州 長洲 加恩<sup>國屬</sup> 黃州 楊州 水  
泉 南陽 利川 豐德 竹山 安山 高陽 陽  
川 果川 大康<sup>遼州</sup> 洪川 沃川 鎮川 石城  
全義 全州 羅州 南原 長興 珍山 南陽<sup>豐陽</sup>  
扶安 咸平 安東 尚州 晉州 大丘 金海  
興州<sup>順興</sup> 密陽 河東 仁同 草溪 咸陽 義  
城 開寧 泗川 昌寧 羽溪<sup>江陵</sup> 春川 伊川  
寧越 平海 平昌 平康 洪川 海州 平山  
豐川 瑞興 鳳山 江陰 文化 扶溪<sup>新溪</sup> 定  
州 祥原 慈川 元州<sup>以下五屬</sup> 太元中國 安東<sup>遼州</sup>  
草溪 密陽 楊州 漢陽<sup>楊州</sup> 坡平<sup>坡州</sup> 南陽  
安城 安山 陽川 忠州 西原<sup>清州</sup> 天安 瑞  
山 文義 平沃 全州 羅州 清州 長城 泰  
仁 慶州 安東 金海 素進<sup>盛陽</sup> 順興 八岳  
漆谷<sup>漆谷</sup> 興海 義城 仇知<sup>古風</sup> 宜寧 咸昌 高  
靈 江陵 原州 洪川 豐川 安岳 白川 文  
化 咸興 定州 昌城

順氏 屈昌 雙阜<sup>水泉</sup> 果川 新昌 玉泉<sup>海南</sup> 晉州  
昌原 密陽 青松 巨濟 昌寧 文登<sup>淮陽</sup> 海  
州 平山 慈山  
慶氏 清州 扶安 清風 平沃 南原 寶城 長水  
慶州 安東 尚州 河東 慶山 定州 慶城  
白氏 水泉 稷山 藍浦 赤城<sup>季昌</sup> 圃慶 清道 海  
美 解顏<sup>大丘</sup> 南海 開城 江華 廣州 驪州  
楊州 漢陽<sup>楊州</sup> 坡平<sup>坡州</sup> 南陽 內訖<sup>水泉</sup>  
盆村<sup>水泉</sup> 利川 安山 金浦 加平 竜仁 振  
威 砥平 積城 陽城 忠州 清州 公州 新  
豐<sup>公州</sup> 洪州 太山<sup>洪州</sup> 政声<sup>洪州</sup> 清風 林  
川 陽山<sup>洪州</sup> 舒川 大興 丹陽 瑞山 溫陽  
青陽 道安<sup>道安</sup> 石城 扶餘 鎮川 水川 牙  
山 全州 利城<sup>全州</sup> 陽良<sup>全州</sup> 羅州 洛州  
綾川 南原 居寧<sup>南原</sup> 長興 安壤<sup>長興</sup> 順天  
召羅<sup>順天</sup> 松林<sup>順天</sup> 嘉音<sup>順天</sup> 礪山 公村<sup>礪山</sup>  
長城 益山 古阜 德林<sup>古阜</sup> 兩日<sup>古阜</sup> 毛助

古阜 豐光 錦山 淳昌 置軍 淳昌 任寅 沃  
溝 高山 雲梯 高山 興德 長溪 長水 務安  
南平 七陽 漢津 海南 仇良 海南 慶州 安東  
一直 安東 豐山 安東 尚州 晉州 星州 大丘  
河決 不屬 金海 寧海 密陽 豆也浦 南陽 善  
山 蔚山 河東 仁同 順興 金山 迎余 金山  
陝川 興海 咸安 昆陽 昆明 陽 慶山 平  
山 蔚山 固城 義興 高靈 南慶 亮溪 蔚山  
昌寧 長鬐 泗川 江陵 原州 昌川 鉄原  
寧越 伊川 平海 旌善 金城 金化 黃州  
海州 延安 平山 安岳 遂安 日川 兎山  
咸興 登州 安寧 定州 咸川 鉄山 竜川 寧遠  
三登 昌州 雪城 仁城 銀石 海參 曹山 安  
興 白城 海城 海岸 德山  
全 氏 旌善 天安 沃川 竜宮 慶州 竹山 機張  
全州 慶山 平康 安東 景山 星州 黃洞  
羅州 咸昌 完山 全州 鎮安 開城 江華 廣  
州 楊州 漢陽 楊州 驪州 水原 長湍 竹山  
仁川 南陽 豐德 喬桐 通津 楊根 心岳 不屬

安城 振威 永平 積城 漣川 忠州 清州  
間身 清州 公州 高丘 洪州 清風 林川 瑞山  
丹陽 泰安 韓山 稷山 市津 恩津 全義 定  
山 扶餘 平沃 鎮川 唐津 木川 慈岐 禮  
山 黃洞 牙山 安老 羅州 濟州 光州 綾州  
潭陽 榆谷 南原 順天 進禮 順天 正方 順天  
寶城 北陽 寶城 松旨 豐義 古阜 豐光 淳昌  
昌平 沃溝 滄尾 漢溝 高山 玉果 光陽 求  
禮 任寅 咸悅 扶安 咸平 馬靈 安東 葱谷  
興陽 海南 竹山 海南 玉泉 桓川 海南 慶州  
臨河 海州 一直 安東 甘泉 安東 豐山 安東 尚  
州 功城 尚州 中牟 尚州 化靈 尚州 淮濟 尚州  
鎭銀 尚州 星州 晉州 昌泉 金海 密陽 善  
山 海平 善山 河東 仁同 順興 青島 蔚山  
安德 善山 松生 善山 清道 金山 懷德 金山  
醴泉 殷豐 善山 昆陽 義城 機張 河陽 義  
興 安心 河陽 靈山 加恩 南陽 開慶 宜寧  
彦陽 丹城 昌寧 原州 江陵 長鬐 襄陽  
史石 善山 平海 杆城 金城 新村 平康 史丁

平康<sup>康方</sup> 蔚珍 歙谷 黃州 延安 平山 谷山  
安岳 戴寧 白川 鳳山 文化 鬼山 咸興  
登州 瑞谷<sup>安屬</sup> 湫川<sup>安屬</sup> 鏡城 鍾城 平壤  
咸川 龜城 慈山 順川 花山<sup>以下邑屬</sup> 雪城 延  
平 青城 玉川 迎善 玉山 慶城

康氏 信川 戴寧 谷山 康翎 雲南<sup>邑屬</sup> 晉州 江  
華 坡山<sup>坡州屬</sup> 豐壤<sup>楊州屬</sup> 通津 幸州<sup>高陽屬</sup> 高  
峰<sup>高陽屬</sup> 永平 慈仁<sup>慈仁屬</sup> 忠州 清州 安邑<sup>安邑屬</sup>  
溫陽 庇仁 德泉<sup>牙山屬</sup> 全州 陽良<sup>全州屬</sup> 濟州  
順天 昇平<sup>順天屬</sup> 栗村<sup>順天屬</sup> 朱溪<sup>咸興屬</sup> 賓城  
龜潭 臨陂 大栗<sup>金溝屬</sup> 光陽 和順 任興 豐  
山<sup>安屬</sup> 草溪 義城 知禮 鎮海 江陵 泉州  
平康 海州 平山 瑞興 豐川 萬珍<sup>安屬</sup> 延  
安 安岳 永康<sup>康屬</sup> 永興 德源 康陵<sup>以下邑屬</sup>  
安陵 珍海 坡島

嚴氏 寧越 尚州 河陰<sup>江屬</sup> 廣州 漢陽<sup>楊州屬</sup> 坡平<sup>坡州屬</sup>  
隋城<sup>水屬</sup> 安城 龜仁 抱川 忠州 清州 西  
原<sup>清屬</sup> 沔川 扶餘 稷山 全州 清川 光州  
靈巖 龜潭 扶安 茂長 井邑 光陽 慶州

安東 召羅<sup>安屬</sup> 晉州 金海 寧海 密陽 善  
山 仁同 咸陽 彦陽 延日 江陵 泉州 平  
海 旌善 高城 平昌 平康 狼川 洪川 黃  
州 海州 延安 平山 白川 信川 文化 長  
洲 寧越 明原<sup>明屬</sup> 寧城<sup>寧屬</sup> 明月 寧河 河陽

高氏 濟州 長興 開城 延安 龜潭 潭陽 宜寧  
高峰<sup>高陽屬</sup> 沃溝 上黨<sup>清屬</sup> 橫城 金化 龜山  
會寧 江華 鎮江<sup>江屬</sup> 廣州 楊州 驪州 南  
陽 坡平<sup>坡州屬</sup> 利川 仁川 喬桐 竹山 幸州  
高陽<sup>高陽屬</sup> 忠州 公州 德津<sup>公州屬</sup> 丹陽 泰安 槐  
山 扶餘 慈山<sup>又屬</sup> 伊山<sup>德屬</sup> 鎮川 堤川  
石城 永同 全州 伊城<sup>金屬</sup> 羅州 南原 礪  
山 長沃<sup>長屬</sup> 朔州<sup>古屬</sup> 尙迎 橫程<sup>珍屬</sup> 巨  
野<sup>金屬</sup> 從政<sup>金屬</sup> 泥波<sup>高屬</sup> 高山 長水 康  
津 扶安 玉果 興陽 荳原<sup>興屬</sup> 海南 廣州  
尚州 淮濟<sup>尚屬</sup> 化寧<sup>尚屬</sup> 晉州 花園<sup>星屬</sup>  
金海 密陽 善山 河東 順興 仁同 末谷<sup>陝屬</sup>  
坐伊<sup>陝屬</sup> 蘭浦<sup>蘭屬</sup> 加乙山<sup>安屬</sup> 開寧 開慶  
仍乙頂<sup>慶屬</sup> 高靈 鐵原 伊川 淮陽 旌善



岐城<sup>金城縣</sup> 洪川 海州 平山 白川 文化 新  
 溪 靜迎<sup>永興縣</sup> 登州<sup>安別</sup> 三水 德源 文川  
 穎川<sup>以下邑屬未改</sup> 雪城 玉山 龜津 濟海 丹丘  
 田氏 泰山<sup>恭別</sup> 靈光 延安 潭陽 南陽 安州 喬  
 桐 珍原<sup>長城縣</sup> 開城 江華 河陰<sup>江華縣</sup> 廣州  
 豐壤<sup>楊州縣</sup> 漢陽<sup>楊州縣</sup> 坡平<sup>坡州縣</sup> 水原 盆村<sup>水原地方</sup>  
 仁川 長湍 松林<sup>長湍縣</sup> 貞州<sup>豐德縣</sup> 安城 幸州  
 高陽<sup>高陽縣</sup> 高峰<sup>高陽縣</sup> 麻田 永平 竟仁 果川 抱  
 川 陰竹 漣川 忠州 清州 青州<sup>清州縣</sup> 公州  
 柵城<sup>公州縣</sup> 洪州 清風 林川 韓山 丹陽 槐  
 山 天安 沃川 所利<sup>沃川縣</sup> 泰安 溫陽 平沃  
 庇仁 鎮岑 堤川 定山 陰城 結城 海美  
 禮山 全義 牙山 全州 羅州 光州 南原  
 茂朱 進禮<sup>順天縣</sup> 古羅<sup>順天縣</sup> 昆湄<sup>靈巖縣</sup> 森溪  
 靈光<sup>靈巖縣</sup> 兆陽<sup>靈巖縣</sup> 金溝 樸陽<sup>金溝縣</sup> 巨野<sup>金溝縣</sup>  
 雲峰 大合<sup>泰仁縣</sup> 九阜<sup>仁川縣</sup> 固城 義城 南寧  
 開慶 達島<sup>開寧縣</sup> 熊川 苑浦<sup>熊川縣</sup> 三日浦<sup>熊川縣</sup>  
 宜寧 龜宮 延日 昌寧 長磐 安陰<sup>安寧縣</sup> 江  
 陵 原州 淮陽 嵐谷<sup>淮陽縣</sup> 北尺<sup>淮陽縣</sup> 鉄原

旌善 杆城 平昌 通溝<sup>金剛縣</sup> 楊口 黃州 海  
 州 平山 谷山 白川 牛峰<sup>金剛縣</sup> 新溪 永寧  
 松峯<sup>松峯縣</sup> 兎山 咸興 鏡城 端川 平壤 義州  
 定州 龜城 竟州 順川 沃陽<sup>以下邑屬未改</sup> 海豐 雪  
 城 寧城 木平 黃平 華山 端川 大明 中國  
 京城

玄氏 昌原 延州<sup>一作延安並今寧道</sup> 星州 開城 廣州 驪州  
 川寧<sup>驪州縣</sup> 坡平<sup>寧道縣</sup> 水原 利川 仁川 竹山  
 安山 安城 加平 漣川 陽城 積城 抱川  
 忠州 清州 公州 新豐<sup>公州縣</sup> 德津<sup>公州縣</sup> 清風  
 丹陽 沔川 天安 毛山<sup>天安縣</sup> 溫陽 懷仁 延  
 豐 鎮川 結城 保寧 新昌 禮山 燕岐 藍  
 浦 牙山 全州 羅州 清州 光州 順天 富  
 有<sup>順天縣</sup> 赤良<sup>順天縣</sup> 朗山<sup>順天縣</sup> 潭陽 茂朱 靈  
 光 赤城<sup>靈巖縣</sup> 望城 長平<sup>昌平縣</sup> 長溪<sup>昌平縣</sup> 倉  
 山<sup>龜安縣</sup> 道康<sup>康津縣</sup> 廣州 長沙<sup>長安縣</sup> 班城<sup>晉州縣</sup>  
 尚州 合浦<sup>昌原縣</sup> 金海 密陽 善山 八苴<sup>漆谷縣</sup>  
 仁同 順興 永川 咸安 昆陽 宜寧 河陽  
 漆原 丹城 延日 昌寧 玄風 安陰<sup>安寧縣</sup>

江陵、原州、嵐谷<sup>舊屬</sup>、鐵原、三陟、平海、麟蹄、瑞和<sup>麟蹄屬</sup>、黃州、海州、延安、平山、豐川、文化、咸興、瑞谷<sup>安邊屬</sup>、明川、定州、成川、順川、雲山、安平<sup>安邊屬</sup>、咸原、桓城、延川、保城、順原。

文氏 南平、丹城、安東、靈山、保寧、綾城<sup>綾州屬</sup>、開寧、善山、江陵、河陽、甘泉<sup>安東屬</sup>、旌善、長淵、開城、江華、河陰<sup>江華屬</sup>、廣州、驪州、坡州、楊州、水原、漢陽<sup>楊州屬</sup>、南陽、利川、仁川、長湍、臨江<sup>長湍屬</sup>、楊根、朔寧、陰竹、高安<sup>陽智屬</sup>、忠州、清州、青川<sup>青川屬</sup>、公州、后德<sup>洪州屬</sup>、清風、韓山、天安、沃川、溫陽、大興、瑞山、地谷<sup>瑞山屬</sup>、丹陽、伊山<sup>德山屬</sup>、懷德、鎮川、禮山、尼城、牙山、德山、全州、羅州、光州、南原、長興、順天、昇平<sup>順天屬</sup>、八馬<sup>順天屬</sup>、原栗<sup>遼陽屬</sup>、珍原<sup>長城屬</sup>、珍山、平泉<sup>金堤屬</sup>、福城<sup>寧城屬</sup>、淳昌、昌平、奄潭、沃溝、鎮安、咸平、任美、玉果、興福<sup>玉果屬</sup>、金山<sup>玉果屬</sup>、雲峰、阿要<sup>雲峰屬</sup>、泰仁、南平、務安、海南、月城<sup>廣州屬</sup>、連城<sup>大邱屬</sup>、寧陽、昆陽、昆明<sup>陽智屬</sup>、清道。

宜寧、原州、淮陽、春川、鐵原、平海、高城、杆城、金城、岐城<sup>金溝屬</sup>、海州、延安、平山、谷山、豐川、信川、遂安、白川、文化、殷栗、咸興、靜邊<sup>永興屬</sup>、安邊、瑞川、北青、文川、平壤、定州、成川、中和、德川、竜岡、泰原<sup>下邑屬</sup>、河平、文海、保城、長沢、文城、丹川、宝寧、瑞城、多城、江城、鎮山、福城、尚氏 木川、栗川、林川、德興<sup>天安屬</sup>、慶州、宜寧、通川、順天。

河氏 晉州、安陰<sup>安義屬</sup>、江華、水原、南陽、仁川、豐德、喬桐、楊根、交河、陽城、忠州、清州、固岸<sup>清州屬</sup>、公州、丹陽、韓山、天安、豐茂<sup>天安屬</sup>、聖淵<sup>龜山屬</sup>、懷德、尼城、全義、鎮州、結城、全州、金甌<sup>羅州屬</sup>、濟州、綾州、長興、順天、茂豐、茂朱<sup>茂朱屬</sup>、朱溪<sup>茂朱屬</sup>、古阜、富利<sup>錦山屬</sup>、大谷<sup>錦山屬</sup>、珍山、扶安、耽津<sup>蔚山屬</sup>、溟津<sup>蔚山屬</sup>、南平、和順、栗谷<sup>益城屬</sup>、咸豐<sup>咸豐屬</sup>、慶州、杞溪<sup>慶州屬</sup>、安東、尚州、星州、昌原、金海、解頤<sup>大丘屬</sup>、密陽、河東、青松、昆陽、昌寧、海沃<sup>昆陽屬</sup>、泗川、三陟。

襄陽 平海 黃州 海州 延安 平山 兗山

咸興 登州<sup>安別</sup> 定安<sup>邑屬</sup>

蘇氏 晉州 鎮江<sup>屬</sup> 忠州 綾州 益山 北陽<sup>邑屬</sup>

嘉興<sup>珍島</sup> 慶州 金海 密陽 平山 金城

池氏 忠州 丹陽 廣州 開城 驪州 坡州 楊州

水原 南陽 仁川 陽川 義仁<sup>邑屬</sup> 秋溪<sup>陽屬</sup>

陽城 翼安<sup>忠州</sup> 清州 洪州 公州 清風 天安

安 陽山<sup>江屬</sup> 木川 青山 全州 羅州 濟州

光州 望城 靈巖 咸興 高山 谷城 海南

慶州 安東 尚州 晉州 昌原 金海 寧海

密陽 青松 河東 順興 草溪 興海 義城

南海 宜寧 龜宮 高靈 利安<sup>安屬</sup> 延日 原

州 所吞<sup>原屬</sup> 春川 寧越 平海 旌善 高城

平昌 洪川 黃州 海州 延安 平山 牛峰

金川 白川 文化 咸興 登州<sup>安別</sup> 青海<sup>北屬</sup>

昌城 成川 龜川 中和 順川 龜岡 翁山<sup>以下邑屬</sup>

長州 丹山

奇氏 辛州<sup>高屬</sup> 開城 豐壤<sup>楊州</sup> 西原<sup>清州</sup> 丹陽

鎮川 全州 南原 慶州 杞溪<sup>慶州</sup> 安東 晉州

金海 辰陽 河東 寧越 蔚珍 海州 延安

平壤 泰川

庚氏 平山 茂松<sup>長屬</sup> 廣州 竹山 安城 清州 鎮

川 藍浦 全州 扶元<sup>屬</sup> 光州 昆崙<sup>屬</sup>

北陽<sup>屬</sup> 泰仁 興陽 荳原<sup>屬</sup> 慶州 金海

長連 五溪<sup>邑屬</sup>

琴氏 奉化 桂陽<sup>金屬</sup> 安東 平海 鳳山 文化

吉氏 海平<sup>善屬</sup> 開城 河陰<sup>江屬</sup> 驪州 漢陽<sup>屬</sup>

叔平<sup>坡州</sup> 通津 西原<sup>清州</sup> 永同 善山 高靈

宜仁<sup>德屬</sup> 加恩<sup>屬</sup> 河陽 原州 南界<sup>清州</sup>

只吞<sup>春屬</sup> 狼川 白川 新溪 兗山 永興 吉

州 瑞谷<sup>屬</sup> 元山<sup>以下邑屬</sup> 旺堡

延氏 谷山 開城 廣州 南陽 忠州 德山<sup>忠州</sup> 西

原<sup>清州</sup> 清安 全州 羅州 谷城 慶州 晉州

金海 寧海 密陽 善山 順興 永州<sup>永屬</sup> 榮

川 咸陽 加恩<sup>屬</sup> 寧越 通川 平康 海州

延安 白川 新溪 咸興 靜邊<sup>永屬</sup> 慶川<sup>以下邑屬</sup>

遼東

朱氏 新安 羅州 押海<sup>屬</sup> 開城 廣州 坡平<sup>坡州</sup>

水原 南陽 利川 仁川 通津 喬洞 竹山  
朔寧 安城 高陽 交河 振威 陽川 陽智  
忠州 清州 公州 儒城 公州屬 申村 公州地方 福水  
公州地方 村介 公州地方 丹陽 德山 清安 懷德 扶  
餘 唐津 鎮川 禮山 歙羅 羅州屬 濟州 光州  
潭州 潭陽屬 南原 礪山 茂豐 茂朱屬 末溪 茂朱屬  
靈光 樂安 興德 務安 慶州 安東 尚州  
晉州 昌原 大丘 金海 密陽 順興 陝川  
草溪 永川 興海 盈德 義城 南海 安陰 安陰屬  
居昌 河陽 泗川 淮陽 襄陽 春川 鉄原  
寧越 伊川 平海 方山 楊口屬 海州 延安 瑞  
興 團山 安岳 遂安 文化 殷栗 咸興 安  
迎 青海 北青屬 明原 明川屬 平壤 定州 尚山 以下邑屬未改  
蛤海 大明 中國 固城

同 氏 尚州 草溪 咸安 長興 森溪 靈山屬 豐基 慶  
州 漢陽 楊州屬 水原 富平 竹山 竜仁 清州  
全州 安邑 沃川地方 押海 羅州屬 会亭 長興屬 靈巖  
靈光 樂安 慶州 杞溪 慶州屬 永順 尚州屬 晉州  
班城 晉州屬 密陽 順興 延日 慈仁 海州 平山

豐川 咸興 定州 濟州

義 氏 瑞原 朔州屬 開城 廣州 楊州 漢陽 楊州屬 豐壤  
楊州 楊州屬 水原 南陽 利川 豐德 安山 交河  
石淺 交河地方 忠州 清州 公州 清風 丹陽 沃  
川 廣地 瑞山地方 泰安 昇谷 海美地方 栗谷 永同地方 保  
寧 全州 紆州 全州屬 伊城 公州屬 沃野 全州屬 羅  
州 南原 順天 潭陽 茂朱 靈巖 靈光 金  
堤 淳昌 竜潭 咸悅 福興 長水地方 康津 茂長  
谷城 海南 尚州 慶州 晉州 星州 密陽  
順興 永川 宜寧 知禮 三岐 三嘉屬 高靈 靈  
山 昌寧 江陵 寧越 旌善 金城 平康 黃  
州 海州 谷山 載寧 信川 文化 鏡城 登  
州 安迎屬 竜津 以下邑屬未改 竜岡 石泉 竜潭 坡島

潘 氏 巨濟 光州 洪州 天安 陰城 結城 濟州  
南平 鉄首 南平屬 興陽 海際 咸平屬 密陽 陽節  
以下邑屬未改 城林 遼東

房 氏 南陽 水原 川寧 羅州屬 梨浦 仁川地方 抱川 漣川  
所利 沃川屬 瑞山 南原 順天 潭陽 密陽 梁  
山 盈德 義城 淮陽 熊林 淮陽地方 平海 平山



康地 邑名

方氏 溫陽 尚州 軍威 開城 江華 廣州 驪州

坡平 坡州別號 楊州 水原 南陽 樹州 富平別號 花梁

南陽 地方 楊根 安山 安城 麻田 高陽 交河

砥平 忠州 清州 洪州 新平 洪州別號 林川 丹

陽 天安 豐歲 天安縣 新宗 天安地方 大興 青陽

天安 懷德 結城 新昌 禮山 文石 禮山地方 北

物 禮山地方 尼城 定山 酒城 酒山地方 林埡 報恩地方 牙

山 全州 羅州 光州 南原 茂朱 錦山 楸

陽 金溝縣 萬頃 泰仁 南平 鐵冶 南平縣 茂長

務安 谷城 鎮安 海南 慶州 安東 山陽 尚州屬

化寧 尚州屬 中牟 尚州屬 平山 尚州地方 大丘 金海

密陽 善山 萊萊 陝川 樂梅 金海屬 榮州 榮州別號

興海 采山 昆陽 盈德 義城 宜寧 咸昌

柄谷 即慶地方 綏川 同慶地方 高谷 同慶地方 馬梁 同慶地方 昌

寧 原州 淮陽 伊川 平海 旌善 蔚珍 平

昌 金化 海州 延安 平山 豐川 載寧 牛

峰 金川 白川 文化 殷栗 永興 英州 吉州別號

登州 安山別號 但山 安山屬 青海 北青別號 高原 文州 文州別號

安州 定州 郭山 孟山 金陵 以下邑屬未成 雪城 河

原 茂安

孔氏 昌原 坡平 坡州別號 水原 富平 南陽 仁川 長

湍 臨湍 長湍屬 安山 金浦 陽川 忠州 清州

牙山 尼城 全州 羅州 南原 長城 錦山

昌平 非邑 慶州 晉州 金海 清道 興海

咸陰 陝川別號 居昌 宜寧 清河 昌寧 榮州 海

州 延安 豐州 豐川別號 平山 鳳山 文川 泰川

金陵 以下邑屬未成 石州 昌安 松城

王氏 開城 江陵 海州 韓山 水川 全州 密陽

東萊 興海 平山 鬼山 鏡城 遼東 以下邑屬未成

山東 延山

樸氏 慶州

劉氏 江陵 居昌 金城 甘州 甘川別號 遼州 延安 開

城 江華 廣州 驪州 楊州 漢陽 楊州屬 水原

富平 南陽 利川 仁川 長湍 德水 豐德屬 通

津 喬桐 竹山 楊根 安山 麻田 高陽 交

河 陽川 抱川 果川 積城 粉川 漣川 甘

勿 忠州地方 清州 公州 清風 丹陽 泰安 沔川

瑞山 天安 沃川 大興 文義 鴻山 鎮芬  
德山 懷德 尾城 全州 鎮川 陽良<sup>全州地方</sup> 崔  
州 光州 茂朱 南原 放光<sup>南原地方</sup> 長城 古阜  
靈光 淳昌 錦山 昌平 龜安 阿要<sup>靈峰地方</sup> 耽  
津<sup>康津</sup> 古今島 沃溝 咸平 南平 興德 放  
光<sup>宋禮</sup> 任實 鎮安 興陽 慶州 杞溪<sup>慶州屬</sup>  
安東 尚州 晉州 星州 昌原 大丘 金海  
襄陽 豐角<sup>襄陽屬</sup> 善山 青松 東萊 河東 仁同  
順興 咸安 盈德 固城 義城 開寧 宜寧  
河陽 加祚<sup>居昌屬</sup> 玄風 軍威 義興 孝靈<sup>軍威屬</sup>  
延日 英陽 鐵原 原州 光海<sup>春川屬</sup> 淮陽  
鐵原 三陟 平昌 蔚珍 平康 洪川 金化  
海州 平山 豐川 鳳山 江陰<sup>金川屬</sup> 新溪 文  
化 長洲 長連 殷東 登州<sup>安邊屬</sup> 瑞谷<sup>安邊屬</sup>  
安州 定州 昌城 楚山 花山<sup>以下邑屬不致</sup> 玉山 文  
海 雪城 玉川 咸清 南興 銅州 會原 南  
永 古阜 義陽 寧州 慶山

泰氏 豐基 三陟 龜駒<sup>龜仁屬</sup> 永春 河陰<sup>江華屬</sup> 廣州  
楊州 永春 南陽 長湍 臨湍<sup>長湍屬</sup> 德水<sup>豐基屬</sup>

朔寧 高峰<sup>高陽屬</sup> 永平 漣川 忠州 清州 新  
平<sup>洪州屬</sup> 公州 槐山 天安 長豐<sup>延豐屬</sup> 青陽  
利城<sup>金州屬</sup> 羅州 光州 南原 任實 海南 慶  
州 安東 晉州 永川 柴川 南海 鐵原 伊  
川 平康 橫城 安峽 海州 白川 平壤 大  
元<sup>中國</sup> 恭原<sup>邑屬</sup> 洛州

卓氏 光州 慶州 南陽 安山 楊根 加平 龜仁  
砥平 遼州 全州 昌平 咸平 慶州 安東  
尚州 晉州 金海 襄陽 東萊 河東 宜寧  
寧越 平山 登州<sup>寧越屬</sup> 端川 河平<sup>以下邑屬不致</sup> 延平  
咸氏 江陵 楊根 南城 廣州 驪州 坡平<sup>驪州屬</sup> 楊  
州 漢陽<sup>驪州屬</sup> 富平 南陽 臨津<sup>長湍屬</sup> 豐德  
通津 恒陽<sup>楊根屬</sup> 述原<sup>楊根屬</sup> 永平 砥平 橫城  
陽城 陽川 清州 清風 丹陽 平沃 道安<sup>清安屬</sup>  
全州 羅州 洛州 遂寧<sup>清安屬</sup> 咸平 康津 南  
平 谷城 慶州 尚州 昌原 密陽 河東 咸  
陽 義城 宜寧 丹城 延日 昌寧 英陽 南  
寧 原州 淮陽 襄陽 春川 鐵原 通川 高  
城 金城 黃州 海州 平山 長洲 咸興

登州<sup>安別</sup>、定州、咸從、龜城<sup>下邑</sup>、柳川

楊氏 清州、中和、安岳、南原、南漢<sup>公州</sup>、楊州、漢陽<sup>楊州</sup>、水原、南陽、安城、高陽、陽川、陽城、忠州、清風、天安、新昌、青山、全州、羅州、濟州、臨淄<sup>慶州</sup>、海原<sup>咸平</sup>、鐵冶<sup>咸平</sup>、尚州、杞溪<sup>慶州</sup>、安東、晉州、永善<sup>晉州</sup>、金海、密陽、青松、河東、興海、原州、文登<sup>桂陽</sup>、杆城、金化、延安、谷山、新溪、鶴浦<sup>安別</sup>、湫川<sup>安別</sup>、三和、雪城<sup>下邑</sup>、安興、面蜀、

薛氏 慶州、淳昌、朔城、公州、安山、安城、清州、忠州、公山<sup>公州</sup>、新昌、全州、潭陽、順天、皇城、尚州、善山、安德<sup>青松</sup>、巨濟、義城、宜寧、昌寧、江陵、雪城<sup>昌寧</sup>、

奉氏 河陰<sup>江華</sup>、江華、瓜州、安山、安城、陽川、陰竹、陽城、溫陽、海美、南原、慶州、金海、河東、咸安、河陽、江陵、延安、鍾城、

太氏 永順<sup>尚州</sup>、坡平<sup>坡州</sup>、龜仁、陽川、羅州、南原、珍山、慶州、尚州、太山<sup>金海</sup>、密陽、順興、陝川、永川、牙蘭<sup>醴泉</sup>、義城、玄風、平山、白川

牛峰<sup>金川</sup>、咸川、臨道<sup>通川</sup>、順天

馬氏 木川、長興、朔城、江陰<sup>江華</sup>、水原、忠州、清州、新平<sup>漢州</sup>、全州、羅州、濟州、光州、會寧、南平、求禮、谷城、海南、安東、晉州、密陽、順興、義城、高靈、玄風、海州、白川、登州<sup>安別</sup>、楚山、順川、穆川<sup>下邑</sup>、社興、茂城、陸川、

表氏 新昌、楊州、水原、竹山、忠州、公州、興陽<sup>漢州</sup>、沃川、扶餘、牙山、全州、羅州、濟州、有耻<sup>咸平</sup>、淳昌、治村<sup>咸平</sup>、興陽、道康<sup>康寧</sup>、慶州、尚州、昌原、大丘、密陽、仁同、興海、代加<sup>咸平</sup>、比安、安陰<sup>安寧</sup>、昌寧、海州、延安、安岳、文化、伊川、平昌、順安、

殷氏 泰仁、榆谷<sup>星州</sup>、幸州<sup>高陽</sup>、德山、兩日<sup>古阜</sup>、沃溝、大丘、和川<sup>桂陽</sup>、

余氏 宜寧、餘美<sup>海美</sup>、塩辛<sup>海美</sup>、礪山、谷城、密陽、草溪、砥山<sup>宜寧</sup>、丹溪<sup>丹寧</sup>、山陰<sup>山清</sup>、殷康、林京<sup>邑</sup>、

卜氏 活川、洪州、烏川<sup>延日</sup>、平山、龜城、延州<sup>寧越</sup>、

汾城以下邑屬不改 翼城 涇川  
汾氏 出溪屬翼 永原 南陽 清風 沔川 扶餘 新  
昌 牙山 務安 金海 密陽 草溪 義城 義  
興 武漢以下邑屬不改 茂溪  
牟氏 晉州 咸平一作豐 仁川 永平 牟平屬平泉 務安  
解顏大邑屬 海平屬平泉 清道 昌城 河平以下邑屬不改  
冀城  
魯氏 咸豐屬平泉 江華 開城 領江屬平泉 河陰屬平泉  
庄州 楊州 蛟平屬平泉 仁川 利川 德水屬德  
高峰屬平泉 交河 忠州 西原屬平泉 麟山 天安  
沔川 溫陽 全州 羅州 光州 潭陽 南原  
長城 叢津 慶州 晉州 昌原 密陽 豆也浦  
密陽屬平泉 河東 咸陽 豐基 昆陽 義城 開寧  
昌寧 嘉善屬平泉 安心屬平泉 河陽屬平泉 原州 春川 寧越  
平海 金城 黃州 海州 平山 延安 豐川  
谷山 白川 安岳 鳳山 文化 德川 泰川  
咸清以下邑屬不改 照海 晉江 長沃 河平 雪城 大  
元中國  
王氏 班城屬平泉 宜寧 開城 慶州 仁川 交河 牙

豐光 安東 遼城屬平泉 東萊 草溪 正骨屬平泉  
丹城 江陵 鉄原 海州 豐川 雪城以下邑屬不改  
山東  
丘氏 平海  
宣氏 宣城 光州 利川 長湍 臨湍屬平泉 陽城 天  
安 保寧 青山 全州 長城 同德 慶州 晉  
州 固城 義城 河陽 海州 豐川 鳳山 順  
天 咸原以下邑屬不改 咸城  
都氏 八邑屬平泉 蛟平屬平泉 蒼井屬平泉 清州 全州  
慶州 尚州 密陽 金山 陝川 固城 金城  
平山 肅川 荊州屬平泉  
蔣氏 青島屬平泉 牙山 金湍 豐德 安山 清州 麟  
山 新谷屬平泉 全州 光州 珍山 陽 梁山  
義城 開慶 連谷屬平泉 平山  
陸氏 宮城屬平泉 衿川 溫陽 鎮川 全州 靈巖 咸  
平 大丘 蔚山 陝川 泗川 鎮南以下邑屬不改 王川  
魏氏 遂寧屬平泉 長興 無岐 全州 長水 慶州 星  
州 橫城 永興 靜邊屬平泉



車氏 延安 龜城水泉屬 南海 平山 開城 江華 廣  
州 坡州 峯城坡州屬 漢陽楊州屬 水原 深谷水原屬  
榆梯水原屬 柱石水原屬 宗德水原屬 富平 南陽  
利川 仁川 長湍 松林長湍屬 豐德 德水豐德屬  
幸州高陽屬 安山 安城 麻田 石溪文河屬 龜仁  
連川 忠州 西原西原屬 公州 丹陽 沔川 瑞  
山 大興 堤川 稷山 定山 延豐 扶餘 鎮  
川 清安 結城 全州 羅州 安老羅州屬 光州  
南原 潭陽 順天 栗村順天屬 長城 德林古阜屬  
兩日古阜屬 龜潭 光陽 阿磨代光陽屬 本井光陽屬  
骨若光陽屬 南平 仕夷 龜安 海南 茂松茂松屬  
廣州 杞溪慶州屬 尚州 晉州 星州 昌原 金  
海 達城大丘屬 善山 密陽 東萊 河東 永川  
豐基 昆陽 龜宮 高靈 延日 龜山 江陵  
原州 寧越 高城 海州 瑞興 載寧 白川  
遂安 信川 江陰金川屬 文化 永興 鏡城 昌  
城 咸川 南川 龜城 龜川 修城以下邑屬不改 蘆田  
順原 連安 陝山 餘安 藍州  
郝氏 班城晉州屬 晉州 富平 臨津長湍屬 湍川 扶餘

長興 會寧長興屬 長水 昌原 文登江陽屬 鉄原  
兎山 安迎 昌城  
韋氏 江華 驪州  
唐氏 忠陽 清州 南陽 靈光 慶州  
仇氏 昌原 宜寧 仁川 幸州高陽屬 槐山 海美 伊  
城全州屬 沃野全州屬 伏龍羅州屬 益山 黑石益山屬  
金堤 鳴良金堤屬 堤見金堤屬 平安同州屬 利安咸昌屬  
多叱南原屬 上島南原屬 今勿南原屬 下活南原屬  
戊枝南原屬 達島南原屬 昌寧 殷栗 咸興  
明氏 西蜀 漢陽楊州屬 海美 忠州 陽山沃川屬 泰安  
金藏瑞山屬 木川 餘美海美屬 塩平海美屬 金藏珍山屬  
大丘 孝川醴泉屬 望珍醴泉屬 清河 連谷江陵屬  
東州咸昌屬 平康 海州 延安 義州 安州 定  
州  
莊氏 衿川 長湍  
葉氏 公村水原屬 處仁龜仁屬 滄尾沃溝屬 仁義泰仁屬 平海  
皮氏 廣州 見州蔚山屬 坡州 南陽 長湍 安山 衿  
川 忠州 公州 洪州 丹陽 槐山 清安 唐  
津 濟州 綾州 康津 慶州 安東 善山 咸陽

豐基 江陵 寧越 洪川 平山 遂安 慈山

丹州 以下迄  
屬不改 坡島

邕 氏 淳昌

甘 氏 合浦 昌原  
別號 忠州 居昌 昌寧

鞠 氏 靈光 福城 富寧  
屬 晉州 大丘

承 氏 楊州 陽川 忠州 公州 南原 金海 密陽

咸陽 延日 延安

公 氏 金浦 開城 仁川 森溪 富寧  
屬 慶州 金海 三

岐 三屬  
屬 川邑 慈川  
屬

石 氏 花園 星州  
屬 忠州 廣州 楊州 漢陽 楊州  
屬

坡平 豐州  
屬 水原 南陽 豐德 德陽 高陽  
屬

楊根 龜仁 德山 忠州  
屬 所仍林 忠州  
屬 甘勿 忠州  
屬

清州 洪州 清風 蘇山 毛坤 楊州  
屬 天安 堤

川 長豐 延豐  
屬 林堰 延豐  
屬 懷德 石城 結城

永春 全州 南原 長興 安山 順天  
屬 富利 錦山  
屬

大谷 錦山  
屬 珍島 高山 仁義 仁義  
屬 桃田 咸德  
屬

慶州 杞溪 慶州  
屬 仇史 慶州  
屬 尚州 晉州 星州

金海 密陽 寧海 順興 草溪 清道 永川

南溪 靈山 新榮 富寧  
屬 昌寧 京州 東州 新榮  
屬

襄陽 寧越 蔚珍 洪川 平康 黃州 海州

延安 平山 瑞興 長湍 永興 端川 定州

陽德 濟州

馮 氏 慶州 長湍 山東 巨濟  
屬

翁 氏 金浦

宮 氏 咸悅 慈山

弓 氏 土山 祥原  
屬

童 氏 大原 忠州  
屬 清州 全州 原州 原州 富寧

蒙 氏 奉化 兔山

空 氏 金浦

董 氏 開城 瓜州 水原 忠州 清州 全州 南原

安東 晉州 昌原 金海 寧海 河東 永川

榮川 南海 宜寧 清河 原州 黃州 登州

安迎 安迎  
屬 青海 北青  
屬 雪城 以下屬  
屬不改 穎川

貢 氏 水原 仁川 利川 金浦 幸州 蔚陽  
屬 全州 昌

原 仁同 昌寧 白川 昌城

國 氏 慶州

宗 氏 通津 毛押 楊州  
屬 泥渡 高陽  
屬 仁義 奉化  
屬 黃原 蔚陽  
屬

鍾 氏 河陰 江原  
屬 豐德 安邑 天安  
屬 靈藏 荳原 蔚陽  
屬 旌義

竜氏 洪川 廣州 仁川 楊根 竜仁 忠州 清州  
・ 洪州 鴻山 花仁 巨野<sup>金嶺</sup> 雲峰 海南 安  
東 宜寧 江陵 春川 寧越 谷山 鍾城 順天  
種氏 昆谿<sup>光州</sup>  
江氏 押海<sup>羅州</sup>  
龐氏 曄陽<sup>以下色</sup> 大元<sup>中國</sup>  
邦氏 廣州 坡州 槐山 水多<sup>羅州</sup> 務安 豐基 醴  
泉 海州 永興  
伊氏 大塚<sup>忠州</sup> 銀川<sup>白川</sup>  
時氏 長豊<sup>延列</sup>  
箕氏 幸州<sup>高陽</sup>  
和氏 利川  
追氏 開城  
慈氏 海州 中京  
史氏 居昌 坡平<sup>坡州</sup> 臨江<sup>長湍</sup> 清州 全州 長沙  
茂<sup>茂果</sup> 晉州 密陽 順興 義城 加祚<sup>居昌</sup> 新  
寧 丹溪<sup>丹城</sup> 平山 延安 平壤  
起氏 漢陽<sup>楊州</sup> 西原<sup>清州</sup> 沃川  
水氏 雲梯<sup>高果</sup> 金海

智氏 鳳州<sup>鳳山</sup> 槐州<sup>槐山</sup> 坡州 堤州<sup>堤川</sup> 密陽  
原州 安州 竜岡  
翼氏 童城<sup>通津</sup> 南原 密陽  
季氏 江華 新平<sup>洪州</sup>  
諸氏 漆原 玉果 尹音冬<sup>密陽</sup> 江陽<sup>陝川</sup> 南海 河  
陽 龜山<sup>漆原</sup> 寺法<sup>龍川</sup> 海州 江州<sup>邑屬</sup>  
於氏 江陵 麻田  
楚氏 清州 星州 江陵  
十氏 木川  
胡氏 牙山 羅州 岳陽<sup>晉州</sup> 平山 白川 兎山 朔  
封<sup>邑屬</sup>  
瞿氏 瓮津  
瞿氏 廣州 定州 慶州 尚州  
天氏 清州 漢陽<sup>楊州</sup> 幸州<sup>高陽</sup> 義城  
輪氏 忠州  
珠氏 慶州  
杜氏 杜山<sup>漢陽</sup> 豐德 珍山 海州  
任氏 復興<sup>白川</sup>  
南氏 公州

扈氏 白川 楊根 石茂<sup>交河</sup> 忠州 洪州 新平<sup>洪州</sup>  
丹陽 新昌 全州 朱溪<sup>朱溪</sup> 淳昌 咸悅 保  
安<sup>扶安</sup> 鼓村<sup>扶安</sup> 九星<sup>仁安</sup> 福興<sup>長水</sup> 慶州  
昌原 金海 河東 宜寧 靈山 海州 延安  
平山 國山 文化 永興 平壤 三和 价川  
津平<sup>以下至</sup> 河平  
午氏 密陽  
傅氏 楊根  
路氏 大原<sup>忠州</sup> 北青 大元<sup>中國</sup>  
固氏 永固 押海<sup>羅州</sup>  
素氏 廣州 豐德  
邁氏 星州  
附氏 童城<sup>通津</sup>  
祐氏 忠州 長興 靈巖 領南<sup>靈巖</sup> 昇城<sup>大丘</sup>  
米氏 松林<sup>長湍</sup> 橋城<sup>公州</sup> 載寧 方山<sup>楊口</sup>  
啓氏 咸陽  
桂氏 遂安 衿川 忠州 全州 羅州 海南 慶州  
江陵 原州 延安 楚山 幽州<sup>巨濟</sup>  
柴氏 綾鄉<sup>仁安</sup> 金化

槐氏 昌原  
泰氏 南原  
艾氏 漢陽<sup>禹州</sup> 長延<sup>延壽</sup> 全州 榮川 鐵原  
梅氏 忠州  
朱氏 豐川  
雷氏 喬桐  
苔氏 豐角<sup>慶原</sup>  
乃氏 延安  
海氏 靈巖  
米氏 礪山  
對氏 雪南<sup>中國</sup>  
甄氏 黃砬 南陽 青陽 全州 南原 慶州 善山  
賈氏 壽城<sup>大丘</sup> 陵昌<sup>靈巖</sup> 大丘 安州  
楊氏 潭陽 大丘  
苟氏 鴻山 林川 昌原  
單氏 豐德  
印氏 延安 喬樹<sup>喬桐</sup> 河陰<sup>江華</sup> 驪興<sup>驪州</sup> 南陽  
仁川 楊根 忠州 景明<sup>金州</sup> 羅州 昇平<sup>仁安</sup>  
臨原 慶州 檀安 昌寧 平海 海州 兎山



鷗浦<sup>安屬</sup> 慈山 份川  
晉氏 南原 楊根 天安 稷山 全州 南平 井邑  
晉州 昌原 巨濟 玄風 安峽 海州  
舜氏 林川  
俊氏 清州  
震氏 江華  
雲氏 清州 長興 咸興  
員氏 德水<sup>德屬</sup>  
芸氏 全州  
昕氏 醴泉  
溫氏 西原<sup>清州屬</sup> 溫陽 全州 伊城<sup>金州屬</sup> 羅州 平阜  
金堤<sup>金屬</sup> 金溝 巨野<sup>金屬</sup> 從政<sup>金屬</sup> 慶州 晉州  
門氏 仁川 松林<sup>長屬</sup> 藍浦 竹山<sup>海屬</sup> 仁白 感陰  
安屬<sup>安屬</sup>  
敬氏 西原<sup>清州屬</sup>  
義氏 比屋<sup>比屬</sup>  
吞氏 延安  
豚氏 木川  
萬氏 開城 江華 鎮江<sup>江屬</sup> 廣州 洪州 江陵

頤氏 木川  
端氏 華山  
千氏 南陽 羅州 慶州  
竿氏 永州<sup>鉄屬</sup> 海州  
桓氏 陰竹  
段氏 延安 豐德 清州 全州 高山 江陵 黃州  
江陰<sup>金屬</sup> 加音<sup>以下邑屬</sup> 花山  
炭氏 延安 仁川 晉州  
判氏 海州  
漢氏 忠州  
惲氏 延安  
班氏 開城 固城 平海  
簡氏 加平 南陽 瑞山 靈光 慶州 仁同 襄陽  
佳平<sup>邑屬</sup> 海州  
板氏 東萊  
錢氏 聞慶 知禮 岳溪<sup>義屬</sup>  
堅氏 川寧<sup>慶屬</sup> 沙梁<sup>水屬</sup> 金浦  
十氏 開城 江華 廣州 漢陽<sup>慶屬</sup> 水泉 仁川 岳  
平 竹山 貞州<sup>義屬</sup> 喬桐 南陽 安城 麻田

金浦 楊根 永平 陽川 果川 連川 陽城  
砥平 忠州 清州 公州 清風 天安 沃川  
沔川 溫陽 德山 定山 扶餘 恩津 全州  
羅州 清州 光州 綾州 南原 長興 順天  
礪山 金海 咸平 咸悅 高山 光陽 慶州  
杞溪<sup>慶州屬</sup> 安東 尚州 晉州 星州 昌原 大  
丘 密陽 善山 青松 順興 金海 清道 永  
川 居昌 真室 咸昌 義興 延日 江陵 原  
州 春川 三陟 寧越 旌善 杆城 橫城 黃  
州 海州 延安 平山 鳳山 白川 牛峰<sup>金川</sup>  
新溪 文化 殷栗 登州<sup>安東屬</sup> 端川 定平 文  
川 利城 平康 淳州<sup>朔方屬</sup> 定州 銀溪<sup>以下邑屬</sup>  
希昌 元山 延川

遼氏 全州 慶州 金海 原州  
連氏 全州 谷山  
桶氏 熙川  
專氏 陽川  
天氏 延安 牛峰<sup>金川</sup>  
光氏 晉城<sup>慶州屬</sup>

片氏 楊州 南陽 利川 通津 長湍 竹山 龜仁  
陽川 清州 洪州 報恩 全州 羅州 光州  
南原 靈光 萬頃 康津 慶州 安東 晉州  
星州 密陽 順興 草溪 江陵 原州 鐵原  
寧越 伊川 通川 海州 咸興 定州 价川  
鄭山 順川 順安 元山<sup>邑屬</sup>  
慈氏 定州<sup>平山屬</sup> 全州 平州<sup>平山屬</sup> 谷山 德源  
鮮氏 俠溪<sup>新溪屬</sup>  
姚氏 水原 忠州 西原<sup>清州屬</sup>  
要氏 大丘  
標氏 臨津<sup>長湍屬</sup>  
承氏 荒洞<sup>古阜屬</sup>  
召氏 大同<sup>邑屬</sup>  
邵氏 南陽 仁州<sup>仁川屬</sup> 公州 青山 全州 慶州 加  
良<sup>加池屬</sup> 晉州 密陽 瑞和<sup>密陽屬</sup> 平山 河南<sup>中</sup>  
西蜀 安東<sup>慶州屬</sup>  
肖氏 濟州  
包氏 豐德  
陶氏 豐康<sup>楊州屬</sup> 南陽 清州 翰谷<sup>原屬</sup> 順天

別民順天 竹青順天 慶州 岳陽 岳陽 岳陽  
順天  
毛氏 公山 公州 瑞山 金海  
好氏 大丘 海州  
何氏 乳石 永平 林述 舒川 道民 南平  
邢氏 幸州 高陽 堤川  
和氏 同福 宣城 平山 高陽  
賀氏 翁津  
佐氏 大靜  
麻氏 永平 烈山 杆城  
華氏 長楊 淮陽 陽泉  
花氏 天安 豐藏 安泉  
瓜氏 平康  
賈氏 泰安 太原 遼州 瑞山 龍津 銅柳 遼寧 禮安  
賈氏 永平 遼州 開城 石茂 文河  
夏氏 大丘 海州  
舍氏 富平 泰安 活川 巨家  
價氏 高山 馬壘 安泉  
化氏 伏龍 遼州 餘雅 遼寧

章氏 福城 王森 昌  
良氏 彩雲 遼寧 濟州  
陽氏 金海 金化 霜陰 遼寧  
倉氏 牙山 礪山 長城  
昌氏 公州 牙山 礪山 長城 江陵  
芳氏 開慶 鉄原 安峽 翼谷 遼寧  
強氏 忠州 槐山  
涼氏 鴻山  
庄氏 清風  
富氏 高陽  
場氏 本川  
桑氏 安迎  
象氏 本川  
長氏 燕岐  
浪氏 楊州 晉州  
相氏 密陽  
將氏 慶州  
仰氏 延日  
廣氏 龍潭

程氏 韓山 光州 永城 淳昌 柳等 高利 鍾山  
永豐 慶州 東萊 江陵 史否 根川  
宋山 河南 中興  
彭氏 意岡 新平 宋川 勿失 下筆站  
安岳 秦翎  
平氏 高平 仁川 忠州 禮山 嘉興 平泉  
庚氏 仁川 慶州 全州  
荆氏 班城 安心  
貞氏 楊州  
崇氏 永川  
卿氏 臨江  
京氏 金化  
景氏 泰仁 泰山 忠州 置等 綾御  
羅卿 福興 廣州 海州  
井氏 銀江 漣川 沔川 置等 音声  
井邑 沓谷 長水 白川  
耿氏 沙川 楊根 燕根 安岐  
永氏 平海 康翎  
敬氏 楊根 安城 砥平 陰城 巴川 天安

豐歲 長楊 莫谷  
璽氏 漢陽 檀山  
刑氏 樂安  
甯氏 富潤 延日  
昇氏 甲卿 宏陽  
曾氏 鎮江  
弘氏 全州  
僧氏 清州 廣州 肅陽 咸安 豐山  
登氏 固城  
秋氏 秋溪 開城 江華 坡平 衿川 起原  
西原 丹陽 泰安 鴻山 稷山 海  
美 禮安 永春 牙山 全州 羅州 綾州 順  
天 古阜 樂安 臨陂 康津 興陽 海南 慶  
州 安東 尚州 晉州 大丘 金海 忠陽 河  
東 開寧 高靈 夏山 京州 平昌 平康  
橫城 海州 莒川 遂安 吉州 登州 鐵  
山 順川  
牛氏 木川



壽氏 文登<sup>陽米</sup>  
祐氏 戴陽<sup>陽東</sup> 長豐<sup>延新</sup>  
守氏 開城 黃州 慶州  
陰氏 竹山 廣州 驪州 忠州 槐山 陰城 長延<sup>延新</sup>  
光州 高山 藝州 密陽 蔚山 豐基 平山  
谷山 貧津 白川 吉州 定州 雪城<sup>色末</sup>  
森氏 嘉壽<sup>三嘉</sup>  
羣氏 開寧  
占氏 槐山  
凡氏 安州  
范氏 羅州 光州 安州  
郁氏 海州  
獨氏 丹城  
谷氏 瑞和<sup>麟瑞</sup>  
燭氏 金海  
曲氏 竜宮  
綠氏 慶山  
濯氏 井邑  
乙氏 義州

夷氏 泰安  
畢氏 驪州 拜音<sup>清州</sup> 椒子<sup>清州</sup> 大興  
商氏 全州 大興  
律氏 槐山  
物氏 槐山  
日氏 旌善  
骨氏 江華  
碣氏 丰平<sup>咸平</sup>  
葛氏 西原<sup>清州</sup> 楊州 楊根 陽城 忠州 清風 青  
山 清安 陸昌<sup>靈光</sup> 海南 黃永<sup>海東</sup> 比安  
慶州 花國<sup>星州</sup> 鵝洲<sup>巨濟</sup> 加祚<sup>昌原</sup> 平壤  
分國<sup>以下</sup> 河源 大元 中國  
決氏 南陽  
別氏 平昌  
紹氏 谷山 永興  
霍氏 清州  
栢氏 豐川  
宅氏 槐山  
澤氏 孝令<sup>嘉興</sup>

冊氏 豆毛 全州 金州  
昔氏 月城 慶州 忠州 龍仁 忠州  
益氏 杞溪 慶州 蔚州  
席氏 江華 通津  
輝氏 水原 光山 蔚州 南原 益山 靈光 慶州 晉州 金海  
翌氏 林川  
力氏 河陰 江華 蔚州  
則氏 幸州 蔚州  
國氏 潭陽 玄風 英陽 金城 靈川 大明 中國  
翌氏 陰竹  
直氏 槐山  
墨氏 遼東 中國  
合氏 喬桐  
弥氏 鎮川  
卯氏 文川  
南宮氏 咸悅 富洞 蔚州 南平 龜安 宜寧 慈山  
皇甫氏 永川 黃州 巾子山 蔚州 啓津 南原 光陽  
烈山 蔚州 蔡岷 蔚州 究山

司空氏 孝靈 蔚州 蔚州 居平 蔚州 蔚州  
鮮于氏 太原 蔚州  
石林氏 廣陵 蔚州 蔚州  
扶餘氏 百濟  
獨孤氏 廣陵 蔚州 蔚州 羅州 南原 黃州 義州  
西門氏 安陰 蔚州 蔚州 東州 蔚州  
東方氏 清州 晉州  
公孫氏 永同 楓巖 蔚州 蔚州 仰巖 蔚州 蔚州  
盧羅氏 南原  
令狐氏 文化  
司馬氏 居平 蔚州 蔚州 伊川  
本貫未詳 尚ほ以上の外 本貫の詳ならざるものに次の諸姓がある。  
鄭氏・聰氏・忠氏・功氏・恭氏・濃氏・松氏・龔氏・雙氏・瀾氏・茲氏・離氏・弛氏・曠氏・墮氏・思氏・蓮氏・竿氏・位氏・歸氏・祈氏・尉氏・書氏・巨氏・鉅氏・吾氏・羽氏・斧氏・郇氏・顧氏・圭氏・倪氏・漢氏・禮氏・第氏・台氏・才氏・哀氏・在氏・解氏・犬氏・介氏・戴氏・又氏・真氏・新氏・仁氏・珍氏

信氏・閔氏・順氏・隱氏・訓氏・原氏・葛氏・官氏・  
寬氏・漫氏・山氏・閔氏・晏氏・泉氏・乾氏・善氏・  
景氏・彦氏・見氏・栗氏・堯氏・佼氏・孝氏・刀氏・  
鄒氏・阿氏・沙氏・巴氏・牙氏・香氏・長氏・光氏・  
常氏・楊氏・英氏・廷氏・令氏・能氏・聚氏・興氏・  
競氏・侯氏・有氏・黔氏・蜚氏・閔氏・汎氏・叔氏・  
木氏・大氏・岳氏・一氏・足氏・寒氏・寒氏・列氏・  
絡氏・素氏・昔氏・赫氏・克氏・德氏・北氏・蓋氏・  
雅氏・嘉氏・易氏・碩氏・乜氏・韋氏・喬氏・邁氏・  
闕氏・狄氏・一氏・夏侯氏・赫連氏・仲室氏・少室・  
大室氏・負鼎氏・明臨氏・再曾氏・古爾氏・乙支氏・  
似先氏・本易氏・祖彌氏・黑齒氏・耶律氏・齊楚氏・  
羽莫氏・

宋氏の追加、有実<sup>見馬</sup>慶山、義城、開慶、加乙山<sup>慈</sup>、丹城、  
丹溪<sup>嘉</sup>、河陽、漆原、龍邑、咸昌、高靈、玄風、壘  
山、昌寧、熊川

田氏の追加、光陽、龍安、興陽、慶州、安東、尙州、  
晉州、金海、岳陽、豐角<sup>嘉</sup>、善山、海平<sup>嘉</sup>、八  
吾<sup>嘉</sup>、咸陽、黃金

陳氏、三陟、驪陽<sup>嘉</sup>、臨陂、興德、德昌<sup>嘉</sup>、福  
川<sup>嘉</sup>、楊州、南海、羅州、開城、廣州、驪  
興<sup>嘉</sup>、水原、漢陽<sup>嘉</sup>、南陽、畜平、豐德、  
竹山、楊根、朔寧、陽川、陽城、忠州、清川、  
公山<sup>嘉</sup>、德津<sup>嘉</sup>、大興、保寧、青陽、扶、  
餘、鎮川、藍浦、結城、永春、牙山、全州、  
光州、清州、南原、楡谷<sup>嘉</sup>、潭陽、礪山、  
昇平<sup>嘉</sup>、益山、水金<sup>嘉</sup>、珍山、甲鄉<sup>嘉</sup>、  
南平、南淵<sup>嘉</sup>、任突、永禮、高敞、興陽、  
慶川、尙州、陽至<sup>嘉</sup>、晉州、星川、大丘、  
金海、岳陽、善山、巨濟、仁同、順興、草溪、  
永川、江陽<sup>嘉</sup>、興海、豐基、固城、昌寧、  
開寧、宜寧、新繁<sup>嘉</sup>、桂城<sup>嘉</sup>、河陽、龍  
邑、考陽、玄風、鎮海、咸昌、丹城、禮安、  
延日、英陽、江陵、連谷<sup>嘉</sup>、淮陽、襄陽、  
洞山<sup>嘉</sup>、平昌、旌善、高城、軒珍、安峽、  
金花、橫城、海州、谷山、延安、平山、豐川、  
楊山<sup>嘉</sup>、文化、松木、永興、永寧<sup>嘉</sup>、平  
壤、寧辺、走川、雪城<sup>嘉</sup>、成川、箕川、

汝陽 龍山 珍海 梁山

張氏 濟州

むすび

以上をもつて当初にかかげた、4箇の要点をめぐって、  
乏しい資料をもとに、私のみたこと、聞いたことを、折  
りはさみながらだいたい述べ終った。

日韓併合以来、日本への帰化者が遠からず百万余にも  
達しようとしている今日、朝鮮本国においては、旧来の  
家族制度と深い関係をもつ「姓と本貫」は、日本の外国  
人登録ではその明確な姿を見せ得なく、既に在日朝鮮人  
は二世を経て、三世を生む時代には入つているので、そ  
の人たちの間には、日本化した習性が多く、朝鮮本来の  
家族制度で律し得ない事例が、きわめて多くなるであろ  
うことが予想されるところである。そしてかかるゆえに  
こそ、今後、在留朝鮮人の適正な管理の在り方のために  
も、関係者のいそりの研究精進がのぞまれるところであ  
らうと思う。

本書の執筆にあたって直接・間接に恩恵を蒙つた著書  
・論文の類は、相当数にのぼつたが、その中でも森田芳  
夫氏の著書ならびに、鴻山俊雄氏著書「中国・朝鮮の姓  
名」のなかからは、特に多くを引用させていただき、恩

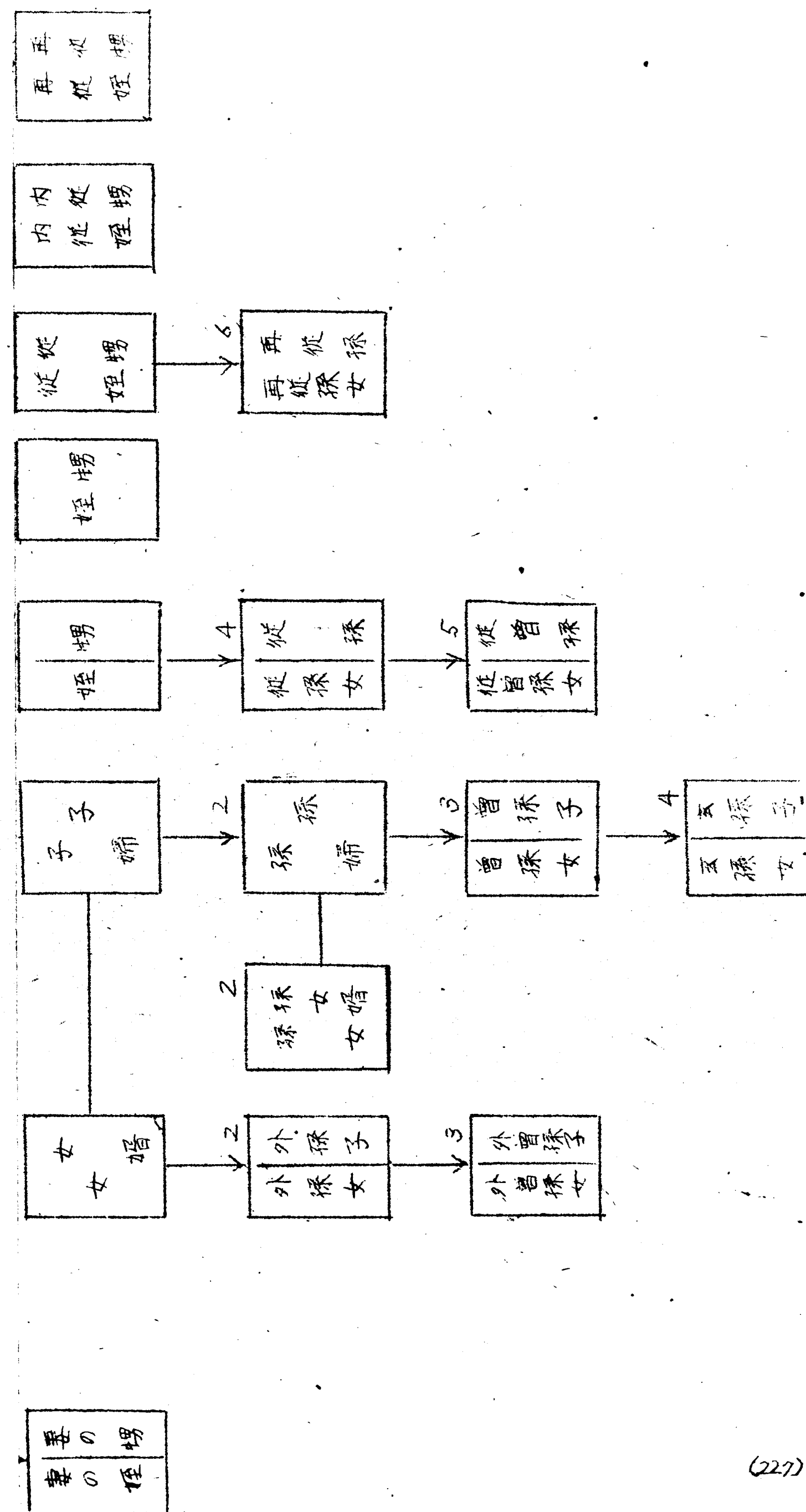


師 天理大学教授 齊藤辰雄先生には 執筆上について、  
懇切な御指導を賜わったので、ここに紙上をかりて心か  
らお礼を申しあげる次第である。

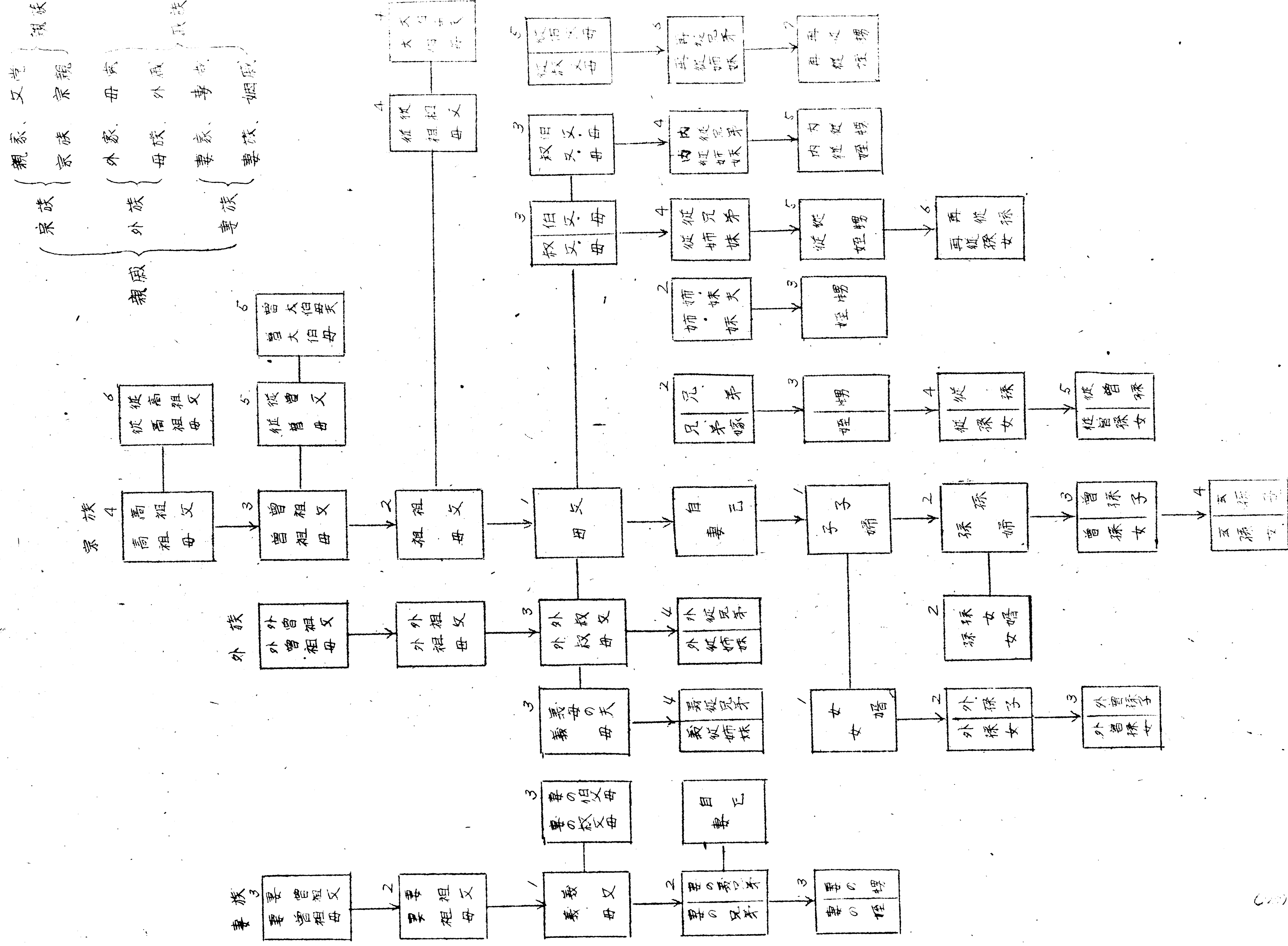
なお、本書執筆上、参考引用した書籍名は、文中で明  
らかにしたもの外、主なものは次のもの等であつた。

- 三国遺事（平岩佑介抄訳）
- 朝鮮語学史・国語及朝鮮語のため（小倉進平著）
- 朝鮮史概説（三品彰英著）
- 法令全書「昭和 14 年 3 卷」（法務省官房司法法規  
調査部保管）
- 文字の歴史（A・C・ムニアハウス著）
- 漢字の運命（倉石武四郎 著）
- 韓の言語学（大久保忠利 著）
- 歴史民俗朝鮮漫談（今村 頼著）

系 親 戚 譜 表 附 表



# 親戚系譜表



日本 韓 音  
ローマ字 朝鮮 語 音 一覽表

フ	KO 賈ニ KA	KAN 簡かん KAN	KATU 葛かつ KAL	KAN 甘 KAN	KOU 江こう KANG	KYOU 姜姜 KANG
	KYOU 強きやう KANG	KOU 康こう KANG	GTU 剛こう KANG	KYOU 疆きやう KANG	KAI 介かい KE	KEN 堅けん KION
	KEN 甄けん KION	KEI 景けい KYOU	KEI 慶けい KION	KEI 桂けい KYE	KOU 高こう KO	KOU 孔こう KONG
	KOU 公こう KONG	KAKU 郭かく KWAK	KYUU 丘きやう KU	GU 具ぐ KU	KORU 国こく KUK	KIKU 鞠きく KUK
	KUN 君くん KUN	KYUU 弓きやう KUNG	KYUU 宮きやう KUNG	HOU 禽きん KUOK	KEN 權けん KWON	KOKU 郤きく KUK
	KIN 斤しん KUN	KIN 琴しん KUM	KI 奇き KI	KI 起き KI	KI 箕き KI	KITI 吉きく KIL
	KIN 金きん KIM					
ㄌ	NAN 南なん NAN	NAI 乃なん NE	NA 奈な NE	NA 南なん NE	NANGUU 南宮なんきやう NAMKUNG	
ㄷ	TAN 單たん TAN	TAN 端たん TAN	TOU 唐たう TANG	DAI 大だい TE	TOU 陶たう TO	TO 都と TO

	DO 道 <sup>どう</sup> TO	TON 頓 <sup>とん</sup> TON	TOU 薰 <sup>こう</sup> TONG	TOU MOU 秉 <sup>よう</sup> 方 <sup>ほう</sup> TONG BANG	DAN 段 <sup>だん</sup> TAN	TO 杜 <sup>と</sup> TU
	TOKKO 獨 <sup>どく</sup> 二 <sup>に</sup> TOKKO					
己	RA 羅 <sup>ら</sup> RA (NA)	ROU 浪 <sup>ろう</sup> RANG (NANG)	RO 路 <sup>ろ</sup> RO (NO)	RO 魯 <sup>ろ</sup> RO (NO)	RO 盧 <sup>ろ</sup> RO (NO)	RAI 雷 <sup>らい</sup> RAE (NAE)
	RYOU 良 <sup>りょう</sup> RYANG (YANG)	RYOU 梁 <sup>りょう</sup> RYANG (YANG)	RO 呂 <sup>ろ</sup> RYO (YO)	REN 連 <sup>れん</sup> RYON (YON)	REN 廉 <sup>れん</sup> RYON (YON)	REN 濂 <sup>れん</sup> RYON (YON)
	RYUU 龍 <sup>りゅう</sup> RYONG (YONG)	RYUU 柳 <sup>りゅう</sup> RYU (YU)	RYUU 劉 <sup>りゅう</sup> RYU (YU)	RIKU 陸 <sup>りく</sup> RYUK (YUK)	RI 李 <sup>り</sup> LI (IL)	RIN 林 <sup>りん</sup> RIM (IM)
口	MA 馬 <sup>ま</sup> MA	MA 麻 <sup>ま</sup> MA	MAN 萬 <sup>まん</sup> MAN	BAI 梅 <sup>ばい</sup> ME	MOU 孟 <sup>もう</sup> MENG	MEI 明 <sup>めい</sup> MYONG
	MOU 毛 <sup>もう</sup> MO	MU 牟 <sup>む</sup> MO	BOKU 睦 <sup>ぼく</sup> MOK	BUN 文 <sup>ぶん</sup> MUN	MI 未 <sup>み</sup> MI	BEI 米 <sup>まい</sup> MI
	BIN 閔 <sup>びん</sup> MIN	BOKU 墨 <sup>ぼく</sup> MUK				
日	BOKU 朴 <sup>ぼく</sup> PAK	HAN 班 <sup>はん</sup> PAN	BAN 潘 <sup>ぱん</sup> PAN	HOU 方 <sup>ほう</sup> PANG	HOU 邦 <sup>ほう</sup> PANG	HOU 旁 <sup>ほう</sup> PANG

	HOU 旁 <sup>ほう</sup> PANG	HAI 裴 <sup>はい</sup> PE	HAKU 白 <sup>はく</sup> PEK	HAN 凡 <sup>はん</sup> POM	HAN 𠂔 <sup>はん</sup> POM	BEN 𠂔 <sup>べん</sup> PYON
	HEN 邊 <sup>へん</sup> PYON	HOU 寶 <sup>ほう</sup> PO	BOKU 卜 <sup>ぼく</sup> POK	HUKU 福 <sup>ふく</sup> POK	HOU 奉 <sup>ほう</sup> PONG	HOU 鳳 <sup>ほう</sup> PONG
	HU 夫 <sup>ふ</sup> PU	HI 丕 <sup>ひ</sup> PI	HIN 彬 <sup>ひん</sup> PIN	HIN 賓 <sup>ひん</sup> PIN	HIN 濱 <sup>ひん</sup> PIN	HIN 冰 <sup>ひん</sup> PING
	RYUU 龐 <sup>りゅう</sup> PANG	HYOU 氷 <sup>ひょう</sup> PING				YI 葉 <sup>えい</sup> CP
人	SI 史 <sup>し</sup> SA	SYA 舍 <sup>しゃ</sup> SA	SYA 謝 <sup>しゃ</sup> SA	SIKUU 司 <sup>し</sup> 空 <sup>くう</sup> SAGONG	SYOU 尚 <sup>しょう</sup> SANG	SEI 西 <sup>せい</sup> SO
	ZYO 徐 <sup>じょ</sup> SO	SEI MON 西 <sup>せい</sup> 門 <sup>もん</sup> SO MUN	SEKI 石 <sup>せき</sup> SOK	SEKI 昔 <sup>せき</sup> SOK	SEN 先 <sup>せん</sup> SON	SEN 宣 <sup>せん</sup> SON
	SEN U 鮮 <sup>せん</sup> 于 <sup>う</sup> SONU	SETU 楔 <sup>せつ</sup> SOL	SETU 薛 <sup>せつ</sup> SOL	SEI 成 <sup>せい</sup> SONG	SEI 星 <sup>せい</sup> SONG	SYOU 邵 <sup>しょう</sup> SO
	SO 蘇 <sup>そ</sup> SO	SON 孫 <sup>そん</sup> SON	SOU 宋 <sup>そう</sup> SONG	SUI 水 <sup>すい</sup> SU	ZYUN 淳 <sup>じゆん</sup> SUN	SYUN 舜 <sup>じゆん</sup> SUN
	SYUN 荀 <sup>じゆん</sup> SUN	ZYUN 順 <sup>じゆん</sup> SUN	SYOU 承 <sup>しょう</sup> SUNG	SYOU 昇 <sup>しょう</sup> SUNG	SOU 僧 <sup>そう</sup> SUNG	SI 姁 <sup>し</sup> SI



	SI 施し SI	SI 柴し SI	SIN 申し SIN	SIN 辛し SIN	SIN 慎し SIN	TIN 沈し SIN
○	A 阿あ A	AN 安ん AN	GAI 𠂔がい E	YA 夜や YA	YOU 楊よう YANG	ZYOU 襄し YANG
	GYO 奥 O	GEN 嚴 OM	ZYO 汝 YO	YO 余よ YO	EN 延えん YON	EN 𠂔えん YON
	EN 燕えん YON	EN 閤えん YOM	EI 永 YONG	ZEI 芮 YE	GO 吳ご O	GYOKU 王 OK
	ON 溫 ON	YOU 邕 ONG	YOU 雍 ONG	OU 王 WANG	YOU 要 YO	YOU 姚 YO
	U 于 U	U 禹 U	UN 𠂔うん UN	UN 雲 UN	GEN 元 WON	EN 袁えん WON
	I 韋い WI	GI 魏 WI	YU 俞 YU	YU 庾 YU	IN 尹 YUN	ON 恩 UN
	IN 殷 UN	IN 陰 UM	OU 應 UNG	I 伊 I	I 異 I	IN 印 IN
	NIN 任 IM	UN 雲 UN	YOU 雍 ONG			

ス	ZI 𠂔し CHA	SOU 𠂔し CHANG	TYOU 張 CHANG	SYOU 章 CHANG	SYOU 𠂔し CHANG	DEN 田 CHON
	ZEN 全 CHON	SEN 錢 CHON	SEN 𠂔 CHOMI	TYOU 丁 CHOMI	TEI 程 CHONG	TEI 鄭 CHONG
	SYO 諸 CHE	SYOKATU 諸葛 CHE GAR	SOU 曹 CHO	TYOU 趙 CHO	SOU 宗 CHONG	SYOU 鍾 CHONG
	SA 左 CHOA	SYU 宋 CHU	TYUU 宙 CHU	SYUU 周 CHU	TIKU 竹 CHUK	SYUN 俊 CHUN
	TYUU 中 CHUNG	TI 池 CHI	SIN 晉 CHIN	SIN 秦 CHIN	TIN 陳 CHIN	SIN 眞 CHIN
	TI 智 CHI					
ス	SYA 車 CHA	SYOU 昌 CHANG	SOU 倉 CHANG	SOU 創 CHANG	SAI 采 CHEI	SAI 菜 CHEI
	SAI 蔡 CHEI	SEN 千 CHON	TEN 天 CHON	SEN 踐 CHON	SYOU 尙 CHO	SO 楚 CHO
	SAI 崔 CHOE	SYOU 秋 CHU	SOU 鄒 CHU	SEN 𠂔 CHON		

ㄷ	TAKU 卓 <sup>たく</sup> TAK	TAKU 託 <sup>たく</sup> TAK	TAN 彈 <sup>たん</sup> TAN	TAI 太 <sup>たい</sup> TE		
ㄴ	HAN 判 <sup>はん</sup> PAN	HEN 片 <sup>へん</sup> PYON	HEN 扁 <sup>へん</sup> PYON	HEI 平 <sup>へい</sup> PYONG	HOU 包 <sup>ほう</sup> PO	HOU 匏 <sup>ほう</sup> PO
	HYOU 表 <sup>ひょう</sup> PYO	HYOU 馮 <sup>ひょう</sup> PUNG	HI 皮 <sup>ひ</sup> PI	HITU 弼 <sup>ひつ</sup> PIL	HOU 彭 <sup>ほう</sup> PENG	
ㅇ	KA 河 <sup>か</sup> HA	KA 夏 <sup>か</sup> HA	KAN 漢 <sup>かん</sup> HAN	KAN 韓 <sup>かん</sup> HAN	KAN 咸 <sup>かん</sup> HAN	KAI 海 <sup>かい</sup> HE
	KYO 許 <sup>きょ</sup> HO	GEN 玄 <sup>げん</sup> HYON	KEI 邢 <sup>けい</sup> HYONG	KO 戸 <sup>こ</sup> HO	KO 胡 <sup>こ</sup> HO	KO 盧 <sup>こ</sup> HO
	KOU 洪 <sup>こう</sup> HONG	KA 化 <sup>か</sup> HOA	KOU 黃 <sup>こう</sup> HOANG	GOU 后 <sup>こう</sup> HU	KOU HO 皇甫 <sup>こうほう</sup> HOAN BO	

- [注] 1. 本表では本書中で掲げた 267 姓字を掲記した。  
2. 姓字の上部はローマ字式本音、下部は朝鮮語音である。  
3. ロ一字知本語音は訓令式により、朝鮮語音 OH は E に、OH は YE、H、H は P に、L、L は T に統一表記した。  
4. ローマ字式朝鮮語音中( )内にあるのは、発音に基いた朝鮮語音である。

(233)

附表 3. 日・朝鮮年次対照表

年令	干支	日本	西紀	朝鮮			要領	要
				用	位	紀		
115	戊辰	嘉永元	1848	457	14	4181	李朝 24 代	憲宗
114	己巳	"	1849	458	15	4182		
113	庚午	"	1850	459	元	4183	26 代 哲宗即位	
112	辛未	"	1851	460	2	4184	肉妃生る	
111	壬申	"	1852	461	3	4185	高宗生る	
110	癸酉	"	1853	462	4	4186		
109	甲戌	安政元	1854	463	5	4187		
108	乙卯	"	1855	464	6	4188		
107	丙辰	"	1856	465	7	4189		
106	丁巳	"	1857	466	8	4190		

(234)

年令	干支	日 本	西 紀	朝			群	摘 要
				南 國	在 位	耳 号	禮 總	
105	戊午	嘉永 5	1858	467	9		4191	
104	己未	" 6	1859	468	10		4192	
103	庚申	嘉延元	1860	469	11		4193	
102	辛酉	文久元	1861	470	12		4194	
101	壬戌	" 2	1862	471	13		4195	
100	癸亥	" 3	1863	472	14		4196	
99	甲子	元治元	1864	473	元		4197	26代 高家即位
98	乙丑	慶応元	1865	474	2		4198	
97	丙寅	" 2	1866	475	3		4199	
96	丁卯	" 3	1867	476	4		4200	
95	戊辰	明治元	1868	477	5		4201	

94	己巳	" 2	1869	478	6		4202	
93	庚午	" 3	1870	479	7		4203	
92	辛未	" 4	1871	480	8		4204	
91	壬申	" 5	1872	481	9		4205	
90	癸酉	" 6	1873	482	10		4206	
89	甲戌	" 7	1874	483	11		4207	
88	乙亥	" 8	1875	484	12		4208	
87	丙子	" 9	1876	485	13		4209	
86	丁丑	" 10	1877	486	14		4210	
85	戊寅	" 11	1878	487	15		4211	
84	己卯	" 12	1879	488	16		4212	
83	庚辰	" 13	1880	489	17		4213	

年令	干支	日本	西紀	朝			要
				周圖	任位	年令	
82	辛巳	明治 14	1881	490	18		
81	壬午	" 15	1882	491	19		
80	癸未	" 16	1883	492	20		
79	甲申	" 17	1884	493	21		
78	乙酉	" 18	1885	494	22		
77	丙戌	" 19	1886	495	23		
76	丁亥	" 20	1887	496	24		
75	戊子	" 21	1888	497	25		3月14日カールマルクス死す
74	己丑	" 22	1889	498	26		
73	庚寅	" 23	1890	499	27		
72	辛卯	" 24	1892	500	28		

71	壬辰	" 25	1892	501	29		4125
70	癸巳	" 26	1893	502	30		4126
69	甲午	" 27	1894	503	31		4127
68	乙未	" 28	1895	504	32		4128
67	丙申	" 29	1896	505	33	建陽 元	4129
66	丁酉	" 30	1897	506	34	光武 元	4130
65	戊戌	" 31	1898	507	35	2	4131
64	己亥	" 32	1899	508	36	3	4132
63	庚子	" 33	1900	509	37	4	4133
62	辛丑	" 34	1901	510		5	4134
61	壬寅	" 35	1902	511		6	4135
60	癸卯	" 36	1903	512		7	4136



年令	干支	日	本	西紀	朝			年令	年令	要
					開國	性位	性位			
59	甲辰	明治37		1904	513			8	4137	
58	乙巳	" 38		1905	514			9	4138	
57	丙午	" 39		1906	515			10	4139	
56	丁未	" 40		1907	516			隆熙元	4140	27代 純家 即位
55	戊申	" 41		1908	517			2	4141	6月21日 天弘家の赤旗事件発生
54	己酉	" 42		1909	518			3	4142	10月26日 伊藤博文暗殺さる
53	庚戌	" 43		1910	519			4	4143	8月29日 日露戦争
52	辛亥	" 44		1911					4144	
51	壬子	" 45元		1912					4145	
50	癸丑	" 2		1913					4146	
49	甲寅	" 3		1914					4147	

(239)

48	乙卯	" 4		1915					4148	
47	丙辰	" 5		1916					4149	
46	丁巳	" 6		1917					4150	
45	戊午	" 7		1918					4151	
44	己未	" 8		1919					4152	1月22日 李王薨去 3月1日 万歳事件発生 5月4日 日本21か条要求提出 発生
43	庚申	" 9		1920					4153	
42	辛酉	" 10		1921					4154	
41	壬戌	" 11		1922					4155	7月6日 ソ連憲法制定記念日
40	癸亥	" 12		1923					4156	
39	甲子	" 13		1924					4157	
38	乙丑	" 14		1925					4158	
37	丙寅	" 15元 昭和		1926					4159	6月10日 李王國崩去 終

(240)

年令	干支	日 本	西 紀	朝鮮			摘 要
				南 國	任 位	年 令	
36	丁卯	昭和2	1927				11月5日光州学生事件發生
35	戊辰	" 3	1928				
34	己巳	" 4	1929				
33	庚午	" 5	1930				
32	辛未	" 6	1931				
31	壬申	" 7	1932				{ 3月旧満州独立を宣言する 5.15事件発生 10月29日ハングル発布記念日
30	癸酉	" 8	1933				
29	甲戌	" 9	1934				
28	乙亥	" 10	1935				
27	丙子	" 11	1936				
26	丁丑	" 12	1937				

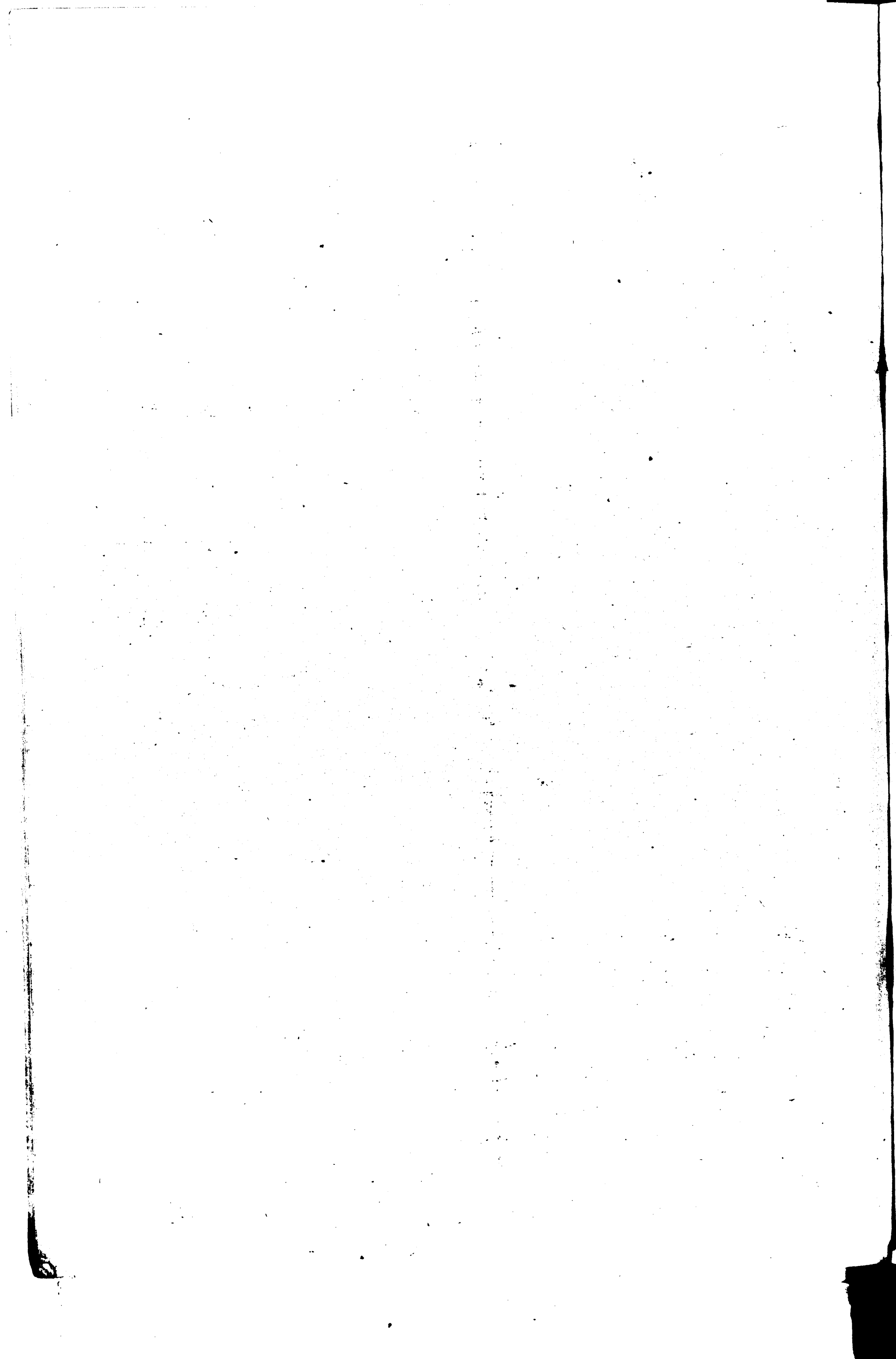
(241)

25	戊寅	" 13	1938						
24	己卯	" 14	1939						
23	庚辰	" 15	1940						
22	辛巳	" 16	1941						
21	壬午	" 17	1942						
20	癸未	" 18	1943						
19	甲申	" 19	1944						
18	乙酉	" 20	1945						
17	丙戌	" 21	1946						
16	丁亥	" 22	1947						
15	戊子	" 22	1948						
14	己丑	" 23	1949						

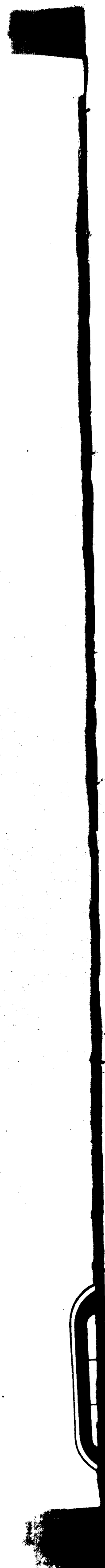
(242)

年令	干支	日 本	西 紀	朝鮮			特 要
				開 國	任 位	權 紀	
13	庚寅	昭和25	1950		6月25日朝鮮動亂勃発 8月29日韓停戦 11月韓学同結成 11月韓戦交会結成	4183	6月10日朝協会結成
12	辛卯	" 26	1951			4184	
11	壬辰	" 27	1952			4185	
10	癸巳	" 28	1953		11月10日朝通信結成	4186	{ 3月5日 スターリン死亡 7月27日 朝鮮休戦協定成立
9	甲午	" 29	1954			4187	
8	乙未	" 30	1955			4188	{ 5月25日 韓連結成 8月2日 朝青同結成 7月2日 朝敵会結成
7	丙午	" 31	1956			4189	4月1日 朝大設立
6	丁未	" 32	1957			4190	
5	戊申	" 33	1958			4191	11月17日 韓協会結成
4	己酉	" 34	1959		{ 6月4日 文芸同結成 4月25日 体育同結成 12月14日 北南一帯出版	4192	6月28日 韓協結成
3	庚戌	" 35	1960			4193	

2	辛亥	" 36	1961				4194	
1	壬午	" 37	1962				4195	
0	癸丑	" 38	1963				4196	
	甲寅							
	乙卯							
	丙辰							
	丁巳							
	戊午							







288-9 (288-9)

完

239

朝鮮諸團體御親閱要領

主 催 朝鮮總督府  
全 鮮 在 鄉 軍 人 會  
日 本 赤 十 字 社 朝 鮮 本 部

於昭和四年  
龍山練兵場

日韓友邦  
288  
9  
協 会

288-9



# 附 錄

附錄第一	御親閱次第細目……………	二一
附錄第二	分列ニ關スル規定……………	二九
附錄第三	參加諸團體ニ對スル細部ノ注意……………	三五
附錄第四	中等學校、青訓生徒ノ幕營ニ關スル規定……………	三九
附錄第五	委員及招待者ノ標識……………	
附錄第六	御親閱掛委員編成表……………	
附錄第七	其一 式場設備及視閱式集合態勢要圖……………	
	其二 分列後集合態勢及解散計畫……………	
附錄第八	集合計畫要圖……………	
	御親閱ヲ受クル在郷軍人集團編成表……………	
附錄第九	其一 青訓集團編成表……………	
	其二 學校集團編成表……………	
	其三 少年赤十字團編成表……………	
	其四 消防員集團編成表……………	
附錄第十	其五 式場警備計畫要圖……………	

## 御 親 閱 要 領

### 第一 日 時 場 所

一 昭和四年十月四日午前九時三十分龍山練兵場ニ於テ 閑院宮殿下御親閱アラセラル  
 (晴雨ニ拘ラス實施)

### 第二 御 親 閱 次 第

一 御親閱ノ次第左ノ如シ

- 一 御 臨 場
- 二 敬 禮 「君カ代」奏樂
- 三 拜 謁
- 四 國 歌 合 唱 (奏 樂)
- 五 御 親 閱
- 視 閱 式

分列式

- 六 令 旨 委員長拜受  
七 奉 答 委員長  
八 萬 歲 三 唱 委員長發聲  
九 敬 禮  
十 御 退 場 「君カ代」奏樂  
十一 挨 拶 委員長  
十二 來 賓 退 場  
十三 解 散

第三 主 催

一 總督府、全鮮在郷軍人會、日本赤十字社朝鮮本部聯合主催トス

第四 參加團體

一 御親閱ヲ受クル團體左ノ如シ

- 1 中等學校以上ノ學校(男子)
  - 2 青年訓練所
  - 3 在郷軍人
  - 4 少年赤十字團
  - 5 消防員
- 二 參加資格

- 1 中等學校以上ノ學校(男子)  
現役將校ヲ配屬セラレアル學校ノ職員生徒
- 2 青年訓練所  
公立訓練所、總督府ノ認定アル私設訓練所並特ニ參加ヲ許可セラレタル訓練所ノ職員生徒
- 3 在郷軍人 (在郷軍人第二回全鮮大會要領參照)  
1 代表參列者



イ 分會ハ分會旗ヲ捧持スル三名以内

ロ 聯合分會、支部、聯合支部ノ役員中ノ代表者

2 希望參列者（御親閱ノミニ參加ヲ希望スル者）

4 少年赤十字團

日本少年赤十字團朝鮮本部所屬ノ職員及團員

5 消防員

全鮮消防員ノ代表者

三 參加セシムヘキ全鮮消防組ノ代表者ノ範圍

前項ノ資格アル者ノ中京畿道内ノモノニシテ參加ノ爲メ宿泊ヲ要セサルモノハ

全員トシ其他ノモノハ代表者トス

右代表者ノ標準ヲ左ノ如ク定ム

1 學校生徒

一校

一〇〇名以内

2 青訓生徒

一所

半數以内

但特ニ參加希望者ハ式場ノ許ス限リ許可スルコトアルヘシ

雜意

1 學校生徒ノ代表者ニ關シテハ成ルヘク上級學年ノ者ヨリ參加セシムルコトトシ

同一學年ノ者ニ參加スルモノトセサルモノトナキ様注意スルコト

2 青年訓練所生徒ノ代表者ニ關シテハ日常ノ業務ニ甚シキ支障ナキ者ヨリ參加セ

シムルコト

四 參加人員

約一萬七千人

五 編成

1 左ノ集團ニ分ツ

學校集團

青訓集團

在郷軍人集團

少年赤十字團

消防員集團

- 2 各集團ノ編成ハ附錄第九其一其二其三其四其五ノ如シ
- 3 分列式ニハ海軍軍樂隊ハ列外トナリ陸軍喇叭隊ノミ參加ス
- 4 少年赤十字集團及消防員集團ハ分列ニ加ハラサルモノトス
- 5 各團體ハ校旗、所旗、分會旗、團旗、組旗ヲ捧持スヘシ
- 6 分列隊形ハ附錄第二ノ如シ

第五 委員

一 御親閱ノ業務ヲ行フ爲ニ左ノ委員ヲ設ク

委員編成表

委員長

政務總監伯爵兒玉秀雄

副委員長

總督府內務局長生田清三郎

顧問

同	學務局長	松浦鎮次郎
同	警務局長	淺利三朗
同	總務課長	中村寅之助
京畿道知事	渡邊忍	
朝鮮憲兵隊司令官	日下部道德	
朝鮮軍參謀長	中村孝太郎	
在郷軍人會龍山聯合支部長	吉富庄祐	
日本赤十字社朝鮮本部副總長	志賀潔	

在郷軍人會全鮮大會名譽會長	南次郎
軍司令官	
第十九師團司令部	師團長 川島義之
第二十師團司令部	師團長 上原平太郎

忠清北道	京城府	咸鏡北道	咸鏡南道	江原道	平安北道	平安南道	黃海道	慶尙南道	慶尙北道	全羅南道	全羅北道	忠清南道
知事	府尹	知事	知事	知事	知事	知事	知事	知事	知事	知事	知事	知事
韓主	松井房治郎	安達房治郎	馬野精一	俞星濬	谷多喜磨	園田寬	朴相駿	須藤素	今村正美	金瑞圭	林茂樹	申錫麟

總督府	警務課長	石川登盛
同	地方課長	矢島杉造
同	社會課長	神尾弋春
同	學務課長	福士末之助
同	視學官	高橋濱吉
同	御用掛	作間應雄
同	囑託	片桐護郎
同	御用掛	原守
京畿道	內務部長	關水武
同	警務部長	田中武雄
同	警務課長	松島清
同	學務課長	古市進

京城府	學務課長	奥山仙三
同	内務課長	吉村傳
朝鮮軍司令部	歩兵中佐	池田肇
	歩兵中佐	坂田義朗
同	歩兵大尉	原田義和
第十九師團司令部	歩兵少佐	都地荒城
第二十師團司令部	砲兵中佐	渡邊謙
同	歩兵中佐	南雲親一郎
同	歩兵少佐	市川洋造
京城憲兵隊	憲兵大佐	難波光造
龍山憲兵分隊	憲兵少佐	馬場龜格
日本赤十字社朝鮮本部事務管事		釜瀬富太
龍山警察署	署長	田口禎憲

京城消防組	組頭	田中半四郎
龍山消防組	組頭	秋山督次

### 第六 掛 委 員

一 御親閲ノ業務ヲ援助スル爲附録第六ノ掛委員ヲ設ク

### 第七 服 装

- 一、陪觀者、參列者及委員(軍部委員ヲ除ク)ノ服裝ハ敬意ヲ失セサル程度ノモノヲ用フヘシ
- 二 學生、生徒ハ制服ヲ着用シ武裝、執銃ハ各校ノ事情ニ依リ隨意トス但シ中、小隊長トナルヘキ學生、生徒ハ教練用ノ指揮刀ヲ帶フルコトヲ得
- 學校團體ノ職員ニシテ分列ニ參加スル者ノ服裝ハ第一項ニ準ス

三 青年訓練所ノ服裝ハ當該訓練所ニ於テ制定シアルモノハ其ノ服裝ニ依リ靴若ハ地下足袋ヲ用ユ

但シ武裝、執銃ハ各訓練所ノ隨意トス

青年訓練所教練指導員タル在郷下士ニシテ小隊長以上ノ位置ニアルモノハ御親閲ノ場

- 合ニ限リ臨時訓練所備付ノ刀劍ヲ帶フルコトヲ得
  - 四 在郷軍人トシテ御親閲ニ參加スルモノハ軍服ヲ着用シ會員徽章及役員徽章ヲ佩用ス
  - 五 消防員ハ所定ノ服裝ヲナスモノトス
  - 六 部隊内ニ在ル准士官以上ハ儀式ノ場合ノ軍裝ヲナシ背囊ヲ負ハス（水筒ヲ携行スルコトヲ得）勳章、記章、徽章ヲ佩用ス
  - 七 軍部委員ノ服裝ハ通常禮裝ニシテ長靴又ハ脚絆ヲ穿テ下士以下ハ徒手帶劍脚絆ヲ穿ツ（騎兵ハ長靴）モノトス
  - 八 外套及雨履ハ成ルヘク卷キテ之ヲ左肩ヨリ右腋下ニ掛ケ又背囊ヲ負フモノハ之ヲ背囊ニ附着スルモノトス
- 但シ雨天ノ場合ハ外套雨履ノ著用ヲ妨ケスト雖モ頭巾ハ之ヲ脱ス

### 注意

- 1 服裝ニ就テハ各校毎ニ十分注意シ豫メ集合場ニ於テ服裝携行品等ノ検査ヲ爲スコト

- 2 當日ハ特ニ保健衛生ニ留意シ過度ノ飲食ヲ慎ミ服裝ノ整正ニ努ムルコト
- 3 旗手ハ帶刀セサルコト（帶劍ハ差支ナシ）
- 4 水筒又ハ湯呑ハ可成之ヲ携行シ雜囊ハ携行スルモ妨ケナシ
- 5 制服ハ夏冬何レヲ用フルモ差支ナシ 但シ教練用外被ハ之ヲ用ヒサルコト
- 6 雨具ハ外套「マント」類ヲ可トス。但シ傘モ妨ケナシ傘ハ分列ノ際ニハ之ヲ左手ニ提クルコト

## 第八 設 備 （附錄第七其一參照）

- 一 諸設備ハ專ラ第二十師團ニ於テ之ヲ爲ス
- 二 御座所及休憩所ノ設備ヲナス
- 三 通信、放送、活動寫眞、休憩所及湯茶ノ設備ヲナス
- 四 練兵場ノ四周及中央適宜ノ場所ニ救護所及便所ヲ設ク
- 五 練兵場ヲ補修ス
- 六 警備ニ關スル設備ヲ行フ



七 團體ノ集合整列及分別ノ爲メ諸準備ヲ行フ

## 第九 集合及解散

### 一 集合時刻

御親閱ニ參加スヘキ諸團體並參觀團體ハ當日午前九時迄ニ所定ノ位置ニ集合ヲ終ルモノトス。集合ノ爲ニ進入路ヲ規定ス (附錄第八參照)

### 二 集合位置ハ附錄第七其ノ一ノ要圖ノ如シ

現地ニハ標札ヲ植ツルノ外委員ヲ配置セラレアルヲ以テ速ニ該委員ニ連絡シ其ノ指示ヲ受クルモノトス

### 三 解散

1 解散ヲ行フニハ先ツ「其場ニ休メ」ノ號音ヲ吹奏シ次ヲ解散喇叭ヲ吹奏ス

2 「其場ニ休メ」ノ號音アリタルトキハ左ノ行動ヲナス

イ 陪列及陪觀者ハ直ニ附錄第七其ノ二ノ要領ニヨリ逐次退場解散ス

ロ 參加諸團體ハ委員ノ指示ニ從ヒ附錄第七其ノ二ノ要領ニ依リ逐次退場解散ス

## 第十 給養及宿營

### 一 給養ハ各團體ニ實施スルモノトス

二 參加者ハ携行容易ニシテ穀ノ始末ニ便ナル晝辨當ノ外簡易少量ノ食物ヲ衣囊内ニ携行スルヲ可トス

三 式場ニハ湯茶ノ設備ヲナスト雖モ成ルヘク水筒又ハ湯吞ヲ携行スルヲ便トス

### 四 幕營

十月三日夜京城及其ノ附近以外ノ地ヨリ參加スル學校及青訓生徒ノ全員ハ龍山ニ幕營ヲナスモノトス。是カ準備及指導ハ掛委員之ニ任スルモノトス (附錄第五參照) 但食費、幕營ニ要スル藁及薪炭費ハ各團體ノ負擔トス (一人一日分七十錢食費ハ三食)

幕營スル者ハ十月三日午後二時ヨリ同四時迄ニ第二十師團司令部ニ至リ係員ニ届出ツヘシ

## 五 兵營宿泊

在郷軍人第二回會全鮮大會規定ニ依ル。在郷軍人代表參列者中兵營宿泊希望者ハ十月二日夜ヨリ三泊以内ヲ兵營ニ宿泊セシム。右宿泊希望者ハ十月二日午後二時ヨリ同四時迄ニ左ニ示ス宿泊擔任部隊受付所ニ至リ係員ニ届出ツヘシ。但人員ノ關係上制限セラル、コトアルヘシ

- イ 步七八 羅南聯合支部、平壤及京城支部管内
- ロ 步七九 湖南及大邱支部管内

### 第十一 救 護

一 救護所ノ位置ハ附錄第七其一要圖ノ如シ

### 第十二 警備及取締

- 一 御親閱式場警備區域ノ外線ハ附錄第十要圖ノ如シ
- 要点ニハ赤旗ヲ樹立シ標示ス
- 二 道路以外ノ出入ヲ禁ス
- 三 警備區域内ニ於テハ一切ノ賣店ヲ禁止ス
- 四 式場内ニ於ケル新聞記者並寫眞撮影者ノ行動ハ總テ係員ノ指示ニ依ルモノトス

### 第十三 參 列 者

左記該當者ニシテ編成ニ加ハラサル者ハ參列者トシテ御親閱式場ニ參列ヲ許サル

- 參加在鮮在郷軍人
- 參加學校長及職員
- 參加青年訓練所ノ設立者主事及指導員
- 參加少年赤十字團幹部
- 參加消防員幹事

### 第十四 總 指 揮

御親閱諸團體總指揮部ノ編成左ノ如シ

總指揮官	步兵大佐	吉富庄祐
隨員	砲兵中佐	渡邊謙
同	步兵少佐	倉永辰治
同	步兵少佐	市川洋造
同	步兵大尉	坪島文雄

第十五 事務所

御親閱事務所ハ第二十師團司令部内ニ置ク

## 附録第一

### 御親閲次第細目

#### 一 集 合

集合完了スレハ各集團長ハ出場人員及集合完了ノ旨ヲ總指揮官ニ報告シ總指揮官ハ委員長ニ報告ス

委員長ハ通信掛將校永島中尉ヲシテ午前九時出場人員及準備完了ノ旨ヲ御附武官へ通報セシム（電話ニ依ル）

通信掛將校ハ御附武官ト連絡シ御旅館御出發ノ旨ヲ委員長ニ報告ス（電話ニ依ル）  
帶刀者ハ拔刀、執銃者ハ着劍ヲナス

- 1 陪列者ハ御座所ノ北側及南側ニ位置ス
- 2 委員長ハ御座所ノ前方二十歩ニ、副委員長ハ其ノ後方四歩ノ線ニ位置ス
- 3 軍樂隊ハ副委員長ノ線ノ後方ニ位置ス

## 二 御臨場

二二

閑院宮殿下式場ニ御臨場アラセラルトキ「氣ヲ付ケ」ノ喇叭號音ヲ吹奏ス

「氣ヲ付ケ」ノ喇叭吹奏ノ時期ハ御乗車練兵場入口ニ達スル稍、前トシ原田大尉參列者席北端附近ニ位置シ指定ノ喇叭手ヲシテ之ヲ吹奏セシム

陪列、陪觀、參加、參列ノ諸員、諸團體ハ不動ノ姿勢ヲ取り脱帽ス（但軍人其ノ他正規ニヨリ脱帽セサル者ヲ除ク）

## 三 敬 禮

御乗車式場ノ入口ニ達シタル時原田大尉ノ合圖ニ依リ喇叭一聲ヲ吹奏セシム。御親閱諸團體ハ大隊ヲ有セサル集團ハ集團、少年赤十字團ニ在リテハ分團）毎ニ一齊ニ敬禮ヲナス

敬禮間軍樂隊及喇叭隊ハ直ニ「君ケ代」一回ノ奏樂ヲ吹奏ス

吹奏ヲ終リタルトキ敬禮ヲ終ルモノトス

敬禮ノ方法左ノ如シ

### 1 御親閱參加部隊

大隊長（青訓集團長、少年赤十字團分團長以下之ニ準ス）ノ「捧銃」又ハ「頭右（左）」ノ號令ニ依リ帶刀者ハ三節ノ散禮ヲナシ執銃者ハ捧銃ノ敬禮其ノ他ノ者ハ「頭右（左）」ノ敬禮ヲナス

校旗、分會旗、所旗、團旗、組旗（小型ノモノヲ除ク）ハ旗手右手ヲ旗竿ニ沿ヒテ目ノ高サニ上ケ旗鏑ヲ右股ヨリ離スコトナク右手ヲ十分ニ前ニ伸ハシ旗ヲ垂レ敬禮ヲナス

2 陪列、陪觀、參列ノ諸員、諸團體ハ最敬禮又ハ舉手注目ノ敬禮ヲナス  
陪列者、委員長、副委員長ハ其ノ位置ニ於テ奉迎ス  
拜謁者ハ御休憩所前ニ至リ整列シテ拜謁ヲ受ク

## 四 國歌合唱

- 1 殿下御座所ニ立タセ給フヤ軍樂隊ハ先ツ「君ケ代」ノ一節ヲ奏ス
- 2 續テ全員一同「君ケ代」二回ヲ奉唱ス

二三



3 脱帽ノ諸員、諸団体ハ帽子ヲ被ル

# 五 御親閲

## (一) 視閲式

- 1 委員長ハ約八歩前ニ前進シ御親閲開始ノ旨ヲ言上ス
- 2 御乗馬ヲ御座所前ニ到ラシム
- 3 委員長及副委員長ハ御座所ノ右後方ニ移ル、扈從スルモノハ乗馬ス
- 4 軍樂隊ハ其ノ位置ニ止マル
- 5 御乗馬ノ後池田中佐ノ嚮導ニテ逐次右翼諸団体ヨリ視閲ヲ開始セラル
- 6 總指揮官ハ數歩前進シ敬禮ヲ行ヒ出場人員ヲ報告シ扈從ノ位置ニ入ル
- 7 集團長ハ數歩前進シテ敬禮ヲ行ヒ出場人員ヲ報告シ舊位置ニ復歸ス
- 8 各団体敬禮ノ方法ハ脱帽ノ後第三項敬禮ノ方法ニ依リ行フ
- 9 喇叭ノ吹繼ハ次ノ喇叭隊ノ開始マテ繼續スルモノトス
- 10 在郷軍人集團ハ視閲ヲ終ルヤ逐次分列ノ位置ニ移ル喇叭手ハ先頭ニ集リ分列ノ

## 位置ヲトル

- 11 青訓集團以下右ニ準シ逐次分列ノ爲距離ヲ短縮ス
- 12 倉永少佐ハ在郷軍人集團ノ御視閲終ルヲ待テ敬禮點ノ標兵ヲ配置ス
- 13 視閲式終レハ殿下御座所ニ即カセラル
- 14 扈從者各其ノ所定ノ位置ニ到ル

## (二) 分列式

- 1 原山大尉ノ合圖ヲ以テ喇叭一聲ヲ吹奏セシメ前方部隊ヨリ發進ヲ起ス
- 2 喇叭隊ハ行進曲ヲ奏シ諸団体分列前進ヲ起ス（分列ノ要領ハ附録第二參照）
- 3 總指揮官ハ敬禮點ヲ通過スレハ御座所ノ右後方ニ到ル
- 4 分列団体御前通過ノ際總指揮官ハ各集團ノ編成ヲ言上ス
- 5 軍樂隊ハ在郷軍人集團分列後ノ位置ニ就ク頃機ヲ見テ在郷軍人集團ノ右方ニ移ル
- 6 陸軍喇叭隊ハ諸団体分列ヲ終レハ喇叭手群毎ニ分レテ諸団体ノ後方ニ移ル

7 總指揮官ハ諸團体分列ヲ終レハ敬禮ノ後集團前方ニ到ル

8 乗馬者ハ分列式ヲ終ルヤ下馬ス

9 委員長ハ御座所ノ前方二十歩ノ位置ニ移ル

六 令 旨

陪列、陪觀、參列ノ諸團体ハ不動ノ姿勢ヲ取り脱帽ス（但軍人其ノ他正規ニヨリ脱帽セサルモノヲ除ク）

委員長御前ニ進ミ拜受シテ舊位置ニ歸ル

七 奉 答

更ニ八歩前ニ進ミ出テ奉答ス

此間陪列、陪觀、參列ノ諸團体ハ前項ノ場合ニ同シ

八 萬歲三唱

委員長ノ奉答ヲ終リ舊位置ニ歸ルヤ委員長ノ發聲ニテ全員萬歲ヲ三唱ス其ノ要領左ノ如シ

委員長

天皇陛下萬歲

諸員萬歲

委員長

萬歲

諸員萬歲

委員長

萬歲

諸員萬歲

委員長ハ八歩前ニ出テ御親閱式終了ノ旨ヲ言上ス

九 敬 禮

御乗車ノ際倉永少佐ノ合圖ニ依リ喇叭一聲ヲ吹奏ス、諸團体同時ニ敬禮ヲ行フ其ノ法第三ノ場合ニ同シ

軍樂隊及喇叭隊ハ「君ケ代」ヲ吹奏ス

十 御退場

殿下ハ前項敬禮裡ニ御乗車御退場

十一 挨拶

委員長ハ參加諸團体一同ニ對シ挨拶ヲナス

十二 解散

倉永少佐ノ合圖ニ依リ先ツ「其ノ場ニ休メ」ノ喇叭號音ヲ吹奏シ次テ解散喇叭號音ヲ

吹奏ス

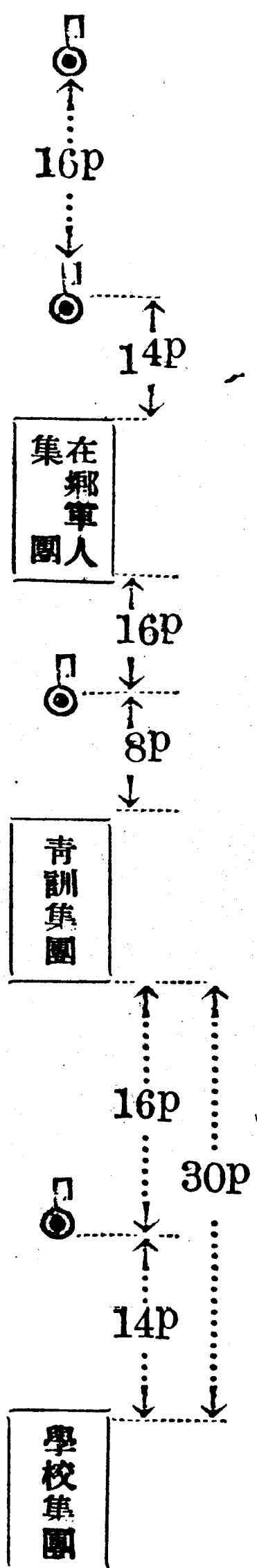
陪列、陪觀、參列ノ諸員、諸團體ハ附錄第七其ノ二ノ要領ニヨリ解散ス

附錄第二

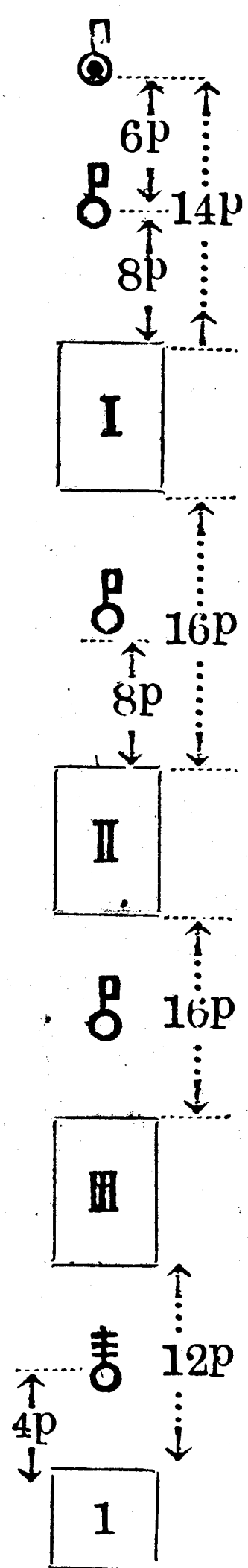
分列ニ關スル規定

一 分列ノ隊形左ノ如シ（Pハ步數ヲ示ス）

1 全般ノ隊形

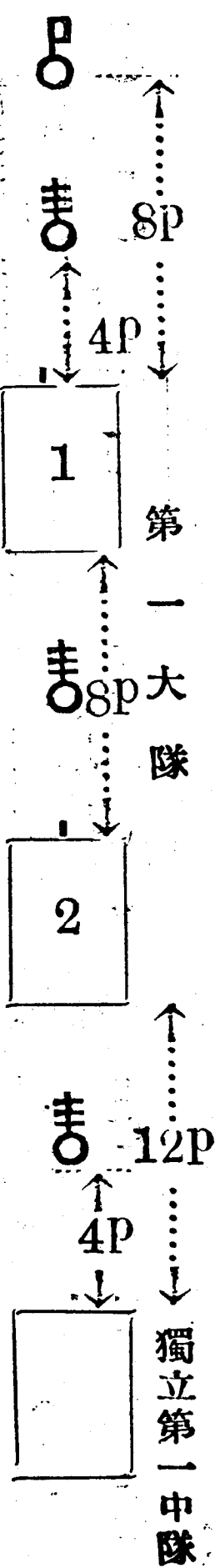


2 集團ノ隊形（各集團内ノ大（中）隊數ハ附錄第九其一、其二、其三參照）

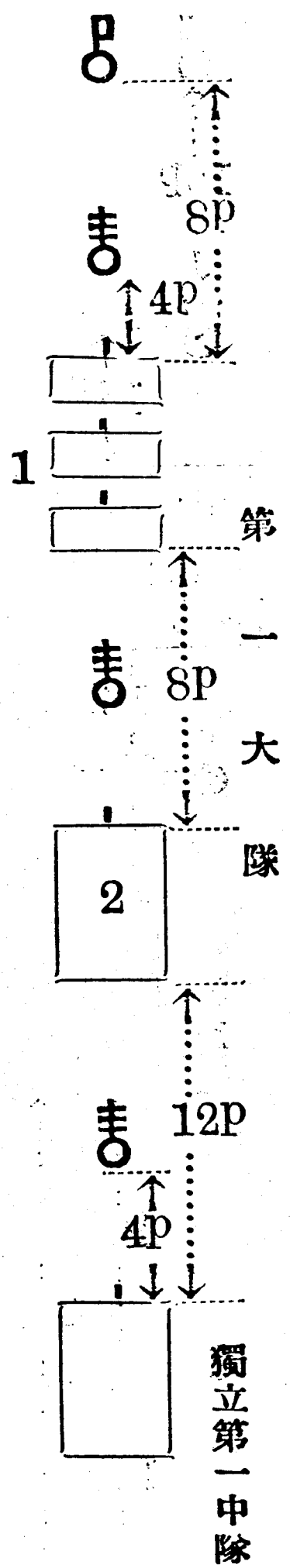


3 大隊（獨立中隊）ノ隊形（各大隊内ノ中隊數ハ同右）

(一) 在郷軍人、青訓集團



(二) 學校集團



4 中隊ノ隊形

(一) 在郷軍人、青訓團

- イ 中隊ハ(深サ概ネ十五人ヲ基準トス)數列ノ側面縱隊トス
- ロ 分會旗所旗ハ各中隊ノ前方部位ニ位置セシム

(二) 學校集團

イ 中隊ハ乙號隊形トス

ロ 校旗ノ位置ハ一校一中隊ノモノニ在リテハ當該中隊又二中隊以上ノモノニ在リテハ先頭中隊ノ各第一列各嚮導ノ右側トス

二 分列

1 分列發起線ニ就ク爲ノ行動要領左ノ如シ

イ 視閲ヲ終リタル喇叭手群ハ逐次相合シテ一隊トナリ總指揮官ノ前方二十四歩ニ集合シ上級先任ノ喇叭長ノ區署ヲ以テ前進ノ準備ヲナス

ロ 視閲ヲ終レハ指揮者ハ分列隊形ノ位置ニ移ル

ハ 在郷軍人集團ハ視閲ヲ終ルヤ逐次分列發起ノ位置ニ移動スルモノトス

ニ 青訓、學校集團ハ分列發起線迄ハ逐次前方大(中)隊ニ跟隨シ前方集團ノ左翼ニ位置シ其ノ發進ノ終ルヲ待チテ逐次發起線ニ入り所定ノ隊形距離ヲ取ルモノトス

2 分列ノ步度

在郷軍人及專門學校以上青年訓練所 一分間 百十四步

## 中等學校

一分間 百十八步

## 3 敬禮

大隊(獨立中隊ニ在リテハ中隊)毎ニ大(中)隊長ノ號令「頭右」ニ依リ之ヲ行フ

イ 帶刀者ハ凡テ三節ノ敬禮ヲ行フモノトス

小隊長ニシテ帶刀セサルモノハ舉手ヲ行ハスシテ單ニ「頭右」ノ敬禮ヲ行フモノトス

ロ 會旗、校旗、所旗ハ旗手右手ヲ旗竿ニ沿ヒテ眼ノ高サニ上ケ旗幟ヲ右股ヨリ離スコトナク右手ヲ十分ニ伸ハシ旗ヲ垂レ同時ニ「頭右」ヲ爲シ敬禮スルモノトス但シ小旗ノ校旗、所旗ニシテ右ノ敬禮ヲ行ヒ得サルモノハ旗手之ヲ擔ヒタル儘「頭右」ノ敬禮ヲ行フモノトス

ハ 各中隊ノ嚮導(小隊長又ハ分隊長)ハ頭ヲ正面ニシタル儘行進スルモノトス

## 注意

イ 各隊長ハ號令ノ徹底困難ナルコトヲ顧慮シ豫メ列中ニアル者ニ敬禮ヲ行フヘキ

## 時期ヲ教示シ置クコト

ロ 敬禮點ニ於テ號令ノ徹底ヲ期スル爲後方ニ向クカ如キハ適當ナラス又一般ニ頭ヲ向クル角度及注目ニツキテハ特ニ豫メ注意シ置クコト

ハ 帶刀者ノ三節ノ禮ハ頭ノ豫令ニテ其ノ第一節ヲ行フ如クスルコト(御臨場及御退場ノ際ノ敬禮ニ於テモ亦「頭」又ハ「捧」ノ豫令ニテ第一節ヲ行フ)

三 分列終了後ノ集合位置ニ就ク爲ノ行動要領左ノ如シ

1 分列終了後ニ於ケル隅角旋回ノ際特ニ步度ヲ遲緩セシメサルコトニ注意スルモノトス

2 分列終了後ノ集合位置附錄第七其二ノ如シ

現地ニ委員ヲ配置シ尙隅角旋回後各集團長ハ之等ト連絡ヘルコトニ努ムヘシ

3 少年赤十字集團及消防員集團ハ分列開始ト共ニ前進ヲ準備シ學校集團分列後ノ集合位置ニ閉縮スルヤ直ニ前進ヲ起シ附錄第七其二ノ位置ニ整列ス



## 附錄第三

### 參列諸團體ニ對スル細部ノ注意

#### 一 集合時刻ニ就テ

規定ノ集合時刻ハ午前九時迄ニ諸隊カ奉迎位置ニ集結シ終ルコトヲ目途トシ時間ヲ計算シ規定セラレタルモノナリト雖モ最モ早ク式場ニ到着スル團體ニ屬スル者ニアリテハ其ノ後方ニ多數團體ノ續行シアルヲ想ハサレハ或ハ過早ニ集合セシメラレタルヤニ誤解スルコトナキヲ保シ難シ萬一斯ル誤解ニ基キ不平不滿ノ感ヲ懷クカ如キコトアリテハ此ノ盛儀ニ對シ甚タ遺憾ノコトト謂ハサルヘカラサルヲ以テ各隊長ハ參加諸員ニ漏レナク此ノ關係ヲ理解セシメ苟モ誤解ナカラシムル如ク配慮スルコト

#### 二 集合場ニ於ケル取締ニ就テ

在郷軍人學生々徒等ヲシテ集合場ニ於テ其ノ附近ヲ汚損スルカ如キコトナカラシムル様注意スヘシ

### 三 集合場ヨリ式場ニ到ル間ノ行軍ニ就テ

各指揮者ハ團體ノ掌握ヲ嚴ニシ隊伍ヲ整ヘ苟モ團體外ノ者ノ紛レ込ムカ如キ虞レナカラシムルハ勿論努メテ一般ノ交通ヲ妨碍セサルコトニ注意スルコト之カ爲嚴ニ道路ノ一側ヲ行進スルコト（隅角ヲ旋回スル場合ニハ動モスレハ外側ニ喰ミ出シ易スキヲ以テ特ニ注意ヲ要ス）

集合ノ爲ノ各團體ノ隊形ハ四列側面縱隊トス

### 四 視閲式ノ時敬禮ノ際會旗、所旗、校旗、團旗、組旗ヲ下ロスハ御乗馬ノ恐怖ヲ顧慮シ最初ヨリ下ロシ置クコト

### 五 奉迎位置ヨリ分列發起點ニ就ク迄ノ行動ニ就テ

各團體及各人ノ距離延伸シ奏請シアル時間内ニ分列ヲ終了シ得サルカ如キコトナカラシムルハ極メテ緊要ノコトナルヲ以テ特ニ隊間距離及部隊ノ縱長ヲ延伸セサルコトニ注意スルコト又前方部隊カ前進ヲ起シタル後始メテ「氣ヲ付ケ」「前へ進メ」ヲ號令スル等ノ爲ニ隊間距離延伸シ之ヲ回復センカ爲ニ步度ヲ伸シ整々タル行動ヲ妨クル等ノコトナキ様全幅ノ注意ヲ加フルコト

### 六 分列ノ敬禮ニ就テ

各中隊ノ嚮導ヲ除クノ外ハ全員「頭右」ヲ爲スヘキコト及帶刀者ノ三節ノ敬禮ニ注意スルコト。特ニ隊列内ニ在ル會旗、所旗、團旗ノ敬禮ノ際旗竿ヲ前方ニ倒ス爲ニ縱長ヲ延伸セサル様注意スルコト

### 七 分列ノ步度

軍樂隊ハ在郷軍人及專門學校以上ノ學生ノ爲ニハ正規ノ百十四步ノ速度ヲ以テ奏樂ヲ行フヘキモ中學生等ノ爲ニハ百十八步ノ速度ヲ以テスル筈ナリ經驗ニヨレハ列中ノ者ハヨク此ノ速度ニ合シタルモ指揮官ノ步度ハ稍々亂レ易シ又中隊長及校旗ノ整頓ニハ特ニ注意スルコト

### 八 分列後ノ集合位置ニ閉縮スル動作ニ就テ

分列後第一回ノ方向變換點附近ニ於テハ後方部隊ノ撞着ヲ避クル爲若干ノ駈歩ヲ要求スルコトアルヘキモ此ノ際旋回軸ノ者カ通常ノ駈歩ノ步度ヲ取ルトキハ外側ノ者ハ早駈ヲ要スルニ至リ爲ニ顛倒スル等ノ虞アルヲ以テ内側ノ者ハ稍々短縮シタル步度ヲ以

テ駈歩ヲ行フ如ク指導スルコト

#### 九 解散ニ就テ

解散ハ最モ混雜ヲ起シ易キヲ以テ特ニ戒心ヲ加ヘ燥急ナル行動ヲ慎ミ事故ノ發生ヲ豫防スルニ萬遺漏ナキヲ期シ又部隊ノ式場退出ハ解散號音ニヨリ各個ニ之ヲ行フニアラスシテ必ス委員ノ指示ニヨリ行動ヲ起スコト

#### 一〇 委員ノ連絡ニ就テ

行事ノ進捗ヲ整々ナラシムル爲隨時委員ヨリ各指揮者ニ種々ノ希望ヲ述フルコトアルヘシ此ノ場合ニハ全般ノ目的ノ爲ニ虚心坦懷ニ之ヲ容レラレンコトヲ切望ス

#### 一一 喫煙ニ就テ

式場ニ於テハ午前九時以後禁煙ノコト

#### 一二 萬歲三唱ニ就テ

委員長ノ奉答終リ舊位置ニ復スルヤ號音ノ合圖ヲ行フコトナク直ニ萬歲三唱ニ移ルヲ以テ嚴ニ靜肅ヲ保チ委員長ノ萬歲發聲ニ注意シアラシムルコト

### 附錄第四

#### 中等學校、青訓生徒幕營ニ關スル規定

- 一 各學校、青年訓練所生徒幕營位置ハ龍山偕行社東南側高地トス細部ハ現地ニ於テ示ス
- 二 各學校幕營ノ爲ニハ概ネ四十人ニ對シ攜帶天幕二十四枚張一個宛ヲ配當ス端數ニ對シテハ適宜定ム

青年訓練所ニハ約三十五名ニ對シ一個ヲ配當ス人員ニ依リテハ合併收容スルコトアルヘシ

各幕舍毎ニ圓匙二、小仲間四、及洗面器二ヲ貸與ス、但シ圓匙ハ幕舍構築ヲ終ラハ速ニ返納スルモノトス

- 三 前項ノ材料及幕營材料ハ三日午前中ニ幕營豫定ノ位置ニ集結シ置クヲ以テ幕營地到着後借用證ト對照ノ上服務將校(青訓指導員)ニ於テ受領スルモノトス

幕舍ノ位置ハ標札(例、光州中學校 第一(二、三)幕舍)ヲ樹立ス

四日早朝幕舎撤去後ハ品目ヲ整理ノ上右ニ準シ返納スルモノトス

四 幕舎ノ建設ハ各學校生徒之ヲ行フモノトス

五 寢具ハ貸與セサルヲ以テ可成外套ヲ所持セシムルヲ要ス

六 食器ノ準備ハ其ノ集積困難ナルヲ以テ各人飯盒若ハ辨當箱(箸共)及水筒ヲ携行セシムルヲ必要トス

七 幕舎間ニ於ケル火災、盜難豫防ニ對シテハ各學校、青年訓練所其ノ責ニ任スルモノトス

八 廁ハ別ニ準備シアルヲ以テ其ノ他ニ於テハ用便スヘカラス

九 御親閱式出場前諸物品ヲ集ムルヲ可トス

一〇 各學校、青年訓練所ハ確實ニ諸物品ヲ返納シタル後ニ於テ解散スルモノトス

一一 各學校職員ニシテ幕營ヲナササル者ニ對シテハ特ニ配慮セサルモノトス

一二 炊事場ハ現場ニ設備シテ炊爨ヲナス

一三 炊事用、湯沸用、洗面用水

用水ハ偕行社或ハ最寄官舎ヨリ補償(一人一錢位)ヲ條件ニ貰ヒ受ケ四斗樽ノ如キ容器

ニ入レ又洗面ノ爲柄杓(出來得レハ洗面器共)人員ニ應シ準備ス

一四 主食、副食、露營材料ノ調辨

一人七十錢以內ニ於テ現地ニ於テ調辨ス

藁ハ使用後返戻スルモノトス

借用物品ノ復舊ニ要スル費用竝ニ借上料ハ右金額ノ內ヨリ支辨ス

主食 精米六合

副食 金額ノ範圍內ニ於テ献立作製ス

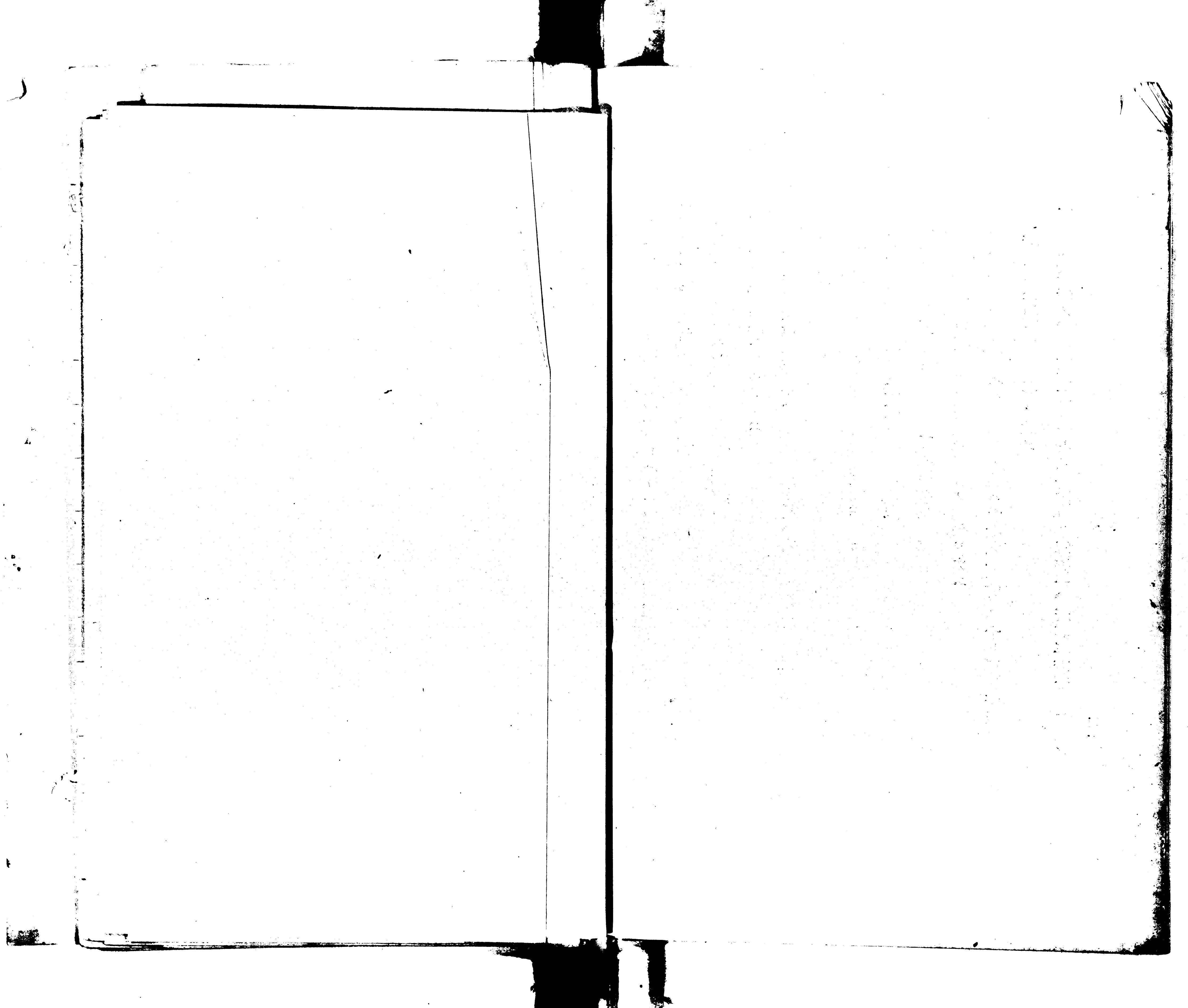
露營用 木炭一人一夜ニ付五〇〇匁

同 藁 同 一、〇〇〇匁

一五 幕營地ニハ照明ノ爲高燭光電燈ノ設備ヲナス

一六 幕營地全般ノ警戒ニ關シテハ特ニ歩七九聯隊ヨリ十月三日午後ヨリ同四日朝ニ亘リ衛兵(長以下二〇名)ヲ設ク

一七 幕營者ノ爲ニ救護班(歩七八聯隊ヨリ軍醫一、看護卒若干)ヲ設ク





# 附録第五

委員及招待者ノ標識

一、委員長



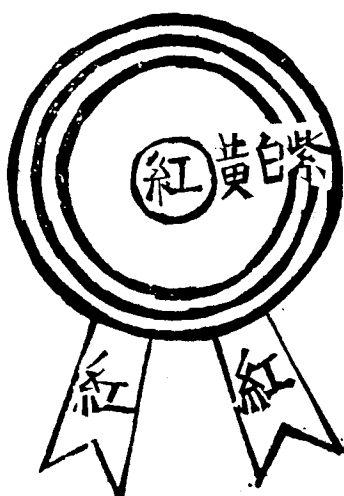
大サ直径約三寸唐繻子製トシ  
左乳下ニ附着ス

二、副委員長



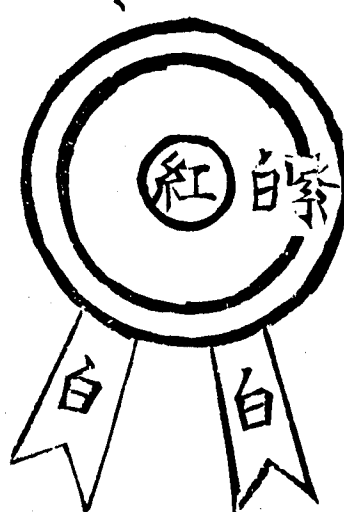
右  
同

三、顧問



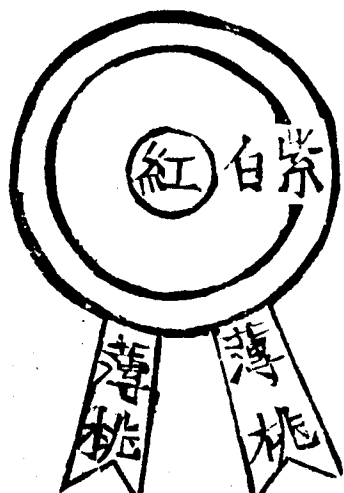
右  
同

四、委員



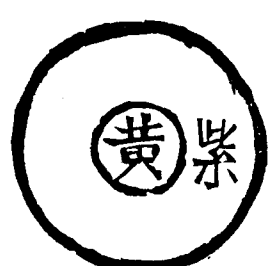
大サ直径約二寸五分唐繻子製トシ  
左乳下ニ附着ス

五、係委員



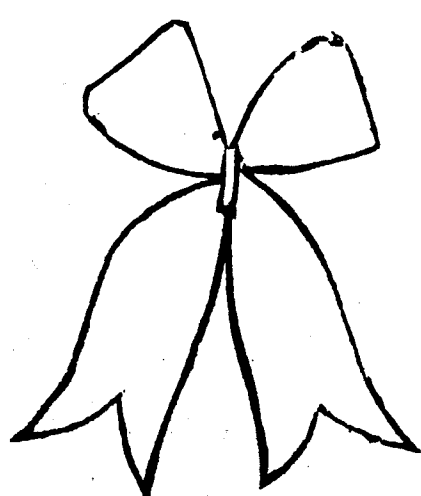
右  
同

六、式場係助手



直径約一寸八分唐繻子製トシ  
左乳下ニ附着ス

七、招待者



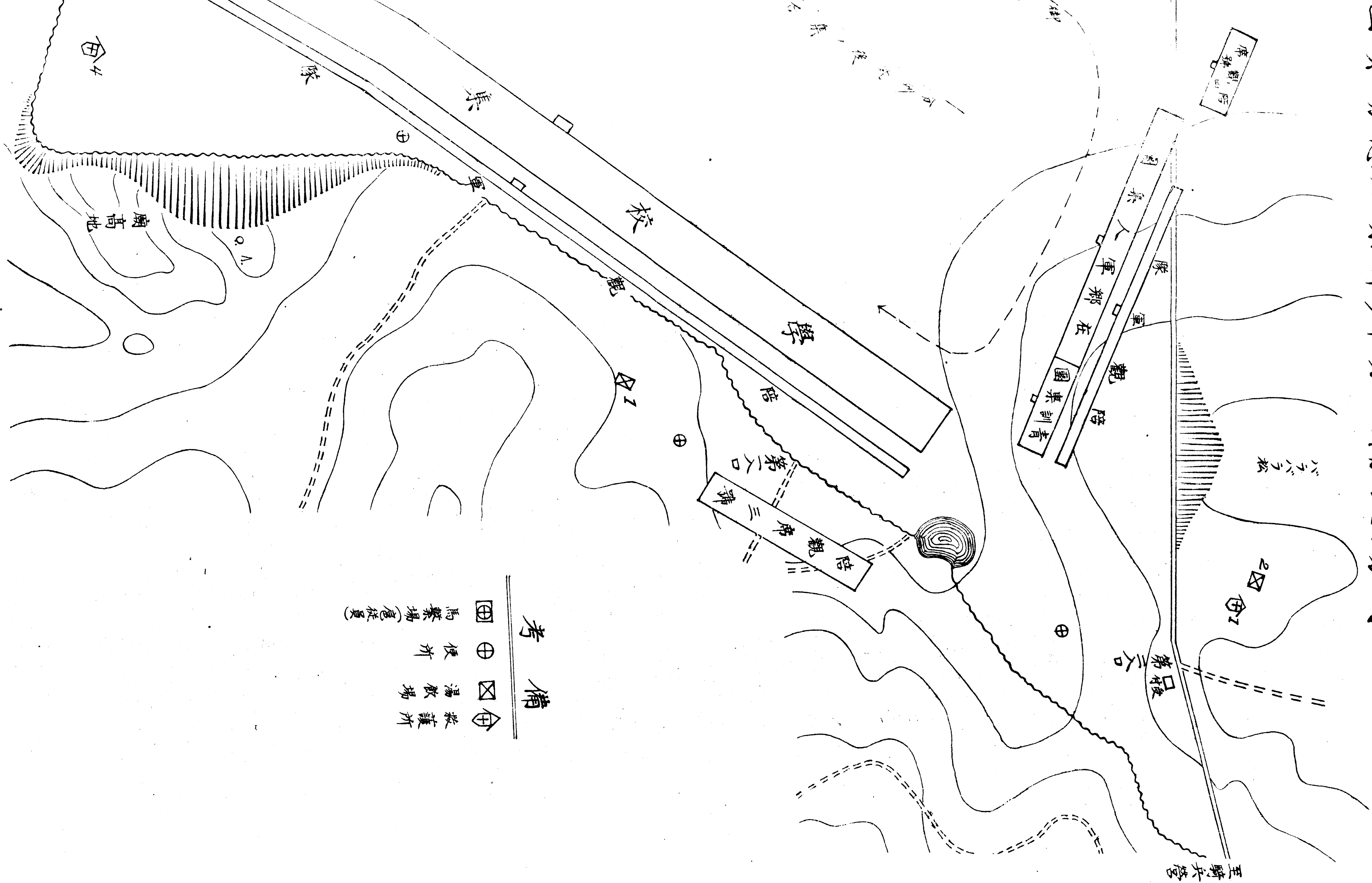
蝶形赤「リボン」トシ  
左乳下ニ附着ス

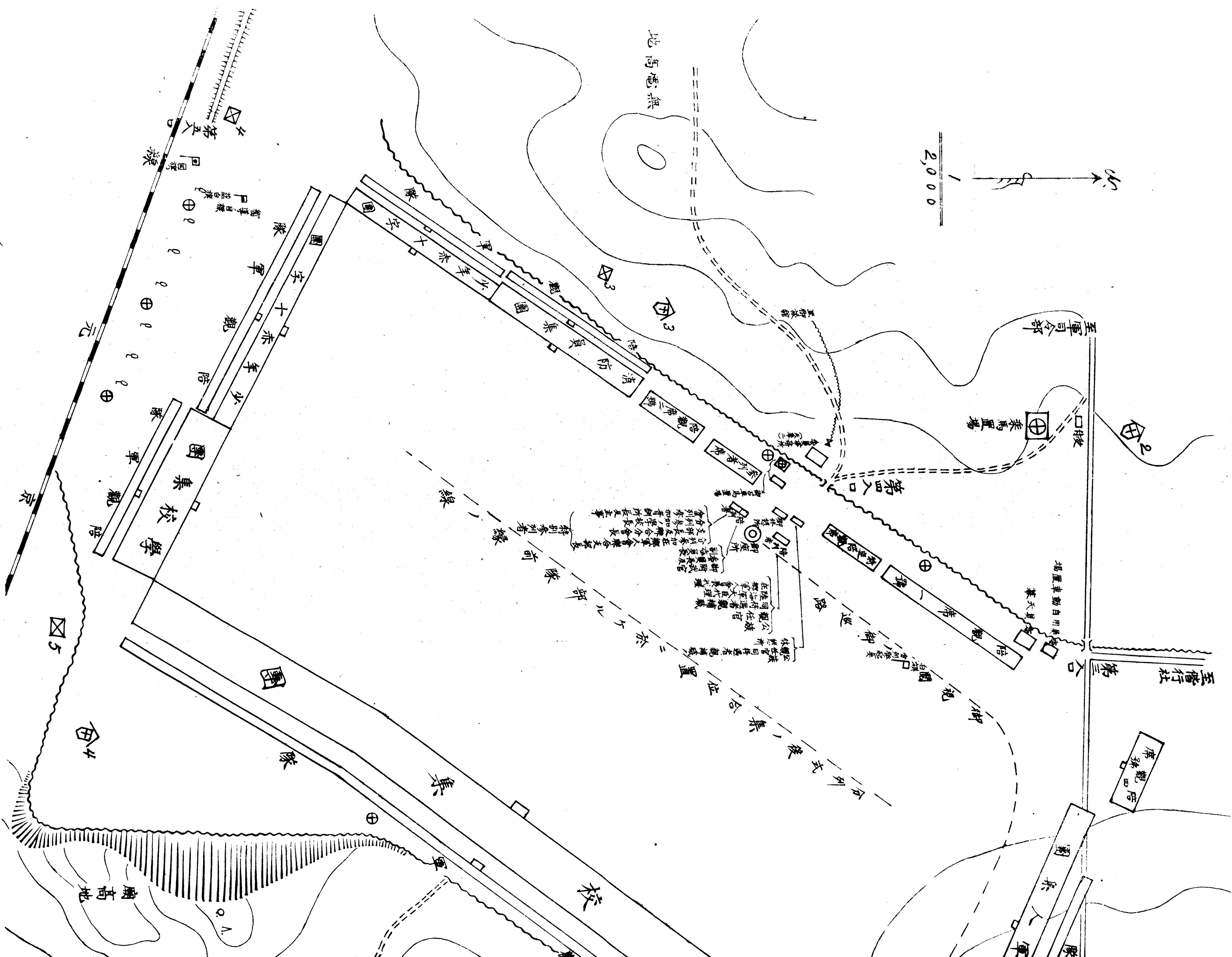
諸團體御親閲掛委員(助手)編成表

區分		委員		(所屬)		差出部隊		委員助手		任務	
分		員		(所屬)		准士官下士兵卒		計		任	
庶務係		市川少佐(一〇師) 赤城大尉(二〇師) 志賀主計(二〇師) 渡邊主計(二〇師) 高野永治(在郷)	岸事務官(總務) 藤江總務(總務) 松橋總務(總務) 中村健吉(在郷) 西館總務(總務)	軍司	一				一	一般ノ計畫、文書ノ取扱、名簿、印刷 記録ノ調製 參觀團體ノ許可 豫算決算書ノ作製、物品ノ調辨借入等 其他委員ノ業務ニ關セサル事項	
宣傳係		坂田中佐(軍、司) 百瀬大尉(二〇師) 山田少佐(軍、司)	上野村大尉(步七八) 上原總務(總務)	師團	三				三	國防其他ニ關スル宣傳 放送局トノ連絡 活動寫眞ノ映寫	
新聞記者係		市川少佐(軍、司) 總井大尉(軍、司) 山田少佐(軍、司)	大沼大尉(二〇師) 久野少尉(工三〇) 津村勇總務(社)	步七九	一				五	新聞情報ノ統制 新聞記者(寫眞班)ノ指導 御親閱其ノ他ノ撮影ニ任ス	
活動寫眞係		渡邊中佐(二〇師) 坪島大尉(二〇師) 伊藤大尉(步七八) 永島中尉(步七八)	堀中尉(砲二六) 桐原中尉(工二〇) 竹口少尉(步七八)	步七八 砲二六 工二〇	一 一 一	五 三 四	五 五 五	三 三 三	二 二 二	御座所及御休憩所ノ設備 練兵場ノ補修、團體ノ集合、整列及分列 ノ爲ノ諸準備 式場ニ於ケル通信、放送、活動寫眞、休 憩所、湯茶、救護所、使所及警備ニ關ス ル設備	
設備係		大賀大佐(二〇師) 都地少佐(十九師) 龜井大尉(二〇師) 緒方中尉(步七八)	奥中尉(工二〇) 岡島中尉(砲二六) 藤井少尉(騎二八)	步七八 騎二八 砲二六	一 一 一	二 二 二	二 二 二	四 五 四	一 一 一	各團體ノ集合、編成、式場ヘノ集中、分 列後ノ解散等ノ指導	
學生團體係		高橋視學官(總務、學) 母袋大尉(十九師) 吉武大尉(二〇師)	古角中尉(砲二六) 和久總務(總務)	工二〇	一				二	右 同	
青訓團體係		松田大佐(二〇師) 島崎龍一(在郷) 横倉少佐(步七八) 紅露少佐(步七八) 松田大尉(二〇師) 西崎大尉(步七八) 江上中尉(步七八)	本白中尉(砲二六) 山崎中尉(騎二八) 片山中尉(工二〇) 大隈中尉(十九師) 長谷部中尉(在郷) 野口理一郎(在郷) 高野永治(在郷)	步七八 騎二八 砲二六 工二〇	一 一 一 一 一 一	二 二 二 二 二 二	二 二 二 二 二 二	一 一 一 一 一 一	右 同		
少年赤十字團係		釜山仙三(赤十字) 釜山仙三(赤十字) 石原清昭(西小校)	小坂傳太郎(赤十字) 横山三郎(赤十字) 赤堀義典(義塾)	騎二八	一				二	右 同	
消防員係		片桐少佐(總務、警) 大樂警部(京、消)	稲田總務(總務、警)						二	右 同	
幕營係		ケ大賀大佐(二〇師) ケ母袋大尉(二〇師) ケ龜井大尉(二〇師) 勝野主計正(二〇師) 平田主計(二〇師)	山名松太郎(在郷) 大久保大尉(步七八) 金山大尉(步七八) 平井中尉(步七八) 石川中尉(步七八)	步七八 步七九 師團	一 一 一 一 一	計手一 計手一 計手一 計手一 計手一	二〇 二〇 二〇 二〇 二〇	二 二 二 二 二	一學校、青訓生徒中ノ地方代表者ノ幕營 ニ關スル準備及指導ニ任ス		
警備係		難波大佐(京、憲) 南雲中佐(二〇師) 馬場少佐(龍、憲) 池上大尉(憲、司) 河瀬大尉(步七八)	喜多中尉(步七八) 黒田中尉(砲二六) 宮崎少尉(騎二八) 林警部(道、憲)	步七九 騎二八 砲二六 工二〇	二 二 二 二	二 二 二 二	二 二 二 二	二 二 二 二	一警務機關協力シテ式場内外ノ警戒及取締 ニ任ス 二警戒旗及警戒兵(左腕ニ白布ヲ附ス)ノ 配置ニ任ス		
團體整理係		班一第 ケ吉宮大佐(二〇師) 八幡大尉(二〇師) 班二第 ケ渡邊中佐(二〇師) ケ市川少佐(二〇師) 班三第 周山大佐(步七八) 佐藤中佐(步七八) 樋口少佐(步七八) 倉永少佐(二〇師) 原田大尉(軍、司)	藤田少佐(四〇旅) 龜井大尉(二〇師) ケ坪島大尉(二〇師) 林唯亮(在郷) 宮澤大尉(騎二八) 川住大尉(步七八)	步七八 步七八 步七八 步七八 步七八	二 二 二 二 二	二 二 二 二 二	二 二 二 二 二	二 二 二 二 二	一各集團ヲ統制シ式場ニ於ケル参加各團 體全般ノ整理 二團體ノ編成、集合及解散ニ關スル計畫 三參觀團體ノ配置及取締ニ任ス		
分列係		ケ倉永少佐(二〇師) ケ原田大尉(軍、司)	石田中尉(騎二八)	騎二八	二				二	一分列ノ發起、行進等分列ニ關スル指導 ニ任ス	
陪列陪觀		高山大佐(步七九) 河村中佐(步七九) 作岡中佐(總務) 南雲中佐(二〇師) 助川少佐(二〇師) 齋藤大尉(軍、司)	守屋德夫(在郷) 古川大尉(砲二六) 宇宿大尉(步七八) 藤本中尉(步七八) 眞鍋總務(總務) 長谷部中尉(在郷)	步七九 步七九 砲二六 砲二六 砲二六	二 二 二 二 二	二 二 二 二 二	二 二 二 二 二	二 二 二 二 二	一陪列陪觀及參列者ノ案内、誘導及整理 等ニ任ス		
參列者係		重藤大尉(四〇旅) 長谷川中尉(步七九) 河野少尉(二〇師) 佐々木主計(二〇師)	丸山總務(總務)	步七九 砲二六 砲二六	一 一 一	一 一 一	一 一 一	一 一 一	一	各委員ト協力シテ受付案内ヲナス	
受付係		名川中尉(砲二六) ケ林警部(道、憲)	柳城少尉(騎二八)	步七八 騎二八	一 一	一 一	一 一	一 一	一	一來賓ノ車馬整理 二御親閱扈從者ニ關スル乘馬ノ準備	
車馬係		尾崎軍醫正(二〇師) 渡邊龍(在郷)	大田軍醫(龍病)	步七九 龍病	一 一	一 一	一 一	一 一	一	一式場其他團體集合ノ際ニ於ケル救護	
救護係		備									
考		一、軍高級副官池田中佐ハ御親閱ノ際ハ殿下ノ御嚮導ニ任スルモノトス 二、御親閱參加部隊ハ配屬ノ爲兩步兵聯隊ヨリ勤務ニ差支ナキ喇叭手ハ全員出場セシムルモノトス 三、各係ノ高級先任者ハ其ノ主任トス 四、ケハ兼務トス									

# 圖要勢態合集前列分及備設場式

附錄第七其







○分列ノ集合ニ就テ

- 一、在郷軍人集團、青訓集團、學校集團ハ分列終了後逐次要圖ノ如ク集合ス
- 二、少年赤十字團及消防員集團ハ其ノ順序ヲ以テ學校集團ノ最後ノ中隊ノ分列後其後尾ニ跟隨スル如ク運動ヲ起シ要圖ノ位置ニ集合ス
- 三、集合隊形

イ、在郷軍人集團

中隊ハ最初集合セルトキノ隊形ヲ以テ大隊毎ニ重疊ス但シ獨立第一第二中隊ハ夫々第三、第四大隊ノ後方ニ重疊ス

ロ、青訓集團

中隊ハ最初集合セルトキノ隊形ヲ以テ重疊ス

ハ、學校集團

中隊ハ最初集合セルトキノ隊形ヲ以テ大隊毎ニ重疊ス但シ校旗(護衛者共)ハ學校毎ニ先頭中隊ノ前方ニ位置シ又獨立中隊ハ左ノ如ク位置ス

1s 2s ハ//ノ後方ニ3s 4s 5s 6s ハ記述ノ順序ニ前後ニ重疊//ノ左ニ7s 8s 9s 10s 11s ハ記述ノ順序ニ前後ニ重疊シ3sノ線ノ左ニ又12s ハ//ノ後方ニ重疊ス

ニ、少年赤十字團

最初集合セル隊形ノ正面ヲ三分ノ一ニ收縮ス

ホ、消防員集團

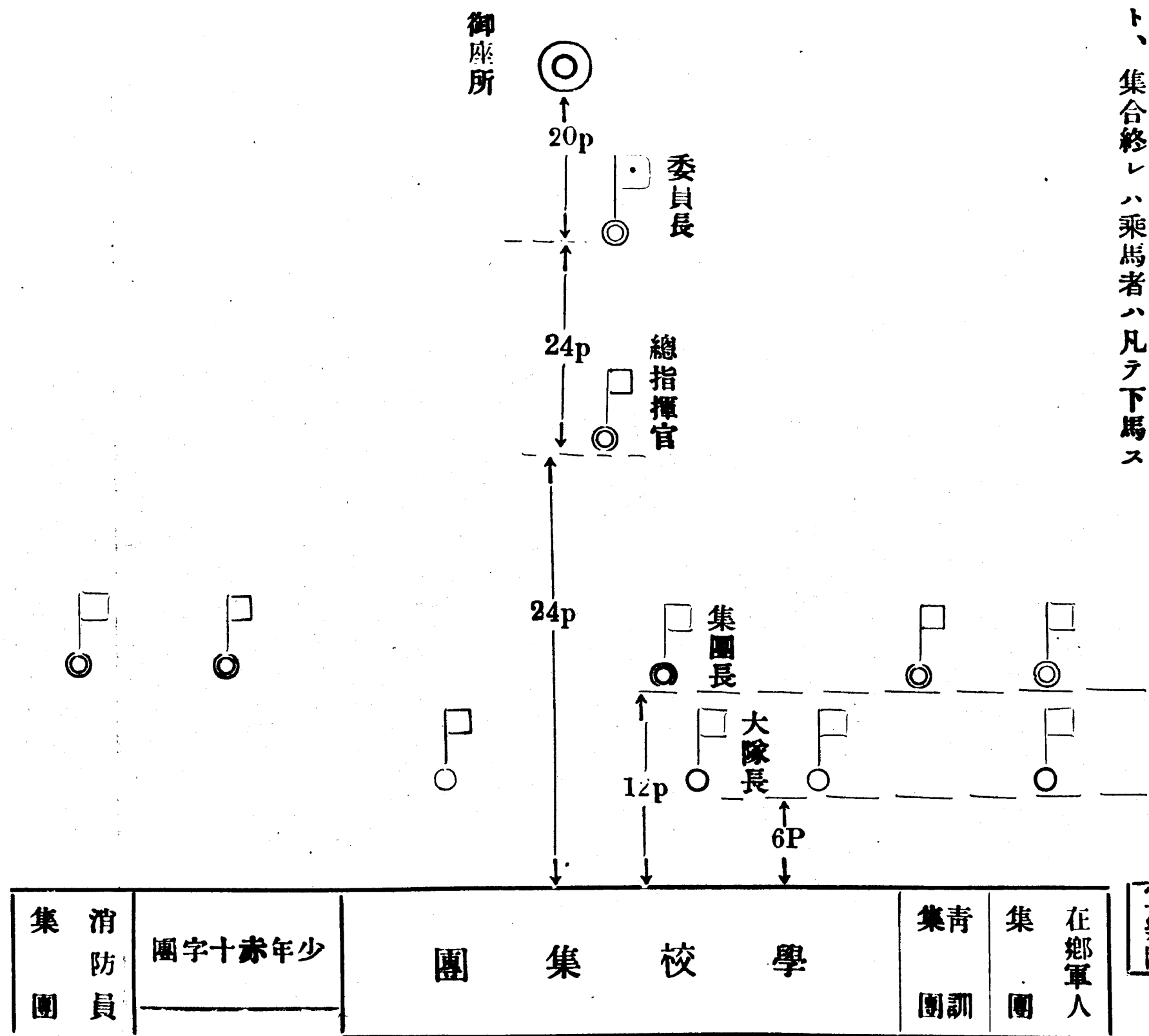
京城ノ四團體及各道團體ハ最初集合ノトキノ隊形ヲ以テ三線ニ重疊ス

ヘ、各團體共努メテ距離間隔ヲ閉縮ス

ト、集合終レハ乘馬者ハ凡テ下馬ス

圖要勢態合集ノ後列分

(畫計散解附)



○解散ニ就テ

- 一、御親閱式終了シ 殿下御退場アラセラルレハ喇叭「其場ニ休メ」ヲ吹奏ス各團體ハ休憩ス
- 二、喇叭「解散」ノ吹奏アレハ各團體ハ左ノ如ク解散ス

イ、退場路

進入ノトキニ同シ

ロ、退場ノ順序

軍隊、在郷軍人、青訓、消防員、中等學校以上ノ學校生徒、少年赤十字團

ハ、各團體共電車線路以東、步七八、步七九、兵營北側道路以南ノ地區ニ於テ解散スルコトヲ禁ス



# 圖要画計合集

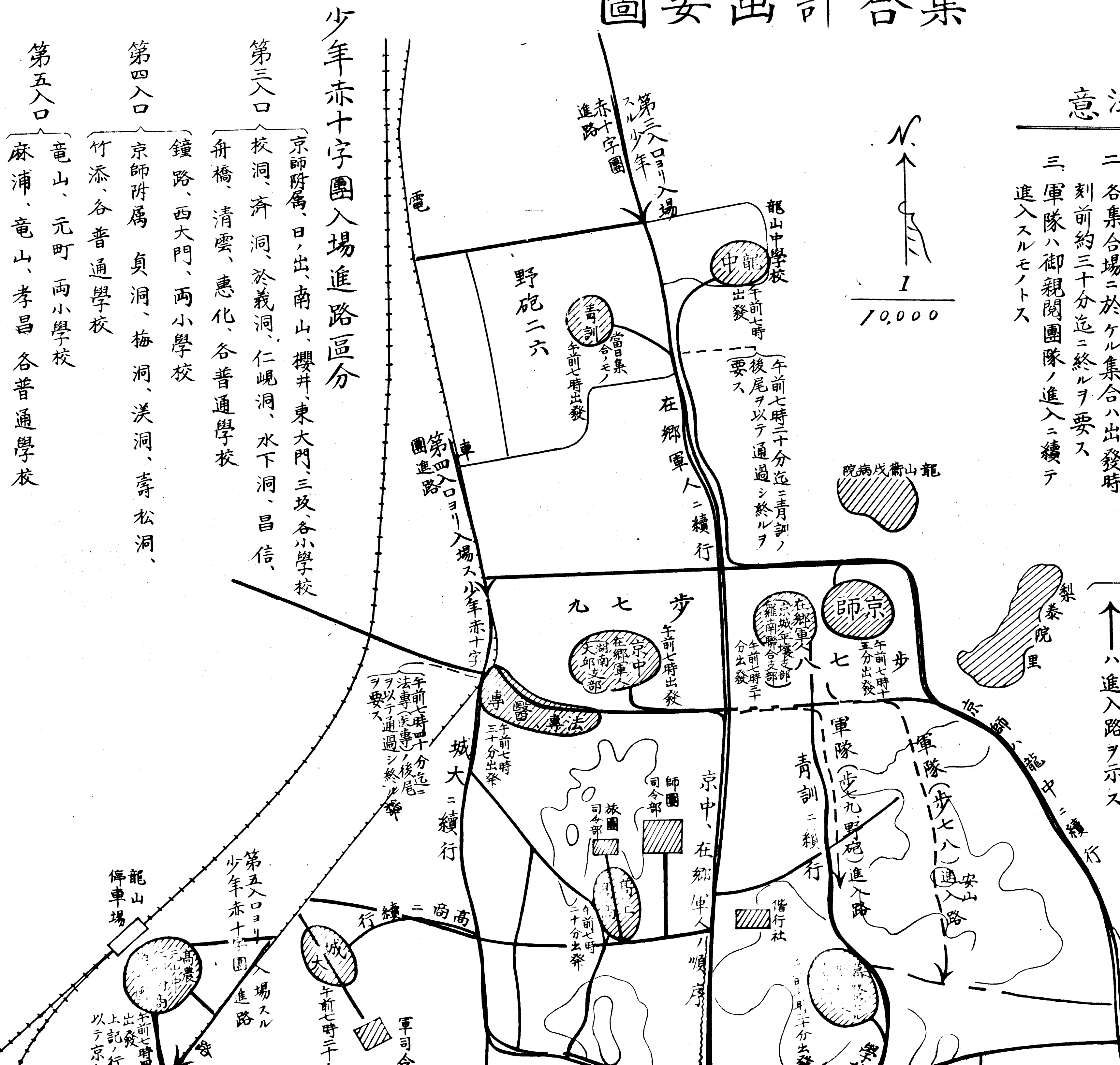
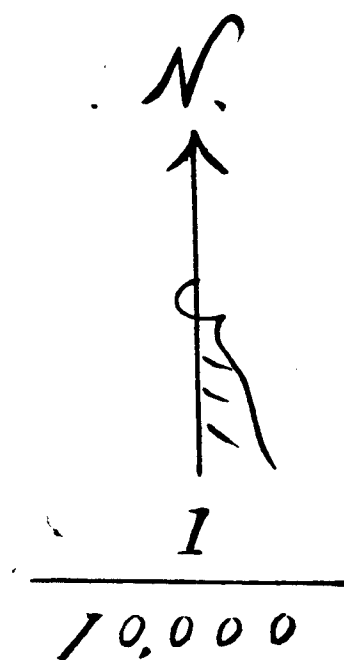
## 注意

- 一、御親閱場ノ集合ハ午前九時迄ニ終ルヲ要ス
- 二、各集合場ニ於ケル集合ハ出發時刻前約三十分迄ニ終ルヲ要ス
- 三、軍隊ハ御親閱團隊ノ進入ニ續テ進入スルモノトス

## 備考

ハ集合場ヲ示ス

ハ進入路ヲ示ス

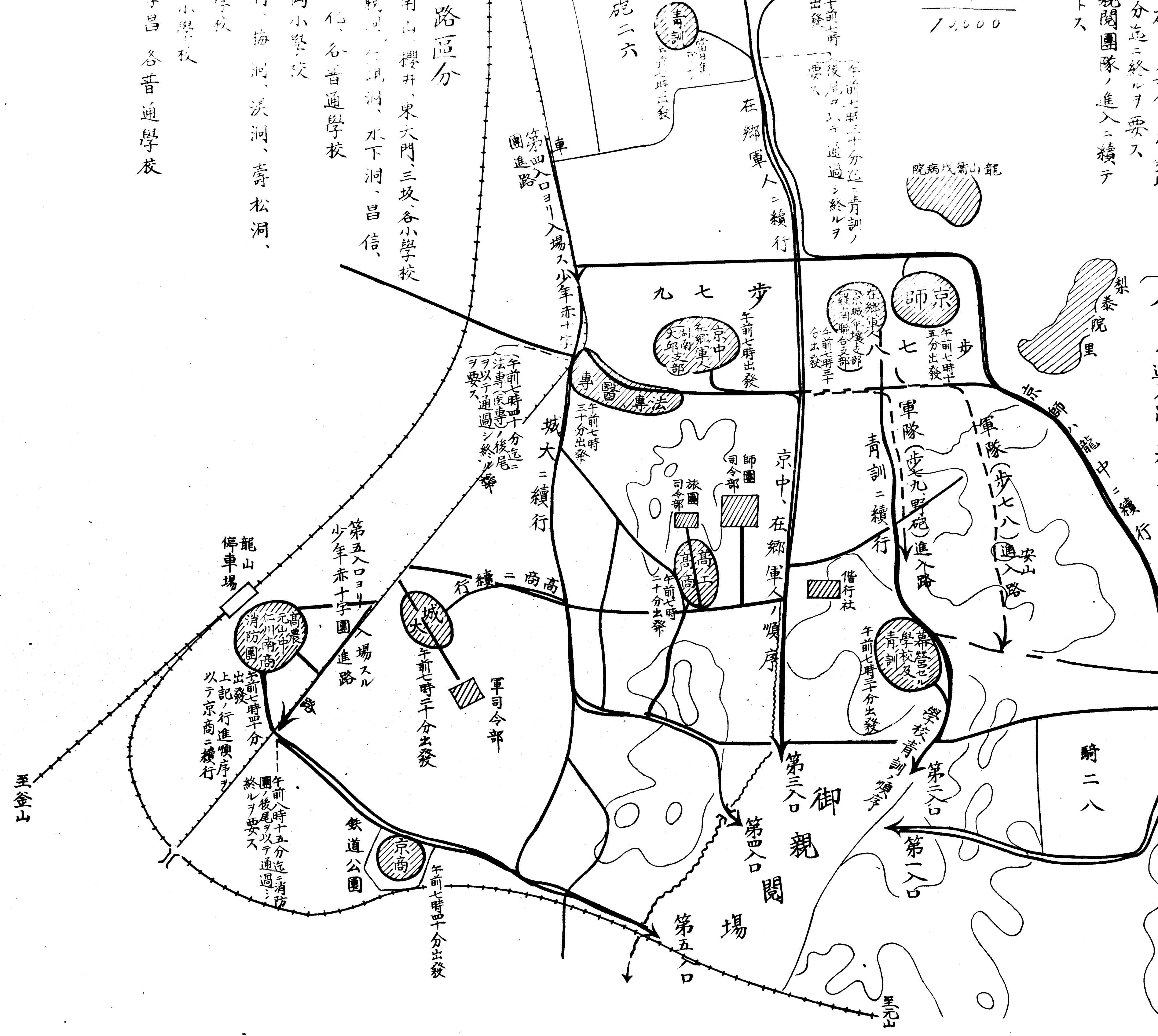


集合ハ午前九時迄ニ  
於ケル集合ハ出發時  
分迄ニ終ルヲ要ス  
視閲團隊ノ進入ニ續テ  
トス

備考

●ハ集合場ヲ示ス  
↑ハ進入路ヲ示ス

1:000



路区分

南山、櫻井、東大門、三坂、各小學校  
北、各普通學校  
小學校  
昌、各普通學校

8 JAPAN 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8

附録第九其一

在郷軍人集團編成表

考 備		尉 大 田 松 副官 佐 大 田 松 長										長團集	
		2 <sub>s</sub>					1 <sub>s</sub>	Ⅵ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ	隊大(中)	支 部 別
		南 羅					平 壤	大 邱	湖 南	京 城		員 人	支 部 別
		惠 山 鎮	會 寧	中 咸	羅 南	咸 興						數 中	隊
		五 六					七 五	二 九 三	三 六	四 六 八	四 六 八	人 員	小 隊
		一					一	二	二	三	三	數 人 員	隊
		一 四 九					七 五	一 四 六	一 六 三	一 五 六	一 五 六	數 人 員	隊
		三					二	六	六	九	九	數 人 員	隊
		四 九					三 八	四 九	六 四	五 三	五 二	數 人 員	隊
		二 五					〇	二 六	二 八	四 二	四 五	幅 面 正	隊
		計										步	形
		一 七 八	二 三	八 四 五	三 五	三 〇 四	一 六 五						
		2 <sub>s</sub> 1 <sub>s</sub> Ⅵ Ⅰ								中 隊 長	大 隊 長	集 團 長	
		⌘ 4P ⌘ ⌘ ⌘ 4P							⌘ 2P ⌘ ⌘ ⌘ 1P ⌘ 2P ⌘ 4P ⌘				
		[ ] [ ] [ ] [ ] [ ]						2	1				
									</				

青年訓練集團編成表

青年訓練集團編成表														
集團長		高橋視學官 隨員 母袋大尉												
番 號	生 徒 數	小 隊 數	人 員	正面幅 P	隊 形	長								
						1	2	3	4	5	6	7	8	9
京 畿 道	一四六	三	四九	三		全 羅 北 道	三	一	三〇	六	道代表 指導員			
全 羅 南 道	七三	二	三五	二		平 安 南 道	五	二	二七	二				
平 安 北 道	二	一	二	五		忠 清 南 道	三	一	三	六				
慶 尙 北 道	三六	二	一八	八		咸 鏡 南 道	一〇	一	一〇	四				
慶 尙 南 道	一七	一	一七	五		計	四〇〇	一四	二二〇	七七				
<p>一 各團體ハ道毎ニ深サ十人ノ側面縱隊トス</p> <p>二 所旗ハ纏メテ各團體ノ前部ニ位置セシム</p> <p>三 分列ノ際ハ左記ノ如ク中隊ヲ編成シ先任者ヲ以テ中隊長トナシ中隊ノ前方四歩ニ位置シ獨立中隊ノ要領ニ依リ敬禮ヲナス</p> <p>四 1(一中隊) 2、3(一中隊) 4、5(一中隊) 6、7、8、9(一中隊)</p> <p>五 配屬スヘキ喇叭手ノ數ハ別令ス</p> <p>六 P○ハ所旗ヲ示ス</p>														

井 龜 官 副 佐 大 賀 大 長																			長團集	
8 <sub>S</sub>	7 <sub>S</sub>	6 <sub>S</sub>	5 <sub>S</sub>	4 <sub>S</sub>	3 <sub>S</sub>	Ⅵ			Ⅴ			Ⅳ		2 <sub>S</sub>	1 <sub>S</sub>	Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ	大隊 立中大隊 番號隊獨若	
寺村少佐	小坂少佐	大上大尉	田中大尉	宇部少佐	乃台少佐	家所少佐			久保田中佐		吉田中佐	新井田中佐	竹中中佐	吉江中佐		山島少佐		大(中)隊長		
釜山中學校	元山中學校	平壤中學校	群山中學校	大邱中學校	龍山中學校	京城中學校			京城師範學校		高等農林學校	法學專門學校	醫學專門學校	高等工業學校	高等商業學校	京城帝國大學 (豫)(本)		學 校 名		
一九〇	一一〇	一二三	八二	一〇〇	九五	九〇			五七		一五六	一九〇	三〇〇	一七六	二五〇	二九〇	三〇〇	數生徒		
一	一	一	一	一	五	五			四		一	一	二	一	二	二	二	中 (平均) 隊		
一九〇	一一〇	一二三	八二	一〇〇	一九〇	二八八			四一四		一五六	一九〇	二五〇	一七六	二三五	二四五	二五〇	數 八員		
																			集 合 隊 形	
30	29		26		29	29	33	28	28	33	23	32	30		33	25	29	28	33	手喇叭
<div>大隊長</div> <div>中隊長</div> <div>校旗</div> <div>中隊長</div> <div>大隊長</div> <div>集團長</div> <div>右翼集團</div>																				
																			要	



備考	合計	大佐															
		12 <sub>S</sub>	VIII	VII	11 <sub>S</sub>	10 <sub>S</sub>	9 <sub>S</sub>	8 <sub>S</sub>	7 <sub>S</sub>	6 <sub>S</sub>	5 <sub>S</sub>	4 <sub>S</sub>	3 <sub>S</sub>	VI	V		
一、隊形ハ中隊縦隊トシ各小隊間ノ距離ハ分列ニ於ケル乙號隊形ニ據ル 二、校旗ハ五名ノ生徒之ヲ護ル 三、喇叭手ハI、V、8sニ配屬セシメ位置ハ大中隊ノ中央後方八歩ノ線トス 四、中隊長(獨立中隊長ヲ除ク)以下ノ幹部ハ教練教師又ハ生徒ヲ以テ之ヲ充ツ 五、茲ハ武裝セル部隊ヲ示ス 六、Sハ獨立中隊ヲ示ス		石光少佐	西本大尉	保田大尉	山澤大尉	音成大尉	田村大尉	佐藤少佐	寺村少佐	小坂少佐	大上大尉	田中大尉	宇部少佐	乃台少佐	家所少佐		
		釜山第一商業學校	仁川南商業學校	京城商業學校	羅南中學校	光州中學校	新義州中學校	大田中學校	釜山中學校	元山中學校	平壤中學校	群山中學校	大邱中學校	龍山中學校	京城中學校		
	六四五	一六七	三七五	五〇二	二二五	一〇八	一四八	一八三	一九〇	二一〇	二二三	八三	一〇〇	九五	九〇		
	四二	一一七	三三五	三一七	一二五	一〇八	一四八	一一三	一九〇	一一〇	一二三	一八	一〇〇	五	五		
		12 <sub>S</sub>	3	3	11 <sub>S</sub>	9 <sub>S</sub>	10 <sub>S</sub>	1 <sub>S</sub>	8 <sub>S</sub>	5 <sub>S</sub>	6 <sub>S</sub>	3 <sub>S</sub>	4 <sub>S</sub>	5	3	1	
	六七六	29	31	24	30	33	31	30	29	26	29	29	33	28	28	33	

大隊長  
(若ハ獨立中隊長)

中隊長

校旗

4P

1P

2P

1P

少年赤十字團編成表

考 備		計	奧 山 仙 三														長團集	
一 各團ハ概十二列ノ側面縱隊トス 一 團旗ハ先頭ニ位置ヒシム		十三	第十三	第十二	第十一	第十	第九	第八	第七	第六	第五	第四	第三	第二	第一	番 分	號 團	
			河野樹八郎	野中齋之助	横山 彌三	岩 崎 清	柴崎 直太	赤堀 董	荒内 貞作	中原倉造	中村多門	石原清熙	朝野菊太郎	大山 一夫	市村秀志	分 團	長	
			惠化普通學校	清雲普通學校	舟橋普通學校	竹添普通學校	孝昌普通學校	壽松普通學校	昌信普通學校	龍山普通學校	麻浦普通學校	梅洞普通學校	眞洞普通學校	漢洞普通學校	赤堀 董	岩崎 清	三好義雄	
			牧野茂方	河野樹八郎	中島 彌一	野中齋之助	花田 武平	横山 彌三	尹 昌 溥	中 尾 豐	三 尾 豐	柴崎 直太	吉原雄四郎	南庄之助	赤堀 董	市村秀志	鈴木文夫	
			四	七	五	六	八	六	四	四	五	六	六	六	六	五	四	
			二二	三〇六	一七四	二六五	三四五	二四二	二四	一〇七	一五〇	二五五	二二	二六	二六	一三	一五	
			四七	四九	五四	五〇	五〇	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	二七	二七	
			六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	

4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4

防金シフ五

消防員集團編入表

考 備		長 團 集																	道 別		番 指 揮 者		人 員		正 面 幅		隊 形			
		佐 少 桐 片 長																	道		京		畿		道					
																			地方		麻浦(義)		龍山(義)		京城(義)		京城(常)			
計																			5		4		3		2		1			
																			朝		大樂警部									
																			松崎英彦											
																			趙鍾春											
																			石川友吉											
																			齋藤長治											
																			田中綠											
																			藤原八十八											
																			全燦											
																			李啓漢											
																			橋口政義											
																			吉田祐四郎											
																			徐淳											
																			武田虎一											
																			17											
																			16											
																			15											
																			14											
																			13											
																			12											
																			11											
																			10											
																			9											
																			8											
																			7											
																			6											
																			5											
																			4											
																			3											
																			2											
																			1											
																			17											
																			16											
																			15											
																			14											
																			13											
																			12											
																			11											
																			10											
																			9											
																			8											
																			7											
																			6											
																			5											
																			4											
																			3											
																			2											
																			1											
																			17											
																			16											
																			15											
																			14											
																			13											
																			12											
																			11											
																			10											
																			9											
																			8											
																			7											
																			6											
																			5											
																			4											
																			3											
																			2											
																			1											
																			17											
																			16											
																			15											
																			14											
																			13											
																			12											
																			11											
																			10											
																			9											
																			8											
																			7											
																			6											
																			5											
																			4											
																			3											
																			2											
																			1											
																			17											
																			16											
																			15											
																			14											
																			13											
																			12											
																			11											
																			10											
																			9											
																			8											
																			7											
																			6											
																			5											
																			4											
																			3											
																			2											
																			1											
																			17											
																			16											
																			15											
																			14											
																			13											
																			12											
																			11											
																			10											
																			9											
																			8											
																			7											
																			6											
																			5											
																			4											
																			3											
																			2											
																			1											
																			17											
																			16											
																			15											
																			14											
																			13											
																			12											
																			11											
																			10											
																			9											
																			8											
																			7											
																			6											
																			5											
																			4											
																			3											
																			2											
																			1											
																			17											
																			16											
																			15											
																			14											
																			13											
																			12											
																			11											
																			10											
																			9											
																			8											
																			7											
																			6											
																			5											
																			4											
																			3											
																			2											
																			1											
																			17											
																			16											
																			15											
																			14											
																			13											
																			12											
																			11											
																			10											
																			9											
																			8											
																			7											
																			6											
																			5											
																			4											
																			3											
																			2											
																			1											
																			17											
																			16											
																			15											
																			14											
																			13											
																			12											
																			11											
																			10											
																			9											
																			8											
																			7											
																			6											
																			5											
																			4											
																			3											
																			2											
																			1											
																			17											
																			16											
																			15											
																			14											
																			13											
																			12											
																			11											

消防員集團編成表

考 備	長 片 桐 少 佐																長團集	
	計	咸鏡北道	咸鏡南道	江原道	平安北道	平安南道	黃海道	慶尙南道	慶尙北道	全羅南道	全羅北道	忠清南道	忠清北道	道	畿	京	道	
		17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
一 各集團ハ深サ約十五人ヲ有スル數列ノ側面縱隊トス 二 組旗ハ各部隊ノ前部ニ位置セシム 三 指揮者ハ各道保安課長不參ノ場合ハ代理者ヲ以テ之ニ充ツ		武田虎一	徐紀淳	吉田祐四郎	橋口政義	李啓漢	全永燦	藤原八十八	田中綠	齋藤長治	石川友吉	趙鍾春	松崎英彦	朝倉昇	大樂警部			
	一三三三	三	四六	九五	四二	五三	五九	七四	六二	二二七	四七	六九	五〇	九六	六〇	八五	八五	七〇
	一〇七	三	五	八	四	五	五	六	六	一六	五	六	五	八	五	七	七	六
<div>道引率者</div> <div>7 6 5 4 3 2 1</div> <div>京城消防署長 組頭</div> <div>集右團翼</div>																		
形																		

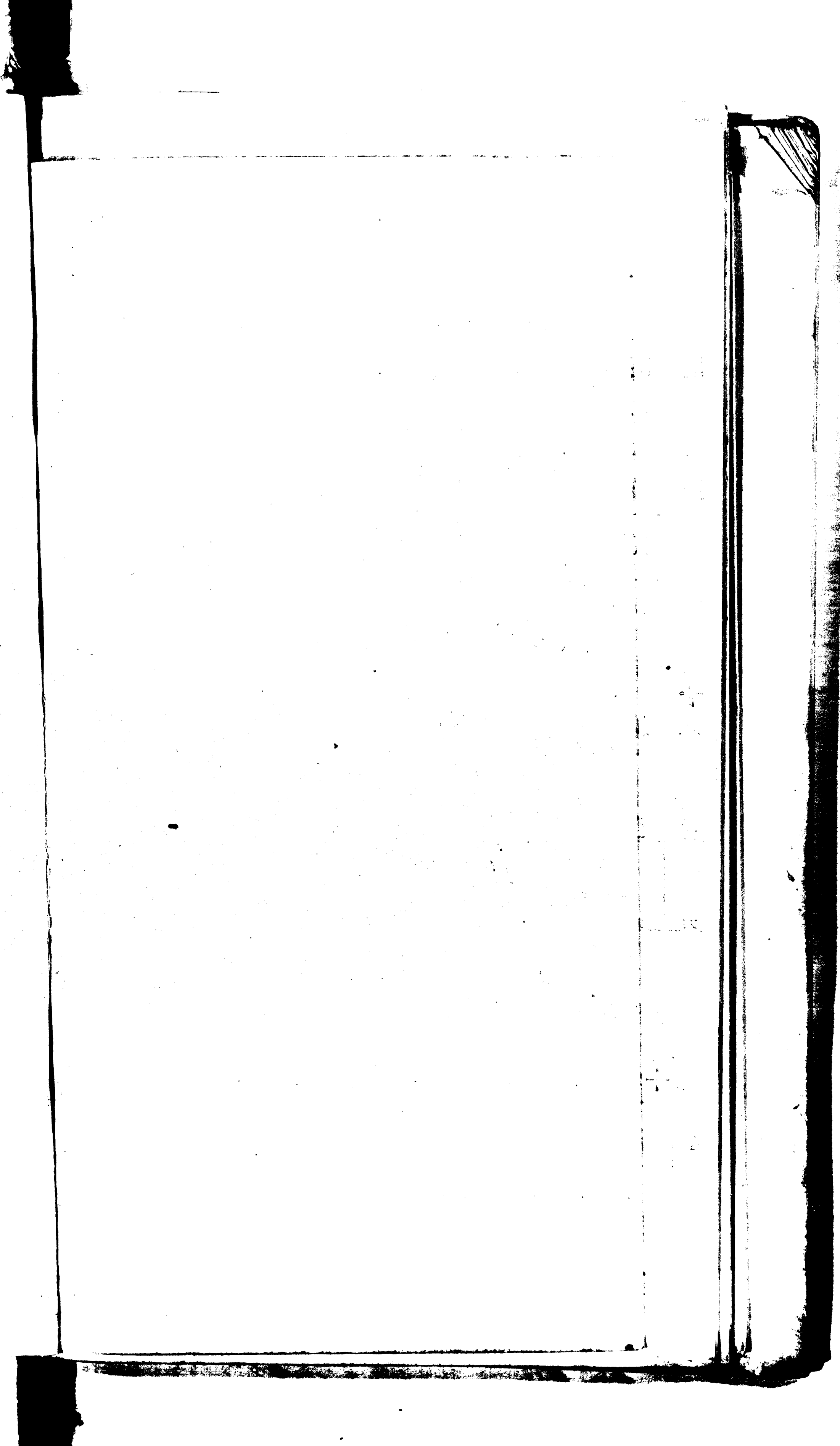
2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3







J



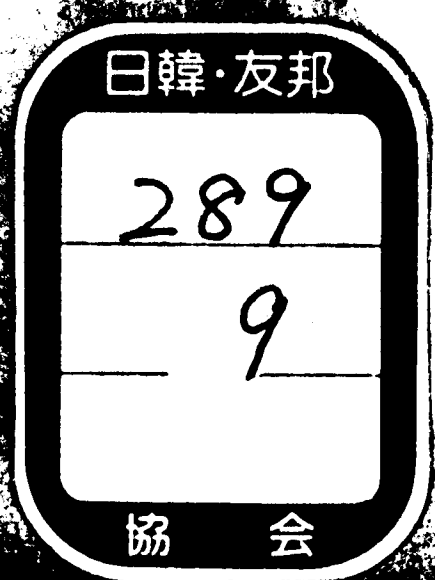
【納所印刷島中城】

289-9

井上角五郎氏述

金玉均君に就て

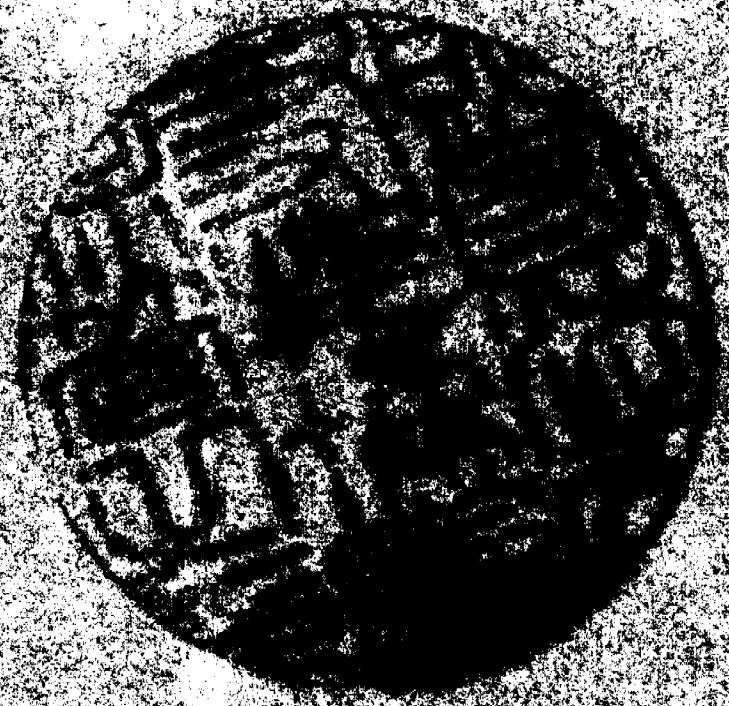
中央朝鮮協會





289.21

72



### はしがき

朝鮮の志士金玉均氏が四十四歳の壯齡を以て上海の客舎に斃れてより本年は四十四回忌に當り、去る三月本郷の眞淨寺に於て有志に依り盛大なる追弔法會が營まれた。依て本會は其の法會に因み四月二十三日懇話會を催し、故人と因縁淺からぬ井上角五郎氏に乞ひ、故人に關する述懷談を聽聞した。井上氏の懷舊一席話は之を活字に現はしても、尙且つ滋味津々として親しく其の馨咳に聞くの思ひあるであらう。

昭和十二年五月

中央朝鮮協會



# 金玉均君に就て

井上角五郎氏述

先達つて駒込の眞淨寺に於きまして金玉均君の四十四回の法事を営みました時に、私が金玉均君の事に就て一言致したことがあります。それで其の事に關しまして中島君から、此處に來て何か話をしろといふ御手紙を戴きましたが、最早私は年も取りましたし、又記憶とても薄くなりましたし、殊に朝鮮の事などに付きまして、私が最初に參りましたのは明治十五年でありまして、其の當時に於きましては朝鮮といふ所は大變珍しかつたのでありますけれども、今日では一向珍しくもありません。従ひまして、私から特に申上げる程の材料もありません。又従つて御參考になるやうな事は申上げられまいと存じますけれども、併しながら友人の生前の事を申上げるといふこ



とは友誼上非常に心持の良いことでありまして、今日は唯金玉均なる者が、尋常一様の人でなかつたといふ事だけ申上げて置きたいと思ひます。

○

金玉均君は其の號を右筠と申して居りました。嘗て朝鮮の政治の改革を企て、失敗して日本に逃げて参りましたが、其の日本に逃げて参りました時には岩田周作といふ名を用ひて居りました。此の岩田周作君が恰度明治二十七年の三月二十八日に、上海に於て刺客の爲に殺されました。其の時に従者も連れて居りながら自分で岩田三和四十年と宿帳に書いて居りますが、私は此の岩田三和といふ名を用ひたことに付て非常に感慨の深いものがあります。そこで今何故に此の金玉均君が三和と稱して、之を自分の號として居つたかといふ事に付て申上げて見たいと思ふのであります。

偕て話は洵に古うございますが、私は郷里を出て福澤先生を頼つて参りました。先生から慶應義塾に通へと言はれまして、先生の食客となつて慶應義塾に入りました

が、此の頃に福澤先生は新聞でも、演説でも、或は人と話をする時にでも、どうしたならば日本の國の獨立が出来やうか、日本といふ國が何時までも日本といふ名を存して立行くにはどうすれば宜いかと、恰も口癖の様に日本の國の獨立の事に付て唱へられたものであります。福澤先生の友達の後藤象二郎さん——後藤さんは後に伯爵になりましたが、此の後藤さんも亦福澤先生と同じやうに、どうしたら此の國が獨立し得るであらうかといふ事に付て頻りに唱へて居りました。さういふ關係で福澤先生と後藤さんとは大變仲が良くなりました。私は此の後藤さんの秘書役といふことになつたのであります。それで私は其の慶應義塾に通ひ、傍ら後藤象二郎さんの秘書役として時々後藤さんの所に行つて居つたのであります。そして此の後藤さんと福澤先生とは一週間に二度或は三度、場合に依りますと毎日の如く出會つて、夜を耽かして語り合ふ事柄は、どうしたならば日本の國が獨立出来るであらうかといふやうな問題であります。今日諸君はどうしたならば日本が獨立出来るやうかといふことを心配して居る

と言へば不思議なやうに御考へになるでありませうが、其の當時はさういふことが眞面目に論ぜられてゐたのであります。それで其の頃は福澤先生も非常に熱心な獨立論者でありましたが、後藤さんも亦洵に熱心なる獨立論者でありました。其の他福澤先生や後藤さんの友達には寺島といふやうな人があり、或は副島さん、大隈さん、伊藤さん、井上さんといふやうな人がありましたが、是等の人々は皆日本はどうしたら獨立が出来やうかといふことを、毎日のやうに寄つて相談して居つたのであります。それで私は福澤先生の食客となり、後藤さんの祕書役となりましてから丸二年間ばかりは、福澤先生、或は後藤さん等から左様な話を漏れ聞きまして、あ、日本といふ國はそんなに危いのかなと考へながら勤めて居つたのであります。

其の頃揃ひの白衣を着けた僧侶が三人福澤先生の家を訪ねて來ました。是が明治十四年の年末であります。此の三人の白衣の僧侶は、後で一人が金玉均、一人が徐光範それから今一人が京都本願寺の朝鮮派出布教師であつたといふことが分りましたが、

福澤先生は早速此の三人の僧侶を引入れまして、正面には福澤、後藤の兩先生が座しそれに向つて金玉均、徐光範、布教師の三人が座を占めました。それで其の初めの會合の時には先づ布教師の方から朝鮮の現在はどういふ有様であるかといふことを日本語で話しました。そして又其の時に布教師が金玉均君を福澤先生に紹介を致しました。曰く「此の金君は朝鮮では兩班中の系統、高い門地に生れ、學は陽明を修め、禪學に志し、進んで文明開化の主義を唱へ、朴泳孝、洪英植、徐光範の同氣相求むるの仲間なれども、現在は李熹王殿下の統治にして、政權は戚族閥家の手に握られ、大小の兩班は互に之に附和雷同して、事大を主義とし、支那の執權李鴻章の意を迎へて専ら支那に屈從するのであります。別に大院君李昰應とて王の生父あり、夙に鎖國主義を唱へて、兩班中の不平なるもの、平民中の負商祿商を糾合して閔氏に對抗するのであります。然るに金君が辱くも王命を受けて福澤先生を訪問することになりました」と述べて尙ほ「金君は斯く事大黨、鎖國黨の間に挟まれて頭角を顯し得なかつたが、國王

殿下には蓋し王族戚族の絶えざる軋轢に耐へ兼ね給ひけん、特に金君に外衙門の協辦を命じ給ひ、密に内命して、日本の福澤先生に往いて文明開化の意見を聞いて來れと申し付けられたのであります。然るに此の事が外間に洩れて、事大黨も鎖國黨も大いに警戒し、危険であるから山間の寺院に隠れ、斯く薙髮して遁れて此の布教師に誘はれた次第であります。」斯様に申しまして、其の布教師は金玉均を福澤先生に紹介したのであります。

私は其の當時福澤先生の家に居りましたから、當時の事情はよく知つて居ります。福澤先生は布教師から其の金君紹介の言葉を聴き終りますと、先づ布教師の退座を促して、自ら筆を取つて、日本及び歐米各國の現状を漢文で以て書いて金君に示されました。之を見ました金玉均君は、今朝鮮は獨立國だと言つて居りますけれども、支那が内治外交の事に干渉をして、支那の屬國にしようとして居ります。先んずれば人を制すとか申しますから、茲で完全に獨立の出來る戦争を起したら如何であらうかと

思ひますがと、福澤先生に向つて申しました。所が其の時に福澤先生は——勿論言葉はこんな言葉でなく、皆漢文で書かれたものであります——いや、それは間違ひである、それは待つた方が宜い、今は其の時機ではない。それよりも人民に生活の安定を與へて、教育を普及して、以て靜に國力の伸展するのを待つが宜からう、さうすれば求めずして獨立は得られるであらう。斯ういふ風なことを書いて金君に示されました。それから東洋の運命は朝鮮、支那、日本の此の三國が連絡し、提携するのでなければ、遂に歐米の壓服する所となるを免れぬであらうといふことを書き示されて、此の三國連絡といふものに非常に力を籠められましたので、金君は大變に喜びまして、實に三和だ、今や三和といふことでなければならぬといふことを申して其の日は別れたのであります。是は何れもお互に斯ういふ言葉を交したものでなく、福澤先生と金玉均君との漢文の應答であつたのであります。

それから明治十四年の末から十五年に掛けて金玉均君は東京に滞在して居りましたが、其の中に明治十五年の七月に大院君の亂と稱しまして、日本の公使館は焼かれ、又日本から軍隊の教師に雇はれて行つた人が殺され、其の他在留して居た日本人が多数殺されたのであります。そこで應て日本と朝鮮との談判が始まつた。所が其の談判に先んじて、支那は澤山の兵を京城に送り、遂に大院君を捕へて支那に連れて行きまして。さうして其の後再び元の閔氏に政權を譲つて内治外交を勝手次第にやりました。さういふやうな事で、日本の花房公使が仁川まで遁れて、談判があるといふので京城に入らうとしても京城に入れない。そこで中々談判も始まらないといふ始末であります。其の時に金玉均はどつちにも奔走して仲に立ちまして、一生懸命に朝鮮と日本との間の斡旋に奔走したのであります。此の金玉均の奔走の事に付ては朝鮮政府でも非常に喜ばれ、殊に朝鮮の國王は、内命を下して福澤先生を訪はした位でありますから大變に喜ばれた譯であります。日本の政府に於きましては井上外務卿、伊藤宮内卿の

如きは金玉均を近付けて色々と言を聽いて、大變に金玉均を信用したのであります。さうして幸に日本と朝鮮の講和談判も運びまして、それから間もなく朝鮮政府から日本へ謝罪使を送つて参つたのであります。

所が此の謝罪使を送ることに付きましては、朝鮮政府内にありましては中々に其の候補者が多うございまして、其の人選などの事に付ては朝鮮政府内で非常に纏れがあつて、誰をやるかといふことが中々決定しない。そこで斯く當該政府の官吏が謝罪使の人選を爲し得ない以上は、此の人選は之を國王にお頼みする外に途はないといふことで、遂に國王が獨裁でも決めることになりましたが、其の際朝鮮の國王は金玉均君を御選びになりました。其の時國王殿下に於かれては、正使を朴泳孝君、副使を金晩植君、従事官を徐光範君とそれ／＼御決めに成り、金玉均君に表面は日本視察と稱して、其の實謝罪使の監督を命ぜられたのでありますが、之を以てしましても金玉均君の國王殿下から受けて居つた信用の程が知られるのであります。



それで此の金玉均君が謝罪使の監督となつて日本に來ます前に、金玉均が國王にも目に掛つた時に、國王に奏上致した薄いものですが紫版に刷つた書物があります。それは興亞策と題して金玉均君の拵えた物でありますが、それを國王に奏上しました。要するに亞細亞を興すの策は他なし、朝鮮と、支那と、日本と此の三國が從來の行懸りを一切棄て、相互に和睦一致して、西洋の東の方に段々と押寄せて來る勢を防ぐより外はありませぬ、といふ風なことが之には書かれてある。さうして先程も申し上げましたやうに、金玉均君はそれ迄自分の號を古筠と申して居りましたが、其の時に此の古筠といふ號を改めて金三和と稱した、此の三和といふ號を付けたのは即ち此の時の事であります。斯様にして福澤先生から三和の説を聴き、それを自分の意見として國王殿下に申上げ、遂には自分の號とした位で、頻りに金玉均君は此の三和といふことに惚れ込んで、東洋の平和は三和に依るの外なしといふことを熱心に論じたのであります。

そこで只今も申上げます如く、朴泳孝君が正使、金晩植君が副使、徐光範君が従事官としてそれ／＼謝罪使が日本に参り、聽て謝罪使の任務も済みまして、それ等の人達が將に歸らうとした時に、井上外務卿の斡旋で、横濱の正金銀行から金十七萬圓を金玉均に貸したのであります。尤も正金銀行には福澤先生門下の出身たる小泉信吉君も居りました。要するに是は井上外務卿が金君を信用した結果に外ならぬのであります。そこで金君は僅かなものでありますから謝罪使一行の費用を拂ひまして、其の残りの分を悉く朝鮮の改革、朝鮮を文明開化に導く費用に充てたのであります。そして金君は直ぐに福澤先生の所に行きまして、朝鮮を改革して文明開化に導くにはどうしたら宜しいかといふことの相談を致しました。其の時は福澤先生を中心に謝罪使等が皆取巻いて、彼此れ一週間も掛つて相談したのでありますが、其の際福澤先生の決められた條件といふものは、第一に、朝鮮の中央、地方を問はず全國から有爲の青年を選び出して之を東京に留學させること、第二には、京城に於て新聞を發行するこ



と——御承知の通り、其の當時朝鮮にはまだ新聞といふものが發行されて居なかつたのであります——それから第三には、京城に於て軍隊を訓練すること、この三箇條を福澤先生は金玉均君等一行の謝罪使に示しました所が、謝罪使等は直ちにそれに同意しまして、其の通り方針を決めたのであります。

そこで金玉均等は取敢へず朝鮮から若い者を選んで、澤山日本に送りました。そしてそれ等の若い者は、士官學校と慶應義塾にそれ／＼入學したのであります。それから又新聞の機械を注文し、新聞記者としては牛場卓造、高橋正信といふ二人の者が雇はれて参りました。又軍隊の訓練に付きましては松尾三代太郎といふ人と、原田一といふ人と——一人は騎兵大尉で、今一人は歩兵中尉位の人であつたのであります。此の二人が加はりました。さうして恰度其の年、明治十五年の十二月二十八日に發つて行き、又日本の方からは竹添といふ人が公使になつて赴任しましたが、其の時に金玉均君並に謝罪使等も皆歸つて行きました。

私は此の時福澤先生の家に居りまして、慶應義塾をやつと卒業致しました頃であります。そして其の當時後藤象二郎さんは海外視察の爲に、外國に出られて居りましてお留守でありました。即ちお留守の間の出來事であつて、後藤象二郎さんの夫人が、「角さんも——夫人は私の事を當時角さん／＼と申して居りました——朝鮮へ行けるのですか」と言はれる。「いや、別に福澤先生からは何も聽いて居りませぬが……」と答へた所が、後藤さんの夫人が福澤先生の所に行つて「私が旅費を出すから、角さんも朝鮮へやつて下さい」といふ風に頼みますと、福澤先生も「私もそれでは旅費を半分出させう」と言はれて、そこで兩方から旅費を半分々々出して貰つて、井上は朝鮮見學といふことで、他の人と同行させやうといふことで、私はそれで以て他の諸君と共に朝鮮に行くことになつたのであります。勿論私は當時學校を出たばかりで、世間の事などに付ては一向何等の經驗など有つて居りませんでした。幸ひ後藤象二郎さんの夫人と福澤先生とが仲に入つて下さつて、私も愈々朝鮮へ行くことになつたの

であります。

斯く致しまして、私が愈々朝鮮へ向けて發つ時分に、福澤先生は私に向つて、懇々と色々なことを説いて御話になつたのであります。朝鮮へ行つたら食物に氣を付けろとか、或は餘り酒を飲んではいかんどとか、色々御注意旁々御話になつたのであります。私が茲に特に申上げて置きたいと思ひますのは、先刻私が福澤先生の誕生百年に就て、其の誕生を記念する爲に書きました本を持つて來て居りましたが、それにも書いて居りますやうに、福澤先生は色々な事を私に話されたのであります。其の福澤先生の言はれました言葉に、吾々の東洋の天地に於ける抱負は、後藤先生と數年來話合つて居つた節々を聞いて居つたであらうから、それでもう解つて居るであらうが吾々は連も太平洋中の此の孤島に蟄居して居ることは出来ない、大陸に足を掛けねばならぬ。それには固より他國の領土を横領するとかいふやうな意味は持たぬけれども、人民の生活を安定し、人民の教育を普及して、據つて以て東洋の天地を一の勢力の下



に致して其の平和を得ねばならぬ。斯様にして西力東漸の勢を防ぐのが吾々の抱負である。深く此の事を心に銘して忘れないやうにして貰ひたい。朝鮮が其の手始めである。其の他の事は時に應じて申し送るけれども、支那には全國人民に普及するやうな、日本の「いろは」に似たやうな文字がない、是は大變に残念であるが朝鮮には幸に諺文がある、是で我國の片假名交じりのやうなものを作つて速かに使つて貰ひたい。それから前向ふに行つたら、何とかして國內を巡回して、人情とか、風俗とか、山河の形勢、土地の肥沃の有様などを觀察して、それから又地方の區劃はどうなつて居るか、行政の組織はどんな風になつて居るか、租税の徴收の仕方はどうであるか、若し調査が出来るならばさういふ事を調べて貰ひたいものである。是がお前の朝鮮へ行くに付ての一方の仕事である。斯ういふ風に福澤先生から言はれたのであります。

○

斯して私は一行と共に朝鮮に参りました。参りました所が、私共の一行と相前後し

て謝罪使が朝鮮に歸りますと、朝鮮の國王も大變金玉均を信用せられ、又従つて朴泳孝、金晩植、徐光範も政府から信用せられたのであります。そして朴君は漢城判尹を命ぜられ、新聞創刊、軍隊訓練の準備に著手し、金君は更に外衙門の協辦に任ぜられて外交の事務に當り、一時は兩君共に相當の勢力を得たのでありますけれども、間もなく支那の兵營、又事大黨より排斥を受けましたので、朴君は退いて廣州留守に止まり金玉均は密かに日本に逃げて來たのであります。其の時に私と同行しました牛場、松尾、高橋、原田といふ人達は、もう是ぢやどうも朝鮮に居ても見込は無いから歸ると言ひ出した。そこで私は「さう歸ると言つた所で、今來たばかりで見込が無いから歸るといふのは餘りひどいぢやないか」と言つて反對しましたけれども、併しどうしても歸ると言ふ、お前一人殘れと云つて——私は其の時が恰度二十三歳の學校を出たばかりの青年でありますから、何も他の事は考へない、恐ろしいとか、危いかいふやうな念慮のある者ではありませぬでしたから、それぢや俺一人殘ると云つて、皆に別

れて私一人殘つたのであります。此の時に新聞の活版職工の植字係長として日本人の眞田といふ者と、それから新聞機械の修繕若くは活字の不足を鑄造する爲に三輪といふ者を連れて行つて居りましたが、此の二人が「井上さんのやうな若い人一人殘して置いて、年寄つた人が皆歸るなんといふことは酷い、吾々こそ此の時に踏止まつて、生きて居らうが殺されやうが福澤先生に喜んで貰はう」といふので以て、此の二人と私と三人が京城に踏止まつたのであります。

それから私は此の儘々では仕方がないと思ひまして、頻りに奔走を致しまして、色勢力のある人や、それから其の他事大黨でもない、鎖國黨でもない人達と交際を始め、種々の危険をも忍んで頻りと奔走して居ります中に、遂に宮中にも出入するの機會が得られました、其の上に私が福澤先生の弟子であるといふ肩書の爲に大變に持て又信用も得られました結果、外衙門の顧問として傭ひ入れられたのであります。それから次いで金晩植君が漢城判尹となり、其の下に博文局を置きまして、私は其の主宰



といふ名義で囑託となり、そして漢文のみの新聞を創刊することになつて、其の準備に掛かつたのであります。それから私は此の新聞を發行するに付て、日本人としては私一人ですから、兩班と稱する階級の若い者を選抜して、其の者に主事又は司事といふ官名を授けて、之を記者に使つて、私は其の記者の監督をして愈々漢城旬報といふ新聞を發行することになつたのであります。其の中に段々と王宮に近付くことが出来まして、御承知の通りに、只今でも諸君御覧になるでせうが、朝鮮には擧丸の無い男子が澤山ありまして——宦官と申して居ります——其の宦官に知人が出来て國王にも時々お目に掛かることが出来たのであります。それから私は表面上は外衙門の顧問といふことになりましたが、恰度此の頃朝鮮の政府に於て三大顧問と稱して居りましたのは、獨逸のモレードルフと、支那の王闔明と、それから日本の井上角五郎といふことになりました、不思議に若い人物が出来たのであります。斯して外衙門の顧問を兼ね、博文局の主宰を囑託せられ、漢城旬報といふものを發行することになつたのであ

りますが、是が恰度牛場君や松尾君が、見込が無いから歸ると言つて歸りましてから六箇月目の事でありました。斯様にして兎に角他の人々は皆歸りましたけれども私が一人居残つて、福澤先生の弟子が新聞を始めて居るといふだけの名義は維持した譯であります。

斯様にして漢城旬報を發行して居ります中に——此の漢城旬報といふのは御承知かも知れませぬが、實は官報でありまして朝鮮の國內の事を書き、又政府からの命令を戴せ、併せて海外近時といふ表題で外國の有様も書いて居りました。其の外國の有様を書くのに、どうも日本最良であるとか、支那に反對であるとかで、支那人から時々襲はれて大分危ふい目に遭つたのであります。所が或る一日偶然の事で支那の兵隊が物を買つて代を拂はないといふことがありまして、それが評判になつて、城内で支那兵は物を買つて代を拂はないことに付て、私は漢城旬報の第十號の紙上に於きまして華兵横暴といふ題で以て大いに支那兵の横暴を論じたのであります。そこで支那の兵

營からは非常に反對をされるし、朝鮮の政府では皆あんな事を書いてと云つて、びくびくして居る所へ李鴻章から使ひが來まして、元來漢城旬報といふものは官報ぢやないか、官報に支那兵の惡口を書立てるといふことは宜しくないではないかといふ抗議である。そこで私は、それは私の仕業である、朝鮮の政府が悪いのでもなく、又朝鮮の人民も悪くはないのである、皆私の仕業であるといふので、據んどころなく漢城旬報を辭職して日本に歸つて來たのでありますが、それは恰度明治十七年の五月の事でありす。

○

偕て此の明治十七年の五月に日本に歸つて來ますと、恰度後藤象二郎さんも海外視察から歸つて居られました。そして金玉均もまだ滞在して居りましたので、そこで福澤先生、後藤さん、金玉均君、是等の人々と日々集つて色々な話をして居りました其の中に井上外務卿から私に一寸來て呉れといふことでありました。そして井上外務

卿に會ひました所が、其の時井上外務卿から、どうか急いで朝鮮にもう一度行つて呉れないかといふことを頼まれました。そこで私は早速福澤先生や後藤さんなどと相談しまして、其の人達の同意を得て朝鮮へ參りましたのが恰度明治十七年の八月の事でありました。所が私が此の十七年の八月に東京を發たうとする時に號外が出まして、佛國が支那と戰端を開いて、福州馬尾の砲臺を攻撃した、それが爲に福州馬尾の砲臺は陷落したといふことでありました。それで私が急いで朝鮮に發つて行つた理由は何であつたかといふことは、大概諸君の御想像がお付きのことと思ふのであります。さうして私が京城に發つて行くと同時に、恰度歸省して居られました竹添公使も發つて行きました。金玉均も朝鮮に歸りました。又朝鮮から日本の士官學校や慶應義塾に留學して居りました生徒も、悉く同時にあちらに歸つて行つたのであります。

所で京城に行つて見ますと、是まで居つた支那兵の數が半分位に減つて居りましたが、それに付て支那は佛蘭西と戰さをするのに逆も朝鮮など守つて居れない、それ



だからこんなに支那兵の数が減つたのだといふ評判が立つて居りました。それから日本から續々と皆やつて来るのは、今に日本が朝鮮を攻める爲であらうなどいふ評判も非常に盛んに行はれて居りました。御承知の通り朝鮮人といふものは事大主義と申しますが、如何にも事大主義で、支那に頼る、支那に頼らなければ亞米利加の公使館に行く、或は露西亞の公使館に行くといふ風な工合に、何處かの國に頼ることのみを考へて居る。私の行つた當時には總ての朝鮮政府の高い地位の役人は米國黨とか、或は露西亞黨とかいふやうな譯で、隨て又日本黨といふやうなものも出來まして、金玉均、朴泳孝、徐光範、洪英植といふやうな者は、日本公使館に行きますと案内無しに入つて行つても叱られもしないといふ程でありました。當時朝鮮政府では晝は晝寢をして居るか何かは知りませぬが、遊んで居りまして、夜王様の所へ出て行くのが習慣になつて居りましたが、皆各國の公使館や領事館に出入りして、其處で聞いた事を好い加減に拵え上げて王様に申上げる、そして王様はそれをお聽きになるのを樂みにな

さるといふやうなことになつて、之を稱して別入侍と申しますが——別入侍といふのは此の頃に始まつた言葉だと思ひます——それで私の所に宦官が出て來て、斯ういふ事を亞米利加の公使館で聞いた、あゝいふ事を露西亞の公使館で聞いたが、それは本當か嘘かといふやうなことの聞合せが絶えずやつて來るのであります。それから又私にも宮中に出て來いといふので、他の人間と同じやうに夜宮中に出て行つたことも其の頃度々でありました。そして是が段々と進んで來て、遂にあの有名な金玉均の内亂が起つたのであります。

其の頃洪英植に仕事がなかつたのを、王様が郵政局を拵えるからといふので、洪英植を郵政局の總裁に命じたのであります。そこで政府の役人達が外國の公使、領事などを開業式の祝と稱して十二月の四日に郵政局内に招きましたが、是が抑々内亂の始まりでありまして、即ち皆の者を郵政局に招いて置いて——郵政局の隣に藁屋が三四軒ありましたが、それにダイナマイトを仕掛けて置いて之を爆發させようとしたので

あります。其のダイナマイトの仕掛には福島春秀といふ者を連れて其の仕掛けに出掛けた譯であります。所が其の十二月の四日の夜おそく十時頃になつて、私の居住して居りました所へ人がやつて來まして「どうしたのだ、まだダイナマイトの爆發の音がしないではないか」と言ふ。「イヤ、實はダイナマイトは仕掛けてあるのですが、幾ら火を付けても爆發しないのです」そんな馬鹿な事があるか、ダイナマイトが爆發しなければ、あの家に皆火を付けてやれ」と言ふ。そこで今度は使ひの者が行つて、其の空家に火を付けて三四軒焼いてしまひました。そこで是が焼け出しましたので宴會に來て居る客が皆驚いて逃げて出て來る所を暗殺に行きましたのが宗島和作といふ男でありました。又其の中には中村四郎兵衛といふ警察官も居りましたし、其の他金太郎といふ車夫の強い奴も居りましたが、中でも宗島が自分の手柄にしたいが爲に前に出て行つて関泳翊を斬付けました。所が関泳翊は死にませぬ。そして、関泳翊がわいわいと言つて逃げ込んだものでありますから、もう他の客は宴會の場所から出ようと

も致しませんでした。

そこで當時其の宴會の場所には郵政局に備はれて行つた日本人の官吏が居つたのでありますが、其の人は事情を知らないものでありますから、ピストルを取出してお客の保護に當りました。さうすると暗殺者も今度は其のピストルに恐れて何にも働きをしない。そこで金玉均、朴泳孝は是では相成らぬといふので飛んで參りまして、遂に王宮に馳付けて行つて、王様のお寢間へ行つてどうも支那兵が騒動を起して斯様な有様になりましたから、早く御立退き願ひたいと云つて立退を奏上したのであります。それから臆て御立退きになることになりましたが、恰度王様が王宮を御出になる時分にダイナマイトが爆發しまして敦義門といふ門を爆破致しました。是は洵に工合良く壞れて、私等の住つて居ります家の障子の硝子戸がたゞ／＼震へる程でありました。それから恰度李載先といふ人の家へ王様が御著きになる頃に、竹添公使が日本兵を率ひて王様を護衛して居りました。さうして其の護衛の中を王様が御出ましになりました

てそれから誰々来い／＼と言つて御召しになる、そこで皆が行く、門を潜つて日本兵の圍んで居る中に入りますと、日本に留學に来て居た書生等が刀を持つて居つて片ツ端から斬殺してしまつたといふ、それが即ち金玉均、朴泳孝の亂の最初でありました。其の翌日は幸に政權も取れ、又兵權も手に入つて、洪英植君は左議政となり、金、朴の兩君は承旨となり、兵權も亦手に入れて、遂に改革の政見を發表したのでありますが、其の政見には人材を用ひるには門地は問はない、貴民は同等にして課税賦課は均一なるべしと宣言して居つたのであります。さうして其の晩には遂に王様を王宮に御還し致しましたが、其の時もやはり日本の公使が護衛して參つたのであります。

此の時の事を申しますと、非常に残念な話でありますが、御承知の通り朝鮮では其の當時、兵隊の月給を二月も三月も拂はないといふことは珍しくなかつたのであります。それで其の時も實は拂つて居なかつたものでありますから、兵隊達は朴泳孝、徐光範に向つてどうか月給を拂つて下さいと言ふ、其の時金玉均君は竹添公使が金を用

意して呉れて居ると思つたのでせう、私は金を用意して居るぞといふことを、暗々裡に竹添さんから言はれたのも承知して居ります。所が竹添さんの手許には金が無かつた。そこで朝鮮の兵隊が給料の支拂ひを要求するのには、朴泳孝も、徐光範も拂ふことが出来ない。そこで此の朝鮮の兵隊の或る一部の者が、支那の兵營に馳込んで行つて裏切をして、支那兵を案内して王宮に攻込んだのであります。それで王宮内では一回は日本兵と支那兵とが戦ひましたが、二回目には日本兵は退いて、王宮は占領せられて王様も生捕られました。同時に洪英植は其處で殺され、又日本公使も、日本兵も金玉均、朴泳孝も逃げて、其の翌朝京城から仁川まで遁れまして、それから私は朴泳孝と金玉均を連れて日本へ歸つて來たのであります。是が恰度明治十七年の十二月七日の事でありまして、是で金玉均の騒動といふものも終局を遂げた譯であります。

○

斯様に致しまして金玉均は日本に亡命して、日本に於ては岩田周作と申して居りま



したが、どうしても井上馨さんが憎くてならない。人を煽動して戦争をさして置いて相當の理由があつて敗けたのに、敗けて來たからと云つて、自分は晝寢をして居ながら會ひに行くと思つて會つて呉れない、實に怪しからぬといふことで、金玉均は頻りに井上外務卿の惡口を叩いたのであります。そして人に會ふ毎に之を吹聴したものであります。それが爲に小笠原島にも流され、北海道にも送られして、十年間といふものを斯くして暮したのであります。其の十年間を過した時が恰度明治二十七年、彼が上海に赴いた時であります。

此の金玉均君が上海に行きますことに付ては、今日までも書いた物が色々残つて居りますが、何故金玉均が上海に行くことを決心したのか誰にも金君は話さない。私共にも極く祕密にして話ませんでした。所が或る晩もそく私の所に参りまして「今日は死別れに参りました、井上さん、死別れといふのはどういふことか、事情は福澤先生に詳しく申上げましたが、實は三和の主義を以て李鴻章を説かうと思ふ、私が支那に

行つて李鴻章に面會が出来れば——或は面會する前に殺されるかも知れない、或は其の前に死ぬるかも知れない、或は又面會中に殺されるかも知れない、勿論面會後には生きては居ないだらうと思つて居りますが、兎に角日本、支那、朝鮮の三國が共同一致して西洋の勢を防ぐのが目下の急務で、東洋平和の原因は茲にあるのだといふことを李鴻章に向つて説かうと思ふ」と。「それでは其の事を福澤先生に話したのか」と申しますと「福澤先生は昔は到頭支那へ行つて死ぬのかと仰しやいました、死ぬのは私は覺悟の前であります、今日は唯死別に來ました」斯ういふものでありますから「それでは福澤先生もさう言はれた以上は留めても仕方がない、死に、行く前に後藤さんに會つて行つたらどうか」斯う申して別れましたのであります。さうして恰度其の翌日發つて神戸に行き、それから何の爲か大阪に少し滞在してから、神戸を發つて上海に行つたのであります。

所が金玉均の連れて居りました朝鮮人の中に、どうも怪しい者があるからといふこ

とが政府の方でも氣が付き、又友人の方でも氣が付きましたので、金玉均の上海行を差止めたらどうですかといふことで福澤先生の所へ言つて來るのを、先生は電信で上海の郵船會社の支店や領事館に宛て、注意をなされたが、其の中に上海に上陸しまして、岩田三和四十年と自分で宿帳に書いた日の夜、遂に志を果さずして殺されてしまったのでありますが、最初福澤先生に會つた時に三和の必要を論じ、其の後三和の文字を自分の號となし、最後に遂に宿帳に自分自ら岩田三和四十年と書いたといふことを、私共當時の友達として考へると洵に氣の毒でならない、私は暫く此の事は口外せずに居りました。だがどうもそれが氣の毒でならない。彼は中々の豪傑であつた、一旦思ひ込んだ事は之を貫徹する爲に、尊い生命まで斷つたといふだけの想像が私共には付くのであります。福澤先生も其の當時「嗚呼、到頭死んでしまつたか、自分にも弟子は澤山あるが、あれ程信用して呉れる弟子は餘計ない」と言つて嘆息せられたのであります。

それから金玉均君の死骸が朝鮮政府に引渡され、朝鮮政府では之を八道に引摺廻して曝物にしたといふことが新聞で分りました時に、甲斐軍治といふ者に頼んで「お前行つて金玉均の死骸を探して、頭の髪でも宜い、着物の端でも宜い、若し出来れば腦漿でも一つ切取つて來て呉れ」と、斯ういふことで甲斐軍治が朝鮮に参りまして、朝鮮の麻浦といふ所に曝物になつて居る時に、極く少量ではありますが腦漿を切取つて、それを瓶に入れて持つて歸りました。それから福澤先生はそれを暫く自分の家に祀つて居りましたが、遂にあの駒込の眞淨寺といふお寺に墓を建て、お祭りするやうになつたのが、先日眞淨寺で法要を開いた原因であるのであります。

○

今日は金玉均君の死後四十幾年といふ歳月が経ちました。今日同君が生きて居りますれば慥か今年八十二か三にも達して居るでありませうが、此の金玉均の遺見といふのが居るといふことを先日聞きました、それぢや一つ會つて見やうといふので會ひま



したが、鈴木さだと言つて、鈴木某の妻になつて居る者が金君の遺兒だといふのであります。此の人以外には今日金玉均の血統の者は生きて居りませぬ。生きて居るのは唯此の人一人だけであるといふので會つて見ましたが、當人は豊橋で長唄の師匠をして居りました。而も長唄の師匠をして居ります上に、大變琵琶歌が上手であるといふことを聽きまして、其の遺兒である鈴木さだなる者に話しました所が、自分は親の生前の事を知つた人に琵琶歌で以て聽いて貰ひたいといふことでありましたので、私は同女の爲に琵琶歌を作つてやりました。琵琶歌の家元は薩摩と申しまして、私の作つた琵琶歌はそれで宜しいといふことになりました。それから交詢社で琵琶歌の會を開きました時に其の鈴木さだがやつて來まして、其の琵琶歌を歌ひました。そんな縁故で三和といふことに付て初めて人に語り出した譯であります。是は全く昔の祕密の話であります。今日では何ももう遠慮がありませんから申上げたやうな譯であります。

## ○

本日は先づ大體是だけの事を皆さんの前に申上げて話を終ることゝ致します。若し皆さんから、當時あの事はどうであつたか、どういふ風であれがなくなつたのかといふやうな事柄に付て御尋ねでもございますれば御答へ申上げたいと存じます。尤も私も今日もう彼此れ八十近くにもなりましたし、體も弱くなりましたし、記憶の方も大分薄くなつて居りますので、或は皆さんの御參考になるやうなことが申上げられるかどうか分りませぬが、記憶にありますことだけは御返事申上げることが出來やうかと存じます。それでは今日は是で終ることに致します。(拍手)



昭和十二年五月七日印刷  
昭和十二年五月十日發行

(非賣品)

編輯兼發行人 中島 司

印刷人 吉岡 清次

東京市丸ノ内仲通十二號館六號

發行所 中央朝鮮協會

(電話丸ノ内一六三四番)



私の朝鮮記録

萩原彦三

289-15



100	98	95	84	84	83	81	79	79	77	75	74	71	71	68	68	62	61	61	60	60	60	頁
15	8	9	7	6	13	9	9	8	1	4	2	13	1	4	2	8	11	9	5	3	3	行
拓昭和	慶洲	拓務省	畑に育つて	通信垣さん	見たもの	中村寅之助	なかつたが	深さで	例大祭日を	リットン卿	新しく	散うし	乗組員	松岩寺	松岩寺	高橋亭	あつたのめならず	高橋亭	結屋	統地	主義	
昭和	慶洲	拓務局	通信畑に育つて	垣さん	見たもの	中村寅之助	なかつたのが	深さまで	例大祭日と	リットン卿	親しく	散うし	乗組員	華嚴寺	華嚴寺	高橋亭	あつたのみならず	高橋亭	結屋	統治	主義	正
														111	109	103	103	103	101	頁		
														8	8	3	2	5	12	行		
														孫垂熙	不二磨	魅力	伊葉喬介氏	文磨公	愚図して	誤		
														孫へい熙	不二磨	魅力	伊藤喬介氏	文磨公	愚図愚図して	正		



表

正

100	98	95	84	84	83	81	79	79	77	75	74	71	71	68	68	62	61	61	60	60	60	頁 行
15	8	9	7	6	13	9	9	8	1	4	2	13	1	4	2	8	11	9	5	3	3	誤
拓昭和	慶洲	拓務省	畑に育つて	逋信垣さん	見たもので	中村寅之氏	なかつたが	深さで	例大祭日を	リットン郷	新しく	散らしたり	乗組員	松岩寺	松岩寺	高橋亭	あつたのめならず	高橋亭	結屋	統地	主義	
昭和	慶洲	拓務局	逋信畑に育つて	垣さん	見たもので	中村寅之助氏	なかつたのが	深さまで	例大祭日と	リットン卿	親しく	散らしたり	乗組員	華嚴寺	華嚴寺	高橋亭	あつたのみならず	高橋亭	結局	統治	主義	正
																111	109	103	103	103	101	頁
																8	8	3	2	5	12	行
																孫、熙	不二磨	魅力	伊、藤、喬、介、氏	文、磨、公	愚、図、し、て	誤
																孫、へ、い、熙	不二磨	魅力	伊、藤、喬、介、氏	文、磨、公	愚、図、愚、図、し、て	正

## はじめに

昭和二〇年四月一三日の東京大空襲の際、牛込市谷仲之町三七番地に在ったわが家も戦災に  
遇い、すべての財産と共に一切の図書記録の類を失った。そこで、終戦直後当時の記憶をたよ  
りに、外務省文書課長前川義一君に頼んで、役所の書類から写して貰った私の履歴書を参考と  
して、備忘のメモを書きつつっておいた。これは、その備忘録の一部に、多少の補訂を加えた  
もので、いわば朝鮮で過した私の半生の記録である。稚拙且蕪雑のものではあるが、ことし七  
〇回の誕辰を迎えた記念として敢えて印刷に付することとした。

昭和三五年六月

萩 原 彦 三

## 目次

一、寺内総督及びその側近……………	一	七、参事官時代……………	三
はじめて寺内さんに会う。側近の人々。		参事官の仕事。法令審議の思い出。はじめての	
二、内務部の人々……………	五	地方視察。高等土地調査委員会。中枢院の旧慣	
宇佐美さん。関屋さん。		調査。朝鮮行政法を著す。	
三、大塚さんのこと……………	七	八、万歳騒動……………	四〇
四、その頃の総督府……………	三	李大王の死。示威運動の実際。水原事件。	
倭城台の展望。武官総督。憲兵警察。		民衆不満のかずかず。財政独立。	
寺内さんの施政。		九、斉藤総督……………	四六
五、私の見たその頃の朝鮮……………	六	爆弾の洗礼。斉藤さんの人柄。	
朝鮮事情の勉強。民衆の窮乏。美しい自然。		一〇、とりどりの風格をもつ政務総監……………	五
六、楽しかった試補時代……………	三〇	水野鍊太郎。有吉忠一。下岡忠治。湯浅倉平。	
		児玉秀雄。	
一一、学務局時代……………	六〇	宇垣さんの中枢院改革。	
大学予科の開設。大学敷地の決定。仏教僧侶。		一七、咸鏡南道知事……………	六
宣教師。		咸南というところ。国境警備。長津江ダム。	
一二、水産課長となる……………	六九	咸北一巡。	
水産試験場長脇谷洋次郎。海苔の養殖。		一八、拓務省時代……………	七二
一三、文書課長時代……………	七三	転任事情。拓務省の空気。南米と満洲との移民。	
倉橋君の死。新庁舎への移転。朝鮮神宮鎮座祭。		満洲移民視察。台湾樺太出張。二・二六事件。	
一四、土地改良課長となる……………	七六	拓務大臣となった人々。	
産米増殖計画。土地改良実施機関。土地改良令。		一九、浪人生活……………	一〇四
昭和水利組合。		日本拓殖協会。	
一五、宇垣総督来る……………	八二	二〇、再び朝鮮に就職す……………	一〇六
再び文書課長。満洲鮮農の保護。リットン卿来る。		鉱業振興会社社長。朝鮮の鉱業と戦争。	
竜山官邸。今井田政務総監。宇垣さんの小作農保護。		燐鉱と黒鉛の開発。産金事業の整理。	
工業の発展。		二一、私の見た朝鮮の人物……………	一一〇
一六、審議室首席となる……………	八七	李完用。朴泳孝。尹致昊等。	

## 一 寺内総督及びその側近

私は大正五年六月末京城に到着した。そして翌朝、倭城台の総督府にのぼり人事課長久芳直介氏に着任の挨拶をした。生れて始めての社会接触である。何の経験もない私がどんな格好で挨拶したものやら、今思うと冷汗三斗の思ひがする。しかし久芳老人は極めて親切で、寺内総督に面接する前に、総督室の前の廊下で、総督に会うときの作法を教えてくださいました。剣を腰に提げ帽を持っているので、前進後退も簡単ではないのである。一通りの練習がすんでから、久芳課長に導かれて、総督の前に出た。寺内総督はビリケンと仇名せられる。漫画で馴染の深い人ではあったが、お目にかかるのは固より初めてである。長身で眼が細く、眼尻がつり上がっており、頭は尖っていた。たしか元帥になって間もない頃であった。総督は直立し、黙って辞令を渡した。そこで私も無言のまま辞令を受取り、引下ろうとすると、総督は突然口を開いて、学校を出たばかりだろう、勉強せいと、腹の底まで浸み透るような強い声でいった。低音ではあったが音量の大きい声なのだ。私はここで初めて、新任のときは、学校を出たばかりの未熟者であるが、任を受けた以上全力をあげて職務に励むつもりである。今後御指導を願うとか何とか挨拶するものであることを悟った。総督に気合を掛けられて、私は大に勉強しますと答えて引下った。総督から手渡された辞令には、内務部に於いて事務を練習す



んは、寺内内閣が拓殖局をつくると、拓務局書記官に転じた。そして長く拓殖局にいたが、後満鉄理事となり昭和九年（一九三四）児玉さんが拓務大臣となると拓務次官となった。その翌年私は咸鏡南道知事から、拓務省管理局長となった。入江次官の推輓によるものと思はれるが、入江さんは何も言はなかった。前にも拓殖局ができた時入江さんが、総督府に私を拓殖局書記官にしたいと申入れたが、これは大塚さんが、私に話さずに拒絶したそう。後で大塚さんから、その旨を告げられたことがあった。入江さんは昭和一二年に病気のため退官され、間もなく病歿された。私は入江さんが退官されたので次官に昇任した。だから入江さんには、一方ならずお世話になったわけである。外事課長小松緑氏や人事課長久芳氏などは、寺内総督と同時に朝鮮を去られたので、ハラキリした記憶はない。小松緑氏の後任は仁川府尹の久水三郎氏になった。寺内総督の秘書官には池辺竜一氏、政務総監の秘書官は遠藤柳作氏であった。この両氏にもお世話になったことが多い。池辺氏は後に鮮銀に入り、又東拓理事から副総裁を経て総裁になった人である。

勅任参事官の秋山雅之介氏は、国際公法の博士で広島県出身、明治二三年（一八九〇）の東大出で長く陸軍省参事官をしていた。眼玉のぎよろりとして、大きな色の黒い顔の持主で、身長の高い豪傑風の格好をしていた。かすれ声で議論は下手で、内閣法制局に制令案や勅令案の説明に行っては、法制局の若い参事官に議論を吹きかけられると、論文を書いてこれに答えるといった、万事口頭よりも肚で仕事をしてゆく型の人であった。秋山さんの文字は極めて難解で、秘書の三好鱗造君でなければ、解読できぬものであった。大正

六年頃青島占領軍に民政部が出来ると、その民政長官に転じ、朝鮮からも多数の要員をつれてゆかれた。山口政二君も伊佐山伊三郎君もその中にいた。若い参事官は藤田嗣雄氏である。四三年の東大出で遠藤秘書官と同期である。軍医総監で大韓病院の院長であった嗣章氏の長男で、洋画家嗣治氏の令兄である。如何にも東京ツ子らしいキビキビした、悪口の達者な人で、参事官室に出入する若い事務官連を困らせていた。私は藤田さんの下で暫時事務を見習って、特別に懇意にして貰っていた。寺内内閣のとき陸軍省参事官に転じて行った。その後永く陸軍省につとめ、軍制史か何かを研究して学位をとった。陸軍部内における貢献は大きかったと思はれる節がある。

## 二 内務部の人々

官房の挨拶がすんで、勤務を指定された内務部にゆき、長官の宇佐美勝夫氏、第一課長の沢田豊丈氏にお目にかかった。当時の内務部は、宇佐美長官の下に、第一課長沢田豊丈、第二課長大塚常三郎、学務局長関屋貞三郎、学務課長弓削幸太郎、編集課長小田省吾等の諸氏で構成されていた。長官の宇佐美さんは、米沢藩の名臣宇佐美氏の後裔とかで明治二八年（一八九五）東大を卒業し、永く内務省に勤め山形県知事から、朝鮮の内務部長官になった。寡言剛毅、立派な人格者で、人情に厚く、よく朝鮮の人々を世話をしたので、

朝鮮を去られてからも、其の徳を慕う朝鮮の人が多かった。昭和の初に資源局長官として、視察に来られたとき、私は朝鮮内の旅行に随従して、到るところで旧知の人々が盛に集まり来って宇佐美さんを迎え、久闊を叙し喜悅する状況を、つぶさに目撃したことがある。朝鮮の役人で、朝鮮の人々からこのような心からの歓迎を受けたのは宇佐美さんの外は関屋さん丸山鶴吉さん位のものである。宇佐美さんは寺内総督が去ってからも、朝鮮に止まり、長谷川総督や山県政務総監を輔けたが、大正八年山県総監に殉じて退官した。原首相は他に転任をすすめたが、宇佐美さんは万歳騒動の責任をとって、これを断ったということである。後再び官途に就き、東京府知事、資源局長官を勤めたが、満洲国ができたとき顧問として彼地に赴き民生安定につくされた。帝政樹立前に帰京され、後は専ら貴族院議員として活躍されたが、昭和一七年歿せられた。私は屢々お目にかかって、色々とお指導を受けた。

関屋貞三郎さんは栃木県足利郡の出身で、明治三〇年（一八九七）の東大出である。少年の頃郷里で南画の大家田崎草雲の塾に学んだことがあったとのことで、関屋さんの書簡紙や筆蹟には、何となく風韻のうかがわれるものがあった。関屋さんは大学を出てから内務省に入り、鹿児島県内務部長から児玉台湾総督の秘書官となり、児玉総督が関東都督を兼ねるに及んで、関東州の民政部長に転じ、それから朝鮮の学務局長になったように聞いている。私が朝鮮に行った頃は、夫人やお子さんは東京に残され、独りで大和町の官舎に起居されていた。実によく後進の世話をせられ、朝鮮の学生の面倒を見て居られた。私も色々とお世話にな

った。大正八年静岡県知事に転じ、一年ばかりで宮内次官に就任し、長いこと在職した。その後は貴族院議員となった。昭和二四年頃歿せられるまで、朝鮮のこと特に若い学生のことを心配しておられた。

私は内務部では第一課に属して事務を見習った。田中直通君が先任の試補として、いろいろ指導してくれた。私の着任の頃毎日おそくまで沢田課長の前で、面制案の審議があった。面というのは日本の村である。朝鮮としては初めて、簡易な自治組織の地方団体と認めようという制令案であった。朝鮮の事情のわからぬ私には、全然見当もつかぬもので田中君其他老練な実務家の議論をきいているだけであった。第一課では面の仕事の外、道地方費、恩賜金、社寺のことなど取扱っていた。そこで文書の起案など事務の取扱を習ったのであった。

### 三大塚さんのこと

大塚常三郎さんは栃木県下都賀郡益子町の出身で、明治三八年東大の英法科を三番で卒業した秀才である。総督府鉱山課の技師であった保科正昭子爵の話によると、大塚さんは中学時代から負けん気の強情者で、四年の級長のとき先頭に立って教諭排斥運動をやり、郷里の県立中学を飛び出し、上京して錦城中学に学び一高に入学した。実家は地方での豪家であったが、父君が銀行業に失敗した責任を負い、家産を投げ出して

しまったので、一高時代は、三菱岩崎家の世話になり、令息輝弥さんの学友として、その勉強の相手をして  
いた。大塚さんの純真卒直なのを、岩崎母堂が愛し、後までもよく大塚さんに目をかけていたとのことであ  
る。大学卒業後内務省に入り、暫くして沖縄県警視兼属となり、沖縄の特別市町村制を立案した。それまで  
は沖縄には市町村制はなかったのだ。大塚さんの法制的頭脳は早くから認められていた証拠である。朝鮮え  
は伊藤統監時代に木内重四郎氏が韓国農商工部次官となるに従って来て、韓国政府の農商工部につとめ、国  
有未墾地利用法や鉱業法などの、朝鮮特有な面倒な法規を立案した。木内氏が内地に帰られてから、内務部  
に転じ、第二課長となった。そこでは法制的に大きな貢献をした。まづ併合に伴う各国居留地撤廃の善後措  
置として、民留民団の撤廃と府制学校組合令等の制定を根幹とする地方制度の創設である。其の後も引続き  
地方制度の整備については大きな貢献をした。斎藤総督時代には内務局長として、総督政治に新生面をひら  
いた地方自治制も、すべて大塚さんの頭脳から生み出されたものである。第二課長時代には、兼任参事官と  
して、後には首席参事官として、広く統治全般について、単に練達な行政官としての観点からばかりでなく  
更に高い人道的見地から、高邁な識見を披瀝主張された。長官である宇佐美さんも、局長の関屋さんも、非  
常な信頼を寄せ、済輩の人見次郎、青木戒三、村田素一郎、田中卯三、生田清三郎の諸氏も、大塚さんには  
一目をおいて交っていたようだ。大学時代からの頭の冴えは年をとっても衰えず、いつも鋭い直覺力と精密  
な構成力とを示していた。しかし人となり傲岸不敵、直情径行のところがあり、正義感がつよく威武にも屈

せず、容易にその主張を曲げないという風で、必ずしも官界一般で評判がよいというわけではなかった。従  
って官吏として昇進の速い方ではなかった。私が参事官室の試補になった大正五年一二月に漸く高等官三等  
になった。大学を出て十一年目である。大正三年に行はれた外国の居留地撤廃が法制の整備から、府制及び  
学校組合の実施運営、在留外国人の処遇などすべて円滑に行はれたのは、皆大塚さんの采配によるものだが  
その論功行賞には、大塚さんは漏れていたということである。

大塚さんが朝鮮に残した功績は甚だ多いが、早くから社会事業の保護助長に力を尽したことを一言してお  
きたい。当時民衆の窮乏はひどかったので、路上に行き倒れる病人や死人が多く、また捨子も多かったが、  
その救護施設は僅に国立の済生院と二三の基蘇教徒の施設があるのみで、国費も地方費も手廻りかねたので  
あった。大塚さんは主管課長として、大に頑張って、産業の開発河川道路など国の施設すべき事業が多い時代  
のこととて、一般の役人が社会事業など見向きもしなかった頃であるに拘わらず、民間の施設する社会事業  
に補助金を与えて、その助成を図った。又各道の慈恵医院（国立病院であるが、当初は施療などが主目的で  
あったから、斯う称せられていた。施療の経費は併合の際の恩賜金の利子で賄はれた。後の道立病院の前身  
である）の行旅病人の収容施設や麻薬中毒者の治療施設などにも、力を入れ、後には感化院や救癩事業にも  
大に骨を折った。特に大正の初寺内総督を説いて、済生院に附属農場をつくり、成長した孤児に農業経営を  
習得させて、その自立の途を啓いた。寺内総督や山県政務総監を、東大門外数キロの農場に伴ってゆき、孤



児たちを訓話激励して貰ったりした。大塚さんの熱のこもったやり方は、忘れてはならないところだと思ふ。

私は大塚さんから格別の指導を受け、その感化を受けたことが多い。大塚さんは、頗るぶっきら棒で愛想めいたことは決して口にしない。口よりも頭の方が早く動き、相手の考えていることよりも、数歩先きのことを考えて短い言葉で応酬するものだから、相手は魔誤つき大塚さんの言葉を解するまでにはすこし時間を要する。そこで大塚さんはぢれる。益口をこもこもさせてますます短い言葉になるから、相手は愈大塚さんの意思がわからぬ。遂に大塚さんの雷が落ちるという具合である。私は大塚さんの直覚力の鋭いのに驚嘆したことがある。私が参事官室の試補の時だから、恐らく大正六年大塚さんが高等官三等になり立ての頃であつたろう。或る時雑談の際、大塚さんは私に大塚さんの親しい友人数人の人となりを説明し、その将来を予測して話された。私は、日頃親しく交際しているお友達に随分な酷評を下すものだと、驚いて聴いていた。無論大塚さんは、私に教訓するつもりで話されたのである。ところが其の後歳月がたつと、その友達の運命はすべて曾って大塚さんの推測した通りになった。極めて恬淡な風を装っていた人が、案外汚いことまでして蓄財していたり、羽ぶりのよかつて宛転滑脱な人が、勅任官にもなれずに、内地に去ってしまったりした。大塚さんが鋭い直覚力で人物を見抜くところは、まことにえらいものだった。

大塚さんの官舎は大和町の老人亭にあった。老人亭というのは、南山の西廂の閑静な幽境で以前或る両班

が別荘を造ったところで、私達の住んだ頃にも、まだ亭舎の一部が残っていた。南山には松が繁茂し、夏でも雉子の叫声がきこえ、秋には官舎の庭まで、雉子が遊びに来る程であった。私は大塚さんのすぐ下の小さな官舎に三年ばかり住み、大塚一家から色々とお世話になった大塚さんは先年夫人を失はれ、その妹さんを娶られ、その新夫人とまだ学校にゆかぬ二番目のお嬢さんと三人暮しであった。長女は東京の祖母のところから小学校に通っているということであった。大塚さんから誘われて、牛耳洞の花見に行ったり、道峰山望月寺の松茸狩をしたり、又温陽温泉に入浴に行ったりした。京城附近の散歩にもよくお伴をした。いつも夫人も一緒であった。

大塚さんは第二課長から、秋山雅之介博士の後をついで勅任参事官となり、斉藤総督が来られる間もなく内務局長になった。そして地方制度の創設に肝胆を碎かれたが、一年間ばかり欧米視察にゆき、其の後暫くして内大臣秘書長に転じ、朝鮮を去られた。内大臣は牧野伸顯伯であった。宮内次官の関屋さんは牧野伯とは内務省時代から懇意であったというから、関屋さんの推輓や斉藤総督の口ききがあつた結果かも知れぬ。私達は大塚さんが同時に、東宮御用掛を兼ねられたので、大塚さんのような人が摂政宮の側近に奉仕されることは、その生い立ち、識見等から、必ずや日本の将来に大きな何ものかを齎すであろうと、非常な期待をもっていたのだが、間もなく病気に罹り、再び起たなかったのは、まことに残念であった。平素あまり健康な方ではなく、腎臓を病んだり胃腸が悪かったりしたが、強情我慢が時々斗酒を辞さないという飲み方に発

展させたことが多かったようだ。そのため遂に身軀を損はれたのであろう。

#### 四 その頃の総督府

その頃の総督府の建物は、南山西側の中腹倭城台と云う高台に在った。昔増田長盛の陣を張った旧地で、倭将台がなまって倭城台となったと言ふことだった。木造二階建の庁舎で、西側の総督総監の室や参事官室等の窓からは、道峰山北漢山仁旺山などの峨々たる山容が眺められ、眼下に京城市内が俯瞰できた。真向には、景福宮、徳寿宮、昌徳宮などの宮殿、李王家の宗廟が鬱蒼たる森の中の壯大な屋根を見せて居り、又貴族の豪華な邸宅も見えたが、市内は皆屋根の低い平家ばかりで、葉ぶき屋根も連っていた。総督が現役の元帥陸軍大将で、朝鮮に在る陸海軍々隊の指揮権を握っていたので、総督府の入口には衛兵が立ち、総督の出入のたび毎に、敬礼ラッパが鳴り響き、幕僚として陸海軍少将各一人、元帥秘書官として陸軍少佐大尉各一人が随従して歩くので、佩剣の音靴の響きが入り乱れ、なかなかいかめしい風景を呈した。しかし、これらの軍人は、総督の生きた勲章とも云うべき存在で、昭和の軍人のように、統治については何等の口出しもせず、統治百般の事項は政務総監以下文官の方寸に依った。寺内元帥の統率力は、昭和の將軍達とは比べものにならない程シッカリしていた。

統治百般は文官に手中に在ったが、唯警察権だけは軍部に握られていた。併合前後は治安維持の為軍隊が各地に分駐していたが、それ等は既に衛戍地に集結してしまったのに憲兵だけは地方に少数つつ分駐していた、引きつづき憲兵隊司令官が総督府警務総長として、警務総監部を主宰し、各道に在った憲兵隊長が、各道の警務部長として、警察権を握っていた。(京城、仁川、釜山などの都市には警察署があった)当時の総督府は官房の外、内務部度支部農商工部及び司法部の四部に分れ、外局として通信局鉄道局があった。そして内務部は宇佐美勝夫、度支部は荒井賢太郎、農商工部は石塚英蔵、司法部は国分三亥、通信局は池田十三郎、鉄道局は大屋権平の諸氏が長官であった。警務総長は明石元二郎中将立花小一郎少将は既に去って、古海蔵潮少将であった。

憲兵警察の制度は、当時既に甚だ評判が悪く、総督府内部からも改善が叫ばれていた。行政面でも警察権を握る警務総監部の組織は、警務、衛生の二課長だけが文官で、保安高等警察等の課長は、古参の大中佐であつたから、民心の機微を察し事情の推移に即応し得る体制ではなかった。殊に地方で日常直接民衆に接していたものは、憲兵下士官と朝鮮人から任用した憲兵補助員とであつた。下士官は年齢も高く頭も固く、兎角独善的になり易く、又補助員は低い階級出身の者が多く、教養もなく、民衆から蔑視される傾向もあつたので、虎の威をかりて報復的に民衆を圧迫することも屢々起り、ひどく民衆から毛嫌いされていた。大正の初め中野正剛氏が朝日新聞の特派員として朝鮮を視察し、寺内政治を善意の悪政と評したことがあつた。



民衆のために図るといふ善意はあるが、行政は圧制に過ぎるといふ趣旨である。憲兵警察は、武断政治の色彩が濃く何となく重く陰うつな空気が、朝鮮におほいかぶさっていた。私が京城に行った大正五年（一九一六）は併合後既に六年も経過し、全半島平静であったのだから、警察は文官に移すべきだったと思う。その頃私は役所の朝鮮青年達と一諸に北漢山に登ったことがある。山中の行宮址附近に憲兵駐在所があったので、聞いてみると二三年前までは、暴徒が山中に巢食っていたのだという。此の谷で巡査が殺されたとかあのかげで暴徒がどうしたとか、血なまぐさい話はあったが、当時では過去の語り草で、山中の静けさは格別であった。

役所の内部にも憲兵警察に対する反対は強く、殊に宇佐美内務部長官の意見は最も強かったが、大正八年八月の総督府官制改正の機会で、実現を見なかった。

○

寺内総督は、私が京城に着いてから間もなく上京した。私も皆と共に駅まで見送りに行った。その頃総督の旅行には臨時の専用列車を用い、出発又は帰任の際駅頭には官吏は高等官以上、民間の重人々及び王族の李こう公まで送迎するという重々しいものであった。それは恐らく、昨日までの主権者は李王であったが、今は主権は日本天皇に在る。総督はその主権者の代表者たることを示す一種の手段であつたらう。寺内さんは上京したまま、帰任せず一〇月には内閣総理大臣になった。

寺内さんは、初代総督として、保護時代の諸政改革を嗣ぎ、新政の基礎を固め、朝鮮に新生面を開いた。

財政の確立、税制の改正、教育の普及、地方行政の刷新、古代文化の保存、土地調査の遂行、地方経済の振興等寺内さんの打った石は、一として無駄なものはなく、実によく要点に当たっていた。産業の方針にしても学制の定め方についても、真に民衆のために考え、負担力、生活の程度などを慮って、無理のないように心掛けた。急進的な若い人達や頑固な儒生達からは、故意に朝鮮人を差別待遇するかの如く批難されたが、寺内さんとしては、まだほんとうに眼ざめぬ一般大衆を、頑是なき小児のように考えて、其の取扱をいつも念頭に置いていたようである。この前時代的な未開発の民族をして、近代的文化の恩恵に浴せしめるには漸を追うて進歩を図るより外はなく当時としては、まことに適切な行政であつたのである。寺内さんが併合の際地方長官を集めて訓示した、施政の大綱を読むと、寺内さんの後進民族に対するいたわりの気持がハッキリ窺はれる。

○

寺内総督の後任は元の朝鮮軍司令官長谷川好道元帥である。政務総監は山県さんが居残って寺内統治の方針を踏襲することになったが、各部の長官は大に異動した。荒井賢太郎、石塚英蔵、大屋権平、池田十三郎の諸氏は退き、度支部は鈴木穆、農商工部は小原新三、通信局は持地六三郎氏が各長官となり、そして朝鮮内の国有鉄道は、満洲一元化の理想から、満鉄に経営委託することとなり、鉄道局は廃止せられ、これが監

督機関として鉄道部が新設され人見次郎氏がその部長となった。これらの異動は試補になったばかりの私に何の影響を及ぼすものでなく、高い青空を白雲の去来する位にしか感じなかった。

## 五 私の見たその頃の朝鮮

試補時代には公務の余暇つとめて朝鮮事情の勉強をした。朝鮮の歴史は、林東大教授の朝鮮通史や四色の研究などが中心であったが、釈尾東邦氏の古書刊行会を出していた三国遺事三国史記等の古書も耽読した。又高橋享博士の朝鮮俚諺集だの、桜井肇氏が翻譯刊行した牧民心書や春香伝沈清伝等の小説類、今村軞氏の朝鮮風習ものなどは、民情を知る上に大に役立った。すこし後になるが鮎貝房之進氏の雑攻や工藤武城氏の二十年前の朝鮮なども、興味深く読んだ。

その頃古蹟調査のため、京城に來られる伊東忠太、黒板勝美、池内宏、梅原末治等の諸教授は会議室に職員を集めて講演されるのが例だった。これらの古朝鮮の話も、まことに興味ふかく、古い朝鮮の文化を知るのに甚だ効果があったように思う。

○

私が行った頃の朝鮮は、経済はひどく沈滞していた民衆の生活は苦しかった。特に下層の人々の生活はみ

じめであった。私達が近郊に遠足して草地に腰をおろし弁当を開くと、忽ち村童老嫗が集まってきた、周囲に立ち私達の食事の終るのを待っていて、私たちの捨てる空罐や食べ残しものなどを争って拾うのであった。後に東京全市が戦火に焼かれ、市民はすべての物資を失って、非常に苦しんだ。わが家の焼け跡から燃え残りの鉄器を捜し出したり、幸に戦災を免れた友人から、空罐空箱を譲り受けて重宝がたりしたが、私はこの時いつも、曾って朝鮮の村童が私達の捨てる空罐などを争い拾った光景を想起したのであった。それほど当時の朝鮮の人々は苦しんでいたのである。李朝末期の政争は苛烈を極め、地方官吏は自己の地位保存に汲々としていて、民衆のことは殆ど顧みられなかった。郡守三年にして九族養はるという諺もあった位、地方官は貪汚であった。男系血族はどんなに遠くとも一族であり、一族は相互に扶養する義務があるという社会制度の下では、寄りたかる食客が常に百人を超えるという官吏は珍らしくなかった。昭和の初め頃でも友人の南宮宮君や金泰錫君（いづれも道参与官）などが、口癖のように食客の多いのをこぼしていた位だ。朝鮮には西欧や日本のような封建諸候はなかったので、傑出した領主が領内の民衆のために学問産業を勧めるといような事実はなかった。監察使も其の下郡守も、中央の政争でいつもその地位を左右されたので、一地方だけでも民衆が安定した政治の下で太平を楽しむという時期は無かったのである。併合前の韓帝の諭告の一節に、積弱痼を成し疲弊極処に到り時日間に挽回の施措望無しと言っていたのも宜なるかなであった。

○

朝鮮には野生の動物が多かった。あるとき全南の無等山で獲れた虎肉を贈られ、試補達が集ってスキヤキのようにして味はったが、うまくなかった。若し猫の肉を食ったらこんな味がするのではないかと思った。その頃山本唯三郎という実業家が虎狩に来て大評判になったことがあった。後年咸南で熊や猪の肉の馳走になったが、これもうまくなかった。熊や猪の害は各地に多いのであった。又ある正月宇佐美長官から、のろ（獐、鹿の一種である）肉の馳走になったが、これは美味であった。猛獣の肉はうまくないのが原則で、のろは菜食だったためか、或は宇佐美邸の料理が巧みだったせいかもしれないと思はれる。

鳥では雉子が実に多かった。京城でも南山には終年巢食うていた程だから、冬地方の山路をゆくと、私の乗っている自動車が轢き殺すのではないかと危ぶむ程沢山群がり遊ぶのが見られた。鴨の類も多かった。年末嚴寒の頃にはこれらの鳥類が京城市内の店頭に山のように積まれて売られていた。鳥で味の上等なのは山七面鳥と俗称していたのが、である。黄海道平南地方に多かったが捕獲禁止になっていた。丹頂も白鳥もやっていたが、その場所は少なかった。啼声の美しいのは高麗うぐひすである。晩秋黄ばんだ高いポプラの梢で囀るその声は、実に美しかった。日本の鶯以上である。家の附近では雀と鶉とが多かった。鶉は殆ど見られなかった。鶉は姿も美しく肝高い啼き声も鶉のような陰気なのではなく、朝鮮では朝に喜鶉の声を聞けば家に吉慶ありと言った位だ。なかなかの愛嬌ものであった。

花は木槿と連翹とつつじである。木槿と連翹は家の近くに多く植えられたものだが、つつじは野生でその

種類も多かった。早春には山野到るところに玄海つつじが咲き、高い山には大きな花のつつじが群がり咲いた。李王家の東五陵に咲いていた大きな花のつつじの群落の美しさは、今でも忘られない。山奥の湿地に野生のあやめの大きな群落を見たことがある。珍らしいものと思った。

樹木は、深山は別として、日常目にふれるところでは樹種が甚だ少なかった。近くの山は殆ど禿山で、山頂は稜々たる山骨を露出し、麓の近いところに赤松が立っていた。村の路傍には、時々大きな槐榎または榆などが立っていたが、山の赤松は痩せ細ったものであった。山林は無主公山という部落共有林みたいなものが多い、嚴冬期の燃料用として、枝打ちや下草刈が盛に行はれるので、松の肥育生長の余地がないからである。総督府も毎年四月三日を植樹日と定め、植林を盛に奨励していたがなかなか松は繁茂しなかった。唯総督府が奨励したポプラやニセアカシアだけが、繁茂していた。これは、北海道庁から転任してきた齊藤音作技師が、青島で独乙が植えたニセアカシア、ポプラなどの砲台掩護林がよく繁茂しているのを見て、朝鮮に早く繁茂する樹種として選定したのだということだ。初夏の頃地方にゆくと、一等道路の両側に植えられたニセアカシアがよく繁り、白い花房を垂れて芳香を漂はせているのに遭遇することが多かった。



## 六 楽しかった試補時代

私の試補として事務の修習は、内務局で六月、参事官室で一年つづいた。事務の修習といっても、当時の官庁は比較的のん気であったから、試補は書類を見せて貰う位で大した任務はなく、むしろ同じ試補仲間から、役所内各部の内情をきいたり、先輩のあげつらいをやったりして、官僚としての開眼をして貰う方が重であった。当時の総督府には、私より先任の試補として、今村邦典、赤峰哲夫、田尻生五、倉橋しるす、田中直通、大島良士、田中三雄等の諸君が居り、事務官に任官したばかりの連中は、矢島杉造、新田隣平、林繁蔵等の諸氏が中央に、杉本良、山口政二、穂積真六郎の諸氏が地方にいた。そして沢崎修、中村寛猛の両氏も間もなく任官した。

試補というのは、高等文官試験に合格した者を任官前或る期間事務を見習はせる制度で、行政官については、内地では夙に廃止していたものである。朝鮮では併合後間もなく実施され、最初の試補は明治四三年東大出の遠藤柳作、郡山智及び前年に東大を出た井上清等の諸氏で、爾来年々数人の高等官の卵を養成したから、当時試補出身の行政官は、京城及び地方を通じ数十名に及んでいた。これらの連中は試補会というグループを作り、会員の新任転任の際など送迎会を催し酒食を共にするのが例であった。その頃は物価が安かつ

たので、皆小使に不自由せず、何かという和本町の花月に集って、気焰をあげるといふ風であった。此の花月という料亭は、京城で一番大きな日本料理店で、伊藤公も屢々遊ばれたらしい。二階の百畳敷の大広間には、伊藤公の先憂後楽と書いた大きな横額が掲げてあった。

寺内総督は試補を陸軍の見習士官と同視して、特にその養成に心を配はれたということだ。時々試補を官邸に招いて麦飯の馳走をしたり、試補の集まる官舎に菰包み一樽を贈ったりした。寺内さんは試補の地方視察復命書でも刻明に眼を通し、赤鉛筆で意見や批評を書き入れて、提出者に返されたそうである。寺内さんは私が着任すると間もなく上京され、再び帰らなかったで、私は寺内からそうした親切的指導を受ける機会はなかった。

試補で特に親しく交際したのは、杉本良、田尻生五、倉橋しるすの諸君である。一高の先輩で且淡泊快活でよく私を導いてくれたからである。一高の先輩で特に親しく願うべき人として山口政二氏もいたのだが、山口さんは当時平北義州の道庁にいたので、(鴨緑江節を京城に流行させたのは山口さんが輸入したのだということだ)朝鮮では殆どお目にかかる機会はなかった。一高出の連中は、大塚常三郎、青木戒三、田中卯三等の先輩を中心として、毎月一回鐘路通りのパゴタ公園内に在った青木堂に集まり、スキヤキを食い寮歌を合唱して、青春の元気を発散させていた。そして一高記念祭の当日には、花月三階の大広間に、宇佐美勝夫、関屋貞三郎、鈴木穆などの大先輩まで、駆り出して、稚氣満々の大騒ぎをやった。これも山口政二氏が

試補のとき始めたものだが、その後も引続き行はれるようになっていた。

その頃私は写真道楽をはじめ、いろいろな友達と、京城郊外は勿論仁川水原あたりまで出あっていた。まだ写真をはじめて間もない頃遠藤秘書官に伴はれて、警務総監部の庭に行った。政務総監の山県さんが、自転車の稽古をしていた。あまり肥満し過ぎるので、運動の一方法として始められたのである、私は山県さんに手を離してみなさいと言うと、山県さんがハンドルから手を離したので、早速一枚うつした。遠藤さんから、そんな危いことを願ってはならぬと叱られた。この写真はピンボケで出来がよくなかったので、到頭山県さんにはお目にかけなかったが、昭和一八年頃疎開騒ぎで、牛込の家の整理の際この古写真が出て来たのを、山県さんの三男三郎氏に、写真の由来を書いて贈った。しかし三郎氏の家も戦火で焼けたので、恐らく思い出のこの写真も失はれたことであろう。

当時試補の給料は、月割にして本俸五〇円加俸三五円計八五円であった。税金などかからずまるまるの収入である。そして独身の連中が官舎で共同生活をする、毎月二五円もあれば足りたから、毎月六〇円前後の小使が残った。そして、花月の宴会の会費の頭割りには五円であったから、随分頻繁に花月に出かけられた勘定である。

## 七 参事官時代

私は大正五年一二月末から参事官室で事務を見習うこととなった。当時首席参事官は秋山雅之介博士で、大塚さんが兼任参事官。若手の参事官に藤田嗣雄氏。附属室には三好鱗造、野口三郎の両君がいた。それから私の参事官室の生活は、大正一二年（一九二三）学務局に転ずるまで、長いこと続いた。若い時一度も地方勤務をしなかったことは、私の官吏生活にとってマイナスの点があったと思う。若い内に地方庁勤務をして、下級庁の実際を知り地方民衆との接触を経験して置くことは、官吏としては是非とも必要な事柄である。

その頃の参事官の職務は、各部局で立案した法令案の審議の外に、重要な行政処分の審議があった。これは、寺内総督が秋山参事官（当時陸軍省参事官を兼ねていた）を信頼し、秋山参事官の審議を経なければ決裁しないということから来たらしく、各局部から総督に出す処分案が盛に参事官室に廻って来た。だから参事官室にいても、案外各部局の行政の内容に触れることができた。とは言っても、それは外形的表面的のもので、事件の核心を衝くような、徹底的な判断力を養うことはできなかった。元来あまり物事に執着せず徹底的に研究したり考えたりする性格でなかったから、兎角表面だけの整備で満足するような傾向が、参事官の職務を執っていて、一層助長されたような感がする。人間として大成するためマイナスであったようだ。



秋山さんは国際法学界の先輩で、私が参事官で事務を修習することになったとき、私に国際法でならいつでも博士に推薦してやる。国際法を勉強したらどうかと言われた。当時は大学に論文を出さなくとも、博士会の推薦で学位を授与される制度があったのだ。しかし私は学究になって学位をとろうとは考えず、ひたすら有為な行政官吏になることばかり考えていたので、折角の秋山さんの好意あるお話を無にしてしまった。今から考えると、何でも機会は失わずに全面的に利用すべきであったと惜しい気がする。

藤田参事官は非常な読書家で、よく図書室の書庫から色々な本を持ち来て来て読んでいた。私もその真似をして、閑さえあれば書庫に入り、面白そうな洋書を探し出して来ては机の上に置いた。私の読書は藤田さんが指導してくれた。藤田さんは、本はあれこれと雑駁に読んでは何にもならぬ。何か自分で研究題目をきめて、その題目のものを深く且ひろく覧るようにしなければ駄目だと言った。そこで私は英吉利の印度統治という題目を選び、これに関する書庫の本を探したり、自ら町の書店で買い集めたりした。ところが藤田さんが、印度ではあまり朝鮮の参考にはなりませんと言った。その言葉が利いたのか、或は私の生来の不徹底性のためか、あまり熱心に印度問題を研究せず、と言って他の問題を取りあげて深く探究するというわけではなく、結局有邪無邪に終り、私の読書は何ものをも齎らさなかった。しかし印度問題は私の頭から消え去らず、後年文書課長のときガンジー翁の指導した国民会議派の運動が盛となり、澎湃として反英抗争が全印度に波及した際、穂積外事課長のはからいで拓務省文書課長の坂谷希一さんから、その情報を送って貰い、

これらの資料により、英順印度の民族運動と題する小冊子正統二冊を編述して、印刷に付し、総督府の内外に配付したことがある。その後も英吉利の印度統治に関する資料は、眼に触れる限り蒐集していた。退官後閑を得て更に勉強しようと考えていたのだが、戦災によってすべてを失ってしまった。

藤田さんは大正六年秋山さんと前後して、朝鮮を去った。秋山さんの後任として陸軍省参事官となったのだ。首席参事官は大塚さんが兼任し、別に奈良県から張間源四郎さんが来た。そして私も翌年一月参事官に任官した。試補となつて一九月目である。それでも内地にいた同期生に比して早い方であった。大蔵省の石渡壮太郎（後の蔵相、宮相）君が、私の任官を祝して、君は参事官だが僕は参事官勤務だと、ハガキを呉れた。暫くして富永文一君も道事務官に任官して、黄海道勤務となった。この頃の道庁には長官参与官の下に、所謂資格者の事務官が三人居り、二人はそれぞれ内務部長財務部長となり、若手の一人が課長というわけで、富永君も道では大切に取扱われかものである。それはさて置き、首席の大塚さんは法令案説明のため法制局に行ったり、政府委員として議会に出席したりして不在勝だったので、張間さんと私とで仲よく且静かに事務を捌いて行った。藤田さんの時代とは参事官室の空気が一変した。

大正八年（一九一九）の制度改正で、行政処分案は原則として、参事官の審議を要せざることとなり、参事官は専ら法令の審議に没頭することとなった。齊藤総督の庶政刷新が行われ、地方制度、学制、財政に関する重処法会が盛に参事官の下に持ち込まれ、なかなか多忙であった。私は長い参事官生活を過ごし実に沢山

の法令を手掛けたので、他人から朝鮮法制の活字引と言われる程になったが、自分から苦心して新機軸を出したと思うものは少く、概ね内地法令の焼直し程度のものであった。寺内長谷川両総督時代は、施政の方針が、朝鮮の特殊事情を顧慮し、つとめて民情に適することを心掛けていたから、法令も自然朝鮮独特のものを立案したのであったが、大正八年の改革後は、一視同仁内鮮無差別の施政方針の下に、行政制度全般も出来るだけ内地と同様にしようとする気風が滔々たる勢を為し、法令も亦内地法令の真似をするに過ぎなくなってしまった。

法令の審議には数数の思い出がある。大塚さんの命令で、私が主任となって、会計事務章程という訓令をまとめたことがある。各官庁の会計事務は、各官庁の事務の特質によって、それぞれ特有の会計事務の取扱がある。金銭の出納財産の管理処分、報告書の形式など官庁毎に違っている。総務府のように内地各省の取扱う事務のすべての種類の事務を取扱ねばならぬところでは、会計事務が実に複雑を極めていた。それを出来るだけ統一簡約し、取扱者の便を図ると同時に監督上の便宜を図ろうとする趣旨で、丹念にあらゆる会計法規を検討し、会計事務取扱の手引のような訓令をまとめあげた。これは会計課の法規係女屋誠一郎君を相手に数月を費したのであった。その大部分は女屋君の克明な努力に負うものである。それから大正八年阿片取締令の制定の際、大塚さんが強硬に主張して警務総監部の原案に、大修正を加えたことであった。人煙稀なる山奥で行はれるけしの密栽培の取締について、単に内地の阿片法の真似だけでは不十分だという大塚さん

の意見で、時の警務総長は古海蔵潮氏だったが、なかなか大塚さんの意見に同意せず激論を闘わしたということだ。又煙草専売令の制定についても思い出がある。大正九年頃朝鮮でも愈煙草専売を始めることになった。そこで予備知識を得るため、忠北に出張して葉煙草の収獲状況を調べた。陰城附近では在来種を栽培していて収獲し葉煙草は天日で乾燥した。これは味が辛く主として農民向の刻み煙草の原料である。忠州附近では米国種の黄色煙草を栽培していて、乾燥場で火力で乾燥した。上級巻煙草の原料となるものだ。煙草専売を始めるについて、特別に考慮したのは、農民の嗜好に適した辛い刻み煙草がやすく供給できるか、ということであった。それについては課長の今村武志さんが慎重に念をいれて計画されたので、その配慮も行届き、翌年四月から煙草専売は順調に始まり、別段不平も高まるということもなかった。唯私は専売令審議の際、専売局の人が諸外国の見本を沢山持ってきて、吸ってみると言うものだから、冗談半分にいろいろ吸ってみたのが病みつきで、その時から煙草を嗜むようになり、聊か専売収入の増加に協力したことになってしまった。は、参事官忘れ難い思い出である。又私をはじめ、独自の考で立案して、聊か得意であったの室の試補となつて間もない頃起草した殖産銀行令の附則である。これは、当時の農工銀行六行を合併して一の殖産銀行を設立し、同時に資本金を十倍位増加しようとするもので、商法の合併資本増加の規定だけでは処理できぬものであった。銀行令の本体は、度支部の鈴木穆長官提出の原案でよかったが、附則として設立手続の必要上商法の補充規定を設けることとなり、其の原案を私が書いた。それに大塚さんが字句の修正を

加えて、法制局に提出したところ、そのまま承認され、制令案も間もなく裁可となった。制令というのは、憲法上法律でなければ規定し得ない事項でも、朝鮮では総督が天皇の裁可を受けて、命令を以て規定し得ることになっていた。その命令を制令と称したのである。斯くて極秘の間に準備を運んでいた殖産銀行の設立は滞りなく進み、朝鮮開発資金を供給する強力な銀行が誕生したのは、うれしかった。私の微力が聊かそれに役立ったからである。

間もなく大塚さんが専任の勅任参事官となった。大学卒業後官途に就いてから一三年目である。同期の誰彼に比し遅いと言うことだった。しかしその内に大塚さんは内務局長に転じ、矢鍋永三郎氏が後をおそい、矢鍋さんが黄海道知事に出ると、和田一郎さんが勅任参事官となった。張間さんと私とは、これらの首席参事官を送迎したのであったが、大正一二年には私は学務課長となり、張間さんも会計課長に転勤された。その後首席参事官には法制局出身の鵜沢憲、白銀朝則等の諸氏が順次にやって来た。

○

ここで私が始めて、朝鮮の農村を見たときのことを書いておく。大正五年内務部第一課で沢田豊丈課長の下で、事来を見習っているとき、一度黄海道視察にゆくよう命ぜられ、北林賢二郎君が案内役として一緒にゆくこととなり、日程を組んでくれたことがあった。それによると、毎日郡庁と郡庁との間を一〇里位づつ朝鮮馬に乗らねばならなかった。当時は馬に乗るか徒歩する以外には、旅行の方法が無かったのだ。期間は

三〇日で、数郡を見ることしか出来ない予定だった。偶黄海道に腸チブスが流行し始めたので、沢田課長から中止を命ぜられた。交通不便の田舎で、病気にでもなったら大変だというわけだ。北林賢二郎君の話では沢田さんは地方旅行が嫌いで自分もなかなか出かけない。いつも机に寄りついてコツコツやっている方だ。それに沢田さんが出かけると妙に何かの事故に遇うのだ。暴漢になぐられたり病気に罹ったりすることである。それで私が実際に地方に出かけたのは大正六年の晩秋である。大塚さんの配慮で内務部第二課で事務修習中の田尻生五試補と参事官室で事務修習中の私とが一緒に、第二課の飛舗秀一君に案内して貰って、全羅北道に行ったのである。

京城から汽車でゆき湖南線の黄登駅で下車した。臨益水利組合の事務所を見学した後、駅前の片桐和三さんのお宅で昼飯を喫した。片桐さんは北陸出身の篤農家で、水利組合の理事をしていた。お宅は臨益水利組合の貯水池腰橋堤の傍に在って、藁葺の質素な農家であったが、腰橋堤でとれた大きな鮎を料理してくれた。その鮎の味が素的で、田尻生五君と共に舌鼓をうったことは忘られない。田尻君は後に八幡製鉄所（国営時代）に転じ、初代の労務部長となり、衆議院議員となったり、製鉄所理事となったりしたが、戦時中は北支製鉄の社長となったが、昭和一八年頃彼地で病没してしまった。九州柳河の生れで極めて明朗闊達な紳士で、唄のうまいこと及びその声の美しいことは、天下一品であった。私はいつも親しく交際していた。早死されたのは遺憾の極みである。さてわれわれは黄登から裡里にゆき益山郡庁に寄った。裡里は朝鮮の穀倉地帯た



る全州平野の中心の市街地である。益山郡守は朴榮喆氏庶務主任（財務以外の民政全般を掌る）は三上新氏である。朴さんは全州の素封家の嫡男、長身無髯の堂々たる美丈夫で、韓国皇帝の侍従武官をしたこともあるときいた。頗る円満な物わりのよい人で、参与官知事を歴任した後永く朝鮮商業銀行の頭取をした。三上さんは後に清津府尹となった。温厚篤実な紳士であった。裡里から秋郊の爽味を満喫しつつ田舎道を二里ばかり歩いて、瑞穂農場に川崎藤太郎氏を訪ねた。川崎さんは新潟県農村の有識有産の名望家であったが、朝鮮に模範的農場を経営して、朝鮮の農業振興に役立てようと決心して来鮮し、群山に近いこの地に農地を買い、農場を興して小作人たる朝鮮農家の指導に挺身されていたのだ。川崎さんは大塚さんの懇篤な紹介があったので、私達を歓待してくれ、農村建設の理想と計画とを説明した。農場内に神社を祭り、春秋二回の祭典には小作人たる農民等と酒食を共にして談笑するのだが、その祭典がとても賦やかだと語っていた。川崎さんが農場に一泊してゆけと言うのを、ふり切って夜おそく裡里に帰り翌日全州に赴き銀杏屋旅館に宿泊した。その後間もなく川崎さんは病没したが、若し川崎さんが病没しなかったならば、藤井寛太郎氏と共に、朝鮮農業史に大きな足跡を残したであろう。

銀杏屋で翌朝山口重政君に会った。山口君は私と同時に一高で学び大学も同時に出たのだが、彼は一高では和田と言ひ独法に居り、私は英法だったので、この全州における会見が初対面のようなものであった。山口君は全羅農工銀行に入社していたのである。この銀行に他の農工銀行と共に殖産銀行となり、山口君も累

進して殖銀理事となった。細いことに気のつく親切な人柄が、銀行家として大成せしめたのであろう。

全州では全羅北道庁を訪ね、長官李しんこう、内務部長大久保到、財務部長松井房次郎、事務官井上主計等の諸氏に会った。李長官は如何にも大官らしく温厚寛仁の風貌をしていた。後に総督府の学務局長になった。前長官は李斗こうと言ひ、極めて豪胆な東洋的大官であつたらしく、二、三年前に病没したのだが、道内到るところで、李斗こう長官の遺風の仰かれるものが見受けられた。松井さんと井上さんとは、後輩の私達を大に歓待してくれた。松井さんは後に咸南知事をやり、朝鮮米穀倉庫社長になった。朝鮮米の問題について色々奔走され、評判のよい社長だったが、早く病没した。井上主計さんは試補の先輩で温厚な長者風の紳士である。とても酒が強く、後年ロンドンで矢島杉造君と共に、コリンズ家に下宿していたとき、井上さんが強い酒を嗜むので、コリンズ夫人から、酒スピリットセントルマン精紳士と綽名されたそうである。その飲み方は、いくら酔うても膝も崩さぬ謹厳なもので、会計課長の郡山智さん比すべきものである。郡山さんは後に拓殖局書記官、満鉄理事などをやったが、この人もいくら飲んでも少しも乱れず、ニコニコと物静かに語り、鶏鳴に至っても疲れを見せぬ豪の者であった。御兩人とも親しく願っていたが、皆故人となつてしまった。

全州からは乗合自動車で南原に行った。その頃の乗合自動車は、幌のついた大型のフォードで、無理に付めても七人位しか乗れず、一時間も走ると途中冷却用の水を補充する必要があるといった代物で、到底オムニバスなどと言えるものではなかった。それでも、斯ういう乗合自動車のあるのは稀で、多くの地方はまだ

馬に乗るより外は仕方がなかった頃のことである。南原は朝鮮の有名な小説春香伝の舞台となったところで南部から京城に通ずる要衝であったが、今は鉄道が別のところを通るので、淋しい田舎町に過ぎなかった。それでも城壁の残址があったり、春香伝に出て来る広寒楼があったり、昔の繁栄のおもかげが見られた。唯私の行ったのが淋しい晩秋だったので一層わびしく思わせたのかも知れない。南原では郡庁学校組合金融組合などの視察をすませて、翌朝田尻飛舗両氏と別れて、私は単独で南原から南西の淳昌に行った。田尻君は途を南東にとり、山清を経て晋州に向った。南原から淳昌までは四、五里の距離であったが、私は馬に乗って行った。朝鮮馬は形は小さいが性質が悪くよく人を落とすと聞いていたが、馬子が口を取っていたので、案ずるよりもむが易いという諺の通り、無事淳昌に着いた。淳昌は郡庁や金融組合（信用組合のような農民の金融機関である）はあっても、もの淋しい部落であった。日本旅館が一軒あったので、朝鮮旅宿に投宿して固いオンドルで寝ずにすんだのは幸であった。翌日は、再び馬に乗って潭陽に行った。此処は淳昌より遙に活気のある町で、全北でも有力な地方都邑であるということだった。しかし格別の印象を残していない。潭陽からは人力車にのって、光州に行った。冬枯れの平野の中の新設間もない道路を十里ばかり一日がかりで、前曳と後押しの二人の言葉の通ぜぬ車夫によって運ばれて行った。同行者はなく全く私ひとりの旅であって、朝鮮人車夫に運ばれてゆくのは、あまり気味のよくない旅路であった。途中から細雨が降り出したが、夕刻無事光州につき、今村邦典さんの官舎にとめて貰った。今村さんは試補時代に老人亭官舎で共同生

活をした先輩である。私は当初木島駒蔵さんの官舎に同居させて貰ったが、木島さんが結婚してから、試補の梁山泊といわれた老人亭の官舎に移ったのである。今村さんはその頭領であったのだ。それは大塚さんの官舎の隣に在った大きな官舎で、今村さんの外赤峰哲夫、沢崎修、中村寛猛、大島良士、倉橋しるす、田中直通等の諸君がいた。今村さんは酒好で、赤峰哲夫君を相手に晩酌をやるのを例としていたが、飲むと乱れるので皆から厭がられていた。後には手が顫えるようになり、頭も悪くなって、警察部長を最後に退官してしまった。

光州は全南道庁の所在地で、繁栄していた。季候も暖く、農産物も豊で、市街も美しく賑やかであった。道長官は宮木又七氏。財務出身で、仁川税関長から転任してきた人である。身長の高い風采のあがらぬ方であったが、仁川時代には、ダンスなどをやりなかなかのハイカラだとの評判があった。内務部長は佐々木正太氏で財務部長は吉村謙一郎氏であった。吉村さんは四四年東大出の先輩だが、すこしも風采に頓着せず、後年京城では皆からナツブン（朝鮮語で汚いという意味）さんと愛称された。極めてらい落な、直情径行の風があった。紀州の資産家の息子とかで、金銭には屈托がなく、酒食にはよく金を使ったが、なかなか頭の鋭い、計算にも明るく、しめるところは間違なく締めていた。洋行中も和服で押通し、紋附羽織に袴という格好で大道を闊歩するものだから、倫敦でも伯林でも子供がぞろぞろついて来るので困ったと、一緒になった中村寅之助君が語った。親しみ易い先輩であった。



光州から乗合自動車で松亭里にゆき、そこから湖南線の汽車で木浦に行って一泊した。木浦は賑やかな港町で、家並も殆ど日本の町と変らなかつた。府尹の橋本さんにも会ったのだが、その印象はもう忘れてしまった。木浦では勸業模範場木浦支場にゆき、場長の三原新三博士から陸地棉の話を書いた。朝鮮の農村では昔から棉を栽培していて、手繰りの木棉糸で綿布を織っていたが、その産額は極めて少く朝鮮の衣料は殆ど日本又は外国の紡織布にたよっていた。在来棉は、毛が太く且つ短く紡績原料にならないので、米国から陸地棉の種子を輸入して、比較的湿度も高く、空気もそう乾燥しない南鮮に、その栽培を奨励し、それを原料とする紡績工場を起し、朝鮮の衣料を幾分でも、朝鮮内で生産しようという計画であつたのだ。当時はまだ搖籃時代で模範場では、棉花の肥培管理につきいろいろ苦心を重ねているところであつた。三原さんの努力はその後大きく実を結び、棉花の栽培がひろく南鮮に行われるようになった。

木浦の視察を終つて、一路京城に歸つた。この時始めて地方を廻つてみて感じたことは、普通学校の校長にしても、郡庁の課長（当時は係主任といつていた）にしても、それぞれ立派な見識と豊富な経験の持主で優秀な者が多かつたことだ。これは伊藤公当時の日本国民の韓国扶掖の意識が甚だ高く、その意気込みにおいても、私の行つた頃とは比較にならぬものがあつた故でもあるが、韓国の政治改善に対する伊藤公の熱意が、明治元勲としての勢力で日本政界を動かし、各地方当局をしてつとめて最優秀者を選抜して推薦せしめたからであらう。私はこのような優秀な人々が地方で、熱心に仕事を励んでいるのを見て、甚だたのも

しく感じた。しかしその後継者たるべき若い者は、幾分素質が低下しており、郡の職員にしても学校の教員にしても、むしろ若い朝鮮人の方に優秀な者が多く、ともすれば内地人側が圧倒されそうな傾向が見えていた。これは朝鮮人としては、当時郡の職員か学校教員かが青年の進路として、外に比を見ない程よい地位だつたから、多くの優秀な青年が進んで、これらの地位に就いたからでもある。内地人の若い優秀な職員の養成につとめねばならぬと思つた次第であつた。このことを出張復命書に附言したら、上司からよいことになったと言われた。

参事官時代の出張で、もひとつ書いて置きたいのは、大正七年に拓殖局長官有松英義氏に随従したときのことである。有松氏は寺内内閣の法制局長官で、拓殖局が新設されるとその長官を兼ねた。貴族院議員の操縦にかけては此上なしという手腕の持主だという評判の人であつたが、私の接した有松氏は、如何にも大物らしくどっしりしていて、とても才氣喚発機略縦横の風はなかつた。車中ではひとり静かに窓外の暁物を鑑賞しつつ、漢詩でも考えている格好であつた。随行には園田寛吉村伊勢登の両氏がやつて来た。園田さんは私の同期生田誠君の叔父に当り、明治四二年に東大を出られた先輩で、温厚誠実な典型的な英国風の紳士である。後朝鮮の官に就き、理財課長外事課長勅任参事官平安南道知事などを歴任された。その園田さんに汽車の中で、朝鮮の産物は何ですかと問われて、米その他の農産物、それに牛が沢山いると答えた。事実その頃朝鮮の産業としては農業以外には殆ど見るべきものは無かつたのだ。水産業の興つたのは大正末期以後であ

る。鉱業も見るべきものはなかった。豊富な平壤無煙炭を海軍が採掘したいて、私どもは、官製煉炭と称する海軍の煉炭を暖房用に使用していた位である。第一次世界大戦の末期に出来た兼二浦製鉄所も、価格下落のため採算がとれずに製鋼部門は操業を中止していた。朝鮮に鉱業や重工業が起ったのは、字垣総督になってからである。それまでの朝鮮は、農業本位の実にわびしい経済状態だったのである。

有松氏の視察に従って、湖南線京仁線京義線京元線から京釜線まで、鉄道の通ずる限り、隈なく見て歩いた。当時汽車は元山までしか通ぜず、自動車で永典あたりまで行った。斯ういう視察、宿泊等の準備はすべて、鉄道の旅客課長安藤又三郎氏がやったので、私は唯ついて歩いただけだった。この安藤さんは金剛山の景勝をひろく紹介した功労者である。金剛山の雄大な奇勝は古くから知られ、文人墨客の遊んだ者も多かったが極めて交通不便なため、探勝は容易でなかった。安藤さんは天下無比の景勝を内外に紹介する一方、早くから外金剛長安寺にホテルやバンガローを設けて探勝の便を図ったり、探勝道路の開鑿や内金剛えの電気鉄道の建設に尽力したりした。その結果、内外多数の探勝客が容易に、この景勝に遊ぶことができるようになったのである。有松氏は東萊温泉でお別れするとき、真珠のネックタイピンとネックタイとを贈られた。有松氏からは地方視察の要領順を見習ったが、尚地方視察にゆき格別厄介を掛けた人々には、何か贈物をして謝意を表すべきものであることをも訓えられたわけである。

なおその頃拓殖局出入の記者団が視察にやって来た時にも、釜山から新義州まで案内した。これも賑やか

な愉快な旅行だった。東大教授の上杉慎吉博士が来たときは、博士と二人並んで馬車に乗り京城市内を案内した。当時はまだ総督府には自動車はなかった。二頭の馬車で馭者と馬丁とを従えて、大道を走るのもなかなか威勢のよいものであった。大学生の頃、本郷通りを、岩崎家の小さい令嬢が、二頭曳きの馬車で疾走するのを、聊か憎らしく眺めたのであったが、私は上杉博士と馬車で本郷通りを疾駆して快感を味わったわけである。

○

参事官時代には、長い間高等土地調査委員会委員をつとめた。この委員会は、明治四十三年以来八年の継続事業をして行われた土地調査（林野は除かれていた）が、課税の基礎となる地価の設定や地籍図の作製などの外、土地の境界や所有権の帰属をも査定したので、この査定に不服ある者は、各道に設けあった地方土地調査委員会という一種の行政裁判機関に出訴し、裁決を求めることとなっていたが、その裁決に不服ある者が更に覆審を求めるため出訴する委員会である。高等土地調査委員会は三部位に分れ、各部五名の委員で事件の審理に当った。朝鮮の古い慣習や古文記などの証拠の判定はなかなかむづかしいものであったが、私の属した部には、吉田平治郎という老練な常識に富んだ裁判官が加わっていたので、委員会の審理は概して順調に運ばれた。後に林野についても調査が行われ、同趣旨の林野調査委員会が設けられ、私もその委員になった。この方は覆審でなく単級審であった。

又その頃参事官室の管掌事務に中樞院の旧慣調査があった。以前の取調局が廃止された後は、朝鮮の学者耆宿を中樞院囑託として調査に当らせていたのである。当時の朝鮮民事令は親族相続については慣習によることとなっていたので、時々司法部から慣習につき質問を受けることもあった。小田幹次郎氏が中心となりこれらの学者が努力して、金石文集覽、朝鮮圖書解題、朝鮮語辞典の編さん出版も行かれ、奎章閣文庫の整理保存など、甚だ地味な仕事で文化的貢献をしていた。しかし、当時その業績があまり認められなかったのは、気の毒であった。

○

若い参事官時代の仕事のひとつに、朝鮮行政法と称する著作がある。それは大正七年頃と思うが、総務局長の荻田さんから、東洋協会専門学校京城分校で行政法の講義をせよと命ぜられた。荻田さんは校長事務取扱だった。一応辞退したのだが、参事官をしていて行政法の講義が出来ぬ筈はないと、講師を押しつけられてしまった。この学校は初め台湾協会専門学校分校と言ひ、併合前から日本人に朝鮮語や朝鮮事情を教え、地方第一線で活躍する金融組合理事などを養成していたのだ。私が講師となった頃は、専修学校となり、むしろ地方庁勤務の職員を養成するものになっていた。そんな事情で仕方なしに、行政法の講義をすることになったので、独乙行政法を種本にして案をつくって、講義をした。講師手当は月一〇円位であったようにおもふ。学校の世話是我孫子勝先生が当たっていた。私の講義は一年か二年ですんだ。この学校が経学院に近い

明倫洞に立派な校舎を新築して、私立の高等商業学校として新発足したからである。大和町の旧校舎は総督府の官吏養成所となった。この養成所でも。私は屢実務の講義をした。

さて私の講義はやめになったが、その頃東京の巖松堂の京城支店の新井支店長が来て、しきりに行政法の著作をすすめるので、ツイうかうかと引受けてしまった。そこで或る年年末年始の休暇を利用して、原稿整理のため慶南の馬山に行った。馬山港は鎮海灣にのぞみ、日露戦争当時は重要な役割を果たしたところだが私の行った頃は静かな地方の小港に過ぎなかった。汽車は三浪津から馬山までしか通ぜず、道庁のある晋州までは陸路二十数里を、乗合自動車か馬背かで行かねばならなかった。馬山は、その晋州方面に出入する旅客の足溜まりとして、旅館も繁昌したらしく、望月と称する全鮮に名の響いた大旅館もあった。しかし年末には旅客の往来もなく、極めてのんびりとしていた。私は東京旅館と称する海ぞい旅館に止宿して、ゆっくり勉強した。真冬でも氷の張らぬ程の暖かさ、風も少く気持よい冬を過ごすことができた。おかげで勉強が進み一冬の休暇で大体の原稿が纏まったので、京城に帰ってから、原稿を新井君に渡した。もともと原稿料が目的でなかったので、出版について何の話合もせずに原稿を渡したのであったが、新井君が苦心して東京の出版と遜色のない立派な三〇〇頁程の書物として売出すと、案外評判がよく、売行行きも朝鮮の出版物としては上々の方だったので、友人連から印税収入が多いように、推測されるのは心苦しかった。新井君は現金百円と本を二〇部持って来ただけである。又その後第二版を出すとき百円くれた。第三版も出た。此の時



は審議室（参事官室が斯う変っていた）の西岡芳次郎君が現行法制の訂正をしてくれたのだが、新井君はお礼をもって来ないので、西岡君にお礼も出来なかった。著書を出すときには、最初にハッキリした出版契約を結ぶべきものだと思つたことである。

その後法学専門学校ができ、京城大学の法文学部も出来、段々立派な行政法の教授も来たが、私のこの小著は案外に実務家から重宝がられ、第二次大戦の頃でも、あれを入手したいが何とかならぬかと、相談を受けたことが再々あった。

## 八 万 歳 騒 動

大正八年（一九一九）一月李大王の計が発表された。あまり突然だったので、毒殺説が流布され、（事情通は腹上死だとも噂したが）疑心暗鬼の空氣が一般にひろがった。これより少し前から第一次大戦の講和会議が開かれ、米国のウエルソン大統領提唱にかかる國際連盟が論議の中心となり独乙占領下の諸民族の去就は、その自ら決するところに依るべきであると主張されていた。この民族自決主義の余波は、世界にひろく伝播し、段々と朝鮮にも波及して来て、いろいろな流言が行なはれるに至った。朝鮮でも民衆がその意思を明にさえすれば、米国等の援助で、すぐにでも独立できるものと信じ、中にはやがてウエルソン大統領が独

立援助のため飛んで来るだらうから、目標にと北漢山の一角で数日白煙を揚げてみるという者も出づるに至った。斯かる機会を捉えて、海外の独立運動者は力強く、朝鮮民衆特に日本在留の学生に付き掛けた。そこで東京の学生達は、二月八日大会を開き独立運動の計画を定め、それぞれ帰郷して一斉蜂起の日を待った。当時の憲兵警察はこれらの情報を適時に探知することができなかったらしく、総督府では事前の対策は無かつたようだ。三月一日李大王の国葬に参列するため上ってきた道長官を集めて打合会議があつたが、その席上各長官は、予め総督府から調査の命を受けていた日本留學生の帰郷後の動向について、口を揃えて憂うべきものなしと答申した。道庁側には警察権がなく情報蒐集の手段もなかったせいかも知れないが、要するに当時の役所には斯かる思想問題を理解するだけの知識と用意とを欠いていたのではなからうか。

三月一日の午後天道教の教主孫へい熙をはじめキリスト教などの指導者三十余名が、光化門通りの料亭明月館に集つて、独立宣言を行った。独立宣言文は崔南善の起草したもので、なかなか堂々たるものであった。宣言文にはこの日集つた天道教キリスト教などの長老三十余名が署名した。その宣言の中で一切の行動あくまで秩序を尊重すべきことを強調していた。實際この運動は、はじめは単なる群衆の示威運動であつた。示威方法としては民衆が大勢集つて官庁の前で朝鮮独立万歳を連呼するといふものであつた。これは印度で反英運動が、ガンヂー翁の無抵抗運動として盛に行なはれていたのを見ならつた、宗教家の理想だつたのだ。しかし群衆の性質上官憲の威力の少い地方では、段々主唱者の期待に反して、暴行が行なはれるようになり

警察官の殺されたり、駐在所が襲撃されるという事態にまで、発展して行った。

私は三月一日の夕刻、いつもの通り踵路のパゴタ公園の青木堂で毎月一日催される一高会に出かけた。踵路通りには群衆で一杯であった。二日後に行なはれる国葬に地方からこんな多勢の人々が集ったのかと不思議に思った。勅任官の制服を着た朝鮮人長官など、路上で群衆にとりまかれ万歳万歳と叫ばれて面喰ったということがあるが、暴行その他不穏の空気は感ぜられなかった。一高会は夜の九時散会したが外に出てみると公園には群衆の影はなく、竜山から派遣された歩兵数名が銃を組んで立てて、焚き火にあたっていたので、何事か起ったのかと驚いた。私達は何も知らずに、青木堂の一室で、牛肉をつつき寮歌を唱って気焰をあげていたのであった。それから皆静になった街を歩いてそれぞれ帰宅した。それほど私達ものん気であったが独立運動も暴動ではなかつた。

京城では一月ばかり騒擾がつづいた。朝鮮人店舗の多い踵路通りでは、皆店舗を閉ぢていた。店を開くと何者かが来てピストルを擬して閉戸を強制したといひ、店を閉ぢた者が全部自ら進んで、反日運動に参加したわけではないらしい。唯平素賑やかな商店街が、日中閉戸して人が通らぬ光景は、何となく空気が重く陰鬱に感じられた。私はそんな時でも单身踵路通りを歩いてみたが危害を加える者もなく、又夜は花月の宴会に出て夜おそく帰ることもあったが、別段不気味なことはなかった。むしろ警戒に派遣されて来た兵隊の方が、何事が起るのかと心配している風であった。

地方に波及していった運動は、無智な民衆に対する煽動として盛となり、官庁側に対する暴行頻発し、地方の治安を乱されるようになったので、山県政務総盟は上京して、政府に憲兵補助として歩兵部隊の派遣を求め、これを各地に駐屯せしめて、漸く地方の平静を取戻すことができた。併合当時には、郡庁所在地のよくな小都邑にまで、少数の歩兵が駐屯していたのだそうだが、私の行なった大正五年頃には、既に全部本来の衛戍地に集結して、これらの小都邑には数名の憲兵が若干の憲兵補助員（朝鮮人）と兵に、警察の職務を行っていたのであった。

新に内地から憲兵補助として派遣されてきた兵隊は、戦争にでも出るつもりで意気軒昂としてやって来たらしく、朝鮮統治という政治的立場は勿論、民衆に対する警察の任務の性質が理解できず、兎角民衆を暴徒視する傾向があり、思はぬ不祥事を起したことがあった。そのひとつに水原事件と呼ばれるものがある。水原警察署の警部が单身郊外のあるキリスト教の盛であった部落にゆき、村人を集めて民族自決主義は独乙の占領国に適用されるもので、朝鮮には適用なきものだから、焰動に乗って盲動しないように説諭した。説諭が無事に終り、その警部が自転車に乗って帰途に就いたところ、群衆が警部の後姿に石を投げつけ、それが警部の後頭に当って顛倒したところ、大勢寄ってたかって、警部を石で惨殺してしまった。（畢丸まで叩きつぶしてあったという）。内地からの派遣されて水原に着いて間もない歩兵部隊の若い中尉は、之を聞いて早速兵を率いて、この部落にゆき、報復のため部落の壮年男子を集めて村の教会に閉ぢこめて銃殺し、部落の



家々は火をつけて焼いたのであった。この報告を受けた総督は大に驚き、夜中即刻矢島杉造君を軍参謀と共に、現地に急行せしめ、実情を調査させた。矢島君の報告をきいた総督は事の重大なるを大に憂慮し、教会及び民家の復興のため資金を与え、郡守以下の職員をして、被害者の家族を慰らるに慰藉せしめるなど、善後措置に手をつくした。キリスト教徒が被害者だったので実情は直に米国宣教師によって米国その他に報告されたが、国際的の注目を惹くに到らなかった。恰度この頃印度のアムリツアで、ダイヤ將軍の率いる英国軍隊が二万余印度群衆を機関銃で銃撃し、多数の印度人が殺されるという大事件が起ったので、世界の眼はむしろ其の方に向っていたからでもあったらう。水原事件の話は、その頃矢島君から直接聞いたのである。

群衆の示威運動は二ヶ月の後止み、地方も平静に帰した。が陰微の間に反日思想の鼓吹、独立運動資金の強奪等は、その後長期間続いたが、群衆運動の鎮静に依って、事件は一応落着いたので、原首相は朝鮮統治の刷新を企図し、長谷川総督山県政務総監の辞意を認め、予備の海軍大将齋藤実男爵を総督に、内務次官水野練太郎氏を政務総監に任命した。

○

この事件によって、從來表面に出なかった民衆の施政に対する不満が、公然と口にされるようになった。その不平の第一は憲兵警察に関するものであった。末端で日常直接地方の民衆に接する憲兵達の、老婆親切的な気短な押しつけがましい行動は、民衆には窮屈な小うるさい干渉としか受取られず、人心の動きを察

知できない憲兵が、職務に忠実であればある程、内地人にも朝鮮人にも圧迫抑制がひどいと感じられていたのである。最高部においても、軍人としての性格上万事保守的で併合前後の治安第一主義が情性としてつき、しかも日露戦役中の兵士の粗暴な行動がひどく民衆から嫌厭されていたことが尾を曳いていた上に、その仕事も独りよがりの親切善意の押し売りが多く、民衆の意向は殆ど顧みられなかったので、武断政治の色彩が濃く民衆の怨嗟不満はうつ積していた実情であった。

原敬内閣は、総督は現役の陸海軍大将に限るとする制度を廃止すると同時に、憲兵警察を普通の警察に改めた。当時上京中の山県総監と宇佐美長官とが、大に尽力した。警察制度改正要綱は大塚参事官が作成し、それを持って宇佐美さんが上京した。宇佐美さんと大塚さんとは、二人以外には通用せぬ暗号電報で連絡し、極秘の間に交渉を進めていた。宇佐美さんの内報に基き、大塚さんは人のいない休日登庁し、張間さんと私とに手伝はせて、制度改正に伴う法令案など準備した。警務総監部の警務課長国友尚謙氏を、他の憲兵将校に知られないように、極秘の間に呼び出し、警察官の配置、服装、装備などの準備をすすめたのであった。警察制度の改正が円滑且順調に実施された陰には、大塚さんと国友氏との呼吸が合って、うまく準備の協力が行なはれたことが大きな原因となっている。

もひとつの大きな不満は差別待遇であった。併合以来の施政はすべて朝鮮の実情に則することを根本としていたので、在留日本人が略内地並みの取扱を受けるのに比べると、形式的には朝鮮人に対する行政上の取

扱は一段低く定められていた。これが、心なき日本人の優越感を以て朝鮮人に接する態度に対する反感と相まって、差別待遇についての不満は熾烈であった。特に教育については、この不満が盛であった。例えば日本人小学校は六年制の義務教育なのに、朝鮮人の普通学校は四年制で義務教育ではない。これは畢竟故意に朝鮮人の智能を低下せしめ、いつまでも朝鮮人を低い地位に置かうとする政策である、といった誤解である。これは實際は、教育設備の充実は朝鮮人の負担力が許さないから、まづ四年制で発足し、なるべく多くの者に教育を与えたいというだけのことであった。日本が明治五年の学制頒布以来二十数年を経て、漸く六年義務制を採用したことを考えれば、たとえ経済水準が上ったとしても、施政改善以来僅か数年に過ぎないのだから、その程度は知れたもので民衆の生活状態もさまで向上していない実情で、この不満は必ずしも理由あるものとは認められないのであるが、上流階級の教育に対する熱心さは、このような不平を嵩じさせていたのである。伊藤公も随分この希望を聞かされていたが、浅くともひろく一般民衆に教育を与える方針は変えなかった。近年米国の学者ドラッカーは教育の普及進歩が産業成長の根本だと言っているのを見ても、伊藤公の政策は正しかったことがわかる。この点英国の印度統治と全く対照的であった。印度では早くから大学を設け、上流階級の者に満足を与えたが、数億の一般大衆は、英国の統治数百年の後も概ね文盲且貧困のままに置かれていたのである。

○

なお此の時民衆が真実独立できると思い込んだ理由のひとつに、財政独立ということがあった。併合以来朝鮮の経費不足を補うため、一般会計から毎年一定額を朝鮮総督府の特別会計に繰入れてきたが、大蔵省の強い要望によって、当初二十万位あった繰入金を毎年通減してゆき、遂に大正八年度からは繰入金はないことになり、朝鮮の経費は朝鮮の収入で賄うこととした。これが所謂財政独立である。従来朝鮮が独立し得ない重大な原因は、財政が貧弱で政治の費用を賄い得ないことにあったのだが、今やその重大な支障は除去され財政的に独立し得るに至ったのだから、政治的にも独立し得る筈だと解されたのである。しかしこの補充金の打切は甚だ無理な事柄であって、当時の朝鮮はまだ開発が著しく不十分で民衆の生活水準は甚だ低かった。小学校でさえも郡に一校位しかなかった実情で、到底近代的国家として自立し得るものではなかった。私は当時屢東大出の弁護士金雨英君（後官途に就き道参与官となった）と語り合ったが、私はいつも、朝鮮が独立乃至自治を得るまでには、まだ文化及び経済の実力充実に努めねばならない。一高の校長新渡戸先生（東大で植民政策を講じていた）は、私達に植民地は果実のようなものだ。熟すれば、自然を樹から落ちると語った。文化が向上し経済の進まない前に、仮に自治を得たとしても、民衆の幸福は期待できないだらうと語るのを常とした。實際朝鮮が独力で民族の運命を開いてゆくことは絶望に近かった。それが当時の情勢であった。だから齋藤総督になると、庶政刷新に必要な経費の不足を補うため、再び一般会計から補充金を受入れることになり、結局財政独立は実現しなかった。

○  
これからずかすかの民衆の不満は、総督府官制の改正以下の庶政刷新によって、或る程度癒やされた。この万歳騒動を契機として、朝鮮の新しい時代がはじまり、齋藤新総督の異常な努力が実を結び、数年の後は文化経済が着々として向上していった。

## 九 齋 藤 総 督

大正八年八月十九日朝鮮の民衆に対し秋毫の差異あることなく一視同仁である旨の詔勅が發布され、総督府官制が改正された。総督の陸海軍部隊の統卒権を廃止し、総督は現役の陸海軍大將に限らず、文官でもよいことになり、憲兵警察も廃止された。それで千葉県一宮の別荘で悠々自適していた齋藤実海軍大將が総督に、内務次官水野鍊太郎氏が政務総監に任ぜられた。

齋藤さんは、私の一高時代三年間寄宿寮で起居を共にした入間野武雄君の従兄弟である。一年の時入間野君につれられて、同室の者が揃って霞関の海軍大臣官舎に赴き、二階でお正月の馳走になり、翌年は新築間もない四谷仲町の齋藤さんの私邸を訪れ、二階で齋藤夫人から馳走になったことがある。入間野君は郷里の水沢から上京して、齋藤さんの官舎から一中に通学し、一高に入学したのであった。齋藤さんとは年齢も大

きく違い、且躰軀も小柄だったので、齋藤さんは入間野君の叔父ということ通っていた。齋藤さんが総督に任命されると、入間野君から、今度従兄弟が朝鮮にゆくことになったからよろしく頼むとの葉書が来た。私は齋藤さんに随って誰か来るのかと待っていたら、それは総督自身のことであった。

大正八年九月齋藤水野両氏が、新任の局長以下の官僚を引きつれ、威風堂々と朝鮮に乗込んだ。一行が南大門駅外に出ると忽ち爆弾の洗礼を受けたのである。数名の負傷者を出したが、齋藤さんは爆弾の破片が海軍大將の通常礼装の剣帯の背部に当たただけで幸に微傷をも負はれず夫人と並んで馬車に乗り予定の行列を整え、微笑を以て沿道の歓迎に答えながら、倭城台の官舎に入り、豪胆さを天下に示した。私が駅のホームに新首脳部を迎えた後、駅の構外に出てからの事件だったので、私は爆弾事件の光景を目撃した。竜山砲兵隊の発する礼砲の響や京城府の打上げる花火のとどろきの交錯する中で、突然大きな轟音がした。齋藤督総夫妻の乗った馬車が将に動き出すとする間、姜宇奎の投じた爆弾が炸裂したのであった。水野氏も続く馬車で行列に加る予定であったが、馬が傷いたので自動車で別途官邸に入った。総督の着任については、初めから不穩の風聞があったらしく、一行の乗った特別列車には前後の車に、若干の歩兵部隊が乗車したし、警戒も厳重であったが、遂にこのような不幸な事件が起きたのは、憲兵警察廃止後の新警察がまだ十分確立されず、警戒取締りの手配が十分でなかったからである。総督一行より先に京城に着任して、新警察の基礎を固める筈であった野口警務局長が、病んで大阪に止まっていたので、京城の警戒の責任はすべて時永浦三警



務課長の双肩にあった。時永さんは、すこし前に警務総監部に転じ、新制度樹立の努力をしていたが、それまでは内務系統の仕事をした人で、警察はズブの素人であった。沿道の警戒については、新総督より何か注文があったのか、時永さんも警戒の方法には随分苦心したようである。

野口警務局長は遂に大阪で死去した。内務局長赤池濃氏が警務局長となり、参事官の大塚さんが内務局長となった。赤池さんは非常に短気で怒りばいので、課長連は皆困った。その課長連との間や、局長と民間人との中間に立って、緩和地帯となったのが、高等官三等で局附事務官の丸山鶴吉氏であった。丸山さんはいつも上気したように、大きな禿頭をテカテカさせた元気な姿で、極めて快活に、いろいろな階層の人々とよく飲みよく談じ、意思の疏通に努力した。万歳騒擾以来、固く凝っていた民間の空気をやわらげるのに、丸山さんの努力は高く評価さるべきである。しかし、何といっても、斎藤総督の、温厚寛仁の態度が魅力であった。斎藤さんはゆったりとした鷹揚なニコニコ顔で、色々な方面の人々に接して話を聞いてやり、特に朝鮮の人々には老若を問わず、いつも心よく引見して、其の語るところを臆劫がらずに聞いた。又斎藤さんも夫人も英語ができ、外国人と会うのを少しも苦にされず、宣教師その他朝鮮を訪れる外国人は、官邸に招いて交歓するのを例としたので、斎藤さんの統治方針は朝鮮人も段々理解するようになり、又外国からも認められ、民衆は平和のうちに文化経済の向上に著しき進歩を遂げたのである。しかし、最初は満洲側よりする反日運動はなかなか盛で、彼等が鮮内に侵入し来つて、強盗殺人などの暴行頻発し、国境警備の警察官の

労苦は著しいものがあつた。丸山さんの作と謂はれる国境警備の唄が、此の頃広く唱はれた。

○

私は斎藤総督夫妻には比較的によく親近した。妻文子の父岡野富士松が海軍軍人で、斎藤さんの大臣時代に海軍省に勤務したこともあり、割合によく斎藤さんを知っていたと見え、私達が結婚したとき、岡野の父から斎藤さんに何分よろしくと手紙を出したので、新婚の土師盛貞夫妻と私達夫妻をわざわざ晩餐に招いて下さったことがある。私達の結婚披露のときも、大塚さんが頼んだので、旅行から京城下車をされるとすぐ朝鮮ホテルに駆けつけて、宴に列席して下さった。その席で夫人に入間野君とは一高の同室であった。海軍大臣官舎にも四谷の私邸にもお伺したことがあると語ったところ、夫人は其の後私に会はれる度毎に、入間野も元気でやっているから、東京に出たら一度遊びに来るように言はれた。その後暫くして私は学務局に転じ、宗教課長をも兼ねるようになったので、総督官邸に於ける外国宣教師の招宴には夫妻で必ず参加したので、斎藤総督夫妻に親近する機会は多かった。

斎藤さんは平素は無口であるが、酒を飲むと雄弁になって、真実の意中を吐露された。普段は大低のことは部下まかせで、細事には干渉されなかったので、斎藤さんの肚の中はわからぬことが多かった。仮令自分の考えとは反対の案でも、大局に影響のない事柄は、何も言はずに部下の判断を信頼して、決裁するというやり方であった。私が後に拓務省に勤めた頃、政務次官の八角三郎海軍中尉や海軍次官の山本五十六中将か



ら若き日の斎藤さんのことを聞いたが、それによると、斎藤さんが大佐で海軍次官になった頃は、非常に頭の鋭いきれ者で、海軍省をひとりで切って廻したという。日露戦争をやり抜いた功労者であったわけだ。その頃の斎藤さんは総督時代とはまるで異っていたようだ。つまり斎藤さんは大将になり大臣になり総督になるに従って段々大成されたのであらう。

斎藤さんが二度目の総督をやめられる前、児玉政務総監官邸で、若い官人夫妻達が総督夫妻を主賓として晩餐会を催したことがあった。当時政務総監邸の料理番は、日本料理の巧者であったので、若い夫人達が料理を習っていたので、夫人達が習った料理で総督夫妻をもてなそうという趣旨の会合であった。後から考えると斎藤総督は既に辞意を固めていたのであらう。此の晩は非常な御機嫌で、随分酒を飲んだ、斎藤さんの健康を心配されていつも酒量を制限されるという総督夫人も、此の時は若い夫人達に取巻かれて、やはり御機嫌だったので、総督の酒量制限も出来なかったからかも知れぬ。夜の十一時過ぎまで落着いて酒を飲み、色々昔話をきかせてくれた。明治天皇はなかなか海軍服を着られなかったので、凱旋観艦式にも陸軍式の大元帥服を着られるのではないかと、海軍では心配していたところ、海軍式の服を着て来られ、海軍が大喜びした話、井上馨大将を元帥に奏請したが、天皇は裁可しない。天皇の考えは東郷大将も元帥にと望んでいられることは判っているが、海軍としては序列の関係上、井上大将を先に元帥にする必要があったので、頑張つて到頭裁可を得た話など、興味深いものがあった。この会の後間もなく斎藤さんは上京し、辞任してしまっ

た。後任は宇垣大将である。それで斎藤さんは、後日閑を得て、朝鮮の人々に挨拶するため、夫妻お揃いで来鮮された。官民合同の歓迎会が景福宮内慶会楼で催されたとき、主賓としての挨拶がすんでから、微くんを帯びた斎藤さんは、若い官吏のところによって来て、朝鮮統治は落ちついてやらねば駄目、目先の人気取り政策は有害があると、繰り返し訓戒されたのであった。

斎藤さんは前後十年間朝鮮統治に当った。大正の末期にジュネーブの海軍軍縮隊備会議に、全権として出席され、その不在中は陸軍大臣の宇垣大将が総督代理となった。しかし斎藤さんは帰国すると総督を辞任したが、二年後山梨総督の後をうけて再び総督として来鮮された。山梨総督の失敗で傷けられた統治の信用を恢復するため、懇請されて出馬し、統治の刷新に努力されたが、昭和六年満洲事変の前夜と称せられる天宝山事件や平壤の華僑襲撃事件など、何となく風雲急であった頃、児玉総監と共に朝鮮を引きあげられた。前後十年、老軀を携けて朝鮮民衆のために努力をされたので、民衆の斎藤さんに対する信望は極めて厚く、その温顔は慈父のような印象を与えた。唯在任があまり長かったので、その末期には幾分飽かれ気味であった。庶政の刷新地方自治への前進など、相当思いきった政策も採ったのであるが、民衆に昔日ほどの感銘を与えなかったようだ。政治には新味が不可欠の要素である。斎藤さんの閱歴声望を以てしても、この大原則の例外たり得なかったのだ。

斎藤さんは昭和七年には、五・一五事件の跡始末の内閣首班となり、後内大臣として旋風吹きすさぶ物

騒な時代に、国家の重鎮として重責に膺っていたが、遂に昭和十一年二月二十六日凶変に遇って歿せられた。第二次世界大戦の悲しむべき結末を見るにつけ、斎藤さん健在なりしならばと、残念に堪えぬ。

○

爆弾についてはもひとつ思ひがある。大正九年頃のことである。台湾総督府の羽生雅則君（一高の同期で後の内務次官）がやってきて、参事官室で歓談しているとき、突然ボスンという大きな音がした。羽生君は驚いて何だらと言ったので、私は爆弾だらうと答えたが立上りもしなかった。爆弾にしても遠くのこと騒ぐにあたらぬと思ったのである。ところが、それは参事官から極近い会計課長室前の廊下であった。爆弾は破裂はしたが木造二階の床であったから衝撃がなく音も小さく床板に穴をあけたに過ぎなかった。恰度食後で菊山会計課長は不在だったし、近くに人もいなかったので負傷者も出なかった。この犯人は後に上海で捕ったが、其の言うところによれば、会計課あたりか一番奥まっていたので、総督室だと思って投弾した。そして新義州を脱出するとき、小児を伴った内地婦人に話しかけ、小児を抱いてやったり何かして、その婦人が税関検査を受ける手伝をして、警察の眼をくらましたのだとのことである。兎に角羽生君はこの事件で、朝鮮統治は台湾とは大に趣を異にすることを知ったようだった。

## 一〇 とりどりの風格をもつ政務総監

斎藤総督はよく女房役の政務総監をとり替えた。初めの水野鍊太郎氏は在任一年有余にして内務大臣となつて辞職し、有吉忠一氏が後任となった。水野氏は朝鮮の老人を官邸に集めて漢詩会をやったり、朝鮮美術展覧会をはじめたり、騒擾後固くなっていた空気を和げる努力をしたが、一般民衆にはそう親しまれなかったようだ。有吉氏は前に統監府の総務長官をしていて、政務総監は二度目の朝鮮勤めである。ある時有吉さんが朝鮮婦人特に若い婦人が美しくなつて、顔が明るく表情のイキイキしているのに叱驚したと語られたことがある。十年前は長い裳を引きずり顔は被衣で隠して歩いていたが、今はスカートのような短い裳でハイヒールを穿いて濶歩しているのだ。その姿はまことに美しく世界のどの少女にも劣るものではなかった。有吉さんは西洋映画の影響ではないかと言はれたが、私はそれだけでなく、有吉さんの居ない十年の間にそれだけ生活水準が向上したことを示すものだと思う。政治が安定し経済が高まれば、民衆の表情は自然と明るくなるものだ。それから有吉さんについて想起することは、はじめて公設運動場を設けたことである。有吉さんの発案で京城府が東大門外に設けたそれは、野球、蹴球のグラウンドになったり、陸上競技場になったり今から見れば甚だ不完全なものであったが、これによって青年の運動競技の熱を高めたことは著しいもので

あった。運動場の運営については矢島杉造君が骨を折った。

有吉さんは、よく部下の意見を容れ、積極的意慾的に、いろいろ計画実行されたが、大正十三年六月憲政会内閣が成立すると辞任された。後任下岡忠治氏は親友浜口雄幸首相が、下岡氏の手腕を惜しみ引張り出したのだという噂があった。下岡さんの功績は、産米増殖計画の樹立である。このような大計画は時の内閣及び与党に有力な発言のできた下岡氏にして始めて可能であったのだらう。が不幸にして中途病歿した。そこで湯浅倉平氏が後任の総監となった。この総監は齋藤さんが自身で選んだものだ。秘書官藤原喜蔵君の話によると、当時多数の自薦他薦の候補者があったが、齋藤さんは湯浅氏一人を候補とし、湯浅氏がなかなか承知しないのを、暮夜ひそかに牛込矢来の浪宅を訪れ、膝づめで出馬を懇請したので、湯浅さんはその熱誠に動かされて就任を承諾したのだそうだ。この事は後日政友会内閣ができ、山梨半造大將が総督となったとき、つよく留任を懇請されたのを固辞して断然辞任されたが、その帰東に際し催された茶の会で、湯浅さんは熱弁を揮い、デルフォイの神殿には、己を知れを掲げられてある。士は己を知る者のために死すともいう。私は齋藤総督の熱誠に動かされて朝鮮に來たのである。齋藤総督無き後の朝鮮に在ることは私の信念に反するので、辞任せざるを得なかったと、力強い演説をしたのを見てもうかがはれる。この熱烈な演説は列席者に異常の感銘を与え、答辞に立った金谷範三大將も、感激のあまり涙を流して、とぎれとぎれの熱弁を揮ったのであった。そんなわけで、事ある場合は時に勇猛心を出す、平素はことに物静かな、居るか居らぬかわ

からぬような、平常は紺碧を湛うる潭水の如く、事あれば巖に激する奔流の如く、どつちかと言えば普段は消極的な印象を与えていた。私は湯浅さんが着任当時文書課長であったが、間もなく海外出張を命ぜられ、一年近くもの間朝鮮にいなかった。直接湯浅さんの薫陶を受ける機会はなかった。湯浅さんの評判は、辞任後俄然なくなった。贈物は小包で贈主に送り返したとか、或は官邸にその儘置いてゆかれたとか、その廉潔さが評判になった。湯浅さんが退官後浪人時代に、一二度田村町の総督府事務所に來られたことがあつた。いつも用事がすむと、私達若い者を相手に魚釣の話に興じられるのであるが、辞去の際役所の自動車があいているから、お宅まで送らせまうと言っても、キッパリ拒絶して電車で帰るのを例とした。当時はどこも自動車に不自由せず、猫も杓子も乗りたがる時代であった。つい最近まで政務総監として不自由なく自動車を使っていた人としては、なかなか出来ないところである。

湯浅さんは、その後勅選議員となり会計検査院長となったが、齋藤さんが内大臣になると宮内大臣となった。二・二六事件で齋藤さんが横死されると、その後を襲って内大臣となり長いこと天皇輔弼の重責に在った。私は、内大臣時代に二度ばかり朝鮮にいた人々と共にお目にかかったことがあった。その頃既に幾分健康を害して居られたようだった。湯浅さんの口から聞いたわけでないが、私の印象では、湯浅さんは天皇の御心配を身を以て心配され、遂に健康を害されたのであらうという気がする。私達との会合の際、湯浅さんは独り言のように、陸軍が陸軍というのがどれがほんとうの陸軍なのかわからぬので困ると言はれた。後白



河法皇は加茂川の流れと叡山の山法師とが儘にならぬのを嘆かれたと言う。湯浅さんは、無統制の陸軍を抱いて国家の前途どうなるかと、苦慮しつづけていたのだらう。二・二六事件のときも、夜夜睡りなり難し国家の前途を奈何せむと嘆かれた。遂に病に堪えず職を退き、病歿してしまった。実に惜しい人であった。

湯浅さんについて語るときは、湯浅夫人のことも一緒に語らねばならぬ。私は湯浅夫人に度々お目にかかる機会はなかったが、夫人は世の所謂高官夫人とは全く異なる行き方をしていた。ほんとうの意味の賢母良妻型であった。湯浅さんが政務総監をやめて浪人となった頃、一度牛込矢来のお宅で湯浅夫人に会ったことがある。私の訪れに夫人は髪も整えず普段着のまま、すぐ玄関に出て来られ、極めて率直に語られた。孫の世話でとても忙しいというような話もされた。京城大和町の局舎でも夫人はなかなか人前に出なかった。内外の夫人連の訪問に己を得ず応接するといった風で、自ら進んで社交に動くことはなかったようだ。つまり夫人の内助は、専ら家庭に在ってよく家を守り、質素な生活で、湯浅さんをして後顧の憂なく、外で活動せしめることに在ったのだ。

この行き方と全く対蹠的なのは斎藤総督夫人である。斎藤夫人は英語が達者で、貴族的教養を身につけていて、西欧的社交儀礼に明るく、外国人との接触も極めて鮮やかであった。いつも総督と一緒に、多くの人々と交歓され、接する人々のすべてによい印象を与えた。斎藤総督の朝鮮統治が内外の信望を厚くしたのも夫人の功が大きく与っていると思はれる。

児玉政務総監は、極めて明朗快活な、少しも物事に屈託せぬ、お話は半分以上笑声が交るといった、陽気な性格の人であった。児玉さんは併合前後寺内総督を輔けて大功があったが、山梨総督の二代目政務総監として再び朝鮮に来られたのである。池上老総監が府委員として東上中築地の客舎で頓死された後、政府はその後任に苦んだ。当時山梨総督や池上前総監の身边にとかくの風評があったからである。児玉さんは斎藤前総監に口説かれて、世評を顧慮することなく、敢えて総監に就任したのだと伝えられた。児玉さんは就任後、総督を助けて信用回復に苦心されたのであるが、山梨総督は遂に辞任の止むなきに至り、斎藤さんが総督として再び来鮮された後も引つづき政務総監に止まり、昭和六年斎藤総督と同時に辞任された。児玉さんの仕事で一言したいのは、或る程度の朝鮮の自治を認めようと計画したことである。この案は、朝鮮総督府の国家予算を二分し、教育衛生土木産業等直接民衆の福祉に関連あるものは、これを国の予算からはづして、朝鮮地方費なる一種の財団を設け、その収入支出については民選議員による朝鮮評議会で議決せしめようとするものであった。朝鮮在任住者に利害の關係深き問題を、朝鮮在任住者に議員の選挙権なき帝国議会で審議せしめるよりも、朝鮮在住者から選出した議員が京城に集まって、総督の説明をきき直接審議する方が、余程合理的であり、朝鮮統治開始以来二十余年、文化及び経済が相当進歩し、朝鮮の人々も統治の方針を理解するに至ったので、或る程度政治に参与せしめることが必要になっていたのである。児玉さんは、生田内務屋長以下数名の小委員会を設けて研究せしめ、具体案を得たのであった。そこで斎藤総督は成案を携えて上京



し、要路に内示して交渉したらしかったが、遂に日の眼をみずじまったのである。如何なるところでこの案が阻止されたか、遂に児玉さんにも斎藤総督にも訊ねる機会はなかったが、思うに、この案は、内地延長主義を基本とする統地方針の大転換であって、将来は完全自治にまで発展すべき運命のものであるので、最高要路の人々は、踏みきれなかったのであらう。

朝鮮統治に、朝鮮在住者の意思を反応させたいということには、後任の宇垣総督も熱心であった。が結屋次善の策として、数名の貴族院議員を朝鮮在住者の中から勅選して貰ったり。或は中枢院を改組して、顧問の外に多数の地方議員を設けたりした。民選議院を設けるということから見れば極めて不徹底のものであったが、内地延長主義の下では已むを得なかったのである。

## 一一 学 務 局 時 代

私は大正一二年の春参事官から学務局に転じた。学務局は大正八年の制度改正の際、内務部から離れて独立の局となり、柴田善三郎氏が局長として、学制改革を担当した。私と張間さんとは時々大和町の学務局長官舎に呼び出され、夜おそくまで、朝鮮教育令改正案等の審議をさせられたのであった。その頃の学務課長は松村松盛氏であったが、松村氏が総督秘書官となるに及んで、半井清氏が学務課長兼宗教課長となってい

た。そして水野政務総監が内務大臣となり、有吉忠一氏がその後任となると、柴田氏は三重県知事に転じた。そして内務省出身の長野幹氏が学務局長となり、半井さんが文書課長に転じた。だから私は半井清氏の後任である半井さんは、何もわからぬ私に頗る詳細に事務を引継いでくれた。当時学務局は学制改正に伴う施設拡充の問題、教員及教科書の問題、帝国大学創設の問題など重要な事項で実施中途のものが多かった。私は参事官ばかりしていて、実務の経験は全然なかった。学務局に行っても、どこに力を入れるものが見当もつかなかった次第だから、局長も課員もさぞ細かい課長と思ったことであらう。半井さんが特に強調したのは、

明年四月から開校する大学予科のこと、大学の敷地を決定して、建築予算を具体化することなどであった。大学予科の開設については、先づ予科部長の人選が第一であり、次は朝鮮帝国大学令の公布であった。予科部長には、半井さん高橋享さんなどの推す小田省吾さんになって貰った。小田さんは古い文学士で朝鮮史が専門であったが、長いこと編集課長として、普通学校や高等普通学校の教科書の編纂検定などの仕事を担当していた。温厚篤実な、しかも慎重に物事を処理する事務家であったのめならず、朝鮮の事情に精通し且講道館何段かの柔道家でもあったので、新しい予科の学風を樹立するに好適の人物として、評判がよかったようだった。第二の帝国大学令の特例として朝鮮帝国大学令を制定することについては、法制局の意見を容れて京城帝国大学令と改め、枢密院の諮詢を経て公布された。（戦前は、教育制度はすべて議会の協賛を要せず、勅令を以て定めることになっていて、それには枢密院の諮詢を要する取扱であった。）京城帝国大学令

諮詢の枢密院本会議の席上、一木喜徳郎氏が、朝鮮にも大学が創設されるに至ったことは、朝鮮統治の実績の挙げたことをするもので新しい同胞の向上のため慶賀に堪えぬという意味の賛成演説をしたそうだ。大正十三年三月京城大学令が公布されるとすぐ予科生徒の募集に着手したが、予算は開校予定の四月以後の経費しか計上しなかったため、四月前に大学官制を公布することができず、従って予科部長以下開校準備の職員を任命することができぬので、非公式にその準備を進めるより外はなかった。予科生徒の募集広告を内地官報に較せたところ、官制も出ないのに生徒募集に着手するとは怪しからぬと法制局から突き込まれた。内地からまでも生徒募集するとは以ての外であると齋藤総督から叱られたりした。これは、小田さんや高橋享さんから強い進言があつて、実行したのであつた。朝鮮に新に創設される大学の実質を内地の大学のそれよりも劣つたものにしたいくない。それには入学する生徒の素質を高める必要がある、内地からも若干の生徒を入学させることが絶対に必要であるから、内地の高等学校の生徒募集と同時期に、京城大学予科の生徒募集を公示しなければならない、という理由から内地の官報広告となつたのである。齋藤さんのお叱りは朝鮮の大学は朝鮮在住者のための大学だ。何を苦しんで内地から生徒を入れる必要があるという、極めて真正直なものであつたので、一言もなかった。

そして愈入学試験が行われその結果が発表されたら、首席の入学者は俞鎮午という朝鮮青年であつた。俞君は予科在学中ずっと首席でとおし、抜群の成績で予科を終え、法学部に進んだのであつた。終戦後日韓交

渉に全権の一人として来日した俞鎮午氏である。

大学予科の敷地は既に数年前に、京城の東郊清凉里の松林の間に定め、校舎及び寄宿舎の建築も略完了していたが、学部的位置は未定で、それを決定することが、半井前課長からの重要引継事項であつた。法学部の教授は、齋藤総督が懇請して総長に就任することになった服部宇之吉先生が、又医学部の教授は志賀潔先生が、いろいろ手配されたので、課長としてはこれら諸教授の欧米留学の手續をする位のものであつた。半井さんの話によると、齋藤総督はこの大学の位置決定に非常に熱心で、東郊の清凉里附近や南郊の永登浦附近は限なく踏査されたそうである。そういう熱心な探索は、有吉政務総監も試みられ私も二三回有吉さんのお伴をした。結局医学部の附属病院は、現在の総督府医院を増築して宛てることが決定的だったので医学部はその近傍に定めることが妥当であり、法文学部も綜合大学の建前から、あまり遠く離れないのが望ましいし、且相当広い面積の土地が得られる見込みもあつたので、京城市内東北部の駱駝山麓にその位置が決定された。私は齋藤総督にも実地を視て頂き、有吉総監のお伴もして色々細い指揮を仰いだ。京畿道立の商業学校があつたが、これは京畿道に頼んで、他に移転して貰つた。しかし大学の位置決定を発表すると、土地ブローカーなどに買占をやられると困るので、極秘裡に買収を進めることにした。殖産銀行の有賀頭取が大に助力してくれた。最初は十数万坪の敷地を得る計画であつたが、予算緊縮の影響で計画通りにはならなかつた。大学建物の建築が始まる頃は私は水産課長に転じていたので悉しいことは知らない。私は大学敷地買

収のことで、一度京城市中央の高台にそり立つ仏蘭西教会の大伽藍に大司教を訪ねたことがある。それは東小門内に聖<sup>セント</sup>ベネデクト<sup>ベネデクト</sup>という修道院があつて広い土地を占めていたから、その敷地を大学の敷地に分譲して貰はうというのであつた。元来この修道院は独逸系のものであつたが、第一次世界大戦中本国からの送金が絶えたので、同じ天主教の仏蘭西教会から援助を受けて維持していた。戦争がすむと、この教会の独逸修道僧はこれを仏蘭西教会に明渡して、元山の方に新しい僧院を営んだ。それには斎藤総督が非常に尽力されたそうだ。これは後に私が咸鏡南道知事時代に、元山郊外徳源の修道院を訪れその機構設備を見せて貰ったとき彼等が口々に斎藤総督の恩恵を感謝していたので分ったことだ。この教会が元山に移転したあとは、仏蘭西教会としては不用のものであらうと見当をつけて、譲与の請求を持ち出したのである。当時の大司教は大院君の外教迫害時代からいるという、八十何歳かの高齢だったので、私の会ったのは次席の司教であつた。仏蘭西人のこの司教もかなりの老年であつたが、快く私の要求を聞いてくれ、中世紀の地図のように美しい色彩で面白く描かれたこの教会の敷地の図面を貸してくれた。しかしその言い分は、一度聖なる教会の敷地となつたものは、羅馬法王の特別の允許のない限り、俗界の用に供することは許されないものだ。よつて総督の意向は、羅馬の法王庁に申しおくり允許を願うことにする。今すぐに総督の意向に沿うことはできぬ、ということであつた。この法王庁の裁断がどうなつたか判明せぬうちに、私は学務局を離れたので、私はその結果を知らないが、しかし大学の敷地に編入されたのは附属農園だけであつた。唯私の残念に思ったのは、

この教会の美しい絵図が、いつまでも返却されず、遂に貞洞の土木部庁舎の火災の際焼失してしまったことである。敬けんなる天主教の僧侶たちは、神を信ぜざる東洋の役人の無責任なことの証左として永くこの美しい絵図のことを忘れないであらう。

中等学校は当初全額国費で維持経営されていたが、大正九年の制度改正によつて地方費の負担による公立となつた。唯内地人の高等女学校だけが、学校組合立であつた。是は併合前の居留民団立からの沿革によるものである。学校組合は或る一定地域（主として都市）内の内地人だけで経費を負担して、小学校と高等女学校とを設立維持する団躰である。内地人の負担する学校組合費はかなり高額であつた。だから、これらの高等女学校の経費には国費の補助があつた。ところが内地人居住者の比較的少数な小都市では、負担の關係上新に高等女学校を設立維持することは、容易でないけれども子女の教育を放擲することは父兄の堪え得ないところである。そこで組合員も少く産業も盛でない地方で、私達から見ても、将来の経費負担が無理と思はれる学校組合でも、高等女学校の新設を企て、その経費補助を盛に陳情してきた。一方朝鮮人側からの、中等学校新設の陳情も殺到した。当時全鮮十三道中まだ男子の中等学校すら設立されていない道もあつた。中等実業学校はあつても、卒業してから上級官吏となる機会の多い普通教育の方が好まれていたのだ。斎藤総督は文化政治を標榜した程で、教育振興には熱心であつたが、民力の充実は漸を追うて着実に進めてゆくより外なく、経済水準の向上しない前に、中等学校を急増しても、卒業者に欲するような地位を与えることは



至難で、結局遊惰不平の徒を増すのみで朝鮮人の幸福を増すものとはならないし、第一予算の関係もあって、旺盛な朝鮮人の向学心に即応して、中等学校を急激に増設するわけにもいかなかった。そこで、国の経費が駄目なら、われわれの手で私立学校を設けようとする運動が盛に行われるようになった。一時線香花火のように全鮮を風靡した民立大学の運動なども、その一例である。しかし民間から寄附金だけでは、校舎の建築は可能であっても、将来長くその学校を維持する費用を賄うことは概ね至難であって、たとえ学校は出来てもその内容は到底国立公立のものに比肩し得るものでなく、外形だけの学校となり弊害続出のおそれが多かった。そこで、経費負担の能力十分な財団でもない限り、私立学校の設立は認めないことにしていた。当時の実情としては、中等学校よりも初等教育の充実の方が大切な問題であった。斎藤総督は、郡に一位位しかなかった普通学校を、まづ三ヶ村に一校の割合で普及する計画を立て、実行中であつた。それには、予算の問題の外、教員の養成、教科書の編纂印刷販売の問題など、沢山の問題が附随していた。そして、此の計画で新設される学校の多くは、学級数の少い小規模のものであつた。これらの学校の経費は国の補助もあつたが、窮極は地方の負担増加となるので、これを顧慮した関係もあつたけれども、一面入学希望者も少なかったからである。教育学問と言へば、寺小屋（書堂）で教える漢字や儒学だと思っているのに、普通学校ではまづ諺文を教えるので、教育と思はない老人もいたが、何よりもその頃の農村の実情では、幼少の児童でも何等かの勞働力の給源であつて、これを学校に出すことは、各家庭の作業にも影響を及ぼすこととなり、且学

費や教科書代負担の関係もあつて、父兄が子弟を就学させることを喜ばない傾向もあつたのだ。つまり向学熱と言っても、それは中流以上の人達のものに過ぎなかつたのだ。

このように私の学務課長時代は、教育の充実振興の初期に属し、非常に仕事のやり甲斐のあつた時期だつた。私も熱心にその職務に従つた。学務課長時代の仕事で、後味の悪い思いをしたのは、朴錫胤を在外研究員に任命したことであつた。朴君は三高の野球選手として活躍した明朗快活な青年で学業も優秀であつた。当時大学専門学校の教授の候補者が多数在外研究員となつて、欧米に出かけてゆくので、有望な朝鮮青年をこれに加えたいと思つて、選考した結果朴君がその選に當つたのである。ところが、警察方面ではこれら朝鮮青年の思想傾向に神経過敏と思はれる程氣を使つたらしく、朴君も在外中大使館その他からも変な眼で見られ、不愉快な研究生生活を送つたようだ。私が大正十五年倫敦で彼に会つた時そのように感じられた。そして朴君が国際法の研究を終えて帰鮮してから、なかなか予定の法学専門教授になれず、非常な氣の毒な結果になり、朴君を在外研究員に推薦した私が悪かつたということになつてしまつたのであつた。

○

宗教課長の方は何が何だかわからぬ内に過ぎてしまつたようだ。朝鮮の仏教がどう変遷して現代に至つたか、又どの程度民間に影響を及ぼしているものか皆目知らなかつた。地方には壮大な仏寺が多数在つたが、併合当時制定された寺刹令は、禅宗も教宗も一緒にして本山を三十に限定し、本山をしてそれぞれ所屬の末



寺を統制させていた。これは主として内務部第一課の渡辺彰老人の調査に基き決定したものであるが、この  
本山の指定にもれた全南の松岩寺が頑強に異議を申し立て執拗に陳情を繰り返していた。前にはこのため松  
岩寺では血臭い事件まで起していたということである。この陳情に対し渡辺老人も頑強に否認しつつ来て  
たのだが、私の宗教課長時代に、老人も漸く折れて、松岩寺を本山の列に加えることになった。朝鮮僧侶の  
取扱もなかなかうるさいものであった。彼等は総督府にやってきて、同輩を陥れたり中傷する一方、勝手に  
寺有財産を売り飛ばして浪費したりして一種の顔役みたいのが多く、総督府にやってきた僧のうちには、私  
教に精進していると認められるものは少かった。三十大本山が共同で、京城に中央宗務院を設け事実上の仏  
教大本山として、教務を掌っていたが、その内部にはいつももん着が絶えなかった。耶蘇教の方は比較的平穩  
であった。米国系の長老派が多かったので、齋藤総督もこれら米国人宣教師の言動が、米国輿論に及ぼす力  
あることを認識され、宣教師の取扱には随分意を用いられた。アメリカ側も齋藤総督の政策に協力する態度  
に出て、ウエルチ博士を宣教師の監督として京城に常駐させた程である。十年も二十年も朝鮮の田舎に引込  
んでゐる米国宣教師の中には、もともと素養も低く、世界の変遷にうとい頑固な連中が多く、ある田舎の宣  
教師は庭の林檎の実を盗んだ少年の腕にドロボーと焼印して物議をかもしたこともあった位だ。だがウエル  
チ監督がよくこれらを指導したので皆齋藤総督の施政を理解しこれに協力するようになった。

大正十三年八月憲政会内閣の緊縮政策により、朝鮮でも行政整理が行われ、長野学務局長は秋田県知事に

転じ、全北知事李軫鎬氏が後任局長となり、朝鮮人の局長がはじめて出現した。総督府には大正八年以来地  
方の民情視察を掌る朝鮮人事務官が数名置かれ、その内一名は勅任官であったが、行政整理の結果これらの  
民情視察官が廃止されて、朝鮮人局長ができたのであった。

長野幹さんは貴公子然たる風采の温厚な君子人であった。学務行政についても、格別自己の見識を押し通  
すといった強いところは見られず、総督総監の意向をよく質して、その通り実行するという風だった。私の  
ような未熟の課長がいたので随分お困りのこともあったに違いないが、これを叱り飛ばすということ全然な  
かった。まことに温厚な紳士であった。この異動に伴って私も学務局を去った。

## 一二 水産課長となる

大正一三年一二月、私は殖産局の水産課長に転じた。局長の池田秀雄さんは明治四二年の東大出であるが  
若い頃は新聞記者をやったこともあり、豪放らい落な役人らしくない役人であった。多分下岡政務総監が呼  
んだのであらう。後に役人をやめて郷里の佐賀から代議士に出て、憲政会の有力者になった。貧乏を売物に  
する程ではなかったが、極めて質素清廉な生活を営み、尊敬すべき人物であった。私は、水産課長を一ヶ  
月位しかやらなかったで、池田局長についてあまり記憶は残って居らない。土地改良課長に湯村辰二郎君

がいて、殖産局に不案内の私の道びきをしてくれた。彼は宮城県角田町の出身、大学の同期生であるが、二高出だったので、朝鮮に来てからの友達である。短軀肥満の悠揚迫らざるが如き態度の人であったが、案外細いところに気のつく親切者で、立派な浮世絵を集めていた。松寺検事長の長女久枝さんを娶って沢山の子を儲け、子福者としても有名であった。後に私の後任として咸南知事になり。農林局長などやった。私の親しい友人のひとりである。

私の水産課長時代には、まだ北鮮の鰯もとれず、南鮮の鱈も年々漁獲が減少していて、漁業界は不況の頃であった。水産界の問題としては、香椎源太郎氏が李こう公家から賃借していた鱈漁場の期限更新の問題とか潜水漁業者の漁区の問題などがあるに過ぎなかった。香椎氏の巨済島の鱈漁場では年々水揚高が減少していたが、李こう公家側では期限更新を機会に料金の引上げを計画していたので、なかなか意見が一致しなかった。公家の漁業権は不在地主のような格好のもので好ましい状態のものではなかったので、水産行政の立場からは、公家の主張を支持するわけにもゆかなかった。潜水漁業の問題というのは、済州島の海女が出稼して各地の沿岸のあわびを採取するので、沿岸漁民と紛争を起すことが多かったことである。いづれにしても大問題という程ではなかった。其の頃釜山の水産試験場に脇谷洋次郎という場長がいた。住の江がきや海苔の養殖を首唱し、幾分その実行に着手した。又魚の簡易冷凍試験に熱中していた。朝鮮近海でとれる魚類を簡易に冷凍することができれば、鮮度を落さずに大阪や東京などの消費地におくることができ、朝鮮漁業者

の利益になるという着眼であった。海軍でも潜水艇のような小艦艇で、これが利用できれば乗組員に生鮮野菜を供し得るとして、海軍出身の斎藤総督も大に力こぶを入れられたが、結局大成しなかったようだ。がこの水産試験場は後に大きな貢献をした。藤川技師（後の九大教授）が海苔の養殖について新発見をしたからである。従来海苔の養殖のため海中に立てるヒビは、潮の干満に伴って水中から出没することを必要とされていたが、朝鮮のように、干満の差が数米にも及ぶところでは、そういうヒビを立てることはむづかしく十分に海苔の増産はできなかった。藤川技師はいろいろ試験の末、従来の方法によらないで、海苔の養殖できるヒビの作り方を発見した。その結果急に海苔が朝鮮で増産されることとなった。現在の朝鮮海苔の産額は、大部分藤川技師の功績に帰すべきものである。

脇谷博士は独学苦学で勉強した人で、米国スタンフォード大学のシオルダン博士の指導を受け、魚の分類を研究した。私も同大学から出版された脇谷博士の論文（英文）を贈られたが、遂に読まなかった。学殖のほどは私にはわからない。一種の奇人で、すこしも風菜にかまわず、毎日水産動植物を扱い、いつも汚い手をしていた。その手が人並はづれて大きく且爪が長くのび、爪の下には垢が真黒にたまっていた。話をするときは相手の顔まで盛につばを飛ばしたり、煙草の灰をあたりかまわず撒き散らしたり、無頓着そのものであった。穂積陳重博士から頂戴した黒の外套を大事そうに着ていたが、そのポケットにマッチの箱がいくつとなく入っているという具合である。みんな訪問先の卓上からねちこんで来たものである。夢中になっ

て自己の本務に没倒し、他を顧みる余裕のない、まことに学者らしい人であった。

水産課長時代に二度漁業視察のため海岸に行ったことがある。漁港に宿泊すると、きまって私の旅店で歓迎会を催してくれ、海の猛者連が海上一里も二里も離れた小島から、小舟を操って参加する者もあり、皆元気がよいので宴会は盛会である。私は酒が極めて弱いのに、皆の衆から大きな杯で献されるには閉口した。斯ういう人達は、何か機会があれば、集って賑やかに酒が飲みたいので、お客さんにはあまり重きを置いていない風であった。時世もそれほど窮屈でなく、呑気な平和な時代だった。又或る時水産試験場の試験船みさご丸に乗せて貰って、巨済島に行ったことがあった。帰途そこから鎮海に向うと、洛東江の河口あたりの海は、潮流が烈しく船がひどく揺れ、私は船酔をしてしまい、船が潮流を乗り切って穏な鎮海湾に入ってもまだ頭が上らぬ程だった。鎮海の要港部司令官松村菊男中将から晩餐の招待があったが、船酔で真青な顔で元気もなく、挨拶に出られぬ位だから、風邪の為といつわって招待を辞退したところ、それではと司令官は軍医を見舞によこしたので、化の皮が剥はれてしまい、その夜は官邸でおいしい洋食の馳走になった。これなど水産課長時代の楽しい思ひ出である。

### 一三 文書課長時代

大正十四年九月私は官房文書課長に転じた。前文書課長倉橋君が死んだからである。此の年八月漢江の大洪水があり、竜山市街の大部分は軒下まで浸水するという惨状を呈した。倉橋君は文書課長として、被害の調査救護の中心となって活躍し、屢々被害地に出かけた図がらずも腸チブスに罹り、遂に総督府病院の隔離病舎で歿したのである。若い夫人の外に幼少の男子三人が遺った。

倉橋君は長野県出身、大正四年東大出の秀才で、試補としては私より一年先輩である。私は老人亭の官舎で約一年間同居し、親密にしていた。土木課の事務官になっても、官舎の割当がなく、暫時私たちと独身官舎で同居していて、よく私に、官舎が貰えぬなら貸家を借りて君と同居しようではないかと語っていた。一緒に貸家を探しに歩いたこともあった。しかし、その内に倉橋君も私も官舎の都合がつき、倉橋君との同居は実現しなかった。非常な勉強家で、よく役所から書類を持ち帰って調べていた。どっちなかといえば、念をいれ過ぎる位慎重な考をする方で、私のような単純な考をする者には、よい影響を与えた。大塚さんが倉橋君は書類を暖め過ぎると評した。書類を暖めるとは、母鶏が卵を抱いて孵化させることになぞらえ、役人が書類を長く握っていて容易に決断しないことをいうのである。倉橋君はその後地方勤務も経験せず累進して



文書課長になったのであった。

倉橋君の死は、職務に殉じたものとして、各方面の同情が湧き、斎藤総督も新しく葬儀に列した。特に若い夫人と三人の遺児には、官民の深い同情が集まったが、夫人の令兄植野勲氏（後の殖銀理事）が万事世話してくれることになった。私としては親しい畏友と失って限りなき悲嘆を味った。

私の文書課長時代の出来事で記憶に残るのは、総督府の新庁舎への移転と朝鮮神宮の鎮座祭とである。従前の庁舎は南山の中腹に在った統監府庁舎に数次にわたり増築したものである。狭い敷地の上に継ぎ足し継ぎ足したものだから、中の廊下は迷路のようで、且高い坂の上に在って外来者には甚だ不便であった。あの大きな木造建築が長い間一度も火災を出さずに、すんだことは、長い冬の間どの室でもダルマストーブで採暖したことを考えると、奇蹟といつてよいかも知れない。総督府の移った跡は科学博物館となった。大学予科の森為三教授の多年苦心して蒐集した鳥類の標本が中心であった。寺内初代総督は早くから新庁舎の建築を計画し、その位置を京城の西部仁旺山下の景福宮勤政殿前に定め、十年の継続事業で、大正五年から建築に着手した。最初毎年の予算は三十万円であったが、物価の高騰のため予算の増額が必要となり、完成もおくれて、大正十四年の秋に漸く大略の工事を終り、未完成ではあったが、どうやら執務には差支ない程度に出来上った。南山の庁舎では職員増加のため狭くて困っていたので、移転を決行したのであった。新庁舎は地下一階地上四階一部五階の鉄筋コンクリート造外壁は御影石張りの壮大な建物である。玄関の大理石の

大きな円柱、中央広間の色さまざまな大理石モザイク張りの床や和田三造画伯の壁画（奈良朝時代のわが国の風俗と朝鮮現代の風俗とを左右対照させたもの）など甚だ華麗なものであった。これらのさまざまな大理石はすべて朝鮮内で採取したものである。第一会議室には玉座の設けがあり、緞子張りの壁や水晶のシャンデリヤ、壁燈なども豪華なものであった。後に満洲事変の調査のため国際連盟からやってきたリットン郷の一行は、この会議室を見て、こんなよい室があるなら、此処で会議をしたらよかったと洩らしたことがあるあの一行の調査の結論を、この会議室で討論させたら、リットン報告も多少わが国の有利になったかも知れなかった。惜しいことであった。斎藤総督は、移転してもなかなか総督室を使用せず、狭い総督応接室に頑張っていた。その真意はわからぬが、文書課員達は、総督は摂政官を朝鮮にお迎えするつもりで、摂政官の御使用になるまでは、総督室を汚したくないのだらうと言っていた。前年か前々年かに、摂政官が台湾に行啓されたとき、文書課長の倉橋君は命を受けて台湾に渡り、台湾における奉迎の準備や奉迎の模様などをつぶさに調査したことがあったので、そんな推測も生れたのである。しかし摂政官は遂に朝鮮にお迎えできなかった。

新庁舎建築は十年もかかったので、出来上ったときには既に狹隘となり、全職員を収容することは困難であった。局長の応接室、物置などに予定された室まで悉く職員を詰めこんだ。五階には立派な書庫や閲覧室まで造ってあったが、閲覧室は事務室となり、文書課所管の図書室は半身不随となった。といって、新庁舎



はよくまとまった建物なので、継ぎ足しは不能で増築には別館を建てるより外はなかった。設計当初考えたよりも、遙に多くの職員が増加したためである。それでも大きくは東京の丸ビルより広いのだ。何しろ朝鮮では始めての大きな美しい建物なので、移転当座は毎日多数の見物人がやって来た。

朝鮮神宮の造営も、寺内時代の立案であったが、工事は斎藤総督になってから始まったように記憶する。伊東忠太博士の意見によって、その位置を南山の一角、京城市内の各方面から望まれるところに定めたので神社としては異例の北向の神社となった。山の上なので表参道には長い長い石段があった。この造営工事も数年の継続事業であったが、物価騰貴のため屢々予算の増額が必要であった。鎮座祭は大正十四年十月十五日に行われた。造営工事は建築課、祭祀は内務局の主管で文書課の仕事ではなかったが、多数の来賓を招くのでその接待などで文書課も忙しかった。祭神は天照大神と明治天皇、社格は官幣大社、御霊代は宮中から掌典長が奉侍して来るということで、海上は海軍の好意で駆逐艦で渡った。下関までお迎えに行った矢島杉造君は、軍艦があまり速力を出すので、船が揺れて困ったと語った。特別車に接続するため速く海を渡る必要があったのであらう。鎮座祭は厳肅のうちにに行はれいと賑やかな奉祝行事が行はれた。斎藤総督が海軍大將の大礼装、総督夫人が十二単衣の大礼装で、あの長い表参道の石段を上られたのは、夫妻が身を以て敬神の大義を一般に示すためであつたらうが、気の毒にも思えた。続いて十七日に例大祭が行はれた。十月十七日は今まで京城神社の大祭日で、京城市中が金くお祭り騒ぎをし、鐘路方面の朝鮮人側でも、いろいろな催

し物をして賑やかな愉快なお祭り気分にした日であった。その日を特に選んで朝鮮神宮の例大祭日を定めたのは、内務局長の大塚さんである。大塚さんは官幣大社のお祭りが官祭と化し、民衆と何の縁故もない淋しいお祭りとなつてはならぬ、朝鮮神宮のお祭りも出来るだけ賑やかに、朝鮮民衆も一緒になつて楽しい賑やかな一日を送るようにならぬ、それには従来極めて賑やかに行はれた京城神社のお祭りと同日にして、朝鮮神宮のお祭りで賑やかなのか、京城神社のお祭りで賑やかなのか、ハッキリしなくとも兎に角賑やかな楽しいお祭りにしたいという意見であつた。しかしこれは聊か杞憂であつたようだ。朝鮮神宮には朝鮮民衆も段々心から参拝するようになり、そのお祭りも年々盛大になつて行つた。神社に参拝するという心の素地は、もともと朝鮮民衆にも在つたのだ。昔からの山神を拝する習慣が残つていたからである。村はづれの大きな槐樹の下に小石が積んであつたり、村の老爺や婦人たちが早春の頃近くの山に登つて拝礼する習慣があつた。聖山信仰は原始的宗教でこの民族にもあるものだそうだが、村山智順君の話によると、済州島の祠には、日本風に木の枝に幣帛をつけて捧げてあるとのことである。朝鮮民衆の間にもシャーマニズムの残滓が根づよく残つていたのである。

大正一五年五月私は外国出張を命ぜられ、文書課長の任を解かれた。

## 一四 土地改良課長となる

昭和二年三月私は外国出張から帰って殖産局の土地改良課長になった。すると間もなく、殖産局から分離して土地改良部が新設された。土地改良部は下岡政務総監の遺策である産米増殖計画の一環としての耕地の拡張造成事業の実施を担当する部局である。部長は安達房治郎氏で、その下に水利課長池田泰治郎技師、開墾課長飯島寛一郎技師がいた。水利課長は水利組合の事業を、開墾課は水利組合によらざる個人又は会社などの開墾干拓事業を奨励監督し、土地改良課は土地改良部の総務的事務を担当するものである。産米増殖計画では第一期事業として五年間に三十五万町歩の水田を造成することになっていた。その大部分は水利組合によるものであったが、個人又は会社による干拓事業なども大に奨励することになっていた。これには事業費の五割が国庫から補助されるので、その監督は容易でなかった。というのは当時の世評に、干拓事業は一文なしで出来るといはれていた。つまり役所に提出する書類には実際の経費の倍額位の経費を要したとして役所の眼を胡麻化せば、その五割の補助金が貰えるから、自分の金は一文も出さずにすむというのである。海面を干拓して水田とする事業は、土地の形状、水利の難易、潮流や地質の強弱乃至地方の経済事情工事担当者の能力等から、その経費に多大の差異を生ずるので、役所としては実際補助金の査定に苦しんだ。そこ

で後には、工程工種別に一定の基準を設けて、実際の所要経費には関係なく補助金を査定することにした。又水利組合の内には、当初の予定の計画通りの水田ができなかったり、事業費が非常に増大したりして、借入金の返還に困難するものが出た。所謂不良水利組合の救済も亦、その頃の土地改良部の頭痛の種子であった。水利組合の成績が不良となった原因には、米価の下落による組合費負担力の減少とか、物価の騰貴による工事費の増加とか、経済の変動に原因するものもあったが、主要の原因は、水不足で予定の面積だけ水田ができなかったことだ。貯水池に計画通りの水が溜らなかったり、貯水池には計画通りの貯水ができて、開墾地が保水力に乏しく計画以上の水を流さねば稲が作れぬので、下流の方の開墾地には水が過ってゆかぬという結果になるのである。地質の調査が不十分であったのだが広い面積にわたって、地下数米の深さで調査することは、多額の経費を要し、結局組合費の負担が増加するので容易でなかったが主なる原因であろうが、設計技術者の未経験も原因であったと思はれる。

土地改良課長時代の私の仕事で記憶に残っているのは、土地改良令の立案である。今迄朝鮮には耕地整理法がなく、土地改良事業として灌漑排水事業を行うには、土地の交換分合の必要があるもので、それらの法律の手續を定めるための法規を整備したのである。児島高信君が審議室を代表して、内閣法制局との交渉に努力してくれたので、間もなく制令として公布されるに至ったが、なかなか面倒な法規であった。

もうひとつの思い出は、昭和水利組合予定地の視察である。この水利組合は平安南道安州郡の平野三万町

歩の乾田地帯を灌漑しようとするものであった。また工事設計の基本調査中であつたが、前の平南知事青木戒三さんが創立事務を担当していた。青木さんは大塚さんと同期の一高の先輩である。知事は園田寛さん内務部長は藤原喜蔵君であつた。いづれも親しい先輩である。私は藤原さんと共に自動車で大同江からの引水地点や貯水池の予定地点などを見るため、順川かい川両郡を走り安州に到つた。安州に金仁梧という大地主の老人がいて、水利組合の設立に反対していた。私達の行つたとき、安州郡守の嚴昌燮君が例の粘りと情熱とで到頭この老人を納得させてくれた。組合費は反当五円以上は賦課しないという条件附の同意であつた。この組合の工事の実施設計のため、東拓は三十万円も出していたが、いろいろな故障が続出して私の在任中は組合は創立に至らず、青木先輩も失意の間に歿された。

産米増殖計画による水利組合の土地改良事業は、東拓の土地改良部と朝鮮土地改良株式会社とで、工事の設計監督を担当し、東拓の行う工事の資金は東拓、土地改良株式会社の行う工事資金は殖銀で斡旋融資することになっていた。ところが、一概に灌漑排水工事といっても、工事の大小難易、土地の収益力など千差万別なので工事を担当する者も、資金を供給する者も工事の割当如何によって、運不運の生ずることもあり、毎週一回関係者が集まって懇談の上決定することにしてはいたが、その割当決定はむづかしいものであつた。その上工事の設計施行に当る技術者の間にも、農学部で農業土木を修めた者と、工学部で土木工学を修めた者との間にも、シツクリしない傾向もあつて、事業の順調な進展を妨げる場合もあつた。部長の安達さんは

明治四二年東大出の通信省出身。左足が悪く少しビッコをひいていたが、あの傾斜の多い京城君子里のゴルフ場で、クラブを揮つた程の心臓の持主。談論風発の弁舌爽やかな、なかなか如才のない、政治力の豊かな人だったので、いろいろな難問題も、適当に捌いてくれたので、私も大過なく職務を果すことができたのであつた。しかし、安達さんは一年ばかりで咸鏡北道知事に栄転し、松村松盛さんが後任の部長となつた。松村さんは明治四五年の東大出で、大正八年斎藤総督と共に来鮮し、全北の警察部長、本府の学務課長を経て、長い間斎藤総督の秘書官をつとめた人である。安達さんとは対照的な、無口な謹厳誠実な人であつた。利権屋など取りつくすべもなく、土地改良事業はルールに乗って順調に進んで行つたように記憶する。

## 一五 宇垣総督来る

昭和四年の秋、総督府に人事異動があり、松村土地改良部長は殖産局長に転じ、総務課長中村寅之氏が後任となつた。そして総務課は外事文書及び臨時国勢調査の三課に分れ、外事課は穂積真六郎氏が、文書課は私が、臨時国勢調査課は河野君がそれぞれ課長となつた。文書課長は二度目で、課員は皆旧知なので、心易く仕事することができた。文書課はもともと固有の仕事はあまりなく、善生永助村山智順松田学鷗等の諸氏の調査が、特別の仕事であつた。私は、文書事務の外、施政の実況を宣伝広報するための印刷物作成に努



力した。そのため総督府の定期刊行物であった雑誌「朝鮮」の編集に力をいれ、又朝鮮総攬や朝鮮刊行図書目録などを印刷配布して、研究者の手引きとしたりした。特に諸外国人の朝鮮視察報告書は、入手するに従ってつぎつぎと翻訳して印刷配布することとした。善生村山松田三氏の調査報告もよいものが沢山できてうれしかった。これらの印刷配布の仕事は主として永田正信君が当った。

大正七年二月からは国勢調査課長を兼務した臨時国勢調査課は前年行はれた調査の結果を集計していた。この国勢調査では人口調査に附随して、朝鮮の姓の種類とか、その姓に属する人口とか、同姓だけの部落なども調査したのであった。私は、時々倭城台の旧庁舎にあった国勢調査課に赴き、統計官の大内君などから進行状況などの説明を聴いた。朝鮮では始めて、カードに穿孔して機械で集計する方法を用いていた。万事順調に運んでいたのも、課長たる私は特に意を用いることもなかった。

○

昭和六年春天宝山事件と言はれる、満洲の朝鮮農民暴虐事件が発生した。昭和六年四月若槻内閣が誕生して斎藤総督と児玉政務総監が辞任し、後任の宇垣総督と今井田政務総監とが、京城に着任する当日にその第一報が入った。間もなく、平壤でその報復的な華僑惨殺事件が起り、やがて同年九月には柳条溝事件が起り満洲の風雲が急になって行った。満洲には多数の朝鮮農民が居住しているので、其の保護は朝鮮官民の多大の関心事となった。しかしこれらの仕事は外事課長たる穂積君が、活躍されていたので、文書課の仕事には

あまり影響はなかった。唯穂積君が屢々満洲に出張するので、その不在中外事課の楊在河事務官から、相談にあづかる位のものであった。その頃の思い出のひとつは、昭和七年六月頃国際連盟からリットン卿一行が満洲事情の調査からの帰途京城に立寄った時のことである。リットン卿の一行が朝鮮に立寄ったのは、日本の統治によって、朝鮮民衆の幸福が増進したことの実証を目撃しように言うにあったから、宇垣総督も一行の歓待には力をいれて、竜山の官邸で豪華な晩餐会を催したり、朝鮮統治に関するいろいろな資料も提供した。これらの下準備は勿論外事課長たる穂積君の仕事であったが、文書課でも資料の蒐集や宇垣さんの演説原稿などの世話をした。陸軍出身の者は交歓的宴会には兎角経費を惜しみ勝ときいていたが、宇垣さんがリットン卿の接待に金を惜しまなかったのに、私は感心した。リットン卿の一行に続いて、満洲軍司令官となつた武藤信義元帥が小磯参謀長を伴って赴任するに当り、京城に立寄った際も宇垣さんは、同じように盛大な歓迎晩餐会を竜山の官邸に開いたのであった。竜山の官邸は、陸軍部隊の官衛宿舎に隣り、漢江に程近くあまりよい位置ではなかったが、建物は赤坂離宮（国会図書館）風のもので、其の建築調度は実に立派なものであった。最初は軍司令官の官邸として長谷川大將が臨時軍事費で建築をはじめたのだが、建築中途で臨時費は打切られたので、長谷川大將が伊藤統監に泣きつき、統監官舎として漸く完成を見たものであると言ふ評判であった。そのせいか、玄関の上には陸軍の星の徽章がついていた。総督としては、経費が嵩むので特別の場合の外は使用せず、宝の持ちぐされの観があった。寺内総督は張作霖が訪れたときは、これを宿舍



とし、衛兵を立てて歓迎したので、張も大に感激したことがあったということである。

これらのことから見ても、宇垣さんは前齋藤総督が、海軍軍縮の予備会議に日本代表としてジュネーブに行ったとき、総督代理として朝鮮にいたこともあり、朝鮮の事情は一通り頭に入っていたことでもあらうが、非常な抱負を以て統治に当たったようだ。宇垣総督を輔けた今井由清徳氏は明治四二年の東大出で、通信省出身、一時退官して大阪市の電気局長をやったこともあった。安達健蔵大臣の下で、次官をしていたのを、宇通信垣さんに望まれて、一緒に朝鮮入をしたのである。才気と機略とに富み、なかなかの手腕家であった。畑に育って内務吏僚ほどに名前が売れていなかったのと、風采があまり上らず取りつきにくいと言うので、最初はあまり歓迎されなかったが、その為すところが適確で見当はづれのところがなく、人柄もつき合うと深い滋味が出るというので、段々評判がよくなり、後には宇垣総督の治績は、今井田さんの努力によるものだといはれる程になった。

さて宇垣総督の治績で、特に挙げたいのは朝鮮工業の発展と農村振興とである。これまで品種改良や肥料の増施など農事改良を奨励し、又灌漑排水事業の施行などによって、朝鮮の米作は大に進歩したのであったが、大多数の農民は、小作農で農業發達の恩恵を受けること少く相変らず窮乏している。宇垣さんは小作民保護の為に、全国に魁げて小作法というべき農地令を制定した外、特に愛知県碧海郡の山崎延吉翁を煩はして、小農保護の政策を立案せしめ、朝鮮内の全農家に、各戸毎に詳細な経済調査を行って、各戸の更生五年

計画を作り、着々これを実行させた。更生計画の眼目は、窮乏の最大原因である食糧不足の克服と借金の整理とである。食糧増産のため自給肥料の増産を徹底的に奨励し又借金の利子引下げや元金打切りなどを、郡守が金貸に交渉してやるのである。この小作農保護政策には地主側に反対もあった。齋藤総督時代に農業博物館建設費三〇万円の寄附を約束していた熊本利平翁が、農地令の制定に反対して電報で寄附を取消して来るといふ挿話もあった。宇垣総督も熱心な農村行脚をつづけ、全鮮二百数郡中足跡を印せざるものなし、という程であった。この農村振興計画が予通のように五年間実施され、農村が平和に静かに進んで行ったら、恐らく貧農は大部分更生して立上ることができたらうと思はれたが、支那事変が始まって形勢が変り、宇垣今井田両氏が退いて、この計画は魂が抜けてしまった。後任の南総督は、朝鮮の統治の眼目を、軍部の呼号していた所謂非常時局の態勢に順応させることに置いていたようだった。私が朝鮮を去ってからずっと後のことであった。

工業の発展については、今井田政務総監と穂積殖産局長の尽力によるところが甚だ多かった。其の始まりは、野口遵氏に存分に腕を揮はせたことだ。野口さんは既に齋藤総督の頃（昭和二年）から赴戦江の水力発電（二十万キロ）興南の窒素肥料工場、永安の石炭乾溜、元山の石油精製などの大規模の事業を創めていたが、宇垣時代になってから、長津江（三十二万キロ）虚川江（三十六万キロ）鴨緑江の水豊（七〇万キロ）など、その頃内地では想像もできない程の大規模の水力発電事業を矢継ぎ早に開発した。これらの特別高圧

送電線も、極めて長距離の当時としては珍らしい大事業であった。これに刺激されてか、東拓も富寧（三万キロ）や江界（二十万キロ）で水力発電に着手したり、水力発電地点にあり恵まれない南鮮でも漢江（二十万キロ）や洛東江（八万キロ）で発電事業も計画実施されたり、三陟炭田を開発して火力発電（十万キロ）を行う事業も発足したりした。豊富低廉な電力が各地で供給されることになって、各種の産業振興の機運を作ったのであった。特に内地ではこの頃から段々経済方面にも、統制の萌えが見えはじめたので、官僚の統制を嫌う事業家が、新しい事業の開拓地として朝鮮に着目するに到ったという事情もあって、各種の事業が盛に起されるに到ったのである。パルプ、セメント、紡織、製鍊、製鉄などまことに多彩であった。特に久しく埋れていた茂山の褐鉄鉱を開発して、これを原料として八幡製鉄が雄基に建設した製鉄所や茂山の採掘選鉱設備は、甚だ大規模なものであった。これらの産業は、敗戦によって夢と化したのが、若し数年間平和にこれらの産業が継続していたならば、ドラッカーの説明をまつまでもなく、教育の普及と相まって、民衆の経済水準は、驚くほど向上したことと思はれる。

宇垣さんは又金鉱開発に熱心であった。産金奨励政策によって、資金や資材の供給に便宜を得た朝鮮の金鉱は俄然賑やかになり、産金量も非常に増加したのであった。しかし産金事業は戦争によって中止されてしまった。金よりも戦争に直接役立つ鉱物を増産しようという政策に変わったのである。しかしこの金鉱熱は、色々な新しい鉱物発見の機会となり、後に朝鮮の鉱業が日本において重要な地位を占めるに到った端緒とな

ったことは見逃せない事実である。これも宇垣さんの余徳と言えるかも知れない。

## 一六 審議室 首席となる

私は宇垣今井田両氏の下で相変らず文書課長をやっていた。昭和七年一月審議室首席事務官（元の首席参事官に当る）として高等官二等になった。大学を卒業して官途に就いてから十五年余、満四二才であった。仲間比して別段早い方でもおそい方でもなく、まづ普通といったところだ。一緒に朝鮮の役人となつた富永文一君は、一足先に咸北知事となり詰襟服を着て、農村振興に努力していた。

審議室での仕事については、あまり記憶に残らない。唯ひとつ宇垣さんの中枢院改革意見について書いて残したい。宇垣さんは総督の諮問機関として設けられている中枢院が、旧韓国の要路に在った長老のみで構成されていて、新興朝鮮における民意を聴くには、あまりに形骸化しているので、諮問機関としての職能は到底期待できないとして、中枢院を改革し、ひろく朝鮮在住者の中から内鮮人を問はず、有為の士を選抜して参議とし活気ある言論を展開せしめて、民意暢達の場合としようと考えたのであった。これはまことに肯に当る着眼であった。それに対し、私はそれ結構なお考えであるが、実現は容易でない問題である。前に齋藤総督が朝鮮評議会（名前は正確でないが）を設けようとした。いはば一種の朝鮮議會を設けようとする

この案は、結局中央の容るるところとならなかったことがあるから、宇垣さんの構想も慎重に取扱はれる必要があらうと答えたことがある。宇垣今井田両氏が、どういう経過を経たか知らないが、私が審議室を去ってから、中樞院に地方参議の制度を設け、地方在住の名望ある朝鮮人を任命し、年二回位京城に招集して意見をきくこととなった。

斎藤さんも宇垣さんも、統治の責任者としてその必要を痛感された民意発揚の機関が実現できなかった。思うに、これは日本が台湾領有以来固持している内地延長主義のためであらう。明治の末年英国では愛蘭問題が喧しい問題となっていた。明治の政治家は、憲法は日本の全領土に行はれる前提に立ちながら、台湾朝鮮などの新版図から、帝国議会に議員を送ることは、第二の愛蘭となる虞があるとして之を認めず、独乙のアルザスローレン両州やポーランドなどの統治方式を参考とした同化政策とか内地延長主義とか言はれる政策を採用し、台湾も朝鮮も文化産業が十分発達した後に、九州北海道のようなものにしたと考え、それまではこれらの地域在住者の参政権を認めない方針をとっていたのである。しかし、この政策は十数年の統治により、教育の普及産業の発達に伴って、いろいろな不合理を経験するに至った。このような政策では、もはや民心をつなぐことは困難になって来たのである。若し日本が戦争に突入するに至らなかったならば、朝鮮議会の設置に踏みきらざるを得なかったのではあるまいかと思う。

## 一七 咸鏡南道知事

昭和八年八月私は咸鏡南道知事に転任した。郷里の人が非常に喜んでくれ、私の職責が無事に果せるようにと、村社赤城神社で祈願してくれた。関屋貞三郎さんから、地方長官は官吏生活中一番やり甲斐のある。又最も愉快に仕事のできる地位である。大に努力せよと激励の手紙を送られた。私としては、始めての地方勤務であるので、内心多少不安の念もあったが、また心気一転大きな興味を以て新任務に当らうと決心した。朝鮮軍司令官川島大将も送別宴を催してくれた。その時いろいろ陸軍の人事行きづまりの内情について語られたことは、永く私の耳底に残った。

知事は昭和十年一月まで約一年半位しか在任しなかったが、関屋先輩の言はれた通り、一生涯中一番愉快な、力のこもった仕事のできた時代であった。それだけ咸興在住中の思い出は愉快なことばかりである。何しろ咸鏡南道は、台湾や九州よりも稍狭い位の広い面積があり、海岸線も長かったが、標高千米突以上の高地帯が半分以上もあるという特殊地域なので、道政上興味の深いところであった。山林が多く米は五〇万石位しか産しなかったが、鯪明太魚などの水産物や金、黒鉛、モリブテンなどの鉱産物は多かった。工業では野口遵さんの事業地興南に、大きな窒素肥料工場や金製錬所があったし、二十万キロも発電する赴戦江のダ



ムもできていた。私の咸興赴任と前後して、長津江水電の工事が始まった。これも赴戦江水電と同じように、鴨緑江の支流長津江の水流をダムでせき止め、六里に及ぶ長い且直径四米半に及ぶ大トンネルで日本海側に落下させその高い落差を利用して、約三十二万キロの電力を得ようとするもので、当時としては日本最大のものであった。土地買収などにいて多少の紛糾もあったが、私は社長の野口さんや重役の白石、永里などの諸君とも心安かったので、極めて円満に事を運ぶことができた。工事は面白い程速に進捗して行った。建設の采配は久保田豊氏が揮っていたが、久保田氏もサッパリした性格で交渉し易かった。私も二度ばかり工事を見に行き、得るところが多かった。黄草嶺の急坂を資材運搬のインクラインで登るときは大きなスリルを味ひ、嶺上から去来する雲の間に日本海を遠望した大観に驚嘆したこともあった。電力の一半は興南の工場に送るのだが、一半は平壤を経て京城に送り、一般の需要に充てる計画で、百里に余る送電線の工事も同時に行はれた。高い森林地帯のこととてその工事もなかなかの難工事のようだった。電力が豊富になるにつれ、興南でも各種の工場が計画されていた。私が咸興を去る頃、咸興と興南との中間本宮（李王家の祖廟があるのでこの地名になっていた）地方に、約六〇万坪の敷地を買収する計画が進められ、役所でも地方発展のため野口さんから本宮に中学校を寄附してくれることを条件にこれに尽力した。円満にこの買収契約が成立した報告をきいて、私は新任地東京に向って咸興を出発したのであった。

道内巡視も興味深かった。咸鏡南道は白頭山から流れ出る鴨緑江を境として、満洲と接していた。鴨緑江

と言っても、上流は小さい溪流に過ぎず且奥深い森林地帯なので、匪賊の活動地域である。朝鮮で喧しい国境警備の労苦は、此の地方の警官ものである。着任後間もなくこの国境地帯を巡閲した。国境を守る警察官の労苦の実状を見るためである。全部自動車の旅行であったが約十日間を要した。この時の旅行記は咸南国境高原地帯旅行記と題する印刷物とし、各方面に贈った。印刷の仕事は総督府文書課の永田正信君に頼んだ。その他の道内各地を見て歩いた印象記も、同じく永田君に頼んで農村巡訪記と題する小冊子とした。すべて私の小使で印刷刊行したもので、私の道楽である。

一度咸鏡北道を見に行った。羅南に駐在する第十九師団長に挨拶するためでもあった。当時は、前年に満洲国の建国宣言や五・一五事件があり、この年三月には国際連盟脱退宣言などがあって、軍部の鼻息が荒く盛に非常時局を鼓吹している頃であった。師団長牛島貞雄中将は温厚な円満な人で、殊更に威張った風もするのでもなかった。が連隊長あたりには相当の猛者もいた。羅南には盟友富永知事がいて快く迎えてくれたから、一層よい印象を受けたのかも知れぬ。第十九師団は咸北咸南の二道だけが管轄で、咸興にも旅団司令部があり、歩兵一個連隊が駐屯していた。この旅団長は徳野外次郎といひ、上海事変に出征し少将となつて、咸興に來たのだが、この人もサッパリした軍人で、異を立てて文官側に問題を持ち込むという風はなかった。しかし下部の方では軍部側との接触に氣を使うところも、多かったようだ。しかし、何といっても陸軍の長老宇垣大將が総督だったから、朝鮮では概ね軍部も遠慮していた風が見えた。



咸興には適当な日本旅館がなかった。それで宮様が咸興に来られると、知事官舎を御旅館に提供しなければならなかった。一度は李王及同妃が祖廟参拝に、一度は愛国婦人会の総会に総裁東伏見宮妃が来られた。その都度私は家族と共に市内の松月旅館に移った。これも思い出のひとつである。思ひ出と言えば、道庁は昔の建物で、奈良朝時代の寺のように円柱の並び立つ風趣に富むものではあったが、狹隘で困った。知事室は極めて狭く、室の真中に大きな柱が立っていた。口の悪い友達が、知事室には防塞があるから暴漢に襲はれても大丈夫だねと言った。その道庁も、私の在住中新庁舎の建築工事が始まっていたが、その落成を見ないうちに、転任したのは、心残りでもあった。此の外にやりかけた仕事には、農事試験場の移転や咸興中学校、北青職業学校の設置などがあった。

## 一八 拓 務 省 時 代

昭和一〇年二月私は拓務省管理局長に転任した。当時私は知事の仕事が面白く、私自身の着想になるいろいろな施設も段々実現の緒に着いており、民間の内鮮人とも段々知己が多くなり、互に信頼し合っていたので、居心地もよく転任したいなどは夢にも考えていなかった。ところが突然拓務次官の入江さんから拓務省に来てくれないかという話があった。その話のすこし前に、大野緑一郎さんから関東長官に来てくれとの

話があった。当時満洲国は建国匆忙でまだ帝政にはならず、南次郎大将が全権大使として監督していて、大野さんの盟友長岡隆一郎氏が総務庁長をしていたのだ。この話は今井田総監にも謀った上お断りした。ところがまた転任の話である。何だか私に不満があつて尻が落着かぬように見えて具合も悪かった。今井田さんに相談すると、朝鮮の先輩である児玉さんが大臣をしているのに朝鮮からその希望する者を採用できぬという結果になることは、面白くないからゆくがよからうということだったので、転任を決意したのである。東京に転任すると、官舎もなく俸給も大略半減するので、私生活上まことに痛いのであるが、経済上のことはまた何とかなるだらうといった呑気な考えであった。

私が行った頃の拓務省は、関東州及び満鉄附属地の警察権問題をめぐって、陸軍と抗争し敗北した直後で何となくざわついていた。前次官坪上貞一氏は全省沸騰紛擾の責を引いて辞任し、又係争問題主管の管理局長生駒高常氏が知事に転出した。次官には拓殖局時代に永らく課長として在職していたことのある前満鉄理事入江海平氏が就任し、その入江氏の招きで私が生駒氏の後任となったのであった。生駒氏を内務省に復帰せしめるについて、拓務省は内務省から交換的にその後任を容れなければならなかったのに、私が生駒氏の後任になったので、内務省から転入の人は朝鮮に押付けられた。あまり評判のよくない人だったが、今井田さんは大腹で引受け、下僚に彼は言はせなかった。

拓務省は昭和四年六月田中義一大将の政友会内閣の時に設置されたものだが、田中内閣がこれを設けた意

図は明でない。従来の新領土統治方針が、内地延長主義と言うような瞬昧なものであったから、拓務省設置案に対しては、世論特に朝鮮人側から強い反対が起った。枢密院顧問官の前総督齋藤さんはこの朝鮮人の反対意見を代表して、朝鮮を植民地扱いすることは、従来の統治方針に反し朝鮮民衆の信を失うと強く反対したので、省名も拓殖省から拓務省と改められ、組織においても管理、殖産、拓務の三局の外に、新に朝鮮部を設け、朝鮮に関する事務は、台湾樺太関東州に関するものから切離して、別に取扱うこととなった。この為朝鮮、台湾、関東州、樺太など拓務省の取扱う新領土を総括して呼称する場合に、特に植民地という言葉を選んできて、外地という用語が新造された。しかも朝鮮及び台湾両総督官制は、拓務省設置に伴って改正を加えられなかったで、これらの両総督に対する拓務大臣の権限は曖昧で、拓務大臣は両総督に対して押がきかず両総督府の方でも、強大な権限を有し且中央に声望ある総督が在任しているので、中央との交渉にすこしも拓務省の介添えが必要でなく、寧ろ拓務省が中間に介在するのを迷惑位に考えていたのが実情であった。だから、設置後数年を過ぎても拓務省は存在理由を強化するに至らなかった。殊に省設置に当り各省から集めた要員の中には、好ましくない者もあつたりして、省内融和せず喧嘩論争に耽ることが多かつたらしく、外務省出身の次官小村欣一候爵は、これらの荒武者を統御するのに手を焼いた格好であつたとのことである。これが省の基礎を固めるに至らなかった理由のひとつでもある。次の次官も外務省出身の坪上氏である。そして前記のように関東州及び満鉄附属地の警察権問題で紛糾が起り辞任したのであつた。しかしこれを契機

として新陳代謝も行はれ、省内も小さいながら固まつて行つた。と言ってもともと設置理由が判然としないうちに、外地統治の方針も同化政策というような不合理なものであつたから、いつも省の存在を脅かされ勝て遂に戦争遂行上の必要という理由で消滅してしまつた。無理もない次第である。

唯ひとつ拓務大臣が自由に手腕を揮える仕事は移民であつた。この事務は外務省から移つたものだが、移民のような雑務的工作は、外務省としてはあまり執着がなく、拓務省の移民事務には側面から援助を惜まなかつた。従つて拓務大臣はこの仕事には大に力をいれ、日伯協会を援助したり、ブラジルのヴァルガス大統領を招いたり、日南産業株式会社を設立して平生飢三郎氏に社長になつて貰い、在伯移民の金融を援助したりした。私が管理局長になつた当座は、前局長生駒氏が非常に骨を折つて始めた、満洲試験移民の仕事は管理局の所管であつたが、これは南米南洋の移民を取扱う拓務省に移管した。満洲移民は将来盛に行はれる見込であつたから、事務の合理化のために移民事務はすべて拓務局で取扱うことにしたのである。その後満洲試験移民は、時に匪賊に襲はれ血なま臭い事件も起したが、概して成功の曙光を見るに到り、段々本格的に進められることとなり、永田秀次郎氏が大臣の頃百万戸移植計画が原則的に承認せられ、第一期計画として三十万戸を五年間に移住せしめることになり、その予算も成立した。満洲移民については、陸軍省軍務局と関東軍司令部とが非常に力をいれたので、大蔵省あたりでは陸軍が喧しく言うので移民の予算を認めたような傾向もあり、要求の全部の否認はしないが極力経費を切りつめるといった風がないでもなかつた。しかし

兎に角陸軍が後楯となっている国策だといふので、世間的には花々しく、移民を出す側の県庁でも本気に協力してくれた。だが実際には軍務局や関東軍の若い将校が威張って、事毎に容喙するので、当務者はそれに悩まされ不愉快を感じることが多く、拓務省としても骨の折れた仕事であった。私の拓務省に行った頃は、高山三平君が拓務局長であったが、彼はその後新設の台湾拓殖の理事に転出し、安井誠一郎君が朝鮮から来て拓務局長となり、満洲移住協会の加藤完爾氏那須浩氏などと共に陸軍と調子を合せて、満洲移民に尽力した。その後支那に起った事件は段々支那に波及してゆき、又日独防共協定の成立などによって、日本の国際的立場は困難となるにつれ南米移民は中止の已むなきに至り、拓務省としては満洲移民に専念するようになった。そして加藤完爾氏等の提唱する青少年移民も始まり、加藤氏は茨城県内原に広大な土地を占める満蒙移民訓練所を開設し、日輪兵舎と称する円形簡易の宿舎に多くの青少年を収容し、これを義勇隊と名づけ、寛克彦先生の創められたヤマトバラキと積する体操をやったり、万歳三唱の代りに<sup>イヤサカ</sup>弥栄三唱をやったりして、世間の注目を浴びた。そしてこれらの青少年は、成年移民の開拓団とは別に、満洲の奥地に設けられた訓練所に送られて行った。私は昭和十三年の年末に飛行機で満洲にゆき、佳木斯、端穗村、竜爪などの開拓団や鉄驢、勃利などの青少年義勇隊を視察したが、恰度嚴寒期で、これらの人々の労苦は甚しかった。特に青少年義務隊訓練所は、いづれも経費不足のため設備が極めて不完全で、青少年の困苦はひどいものがあった。由々しい人道問題だと思つて、新京ではこれらの仕事を担任している満洲拓殖公社の総裁坪上氏や関係

各方至急善処するよう要望したのであったが、帰京後間もなく、私は拓務省から離れたので其の結果は知らずにしまった。

昭和十二年五月私は拓務次官になった。林銑十郎大将の内閣の辞職する少し前である。前年北島謙二郎君が南洋長官に転出し、私がその後任として殖産局長に変わっていたのであった。それは広田内閣当時大臣は永田秀次郎氏であった。林内閣は此の年二月成立し、少数閣僚主義で大臣の兼任が多く、拓務大臣は蔵相結城豊太郎氏が兼任していた。その結城さんが私を次官に任用したのである。前次官の入江さんは三月の議会以来病気に罹り辞任したのであった。入江さんの辞任や後任については、結城さんは兒玉伯に相談したのかも知れない。林内閣は僅か四ヶ月で辞職し六月には近衛内閣となり、大谷尊由さんが拓務大臣となった。間もなく芦溝橋事件が起り、北支の戦雲が濃くなつて行った。近衛内閣の不拡大方針とは逆に大勢は陸軍の思う儘に拡大して行き政局は困難を極めた。大谷さんは翌年には新に設けられた北支那開発の総裁に転じ、外相の宇垣さんが拓相を兼任した。宇垣さんも間もなく興亜院問題で内閣と意見を異にしたため辞任し、一時近衛首相が拓相を兼任した時代もあった。翌十四年一月には平沼内閣が成立し、八田嘉明氏が拓相となったが八田氏も間もなく辞任し、四月には小磯国昭大将が拓務大臣となった。そこで私は辞任した。大正五年六月朝鮮総督府に出任以来二十三年にわたる役人生活の足を洗ったのである。満四九歳であった。

拓務省在任中は、朝鮮台湾樺太南洋群島等の外地では統治上の重大問題も起らず、私は出来るだけ外地当



局の意図するところが、実現できるよう協力することとした。實際拓務省としては、その位の實力しかもっていなかった。台湾で我国最初の米穀管理をやらうとしたとき、貴族院で伊沢喜男氏等の反対にあい、米穀管理の経費予算を否決され、両院協議会で漸く成立したことは、私の在任中の大事件で後味の悪いものであった。台湾の小林躋造総督森岡二郎長官もこの問題で非常に苦労したのである。

○

拓務省在職中、朝鮮え二度、台湾え二度、樺太え一度、満洲え一度出張した。朝鮮えは二度とも総督府で開かれた産業調査会に委員として出席したのである。最初は宇垣総督の時で、世の中はまだそう騒しくなかった頃であった。京城からの帰途、大邱に下車して上滝知事と共に慶洲に赴き仏国寺ホテルに一泊したり、釜山郊外の海雲台温泉に浴したりした。二度目は南総督の時である。私は会議より早目に朝鮮にゆき、咸北兎島高信知事を訪れて長鼓峰事件の見舞を述べ、又事件の中心地であった慶興慶源地方を視、阿吾地の人造石油工場にも立寄り、工場の工藤宏規氏から事件当時の工場側の活躍状況聞き、羅南の病院に事件の負傷者を慰問したりした。旧任地咸興にも立寄り、笹川恭三郎知事に水害見舞の挨拶をし被害状況などを聞いた。京城での会議はいはば形式的なもので、民間有識者の意見をきくというよりも、斯ういう機会をつくつて、内地の産業経済界の有力者に、朝鮮の实情を見て貰うという方に意義があった。これまでの朝鮮産業の基本が農業だけに置かれていたのが、これらの会議を契機として、農工併進主義に転換し、諸般の工業が目

ざましい躍進を遂げたのであった。

台湾に昭和一〇年に行ったのは、台湾総督府施政四十週年記念日に、大臣の祝辞を代読するためであった。六月は雨の多い最も暑い時期だとのことであったが、実情を知るには却ってよかった。そこで台湾を一巡することとし、まづ東部に廻り花蓮港、台東、恒春など蕃社の多い地方を経めぐった。何もかも珍しかった。蕃社の娘が背負籠にバナナを入れて山から降りるのに遇ったり、蕃人の担ぐ輿に乗って急端を渡ったりした。野辺に咲き乱れる花の色にも、水辺に繁茂する榕樹の群れにも、遠くの水平線に横はる白雲の姿にも、熱帯的情趣を漂はせていた。西部は之に反してよく開け、農村が多く草木よく繁茂し、皆豊かに見え、総督府四十年の労苦の程が偲ばれた。翌年再び台湾に行った。台湾拓殖が創立されるに際し、国有地を現物出資することになったのでその土地評価委員会が開かれ、私も委員として出席したのである。この時はあまり地方は視察せず、地震の被害を受けた農村を見舞っただけである。台湾には温泉が多く、全島を一周するにも毎晩のように温泉に宿泊できた。バナナ、パイナップル、マンゴウ柑橘など果物が多く、旅行者にはうれしいところである。台湾航路の旅客船も上等で、その船旅は楽しいものであった。

樺太えは昭和一〇年八月台湾から帰ると、すぐ施政四十週年記念祝賀式に参列する為渡った。この式には王子の藤原銀次郎社長、札幌控訴院の三宅正太郎院長、北海道拓殖銀行の岡田信頭取なども参列した、豊原では、藤原さんの好意で王子の倶楽部にとめて貰った。八月だというのに夕方もう暖房するほど冷え込んだ



のには驚いた。北国なるかなと感心したのである。式後東部から南樺太を一巡した。昔豊富だったという山林は殆どなく熊笹だけが茂っているのは淋しかった。多くは山火事で焼けたのだという。南国の台湾と北国の樺太とは如何にも対照的だった。暗藍色の海には船影も鳥影もなく、まことにけびしいものであった。東北隅の敷香あたりは随分寒かった。北緯五十度の国境にも行った。郵便物交換地点で先年岡田嘉子等がソ連側に逃げこんだところである。彼我の望楼が繁茂する樹林の上に互に望見され、警戒は嚴重であった。岡田の事件にこりたためであらう。日本海に面する西海岸は幾分暖かで且明るく、町も多かった。海辺の砂地にはハマナスがむらがり咲いていた。帰途北海道に立寄り、岡田頭取の好意で、層雲峡、阿寒湖、摩周湖、弟子屈温泉、狩勝峠、定山溪などを一覽できたのは生涯の思い出である。北海道は樺太に比べると季候もよく、相当開拓されていたが、開拓着手以来の年数に比し、必ずしも好結果とは言えぬと感じた。北海道は早くから各省がそれぞれの所管事務を行ったので、綜合開発が遅れたのではあるまいか。若し政府乃至国民が高い理想をもって朝鮮台湾のような綜合的開發を行っていたら、もっと立派な理想的植民地となつたのではなからうかと感じたのであった。

満洲視察のことは前に書いた通りである。

○

拓昭和十一年二月軍隊の反乱が起つた。そして内大臣の齋藤さんも難に遇つた。二月二六日午後四谷仲町

の齋藤邸を小河正儀君と共に弔問して、二階の十畳で子爵の遺骸にお目にかかった。負傷され白い繃帯で腕を吊つた夫人が、私達の弔問に対し遺骸にかけてあつた白布をとってくれたのである。静かに平和に眠っていられ、少しも苦悶の影は見えなかった。夫人のお話によると、兵隊が乱入し來つた時夫妻は洋室の寢台に寝ていて、乱入の足音をきき、夫人が入口に立ちはだかつたのを、齋藤さんはこれを押し除け、自ら兵隊の正面に立つたところを、兵隊はイキナリ機関銃を打つたので、子爵はよろけながら寢台に降りうつむけに倒れた。すると兵隊は背中止め機関銃を打つたということだ。夫人の氣丈な態度は皆感心した。辰野隆さんによると、米国のグルウ大使は、かねて本で読んだ日本の武士の妻の精神美、教養美に憧憬していたが、齋藤さんの遭難を見舞つたとき、齋藤夫人の態度にすっかり感動して、今目前に日本女性の一典型が嚴として存在するを知り、歎美の念を新にしたと語つたそうだ。此の凶変で齋藤さんの外高橋是清翁その他の人々を失つた。日本が段々狂つた途を歩んでゆく始まりであつた。

反乱軍は新築の国会議事堂を占拠して本部とし、永田町及び霞ヶ関一帯に兵を配置し要所の交通を遮断していた。拓務省の附近にも兵が配置されていた。陸軍の首脳は愚図していたので、海軍次官の山本中将は、陸軍がやらないなら海軍が鎮圧すると強硬で、連合艦隊を東京湾に集結し、砲撃を始めるかも知れぬ情勢となり、永田町霞ヶ関一帯に退去命令が出た。この時警務課長赤木親之君が大に活動して、海軍や内務省から情報を集めたり、職員の避難や文書の保護に骨を折つたりした。赤木君は前の上海事變の時上海にいて戦乱

の間で情報あつめの活躍をした経験家であった。其の後外務省参事官の職名で、上海警察副総監となり、再び上海に赴き得意の英語で英人総監を輔けたが、昭和十六年の春殉職した。自動車に乗ったところを兇漢に襲はれ、短銃を一発受けたが自ら車外に飛び出して組みつき死んで離さなかったと言う。文官としては珍らしく剛気な気性であった。同君は絵が巧みで、水彩で私の肖像を描いてくれたので、私はこれを書斎に飾っておいたが、戦災で焼いてしまった。

二・二六事件の報をきくと、入江次官は直に牛込薬王寺の児玉大臣邸に駆けつけ、児玉さんに即刻参内を促した。児玉さんの養子忠康氏の親の広幡侯爵が宗秩察総裁として宮中にいたので、ひそかに電話で連絡をとり、決死の覚悟で反乱軍の兵隊の守る乾門から宮城に入った。児玉さんが最初参内した大臣だった。首相官邸も襲撃せられ、岡田首相は生死不明だった。児玉さんの采配で宮中に各大臣を呼び集めて、善後策の閣議を開き、後藤文夫内務大臣が臨時首相代理と決定した。変乱の渦中に速に政府が微動もせぬ態度を示し得たことは幸であった。この原動力となったのは、入江次官の機略で、児玉さんも名を挙げたのである。

此处ですこし拓務大臣について書いておこう。私の拓務省在任は僅に四年に満たぬものであったが、児玉、永田、結城、大谷、宇垣、八田、近衛、小磯等の人々を送迎した。此の内拓務省で我が省の大臣らしい感情で迎えたのは、児玉、永田、大谷の三氏位のものであった。他の人は、兼任か又は在任期間が極めて短かったのである。永田さんは、若い時郷里淡路で中学校長をやっていたが、後高文試験を受けて内務省に出仕し

大正天皇即位礼の時京都の警察部長として名を揚げ、寺内内閣の警保局長として米騒動の処理に当たった。退官後貴族院議員となり、又長いこと東京市長をつとめた。青嵐と号して俳句もやれば、随筆も達者に書き、釣が好きで又自慢でもあった。すこし間の伸びたような風采と言語とは、妙に人をひきつけるものがあって、殊に其の多少漫談めいた点のある放送は当時日本一とされていた。永田さんの仕事は満州移民計画の樹立と、ブラジル大統領ヴァルガス氏の招待である。大谷さんは近衛文磨公の友人で、近衛公の側近人事として拓相就任は評判はよくなかった。西本願寺の光瑞師の弟、光明師及び九条武子夫人の兄に当る。身長も高くでっぷりふとった胆計質の味のある風格の人だった。西本願寺の奥深いところで、自由な教育を受けて成長し、学校教育は知らないのだが、古今東西の知識は極めて豊富であった。殊に西域南洋の知識が深かった。大谷さんの言うところによると、これらの知識は皆經典から知得したものだそうである。私はその説明をきいて、始めて仏典の奥の深さを知った。南画もうまく字も巧みで、茶道にも達していたようだ。大谷さんは若い時からの勅選議員で、児玉伯は私に、大谷さんはなかなかの傑物で立派な政治家だと語ったが、そういう手腕を示す機会に恵まれなかった。唯閣僚で近衛公に何でも遠慮なくものを言ったのは、大谷さんだけだったと言うことだ。在任一年ばかりで北支開発の創立と共に総裁に推されて、大臣はやめてしまった。これは堂々たる体軀と茫洋たる風貌と、漢籍仏典の深い素養とは、中国人を引きつける魅力と思われ、頗る適切な人事だった。大谷さんも大に意気込んで出かけたが、就任後間もなく風邪がもとで張家口あたりの旅舎で

没してしまったのは残念であつた。児玉さんは、政界財界その他各方面に頗る顔の広い人であつたから、拓務大臣としても、いろいろ実のある仕事をした。南洋拓殖台湾拓殖の両会社を創立して、経済界の関心を南洋群島や台湾の産業開発に向けさせたり、又ブラジル移民の定着保護のために、日南産業を始めたりして、拓務省の存在を大に意義づけたのであつた。

## 一九浪人生活

私はかねがね日本の役人制度は学校のようなもので、役人は一生の事業ではない。晩かれ早かれまだ活動の余力を残して退官する。国家は多年これを養つて、訓練教習の上立派な経験家として社会に送り出す。成績のよい者は早く卒業してよい就職口が見つかる。まるで学校と同じではないかと思つていた。そしてその学校には、大蔵省のような有名校があつて、卒業生の売れ口のひろいものもあると言うわけだ。私は在官二十三年、比較的長く勤めた方だ。誠心誠意勤勉精励の御奉公をしたつもりである。退官しても少しも悔ゆるところはなかつた。

特に朝鮮総督府に出仕して、斎藤、宇垣等の人々をはじめ、幾多の一流の人物に親炙する機会が多かつたことは、まことに幸であつた。又多くの尊敬すべき親友を得たことも私の人生を非常に幸福にした。又後に

拓務省に勤務して、宮中に開かれる枢密院会議をはじめ首相官邸及び各省の会議に列席し、中央での国策決定の機密に参与し得たことは、また私の経験を豊富にした。又拓務省では、台湾樺太南洋南米などの朝鮮とは全く趣の異なる地方についても、知見を広める機会に恵まれたことも多かつた。世界をみる眼がすこしは出来たように思われる。役人としては、いろいろな経験を積んだ方だとおもっている。

退官後一年ばかり浪人していた。退官の際小磯氏が何処かに世話をすると約束したから待つていたのである。浪人中の生活費は、田中次官の好意で取計つてくれた退官賜金で賄つた。

その頃日本拓殖協会というものがあつた。これは入江次官の発案で管理課長副島勝君が、奔走して出来たものだ。東拓、南洋興発、台湾拓殖南洋拓殖などの寄付金と少許の国庫補助金とで発足した財団法人で、目的は国民に海外思想を鼓吹するため、拓殖博物館拓殖図書館を設けることである。小石川砲兵工廠跡の国有地の一部を借受け、木造二階建延百坪ばかりの建物ができていた。最初の理事長は永田秀次郎氏で下村宏、鶴見左吉雄、大蔵公望等の諸氏に理事になつて貰つた。昭和十五年に永田氏が辞退されたので、その年四月から私が理事長になった。私は協会の事業を前進させるため、藤田嗣雄、佐々木喬等の学者を迎えて其の協力を求めた。無報酬であつたが、役員はじめこれらの顧問はよく応援してくれた。それで南洋事情講習会を開いたり、南洋団体連合会を結成したり、相当な活動ができた。私は理事長を今村武志氏に譲つて、再び朝鮮に就職したが、今村氏が児玉伯の援助で、南洋団体連合会主催で、三越本店で開催した大南洋展覧会



は素晴らしいものであった。各地でも引つづき同様の催があり、南洋に開する国民の関心は高まつた。

## 二〇 再び朝鮮に就職す

昭和一五年八月、私は再び朝鮮に赴き、新設の朝鮮鉱業振興株式会社の社長に就任した。これは児玉伯大野政務総監及び穂積殖産局長の配慮によって出来た、新しい地位であった。鉱業振興というのは、前年内地に設立された帝国鉱業開発と同じように、時局の要求する鉱物の増産を図るため、鉱業資金の供給、技術の指導等を行う外、自ら鉱山や製錬所も経営する等朝鮮の鉱業開発を目的とする特殊会社である。但し金については別に産金振興という特殊会社があるので、新会社の目的から除外され、又鉄石炭については、その経営に大資本を要するので、その振興助成については、政府が直接之に当り、新会社はこれには関与しないことになっていた。最初の資本金一千万円は、全部東拓、鮮銀、殖銀及び鮮内で鉱業を経営している有力会社が出資し、政府の出資はなかったが、其の後数回の増資が行はれ、其の都度政府の出資があつて、終りには大部分政府出資の五千万円の大会社となった。又社債も数回発行して、その発行額も三千万円以上に上つたように記憶している。会社の役員は政府が任命することになっていて、会社創立の際、事務重役として、総督府出の西本計三、殖銀出の田中篤二の両氏が、又技術重役として三菱鉱業出の伊藤喬介、飯田恵の両氏が

任命され、総督府出の金泰錫、鮮銀監事の芳賀文三の両氏が監事となった。かくて会社は成立し役員の陣容は整つたものの、会社の事務所の選定や職員の採用から、仕事を始めねばならず、又朝鮮の鉱業界には、既に多年三井、三菱、住友、日本鉱業をはじめ、幾多の有力会社が活躍しており、新会社がすぐに着手できるような鉱山があるわけでもなく、開発資金の需要も目ばしいものが直に顕はれるわけでもないもので、どうして会社創立の目的たる朝鮮鉱業の振興重要鉱石の増産に役立ち得るのか、皆目見当がつかず、五里霧中であつた。しかし総督府鉱山課の強力な後援と地質調査所の立岩巖所長や近藤忠三技師の積極的な協力とがあつて、段々と会社の組織も整い、仕事もその緒について行つた。特に翌十六年の暮大東亜戦争が始まつてからは、会社の業務は拡大され、業務は多忙になった。戦力増強に欠くべからざる鉱物で内地には殆ど産出しないうものが朝鮮には多種類賦存するので、その開発が急務となつたからである。戦争まではこれらの特殊鉱石は、海外からの輸入品であつた。戦争でそれ等の輸入が杜絶し消費も増大するので、補充のため朝鮮でこれらの鉱物の増産を急がねばならない。しかし朝鮮の鉱石は概して品位も低く、小規模の鉱山であつて、増産もなかなか思うように進まなかつた。その内に臨戦体制の一環として、いろいろな産業の統制が行はれるようになり、朝鮮でも、これに呼応していろいろ産業統制が始まつた。戦争物資として重要なタングステン、モリブデン、黒鉛、螢石、石綿、重晶石などは、鉱業振興で一手に買受け、これを内地の統制団体又は統制会社に売渡すこととなつた。鉱業振興は創立目的より多少ずれて、統制会社的色彩を濃くしたのであつた。



此の頃技術重役の伊藤飯田両氏は相次いで辞任し、古河鋳業出の伊藤万清氏と東大工学部佐野教授の斡旋による朝賀信善氏とがこれに代った。伊藤喬介氏も飯田氏も辞任の理由を明にできなかったが、統制会社となつては技術重役としては、会社の事業が期待に反し魅力を失ったからであろう。

昭和十九年六月サイパン島失陥し戦局愈我方不利となった。この前後から、産金事業を整理し、その資材を戦争資材に流用することに政府の方針が決定され、産金振興会社の朝鮮支社は鋳業振興に合併し、鋳業振興が産金事業の整理を行うことになった。それで鋳業振興に副社長が設けられ慶南知事であった西岡芳次郎君が退官してこれに就任した。産金振興朝鮮支社には支社長として草間秀雄、理事として阿部千一の両氏がいたが産金振興の解散と共に辞任した。私も此の頃辞任を考えたが、恰度その頃小磯総督が内閣総理となり先輩遠藤柳作氏が政務総監として阿部総督と共に着任したので、小磯総督と進退を同じくするように受取られるもイヤだし、遠藤先輩が来たばかりなのにすぐ辞任するのも具合が悪いので時期を見て辞意を表明するつもりでいた。

さて産金振興の業務を引受けてみると、従来のやり方が腑に落ちぬことが多かった。産金振興から引継いだ職員も、自信のある連中は既に他に転出していたような次第で、この職員を以て、産金鋳業を廃止せしめてその資材を買受け、補償金を交付することはなかなかの難事業であった。副社長の西岡君が、主として産金整理を統轄していたが、随分骨の折れたことであった。昭和十九年の晩秋、産金整理関係の職員が二三名

不正行為ありとして、警察に拘引せられたのを始めとし、上級職員まで続々嫌疑を受くるに至り、多数の社会人も証人として呼び出され、社会の耳目を聳動する不祥事となった。私は会社統率の責任上辞意を表明したところ、昭和二十年二月九日阿部総督から退任の辞令を受け、二月二十日京城を後にして東京に帰った。適当な後任者を得たならば、もう辞任したいと思っていたが、こんなことで辞任するのはまことに残念であった。

鋳業振興には朝鮮燐鋳株式会社と日本黒鉛鋳業株式会社との子会社があった。前者は過燐酸肥料の原料として南洋から輸入していた燐鋳に代るべき燐鋳石を咸南端川郡で採掘するものであったが、予期に反して鋳石も少く品位も悪く経営は困難を極め、専務の山成不二磨君が苦心していた。此の鋳山の奥で耐火原料のマグネサイトを採掘する朝鮮マグネサイト株式会社の事業地があつて、同社長の美座流石君が端川から四〇キロほどの鉄道建設に骨を折っていた。燐鋳会社としては、その鉄道の完成によって、鋳石の搬出が容易になったならば、幾今経営も楽になるのではないかと思はれていた。日本黒鉛鋳業の方は、咸北鶴城郡で鋳業振興が手にいれた黒鉛鋳を採掘するものであった。この方は鋳量も多く（月産百トンに達していた）品質も優良だったので、専務の落合完二君や常務の高堂健二君なども、大に張り切って経営に當っていた。戦争の末期には、稀有元素を含有する鋳物の探索も行はれ、近藤忠三君などの尽力で、ジルコン、コロンブ石、フェルグソン石などの開発も計画されたが、十分の効果をあげぬ内に終戦となつてしまった。

## 一一 私の見た朝鮮の人物

最後に私の見た朝鮮の人物について、記しておこうと思う。第一は侯爵李完用である。この人は日韓併合の立役者で、朝鮮側からは売国奴と罵られていたが、私は朝鮮美術展覧会の審査員としての同氏に、学務課長時代に数回宴席で一緒になった。その頃既に相当の老齢であり、且日本語も不自由なので、口数も少く、いつもニコニコと温顔の敬愛すべき老人であった。熱心に字を習っていて立派な字を書いた。望まれると芸妓の羽織裏や帯などにも字を書いてやっていた。大正八年の万歳騒動のときは、私費を投じて多数のビラを印刷して配布し、民心鎮静に努力した。売国奴と罵られている身として、進んでこのような態度に出たのは、なかなか気骨のあった人であることが、うかがわれたのである。この人については、曾って伊藤博文公も、彼は意思頗る固く且何人に対してその信念を直言する勇氣と大胆さがあり、又よく大勢を察する明があつて朝鮮人中稀にみる人物だと評したことがある。其の子李恒九や孫の李丙吉にも面識はあつたが、とても李完用だけの気魄も達識は見られなかった。

私達が小学生の頃から、朝鮮の進歩的有志として、金玉均と並べてその名前を聞き馴れていた人に侯爵朴泳孝がある。この人は、私が会った頃には祖国の改革に挺身した青年時代の烈しい気魄は既に全く消磨して

単なる温良の老人としか受取れなかった。この人は李太王の駙馬として門地も高いのであった。

寺内総督暗殺事件の関係者として、引込んでいた尹致昊という子爵がいた。この人は基督教信者で人格者として青年に崇拜されたのであった。宇垣総督の頃から、総督府に出入するようになりいつも朝鮮側長老の意見を代表として発言するような立場にいた。白い長髯を撫しつつ語る小柄の老紳士であった。この人を引き出したのは宇垣総督の手柄であった。この人が総督政治に協力的になったことは、青年等の思想に大きな影響を与えたことと思われる。宇垣総督の頃は、産業が隆々として勃興した時代で、民心も大に安定していた。万歳騒動のときの独立宣言文起草者であった崔南善（天道教経営の中学校長であった）の如きも、日本古代史を研究して日韓同祖論を主張するに至ったと伝えられ、孫乖熙亡きあとを嗣いて天道教主となった崔麟も日韓一体ならずんば朝鮮民族の生きる道なしと言明したとも伝えられた。又万歳騒動当時上海仮政府の有力者であった呂運亨も帰ってきた。思想方面に大きな安定が見られた時期であった。

李完用の縁辺だという財界人に韓相竜氏がいた。はじめ漢城銀行の頭取であったが、銀行経営の責を負うて辞任し、後は朝鮮生命保険の社長に専念していた。純粹の民間人として終始したのは珍しい方である。これは渋沢栄一翁の訓えに従ったものだと称し、自らも朝鮮の青澗翁を気取っていたが、どういふものか各方面から毛嫌されていた。如才なく立廻わるという評判で、朝鮮人からの勅選議員を採ることになると真先に運動したが、なかなか成功しなかった。朝鮮の有識者は概ね一通りの中国古典に通じているのが例だが、

韓さんは私達が日常口にする故事熟語も知らなかった。韓さんと対蹠的に評判のよかったのは朴榮喆氏である。この人は全州の地主の子で、門閥は高くはなかったが、長身肥大の美丈夫で、李太王の侍従武官であった。後郡守参与官道知事をつとめ、退官して朝鮮商業銀行の頭取となった。少しも気取らぬ、快活で親切な紳士であった。惜しいことに早死してしまった。この朴氏より先輩に朴重陽という道知事があった。この人の出身は極めて低かったが、伊藤博文公に見出され若い時から地方長官となり、長いこと勤め後は中枢院参議となっていた。極めて豪放な胆略もあり才智にも富んでいた。敗戦後日本の協力者として、韓国新政府に呼び出され査問を受けた時、多くの日本時代の役人達が逃げかくれていたのに、この朴重陽翁は平然として出頭し、日本に協力したことが正しかったという所信を述べたが、そのまま帰宅させられたと言うことだ。朴翁の日常の豪放な態度は、てらっているものと見ていたが、この変乱に処して堂々と信念を披瀝したやり方を見て、この翁の真価を改めて見なおしたと山口重政君が語った。

私達と同時代の人々の中にも、なかなかすぐれた人物が多かった。門地も低く、別段日本又は外国の大学に学んだという学歴のある者ではなかったが、朝鮮式の教養を身につけてをり、実地に叩きあげたという人々である。李範益、鄭教源、嚴昌燮、金東勲、金時權といった諸氏がこれである。東京大学を出た人々も沢山いた。四二年出の張憲植氏をはじめ、朴泳喜、南宮營、金雨英、俞万兼などの諸君はいづれも良家の子弟といった感が深く、覇気も胆略もない、温良な紳士に過ぎなかったように思う。しかし昭和時代になると、

東大その他の大学を卒業し、高等文官試験に合格して官吏となった人々は、人物識見もすぐれた者が多く、同じ資格の内地人官吏を圧倒する程の者も多かった。この頃から内地人は、外地に出かけるならばむしろ満州や中国を選ぶ傾向があったのだ。

私は総督府にばかりいたので、産業界や財界人々とは朝鮮人にも懇意になる機会が少なかった。唯咸南知事時代に知り合った人々の中に方義錫という人がいた。正直で親切な好感のもてる人であった。このような人は、他の地方にも沢山いたことと思われるが、私は知り合いになる機会がなかった。

昭和三五年八月一日発行(非売品)

著者兼 萩原彦三  
発行者

神奈川県川崎市鹿島田一二一

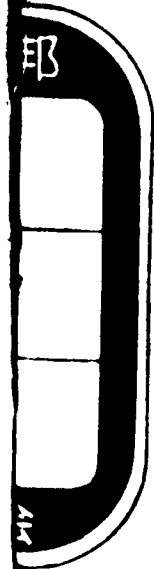
印刷所 栄光社印刷所

吉武実

東京都品川区五反田一ノ四〇五



11343-116



故寺内總督銅像建設會報告書



289-17

拜啓 時下愈御清祥奉慶賀候陳者故寺内總督銅像建設計畫に付ては早速御賛  
同に與かり以御蔭諸事滞無く進捗致し去る九月三十日朝鮮總督府廳舍内に於  
て目出度く除幕式相濟み候儀偏に御芳志の賜と感佩仕候茲に殘務一切の結了  
を告げ候に付ては謹て御禮申上度尙報告書記載の通り收支精算の結果若干の  
剩餘金を生じ候に付關係委員も熟議候處右は山口市外の寺内文庫へ寄附の  
儀最も適當と決し右様取計ひ置候間何卒御了承被下度此段得貴意候 敬具

昭和十年十二月 日

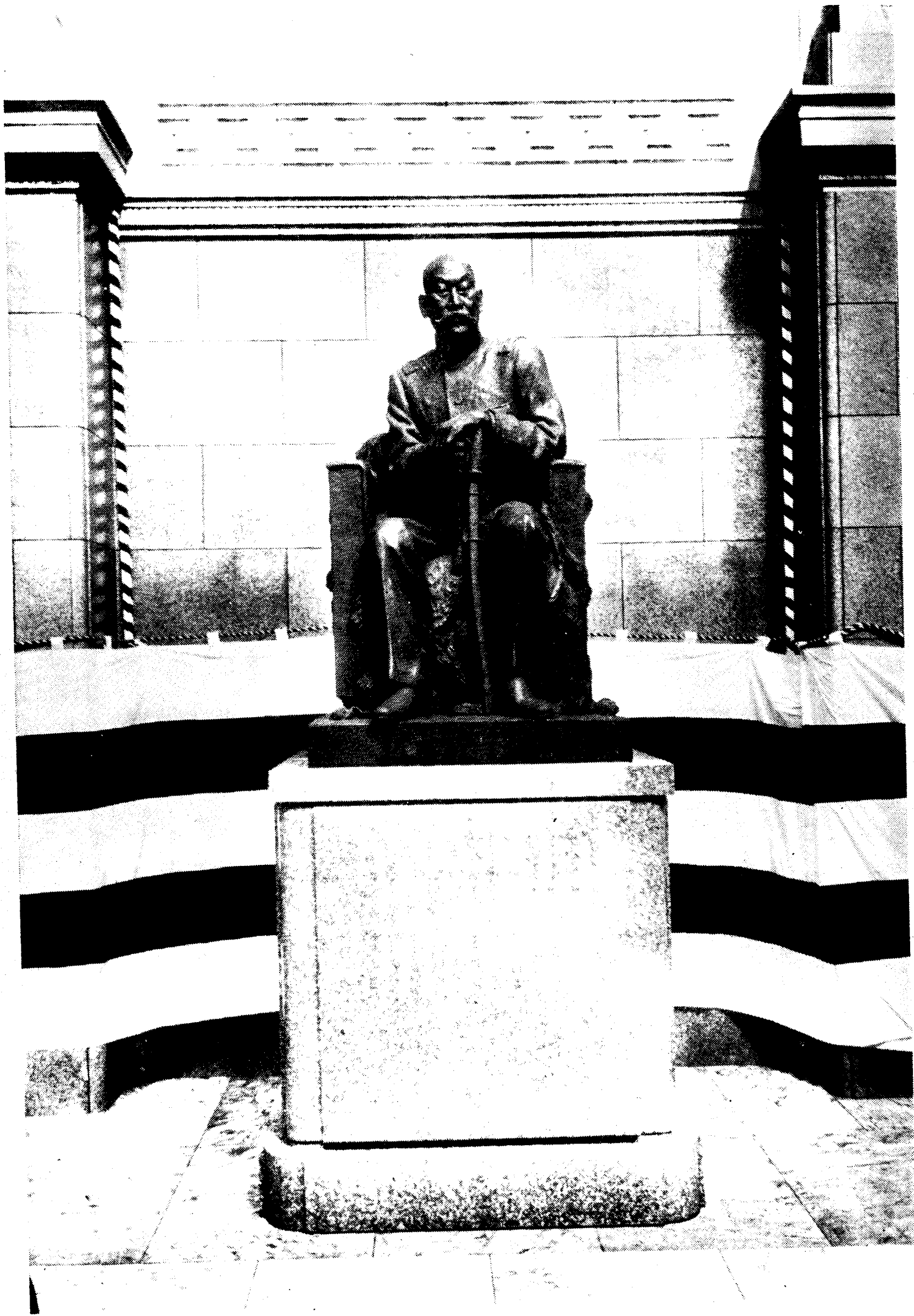
故寺内總督銅像建設會

荒井賢太郎	石塚英藏	國分三亥	宇佐美勝夫	關屋貞三郎	有賀光豐
-------	------	------	-------	-------	------



初代朝鮮總督故寺內伯爵銅像

289.1  
41



味升障轡蘇晉姑寺内白箱殿剎

1985  
13

故寺內總督銅像臺座記文

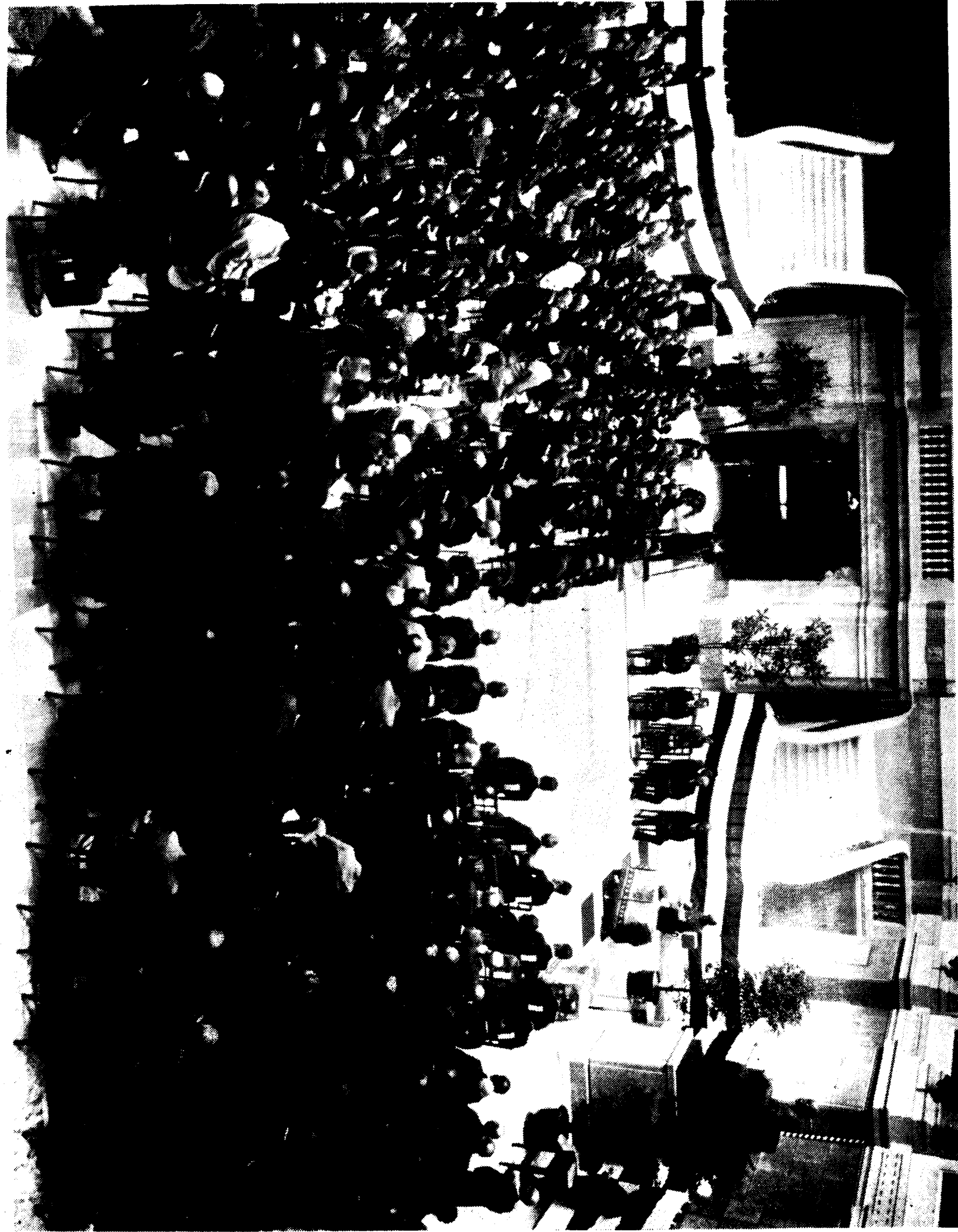
文昭聖廟晉縣內寺坊

此為故元帥大勳位寺內  
正毅伯之像伯以明治四  
十二年五月任延熹監八月  
奉詔歸結併合條約十  
月婚任朝鮮給督在職前  
後六年有餘至誠致身經  
營撫輯恩威並行治平之  
基立矣今茲昭和十年當  
施政二十五周年又益念  
其功德於是同志胥謀造  
像嚴之觀督府以表追慕  
之忱云



故寺內總督銅像除幕式

友幕劍險晉縣內寺地



口 繪

## 目 次

初代朝鮮總督寺內伯爵銅像	
故寺內總督銅像臺座記文	
故寺內總督銅像除幕式	
故寺內總督銅像建設ノ經過	(一)
銅像除幕式	(三)
發起人氏名	(二六)
寄附者氏名	(三三)
收支會計	(八三)

## 故寺内總督銅像建設ノ經過

朝鮮總督府始政二十五周年ニ際シ初代總督故寺内正毅伯ガ創業ノ難局ニ膺  
リ至誠ヲ竭シテ 皇謨ヲ翼賛シ奉リ以テ統治ノ基礎ヲ築キタル偉勳ヲ懷ヒ永  
ク之ヲ記念スルノ計畫ヲ起サントスルノ機運漸ク熟スルニ鑑ミ昭和十年三月  
宇佐美勝夫、關屋貞三郎、有賀光豐ノ三氏相會シテ銅像建設ノ案ヲ立テ先ヅ  
荒井賢太郎、石塚英藏、國分三亥三氏ニ計リ右六氏ノ名ヲ以テ在東京有志者  
ニ會合ヲ求メ數回協議會ヲ開キ其間多數ノ發起人ヲ得更ニ其中ヨリ實行委員  
ヲ舉ゲテ計畫ヲ進メ會名ヲ故寺内總督銅像建設會ト定メ銅像ハ座像トシテ  
花崗石臺座ニ安置スルコトトシ之ガ製作ヲ彫塑界ノ權威朝倉文夫氏ニ依囑セ  
リ。

銅像製作費及雜費ハ主トシテ之ヲ内鮮ノ緣故者ニ需メ又特ニ故總督ノ高風  
ヲ欽仰シテ此舉ニ賛スル篤志者ノ寄附ハ之ヲ受クルコトトシ趣意書、計畫要



項、發起人及實行委員ノ氏名ヲ具シ内鮮相分擔シテ緣故者竝ニ有志ノ賛襄ヲ求メタリ。而シテ本計畫ノ實行ニ付テハ内地ニ在テハ宇佐美勝夫氏主トシテ幹旋ノ任ニ當リ事務所ヲ中央朝鮮協會ニ置キ朝鮮ニ在テハ有賀光豐氏主トシテ幹旋ノ任ニ當リ事務所ヲ朝鮮殖産銀行本店ニ置キ寄附金拂込釀金ノ保管ハ内鮮ヲ通ジ朝鮮殖産銀行ニ委託シタリ。

本計畫ニ付テハ當初ヨリ宇垣總督ノ賛同ヲ得タルヲ以テ銅像建設ノ位置ハ其指定ノ下ニ總督府廳舍大ホール内ニ確定シ安置箇所ノ補強工事其他ノ施設ニ付當局者ノ協力ヲ得タリ。

上述ノ如クニシテ本計畫ノ發起セラルルヤ畏クモ李王家ヨリ金壹封ノ御下賜アリタルヲ始メトシ内鮮有志翕然トシテ參加シ諸般ノ施設亦極メテ順調ニ進捗シ豫定ノ製作及安置工程ヲ完了シ昭和十年九月三十日即チ始政二十五周年記念日ノ前日ヲ以テ盛大ナル除幕式ヲ舉行シタリ。

本計畫ニ對スル寄附金ノ總額ハ貳萬壹千參拾貳圓六拾壹錢、其口數壹千九

百九拾四口ニシテ之ヲ内鮮ニ區別スレバ内地八千八百四拾五圓、貳百參拾九口、朝鮮壹萬貳千百八拾七圓五拾壹錢、壹千七百五拾五口ニ上リ朝鮮ニ於テハ故寺内總督ヲ識ルト識ラザルトヲ問ハズ全道ヲ舉ゲテ多數者ノ參加ヲ見加之寄附申込期ヲ過ギ除幕式舉行後ニ於テ尙釀出者尠カラザルノ實況ニ在リシハ洵ニ故寺内總督ノ高德ノ致ス所ニシテ欣快ニ堪ザル所ナリ。

此ノ如クニシテ殘務一切ノ處理ヲ了ヘ收支決算ノ結果別項會計報告ニ示ス如ク金壹千五百七拾五圓八拾參錢ノ剩餘金ヲ生ジタリ。依テ關係者協議ノ上舉ゲテ之ヲ山口市外宮野村所在寺内文庫へ寄附スルヲ以テ最モ本計畫ノ趣旨ニ副フ所以ナリト決シ同文庫ニ對シ寄附ノ手續ヲ了シタリ。

〔附言〕 本報告書第十一頁掲載ノ除幕式ニ於ケル經過報告併セテ御高覽ヲ乞フ。

## 銅像除幕式

故寺内總督銅像除幕式ハ昭和十年九月三十日午後二時ヨリ朝鮮總督府廳舍

ニ於テ舉行セラ。秋晴拭フガ如ク京城ノ天地洵ニ明朗ナリ。定刻前來賓ノ着到踵ヲ接シ其數約五百ヲ算ス。式場タル大ホールハ四周紅白ノ幔幕ヲ以テ裝ハレ、同シク紅白幕ニテ被覆セラレタル銅像ノ傍ニハ大盆栽ノ常綠樹ヲ配シ、清楚ニシテ又莊重ノ景觀ヲ呈シタリ。

定刻來賓ノ席定マルヤ委員中島司氏始式ヲ宣シ故寺内總督銅像建設會代表有賀光豐氏ノ開式ノ挨拶、同代表宇佐美勝夫氏ノ式辭、同委員生田清三郎氏ノ經過報告アリテ後委員林茂樹氏二女準子嬢(十一歳)ノ織手ニ依テ幕紐ヲ引カルルヤ一瞬茲ニ初代總督故寺内正毅伯ノ風貌躍如タル銅像ハ其臺座ト共ニ會衆ノ眼前ニ現ハレ滿堂ノ拍手ニ對シ解顔一揖セントスルノ慨アリ。

除幕已ニ終リ故人ノ颯爽タル英姿ノ前ニ場内感激ノ氣溢ルル時委員國分三亥氏ハ寺内家ノ當主寺内壽一伯ガ遙カニ臺灣ヨリ寄セラレタル慇懃ノ挨拶電文ヲ披露シ、夫ヨリ朝鮮總督府ヘ銅像贈呈ノ儀ニ入り贈呈者代表宇佐美勝夫氏ヨリ受贈者代表今井田政務總監ヘ目錄ノ贈呈アリテ來賓祝辭ニ移リ先ツ宇

垣總督、次デ齋藤子爵、植田軍司令官ノ何レモ叮重ナル祝辭アリ、之ニ續キテ侯爵朴泳孝氏ノ祝辭ヲ張憲植氏、中央朝鮮協會會長阪谷男爵ノ祝辭ヲ關屋貞三郎氏何レモ代讀セラル。次デ委員大橋次郎氏ヨリ拓務大臣兒玉伯爵、荒井賢太郎氏、滿鐵總裁松岡洋右氏其他ヨリノ祝電ヲ披露シ有賀代表ノ閉式挨拶ヲ以テ目出度ク除幕式ヲ終了セリ。此間約一時間ナリ。參列者中閉式後尙銅像前ニ低徊シ其ノ遺容ヲ瞻仰シテ故人ノ高德ヲ追憶スルノ人尠ラザルヲ見タリ。此日京城放送局ハ特ニ式場ニマイクロフォンヲ設備シ其實況ヲ全鮮ニ中繼放送シ又宇佐美代表ハ其夕同放送局ニ於テ「故寺内總督ヲ偲ブ」ト題スル記念ラヂオ講演ヲ爲セリ。

當日參列ノ主ナル來賓氏名左ノ如シ。(イロハ順)

今井田清德殿	伊東淳吉殿	石川登盛殿	池田清殿
井上清殿	子爵尹德榮殿	岩佐重一殿	石森久彌殿
飯倉文甫殿	入江海平殿	生田清三郎殿	原田棟一郎殿

林茂樹殿	林繁藏殿	新田留次郎殿	穗積真六郎殿
本間孝義殿	本田保太郎殿	朴容九殿	富永文一殿
時實秋穗殿	戶嶋祐次郎殿	趙義聞殿	張弘植殿
張憲植殿	趙性根殿	男爵李恒九殿	李軫鎬殿
男爵李允用殿	李謙濟殿	大久保利隆殿	岡本至德殿
大串敬吉殿	小川悌殿	岡本桂次郎殿	渡邊忍殿
渡邊豐日子殿	渡邊純殿	柿原琢郎殿	加藤敬三郎殿
韓相龍殿	賀田直治殿	笠井健太郎殿	韓圭復殿
吉田浩殿	橫瀨守雄殿	米田甚太郎殿	高山長幸殿
立川二郎殿	高野省三殿	高久敏男殿	田中武雄殿
谷多喜磨殿	高木德彌殿	伊達四雄殿	高楠榮殿
宋鎮禹殿	頭本元貞殿	辻秀春殿	辻本嘉三郎殿
永井清殿	中村寅之助殿	中山勝之助殿	中島司殿
奈良井多一郎殿	南宮營殿	棟居俊一殿	武者鍊三殿
宇垣一成殿	上野直昭殿	牛島省三殿	植野勳殿

植田謙吉殿	宇佐美勝夫殿	野田新吾殿	山田三良殿
安井誠一郎殿	矢鍋永三郎殿	矢島杉造殿	山本犀藏殿
松井房治郎殿	前田昇殿	松本誠殿	增永正一殿
松原純一殿	元惠常殿	嚴俊源殿	小松綠殿
小島誠殿	遠藤柳作殿	荒井初太郎殿	有賀光豐殿
淺野太三郎殿	安倍良夫殿	淺利三朗殿	赤井定義殿
子爵齋藤實殿	齋藤禮三殿	澤田豐丈殿	澤慶治郎殿
佐方文次郎殿	齋藤久太郎殿	金明濬殿	魚潭殿
金漢奎殿	菊池一德殿	金潤晶殿	金寬鉉殿
宮本元殿	三井榮長殿	水口隆三殿	篠田治策殿
進辰馬殿	榛葉孝平殿	柴田善三郎殿	清水源殿
重田勘次郎殿	徐相助殿	申錫麟殿	閔大植殿
森辨治郎殿	持永淺治殿	關屋貞三郎殿	石鎮衡殿

## 開式挨拶

有賀光豊

閣下竝ニ各位

茲ニ開式ニ臨ミマシテ一言御挨拶ヲ申上マス。

朝鮮施政二十五周年ニ際シマシテ、第一世總督故寺内伯爵ヲ記念スル爲計畫致シマシタ故總督ノ銅像ガ、多數官民有志ノ深甚ナル御賛同御援助ノ下ニ竣成致シマシタノデ爰ニ除幕式ヲ舉行スルコトト相成リマシタ。

顧リミマスレバ本日ハ朝鮮ニ新タナル政治ガ施行セラレ日鮮關係ノ歴史ニ一大時期ヲ劃シマシタ所ノ朝鮮總督府開設滿二十五周年記念日ノ前日ニ當リマシテ、此日ヲトシ故寺内總督ノ銅像除幕ノ式典ヲ舉ゲマスルコトハ頗ル意義アル次第ト存ズルノデアリマス。

而シテ今此式典ヲ行フニ當リマシテ、官界竝ニ民間ニ於ケル代表的ノ各位

竝ニ此計畫ヲ御贊助下サイマシタ所ノ各位ガ御多忙中ニモ拘ラズ御繰合セ下サイマシテ斯ク多數御臨席ヲ得マシタコトハ發起者ト致シ洵ニ光榮ニ存ジマス。茲ニ厚ク御禮ヲ申上グル次第デアリマス。

殊ニ李王家ニ於カセラレマシテハ故寺内伯ノ在任中ノ功勞ニ對スル厚キ思召ヲ以テ本計畫ニ御贊助ヲ賜リマシタコトハ此上ナキ光榮トシテ感激ニ堪ヘザル所デアリマス。

尙此銅像ハ除幕後改メテ朝鮮總督府ヘ寄附シ永久ニ維持管理セラレマスコトヲ當局者ヘ御願ヒ致スモノデアリマシテ除幕式ニ引續イテ目錄贈呈ヲ行ヒマス。ソレデハ之ヨリ式ヲ舉行致シマス。

## 式辭

故朝鮮總督寺内正毅伯ノ銅像工成リ本日茲ニ除幕ノ式典ヲ舉行ス  
伯ハ明治四十三年五月統監ニ任ジ八月 大命ヲ奉ジテ併合條約ヲ締結シ十



月始メテ朝鮮總督ニ任ジ職ニ在ルコト前後六年有餘其間經世安民ノ才謹嚴果斷ノ資清廉公正ノ徳ヲ以テ至誠一貫力ヲ經營撫毓ニ竭シ恩威並ビ行ハレ半島施政ノ根基ヲ造成セリ總督府設置以來星霜ヲ重ヌルコト二十有五明十月一日ヲ以テ施政二十五周年記念ノ盛典ヲ舉行セラレントス吾人既往ヲ回顧シ草創ノ難局ニ處シテ克ク淬礪ノ誠ヲ竭サレタル伯ノ功ヲ仰ギ徳ヲ念フノ情更ニ新タナルモノアリ曩ニ有志胥謀リ伯ノ功勳ヲ永遠ニ記念スベク其銅像ヲ造リ之ヲ朝鮮總督府ニ寄贈センコトニ決シ内鮮有志ノ賛襄ヲ求ムルヤ伯ヲ識ルト識ラザルトヲ問ハズ官民多數參加ヲ得諸般ノ準備亦豫定ノ如ク進捗シ東都彫塑界ノ巨匠ニ託シタル銅像ノ製作全ク成リ之ヲ其因縁最モ深キ總督府廳舍内ニ安置ス豪邁ノ姿颯爽ノ風凜乎トシテ生ケルガ如ク長ヘニ人ヲシテ其英采ニ接シ其高風ヲ欽セシムルヲ得タルハ洵ニ欣快ニ堪エザルナリ

惟フニ現時半島ノ施設長足ノ進歩ヲ遂ゲ民心安定シ勤儉ノ風大ニ興リ農漁ノ業年ト共ニ進ミ資源日ニ關ケ工業月ニ就ル是レ職トシテ時運ノ推移ト近時

官民同心協力自覺自奮ノ賜ニ由ルハ論ヲ俟タズト雖歷代總督ノ經營其宜ヲ得タル功ト初代總督ノ難局ヲ打開シテ統治ノ基礎ヲ築キタル績トハ永ク後人ノ援ルル能ハザルモノアリ今回ノ舉ハ實ニ本ニ反リ始ニ報ユル所以ノ道ニシテ多衆ノ共鳴ヲ得タル所以モ亦此ニ存セズンバアラズ伯在天ノ靈亦必ズヤ吾人ノ心ヲ諒トセラルベキヲ信ス之ヲ式辭トス

昭和十年九月三十日

故寺内總督銅像建設會

代表 宇佐美勝夫

## 經過報告

生田清三郎

朝鮮總督府始政二十五周年ニ際シ初代總督寺内伯ノ功勞ヲ何等カノ方法ヲ

以テ記念シテ然ルベシトノ議ガ有志ノ間ニ唱ヘラレテ居リマシタ折柄、本年ノ三月宇佐美勝夫、關屋貞三郎、有賀光豐三氏ガ此事ニ付テ相談ノ結果寺内伯ノ銅像ヲ有志デ作り之ヲ朝鮮總督府ノ廳舍内ニ建設寄附スル事モ亦適切ナル計畫デアラウト云フコトニナリ、先ヅ宇垣總督ノ御意向ヲ伺ヒマシタ所幸ニ御賛同ヲ得マシタノデ荒井賢太郎、石塚英藏、國分三亥ノ三氏ニ前陳ノ宇佐美、關屋、有賀ノ三氏ヲ加ヘタ六人ノ名ヲ列ネテ在東京有志ノ參集ヲ乞ヒ四月一日最初ノ相談會ヲ開キマシタ所、此銅像計畫ハ滿場一致ニテ實行スルコトニ決シ内鮮相呼應シテ遂行ヲ期スルト云フ事ニナリマシタノデ、京城デハ四月十九日京城銀行集會所内ニ官民主立ツタ人々ガ集マリマシテ最初ノ相談會ヲ開キ東京ト協力シテ遂行スルコトノ申合セナシマシタ。依テ内鮮双方デ夫々發起人ヲ定メ其中カラ實行委員ヲ舉ゲテ計畫ノ歩ヲ進メルコトナリマシタ。朝鮮デハ各道ヨリ發起人ヲ求ムルコトトシ夫々道知事ニ御依頼致シテ推薦ヲ受ケ之ニ對シテ承諾ヲ求メマシタ。斯クシテ發起人ハ内地側九十

四名、朝鮮側二百九十四名、實行委員ハ東京十九名、京城四十八名ノ承諾ヲ得マシタノデ故寺内總督銅像建設會ノ名稱ノ下ニ、首唱者、發起人ノ名ヲ列ネ趣意ト計畫要項ヲ具シテ夫々緣故者並ニ有志ノ賛襄ヲ求ムルコトト致シマシタ。東京デハ事務所ヲ中央朝鮮協會内ニ置イテ宇佐美氏ガ主トシテ斡旋セラレ、京城デハ事務所ヲ朝鮮殖産銀行内ニ置イテ有賀氏主トシテ斡旋セラレ夫々會務ヲ分擔スルコトト致シマシタ。

銅像ハ初メ胸像ニ致ス積リデアリマシタガ、此ノ大ホールトノ配合上座像ガ然ルベキデアルトノ意見ニ一致シマシテ其ノ製作ヲ彫塑界ノ權威者朝倉文夫氏ニ依頼シ同氏モ亦本計畫ノ爲ニ非常ナル熱意ヲ以テ引受ケラレタノデアリマス。

斯クノ如クシテ銅像ノ製作ガ着手セラレマシタ一方寄附金募集ニ於キマシテハ頗ル順調ニ進ミマシテ豫定ノ期間内ニ銅像ノ製作費及諸經費ヲ支辨スルニ充分ナル寄附金ヲ蒐ムルコトヲ得マシタ。即チ其ノ口數千九百三十四口、

金額二萬零八百七十三圓三錢(此口數並金額ハ除幕式當日ノ現  
在數ニシテ其後ノ寄附ヲ含マズ)ト云フ數ニ達シテ居ルノデ  
アリマス。此ノ寄附金ハ朝鮮デハ全道津々浦々カラ集マツタノデアリマス。  
而シテ本計畫ノ事ヲ聞カセラレマシタ李王家ヨリ御賛助金ノ御下賜ニ與カリ  
マシタ次第ヲ玆ニ御報告申上ゲルコトヲ深ク光榮ニ存ズル次第デアリマス。  
又本計畫ノ爲ニ總督府當局者ノ方々カラ直接間接ニ多大ノ御援助ヲ得マシテ  
此ノホール内安置箇所ノ補強工事ヤ銅像及臺石ノ輸送等ニ付非常ナル御盡力  
ニ與カリマシタ結果玆ニ滞リ無ク建設ヲ了シマシタコトヲ厚ク感謝申上グル  
次第デアリマス。

此處ニ安置致シマシタ銅像ハ高サ六尺三寸デ原型ハ朝倉文夫氏ノ手ニ成リ  
鑄造ハ安部紀見氏ガ之ニ當リマシタ。臺座ハ高サ五尺デ岡山産花崗石龍王ヲ  
用ヒ、加工及彫刻者ハ三原三松氏デアリマス。臺石正面ノ記文ハ委員國分三  
亥氏ヲ煩シ其ノ文字ハ委員工藤壯平氏ノ書デアリマス。原型ハ四月一日ニ其  
ノ製作ヲ依頼シテ八月五日ニ竣工シ九月十六日鑄造ヲ了シ、臺座ハ九月九日

ヲ以テ竣工致シマシタノデアリマス。  
之ヲ以テ報告ヲ終リマス。

### 寺 内 家 挨拶

朝鮮總督府施政二十五周年ニ際シ初代總督タリシ故ヲ以テ亡父ノ銅像ヲ總  
督府内ニ御建設玆ニ除幕ノ式ヲ舉ケラル遺族一同誠ニ感激ノ至リニ堪ヘズ謹  
ミテ御禮申上ク尙此機會ニ於テ施政二十五周年ヲ祝シ併セテ朝鮮ノ益々繁榮  
ナラムコトヲ祈ル。

席末ヲ汚シ親シク御挨拶致スベキ處公務ノ爲其意ヲ得ズ缺禮ノ儀平ニ御赦  
シテ乞フ。

何卒關係皆様ニ深厚ナル謝意御傳ヘ方御配慮願フ

### 寺 内 壽 一

# 目 録

一、故寺内朝鮮總督銅像 壹

右寄贈仕候也

昭和十年九月三十日

故寺内總督銅像建設會代表

宇 佐 美 勝 夫

有 賀 光 豐

朝鮮總督 宇 垣 一 成 殿

## 祝 辭

初代朝鮮總督故伯爵寺内正毅閣下ノ功業ヲ顯彰記念スルノ趣旨ヲ以テ曩ニ多數朝野名士諸彦ノ間ニ銅像建設會設ケラレ爾來計畫進ミ座像一基正ニ巨匠ノ彫塑ニ依リテ成リ本日玆ニ除幕式ノ舉行ヲ見ルニ至リタルハ洵ニ慶祝ニ堪ヘズ故伯爵ガ一代ノ國器トシテ社稷ノ重キニ任ジ盡忠報國ノ赤誠ニ一貫セラレタル貴キ生涯ハ言ヲ贅スルヲ要セズ朝鮮ニ於テハ併合ノ前後六年有餘ニ亘リ統監及總督トシテ難局ニ膺リ諸制ヲ整ヘ民羸ヲ恤ミ恩威竝行以テ新政ノ基礎ヲ確立シ規範ヲ後繼ニ示サレタリ爾來歷代ノ治ヲ累ネテ半島ノ庶政大ニ進ミ民和業榮今ヤ帝國ノ一域トシテ重要ナル使命ヲ荷フテ立ツニ至レリ是レ固ヨリ故伯爵建業ノ偉功ニ負フ所ニシテ其ノ遺薰ノ今ニ及ンデ猶人ヲ感篆セシムル所以ナリ時恰モ始政二十五周年ニ當リ初代總督故伯爵ニ對シ其ノ勳蹟ヲ讃ヘテ追慕ノ念新タナル際本銅像ヲ仰イデソノ威風德容ヲ偲ビ洵ニ感慨



ノ限りナキヲ覺ユ茲ニ像ヲ作リテ本府ニ贈ラレタル建設會員各位ノ芳志ニ對シ謹ミテ深甚ノ謝意ヲ表ス  
一言以テ祝辭トス

昭和十年九月三十日

朝鮮總督 宇垣 一成

## 祝 辭

朝鮮總督府始政二十五年式典ニ際シ偶マ故寺内正毅伯ノ銅像除幕式ニ參列スルヲ得タルハ余ノ光榮トシ欣快トスル所ナリ

惟フニ初代總督寺内伯ノ功勳ハ半島統治史ノ劈頭ニ不滅ノ光輝ヲ留ムルモノニシテ今回ノ盛典ヲ機トシ廣ク天下ノ有志ニ依テ英姿ヲ長ヘニ總督府廳舍内ニ安置セラルルニ至リタルハ固ヨリ當然ノ事而シテ其ノ時其ノ處洵ニ宜シ

キヲ得タルモノト謂フベシ

余ハ曾テ伯ト俱ニ臺閣ニ伍シ而シテ伯ガ舊任ノ地朝鮮ニ在ルコト久シカリキ因緣實ニ淺カラズ來リテ其ノ像ニ對スレバ風貌生ケルガ如ク俱ニ手ヲ執リテ舊時ヲ談ズルノ感アリ懷遠ノ情ニ堪ヘザルナリ

一言以テ祝辭トス

昭和十年九月三十日

子爵 齋藤 實

## 祝 辭

茲ニ明日ヲ以テ朝鮮總督府施政二十五周年記念式典ヲ舉行セラルルニ當リ初代總督故寺内元帥ノ銅像除幕式ヲ舉行セラル誠ニ機宜ニ適シ慶祝ニ堪ヘザルトコロナリ

顧ルニ過去二十五年間ニ於ケル我が朝鮮半島發展ノ歴史ハ必ズシモ平坦砥  
ノ如キモノニアラザリシト雖今ヤ半島ノ民心興リ内鮮ノ提携固ク産業拓ケ文  
化遍ク更生朝鮮ノ面目物心相共ニ躍如タルモノアリ

是 明治大帝ノ御聖德ニ基クハ固ヨリ歴代總督ノ施政宜キヲ得タルト半島  
民衆ノ自覺及努力トノ結果ニ由ルトコロナリト雖而モ創業ノ難キニ處シ七年  
ノ長ニ亘リテ克ク大觀細察至誠愛民以テ諸政ノ基礎ヲ確立セル初代總督寺内  
伯ニ負フトコロ頗ル大ナルハ萬人ノ齊シク之ヲ認ムルトコロナリ

此ニ有志相謀リ伯ノ功績ヲ記念スル爲其像ヲ建設セラレ我等再ビ伯ノ英姿  
ヲ仰グヲ得其偉業ヲ回想シ其遺德ヲ追慕スルノ情洵ニ禁ジ能ハザルモノアリ  
今ヤ皇國ノ前途益々繁ク半島ノ使命愈々重キヲ加フルノ秋庶幾クハ官民相  
共ニ淬勵シ溫故知新先人ノ偉績ヲ紹キ戮協邁進以テ半島ノ發展ニ勉メ東洋ノ  
平和ニ寄與センコトヲ

聊力蕪辭ヲ述ベテ祝辭ト爲ス

昭和十年九月三十日

朝鮮軍司令官 植 田 謙 吉

### 祝 辭

故元帥陸軍大將從一位大勳位功一級寺内正毅伯ノ銅像茲ニ竣工ヲ告ゲ本日  
除幕式ヲ舉行セラルルニ至リタルハ一ニ江湖諸賢ノ御熱誠御盡力ノ結果ニシ  
テ其ノ凜然タル儀容ハ克ク伊昔ノ風采ニ髣髴シ當年ヲ追憶スルニ轉感慨無量  
ナルモノアリ同伯ノ茂勳偉績ハ今尙世人ノ耳目ヲ聳動シ更ニ纏縷ノ贅辭ヲ要  
セザル所ナリ茲ニ一言以テ伯ノ勳名ト共ニ此ノ銅像ノ長久ニシテ不朽セラレ  
ンコトヲ祝ス

昭和十年九月三十日

侯 爵 朴 泳 孝

### 祝 辭

始政二十五周年ヲ迎ヘ朝鮮ノ天地新興ノ氣漲リ山野希望ニ輝クノ秋思ヲ過

去ニ馳セテ草創時代當局拮据經營ノ跡ヲ偲ビ懷舊ノ感ニ堪ヘザルノ時ニ方リ  
偶々初代總督故寺内正毅伯ノ銅像成ル洵ニ時宜ニ適シタル好個ノ記念トシテ  
吾人ノ欣快措ク能ハザル所ナリ英姿千秋威容萬古伯亦以テ有志ノ馨情ヲ喜ビ  
泉下ニ莞爾タルモノアラム謹テ祝辭トス

昭和十年九月三十日

中央朝鮮協會會長

男爵 阪谷 芳郎

祝電

故寺内朝鮮總督ノ銅像建設工成ル時將ニ施政二十五周年記念日ヲ迎ヘントシ  
本日ヲ以テ其ノ除幕式ヲ舉ゲラル洵ニ欣快ノ至リニ堪ヘス茲ニ謹テ祝意ヲ表  
ス

拓務大臣 兒玉 秀雄

寺内伯銅像除幕式ノ舉行ニ際シ伯ノ遺勳ヲ追想シ謹ンデ祝意ヲ表ス

荒井 賢太郎

本日故寺内總督銅像除幕式ヲ舉行セラルルニ當リ深厚ナル敬意ヲ表ス

滿鐵 總裁

除幕式ヲ祝ス

高 元 勳

御盛典ヲ祝ス

全南道會副議長 金 信 錫

謹テ除幕式ヲ祝ス

韓 準 錫

除幕式ノ御盛典ヲ祝ス

宮 重 郡 守

除幕ノ盛典ヲ祝ス

朝倉文夫

故寺内總督ノ除幕式ヲ遙カニ謹ミ祝ス

原田武男

謹ミテ御盛典ヲ祝ス

黃海道知事 鄭 僑 源

謹ミテ御盛典ヲ祝ス

金 漢 昇

遙カニ御銅像ヲ拜シ奉リ謹ミテ本日ヲ御喜ビ申上グ

池 邊 龍 一

謹テ故寺内伯銅像除幕ノ式典ヲ祝ス

李 範 益

除幕式ノ御盛典ヲ祝ス

高 知 市 長

謹テ御盛典ヲ祝シ申上グ

玄 俊 鎬



發起人

(敬稱略)

新田留次郎	西崎源太郎	龐寅赫	朴龍雲	朴禧沃	戶嶋祐次郎	張鷹相	張弘植	趙義聞	李圭完	李根宇	李曦燮	李聖根	小原新三	小田省吾
西原龜三	穗積眞六郎	堀正一	朴相駿	朴重陽	德富猪一郎	張大翼	張錫元	趙性根	李源甫	李基枋	李軫鎬	柳赫魯	小川悌	小野久太郎
西田常三郎	保阪久松	侯爵朴泳孝	朴經錫	本田弘一	時實秋穗	張憲根	張稷相	男爵李允用	男爵李恒九	李熙迪	李章雨	劉鎮淳	小川勝平	小倉武之助
西崎鶴太郎	方應謨	朴榮喆	朴普陽	本間孝義	富永文一	張憲植	趙東渙	李範益	李興載	李教植	李鍾燮	劉泰高	小川彌太郎	大橋恒藏
今井田清德	井上孝哉	今村武志	井上収	伊東淳吉	飯田延太郎	入江海平	磯部謙哉	池田長次郎	石原磯次郎	子爵尹德榮	波多江千代藏	原口一二	林茂樹	長谷川與二郎
今村 軀	井上主計	伊藤吉三郎	飯塚徹	岩井長三郎	生田清三郎	池田清	石川登盛	尹泰彬	馬場鏌一	早野龍三	追間房太郎	丹羽清次郎		
井上角五郎	井上要二	伊藤正愨	飯泉幹太	岩淵友次	池邊龍一	池田十三郎	石塚英藏	土師盛貞	馬場 蔀	林市藏	萩野友助	新見 信		

新田留次郎	西崎源太郎	龐寅赫	朴龍雲	朴禧沃	戶嶋祐次郎	張鷹相	張弘植	趙義聞	李圭完	李根宇	李曦燮	李聖根	小原新三	小田省吾
西原龜三	穗積眞六郎	堀正一	朴相駿	朴重陽	德富猪一郎	張大翼	張錫元	趙性根	李源甫	李基枋	李軫鎬	柳赫魯	小川悌	小野久太郎
西田常三郎	保阪久松	侯爵朴泳孝	朴經錫	本田弘一	時實秋穗	張憲根	張稷相	男爵李允用	男爵李恒九	李熙迪	李章雨	劉鎮淳	小川勝平	小倉武之助
西崎鶴太郎	方應謨	朴榮喆	朴普陽	本間孝義	富永文一	張憲植	趙東渙	李範益	李興載	李教植	李鍾燮	劉泰高	小川彌太郎	大橋恒藏
今井田清德	井上孝哉	今村武志	井上収	伊東淳吉	飯田延太郎	入江海平	磯部謙哉	池田長次郎	石原磯次郎	子爵尹德榮	波多江千代藏	原口一二	林茂樹	長谷川與二郎
今村 軀	井上主計	伊藤吉三郎	飯塚徹	岩井長三郎	生田清三郎	池田清	石川登盛	尹泰彬	馬場鏌一	早野龍三	追間房太郎	丹羽清次郎		
井上角五郎	井上要二	伊藤正愨	飯泉幹太	岩淵友次	池邊龍一	池田十三郎	石塚英藏	土師盛貞	馬場 蔀	林市藏	萩野友助	新見 信		

大橋新太郎	大橋次郎	大藤直一	大河原重信
大竹十郎	大村百藏	大久保繁雄	大串敬吉
大島良士	大島英吉	岡清太郎	岡崎哲郎
岡本豐喜	岡本常次郎	岡本桂次郎	岡本至德
荻田悅造	和田一郎	和田駿	和田八千穂
渡邊豐日子	渡邊暢	渡邊彌幸	渡邊定一郎
鷺尾弘準	加藤敬三郎	加藤鍊治郎	香椎源太郎
嘉納徳三郎	賀田直治	河野恒吉	河野衛
河合治三郎	川上常郎	釜屋六郎	上林敬次郎
神谷小一	神田純一	笠井健太郎	梶原末太郎
韓相龍	韓圭復	四元嘉平次	米田甚太郎
吉田浩	吉田雅一	吉田秀次郎	吉岡甕之助
吉弘庚	田川常治郎	田中直通	田中徳太郎
田淵勳	田北政治	田尻隣造	多田榮吉
伊達四雄	太宰明	谷多喜磨	俵孫一

高居瀧三郎	高野省三	高山長幸	高木徳彌
高洲昌平	鷹松龍種	立野新五郎	竹内健郎
竹内善造	曾我勉	宋鎮禹	曹秉相
孫永穆	都築康二	頭本元貞	堤永市
辻本嘉三郎	成松緑	中村精七郎	中村彦
中野太三郎	中野宗三郎	中谷竹三郎	中島司
永井照雄	永田秀次郎	長澤千代藏	夏目十郎兵衛
難波彌一	武者鍊三	向井巖	村尾伊勢松
村上龍藏	村田俊彦	村田孝生	宇都宮善市
宇野宗一	宇佐美勝夫	内田録雄	植村俊二
植野勳	牛尾正一	牛島省三	確井忠治
野田新吾	久原房之助	工藤武城	工藤壯平
工藤英一	黒田甲子郎	國友尙謙	桑原八司
倉知鐵吉	熊本利平	八尾爲治郎	矢鍋永三郎
矢野桃郎	矢島杉造	山田三良	山副昇

山中友太郎	山口貞昌	山下真一	山本滋雄
大和與次郎	安井清	安井誠一郎	安岡莊藏
安武直夫	馬詰次男	松井民治郎	松井房治郎
松原純一	松田德次郎	松永武吉	松波千海
松木彬	松本伊織	松本誠	前田昇
牧山耕藏	增永正一	元惠常	玄俊鎬
富士平平	古市進	古川兼秀	古海嚴潮
深尾道恕	男爵福原俊丸	福島莊平	藤井寛太郎
藤原銀次郎	藤川利三郎	藤田米三郎	藤田嗣章
藤田鴻輔	藤波義貫	小林源六	小松緑
小宮三保松	小島誠	小杉謹八	古城龜之助
古城憲治	兒島高信	後藤積	洪鍾國
高一清	高元勳	郡山智	國分三亥
肥塚正太	近藤常尙	權藤四郎介	穎川忠治
遠藤柳作	遠藤達	鄭僑源	鄭淳賢

鄭錫溶	安倍良夫	安藤又三郎	阿部充家
鮎貝房之進	有吉忠一	有賀光豐	荒井初太郎
荒井賢太郎	淺野太三郎	佐伯顯	佐藤恒丸
佐藤剛藏	佐野彦藏	佐々木藤太郎	佐々木忠右衛門
佐々木四方志	佐治八郎	崔鎮	崔志煥
崔昌朝	齋藤音作	齋藤安二	齋藤五吉
齋藤榮治	齋藤久太郎	澤田豐丈	男爵阪谷芳郎
櫻井小一	笹慶一	木村和水	木村雄次
木島駒藏	木本倉二	姜完善	姜弼成
魚潭	菊池一德	金允福	金炳奎
金東勳	金漢奎	金寬鉉	金泰錫
金季洙	金甲淳	金泳澤	金基鴻
金時權	金潤晶	金正浩	金瑞圭
弓削幸太郎	湯村辰二郎	三浦彌五郎	三上新
三好豐太郎	三井榮長	美濃部俊吉	美座流石

水野鍊太郎	白石鐵治郎	宮尾舜治	勝田主計
徐丙朝	白石光治郎	釋尾春荇	
島田志良	篠田治策	朱榮煥	
下飯坂元	申熙璉	申錫麟	
進辰馬	平井三男	久水三郎	
久永麟一	子爵 閔丙奭	閔大植	
閔泳殷	森辨治郎	森欽市	
森安連吉	關藤唯平	石鎮衡	
須藤素	杉野多市	鈴木種一	

# 寄附者

(敬稱略)

## 東京扱ノ分

### 發起人

壹百圓 小倉武之助	參拾圓 入江海平	參拾圓 池邊龍一
參拾圓 池田十三郎	參拾圓 石塚英藏	參拾圓 馬場鏌一
參拾圓 大橋新太郎	參拾圓 岡本桂次郎	參拾圓 中村精七郎
參拾圓 中野太三郎	參拾圓 宇佐美勝夫	參拾圓 久原房之助
參拾圓 倉知鐵吉	參拾圓 熊本利平	參拾圓 牧山耕藏
參拾圓 藤原銀次郎	參拾圓 郡山智	參拾圓 小松綠
參拾圓 遠藤柳作	參拾圓 荒井賢太郎	參拾圓 佐々木藤太郎
參拾圓 木村雄次	參拾圓 水野鍊太郎	參拾圓 宮尾舜治
參拾圓 關屋貞三郎	貳拾圓 飯田延太郎	貳拾圓 井上角五郎
貳拾圓 井上孝哉	貳拾圓 生田清三郎	貳拾圓 今村武志



拾圓 倭	拾圓 渡邊	拾圓 岩井長三郎	貳拾圓 人見次郎	貳拾圓 弓削幸太郎	貳拾圓 阪谷芳郎	貳拾圓 安藤又三郎	貳拾圓 遠藤達	貳拾圓 藤田嗣章	貳拾圓 工藤壯平	貳拾圓 高野省三	貳拾圓 鷺尾弘準	貳拾圓 和田一郎	貳拾圓 西崎鶴太郎	貳拾圓 石井光雄
拾圓 田中直通	拾圓 嘉納德三郎	拾圓 德富猪一郎	貳拾圓 久水三郎	貳拾圓 勝田主計	貳拾圓 櫻井小一	貳拾圓 佐藤恒丸	貳拾圓 阿部充家	貳拾圓 藤田鴻輔	貳拾圓 工藤英一	貳拾圓 永田秀次郎	貳拾圓 川上常郎	貳拾圓 和田駿	貳拾圓 小原新三	貳拾圓 林市藏
拾圓 向井	拾圓 上林敬次郎	拾圓 大藤直一	拾五圓 頭本元貞	貳拾圓 島田志良	貳拾圓 木島駒藏	貳拾圓 澤田豐丈	貳拾圓 有吉忠一	貳拾圓 國分三亥	貳拾圓 松永武吉	貳拾圓 中村純一	貳拾圓 神田純一	貳拾圓 渡邊彌幸	貳拾圓 荻田悅造	貳拾圓 西原龜三

一般寄附者

拾圓 村田俊彦	拾圓 山口貞昌	拾圓 深山道恕	拾圓 三浦彌五郎	拾圓 菱田靜治	五圓 河野恒吉	五圓 桑原八司
拾圓 馬詰次男	拾圓 藤川利三郎	拾圓 小宮三保松	拾圓 美濃部俊吉	拾圓 森安連吉	五圓 吉弘庚	
拾圓 黑田甲子郎	拾圓 古海嚴潮	拾圓 木本倉二	拾圓 平井三男	拾圓 須藤素	五圓 中島司	
貳千圓 朝鮮銀行	貳千圓 東洋拓殖株式會社	壹百圓 原富太郎	參拾圓 內田良平	參拾圓 山本条太郎	參拾圓 今津明	貳百圓 松本健次郎
參拾圓 森平兵衛	貳拾圓 磯野長藏	貳拾圓 島德藏	參拾圓 有賀長文	參拾圓 山本条太郎	參拾圓 山內政銓	參拾圓 山內政銓
參拾圓 湯淺倉平	參拾圓 島德藏	參拾圓 弘世助太郎	參拾圓 佐々木勇之助	參拾圓 藤山雷太	參拾圓 山內政銓	參拾圓 山內政銓
參拾圓 湯淺倉平	參拾圓 島德藏	參拾圓 弘世助太郎	參拾圓 佐々木勇之助	參拾圓 藤山雷太	參拾圓 山內政銓	參拾圓 山內政銓
參拾圓 湯淺倉平	參拾圓 島德藏	參拾圓 弘世助太郎	參拾圓 佐々木勇之助	參拾圓 藤山雷太	參拾圓 山內政銓	參拾圓 山內政銓
參拾圓 湯淺倉平	參拾圓 島德藏	參拾圓 弘世助太郎	參拾圓 佐々木勇之助	參拾圓 藤山雷太	參拾圓 山內政銓	參拾圓 山內政銓
參拾圓 湯淺倉平	參拾圓 島德藏	參拾圓 弘世助太郎	參拾圓 佐々木勇之助	參拾圓 藤山雷太	參拾圓 山內政銓	參拾圓 山內政銓

拾圓永島巖	拾圓中山勝之助	拾圓梅野實	拾圓國澤新兵衛	拾圓松井茂	拾圓兒島高里	拾圓安達謙藏	拾圓秋場格太郎	拾圓下村宏	拾圓守屋榮夫	五圓井浦義久	五圓原竹三郎	五圓遠山熙	五圓恩田銅吉	五圓簡野松太郎
拾圓中村寅之助	拾圓村上清	拾圓牛塚虎太郎	拾圓工藤十三雄	拾圓松村松盛	拾圓阿部秀太郎	拾圓淺利三朗	拾圓光永修一郎	拾圓平井政道	拾圓膳鉦次郎	五圓猪原護夫	五圓半澤玉城	五圓大橋常三郎	五圓川島利太郎	五圓橫山雅男
拾圓中村竹藏	拾圓上田駿一郎	拾圓臼井哲夫	拾圓柳澤佐五郎	拾圓藤田嗣雄	拾圓赤池濃	拾圓淺見倫太郎	拾圓澁谷太吉	拾圓森義臣	五圓伊東四郎	五圓花田銀太郎	五圓西	五圓大津留重平	五圓河野四方作	五圓吉武源五郎
貳拾圓橋本萬之介	貳拾圓橫井實郎	貳拾圓中野金次郎	貳拾圓松田義雄	貳拾圓天野喜之助	貳拾圓水間美繼	拾圓岩本以明	拾圓飯島榮太郎	拾圓豐永真里	拾圓岡田文次	拾圓和純	拾圓河合操	拾圓田所美治	拾圓竹村利三郎	拾圓辻村楠造
貳拾圓金子直吉	貳拾圓吉田豐彦	貳拾圓古川阪次郎	貳拾圓秋山雅之介	貳拾圓清水一雄	拾圓井內勇	拾圓芳賀榮次郎	拾圓戶田直温	拾圓岡本正夫	拾圓渡邊忍	拾圓吉松憲郎	拾圓高橋綏次郎	拾圓副島道正	拾圓永井松次郎	拾圓辻秀春

拾圓永島巖	拾圓中山勝之助	拾圓梅野實	拾圓國澤新兵衛	拾圓松井茂	拾圓兒島高里	拾圓安達謙藏	拾圓秋場格太郎	拾圓下村宏	拾圓守屋榮夫	五圓井浦義久	五圓原竹三郎	五圓遠山熙	五圓恩田銅吉	五圓簡野松太郎
拾圓中村寅之助	拾圓村上清	拾圓牛塚虎太郎	拾圓工藤十三雄	拾圓松村松盛	拾圓阿部秀太郎	拾圓淺利三朗	拾圓光永修一郎	拾圓平井政道	拾圓膳鉦次郎	五圓猪原護夫	五圓半澤玉城	五圓大橋常三郎	五圓川島利太郎	五圓橫山雅男
拾圓中村竹藏	拾圓上田駿一郎	拾圓臼井哲夫	拾圓柳澤佐五郎	拾圓藤田嗣雄	拾圓赤池濃	拾圓淺見倫太郎	拾圓澁谷太吉	拾圓森義臣	五圓伊東四郎	五圓花田銀太郎	五圓西	五圓大津留重平	五圓河野四方作	五圓吉武源五郎

五圓谷林德太郎	五圓高久敏男	五圓田中永次郎
五圓竹內友治郎	五圓武內順次	五圓武藤文吾
五圓野口信二	五圓窪田治輔	五圓草場林五郎
五圓山邊勇輔	五圓前澤成美	五圓丸山鶴吉
五圓不破重兼	五圓古橋卓四郎	五圓福田豐喜
五圓此經春也	五圓近藤左右一	五圓遠藤藤吉
五圓寺田恒太郎	五圓赤井定義	五圓足立瀧二郎
五圓新井胖	五圓淺井佐一郎	五圓佐藤安之助
五圓佐藤潤象	五圓佐々木源之進	五圓三浦惠一
五圓白仁武	五圓重田勘次郎	五圓注連內堅石
五圓志水高次郎	五圓神野忠武	五圓肥田健吉
五圓陶山武二郎		

京城扱ノ分  
發起人

京城府内

五拾圓今井田清德	五拾圓岡本桂次郎	五拾圓加藤敬三郎
五拾圓韓相龍	五拾圓藤井寛太郎	五拾圓有賀光豐
五拾圓淺野太三郎	參拾圓井上主計	參拾圓伊森明治
參拾圓色部貢	參拾圓馬場菰	參拾圓早野龍三
參拾圓林茂樹	參拾圓新田留次郎	參拾圓朴泳孝
參拾圓朴榮詰	參拾圓本田弘一	參拾圓張憲植
參拾圓 <sup>男</sup> 李恒九	參拾圓大久保繁雄	參拾圓賀田直治
參拾圓谷多喜磨	參拾圓田川常治郎	參拾圓高居瀧三郎
參拾圓高木德彌	參拾圓武者鍊三	參拾圓植野勳
參拾圓野田新吾	參拾圓矢鍋永三郎	參拾圓松井房治郎
參拾圓松原純一	參拾圓松本誠	參拾圓藤波義貫
參拾圓鮎貝房之進	參拾圓齋藤久太郎	參拾圓魚潭
參拾圓菊池一德	參拾圓金漢奎	參拾圓金季洙
參拾圓三井榮長	參拾圓篠田治策	參拾圓閔大植

貳拾圓 池田長次郎  
貳拾圓 穗積眞六郎  
貳拾圓 小田省吾  
貳拾圓 渡邊定一郎  
貳拾圓 鷹松龍種  
貳拾圓 矢島杉造  
貳拾圓 前田昇  
貳拾圓 古城憲治  
貳拾圓 荒井初太郎  
貳拾圓 木村和水  
貳拾圓 閱<sup>子</sup>丙夷  
貳拾圓 杉山久  
拾圓 井上要二  
拾圓 伊東淳吉  
拾圓 池田長兵衛  
貳拾圓 石川登盛  
貳拾圓 方應謨  
貳拾圓 大串敬吉  
貳拾圓 河合治三郎  
貳拾圓 堤永市  
貳拾圓 山田三良  
貳拾圓 小林源六  
貳拾圓 肥塚正太  
貳拾圓 佐藤剛藏  
貳拾圓 金潤晶  
貳拾圓 持永淺治  
拾五圓 波多江千代藏  
拾圓 井上清  
拾圓 飯塚徹  
拾圓 池田清  
貳拾圓 林繁藏  
貳拾圓 戶嶋祐次郎  
貳拾圓 大島英吉  
貳拾圓 梶原末太郎  
貳拾圓 辻本嘉三郎  
貳拾圓 山本滋雄  
貳拾圓 小杉謹八  
貳拾圓 穎川忠治  
貳拾圓 佐野彦藏  
貳拾圓 進辰馬  
貳拾圓 森辨治郎  
拾五圓 宇野宗一  
拾圓 井上収  
拾圓 岩淵友次  
拾圓 石原磯次郎

拾圓 石森久彌  
拾圓 本間孝義  
拾圓 張弘植  
拾圓 李圭完  
拾圓 岡本至德  
拾圓 河野衛  
拾圓 吉田浩  
拾圓 太宰明  
拾圓 牛島省三  
拾圓 安井誠一郎  
拾圓 藤田米三郎  
拾圓 兒島高信  
拾圓 齋藤音作  
拾圓 金寬鉉  
拾圓 水口隆三  
拾圓 保阪久松  
拾圓 時實秋穗  
拾圓 趙義聞  
拾圓 小川悌  
拾圓 和田八千穗  
拾圓 笠井健太郎  
拾圓 田中德太郎  
拾圓 曹秉相  
拾圓 確井忠治  
拾圓 大和與次郎  
拾圓 小島誠  
拾圓 佐々木四方志  
拾圓 齋藤五吉  
拾圓 三好豐太郎  
拾圓 榛葉孝平  
拾圓 堀正一  
拾圓 富永文一  
拾圓 李允用  
拾圓 小川勝平  
拾圓 渡邊豐日子  
拾圓 米田甚太郎  
拾圓 伊達四雄  
拾圓 植村俊二  
拾圓 國友尙謙  
拾圓 增永正一  
拾圓 古城龜之助  
拾圓 崔鎮  
拾圓 笹慶一  
拾圓 美座流石  
拾圓 釋尾春荇



五圓今村	五圓伊藤	五圓飯泉	五圓幹太
五圓尹泰彬	五圓橋本	五圓長谷川	五圓與一郎
五圓丹羽清次郎	五圓趙性根	五圓李軫	五圓鎬
五圓柳赫魯	五圓大橋次郎	五圓大村百藏	
五圓大島良士	五圓韓圭復	五圓都築康二	
五圓村上龍藏	五圓村田孝生	五圓工藤武城	
五圓安井清	五圓元惠常	五圓權藤四郎介	
五圓安倍良夫	五圓佐伯顯	五圓申錫麟	
五圓石鎮衡	三圓成松綠		

京畿道（京城府内ヲ除ク）

拾圓吉田秀次郎	拾圓金正浩	五圓李基枋
三圓永井照雄		

忠清北道

貳拾圓原口一二拾圓宇都宮善市拾圓金東勳

忠清南道

五圓龐寅赫	五圓趙東煥	五圓立野新五郎
五圓松木彬	參圓原田武男	
貳拾圓白石鐵治郎	拾圓李範益	拾圓村尾伊勢松
拾圓富士平平	拾圓金瑞圭	拾圓金甲惇
五圓大河原重信	五圓崔志煥	五圓齋藤安二

全羅北道

拾圓中野宗三郎	拾圓牛尾正一	五圓板井信藏
五圓朴禱沃	五圓高洲昌平	

全羅南道

貳拾圓玄俊鎬	拾圓松田德次郎	拾圓近藤常尙
五圓矢野桃郎	五圓姜弼成	五圓古市進

慶尙北道

貳拾圓伊藤吉三郎	貳拾圓中谷竹三郎	拾圓朴重陽
----------	----------	-------

拾圓張	稷	相	拾圓岡崎哲郎	拾圓徐丙朝
五圓李章雨	參圓金時權			

慶尙南道

參拾圓迫間房太郎	參拾圓香椎源太郎	拾圓土師盛貞
拾圓張鷹相	五圓松本伊織	五圓朱榮煥

黃海道

參拾圓難波彌一	參拾圓森欽市	貳拾圓鄭僑源
拾圓張大翼	拾圓田北政治	拾圓安岡莊藏
拾圓古川兼秀	拾圓佐々木忠右衛門	五圓張錫元
五圓金泳澤		

平安南道

貳拾圓大橋恒藏	拾圓朴經錫	拾圓朴相駿
拾圓李教植	拾圓內田錄雄	拾圓安武直夫
拾圓松井民治郎	拾圓福島莊平	拾圓鈴木種一

平安北道

五圓李鍾燮	五圓劉鎮淳
-------	-------

貳拾圓吉田雅一	貳拾圓多田榮吉	拾圓大竹十郎
拾圓加藤鍊治郎	拾圓崔昌朝	五圓李源甫
五圓李熙迪	五圓高一清	

江原道

拾圓李根宇	拾圓孫永穆	拾圓山中友太郎
五圓神谷小一	五圓山下眞一	五圓洪鍾國

咸鏡南道

拾圓湯村辰二郎	拾圓關藤唯平	五圓芳賀文三
五圓西田常三郎	五圓李曦燮	五圓田尻隣造
五圓齋藤榮治	五圓金泰錫	五圓申熙璉
五圓信田秦一郎	五圓杉野多市	

咸鏡北道

貳拾圓	夏目十郎兵衛	拾圓	岡本常次郎	拾圓	金炳奎
拾圓	三上新	五圓	張憲根	五圓	李聖根
五圓	竹內健郎	五圓	下飯坂元		

一般寄附者

京城府

壹百圓	昌德宮	貳千圓	朝鮮殖產銀行	五百圓	京城電氣株式會社
壹百圓	東一銀行	壹百圓	朝鮮貯蓄銀行	壹百圓	朝鮮商業銀行
壹百圓	朝鮮金融組合聯合會	壹百圓	漢城銀行	壹百圓	宇垣一成
壹百圓	三井物產株式會社京城支店	參拾圓	池田與三郎	參拾圓	尹致吳
參拾圓	朴興植	參拾圓	奧彌輔	參拾圓	韓學洙
參拾圓	第一銀行 京城支店	參拾圓	內田隆三	參拾圓	植田謙吉
參拾圓	安田銀行 京城支店	參拾圓	間島梅吉	參拾圓	鮎澤常義
貳拾圓	日本捕鯨株式會社朝鮮支店	貳拾圓	加藤常美	貳拾圓	西平通二丁目代表 時源太郎
貳拾圓	田中三郎	貳拾圓	高橋千代吉	貳拾圓	成瀬仁喜太

貳拾圓	久次米邦藏	貳拾圓	山脇五三郎	貳拾圓	相羽恒次
貳拾圓	佐野順太郎	貳拾圓	金炳八	貳拾圓	金熙俊
貳拾圓	三宅光治	貳拾圓	宮林泰司	貳拾圓	陣內茂吉
貳拾圓	陣之內鹿雄	拾圓	飯島寬一郎	拾圓	市川鶴松
拾圓	八田吉平	拾圓	橋詰庄太郎	拾圓	萩森寅市
拾圓	日本電報通信社京城支局	拾圓	西川篤次郎	拾圓	堀內滿輔
拾圓	朴承稷	拾圓	土井伊右衛門	拾圓	土井誠一
拾圓	步兵第七十九聯隊 同黨會龍山支部	拾圓	富田徹三	拾圓	李相玉
拾圓	李根宇	拾圓	李重翊	拾圓	大和田矯
拾圓	渡部二三	拾圓	加納一米	拾圓	河內春一
拾圓	上內彥策	拾圓	吉本惠七	拾圓	田中武雄
拾圓	立川六郎	拾圓	橘圓壽	拾圓	竹下平三郎
拾圓	高井兵三良	拾圓	高田邦之助	拾圓	長尾戒三
拾圓	柳樂達見	拾圓	中川湊	拾圓	黒川宮作
拾圓	熊城鐘三郎	拾圓	山根諱	拾圓	山野安積

五圓李胤榮	五圓朴準鎬	五圓西本計三	五圓西岡芳次郎	五圓林田金次郎	五圓石內彌	五圓岩田鼎	拾圓鈴川壽男	拾圓重村義一	拾圓木尾虎之助	拾圓秋山滿夫	拾圓寺川三藏	拾圓小松淺五郎	拾圓嚴俊源	拾圓山本幸次郎
五圓李海範	五圓富井實太郎	五圓朴容九	五圓西村基助	五圓新田利兵衛	五圓尹致昨	五圓石橋廉造	五圓井手貞三	拾圓閔容基	拾圓金顯濟	拾圓佐藤半次郎	拾圓荒木德三郎	拾圓上瀧基	拾圓藤井虎彦	拾圓松田甲
五圓李海承	五圓堂本貞一	五圓朴詰熙	五圓西崎鶴司	五圓新田志津子	五圓播本恒太郎	五圓石川留吉	五圓市村秀志	拾圓閔奎植	拾圓金教駿	拾圓澤村九平	拾圓綾田豐	拾圓五島榮藏	拾圓更田信彌	拾圓松本繁藏

五圓柳生繁雄	五圓山崎鹿藏	五圓野々村謙三	五圓植山仲治郎	五圓羅重錫	五圓內藤壽太郎	五圓瀧澤宣隆	五圓高橋亨	五圓橫山藤三郎	五圓景山宜景	五圓加藤好晴	五圓和田英正	五圓太田喜太郎	五圓大野史郎	五圓李敬植
五圓松本豐作	五圓山岸天佑堂	五圓信澤定吉	五圓野田董吉	五圓向井吉治	五圓中司梶	五圓孫完榮	五圓玉名友彦	五圓吉留直哉	五圓掛場定吉	五圓川井昌一	五圓渡邊信治	五圓岡田貢	五圓大熊宗平	五圓柳正秀
五圓松本茂	五圓山下英男	五圓矢部與太郎	五圓野中健造	五圓植村雄吉	五圓南宮營	五圓奈良井多一郎	五圓武田左喜太郎	五圓吉田彌五右衛門	五圓鎬木德二	五圓河野又一	五圓渡邊純	五圓荻昌德	五圓大藪博治	五圓小野又四郎



五圓元應常	五圓福田甚二郎	五圓藤富國太郎
五圓藤田幸二郎	五圓小林勘次郎	五圓小松博美
五圓吳台煥	五圓惠藤豐藏	五圓海老原侃
五圓阿部悟	五圓新井俊助	五圓赤荻與三郎
五圓秋吉正夫	五圓佐村信平	五圓木村真三郎
五圓喜頭兵一	五圓北村隆之助	五圓金思演
五圓金正穆	五圓御手洗曉一	五圓光延丈成
五圓宮本元	五圓水田直昌	五圓鹽田正洪
五圓島崎龍一	五圓徐相助	五圓廣綱德太郎
五圓本吉兵次郎	五圓森啓助	五圓廣森ッ子
五圓望戶力一	五圓鈴木茂	參圓荻山秀雄
參圓河瀨脩	參圓阿部文雄	參圓金明溶
貳圓李謙濟	貳圓間島平吉	壹圓五拾錢永谷利明
壹圓朴宗烈	壹圓李宅珪	壹圓玄櫨
壹圓金相禹	壹圓石明瑄	

京畿道（京城府内ヲ除ク）

拾圓朝鮮運送株式會社仁川支店	拾圓小西養之助	拾圓仁川府濱町團
五圓李珪鉦	五圓力武黑左工門	五圓加藤平太郎
五圓中田敬甫	五圓熊崎喜一郎	五圓安基榮
五圓木島圭八	五圓宮崎匡雄	五圓仁川公立尋常高等小學校職員一
參圓沈相憲	參圓崔益夏	參圓申圭善
壹圓黃潤		

忠清北道

五圓中野勝次	五圓松島清	五圓安鍾哲
--------	-------	-------

全羅北道

參百圓多木久米次郎	五拾圓全羅北道廳高等官食堂	參拾圓井深和一郎
貳拾圓 <sup>爵侯</sup> 細川家朝鮮農場	拾圓石川縣農業株式會社	拾圓橋本農場
拾圓華星農場	拾圓右近農場	拾圓沃溝郡廳職員一同
拾圓熊本農場	五圓盧兢堤	五圓片桐和三

五圓片山久太郎  
五圓松原駒吉  
五圓島谷八十八  
參圓原田彦四郎  
參圓西畑利兵衛  
參圓槇瀧太郎  
貳圓森谷隆治  
壹圓七拾錢  
外新豐公立普通學校 嵯茂市同

全羅南道

參拾五圓金哲鎭  
參拾圓金漢昇  
拾五圓曹秉洙  
拾五圓千善才  
拾五圓久田角左衛門  
拾五圓閔泳旭  
拾圓本田精米所  
拾圓兵頭一雄  
拾圓李鶴洙  
拾圓高瀨農場  
拾圓山田萬吉郎  
拾圓山岡奈良市  
拾圓崔在鶴  
拾圓木浦農談會  
拾圓金甲培  
拾圓金信錫  
九圓七拾錢  
求禮警察署職員一同  
八圓拾五錢  
求禮公立普通學校職員一同  
五圓羽田幸太郎  
五圓原口善治  
五圓濱田好太郎  
五圓仁瓶朋次郎  
五圓奧村信吉  
五圓河大斗  
五圓吉田平治郎  
五圓田中淺吉  
五圓羅州稅務所職員一同

五圓羅州警察署職員一同  
五圓羅州普通學校職員一同  
五圓羅州農林實業學校職員一同  
五圓黑住猪太郎  
五圓山澤佐一郎  
五圓藤中米吉  
五圓福永由太郎  
五圓金忠植  
五圓金玟載  
五圓金奉珪  
五圓金鍾弼  
五圓自見卯三郎  
五圓順天邑職員一同  
五圓平瀨亨三  
五圓關田源太郎  
參圓李相轍  
外六名  
參圓柳長善  
參圓好本英雄  
參圓竹上千代市  
參圓羅州邑事務所職員一同  
參圓羅州公立小學校職員一同  
參圓村上直助  
參圓松井邑次郎  
參圓湖南銀行順天支店  
參圓高陽鎭  
參圓木尾良清  
參圓金明植  
外六名  
參圓金永植  
外五名  
貳圓六拾五錢  
良文公立普通學校職員一同  
貳圓五拾錢  
院村公立普通學校職員一同  
貳圓五拾錢  
朴成柱  
貳圓五拾錢  
孫永哲  
貳圓拾錢  
求禮郡農會職員一同  
貳圓貳拾錢  
求禮金融組合職員一同  
貳圓拾錢  
笹秀治  
貳圓八錢  
宮崎勝  
貳圓伊藤信行  
貳圓橋本松太郎  
貳圓朴泰奎  
貳圓十時讓  
貳圓趙亨鍾  
貳圓大塚與平  
貳圓吉田清三  
貳圓吉崎善輔  
貳圓田中岩次郎  
貳圓谷哲之助

貳圓	名部	岩德	貳圓	奈良	次郎	貳圓	中田	貞一
貳圓	禹鍾	桓	貳圓	黑川	松見	貳圓	柳生	岩吉
貳圓	松井	芳之助	貳圓	洪德	咸	貳圓	鄭判	介
貳圓	青山	仁平	貳圓	麻生	作男	貳圓	赤木	福太郎
貳圓	崔瑩	瀨	貳圓	蔡重	鉉	貳圓	木村	千藏
貳圓	魏丁	奎	貳圓	姜圭	萬	貳圓	求禮公立高等小學校職員一	同
貳圓	車南	鎮	貳圓	朱在	爽	貳圓	島崎	佐十郎
貳圓	森田	泰吉	貳圓	森誠	一	貳圓	瀨戶	友顯
壹圓拾五錢	得根面事務所職員一	同	壹圓拾五錢	求禮面事務所職員一	同	壹圓拾五錢	村上	九平
壹圓拾五錢	土旨公立普通學校職員一	同	壹圓拾五錢	清州公立普通學校職員一	同	壹圓拾五錢	良文面事務所職員一	同
壹圓拾九錢	光義公立普通學校職員一	同	壹圓拾九錢	山洞面事務所職員一	同	壹圓拾九錢	朴	吳朝
壹圓拾八錢	光義面事務所職員一	同	壹圓拾八錢	蓬萊面事務所職員一	同	壹圓拾八錢	求禮郡煙草販賣所職員一	同
壹圓六錢	馬山面事務所職員一	同	壹圓五錢	豐陽面事務所職員一	同	壹圓	伊藤	關太郎
壹圓	井口俊彦		壹圓	磯邊寅雄		壹圓	岩淵	兵二
壹圓	老安公立普通學校職員一	同	壹圓	老安面事務所職員一	同	壹圓	花谷	教助

壹圓	伴忠吉	壹圓	潘南公立普通學校職員一	同	壹圓	潘南面事務所職員一	同	
壹圓	任聖模	壹圓	任鍾文		壹圓	二木	松次郎	
壹圓	細谷定	壹圓	鳳凰面事務所職員一	同	壹圓	鳳凰公立小學校職員一	同	
壹圓	鳳凰公立普通學校職員一	同	壹圓	朴潤東		壹圓	朴土胤	
壹圓	朴鍾萬	壹圓	朴基駟		壹圓	北二面職員一	同	
壹圓	浦頭普通學校職員一	同	壹圓	本良面事務所職員一	同	壹圓	平洞公立普通學校職員一	同
壹圓	平洞面事務所職員一	同	壹圓	卞均珉		壹圓	邊在玉	
壹圓	洞江公立普通學校職員一	同	壹圓	道江面事務所職員一	同	壹圓	洞化面事務所職員一	同
壹圓	道化普通學校職員一	同	壹圓	張世權		壹圓	茶道公立普通學校職員一	同
壹圓	茶道面事務所職員一	同	壹圓	沈權淳		壹圓	梁在瑾	
壹圓	李同根	壹圓	李根彰		壹圓	李東杓		
壹圓	李洪淳	壹圓	李世玉		壹圓	李大田	角藏	
壹圓	小口季隆	壹圓	大渡清次		壹圓	岡村	又次郎	
壹圓	大崎正志	壹圓	岡村松之助		壹圓	岡村	又次郎	
壹圓	緒方民平	壹圓	旺谷小學校職員一	同	壹圓	旺谷公立小學校職員一	同	

壹圓	旺谷面事務所職員一同	壹圓	脇滿喜雄	壹圓	渡邊竹市
壹圓	川崎良造	壹圓	米澤嘉一郎	壹圓	賴近官太郎
壹圓	吉田直良	壹圓	谷崎茂	壹圓	立石周次郎
壹圓	竹內實滿	壹圓	多侍公立普通學校職員一同	壹圓	多侍面事務所職員一同
壹圓	高瀬直太郎	壹圓	高橋廣登	壹圓	染川覺太郎
壹圓	曹基鍊	壹圓	曹寅浹	壹圓	曹萬燁
壹圓	孫致九	壹圓	宋判祚	壹圓	宋宗憲
壹圓	宋淳鄉	壹圓	南平公立普通學校職員一同	壹圓	南平公立小學校職員一同
壹圓	南平面事務所職員一同	壹圓	村上史郎	壹圓	上田熊太郎
壹圓	內谷萬平	壹圓	野田登	壹圓	過縣普通學校職員一同
壹圓	山本建志	壹圓	山道雅雄	壹圓	松尾二一三
壹圓	松井峰次	壹圓	松村正助	壹圓	松前義三
壹圓	松本勇	壹圓	文平公立普通學校職員一同	壹圓	文平面事務所職員一同
壹圓	福田有造	壹圓	藤田林平	壹圓	公山公立普通學校職員一同
壹圓	公山面事務所職員一同	壹圓	古栗普通學校職員一同	壹圓	洪禹鎮

壹圓	高光七	壹圓	榮山面公立普通學校職員一同	壹圓	榮山公立小學校職員一同
壹圓	榮山公立實科女學校職員一同	壹圓	榮山面事務所職員一同	壹圓	江上貞治郎
壹圓	鄭仁鉉	壹圓	鄭純朝	壹圓	丁基哲
壹圓	朝倉惣之輔	壹圓	淺井勤吾	壹圓	淺野保之
壹圓	安洙益	壹圓	阿武新太郎	壹圓	細枝公立普通學校職員一同
壹圓	細枝公立小學校職員一同	壹圓	細枝面事務所職員一同	壹圓	佐古利吉
壹圓	佐藤定	壹圓	佐藤勇三郎	壹圓	佐藤三藏
壹圓	坂木豐太	壹圓	齋藤一	壹圓	崔警
壹圓	崔東琪	壹圓	崔有山	壹圓	山浦面事務所職員一同
壹圓	三道公立普通學校職員一同	壹圓	三道面事務所職員一同	壹圓	金川面事務所職員一同
壹圓	金川公立普通學校職員一同	壹圓	金胃瀚	壹圓	金聲振
壹圓	金源喜	壹圓	金佐基	壹圓	金文玉
壹圓	金相洙	壹圓	金炳淑	壹圓	金胃寅
壹圓	金貴同	壹圓	金俸寶	壹圓	姜元寅
壹圓	姜寧淳	壹圓	姜性珪	壹圓	宮協丈八



壹圓	宮島滿三	壹圓	湊京吉	壹圓	徐南圭
壹圓	清水金四郎	壹圓	進小十郎	壹圓	申秀煥
壹圓	森分房太郎	壹圓	樋口由太郎	壹圓	本山重信
九拾錢	金鎮泰	八拾錢	曹秉瑄	八拾錢	福田正
七拾五錢	吳永鍵	七拾四錢	李承熙	七拾錢	任萬休
七拾錢	朴禹鉉	七拾錢	李昶來	七拾錢	李廷俊
七拾錢	梁成益	七拾錢	宋永會	七拾錢	中村博
七拾錢	文孝洙	六拾九錢	三村信男	六拾五錢	宋賀進
六拾錢	松野勝彌	六拾錢	奇昌燮	六拾錢	金福洙
六拾錢	守屋直	五拾五錢	金堯重	五拾錢	朴奉祚
五拾錢	裴龍炫	五拾錢	任泳台	五拾錢	任福述
五拾錢	朴泰亨	五拾錢	朴基奉	五拾錢	朴三龍
五拾錢	戶田菊之	五拾錢	戶田文七	五拾錢	豐田漸
五拾錢	張瑄鎬	五拾錢	林鎮燁	五拾錢	李昌淑

五拾錢	李萬淳	五拾錢	李鶴來	五拾錢	李虎淳
五拾錢	李根鶴	五拾錢	李胤太	五拾錢	大津信要
五拾錢	太田鶴太郎	五拾錢	片山千登治	五拾錢	蔭木義雄
五拾錢	田上善二	五拾錢	廉東樂	五拾錢	孫炳教
五拾錢	羅華永	五拾錢	信里久太	五拾錢	具周南
五拾錢	具教洛	五拾錢	栗林俊雄	五拾錢	具馬山水利組合
五拾錢	山道貞一	五拾錢	松本正夫	五拾錢	吳己洙
五拾錢	鄭淳吾	五拾錢	鄭鳳采	五拾錢	安圭稿
五拾錢	安鍾運	五拾錢	天野桂次郎	五拾錢	崔裕星
五拾錢	崔準變	五拾錢	崔昌鉉	五拾錢	崔相培
五拾錢	蔡熙永	五拾錢	金仁洙	五拾錢	金卜同
五拾錢	金帛中	五拾錢	金鳳玉	五拾錢	金容學
五拾錢	金仁興	五拾錢	金相培	五拾錢	北村良三
五拾錢	北內藤七	五拾錢	俞榮洪	五拾錢	目野作一
五拾錢	雀部弘	五拾錢	朱庚錫	五拾錢	朱奉湜

五拾錢	朱	在	性	五拾錢	周	先	日	五拾錢	守	山	貞	雄
五拾錢	千	世	旭	五拾錢	千	翼	俊	四拾八錢	曹	基	烈	
四拾八錢	日	高	悟	四拾五錢	丁	在	珉	四拾四錢	力	安	義	德
四拾參錢	朴	煥	國	四拾參錢	李	炯	宰	四拾參錢	曹	重	煥	
四拾參錢	金	正	允	四拾貳錢	張	鎮	珪	四拾貳錢	梁	炳	祐	
四拾壹錢	朴	允	基	四拾錢	呂	奎	洪	四拾錢	朴	鍾	雲	
四拾錢	李	基	來	四拾錢	李	季	甫	四拾錢	梁	圭	煥	
四拾錢	林	台	泳	四拾錢	林	炯	洛	四拾錢	宋		燦	
四拾錢	宋	銘	鎬	四拾錢	具	元	祐	四拾錢	山	口	仙	也
四拾錢	前	田	勝	四拾錢	文	寅	煥	四拾錢	孔		準	
四拾錢	吳	鳳	鎬	四拾錢	鄭	淳	金	四拾錢	鄭	淳	圭	
四拾錢	金	性	奎	四拾錢	金	潤	貞	四拾錢	金	允	中	
四拾錢	金	炳	台	四拾錢	金	晉	洙	四拾錢	金	鐘	轍	
四拾錢	久	富	靜	參拾九錢	宋	泰	燮	參拾七錢	羅老島小學校兒童一同			
參拾七錢	崔	興	鎮	參拾五錢	尹	炳	烈	參拾五錢	朴	均	甲	

參拾五錢	邊	突	基	參拾五錢	邊	福	基	參拾五錢	李	愚	泰	
參拾五錢	崔	錫	琢	參拾五錢	金	曠	樂	參拾五錢	奇	健	慶	
參拾貳錢	一	宮	帛	參拾貳錢	源	曉	治	參拾壹錢	柳	琮	夷	
參拾錢	西	濱	榮	參拾錢	板	本	源	參拾錢	朴	倫	杓	
參拾錢	朴	灝	東	參拾錢	朴	鋪	秀	參拾錢	朴	濟	相	
參拾錢	細	田	稻	參拾錢	張	南	搏	參拾錢	張	龍	采	
參拾錢	李	相	寅	參拾錢	李	斗	玉	參拾錢	柳	俊	圭	
參拾錢	梁	洪	承	參拾錢	梁	銓	承	參拾錢	梁	相	琿	
參拾錢	高	原	支	參拾錢	植	園	太	參拾錢	上	次	田	政
參拾錢	小	川	嘉	參拾錢	山	崎	武	參拾錢	牧	松	實	
參拾錢	吳	參	基	參拾錢	小	林	角	參拾錢	近	藤	新	次
參拾錢	丁	泰	永	參拾錢	丁	富	興	參拾錢	崔	天	錫	
參拾錢	金	永	殷	參拾錢	金	德	洙	參拾錢	金	玫	洙	
參拾錢	金	元	會	參拾錢	金	昌	燮	參拾錢	金	鐘	萬	
參拾錢	金	京	石	參拾錢	三	上	勳	貳拾七錢	朴	愚	松	

貳拾七錢	李熙昌	貳拾五錢	李仕銀	貳拾五錢	李相泰
貳拾五錢	李龍根	貳拾五錢	李景來	貳拾五錢	李湜來
貳拾五錢	李進來	貳拾五錢	李成春	貳拾五錢	李周承
貳拾五錢	田中主計	貳拾五錢	炳成仁	貳拾五錢	鄭判童
貳拾五錢	金奉日	貳拾五錢	東植	貳拾五錢	金周橫
貳拾壹錢	金夢奇	貳拾錢	石井一郎	貳拾錢	尹良律
貳拾錢	盧鉉洙	貳拾錢	朴廷烈	貳拾錢	朴德奉
貳拾錢	朴東善	貳拾錢	李教昌	貳拾錢	李相卓
貳拾錢	李泳喜	貳拾錢	李永奎	貳拾錢	李秉濟
貳拾錢	李容澤	貳拾錢	橫井養作	貳拾錢	立野角之助
貳拾錢	宋基洛	貳拾錢	宋興洛	貳拾錢	村上綜朗
貳拾錢	文甲述	貳拾錢	江口信吉郎	貳拾錢	鄭一默
貳拾錢	阿世知國彥	貳拾錢	崔寅變	貳拾錢	蔡東根
貳拾錢	柳原繁次	貳拾錢	金後生	貳拾錢	金健洙
貳拾錢	金漢永	貳拾錢	金炳植	貳拾錢	金浩相

慶尙北道

貳拾錢	申春雨	貳拾錢	日野喜久雄	拾五錢	林伯元
拾五錢	張在守	拾四錢	森谷八重野	拾四錢	申肅雨
拾錢	石黑榮吉	拾錢	朴來錫	拾錢	李甲東
拾錢	李福榮	拾錢	李永泰	拾錢	李汶夏
拾錢	南道祐	拾錢	宋鍾燮	拾錢	小池幸吉
拾錢	金沃奎	拾錢	申井植	拾錢	申宗雨
拾錢	清水武義				

榮州郡廳員一同

伊山面職員一同

文城面事務所張斗奎

長壽面事務所守震祥

拾圓

安定面職員一同

豐基面職員一同

安定公立普通學校職員一同

豐基公立普通學校職員一同

五圓

尹離

炳

五圓濱田

惟

和

五圓朴

炯

彬

五圓

大內治郎

郎

五圓脇村

辰藏

五圓若月

藏太

五圓

渡井口清太郎

郎

五圓成昌公立尋常小學校有志

五圓吉川善太郎

五圓

余座豐次郎

郎

五圓田中

貢

五圓高靈郡廳職員一同

五圓

宮重嘉一

一

參圓五拾錢陽南漁業組合職員一同

參圓岡部

與一

參圓龍野三之助	參圓楠井理生	參圓古川茂平
參圓福島憲治	參圓北垣又次郎	貳圓朴濟輪
貳圓松岡益太郎	貳圓權重煥	貳圓水島乙松
壹圓五拾 榆川公立普通學校	壹圓四拾 甘浦公立尋常高等小學校	壹圓四拾 梅田公立普通學校
壹圓犬伏直太郎	壹圓西井杉松	壹圓李裕錫
壹圓小田留吉	壹圓大島幸五郎	壹圓太田金
壹圓門原清市	壹圓高橋機八	壹圓宅間梓
壹圓圖子松五郎	壹圓中村喜一郎	壹圓牟禮一郎
壹圓野母平八郎	壹圓桑原今朝雄	壹圓山崎吾一
壹圓松岡清市	壹圓松岡庄一	壹圓福井格
壹圓幸田幸一	壹圓佐藤熊太郎	壹圓平田正一
壹圓桃川繁雄	壹圓洲脇樂造	壹圓杉茂
七拾錢新見茂	六拾錢中島正男	五拾錢江藤武雄
五拾錢蔡熙鎮	四拾錢李根星	參拾錢裴性大
參拾錢鄭炳奎	參拾錢金炳西	貳拾錢朱載俊

慶尙南道

貳拾錢林瑞源	貳拾錢朴仁欽	貳拾錢李承大
貳拾錢李鍾協	貳拾錢姜始元	貳拾錢金永植

壹百圓 寺島德實	白石甚吉	高山慥爾
壹百圓 菊井庄三郎	金顯台	檜山梅喜郎

貳拾圓 大池源二	拾圓立石良雄	拾圓芥川浩
拾圓杉村逸樓	五圓今川廣吉	五圓橋本寬
五圓土屋傳作	五圓坂田文吉	五圓平山正祥
五圓森田秀治郎		

黃海道

拾圓安川松本農場	五圓丹生利	五圓朴永遠
五圓張基昌	五圓李光翼	五圓林容鎬
五圓李基豐	五圓洪光義	五圓洪性欽



五圓	洪	淳	翰	五圓	齋	藤	淨	造	五圓	崎	山	長	貞
五圓	金	鳴	璉	五圓	許		洹		五圓	魏	鍾	冀	
金川公立普通學校職員一同													
壹圓	白	敬	成	貳圓	劉	鉉	玉		貳圓	洪	曠	模	
壹圓	柳	河	庸	壹圓	東	島	芳		壹圓	李	德	基	
壹圓	前	原	正	壹圓	辻	本	次		壹圓	成	川	英	
壹圓	寺	島	弘	壹圓	小	林	長		壹圓	吳	範	錫	
壹圓	金	鎮	譽	壹圓	崔	承	鎮		壹圓	崔	元	卓	
壹圓	金	仁	文	壹圓	金	讚	淳		壹圓	金	永	玉	
壹圓	金	昌	善	壹圓	金	裕	赫		壹圓	申	洛	均	
七拾錢	張	基	昌	壹圓	本	山	仁		壹圓	管	村	俊	
五拾錢	李	永	旭	六拾錢	仲	上	保		五拾錢	李	鍾	浩	
五拾錢	高	田	宗	五拾錢	李	德	亨		五拾錢	林	寬	植	
五拾錢	安	奉	七	五拾錢	宋	柱	星		五拾錢	高	義	守	
四拾錢	辻	七	ッ	參拾錢	金	榮	夏		五拾錢	金	湖	榮	
				參拾錢	朴	東	根		參拾錢	李	燦	茂	

平安南道

參拾錢	韓	秉	熙	參拾錢	金	采	說	貳拾錢	朴	炳	根
貳拾錢	金	熙	鄉								
五拾五圓 南三和町會											
拾圓	青	木	健	拾圓	朝鮮商工株式會社			貳拾圓	滿洲製粉株式會社		
拾圓	朝鮮銀行鎮南浦支店			拾圓	植山里代副里藏			拾圓	帝國在鄉軍人會		
九圓	中和郡廳々員一同			拾圓	朝鮮商業銀行鎮南浦支店			拾圓	朝鮮殖產銀行鎮南浦支店		
五圓	尹	基	元	九圓	朴漢鵬	外八名		六圓七拾錢	大同郡廳職員一同		
五圓	丸ナ穀物協會			五圓	岡	谷	修	五圓	鎮南浦私立得信學校職員兒童一同代表朴敬像		
五圓	山口	芳	三	五圓	岡	倉	昇	五圓	金榮公立普通學校職員一同		
五圓	金	龍	興	五圓	俞	萬	兼	五圓	金榮公立普通學校職員一同		
五圓	鈴木	孝	太郎	四圓	祥原公立普通學校職員一同			參圓五拾錢	金	秉	周
參圓	東頭面事務所職員一同			參圓	唐谷公立普通學校職員一同			參圓	唐井面事務所職員一同		
參圓	中和公立普通學校職員一同			參圓	中和面事務所職員一同			參圓	綿	嶋	角
參圓	海鵬公立普通學校職員一同			參圓	海鵬面事務所職員一同			參圓	看東面事務所職員一同		

參圓	楊井面事務所職員一同	參圓	野口彌一	參圓	洪鍾萬
參圓	天谷面事務所職員一同	參圓	崔周鎬	參圓	祥原面事務所職員一同
參圓	廣池由造	貳圓五拾錢	羅燦燦	貳圓	李吉田鎮吉
貳圓四拾錢	赤堀健一 外四名	貳圓	秦恕夫	貳圓	趙輔國
貳圓	李斗星	貳圓	看東公立普通學校職員一同	貳圓	金子林次
貳圓	楓洞面事務所職員一同	貳圓	新興面事務所職員一同	壹圓七拾錢	楓洞公立普通學校職員一同
壹圓五拾錢	班石公立普通學校職員一同	壹圓五拾錢	天谷公立普通學校職員一同	壹圓	中和公立小學校職員一同
壹圓	岡村幸一	壹圓	甲斐崎正男	壹圓	文命浩
壹圓	佐藤治	壹圓	金秉璉	壹圓	申國鉉
八拾錢	佐久山藤吉	七拾錢	山地兵平	五拾錢	朴昇洛
五拾錢	朴益竣	五拾錢	東頭公立普通學校職員一同	五拾錢	李憲瑾
五拾錢	金尾久吉	五拾錢	農民共生組合	五拾錢	吳鎮資
五拾錢	後藤兼三	五拾錢	高益柱	五拾錢	鄭雲夏
五拾錢	崔錫龍	五拾錢	崔樂仲	五拾錢	金丙許
五拾錢	金榮根	五拾錢	金雨軾	五拾錢	車澄模

平安北道

五拾錢	鈴屋作右工門	四拾五錢	石村四郎	四拾五錢	木下卓司
參拾錢	八田義武	參拾錢	鄭秀浹	參拾錢	金煖
參拾錢	柴田英三	貳拾五錢	高橋一也	貳拾五錢	荒木大藏
拾圓	牟田吉之助	拾圓	新義州公立中學校職員一同	拾圓	新義州公立商業學校職員一同
六圓	熙川公立普通學校	五圓	渭原營林署職員一同	五圓	任成旭
五圓	池熙鉦	五圓	李豐林	五圓	吳在殷
五圓	崔昌立	五圓	平壤專賣支局新義州出張所	五圓	車驥鳳
五圓	車輦館公立普通學校職員一同代表者古川貞世	五圓	新義州公立高等女學校職員一同	四圓	李廷植
四圓	韓鳳根	參圓	渭原郡廳職員一同	參圓	德彥面職員一同
參圓	劉鳳瑞	參圓	新義州刑務所	參圓	森川信吉
貳圓四拾錢	雲山郡廳職員一同	貳圓	溫井公立普通學校職員一同	貳圓	小谷利明
貳圓	古德公立普通學校職員一同	貳圓	宋鍾胤	貳圓	曹禧連
貳圓	熊谷政治郎	貳圓	永成商會	貳圓	昌城公立普通學校職員一同
壹圓八拾錢	慶湖公立普通學校職員一同	壹圓四拾錢	龍岩浦公立尋常高等小學校職員兒童一同	壹圓	伊藤常雄







拾錢姜	拾錢崔	拾錢劉	貳拾錢杉	貳拾錢許	貳拾錢姜	貳拾錢金	貳拾錢金	貳拾錢金	貳拾錢金	貳拾錢崔	貳拾錢崔	貳拾錢康	貳拾錢文
英	東	昌	本		俊	榮	俊	麟	珍	鳳	玄	相	鳳
淑	國	烈	房	煊	煥	根	敬	鶴	模	岐	五	虎	珉
拾錢姜	拾錢許	拾錢文	拾錢李	貳拾錢許	貳拾錢姜	貳拾錢金	貳拾錢金	貳拾錢金	貳拾錢金	貳拾錢崔	貳拾錢崔	貳拾錢鄭	貳拾錢洪
弘		致	基	南	泳	世	順	炳	昌	濬	敏	鳳	正
鳳	滿	五	貞	或	變	英	懋	龍	漢	允	河	國	植
拾錢姜	拾錢許	拾錢康	拾錢李	貳拾錢車	貳拾錢許	貳拾錢姜	貳拾錢金	貳拾錢金	貳拾錢金	貳拾錢金	貳拾錢崔	貳拾錢鄭	貳拾錢洪
起		洪	鉉	鎮	南	陽	興	泰	秉	春	宗	應	文
祖	涵	楫	直	璧	熙	華	植	賢	浩	坤	錫	浩	鎬

拾錢金	貳拾圓朴	貳拾圓崔	拾圓白	拾圓李	拾圓劉	拾圓田	拾圓津	拾圓松	拾圓高	拾圓鄭	拾圓崔	拾圓金	拾圓金
玉	普	準	泓	學	載	原	田	井	運	龍	鳳	廣	淳
荆	陽	集	均	淳	坤	一	一	雄	河	和	秀	濟	默
拾錢金	貳拾圓植	拾圓稻	拾圓西	拾圓李	拾圓岡	拾圓田	拾圓村	拾圓吳	拾圓小	拾圓天	拾圓崔	拾圓金	拾圓全
龍	村	葉	谷	錫	田	中	上	銳	宮	野		銀	炳
海	要	中	四	一	仁	寅	九	泳	郎	治	昇	昌	殷
拾錢金	貳拾圓高	拾圓今	拾圓池	拾圓李	拾圓吉	拾圓孫	拾圓松	拾圓黃	拾圓田	拾圓崔	拾圓金	拾圓金	拾圓全
瑩	熙	城	奎	逸	野		村	雲	夏	養	教	龍	寅
根	源	武	汶	淳	至	駿	朵	天	富	浩	胤	涉	煥

江 原 道

拾圓	久武	常次	拾圓	森	覺	定	拾圓	角川	龜次郎
貳圓	朴在	洙	貳圓	李	弼	國	貳圓	李	琮煥
貳圓	瀧澤	誠	貳圓	康	璟	羲	貳圓	鄭	河亨
壹圓	鄭然	基	貳圓	崔	晚	達	壹圓	池田	喜善
壹圓	尹昇	老	壹圓	尹	熙	再	壹圓	趙	豐鎬
壹圓	李起	明	壹圓	李	瑾	洙	壹圓	小川	紀六
壹圓	渡邊	敏郎	壹圓	甲斐	儀士	男	壹圓	竹內	治憲
壹圓	牛島	正太	壹圓	牛島	一	馬	壹圓	上田	縫殿
壹圓	山下	政雄	壹圓	桂	珖	淳	壹圓	黃	恒根
壹圓	遠藤	福太郎	壹圓	青柳	有盛	稷	壹圓	坂元	常德
壹圓	佐々木	尙雄	壹圓	崔	炯	養	壹圓	金	昌斗
壹圓	宮本	志德	壹圓	都	岩	雄	壹圓	明	麟華
壹圓	廣田	專一	壹圓	杉					

參拾圓 方義錫 拾圓 朴春三 拾圓 龜谷愛介

咸鏡南道

拾圓	文川郡廳職員一同	八圓	德原郡廳員一同	五圓	兵頭	僞
五圓	趙昌元	五圓	千葉慶一	五圓	李善郁	
五圓	李龍洽	五圓	小野教明	五圓	大坪清太郎	
五圓	尾西鶴吉	五圓	韓準錫	五圓	韓冕瑣	
五圓	楊泰郁	五圓	廉璟薰	五圓	中島梅吉	
五圓	禹宗林	五圓	野村金吾	五圓	眞壁直吉	
五圓	高膺現	五圓	高宗瑀	五圓	天野規矩一	
五圓	佐々木高治	五圓	金斗煥	五圓	金良淑	
五圓	金知龍	五圓	金永碩	五圓	重本與一	
五圓	庄司昌	五圓	孟進淑	五圓	最上淳治	
參圓	大興電氣會社出張所	壹圓	趙茂謙	壹圓	李秉協	
壹圓	李世淵	壹圓	李永暉	壹圓	和田兵馬	
壹圓	鄭熙昌	壹圓	蔡興穆	壹圓	金榮祐	

九拾九錢 明星普通學校職員一同 九拾五錢 德源公立農業公民校 九拾錢 府内面職員一同

八拾七錢 北城公立普通學校 八拾貳錢 縣面職員一同 七拾九錢 德源郡赤田面事務所

七七

六拾六錢	豐上面職員一同	五拾錢	朴	林	河	五拾錢	朴	承	郁
五拾錢	朴	浩	善	順	和	五拾錢	朴	範	珍
五拾錢	劉	命	七	鍾	周	五拾錢	李	長	郁
五拾錢	趙	載	漢	宗	變	五拾錢	權	義	淵
五拾錢	黃	德	駿	俊	和	五拾錢	鄭	德	鍾
五拾錢	蔡	寬	秉	景	德	五拾錢	金	興	斗
五拾錢	金	應	澤	景	詰	五拾錢	金	龜	祐
五拾錢	金	晉	鉉	證	鍍	五拾錢	金	明	華
五拾錢	金	鍾	甲	在	欽	五拾錢	全	夏	林
五拾錢	全	景	林						

咸鏡北道

拾圓	浦	辻	東	策	拾圓	洪	鍾	華	五圓	稻	垣	多	四郎
五圓	泉	政	次	郎	五圓	迫	吉	次	郎	五圓	米	田	實
五圓	植	森	濟	吉	五圓	野	口	庄	次	郎	黑	田	勝
五圓	山	田	清	八	五圓	山	本	和	太	郎	藤	田	留

五圓	崔	泳	麟	五圓	木	田	良	太	郎	五圓	金	命	夏
五圓	車	鍾	瑾	五圓	鍾	城	面	互	助	會	五圓	平	春
貳圓	李	雲	鵬	貳圓	李	恒	烈	貳圓	徐	炳	玟	玟	玟
壹圓	李	贊	郁	壹圓	鹽	ノ	谷	定	八	壹圓	申	泰	鎮
壹圓	原	三	吉	壹圓	朴	敬	述	壹圓	柳	鍾	夏	夏	夏
壹圓	吉	川	治	壹圓	中	尾	龍	壹圓	柳	井	音	槌	槌
壹圓	金	榮	培	壹圓	白	石	深	藏	壹圓	須	川	久	彦
壹圓	杉	山	潤	六拾貳錢	上	原	好	夫	五拾九錢	海	鋒	彌	左
五拾五錢	高	村	壽	五拾五錢	長	島	幸	善	五拾五錢	松	延	嚴	雄
五拾五錢	岸	庫	治	五拾錢	金	子	勘	次	郎	五拾錢	金	子	ア
五拾錢	深	堀	秀	五拾錢	岸	平	吉	五拾錢	菅	沼	利	三	郎
四拾六錢	鎌	倉	諦	四拾貳錢	岸	川	鷹	雄	五拾七錢	李	善	函	函
參拾七錢	韓	在	夏	參拾五錢	尹	正	龍	參拾五錢	崔	基	英	函	函
參拾四錢	垣	內	武	參拾貳錢	朴	陳	甲	參拾貳錢	朴	庸	淮	函	函
參拾貳錢	林	興	龍	參拾錢	梁	學	三	參拾錢	洪	時	雄	函	函

貳拾七錢	黃能煥	貳拾五錢	許大炫	貳拾五錢	金承權
貳拾參錢	金榮澤	貳拾錢	朴麟鶴	貳拾錢	趙丙律
貳拾錢	李承煥	貳拾錢	黃東春	拾七錢	崔南岳
拾五錢	蔡洙謙	拾四錢	朴東任	拾四錢	崔隆岳
拾參錢	水口正重	拾貳錢	川口陽一		
內地					
百圓	高橋克親	拾五圓	板倉益太郎		
滿洲					
拾圓	日高丙子郎				

【追加】 平安南道

五圓	大成炭坑	貳圓	勝湖尋常小學校	壹圓	山根次亮
參拾錢	宮坂賀六	五拾錢	井上德太郎	參拾錢	增田英一
四拾錢	保科彈正	貳拾錢	關一登	貳拾錢	草川新太郎
四拾錢	山內博	參拾錢	中井博	參拾錢	猿渡重渡

貳拾錢	天川勇夫	貳拾錢	青木俊雄	貳拾錢	紅林淳藏
貳拾錢	中村謙二郎	貳拾錢	末村文輔	貳拾錢	松田豐吉
貳拾錢	竹內彥衛	參拾錢	趙將鎬	貳拾錢	久保田重孝
貳拾錢	永井愛滋	參拾錢	久保田正	參拾錢	三宅清次郎
貳拾錢	石津儀人	貳拾錢	井澤正夫	貳拾錢	金元鳳
貳拾錢	森本茂男	貳拾錢	金永濂	貳拾錢	黑瀬治郎
貳拾錢	大竹平馬	貳拾錢	金秉濬	貳拾錢	景由見萩
五拾錢	長谷川繁	五拾錢	小川鷹二	貳拾錢	俞珠鎔
貳圓拾錢 晚達面職員一同					



收支決算

八二

收入

金貳萬壹千參拾貳圓六拾壹錢也

寄附金

金七拾參圓七拾七錢也

利息金

收入合計 金貳萬壹千百六圓參拾八錢也

支出

金壹萬五千圓也

銅像製作費

金參百參拾七圓也

安置箇所補強工事費

金九百七拾四圓七拾錢也

除幕式諸費

金六拾五圓六拾錢也

會議費

金六百六拾壹圓九錢也

印刷費

金參百參拾八圓參拾錢也

通信費

金參百九拾五圓拾錢也

攝影費

金貳百五拾七圓八拾錢也

記念繪葉書作製費

金壹千五百圓九拾六錢也

人件費及雜費

支出合計 金壹萬九千五百參拾圓五拾五錢也

收支差引剩餘金

金壹千五百七拾五圓八拾參錢也

八三

寺内伯爵謝狀

拜啓 時下愈々御清穆奉賀候陳者今般貴會御決算ノ結果金壹千五百七拾五圓  
八拾參錢也右寺内文庫へ御寄附被成下段々ノ御芳志千萬辱ク深謝此事ニ御座  
候右御寄附金拜受候ニ付テハ當文庫有用ノ資（故寺内總督銅像建設會寄附文  
庫基金ト名稱ス）トシ永ク有志各位ノ御厚情ヲ感荷可仕先ハ右御請旁々御禮  
申上度如斯御座候 敬具

昭和十年十二月二十七日

寺内文庫々主伯爵 寺内 壽一

故寺内總督銅像建設會

宇佐美勝夫殿

有賀光豐殿

昭和十年十二月二十四日印刷  
昭和十年十二月二十七日發行  
(非賣品)

東京市品川區北品川三ノ三二八

編輯發行人 中 島 司

東京市麴町區有樂町二ノ七

印刷人 吉 岡 清 次

東京市丸ノ内仲通十二號館六號

中央朝鮮協會内

發行所

故寺内總督銅像建設會

(電話九ノ内一六三四番)









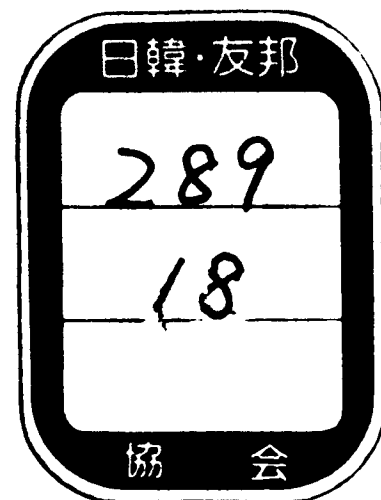


289-18

伊藤公と私

財団法人 防長俱樂部顧問

法学博士 岩田宙造



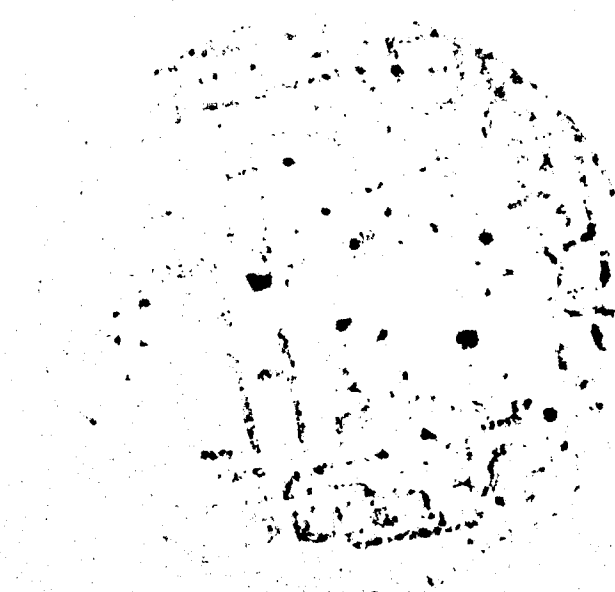




岩田宙造博士近影

289.1
72

東京大学図書印

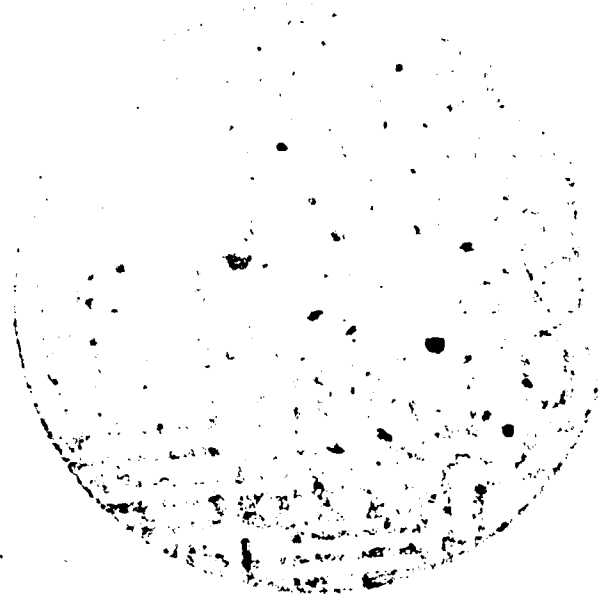


昭和四十二年五月三十日  
贈 上 瀧 基 氏

## 伊藤公と私

財団法人 防長倶楽部顧問

法学博士 岩田宙造



伊藤公と私と云う題でお話をするのでありますが、実はとつさの間にこの題を決めたので、後から考えて見ますと何だか公と対等な地位に私を置いておる様な感じを与えるので、はなはだ恐縮でございますけれども、私がお話をしようと思ひますのは伝聞の事実でなく、親しく私が公に接してこの目で見たり、この耳で聞いたり致しましたことをお話しようと思ひるのであります。ただん古い方を直接知つておるものが亡くなつて参りますから、私は、そういう古い方に直接、接しておつた者が、後の若いお方にその見聞した事柄についてお話をして伝えるという事は中間に立つておる者の一つは義務ではないかと思つて、せつかく求められましたから、そういうお話をして見たい氣になつたのであります。

伊藤公は天保十二年、西暦でいいますと千八百四十一年の九月に熊毛郡の束荷村<sup>ツカリ</sup>という所で生まれられたのであります。この間、光市<sup>ヒカリ</sup>と合併した周防村<sup>スオウ</sup>というのがございますが、私はこの村の出であります。周防村と束荷村とは隣りあつておるのであります。天保十二年生まれで、明治四十二年即ち千九百九年の十月二十五日にハルビンの駅で露国守備隊を闘兵中、韓国人の安重根<sup>アンジュン</sup>という者に狙撃され逝去されたのでありますが、その時六十九才であつたのであります。私共はよほど老人のように思つておりましたが、今の私から見れば非常に若い時に亡くなられたのであります。

私が初めて公にお目にかかりましたのは、明治三十年三月であります。当時、高輪の伊皿子町に公のお邸がありまして、そこでお目にかかったのでありますが、その時公は五十七才で、私は、東京大学の法科二年在学中で二十三才の年でありました。爾後、明治三十四年七月、公が六十一才で政友会支部発会式のため、兵庫、岡山、山口の各県へ出張されました際に私は随行致したのでありますが、その間明治三十年の三月から三十四年の七月にいたる間は、しばしばお目にかかる機会を得ておつたのであります。

明治三十五年には私は弁護士となつたのでありますが、その以後はあまりお会いする機会がなかつたのであります。したがつて私がお話を致しますのは、明治三十年から三十四年の間にかんするのであります。そのうち、はじめで、最初にお目にかかったのが、さつき申し上げましたように、明治三十年の三月、私が法科大学の二年生で、二十才の年であつたのであります。その時、お目にかかる様になりました因縁は、さつき申し上げました公の出身地が、私の生れました隣り村であつたという関係から、公の本家にあたります林文太郎という人——今は故人になりましたが——の紹介で、私が東京に参りました時に初めて、伊皿子のお邸に伺つて、一寸お目にかかりました。それは、明治二十八年か、九年でありますがお目こかつたといつても顔を一寸見たというだけのことで、別に言葉をかわした訳でもありませんから、本当にお目にかかつたのは三十年三月という訳であります。

明治三十年三月にお目にかかりました時のことは、私が日記にくわしく書いておるのであります。先般、戦災でやけましたけれども、幸に中味は残つておりますので、それによつて、その時の状況を申し上げます。

私が伺いましたのは、たびたび申します様に明治三十年の三月二十九日、その当時は東大に寄宿舎がありまして、私は入舎しておりました、そこから高輪伊皿子のお邸に伺つたのでありますが、その前に何か手紙でも出しておいたらしいのでありますけれど、とにかく突然、伊皿子のお邸に参りまして——御承知の通りに、公はそれまで既にたびたび内閣総理大臣として、内閣を組織されたのであります。その時は丁度、松方さんが総理大臣で、公は引つこんでおられる時だつたのでお目にかかる時間もあつたんだと思います。とにかく会うというのであります。公の

お居間に通されたのであります。何か書いておられました。その伊皿子邸は、どの辺だつたか、今はつきりおぼえていませんが、そこから品川沖の海の見えるところでありました。ガラス越しに海をながめる様なところに、テーブル、イスを置いて、シガーをふかしながら何か書いておられたのですが私が入つて行つたので、一寸筆をやめて、私の方を見られました。ただ『法科大学におるのかい』といはただけで、また何かかいておられるので、どうも、一寸取りつく島もない様な形で、椅子に腰かけるともなんともいへませんので、私も躊躇致して居りましたが、勇を鼓して、私は、昨年、林文太郎氏から紹介を受けた者であります。今日、お目にかかる事が出来て大変有難うございます、どうか一応、どういふ趣旨で御訪ねしたか、その訳をお聞取りを願いたい、と云いましたら、それじや腰をかけるというので、ようやく腰をかけることができました。私は今法科大学の二年生でございますが、この頃新聞等でどうもこの頃の大学生は氣力がない、氣概がないという様な事を往々にして聞くことがあります。それは無理な評だと思ひます。おそらくそういう評をする人は、萩の松下村塾とか、鹿児島の造士館とかを頭の中においているのであります。世の中が變つて来ておるから、今の大学生に向つて、当時の松下村塾や、造士館に在學した青年の様な、政治上の意見を述べるとかなんとか、そういう事をしないから氣力がないという様な批評をするのは、あたらないと思ひます。しかし、今の学生のあり方は、そのままではいかという、私はそうは考えません。どうも大学に来て見ますと、この頃の大学生というものは、あまりにもん気すぎる。このままでは意志の強固な立派な人間が意志の強固な人間が出来るかどうかというのを私はうたがつておる。一体、私の考えでは意志の強固な立派な人物というものは、若い時にある目的、目標をちゃんと置いて、終始、その目標に向つてまっしぐらに進んでいく、いつもその目標を見失はず忘れずにいるということ、その人の意志が強固になり、しつかりした人物になれるのだと思ひます。しかるに中学校、高等学校における当時の、私共の仲間について考えてみると、夢物語かもしれせんけれども何か先に目標をおいて考へている。その目標に向つて進んで行こうとしておつた。現に私の友達でも、そういうのが沢山おりました。ところが、大学に来てみると、かえつてそういう学生がおりません。そうして一年、二年というもの



は、ただ無我無中で先生の講義を聞いて、そして試験をパスするのに必要な程度で勉強はしますが、あとは夢うつつで暮しおる。ようやく三年卒業近くなるとたとえば行政官になろうという様な人は、なるだけ内務省にでも入りた。実業家になろうという人は、三井とか三菱に入りた。ということを、考えますが、それまではまったく無我無中で、ふらふらと講義を聞いておる。若い者の思想がたまる時期にそういうような状態でいいか、どうかということ、私は大変うたがう次第であります。維新当時の青年にくらべてみると、雲泥の差がある様に思います。尤もこれは時世が違ふから、必ずしもそれだけをせめるわけにはいかないと思いますが、しかし、多少どうしても、反省の必要がある様に思います。そして、何か少しさきに目標をおいて、そしてその志望を生かして行くという為には、やはり、その時々の方にもお目にかかつて、そして激励や、数訓のお言葉を頂戴するということが非常に有効ではないかと思つて、実は、そんな様な考えからお目にかかりたいと思ひ、今日伺つた次第であります。ということ、を申し述べたのであります。

ところが公は、シガーをふかしながら、聞くことは熱心に耳をかたむけて聞いて下さつたのであります。その様子をみるとすこぶる顔色は暗く、はなはだ不機嫌な様子をしておられる。そしてしづかに口を開いて云われるには『おれは、学問をする間は專一に学問をするのがええと思つてゐる。誰がいつても理屈は同じであるが、学は放心を求むるにあるということを支那人がいつておるが、その通りだと思ふ。学問をする間は、ほかのことを思つては学問は出来ない、それから維新当時でも漢学流の教育を、若い時から書生は受けておつたんだから、へいぜい、天下、国家を論ずる様なものが多かつた。それがそのころ国が開けて、そして英語を学ぶということになつたところが、今までの漢学流の天下、国家のそれと違つて英語は始めは茶を持つていかそれ猫であるとか、大であるとかいふ様な、はなはだ、ばかばかしい事を勉強しなければならん。だから、みんな、ばからしくて、そういう勉強を始めたけれども、大多数の者がやめてしまつたからそれらの人は後で非常に損をしてゐる。自分はそれをがまんして勉強したから、いろいろの知識を得る機会を得たんだ。それだから、学校におつて勉強する間は、そんな大きなことを思わな

いで、専心勉強する方が、おれはええと思ふ。』といわれたのであります。

私はせつかく意氣こんで行つて、右述べたようなことを申しましたが、冷水を頭からぶつかけられた様な気がしたのであります。しかし、そうでございすかといつて、引き下がつたら、それきりになると思ひましたのでまた述べました。それは仰せはごもつともである。しかし、それは一般論であると私は思ひます。多数の人に向つては、その通りごもつともであり、多数のものはその通りにやつておりますが、例外はあつてよいのではありますまいか、私は、どうもそれだけでは満足することが出来ません。今日の法科大学の授業の有様から云いますと、はなはだ楽な課程であつて、ただ学校を出るだけならば、そんな骨は折れませんか。それだから、多数の者は時間に余裕があるので、寄席に行つて女義太夫を追つかけて歩いたりなんかしたり、夢うつつで、天下太平の暮しをしております。だから、多数は、おつしやる通りの状態であつて、それでいいのでしようが、私はどうしてもそれでは満足できません。何か向うに一つの目標を置いて、そしてその考えをどうしても生かして行きたいと思ひます。と言つて、重ねて私の主張をくりかえした。ところが、公が言われるのに、『そう思ふのならしようがない、思ふなと言つても思ふものはしようがない。(笑)だから、思ふならしようがないが、しかし人は、体を丈夫にして、一通り本が読める様にして置けばよい。氣骨とか、膽力とかいふけれども、それはまた、時が来れば、おのずから出るものだ。一体、乱世と平和は違ふ。ヒリッピンでも、あなると、女・子供まで困難にじゅんじゅんとしてゐるではないか……その当時、ヒリッピンで、スペインとの戦争があつた、それで、いわれたんだと思ふのであります。……ヒリッピンでも、ああいう困難に出あへば、女でも子供でも、困難に殉ずるといふ氣を出してゐる。その時に自然にそんなものは出来るものだ。この間も一人、法科大学の二年生というものから、おれの所へ手紙が来た。長い手紙で、自分を一つ試験してもらいたいという趣旨だ。そして、その中に書いてあるのに、こういう手紙を書いて、二三の友人に見せたところが、みんな友達がいうのに、そんな馬鹿な手紙はよせ、出して、返事なんか貰ははしない。よせ、と友達はとめるけれども、お前は決してそうじやなからう。かならず、返事を下さることと固く信じておるといふて手紙をよこした奴がお



る。それも多分、お前と同じような大きなことを考えているのだろう。』(笑)といわれました。

私はその手紙を出した者はよく知っておる者でしたが、そのことは言いませんでした。

その頃から少しムツリした顔が、よほどほろびかけて参りまして『この間おれが経済学協会でした演説を見たか?』『見ました』『なんの新聞で見た?』『読売新聞で見ました』『読売新聞をおれは見ないから、どうかわかんが、日日新聞に出ておつたのを読んだが、少し終りの方が違っているところがあつたようだが、長かつたから違つたんであらう』というふうで、だんだん話の糸口が出て参りました。そこで私は、やや勇気を回復いたしまして、いろいろな問題を持ち出したのであります。主な問答が書いてありますから、申し上げます。

問 『露土』戦争のおわりに英国がとつた、バルカン・コンフェデラシーという、政策は今はどういう状況になつておりますか。

答 『それはだめだ。今はまるで様子が變つておる。』そこで、その当時は、バルカン半島がいろいろゴタゴタしておつた時でありますから、それに関連してさらに、

問 『トルコの独立がむづかしいとするならば、英国の立場からはクリート島はこれをギリシヤに与える方が、英国の利益ではありますまいか。』

答 『英国はトルコを亡ぼそうとしておるのではない。ドイツなどは、ギリシヤの封鎖を主張しておるようだから、そういうトルコを亡ぼすという様なことは考えられない。』

問 『イギリスのシルクと思ひますが、露国が印度を衝いて来るならば、英国はその反対攻撃をウラヂオストックでなすべきだ、ということをつたことがありますが、それはどういふものでしょう。』

答 『それはいかん。それは、まるで、方角が違ふ。たとえ、露がコンスタンチノープルを取つても、イギリスはあくまでも地中海に優勢な海軍力を維持して、インドの防禦は防禦として別にしなければならん。地中海から手を引いて、その代りに、ウラジオストックを攻撃するというような政策は英国のためにだめだ。』

問 『一体、ロシアという国は表面は、大變自分で立派なことを言っておりますけれども、その実は領土慾に燃えておつてその拡張に熱心だということを聞きますが、本当でありますでしょうか?』

答 『もとより、その通りだ。ロシアの政略というものは明らかであつて、少しも變つていない。分り切つておる』

問 『ロシアの君主制は、将来とも維持できるものでありましようか?』

答 『大丈夫だ。虚無党のごとき、一時は勢いがあつたけれども、今は大いに弱つておつて、ロシアの君主制が倒れそうな徴候はない。』

これはその当時の状況でいわれたことでありますが、そのいふような問答をとりかわしたのであります。

だんだん話が調子づいて来たものですから、隣りの部屋から大きな本を持つてこられまして、ペルリが支那及び日本遠征のことを書いた本だとして、説明せられ、その外にも望月小太郎氏や小手川豊治郎等が持つて来たといふいろいろ新しい本を見せられました。『とにかく、政治をやるものは、予備知識が必要で、欧米の現状に通じて居らんと、何かどこかで起つたときに、すぐそれを判断することができないから、しじゅう勉強していなければならん。』とも言われました。そこで私は、立憲政体となれば、政党がおこるのは、当然であり、また大政党は二つになる傾向があると思ひますが、将来、日本の二大政党となるものは、今の自由党と進歩党が骨子になるのでありましようか、あるいは、新たに出来かわるものでありましようかとおたずねしたら『それは變るだろう。今から色々變るだろう』と言われました。

そこで私は、当時、近衛篤磨公に会いたいと思つていたのですから、そのことを申しましたら、公は近衛公が大嫌いで、それは私は知つておつたことでありますから、これを持ちだしたのは、失策であつたと日記に書いておりますが、はなはだ御機嫌が悪くて『何を聞きたいのか』と言われ、私は窮したのであります。『ドイツの憲法が日本の憲法と比較的よく似ておるように思ひますので、ドイツに於ける憲法実施の状況について聞きたい。また我が皇室と

政党との関係につき、将来いろいろの問題が起つて来ると思いますが、ドイツでは、どういう風になつておるか、聞きたいと思つてあります。』と申しました所が『ドイツといつてもドイツの組織は複雑で、仲々わからん。日本に似ておるといふのは、ドイツ聯邦の一つのプロシヤのことだろう』といつて、隣の部屋から、一冊本を持つて来られて、プロシヤの説明をひとくさりきかされたのであります。

そこで、私は『わが皇室は将来、憲法があります以上、昔通りの君主制という訳には行きますまいが、イギリス流のものになりましょうか、あるいは、従来の日本と英国との中間位のものになるのでありましょうか、そういうことにつき、いろいろ疑問を持つておるので、実は近衛公にお目にかかつて、ドイツの状況を聞いてみたいと思つたのであります。』といひましたら『近衛はダメだ。そういうことが聞きたいなら都築馨六<sup>ツツキケイロク</sup>の方がいい。都築に会えば、よく言つて聞かせるだろう』といふことで、近衛さんの話は終つたのであります。

結局、正味二時間、いろいろな応答を重ねて、最後は、大変御機嫌がよくて『山口県のもので同じような考えを持つてゐるものがあつたら、いつしよにつれて来い。ひまがある限りは話して聞かせる』といふことでお別れしたのであります。

これが、私が明治三十年三月に始めて公にお目にかかつた時の日記の要旨であります。それから後の面会については、記録はありませんが、そのつぎにお目にかかつたのは、同じ年の十月でありました。

これは、私が学資がとぼしかつたので、防長教育会、それから山口高等学校の校長をされておりました岡田良平先生——のちの文部大臣——からも学資を借りておりました。防長教育会からは毎月三円か六円で、不足分は家から貰つておりましたが、三十年の秋になつて家でも困るというので、同年の十月、伊藤公にお願いしようと思つて大磯の蒼浪閣に参りましたら金沢の吾妻家に行つておられるというので、そちらに行つて、お目にかかりました。

夕景になつたものですから、今晚はここに泊つて行けとのことで泊りました。そして、学資の不足を訴え、もう一年であるから今のアルバイトみたいなことも、やむを得なければやりますが、出来るならば、それをしないでやつて

行きたいから月十円補助して頂きたいとお願いしました。

そうしましたら、今晚これを読めといふことでフォートナイトリイ・レビューというイギリスの政治雑誌に、アメリカ人が書いたベルリンの市政についての論文がのつておりましたのを渡されました。一晩かかつて読みまして、翌朝お目にかかりましたら『読んだか？ どうだ』と言われ、その論文はアメリカ人がベルリンの市政をみて煩瑣な規則づくめに驚いて書いたようなものでありましたから、ドイツ民族の性格がそのまま市制の上に現われておるといふ意味のことを述べましたら『そうか』と言われただけであつたが、ややしてから、非常に厳格な態度で、私をにらみながら『うそは言わんだらうな！』と一喝されましたので、私はびつくりし乍ら『決してうそは申しません』とおこたえました。よく考えてみれば、公は私の平常については、私自身のいうことの外には、何も知れないのだから、私のいうことがほんとであるか、どういう生活をしておるか、道楽をして金が足りないんだか、わかりませんから、一喝して私の様子をみられたのは、尤と思ひました。そしてようやく、それでは『紫田家門の処に行け』といふことで柴田さんの処に公の手紙を持つて行きました。柴田さんは、その手紙を見て『一体、君はいくらで暮しているか』『防長教育会からいくら、岡田先生からいくら、家からももう不足分を今年は送れないといふのでそれをお願いしたい』と申しましたら、奥さんをお呼びになつて『おれの学生の時の小遣帳を持つてこい』といわれ（笑）それを見て『僕は大学の時は何円とかでやつた。時勢がいくら違うけれども、それは多すぎる』（笑）『そうなくてもいいから答だ』と反対されました。それで本門は比較的楽にパスしましたが、柴田さんのところが非常にむづかしいことになりました。けれどもここで敗けては、大変と思うから極力あらそつて辛うじて承認して貰ひまして、それでは、手紙をつけるからというので、今度は伊藤公の女婿である末松謙澄さんのところに参りました。そこでは何も六ヶしいこともなく、毎月、取りに行くことにして十円ずつ十ヶ月計百円お借りしました。

その後に、弁護士を始めてからでありましたが『あねは、なんとかお返ししたいが、金を持つてきてお返しするといふことは、はなはだ恐縮にたえませんから、お返しをする方法として、私と同じような境遇のものに、その旨を

伝えて貸し与えますから、それでお返しをしたことに、御了解を願いたい」と申しましたら、それで宜しいということで、東大法科の今は故人となつた、川名兼四郎教授の推薦された、同大学の学生に貸与し、同様のことが二、三回くり返えし行われましたがそのあとは不明になりました。(笑)

これが二回目の面会で、その次ぎは、私の卒業後になるのであります。私は明治三十一年七月に大学を卒業しました。あとから考えますと、その当時は、薩長閥のまだ非常に有力な時でありますし、私は右述べたような関係でありましたから、伊藤公は私が役人を志望して、自分のところに頼みに来るだろう、と予想されておつたように推測されます。ところが私は学校におるうち、大学二年の時に公をおたずねした当時から学校を卒業したら、直ぐ、政治活動を始めの考えでおりました。従て学校におる内から計画を致しまして、出てすぐは出来ませんでした、三十二年頃、とにかく政治法律の月刊雑誌「明義」を発行したのであります。「明義」に、当時政党内閣論がやかましかつたのであります、政党内閣に、原則として反対しないが、時期尚早であると主張したのであります。ところが、伊藤公は、その当時の元老の中では最も進歩主義の人で、自分で政党を作り、自分で政党内閣を作るという考えでおられたのでありますから、私の雑誌はそれと反対の立場をとらざるを得なかつたのであります。それで私は、お世話になつた伊藤公には反対し、伊藤公と仲が悪く公の政党主義に反対されておりました、山県公の系統の方に同調するようになったのであります。

その雑誌を出すのに資金が要りますから、その資金を出してくれる人は、貴族院の山県系のかたが中心になつて、みんな出して貰つたのであります。しかし、それは山県系の人から指導されて、そういうことになつたのではありません、私共は、とにかく幼稚な頭ではあるが、自分らの頭の中で考えて、政党内閣尙早論となえて、それが山県系の考えと一致して利用された結果となつたのであります。雑誌を出すようになってから、公のところにも参つてそのことを委細報告しました。ところが内心はどうであつたか知りませんが、少しも叱られもせず怒られもせず、既に出来上つた事だからでありましょうが、ただ『そうか……』と言われただけで、前と同じように心持よく引見して、

問題を提出しますと、同じように議論をして、少しも一方は青二才だ、おれは大元老だと、というような態度は、毫末もなく、全く対等な人が議論をするのと同様でありました。

斯様にしてしばしばお目にかかりましたが、ある時公は『どうも今の政党はよろしくない。これには困る。しかし政党は立憲政治にはどうしても必要である。だから、いい政党を作らなければならぬ。いい政党を作るといことは幹部が立派であれば出来る』といわれ、自分が総裁になつて中心になれば立派な政党ができるということに常に考えておられ、この点で山県公とは意見が合わなかつたのであります。私は、これについて『それは理想論に過ぎますまい、今の党人は、薩長中心の明治維新に対する不平と不満が、重大なる動機となつておるようでありますから、現実問題としては、そう貴方のおつしやるような立派な政党というものは出来ませんまい』と抗弁し、これがいつも私が公とお会ひした時の議論の焦点になつておつたのであります。さきも申しましたように、その論旨はとにかく、今になつても肝に銘じて忘れることのできないのは、その時の青二才の私と、明治元勲の重臣中でも錚々たる伊藤公爵との間、雲泥のへだたりがあるにもかかわらず、真面目な議論になると、対等な地位まで自分で下つて来て、平等に議論し、決して意見を強圧するといふことのなかつたことでもあります。これは、私は今日の政治家にもないんじゃないかと思つて、今にそのことは忘れることができないのであります。またこれが、ほかの元老諸公ともいじりしく違つておられた点のように思うのであります。

そういう風にして私は雑誌をやつておりましたが、公の政党内閣論も、結果においてどうもうまく行かない。それから、公の政党内閣論が大いに起りかけて来ておつた時に、山県系の人、非常な恐慌を感じて、なんとかして反対しなければならぬという熱が強くなり、その熱が雑誌に対する援助となつたのであります。熱源の公の政党内閣もそうたやすくは出来ないような情勢になつて参りますと、山県系の雑誌援助の熱もおのずから冷却しまして、私共の雑誌も資金欠乏のため、発行困難になりますし、またその外にも理由がありまして、私はその方から手を引くことになりました。



かくして政治上の活動をする前に、今少し世の中の実情を知る必要があると考えましたので、今度は、しばらく新聞界に入つて世の中の勉強をしよう。世間学をやるう。ということを決心し、再び公のところに参加して『今の雑誌はやめます』と申したら、『おれの言つた通りだ。うまく行く訳はない』といつて大変喜ばれました。(笑)それで、私は今度もう少し世間の学問がしたいので、それには新聞社がいいと思いますから、御紹介を願いたいと申し、それじゃ、伊東巳代治さんに紹介してやろうということで、同氏に面会して東京日日新聞社に入りました。それは明治三十四年で、そこに一年ばかりおりましたが、丁度その時政友会支部発会式のため、政友会総裁として兵庫県・岡山県・山口県、この三県に行かれるので、随行せよといわれ、私は肩書は日日新聞記者でしたが、費用等は公の随員として出して貰つたのであります。兵庫・岡山・山口と、順々に演説会が支部発会式でありまして、私はその演説を筆記して本社に送つたのであります。その頃の新聞記者は、のんきなものでありまして、私は実は新聞記者としての経験は、まだなかつたのでありますけれども、とにかく、その演説を筆記しては、郵便で送るといふきわめて悠長なやり方でありました。しかしそのうちに私が、お願いした事はよく聞いてもらわれまして岡山に参りました時、私の友人倉敷の大原孫三郎氏が、岡山孤児院というものを始めておりまして、是非公に見て貰いたいという事で私から願いましたら予定を変更して、見に行かれました。

それから山口へ行つて演説会がありまして、今でも忘れる事が出来ないのですが、現在の政談演説なんかにくらべると、非常にのんきなもので、演説の中で『今迄兵庫なり、神戸なり、岡山なりで演説をしてきた。重複をさける為に、重ねていわない。新聞に出ておるから新聞を見てくれ、その新聞の中で東京日日新聞が一番正確だ。』と私が東京日日の記者として行つたため、演説の中でそういつて下さつたので、私は思わず感涙をもよおしたのであります。

その頃丁度、八幡の製鉄所が出来上つたばかりで、製鉄所迄行かれました。そして、その帰りの汽車で、二等車を一輛借りきりで帰つたのでありますが、その時に、いろいろの話を私は伺いました。公には本当の随員が二、三名あ

りました。私は随員といつても費用を出してもらつただけでお手伝は何もしなかつたのであります。しかし貸切りの二等車の中で帰ります途中で、随分ブドウ酒を飲んで半分よつ払つたようなかたちでおられました。公は一般には井上公なんかにくらべると随員なんかに対する当りは大変やわらかい方ではありましたが、それでも私の見ておるところでも、本当の随員は頭ごなしに、ひどくやつつけられておりました。その中で私はほかの連中と少しおもむきが違つていたものですから、特に私に『岩田、ここへ来い』といつて、そばに呼びつけられて、いろいろな話をきかされました。その中でいま記憶に残つておるものをお話ししますと、

『おれが政党をつくるというと、みんなは、反対した、ことに山県の如きは。政党を作るといふ事は国ぞくの隊長にでもなるような事をいつて反対する』その当時は、大正天皇の皇太子でおられたところで、公はその太伝というおもり役であつた。そこで『政党の総裁が国賊なら、皇太子のおもり役は、つとまらん。自分は辞任する』といったところが、皇太子は有栖川宮と当時葉山におられたが、お二人が葉山から自転車で大磯迄お出でになつて、『お前にやめられては困る。だから、辞意はひるがえしてくれ』といつて、直接色々とお申しつけがあつたので、やめる事は思い止まつた云々。

元来山県公は保守派、伊藤公は進歩派、主義の上からくる政見上の相違があつて二人は始終不和のあいだがらであつた。けれども、お互いに、もつともよく相手の力柄は、双方でよくみとめておられた。つまらない事では、ちよいちよいけんかされましたが、本当の国家の重大事という事になると、山県さんの方からも、公の意見を聞かれる。公も山県さんの意見を聞かれる。互に協力してやつておられた。その点において、今の政治家とよほど違うように思われる。この頃の政治家はかりに、おなじ派の中で吉田さんと鳩山さんについてみましても、あまり値打のない、つまらん事では両方が協力して一緒にやろう、といつて仲よくやられるが。本当に一致して国の為をやつて貰いたいような、大事になると、いつでも二つに分かれる。実に遺憾にたえません。また伊東巳代治さんに対しては、大変不満を抱いておられたようで、こういわれた『おれが政友会を作ることについては、伊東が最も熱心に勧めたもの



で、おれが決心さえすれば、極力援助すると、いいながら、いざ始めることになつたら、私は局外から援助しようとか来ない、まことに不都合極まるので、おれはすぐ絶交するといひ渡した、しかしそれから、しばらく経つて、また来るのでそのままにして、た云々、東さん、いときから、公に腰巾着のように、くつついて出世したので世間では伊東さんの、今日あ、全く、おかげ、うに思つていた、自信の強い本人はそれが、残念でたまらず、何んとかして公から、独立した伊東已代治の力柄を、天下に示したいので、その機会をねらつていた、そこで公を勧め政党を作らしめてこの総裁におし出し、自分は後に残ること、つて、公の許を離れる宿望を達せんことを、計られたものと思われ、公のその時のお話しでは、その前にも、已代治さんと、絶交せられたさうですが、その理由と時は、聞いたが忘れしました。何れの場合にも、少し時がたつてから、已代治さんが出かけて、そのままになつたもののようです。

この明治三十四、三十五年、三十五年、それ迄は、まだ私は政治をやらず、政界に出るつもりで居たのでありますが、いろいろ家庭の事情やら何かで政治方面を断念いたしました。それまでは、学生の中からいろいろ補助を受けてやつておりましたが、学校を出てからも政界に出るため、食うだけは何とかして、ただ食える様に、というので、養子に行つたのであります。岩田という家は養家であります。そこでは、何をしてもよろしい、少しも干渉しない、という事で、その当時は、養家で食うだけはあるつもりでやつておつたのでありますが、それがいろんな事に失敗して、どうも遊んで食う訳になく、やむ、せん、それ、い、うので弁護士になりました。始めから職業を求めるなら弁護士、と思つたのであります。この時に又公のところへ参りまして『実は今までは、はなはだ生意氣であつたが、政治の方面に出るつもりで居りましたが、こういう訳で、断念いたしました。弁護士を始めます』と申し公は何も賛否はいわれませんでした。最後のお願ひがあるからといつて、日本銀行と、日本郵船会社の、法律顧問に御推薦願ひたいと申し、公のお蔭で弁護士を始め、すぐはいけませんでした。少し時がたちまし

てから、日本銀行と郵船会社の法律顧問を致しまして今日に至つたのであります。従つて、それからあまり公のところへは出入りしませんでした。このうち明治四十二年にヘルピンで亡くなられた訳であります。

大体伊藤公についてお話し、こ、りです。つけくわえておきますのは、山県公の關係であります。が、私は山県公はあまりよく知りません。しかし、何年でしたか今の陛下の皇后様、つまり当時の皇太子妃のおきまりになる時にいろいろ問題があつて、御承知の通りに山県さんは色盲か何かの關係で反対された。薩摩の方の關係の人が、山県の反対するのは、島津家關係の方から皇太子妃が行かれるのに反対して、毛利家の關係の人を推挙しようという腹だという流言を放たれた。山県公が非常に憤慨されて、同郷の若い者を呼んでその事をいろいろ話された。私も呼ばれた中であつて、その話を伺つたのであります。その時は大勢一緒でありましたから、お話を聞いたばかりで引きさがつ、あ、か、は疑問を持つておつたのでありますから、山県公をその後一人でお尋ねしまして、『一体、貴方は政治の關係といふものには、どうしておられる。これはわかりますけれども、政党内閣でありますならば、その勝つた方即ち多数の方の政党の、内閣を組織するよう、自動的た活動してゆきますが、政党内閣でないという事になりますと、その点はどうなるんでしよう。元老諸公がおられる間はいいが、百年の事は誰が後継首班を決める事になるのでありましょうか？』と質問した。そしたら、『それはまあ、遠い将来の事は別として、段々元老というものがなくなれば、それ、かわるものを考える。それは、総理大臣をした事のある、いわゆる重臣、それから貴衆両院の議長、それ、入れ、られないかは、考慮中であるが、とにかく重臣會議といふものを以て、元老會議、える、だ』と、られしました。その後様子をみてなる程あれは山県公のお考えが現われてきたんだなと思つておりました。それは元老が西園寺公一人となつたとき、山県公がいつておられたように重臣會議というものが召集されるようになって来ました。また政党については、どういうお考えでありますかといつたら、『自分の考えは大きな政党は困る、小党分立がよい』と言われた。つまりフランス流といひますか、政党を無視する訳には行かんが、小さい政党がいろいろ出た方がいいと思つて、おられたようでした。私はただそれを伺つただけで

で、おれが決心さえすれば、極力援助すると、いいながら、いざ始めることになつたら、私は局外から援助しようと思ふ、まことに不都合極まるので、おれはすぐ絶交するといひ渡した、しかしそれから、しばらく経つて、また来るのでそのままにしておいた云々』伊東さんは若いときから、公に腰巾着のように、くつついて出世したので世間では伊東さんの、今日あるは、全く公のおかげのように思つていた、自信の強い本人はそれが、残念でたまらず、何んとかして公から、独立した伊東已代治の力柄を、天下に示したいので、その機会をねらつていた、そこで公を勧め政党を作らしめてその総裁におし出し、自分は後に残ることによつて、公の許を離れる宿望を達せんことを、計られたものと思われまふ。公のその時のお話しでは、その前にも二度已代治さんと、絶交せられたそうですが、その理由と時は、聞いたが忘れまふ。何れの場合にも、少し時がたつてから、已代治さんが出かけて、そのままになつたもののようです。

この明治三十四年関西に行かれた時に、私が随行したのが、親しくお目にかかつた最もおもなものでありますが、それから帰りまして、三十五年、それ迄は、まだ私は政治をやり、政界に出るつもりでおつたのでありますが、いろいろ家庭の事情やら何かで政治方面を断念いたしました。それまでは、学生の中からいろいろ補助を受けてやつておりましたが、学校を出てからも政界に出るため、食うだけは何とかして、ただ食える様に、というので、養子に行つたのであります。岩田という家は養家であります。そこでは、何をしてもよろしい、少しも干渉しない、という事で、その当時は、養家で食うだけはあるつもりでやつておつたのでありますが、それがいろんな事に失敗して、どうも遊んで食う訳になくなつた、やむを得せんから、それじやというので弁護士になりました——始めから職業を求めるなら弁護士に、と思つておつたのであります——この時に又公のところへ参りまして『実は今までは、はなはだ生意氣であつたが、政治の方面に入るつもりでおりましたが、こういう訳で、断念いたしました。弁護士を始めます』と申し公は何も賛否はいわれませんでした、最後のお願ひがあるからといつて、日本銀行と、日本郵船会社、法律顧問に御推薦願ひたいと申し、公のお蔭で弁護士を始めて、すぐはいけませんでした、少し時がたちまし

## 公 友 邦 友 人 法 國 財 政

てから、日本銀行と郵船会社の法律顧問を致しまして今日に至つたのであります。従つて、それからあまり公のところへは出入りしませんでした。そのうちに明治四十二年にヘルピンで亡くなられた訳であります。

大体伊藤公についてお話しする事は、これで終りであります。つけくわえておきますのは、山県公の關係であります、私は山県公はあまりよく知りません。しかし、何年でしたか今の陛下の皇后様、つまり当時の皇太子妃のおきまりになる時にいろいろ問題があつて、御承知の通りに山県さんは色盲か何かの關係で反対された。薩摩の方の關係の人が、山県の反対するのは、島津家關係の方から皇太子妃が行かれるのに反対して、毛利家の關係の人を推挙しようという腹だという流言を放たれた。山県公が非常に憤慨されまして、同郷の若い者を呼んでその事をいろいろ話された。私も呼ばれた中であつて、その話を伺つたのであります。その時は大勢一緒でありましたから、お話を聞いたばかりで引きさがつたのでありますが、かねて私は疑問を持つておつたのでありますから、山県公をその後一人でお尋ねしまして、『一体、貴方は政党内閣というものには反対しておられる。これはわかりますけれども、政党内閣でありますならば、その勝つた方即ち多数の方の政党の首領が内閣を組織するよう、自動的た活動してゆきますが、政党内閣でないという事になりますと、その点はどうなるんでしょうか？ 元老諸公がおられる間はいいが、百年の事は誰が後継首班を決める事になるのでありましょうか？』と質問しました。そしたら、『それはまあ、遠い将来の事は別として、段々元老というものがなくなれば、それにかわるものを考える。それは、総理大臣をした事のある、いわゆる重臣、それから貴衆両院の議長、それを入れるか入れないかは、考慮中であるが、とにかく重臣會議というものを以て、元老會議にかえるつもりだ』と答えられました。その後様子をみてなる程あれは山県公のお考えが現われてきたんだなと思つておりました。それは元老が西園寺公一人となつたとき、山県公がいつておられたように重臣會議というものが召集されるようになって来ました。また政党については、どういふお考えでありますかといつたら、『自分の考えは大きな政党は困る、小党分立がよい』と言われた。つまりフランス流といひますか、政党を無視する訳には行かんが、小さい政党がいろいろ出た方がいいと思つて、おられたようでした。私はただそれを伺つただけで

ありましたが、やつぱり山県公伊藤公という方は、偉らくて、偉らいところは、お互いに知っておられた。だから、つまらん事では悪口を言っておられるが、大事には協力してやっておられた。そういうような大元老の事を忘れずに、後から後に語りついで、後からまた偉らい政治家が出来る事を希望してやまない次第であります。はなはだつまらん事でありましたがこれで終りいたします。（拍手）

財団法人防長俱樂部第十回月例講演会速記（昭和三十一年五月二十六日）

昭和三十一年七月二十四日印刷  
昭和三十一年七月二十七日発行  
昭和三十四年十月二十五日再版

【非売品】

東京都千代田区三年町一番地

発行人 伊藤 哲 男

東京都港区芝愛宕町二ノ九八

印刷所 山県印刷所

東京都千代田区三年町一番地  
（昭和会館三階）

発行所 財団法人 防長俱樂部





# 家 命 革

## 朴烈先生の片影

秋田縣大館  
刑務所所長

藤下伊一郎 著

新朝鮮建設同盟發行

日韓・友邦
289
19
協 会

289-19

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

序

朝鮮獨立革命の闘士にして遠大なる理想の下に挑戦し遂に官憲に捕はれ、當時の日本に大いなる震撼を與へた主人公朴烈氏が獄中の一端と其の人となりを描寫したものに余の感想と批判とを加へ纏めて題して朴烈先生の片影とした。

世の中には昔から因縁の話など數限りもないが然し氏と余の因縁關係に至つては蓋し不可思議なるものであり此れが本書あるの所以でもある。

二十餘年前の余は日本の刑務官であり氏は日本の無期懲役囚であつたのである。かくて二十餘年後の日本は戦ひに敗れ民族は敗慘の憂き目を見なければならなくなつたが朝鮮は獨立國家への大道が開かれ始めた。

氏の念頭とするところも一應達せられた。

だが未だ刑期は終らない中に忽然と出所した。これ等の経緯が互ひに過去の一切を忘れさせ共に將來に望みをかけ固く握手し深く交りを結ぶことになつた。

そして氏は新朝鮮建設を目指し、余は新日本の建設へと志し道こそ違へ共に大道を驍進してゐる。

昭和廿年十月

日本秋田縣大館町

於中城官舎

著者識

## 目次

(1)	貴公子	二
(2)	朝鮮革命の首唱者なり	三
(3)	佩刀の柄を握り隙を狙ふ	五
(4)	日韓合併の追想	六
(5)	國を愛する者は強し	八
(6)	達磨大師	九
(7)	太鼓か鐘か	一〇
(8)	世界的英雄なり	一一
(9)	革命志士の眞心に泣く	一二
(10)	唯一無二の指導者なり	一三
附	録	一五

## 朴烈先生の片影

### (1) 貴公子

朴烈氏を日本皇室に對する大犯罪人無期懲役囚として東京市ヶ谷刑務所から千葉刑務所に初めて收容されたのは今からざつと廿餘年前であつた。

當時の氏の容貌は色は飽くまで白く髪は飽くまで黒く身丈高からず低からずと云ふ處で稀に見る美男子であつた。

髪を綺麗に梳き朝鮮の禮服であらう、純白絹の被服を着用し動作なども殊に物やさしく全く婦人と見違ふ程の溫柔さでもあつたし、相當な品位をもつ貴公子と直感されたのであつた。余も之が日本に對し暗に挑戰的態度に敢へて出た、朝鮮革命の闘士かと心の内で意外に思つたがそれは誤りで神ならぬ身の悲しさとも言ふか彼の祖國獨立の爲め胸中烈火と燃えつゝある闘士を見抜き得なかつたのであつて、これこそ千慮の一失とはこの事である。

昔からよく人が言ふことだが外面女菩薩内心夜叉とは當時の氏の如きものを指すのではなからうか。

### (2) 朝鮮革命の首唱者なり

日本では如何なる犯罪者に對しても懲役刑を執行する場合には以前から凡て赤色衣に更衣せしむる方法を探つてゐる。然し受刑する者の年齢等により多少の例外はある。然し朴烈氏に對する刑の執行の時は矢張り型の如く、氏の着用せる朝鮮衣を脱がさせ赤色衣を着用せしめねばならないので私は更衣の命令を發すると氏は非常な屈辱を感じたものと見え、收容時の柔和さは何處へやら消え去り形相忽ち一變して凄まじく憤然として反抗的態度を示し始めた。

然し反抗と言へば、暴力を振ふ様に感ぜられるがさうでなく氏特有の熱辯を振ひ出したのである。即ち「我輩は朝鮮の革命を目的とするものでこの原因をさぐれば、日本の不法行爲に因るものだから眞の犯罪人ではない。日本こそ三省すべきである」と極論して頑として命に服さないのである。

いよく闘士の本領を發揮した。事此處に至れば吾々刑務官は斷じて黙過することは出来なくなつた。



よし脱服せしめ得ずんば屈服せしむるあるのみと既に内心に決する處があり、暗々裡に抗争を開始した。

氏もなか／＼敏感だから余等の魂膽を見破つたのであらう。そろ／＼奥の手を出し沈黙戦術と來たものだ。此の戦術たるや實に堂に入つたものであつた。

余は遂に随分閉口もしたし惱まされもした。誰一人として此の戦略に惱まされぬものはなかつた。今は故人となられたが平田勳検事なども閉口組の一人であつたに違ひない。氏が此の戦術に出る場合は大體氏の方で旗色が悪い時で、面白い事には之の戦術を施行する前には必ず一つの宣言を發することだ。

曰く「朴烈自身に沈黙を命じた。」と、之の言葉が發せられるや、以後は「ウン」とも「スン」とも決して應答をしない。まるで石佛か金佛さんを相手にしてゐるやうなもので張合がないし、始末の悪いことは全くお話にならない。終には張合が抜けがして嫌ひにはなるし馬鹿々々しくもなつて來る。然し官吏として捨てゝ置くわけには行かぬから惱みの種である。

役者としたら確かに余より數段上手であつた。

此の相撲の軍配や果して何れにありしや。

### (3) 佩刀の柄を握り隙を狙ふ

朴烈氏の吐く熱辯が如何に論理整然たるものであつたにせよ、余の耳には蚊の鳴く聲ほどにも響かなかつたのだ。

「言ふ迄もなく余は刑を執行すべき立場にあり殊に日韓合併の實現は當時の韓國民族の總意に依る結果である。然りとせば、氏の採りたる行動はあきらかに同胞民族の意に反したるのみならず日本の國法をも亂すものである以上、處刑さるべきは當然である。然も公平無私な裁判を経て刑が確定したのであるから潔よく服罪すべきである。然るに刑の執行間際になつて、事件の内容を云々して暗に服罪を拒否することは、本來顛倒の甚しきものと斷ぜざるを得ない。氏の言に耳を貸す必要は毛頭ない。」と之が余の見解であり主張でもあり信念でもあつた。氏が陳べれば述べる程反抗心が益々増大し私的感情は愈々悪化したのだ。

余は内心屁理窟を並べたてゝ居るが然も余は私立とは言へ大學に學び多少是非判斷の能があるのだ。勝手に言わせておけば際限がないとも考へた。若し彼が朝鮮革命の闘士であるならば余も日本の法律を護持する闘士だ。

最早や陳辯を聞く事はまかりならぬ。しかも日本を吾等の面前で雑言惡口を敢へてした以上最早や許すべき何ものもない。もう堪忍袋の緒が切れた。うむ……さらば日本男子の意氣を見よ、佩劍引き抜きズバリと一刀をあびせ余も其の場で潔よく割腹せん。而して日韓兩國を攪亂する禍根を除き去し永遠に兩國の平和に貢献すべし。これ日本男子の本懐なり。

佩刀の切れ味はまさによし、直眞影流の腕の冴え好機到らば本望疑ひなし。かくて余の腹はきまつた。佩刀の柄をグツト握りしめつゝ以來虎視耽々として隙をうかがふこと幾度敵もさるもの一寸の隙も見え出せない。どうも不思議千萬である。何んで隙を見え出し得ぬのか、若しや朝鮮の先哲諸士が彼を守護してゐるのではなからうか、將又神が彼の偉大なる意志を愛で、庇ひ給ふのか。さても不思議なことだと思ひながらも、なほも隙を窺つてゐたのである。所が突然余に他の刑務所へ轉任の命が來た。遂に心ならずも千葉を去つたのである。まさに風前の燈明に似たる露の命を果して彼は知るや知らざりしや。

#### (4) 日韓合併の迫想

日韓合併當時の余は、一私立大學の學生であつたので別に贅否も興味も覺えなかつた。大體政治

に關しては無知に近かつたのである。合併の是非に付いて研究もしなかつた。それでも當事者たる民族の總意で決定したものだらう位にしか考へてゐなかつたのである。其の後幾星霜月變り年移つて刑務官に任命せられたのである。會つて朴烈氏と對談せし折「合併問題に付ては日本は三省すべきだ。」と云はれた一言こそは余が腦裡より拭り去る事は出来なかつたので折に觸れ機にのぞみ、その眞想の研究を試みたのである。即ち日韓合併の眞相如何を研究したのである。合併は當時兩國の主腦者が共に再三熟慮の結果であらうし又兩國の政策に共通する點もあつたであらうかと一概に是非正邪の論評を敢てすることは出来なからうし、自分として先哲の業績に對し云々することを欲しなかつたのである。然しながら各國總ての民族はそれ〴〵天の恵によつて自然に自主し相寄り相集つて互に侵することなく至極平和に日々を過して來た。之が國の始まりであり是が神の攝理平和の道なりとせば、合併問題それ自體が如何なる理由があり如何な根據があつたにせよ、朝鮮民族の自主を侵したものと云ひ得る故にそこに少なからぬ無理があつたのではなからうかと考へる様になつた。昔からよく言ふ例へごとだが無理が通れば道理が引込み、木の葉が沈んで石が流れることになるのはよく言つたものだ。そこで無理があつたればこそ朴烈氏の如き事件が當然起きてくるのは全く已むを得ないことではなからうか。今日日本と韓國との地位を代へて考へて見るならば日本人として朴

烈氏と同じ運命に落ち行くものはなかつたらうか。余は此處に於て豁然と覺醒したのである。と同時に氏の崇高にして偉大な志と其の卓拔せる理論に三嘆を喫したのであった。

### (5) 國を愛する者強し

朴烈氏が千葉刑務所へ入所した當時の體質から考へれば廿餘年と言ふ永い牢獄生活に耐え様とは思はなかつた。然るによくも耐へたものと驚くよりも只々不思議と感ずるのみである。日本の監獄の收容者に對する處遇は全國的に一定しないと雖も公平に且つ嚴肅に施行されていることは云ふまでもない。

然しながら監獄所在地の風土が收容者の心身に及ぼす影響の甚大なる事を心せねばならぬ。日本は承知の如く帶の様に細長い國だから土地によつて氣候風土に變化が甚しいことは言を俟たぬ。例へば千葉縣下の冬と秋田の冬とは比較にならない程の相違がある。

地圖を見るまでもなく千葉は太平洋海岸に面し秋田は日本海岸に面するから同じ冬期とは云ひ寒暖の差夥しきことは論を俟たぬ。

この寒暖の差が如何に收容者の心身に及ぼすかは見のがせない事實だ。秋田の冬などは毎日々々

の猛吹雪だし肌さす風の嚴しさは到底筆舌では盡せないのである。

だから監獄でも收容者の防寒に大いに意を用ひてゐるが千葉邊の收容者に比すればその苦痛は想像以上である。耳朶指趾の凍傷はおろか鼻の先も凍りつく。

如何に寒さが厳しいからとて一般社會人の様に氣儘勝手に作業を休んだり暖を採つたりは出来ぬし、又暑いと裸になつたりすることは絶対に許されない。それは刑罰の執行場たる監獄だから當然のことであらう。

朴烈氏はこの嚴肅な監獄にあつて無期懲役囚として極寒極暑と戦ひながら、曩には祖國の完全獨立を神に祈り夕べには三千萬の同胞を救はせ給へと佛に願ふけなげさ。

去る日も来る日もひたすら祖國の獨立と同胞救済を念じ廿有餘年の長い年月一日一刻として怠つたことのない崇高なる眞心に誰か感動せざるものがあらう。

氏も亦人である以上修養を積み重ねて悟道に入るまでには人知れぬ苦みあり目に見える悩みもあつた事であらう。

### (6) 達磨大師

朴烈氏は達磨大師とは一脈共通する點がある。大師は人も知る如く支那禪宗の始祖で南印度香至國の王子であつて般若多羅に師事して大乘禪を宣揚し梁の武帝と問答し嵩山の少林寺で九年間面壁坐禪し悟道に徹したのである。氏は大師の坐禪に比すると十四年も永く冷たき鐵徹せるは勿論の事他に更によりよき何ものかを會得したであらう事を確信するのである。然も大師は自己の信する宗教布教のため寺院で坐禪をやつたのみで支那及日本では非常に尊敬され人口に膾炙されてゐるが、氏は大師と其の趣きを異にし己が一身を祖國の獨立と同胞民族救済に捧げ、人の最もいやがる監獄で坐禪修養怠りなかつたのだからその苦痛に於ても同日の比ではなく且つ亦兩者の目的願望そのものに於ても天地雲泥の相違があるのである。

かく觀れば、氏は大師を凌駕する事遙けしと言はざるを得ぬのである。

## (7) 太鼓か鐘か

朴烈氏を評して余は太鼓か鐘かと云ひたい。少さく叩けば少さく鳴り大きく叩けば大きく鳴るからだ。四民と會へば四民と語り、學者と會へば學を論じ、政治家と會へば政治を談ずる。しかも圓轉滑脱の話し振りだ。

長短殊に甚だしい人々をも心地よく包容するのだから大度量家であり、卓越せる常識の持主でもある。氏は特に魅力を持つてゐるから鬼に金棒とでも云ふほかはない。人は各々長短とそして癖とがある。之れは人間の通有性だから已むを得ない。一國の大宰相でも又然りである。

處で氏にはその短所と癖と云ふものがない様だ。強いて短所と云へば酒はあまり吞まず煙草を全く喫はないことだ。余は此點に於ては大長所の持主だから常に對比して微笑を禁じえないのである。氏は先天的伶俐性の所有者だつたが廿年餘り余と會はなざるうちにあらゆるものに斯くまでも通曉したかと只々驚ろく外はない。

さもあらう、如何に獄中生活とは云へ餘暇に數多の書籍を致々耽讀し修養に修養を重ね遂に人世の眞意義を會得した結果ではあるまいか。

艱難汝を玉にすと昔から人々はよく云ふが實に朴烈氏の如き人物を指すものであらう。

## (8) 世界的英雄なり

古今洋の東西を問はず英雄として尊敬されてゐる人は多いが大概は劍を執つて三軍を叱咤したものだ。だから人に勇ましく雄々しく花々しく感ぜられてゐる。



朴烈氏は之等の英雄とは全く反對の戦略を用いたのである。そこに流血の悲惨事を招かなかつたのであつて心ある士は等しく感謝せねばなるまい。即ち自己の一身を犠牲に廿餘年の永い獄中にあつて純一無垢の心を傾け祖國の獨立を神に祈り遂に神助と氏の先輩たる殉國志士の英魂の加護とを得て現在の如く祖國獨立の道をひらかすまで漕ぎ付けたのではないか。然りとせば其の功績や實に偉大と言ふべきである。

その用ひたる戦略に花々しさがない所に余は寧ろ奥床しく感ずると共に眞の英雄はかくあるべきなりとの感慨を一層深くするものである。昨今氏は永年の獄生活に別れを告げ同胞多數に迎えられる元氣矍鑠として秋田の刑務所より出所されたのである。言ふまでもなく世界的英雄の人格を備へて。

### (9) 革命志士の眞心に泣く

ボツダム宣言によつて朝鮮國の獨立は認められた。然し實現を見るまでにはまだ／＼途は遠い。朝鮮獨立と云ふ文字が忽然として宣言文に現はれたものではない。今日までの幾多の愛國熱血志士の祈願が凝つて遂に神助を得た結果に外ならない。然りとせば此の間の因果關係を充分知つておか

ねばなるまい。

近時世界一般の民心は私利私慾に眼が暗み甚だしきに至つては國を忘れ同胞を顧みないで自己の榮耀榮華のみを夢みつゝある秋、雄々しくも亦勇ましく我が一身を祖國の獨立と同胞救済に捧げ積る大難と戦ひつゝいとしくも精根遂につき果てゝ異境の土と化せし志士の純一なる眞心にはたとへ鬼神たりとも涙せん。

然も朴烈氏の如きは年少にして既に祖國の獨立と同胞の苦痛を救はんと念願し、長ずるに及び革命を謳歌しつゝ闘士となり素志を貫徹すべく渡日し直接行動を授つて遂に日本の法網に觸れ、大罪人として牢獄に捕はるゝこと廿四年、年々に春變り秋めぐれど一日として楽しく天日を拜したることなく日々骨肉を削るの苦を嘗めたのであつた。眞にその勞苦察するに餘りある。氏を慰するに何を以てかなすべき。先づ同胞よ泣け。氏の眞心に、そして學べ氏の純一なる愛國精神を。

### (10) 唯一無二の指導者なり

ボツダム宣言によつて近く新しく誕生する大朝鮮國の指導者として何人が適任なりやと云ふ質問を假りに受けたとしたら余は即座に朴烈氏なりと答へたい。

民族をして安居樂業に導き國を治むるものは國と民とを愛護するの思念が濃厚であつて有ゆる民意を包容するの大度量を持ち堅忍不拔の精神力と神に近きまでの修養を重ねた人格者であらねばならない。

氏が即ちこれに當る事は毫も多言を要せない所である。唯一無二の指導者は氏なるべしと私は重ねて茲に斷言する。これは二十餘年間の氏をよく／＼余は知つて居るから言へるのである。

## 附 錄

### 朴烈氏出獄

——本社を訪れ感想を語る——

「朴烈氏を返せ!」「一切の朝鮮人政治犯を釋放せよ!」の朝鮮人の聲に應へて朴烈氏は遂に出獄した。前夜の雨名残りなく霽れた秋晴の二十七日午前八時半「在日朝鮮人聯盟秋田縣本部」の腕章を卷いた同本部代表丁遠鎮氏以下四人の出迎へを受けた朴烈氏は再び閉づる秋田刑務所の重い鐵扉を後に二十三年の獄中生活から新しく大きな轉換を遂げた日本の社會へその禪僧にも似た靜かな第一歩を踏み出したのだ。吹き過ぎる秋風の中を歩んで氏は先づ米進駐軍宿舍へ挨拶を行つた後、本社へ立寄り出獄直後の感想を次の如く語つた。

「久方の空に春立つその日には風も輝けあゝその日には」と獄中待ちに待つたその日が遂に來た。降るかと思つた空も隈なく晴れて私の感懷は今朝唇を吐いて自ら發した次の歌に盡きてゐる。

「けふこそは濡れ衣も乾け白日のあめの空にも陽は輝くぞ」

獄中生治二十二年間、流感で三日間寝たきりで不思議なくらい健康状態は良好です。今後の方針といつても特別の意見はありません。たゞ新しき時代に對して今迄の體驗を活用し朝鮮人として朝鮮のために働きたい。朝鮮人全部の希望する所へ献身し牛になつて欲しいと言はれれば牛にもならう。馬になれば馬にもなるつもりです。然し日本に對して特に敵對する意志はありません。今日はこれから十二時の汽車で大館町一心院南十七の丁氏宅にある逡聯盟本部に向ひ、近く米進駐軍本部にドーン代將を訪問する豫定です。

(一九四五年十月二十七日 秋田魁新報所載)

——敗戦は眞實を教へた——

むしろ幸せですよ

——朴烈氏きのふ縣都で語る——

在日本朝鮮人聯盟縣本部では廿日午後一時から山形市霞城館で朝鮮獨立の英雄朴氏並に第二朴烈事件で授獄された諸禧晨氏を迎へて歡迎講演會を開催したが朴烈氏を訪ねて、日本と朝鮮の相對性、將來の推移、天皇制問題に關して種々忌憚ない意見を聞いて見た。朴氏は二十有餘年の永い牢獄生

活によく闘ひ抜いた透徹した思想と認識觀を以てもの靜かに語り出したが、あくまで世界的平和の顯現に突き進まんとするきびしい情熱で一貫されてゐた。

◇將來はどうなるといふ見透しについてよく質問を受けるが時々刻々變る現在の豫想し難い情勢から推して豫斷することは出来ない。殊に私は長い間冷い壁と犬神(刑務所看守)しか接してゐなかつたので無現である。人間萬事塞翁が馬といふ古諺があるが、何が將來幸となるか解らないと思ふ。その意味では今度の戰爭で日本が敗れたことは國民にとつて幸となつたのではなからうか、軍隊は國を護るといふ本來の使命を忘れて、侵略戰爭をやつた結果、日本の國家と國民を苦難のどん底に落し込んだ。

これは確かに不幸なことであるがこの敗戦によつて日本の眞實の在り方を國民が教へられたのであるからかへつて幸であつたと思ふ。新しい日本の再建に努力すべきだと信ずる。

◇日本と朝鮮は文化的にも民族發生の點からも同じ源泉であるから國民同志はお互に敵では決してない筈だ。殊に日常生活や言語學的にみれば凡てが同じである。發生にみれば我田引水ではないが朝鮮が古い歴史を持つてゐるだけに日本より先進國だと思ふ。例へば麴をつかふ酒は神后皇后によつてもたらされたものであり、お茶の原産地は朝鮮であつた。又言葉の點から見れば飯はマンマ、

兄にニ、姉はネイ、寺はテラのやうに同じ發音が澤山あり、神主の衣や裁判官、辯護士の服或は鎌倉時代以前の着物は全部朝鮮の衣服である。

それ故日本は吾々朝鮮人にとつては懐しい國である。私はひとり朝鮮と日本だけでなく全人類は單源であることを確言するものであるから各民族は今後共存共榮の理想に邁進すべきだと思ふ。

◆日本の天皇制については外國人である私から云々することは好まないが、私個人としての考へを申し上げればあまりにも專制になり過ぎる危険があると思ふ。國民が尊敬すべきほどの危険性がある。男を女に、或は女を男に變へることは出来ないが天皇絶對であれば總べてなし得ないことはないのである。而して天皇制に對して強いて反對するものではない。たゞ日本の全體主義をもつて他の國並びに國民に押しつけやうとする場合は絶對に反對であり敢へて抹殺するものである。しかし日本の民衆を敵とするものではない。私の過去の運動に参加してくれた同志の三分ノ一は日本人であつたことでお解りでせう。

◆最後に申し上げておねがひしたいことは新聞は世界公器であるから嚴正な態度で言論指導に當つて戴きたい。即ち日本に来てゐる朝鮮人の中には非常に生活的に困つてゐる者があるので煙草やその他生活物資の闇取引をするものがある。然し二三日前の御紙に出てゐたのであるが元臺灣總督

の太田某が米の大量持出しをやつてゐた事實をどう考へですか。あれは唯前もつて警察やその筋と連絡をしてゐなかつたから問題になつたのであると思ふ。高位高官連中にもつともつとやつてゐると信じます。その點小さな闇をほじくり出すやうなことのないやう公正な批判をもつてやつて戴きたい。ともあれお互に平和な世界を建設するやう努力しやうではありませんか。

(一九四五年十一月二十一日 山形新聞所載)

## “朝鮮獨立の一兵卒に”

——朴烈氏帝都歡迎會に臨む——

去る十月二十七日秋田刑務所を出た朴烈こと朴準植氏は太館町の同志の許で暫時靜養後、七日早朝上京し、午前十時から日比谷公園舊音樂堂で開かれた「朴烈歡迎會」に姿を現した。そして二十三年間の囹圄の生活を淡々と回顧し將來の希望を述べた後、次の如く述べた。

『私は自由の民です。世界市民です、私は日本帝國主義軍國主義の惡魔が倒れたことを日本民衆のためにも喜んでゐます。私は將來の政治的の見透しを語る資格はないし、朝鮮獨立の指導者にならうなどとは考へてゐない。朝鮮獨立の今日。私が一身を捧げてきたこの運動の小使として、一兵



卒として働きます。故郷にかへるか、日本に止るかは獨立問題が私に命ずるまゝに進退をきめるつもりです。

八月十五日以來私は獨立國の民です。異邦の民がどうして日本の内政問題に口を出すことがありませう。私は私の新たなる命を朝鮮獨立のために捧げるだけです。』

なほこの日朴氏の歡迎會に姿を見せた當時の辯護士、自由法曹團の布施辰治氏は非公開になつた公判の思ひで深い法廷秘話を次のやうに語つた。

『朴君の信念は非常に鞏固なものだつた。彼はいふのである。『俺は被告ではない。裁判長が天皇の名に於いて日本を代表して俺を裁くといふなら、俺は朝鮮の代表として堂々と論争しやう。』と當時の裁判長牧野菊之助君を散々てこすらしたのだつた。そして裁かれるのではないといふ意味で法廷宣言をすること、被告臺を裁判官と同じ高さにすること、朝鮮代表として朝鮮の王衣す冠をつけて法廷に臨むことを主張して譲らず、私共も色々牧野君に話した結果、被告臺を高くすることだけはやめて、あとは朴君の希望通り朝鮮王の王衣王冠をつけて堂々と所信を述べてゐた。』

(一九四五年十二月八日 東京毎日新聞所載)

## 獄中二十三年

——朴烈氏第一聲——

關東大震災の後、儘いまだふすぶる大正十二年十月大正天皇暗殺を企て、それ以來二十三年の獄中生活から解放された朝鮮革命の闘士朴烈氏は新朝鮮建設同盟の設立を機に二十六日水道橋の後樂園涵德亭に於て同所で初めての新聞記者團との會見を行つた。同氏は靜かに語る。

私は三十六年の間、日本軍國主義の耐へがたい侮辱に耐へ忍んで來た。そして憎んでもゐた。而し現在の私は毒を制するに毒を持つてする氣はない。この壓制あつたればこそわれわれはこれを興奮劑として強い團結を持つことが出來たのであるから、むしろ感謝したい氣持だ。

私は獄中二十三年の間、日本天皇と相撲を取りつゞけて來た。そして遂に私は勝つた。かつては天皇抹殺を企てたが今はそんな氣持はない。何故なら日本天皇は朝鮮に及ばないからである。

八月十五日以來日本人はわれ／＼にとつて異國人であり外國の内政に好んでは入りたくないからである。しかし新生日本のためには力を願ちたい。個人としての李王琅氏を戦争犯罪人とは思ひたくない。同家が日本の王族として滅びるか、一朝鮮人民として歸國するかは同家の意志によるもの

であつて現在の朝鮮には王統派的なものはない。

(一九四六年二月二十八日 時事新聞所載)

## 新朝鮮建設同盟を結成

——朴烈氏、祖國再建の抱負を語る——

朝鮮の革命家朴烈氏はさきごろ圀圀の身を解かれて以來同志李康勳氏(上海有吉事件連坐、昨年九月出獄)と朝鮮獨立運動の構造を練り在日朝鮮人を糾合、二月十日新朝鮮建設同盟を結成、高度の政治的文化運動を起すことになつた。

二十七日小石川の後樂園涵德亭に於ける初めの記者團との會見で朴氏は「祖國朝鮮の危急を救ふため餘生を捧げたい」と冒頭して溫和なうちにも力強く次の如く語つた。なほ近く歸國、同盟を基礎として獨立運動を展開する。

「現在の朝鮮は政黨、派閥が濫立、祖國の危急を外に醜い政争を續けてゐる現状なので政黨、派閥に偏せず廣く民族統一戰線を結集するため新朝鮮建設同盟を結成した。これは飽くまで政黨ではなく文化團體として高度の政治的文化運動をするにあり、毫も政權をねらふものではない。祖國の完全解放と自主獨立の速かなる達成を圖り自由權と生命權を獲得して民族の完全を期する。自由權のな

いところに生命權はあり得ないことのため民族の自主性を無視する信託統治には全面的に反對する。併し排他獨善に陥ることなく世界の大勢に従つて四海同邦的世界協同を期し世界の恒久平和に寄與したい」と氏の抱懷する自由社會主義の一端を披瀝す。

次いで一問一答に入り、

問、獄中の感想は。

答、支那事變の起つた時は日本が果てしない泥沼に入り今日の末路となることを疑はなかつた。二十三年の長きにわたり、日本天皇と相撲をとつてゐるやうで、縛られても勝つと思つてゐたが終戦に及んで勝利を獲得し實に愉快だつた。

問、天皇制存廢について。

答、日本の帝國主義的侵略を憎んで抹殺を叫んで來たが、終戦後は我々は外國人だ、外國の内政に立入りたくない。我々には獨立といふ大きな使命がある。他山の石といふが關心は寄せるが好んで立入りたくない。

問、朝日提携について。

答、軍國主義、帝國主義の三十六年に互る侮辱と迫害を思へば氣持は納らないが我等の憎むのは、

軍國主義、帝國主義にある。暴に對するに暴を以つて報いる氣持はない。大逆事件の同志中日本人は半を占めてゐた。私と共に牢獄につながれ犠牲になつた二人も日本人だつた、將來も新生日本人との提携を希望するし、力を分ちたいと思つてゐる。寧ろ侮辱迫害があつたからこそ統一獨立の曙光を仰ぐやうに至つたもので、接合劑といふか、恩惠を感じる。祖國建設の上は、東條始め日本の帝國、軍國主義者のため祀いをしたいと思つてゐる。純粹の日本人の感情は好きだ。

問、李王殿下について。

答、實に氣の毒な人だ。私個人としては將來を見て上げたいと思ふ。犯罪者として突出す心算はない。最後の決定は國民の意思にあり私にはその權能がない。

(一九四六年二月二十八日 日本産業經濟所載)

## 文化運動を展開

この程新朝鮮建設同盟を結成した朝鮮の革命家朴烈氏は二月二十七日小石川後樂園の涵養亭に於て出獄以來始めて新聞記者團と會見したが、氏は餘生を祖國朝鮮再建に捧げ政治的な文化運動を展開すると力強く言明した。

なほ氏の結成した新朝鮮建設同盟は政黨ではなく、あくまで文化團體として高度の政治的文化運動を展開することがその目的であると宣言したことは注目し價するものがある。因みに同團體は在日本賛同者を糾合して、近日中に歸國し活潑なる活動をするものと期待する。

(一九四六年三月七日 朝日新聞所載)

## “在日朝鮮人自重を望む”

朴烈氏を委員長に李康勳氏を副委員長とする新朝鮮建設同盟では十三日午前九時小石川涵德亭に本國より來日の自由社會建設者聯盟幹事元心昌、韓河然、韓顯相の三氏を招き懇談を遂げたが、席上各氏は交々目下刻々重大化しつゝある同胞の思想生活に言及。

一、三十八度以北の民衆は日本人同様塗炭の苦みをなめつゝあり。三十八度線の即時撤廢は三千萬同胞の總意である。

一、信託統治は絶對反對、即時獨立を要求する。

一、前二項を朝鮮人自身で解決出来なければ第三國の偉大にして強力なる政治力、若しくは武力を持つて北鮮に於けるソ聯統治を迅速に追放してもらひたい。

一、日本在住朝鮮人の動向は本國に於けるそれとは動もすれば反對の方向にあるのを多く見受け、在日朝鮮人の生命財産保護や引揚同胞輸送など福利施設を主目的として數多い聯盟の幹部が赤色盲信者たちの占領するところとなつてしまつてゐる。

など重要意見の開陳あり、純正にして不偏な朴烈氏らの新朝鮮建設同盟の推進こそ、民衆は期待支持してやまない現況にあると結論した。

(一九四六年三月十四日 時事新聞所載)

在日愛國闘士の活動

## 朴烈氏建國に邁進

——本社に激勵文を傳達——

日本には今尙ほ數百萬の同胞が残つてゐる。祖國完全獨立のため祈り且つ奮闘活動してゐる際、さる一月二十一日我が獨立運動の偉大なる指導者たる朴烈氏等を中心として朝鮮建國促進青年同盟朝鮮信託統治反對民衆大會共同主催にて統治反對民衆大會を開催して『我等は民族の自尊と世界平和安寧のため即時軍政の撤廢を要求し信託統治は飽くまで反對するものなり而して朝鮮に完全なる自主政府が樹立さるまで全心全力を盡して闘争する』といふ決議文をマ司令部に提出し續いて示威

行列を盛大に舉行せり。その後朴烈氏を中心に新朝鮮建設同盟を組織して祖國完全獨立運動に邁進してゐる。而して朴烈氏は本社李社長に次の如き要旨の激勵文を送つた。『稀に正に迎へた祖國の春を花咲かせ稔らせるには言論界の負擔大なるを思ひ併せて貴兄の健康と勝利を祝す。』と。

(一九四六年四月十四日 漢城大東新聞所載)

やがて春の草花の肥料とならぬ

## 熱海で叫ぶ朴烈氏

——新朝鮮建設の聲——

幾度か獄裡で白骨を埋めやうと意を決した廿三年間、日本の敗戦で計らずも秋田刑務所を最後に先に晴天を仰ぎ「同胞は朝鮮解放の動機を得て感激の餘り冷靜を缺く様な事態があつては不幸である」と戒め朝鮮の完全獨立を叫ぶ新朝鮮建設同盟委員長朴烈氏の後援會は日鮮親善の心ある人々が集り此の程熱海市香露園でささやか乍ら舉げられた廿三年も獄に居た人とは思へぬ、孤獨生活で宗教的に寧て淨まり洗練され人間を作つた朴氏は青年の様な明るい眼を輝かせ心持紅潮しながら朴納なうちにとかくに口早くに『侵略は正義と公道の前に完膚なきまでに敗北された日本を御覽な



さい。由來猛暴の末路は悲慘であります。然し過ちがわかつたとき、それは一つの進歩であります』  
 と言ひ又『我々は成程微力であるかも知れませんが、しかしやがては花咲く春の肥になりたい人類の  
 ためにならば牛にでも馬にでも欣んでなります』と續ける決意と情熱は並み居る人達をしてひどく  
 衝くものがあつた。

一九四六年五月十九日 東海タイムス所載

### 速かに朝鮮の獨立解放を

——新朝鮮建設同盟の聲明——

米ソ共同委員會無期休會に關し新朝鮮建設同盟中央本部では、二十八日委員長朴烈氏の名を以つて、左の要旨の聲明を發表した。『米ソ共同委員會の無期休會となつた事は、吾等朝鮮の將來、引いては世界平和の爲めに遺憾とするところである。』人類福祉と平和の確立は懸つて米ソ兩國の双肩にあり。朝鮮問題を繞つて、世界平和の恒久的維持に禍根を作るが如き事なきやう盡力せられんことを衷心より切望して止まない。吾等は吾等の完全解放自主獨立と云ふ要求は決して何國かに哀訴したり、又は或る他國の與へられることに依つて養生せんとするものではない。しかし吾等の解放獨立が速かに實現される様宜しく米ソ兩國は互に協調し、朝鮮をして、安定に導かれん事を切望するものである。

一九四六年六月二十五日印刷  
 一九四六年七月一日發行

定價 三圓

著 者 藤 下 伊 一 郎

發行兼 印刷者 金 光 男

發行所 東京都赤坂區青山一ノ一

新朝鮮建設同盟  
 文化部

